

# 怪獣娘～ウルトラ怪獣 ハーレム計画～

バガン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私達の住む太陽系は、およそ300万年に一度、ダークマター漂う未知の宇宙空間を通過します。そこは、何が起こっても不思議ではない世界……。そのアンバランスゾーンを、皆さんは今から体験する事になる……。わけでもなく、ここはごく普通の地球、ごく普通の日本、ごく普通の町。

ここに一人の若者がいる、名は『濱堀<sup>はまほり</sup>シンジ』。ごく普通の少年が出会ったのは、怪獣の魂<sup>ソウル</sup>を宿し、その力を持った『Unidentified Mysterious Girls』。通称『怪獣娘』であった！

本作品は、怪獣娘×ウルトラ怪獣擬人化計画の二次創作小説です。オリ主、パロネ

タ、懐かしネタが大いに含まれておりますので用法要領を守って服用ください。

7/25 完結しました！皆様の応援のおかげです。引き続き感想、評価などお待ちしております。

# 目次

未知なる友達

1

怪獣娘と少年

26

怪獣出んか？

64

いざお出かけ！

81

雨がやんだら

108

私とボクの名前

127

見えない絆

164

私闘！ゴモラ対ゴモラ！

201

記憶健忘！今日は誕生日だった！

232

うたかたの。

291

ヴァージョンアップ！

335

光へ

402

夕焼けの決闘

427

怪獣娘は隣にいる

456

大変！キョウダイが来た！

511

黒き王の咆哮

541

ネバー・セイ・ネバー！

576

君の名は、

605

Echoes of Love

647

夢

677

激ファイト!?シンジVSガッツ星人

704

空の虹に怪獣は踊る

738

燃えろ！大怪獣ファイター！

779

風来坊は温泉が大好き	806
50キロを突っ走れ!	850
ライザー光る時	884
風林火山を超えてゆけ!	931
謎呼ぶ名無しの仕掛け人	983
空を裂く牙	1031
金と黒の戦い①	1095
金と黒の戦い②	1107
金と黒の戦い③	1201
金と黒の戦い④	1421
怪獣大進撃!①	1601
怪獣大進撃!②	1741
怪獣大進撃!③	1881

怪獣娘はじめます①	1203
怪獣娘はじめます②	1220
怪獣娘はじめます③	1238
ヘヴンズキャツスル①	1260
ヘヴンズキャツスル②	1271
ヘヴンズキャツスル③	1288
語るは『拳』	1304
怪獣はくれむ永遠の誓い	1330
喪失 — フオビドゥン —	1366
ファニー・ゾーン	1414
マナツノセカイ	1435
私は怪獣娘	1475
キミの声が聞きたい	1528



## 未知なる友達

「東京か……久しぶりだな。」

大きなキャリアケースを引いて、一人の少年が壇上に現れた。キャリアケースには彼の名札……生年月日、血液型、連絡先までもが事細かに書かれている。個人情報だダ漏れである。

『濱堀シンジ』、それが彼の名前だった。その年頃の男子には少し小柄ではあるが、ごくごく普通の純朴そうな、お上りさんの少年だ。

「よっし、まずは東京タワーを目指そうか。」

シンジの今回の目的は『観光』ではない。けれど、少しだけ見物してから目的地向かうのもいいだろう、とシンジは樂觀視していた。これからの不安を考えれば、少しでも樂觀的にならなければやってられないというのが理由だが。

そういえば東京タワーの脚のアーチ部分の高さは40mらしい。

ともあれ、まずは行動を開始したシンジ。東京タワーほど目立つ建造物であれば迷うことなく辿り着いた。展望台からの見晴らしはすごいものだった。晴天ならば富士山や房総半島まで見渡せるそうだ。晴れていればの話。詩的に言う空が泣いている。英語では I t、s r a i n y.

シンジは生まれつきの雨男であった。運動会、遠足、文化祭、入学式や卒業式の学校行事に始まり、家族旅行やちよつとした外食、深夜コンビニに出かけようとした矢先に降り出したことすらあった。大抵大きな出来事の前には雨が降っていたと記憶している。

展望台のガラスに雨粒がつく。小さな粒は集まって大きな雫になり、大地に向かって垂れていく。それにつられるようにシンジの視線も下がっていく。気晴らしのはずが、気分が重くなってきていた。



「げー！見えないじゃーん！富士山ー！」

「さつきまでは晴れてたんですけどねえ……。」

「エレベーターに乗ってる間に曇るなんて……。」

なにやら女子高生たちが騒いでいる。こんな雨男がいるせいで、せっかくの景観を台無しにしてしまつて本当に申し訳ない。遠くまでは見えないが、都内であればいろいろなものが見える。新宿、霞が関、緑地公園。もしも自由に空を飛べて、あのあたりを舞うことが出来ればさぞ気持ちが良いだろう。

と、遠い世界に思いをはせても自らの心の問題は晴れない。そつと、懐に手を伸ばして一通の手紙を取り出す。あて名には『濱堀シンジ様へ』、自分の名前。差出人は『濱堀ソウジ』、父の名だった。受け取ってから何度も読み直し、その度に気分を落ち込ませてきた、忌まわしき文書であつた。

「こんな招待文で、人がやって来ると思ってるのかな？」

手紙を懐へと仕舞い、ふと眼下に広がるビル群に目をやった。昼間だというのに夕闇

のような薄暗さの道を、傘差す人が歩いているのが見える。まるでアリののような小ささだ。空を飛んで見下ろした世界と言うのは、ちょうどこんな感じなのだろうか、再びシンジが夢想を広げていたところ、ビルの屋上に何かが見えた。

(あれは・・・影?)

人影：・・・とも違う、不定形でうねうねとしてはつきりとしない、不気味な存在が、そこにあつた。あれも東京名物かな?不思議だなあ・・・とのん気にしばらく見続けたら、さらなる異変を目の当りにした。

「うわあつ!なんか揺れてない?!」

「地震?!」

グラグラと振動を感じた。それは気のせいではなく、周囲にいた人々が皆同じような反応を示していた。全員が白昼夢を見ていたわけでないとなれば、明らかに地震だった。

「皆さーん！落ち着いてくださーい！」

「落ち着いて係員の指示に従ってください！」

にわか騒がしくなった観光客であったが、そんな中で先ほどの女子高生たちが声をあげている。自分と同じ位の年頃の少女たちのその落ち着きように、シンジは正直地震より驚いていた。しっかりした子がいるもんだな、と。

そしてさらにそれを上回る衝撃と、さらにさらに上回る体験に出会うと、誰が予想できただろうか。

とりあえず窓際は危ないと、シンジを含めた人々がエレベーターの方へと向かいはじめた時、その背後から異様な気配を感じた。

「なん・・・だと・・・!？」

いつの間にか、窓には黒い影がびつしりと張り付いていた。それは先ほどビルの屋上にいたやつだったと、シンジにはわかった。

「うわああああああ!!!」

「シヤドウ・・・!」

「こんなところにまで出てくるなんて!」

一瞬にして展望台は阿鼻叫喚の地獄絵図となった。人々は完全にパニックとなり、エレベーターへと殺到した。泣き叫ぶもの、絶望するもの、狂乱するもの、そして覚悟を決めるもの。

「ねえ、なんかここ傾いてない?！」

「まさか、ここを崩落させるつもりなんじゃ!?」

「そんなこと!させません!」

「うん!」

さらに事態は刻一刻と悪化していた。影が一方行に積み重なり、展望台が重さで傾いているのであった。人々は必死にしがみついて耐えている。そんな中、3人の少女たち

は立ち上がる。それと同時に、とうとう影が窓を割ってなだれ込んできた。あわや万事休す！だが、希望の光は輝いた！

「ソウルライド！」

「アギラ！」 「ミクラス！」 「ウインダム！」

光の中で、少女たちは自身のもう一つの名を叫び、『変身』を遂げた。

「あれが噂の……『怪獣娘』……。」

シンジもまた、その光景に見とれている内の一人だった。先ほどまでの絶望から一転して、人々の間には正気が戻ってきていた。

「今の内に、早く避難を！」

怪獣娘さんの一人、メガネの子が指示を出し、係員は落ち着いて非常階段への誘導を

始めた。しかし、その行く手にも影が襲い掛かってきた。

「させるかあ！」

今度は元気つ子が、ドロップキックで迫りくる影を弾き、腕力でもって薙ぎ払った。さらにその先では、我先にと駆け込む人々が、階段の前で団子になっていた。

「落ち着いて、2列で歩いてください！」

最後に眠そうな目の子が誘導を行っていた。不安をかき消すように、寝ぼけ眼の子は励ましてくれた。本当に不思議だ、あの子の笑顔には、そんな不思議な力があるようだった。

ここからおよそ600段降りれば大展望台から地上へ降りられる。その間にも、影は迫ってきていたが、怪獣娘さんたちの活躍で人々は無事だった。安心するには少し早い、シンジも胸をなでおろした。

『マユー!? マユちゃんどこ行ったのー?!』

少し後ろで、女性の悲鳴が聞こえた。考えなくてもわかる、子供がいなくなったのだろう。この人混みの中、散り散りになってしまつては探しようがない。もしも探しに行つてしまえなおのこと危険だ。別々に無事に降りられたことを祈るしかない・・・と、普段冷静なシンジは考えていただろう。

しかし哀しいかな、それともこの場合は運が良かったのか、シンジはこの時冷静ではなかつた。気が付けば人混みから抜けて辺りを見回していた。

「どこにいる・・・どこに行つた・・・?」

五感を研ぎ澄ませ、手に汗を握り、シンジは最悪の事態を想定していた。人間は結果を想像すると、大体最悪か最高の状態を想定するらしい。そしてその予想は現実となつた。

「いたあー!」

たしかに子供はいた。影が侵入してきて、今なお傾き続けている窓のすぐ傍、そこに座り込んで泣いていた。

「ちよつと．．．！ミクちゃん、ウインちゃん！あれ！」

気づいた時には既に息する事すら忘れて走っていた。もうすぐ息が止まることになったとしても、足を止めるわけにはいかなかった。傾きによつて機材が滑ってきているのが見えていた。あのままでは当たる、その前に。

「うおおあああああ!!!」

間一髪、子供を抱えて機材を避けることには成功した。だが坂道を駆け下りたことにより、ブレーキが利かない。寸でのところで割れたガラスに右手を引っかける。

「ぐううう．．．！」





意識を失う前、シンジが見たのはあの子の顔だった。表情に哀しみは浮かんでいなかった。もつと強い、決意を秘めた顔をしていた。それよりもシンジが思ったのは、この子供への罪悪感だった。もう少し自分が早く気づいていたなら、もう少し根性があったなら、少なくともこの子だけは助けられただろうか。

すると不思議なことに、自分自身が抱きしめられているような感触があった。温かい、陽だまりのような優しい力に。

「んっ……あれ？僕……」

冷たいアスファルトの感触で目が覚めた。雨水と砂にまみれて気持ち悪い。

「気が付いた？よかった・・・！」

次に見えたさっきの女の子の顔。こちらをのぞきこんでいた。表情は先ほどとは違い、柔らかい笑顔だった。正直ちよつと惚れた。

「・・・生きてる？」

「はい、生きてます。ボクも、その子も。」

左腕の中にいる子供も無事だった。気を失ってはいるが傷一つ無い。

「ここにいると危ないかもしれないから、少し移動しましょう。歩けますか？」  
「うん・・・大丈夫、です。」

子供を彼女に預け、自分の足で立ち上が、生きていることを確認する。うん、確かに自分は今生きている。それは理解できるが、なぜ生きているのかは納得できていない。たしかに、地上150mの大展望台から転落したはずだった。

と、先ほどまで自分がいた場所を不思議そうに見上げると、事態は収束を迎えているようだった。影を撃滅し、安全を確保するもの。人々を誘導し、無事を確認するもの。空を飛びながら、崩落寸前だった建物を支えるもの。それぞれが自分にできることを、可能な限りやっている。

(これがプロの仕事か・・・。)

「おい！アギちゃん！」

何度も首を上下させて、まだ少しぼんやりとした頭を廻しつつ足を動かしていると、遠くの方から声が聞こえてきた。聞き覚えのある声だったので、先ほどまで大展望台にいた内の一人だとすぐにわかった。

「んもー！いきなり飛び出すからびっくりしたよー！」

「ごめんミクちゃん、そっちは大丈夫だった？」

「ええ、あの後すぐにレッドキングさんやキングジョーさんが来てくれましたから。大きな怪我をした人もいませんでした。」

声のした方向から、すぐにその姿が見えた。あの二人もここにいるということも、もう終わったんだろう。本当に、生死を賭けた緊迫の瞬間だった。何はともあれ命を捨て今ここにいることを実感し、安堵した。

「痛っ。」

「あら？アギさん、そちらの人は？」

「そうだ、この人怪我してる。それに、こつちの子のお母さんが探してると思う。」

「わかった！すぐ医療班のところに連れてくよ！」

「ふえっ？」

「ちよつと、ミクさん?!」

元気っ子がそう言い終わるや否や、有無を言わさず担ぎ上げられて特急便を味わった。シヨックで血圧が下がっていたのもあるが、まさか地上でブラックアウトを味わうとも思わなかった。

数分後、救護所には白目を剥いたシンジの姿があった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「どうも、ありがとうございました。」

手に包帯を巻いたシンジが救護所を後にした。もう少し休んでいけばいいとも言われたが、それ以上に先ほどの親子が気になっていた。無事に再会できただろうか、どうしても確かめたかったのだ。

(いた。)

ほどなくして、目的の人物は見つかった。抱き合って無事を喜んでいた。それが見れただけでシンジは満足だった。せっかく喜んでいるのだ、水を差しては忍びない。

(よかった、よかった・・・。)

さて。どうしよう。遠くではまだ怪獣娘さんと思わしき人が駆けている。さっきの

三人娘にお礼を言いたいところだが、今は忙しいだろうし、どこに行つたかもわからない。会いに行つても邪魔になるだろう。

さつきまで多くの人に囲まれて、同じように恐怖や奇跡を体験してある種の一体感を味わっていたけれど、終わってみれば途端に疎外感を味わう。あるあるだと思う。

「あ、いましたよー！」

「おーい！さつきの人——！」

あつちの方が僕を見つけてくれた。

「もー、探したじゃーん！あそこにいてくれればよかったのに！」

「ミクちゃん、その言い方はどうかと思うよ。」

「どうも。」

この三人は、三人で一組なんだな。すごく仲がいい。仕事仲間とか、チームとかそういうのを越えた友情があるんだろう。

「先ほどはありがとうございました、怪獣娘さん。」

「いーっていいーって！仕事だからね！」

「あの、本当に大丈夫なんですか？」

「はい、おかげさまで。五体満足で生還できました。」

「本当に？」

「本当です。」

両手両足をヒラヒラさせてアピールする。3人とも・・・いやメガネっ子と元気っ子だけが驚いているようだった。寝ぼけ眼はそんなに驚いていない。

「あの、すごいんですね。あんな高さから落ちたのに・・・。」

「ザンドリアスみたいに空飛べるんだ！」

「飛べませんよ?！」

僕は怪獣娘じゃないんだから、空飛べるわけないんだ。



「それはそうと、あの子無事に届けてくれてありがとうございます。」

「そうそう、お礼言われたよ!」

「だから、あなたにも伝えたくって。」

「僕は・・・大したこと出来なかったですし。」

「そんなことないですよ!」

「君が気づいてなかったら、どうなってたかわかんなかったし! いやーホントよかったですよ!」

いざ褒められると照れる。そもそも女子高生3人に囲まれるなんて状況自体がものすごく照れる。

「じゃ、じゃあ僕、行くところがあるのでそろそろこの辺で・・・。」

「あ、はい。呼び止めてしまつてごめんさい。」

もう少しこの状況を楽しみたいのは山々だが、恥ずかしさの方が勝ってしまった。後ろ髪を引かれるようだが、手紙に記された場所へ向かいたい。

「あれ、無い？」

「どうしたの？」

「ポケットに入れてた手紙が・・・ない。」

落ちてる最中に落としてしまったらしい？可能性は低いけれどそれしか考えられなかった。

「一緒に探しましょうか？」

「でも、見つかるかどうかわからないですし。」

「ジーっとしてもドーにもならないって！」

答えを聞かずに元気っ子は走っていった。猪突猛進とはこのことか。

「行っちゃった・・・。」

「行っちゃいましたね。」

「白い封筒で、裏に僕の名前が書いてあります。」

「そういえば、名前。私は『アギラ』。」

「『ウインダム』です。走っていったのは『ミクラス』です。」

「僕は『濱堀シンジ』、よろしく。」

なんやかんやで手分けして探すことに。雨で濡れているから封筒もグシャグシャになつてゐるだろうし、最悪車に轢かれてズタボロかもしれない。

それはそれでいい気もするが。消極的な方法とはいえ、ブラツクアウト以上に頭に抱えていた悩みから解放されるのだから。

それで逃げられれば苦労しないんだけど。

「あれは・・・？スク水？」

それらしいブツを持った人がいた。まず目を引いたのはその恰好。スク水だ、どう見てもスク水だ。そして太い尻尾と三日月のようなツノ。あれも怪獣娘さんだ。

「あの・・・その手紙って。」

「ん？これ・・・キミの？」

間違いない、濡れて字が滲んでいるがさつきまで僕が持っていたものだ。

「見つかった・・・。」

「そっかそっか、キミが・・・。」

正面からその人の顔を見据える。うんうんと頷いて、納得したようにして、こちらの顔を覗き返してきた。

「じゃあこれ、シンちゃんの。」

「ありが・・・シンちゃん？」

そんな呼び方されるのは、過去一度だけだった。

「シンちゃん！シンちゃんだ！！懐かしいなあ〜！」

「うおっと！」

突然、その子はボディプレスをかましてきた。否、抱き着いてきた。

「・・・え？誰？」

「ゴモたんだよー！」

「知らないよー！」

「おぼえてないかな？昔近所に住んでた『黒田ミカツキ』だよー！」

黒田？ミカツキ？記憶にある人物を片っ端から当てはめていく。えーつとえーつとと唸りながら顔をしかめていると、目の前の幼馴染（らしき人）もだんだん膨れっ面になつてきていた。

「んもー！」

「ぬわー！」

シンジは生命の危機を感じ取った。それがシンジの脳を覚醒させたのか、はたまた死に瀕したことで走馬灯を覗いたのか。

「ミカヅキ？ミカ？ミカちゃん？」

「そう！ミカちゃんだよー！」

「ぐえー！」

思い出せたところで結局絞められた。辛うじて意識を飛ばさずに済んだが、でもそれ以上に嬉しかった。

「ミカ、怪獣娘になったのか。」

「そうなんだよー！今はゴモたんに通ってるけど。」

「大怪獣ファイトちよつと見てたけど、まさか知り合いが出てたなんて思わなかった……。」

「見てくれているの?!うれしーなー！」

「なんというか……変わったな、ミカ。」

「ふっふーん、今の私は元気なゴモたんなのだよー！」

「あばばばば」

今度は振られ揺さぶられ目を廻すことに。

これが彼女たちとの出会い、そして再会だった。ここから、濱堀シンジの運命は動き出す。

## 怪獣娘と少年

「へー、ゴモたんときんじさんにそんな関係が．．．。」

「そうなんだよー！ ホントびっくりしちゃった！」

「痛いからー！」

ベシベシと背中を叩いてくる幼馴染に苦言を呈するシンジと、怪獣娘が4人並んでハ  
ンバーガーをかじっている。

「それで？ シンちゃんは何しに東京にきたのん？」

「ん、うん。手紙が来たんだ、父親から。」

「お父さん？」

「そう、『遺産』を受け取りに来いって、それだけ。」

「『遺産』！ 財宝とか山とか満漢全席とか?!」

「最後のはなんか違うと思うよミクちゃん。」

「お金持ち、なんですかね？」



「いや、そんなことはなかったよ。裕福ではなかったし。」

今もだけど、と小さく付け足す。実際シンジは今コーヒーしか飲んでいない。本当は水だけでよかったけど、女の子たちのいる手前、そんなみみっちい真似ができない。要するに見栄を張りたかった。高楊枝はくくったが、胃は抗議を求めてキュウと鳴いた。

「ん？シンちゃんお腹すいてる？はい、あーん。」

「いらんよ？」

「いいからいいから、あーん。」

「あつ……あー……。」

されるがままにナゲットを口に突っ込まれてしまった。そもそもその力に差がありすぎて抵抗すらできない自分が恥ずかしかった。こんなことなら、ご一緒にポテトされておけばよかったと後悔した。

「お？あげる！」

「いらんから！」

「ミクさん、シンジさん困ってますから！」

「ウインちゃん的には、男の子同士でやってるのがいいのかなー？」

「ベベベベつにそういうわけでは！」

牛丸ミク、通称ミクちゃん。この子は恐らくミカと同じタイプの人間だと判断した。ダム子もといウインちゃんこと白銀レイカ、はそのストツパー、にはちよつと不安が残る。

「じゃあここいらで、再会を祝して一発芸やってみようか！」

「「アギちゃん（さん）が！」」

「うひー。」

アギちゃんこと宮下アキは・・・いじられキャラ？とにかく、いい子たちだ。とても先ほどまで戦っていた怪獣娘さんだなんて思えないほど、ごく普通の女の子たちだ。越してきて早々に友達が出来たのは素直に喜ぼう。

「さてっと、僕もうそろそろ行くよ。」

「あつ！そういうええばもうすぐ大怪獣ファイトが始まつちゃう！」

「ではこの辺りでお開きにしましょうか。」

「そだねー、行こっかシンちゃん！」

「なんで？」

「なんでって、シンちゃんが行こうって言いだしたんじゃない？」

「それはそうだけど、僕はついてきて欲しいなんて一言も言っていないよ？」

「そこはホラ、私たち友達だし？いつでも一緒じゃん？」

「遺産が手に入っても何もあげないぞ？」

「えー。」

「そのつもりだったのかよ！そもそも、多分金目のものじゃないよ？」

「どうしてそう思うんですか？」

「もしそうだったら今こんな苦労してないはずだし。」

（たしかに。）

おごぼれが目当てだなんて、そういうわけではないというのはわかつている。ミカなりに心配して付いてきてくれるのだろうと。だったら断る理由もないし、連れてきても

いいだろう。決して心細かったとか、そういうのではない。

「それで、どうして君たちまでついてきているのかな？」

「だいじょうぶ！大怪獣ファイトは録画してあるから！」

「ミクちゃんが行こうって言うから。」

「二人で行かせるのも不安なので・・・。」

結局3人も付いてきていると気づいたのは、駅の改札でレイカが引つかかった時のことであった。

(アキバに寄った分の、電車賃のチャージを忘れていました！)

(ひよつとして見た目よりもうっかりさんなんだろうか？)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「( )か。」

「ほへー、おつきいお家だね。」

手紙で記された場所には、家と言うには少々大きい屋敷が建っていた。傾きかけた陽に逆側から照らされ、その巨体をより一層影で大きく見せながら、やってきたシンジたちを迎える。

「土地代だけでいくらしてるんだろかね？」

「一坪200万はしてるんじゃないかな？」

「やっぱお金持ちなんじゃない？」

「あー、相当悪い事したんだろかね。」

「ええっ……まだそうと決まったわけでは……。」

「悪い事でもしなきゃこんなところに家が建つはずがない。」

全国のいいことをしながら都内に豪邸持つてる人ごめんなさい。

「じゃ、入ろうか。」

そう言い切るよりも早くシンジは門に手を添える。が、帰ってきた反応は全くの『暖簾に腕押し』だった。

「お待ちしておりました、シンジさま。」

「あらっ？」

シンジが戸を開けるよりも早く中から開けられ、思わず肩透かしを食らった。

「シンちゃん！」

「大丈夫、ですか？」

その勢いは止まらず、そのまま前へと倒れ込んでしまった。するとどうなるか。

「あちやく。」

「あわわわ……。」

自分を出迎えたその人を、押し倒す形となった。これが、相手が女の子だったらまだよかつただろう。（全然よくない）だが男だ。こんな画を誰も求めてはいないだろう。

「ハア・・・ハア・・・コレハ・・・。」

「ウインちゃん？」

「はっ！いえなんでもありませんよアハハハ・・・。」

一人いたようだ。

「えっと、ごめんなさい。」

「いえ、大丈夫です。お待ちしておりました、シンジさま。」

立ち上がって埃を払うと、澄ました顔で仕切り直しとばかりにリピートした。

「そちらの方々は？」

「友達です、一緒に入れてもらってもよろしいですか？」

「構いません、お茶の用意をします。」

「いいね！お菓子もあるかな？」

「ミクちゃんさつきハンバーガー食べたばかりなのに・・・。」

後ろが賑やかなおかげで、シンジも気楽でいられた。この気分は後の選択にも影響を及ぼしていた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

一行は通された部屋でお茶とお菓子を楽しみながら待つこととなった。

「それにしても、人が住んでるような気配が全然ないね。」

「掃除は行き届いてるみたいですけど。」

部屋の棚には立像のオブジェや、飛行機・車といった模型。それと何かの記念の楯が綺麗に並べられている。埃が積もっているわけでも、チリひとつすら落ちていない。

「あの人だけが住んでるんじゃないかな。見た目執事っぽし。」

「完璧執事ってやつ？アニメみたいじゃん！ねーウインちゃん？」

「そ、そうですね…執事に攻められるうら若きご主人…いや、そう見せかけて…」

「ゴニョゴニョ。」



なにか戯言が聞こえてくるが無視。どういうわけか、いやどういいうわけもこういいうわけもないが、この家は丸ごとシンジに譲渡されたのだそうだ。あの執事、『チョーさん』と呼ばばいいらしい、がそう言った。家の管理は全て、あのチョーさんに任せられるよう、父・ソウジより命令されているのだと言う。

「お待ちせいたしました。」

もう一つ、彼には重大な秘密がある。彼はロボットなのである。ミカが『証明してみてください。』と言ったものだから、顔のカバーを外して中身を見せつけられてしまった。結果シンジは夜中トイレに行けなくなった。

それはさておき、部屋に戻ってきたチョーさんは、金属製のケースを机に乗せた。

「こちらが、ソウジ様より仰せつかった『大いなる遺産』でございます。」

「この家だけじゃないのか。」

「この『大いなる遺産』と比べれば、この家屋の価値も霞むと、ソウジ様はおっしゃっ

ておりました。」

一坪200万の豪邸よりもすごい、すごい遺産？そりやすごいけど正直嬉しくない。

「嫌な予感がするなあ。」

「すっげーじゃん！見せて見せてよー！」

「ミクちゃん、落ち着いて。」

「そうですね、これはシンジさんの物なんですから。」

「ちなみに、受け取らないって選択肢は？」

「あります。」

「え？受け取らないの？」

「だって、絶対なんかあるだろうし……。」

「じゃあアタシがもらう！」

「いやいやここは私が！」

「……じゃあボクも。」

「あっ私も立候補します！」

(この流れは……)

知っているし、アピールもされている。

「じゃあ僕が。」

「「「どぞどぞ。」」」

長いものに巻かれてしまった。これがひいては後々に尾を引くこととなる芸人魂であると知る者はいない。

「まあまあ、一目見てから決めてもいいんじゃないかな？」

「そうそう！まずは当たって砕けろだよ！」

「砕けたくないなあ。」

そう言いつつケースに手を伸ばす。それは見た目よりも軽かった。多分中身よりもケースのほうが重い。

「じゃ・・・開けるね。」

「ゴクンツ・・・。」

(ゴクンツって口で言う人初めて見た。)

ケースの中から、目の眩むような光が漏れだしてきた。シンジは、その『光』を確か  
に掴んだ。

それは『運命の光』だった。

|| || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || || ☆ || || || || || ☆ || || || || ||

「ゆゑ。」

所変わってGIRLS本部、その談話室。

「その『大いなる遺産』とやらを持って、ソイツも連れてきたってわけか。」

「はい、今検査されているところなんです。」

「怪獣娘に関わるアイテム……か。」

ふーんと顎に手を添える彼女は、鍛え抜かれた両腕と尻尾のリボンがチャームポイントのレッドキング。大怪獣ファイトの初代王者にしてアギラ達の頼れる先輩である。かわいい。」

「お待たせー！おっ、レッドちゃんもいたんだ！」

「おうゴモラ、そいつが例のミラクルマンか？」

「ミラクルマン？」

「東京タワーから落ちて生還したんだって？聞いたぜ。俺はレッドキングってんだ、よろしくな！」

そういえばそんなこともあったなあ、ミカとの再会の衝撃が大きすぎて忘れかけてけど。握手を交わしながらぽつりと思いつり出す。

「それで、そのアイテムってのは？」

「あつ、これです。」

シンジは左腰のホルダーから、手のひらサイズの機械をとって見せた。

「これか・・・なんかソウルライザーに似てるな。」

「ソウルライザーよりちよつと厚いですけど。」

ソウルライザー、それは怪獣の魂（カイジューソウル）を呼び覚まし、怪獣娘へと変身させるアイテムだ。

「父の研究書類によると、これの名前は『バディライザー』と言うそうです。」

『『バディライザー』・・・。他には？』

「何も、名前しかわからなかつたんです。」

レッドキングの手から返されたバディライザーを左手に、右手はは反対側のホルダーをまさぐる。

「それと、わからないことがもう一つ。」

「なんだそりや？カードか？」

「何も描いていないカードです。これがついていました。」

絵のついていないカードが数枚。触ってみると、それは紙ではないと思えた。プラスチックよりも固く、金属より軽い、不思議な物質だった。

「多分バディライザーで読み込んだと思うんですが、やってみても何の反応もありません。」

「ふーん。」

ライザーの読み取り機と思わしき場所にかざしてみるも反応はない。そもそもどうやって電源を入れるのか、どうやって動かすのかもわからない。

「仮にソウルライザーのそっくりさんなんだとするとよ、どうすればいいのかもその内わかるんじゃないのか？」

「ソウルライザーはどうやって動かすんですか？」

「説明しよう！・・・アギちゃんが。」

「ふえっ!? え、えっと・・・。」

「アギちゃんがんばー！」

「変なプレッシャーかけないで！」

「私たちが怪獣だったころの記憶や本能が、今の私たちに影響を及ぼすことがあって、それが『カイジューソウル』。そのカイジューソウルが高まった時に、自然と体がソウルライザーを動かして、怪獣娘に変身できる・・・かな？」

「そうそう！あたしの場合は『もっと強くなりたい』って思いで、ウインちゃんの場合は・・・。」

「ウインちゃんは『おまピト』だったのかな？」

（おまピト？）

「『知識欲』！知識欲です！あは、あはははは・・・。」

（何故焦る？）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



「つまり、自分の好きな事ややりたい事が鍵ってワケだ。」  
「そんなこと言われてもなあ。」

一人河原で物思いにふけるが、また一雨来そうな空模様である。

(好きな事ややりたい事・・・ってなんだろう。)

趣味と言えば、プロレスとか好きだけど？けれど決してケンカつ早い性格ではない。  
いささか短気なところがあると自覚はあるが。

「こんなところにいたんだ。」

「ん？宮下さん。」

「アギラでいいよ。」

宮下さん、もといアギさんがいつの間にか背後にいた。

「どうすればいいのかわからない、って顔してるね。」

「そんな顔してた？」

「いや、そうじゃなくて……。ボクもそうだった。」

「？」

「自分が何をしたいとか、何に夢中になればいいのかとか、わからなかった。」

シンジの隣に腰かけ、思い出すように語りかけてきた。遠くで子供の声だけが聞こえている。

「シンジさんは、ボクと似てる気がする。」

「え?!」

「あつ、嫌だった……。かな？」

「いえいえいえ、どこが? どうして?」

「その掌の傷。」

「……。? これ?」

タワーの事件でついた傷。まだ包帯は取っていない。

「あの時、ボクがシンジさんの立場だったとしても、同じことをしてたと思う。それが、ボクのカイジューソウルだったんだ。」

「ふーん……。」

「シンジさんの場合、ボクと違って答えが見つからないんじゃないやなくて、もう持つてるんじゃないかなって思う。自分が気づいてないだけで。」

「そう……かな。」

「ボクの気のせいかもしれないけどね。それだけ言いたかった。」

それを言うために探しに来たの？とシンジが言いかけたところで、アギさんから音が鳴る。

『アギアギ！シャドウがあらわれましたあ！』

「わかった、すぐに行くね。」

「シャドウって、昨日の……。」

「うん、人類の脅威。ボクたち怪獣娘にしか倒せない敵。行かないや、じゃあね。」  
「あ、アギさん！」

走り出した背中を、思わず呼び止めてしまった。

「えっと、その・・・ありがとう！それから、が、がんばって！」

「・・・うん！」

拳を握りしめ、エールを送った。今のシンジにはそれしか出来なかったけど、アギラは笑顔で応えてくれた。

戦いに向かう背中を見送り、再び一人となったシンジ。違いがあるとすれば、今は立っているということ。

「答えはもう、持ってる・・・。」

包帯の巻かれた掌をじっと見つめる。ふと、腰に震えを感じて視線を移すと、バディ

ライザーが光っていた。

「こいつ、動いてる!のか?」

タッチすると、ぐるぐると画面が切り替わって声がする。

『バディライザー・スタンダードモードの起動を確認しました。』

「その声は、チョーさん? 起動を確認したって、やっぱりこれ動いてるの?」

『そうです、来るべき時が来た、ということですよ。』

「来たのはいいいけど、どこに行けばいいのさ?」

『マップをご覧ください。』

パツと表示された周辺の地図に、点滅している場所がある。ここに行けということだろうか。

「なんか釈然としないけど。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「もうちよつとだな．．．。」「ゼエゼエ

何か乗り物でも携帯できればという感想が沸き上がったが、それはさておき。この先に一体何があるのか、肝心なことを機械は教えてくれない。目的もわからずに走らされるのはかなりしんどい。

「ちよつと休むか．．．ん？」

日陰に腰かけようとしたその矢先、たまたま目に入ったのはモゾモゾと動く黒い影。野良猫かな？それとも宇宙から来た殺人昆虫？それだったらどんなによかつたものか。モーターを持っていなければ襲われないから。

「あれは．．．あつ！」

シンジが記憶を掘り起こすよりも先に、影は立ち上がってぐわつと来た。昨日出くわ

したばかりで記憶にも新しい、シャドウだ。

「逃げろっ！」

口がそう動くよりも速く走り出した！が、既に体力を消費している以上、いつまで持つかわからない。道を曲がって撒くか、それとも隠れるか。いずれにせよ焦ると失敗する。高いところでバランスを崩さない秘訣は、手の力を抜かずに、下を見ないこと。シンジは後ろを向いてしまった。

「あっ。」

そして背筋が凍り付いた。シャドウは目前、スレスレのところまで迫っていた。運が良かったのは、転んだ拍子にシャドウの突撃を躲せたこと。

「いつてえー、けどラッキーだった・・・？」

次は足を捻挫した。寿命が少し伸びただけで、運命は変わらないか、シャドウは再び

狙ってくる。

「やっぱりアンラッキーだった！うわああああ！」

「といやっ！」

「あああああ・・・ああ？」

「シンジさん、大丈夫？」

神の助けか？地獄に仏か？いいえ、彼女は怪獣娘。

「アギさん・・・。」

「どうしてここに？ここあぶないよ。」

「実は・・・バディライザーが反応して、ここに。」

「ホントだ・・・と、話をしている場合じゃないね。」

わらわらとシャドウが沸いて寄ってきた。応戦するアギラに背を守られ、シンジは足を引きずりながら物陰に隠れる。



「てやあー！」

「すごい……。」

素早い身のこなしと、ツノのパワーであつという間に片づけていく。これがあの寝ぼけ眼で大人しそうな女の子の力なのか？

「おおおおおおおー！そいやあー！」

「あれが『怪獣娘』……。」

最後のシャドウを仕留めたアギラに抱えられながら、シンジは退避する事となった。怪獣娘のその力をまざまざと見せつけられ、自嘲するように言葉を漏らす。

「一体なんの為に来たのか……。」

「今は危険だから、落ち着いたらまた来よう？」



「でかつ！」

「シヤドウ・・・ビースト！」

今度の敵はデカすぎだツ！大木のように太い四つ足に、2人が見上げるほどの巨体をもたげ、シヤドウビーストは迫ってきた。

『ギャアアアアアアアアアアアン!!!』

「危ない！」

「ギャツ！」

寸でのところでシンジはアギラに突き飛ばされ、ゴロゴロと転がりながら離れて行った。

「てってて・・・アギさん・・・？」

『ギョオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

「ぐううっ！」

「アギさあん！」

シンジを逃がした結果、アギラはシャドウビーストの足に捕まってしまった。ギリギリと体重をかけられ、道路にもヒビが入っていく。

「ううっ……逃げて……早く……！」

「アギさん！」

「ボクのことはいいから……行って……ああっ！」

アギラをいたぶるようにじつくりとシャドウビーストは力を込めていく。でも今なら、足を怪我していても逃げられる。そうすれば助かる。そうするしか出来ない。

（僕は……ただの人間なんだ。戦いようがないんだ、逃げたって仕方がない……。）

ここに来たことを心底後悔した。こんなに辛い思いをすることも、その必要もなかった。

た。

(けど……)

その時、シンジは足元に転がっていた空き缶をシャドウビースト目がけて投げつけていた。自分が何をやっていったのかわかったのは、甲高い音を立ててシャドウの顔に当たった時だった。

「ただの人間でも、これぐらい出来る……こつちだこつちい！」

『ギュルルル……』

「うっ……どうして……」

興味の対象が移ったのか、のしのとシンジの方へと歩みを進めてきた。啖呵を切ったはいけど、その先の事は何も考えていない。そうか、ミカが言っていた『一発ギャグ』とは、アドリブ力を鍛える訓練だったのかと現実逃避を始める始末である。

「逃げろっ！」

『ギュオオオオオオオ!!!』

激痛が走る足に鞭打ち、必死で駆ける。やがて追い付かれて踏みつぶされようとした時、アギラがシンジをさらって横っ飛びに跳ぶ。

「大丈夫？」

「なんとか……。」

今は、お互いに生きていることを確かめ合った。もう残された時間はあとわずかだ。アギラにシンジを連れて逃げられる余裕もない。

「行ってくる……ね。」

それでも、アギラは立ち上がる。

「アギさん……。」

この絶望的な状況にあつて、シンジは言葉に詰まった。胸の内には様々な感情がこみ上げてきた。

「ありがとう、がんばって……！」

その中で、シンジは『心からの言葉』を口にした。

そしてそれは、これから起こる奇跡の鍵だった。

「……これは?!」

「なんの光？」

「バディライザーが……。」

光を放ちだした。もう一つ、右腰のホルダーが暖かさを感じた。

「白紙のカードに……絵が！」

「AGIRA……！」

大きなトサカを持った、トリケラトプスのような怪獣のカードが入っていた。すぐに理解できた、これが『アギラ』だと。

「やってみよう、一か八か！」

「うん！」

2つのアイテムを手にした時、体が勝手に動いた。バディライザーの前面にカードをセツトし、トリガーを引く！



「バディライド！」

「アギラ!!」

リードされたカードは、光のフレームとなって『もうひとつの世界』の戸を叩く。

「おおおおおおおおお!!!」

『向こう側』から呼び起こされた怪獣の本能が体にみなぎり、叫びとなった!

「で、どう変わったんだろ?」

「力が・・・みなぎってくる!」

「それだけ?」

「うん・・・でも、これなら!」

『ギャアアアアアアアアン!!!』



「パワーもすごい……。」

「アギさん、次で決めちゃって！」

「うん！」

昂る力が、バディライザーを通して『指令』となって伝わる。アギラはパスコードを開けるように、その技名を叫ぶ。

『ダイノダイツシュ!!』

強く地面を蹴ってアギラが走り出すと、その間にシャドウビースト体勢を立て直し、大口を開けて迎え撃ってきた。

「いつけええええええええええ!!」

しかしアギラは止まらない！光のような速さでシャドウビーストの向こう側にまで突っ込んだ！

「やったか……！」

ズン……ズン……と数歩歩いたところで、シャドウビーストは活動を停止した。どうやら自身の頭部が吹き飛ばされたことに、最後まで気づいていなかったようだった。

「勝った……！」

「……助かった。」

シュタツとアギラは地面に着地し、対照的にシンジはその場にへたり込んだ。バディライザーの光も消えた。

「シンジさん、大丈夫？」

「うん……なんとか。」

へたりこんだまま、自分を心配する声に応える。そして今できる限りの精一杯の笑顔  
を忘れない。

「おい！アギちゃん！」

「すぐく光ってましたけどー！」

遠くから声が聞こえてきた。事はもう済んだんだろう。心なしか澄んだ気持ちで寝転がり、右手に携えた機械を見つめる。そこにはアギラのカードがある。

「これが・・・僕にできること。」

手の向こうに広がる空は曇っていた。けれども切れ間からは光が差し込んで綺麗に見えた。だからシンジも信じることにした。困難を乗り越えた先に見える、向こう側の光を。

「・・・おもしろい。」

しかしその時、その様子を見つめていた青い存在に気づく者はいなかった。

## 怪獣出んか？

「バディライド！」

「アギラ！」

・・・しかしなにもおこらなかった！

「ダメだ。」

「ダメだね・・・。」

「うーん、なにが足りないんだろうね？」

騒動から一夜明けて、GIRLS本部のトレーニングルームに一同は集まっていた。本日の主役は昨日覚醒した2人。その2人を囲んで祝賀会・・・ではなく、実験が行われていた。少なくともミクは祝賀会のつもりだったらしいが。

「二度起動できたってことは、なにか切っ掛けがあるはずだよな？」

「シンジさんはどんなことをやったんですか？」

「えつと・・・特に何も？強いて言うなら『がんばって。』って言っただけですけど。」

「じゃあ、もつと熱く言ってみればいいんじゃないかな！」

「もつと、熱く・・・。」

「頑張れ頑張れできるできる絶対できる頑張れもつとやれるってやれる気持ちの問題だ頑張れ頑張れそこだ！そこで諦めるな絶対に頑張れ積極的に頑張る頑張る北京だつて頑張ってるんだから！」

(コピペ乙、です。)

「どうだ？頑張る気持ちになつてきたか？」

「いえ、全然。」

「なんかお腹すいちゃつたし、ご飯食べ行こうか？粉もん！」

「そこはお米じゃないんだゴモたん！」

などと、真面目なのか不真面目なのかわからない問答をしていると、そこに赤い髪の非常にかわいい女の子がやってきた。ものすつっつごくかわいい。

「みなさ〜ん！シンシンの検査結果が出ましたよ〜！」

「シンシン？」

「なんかパンダみたい。」

この赤くてぴよんぴよんしているかわいい子はピグモンさん。シンシンというのがシンジの事なの言うまでもない。スチール星人の怪獣娘がいれば、このネタでもう少し引っ張ってたけどやめた。

「まずですね〜、シンシンは怪獣娘ではありません！」

「知ってる。」

「だって男だし。」

「でも、身体測定の結果から推察されるに、『怪獣娘が人間の時』に相当する身体能力があるようです。昨日の怪我ももう治ってますし。」

「えっ、そうだったの？じゃあシンジさん何者？」

「少なくとも、一昨日までは普通の人間だったよ。こうなったのは、今日か昨日のこと。」

「やっぱり、昨日のことが影響しているんじゃないかな？」



「『バディライド』ですか・・・。」

『バディライド』、たしかにシンジはあの時そう言った。それによってアギラは超絶パワーアップを成し遂げ、単身巨大なシャドウビーストを倒したのだ。では、あの時シンジの身には何が起こっていたのか？

「あの時、僕はアギさんと繋がっているような感覚だった。」

「ボクもそう思ってた。背中を押されるような、頼もしさがあった。」

「なるほど、繋がりが。」

「つまり、アギちゃんとシンちゃん繋がって、お互いに力を与え合ってたってことだね！」

「僕、そんな大それた力なんて持ってないよ？それこそ、バディライダーの力なんじゃないかな？」

それとも、このカードの力なのか。怪獣の描かれたカードを取り出す。

「資料映像で見たことがあります。それが、『実物の』アギラさんですね。」

「うん、がんばってって言った時、このカードが現れたんだ。」

「おー！なんかかつこいいじゃん！あたしもほしー！」

これとは別に、まだ白紙のカードが入っているが、これらもそのうち変化するのだろうか。

「それから、シンシンの身柄はGIRLSが預かる事となりました！」

「へー、そうなんだ。」

「まあそうなりますよね。」

「仕方がないね。」

「待つて。」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「まさか拒否権すらないとは。」

「事態が事態ですから。」

「GIRLSにいればバイト代も出るし、一石二鳥だよ！」

「それはありがたいけど、それとこれとは……。」

と、口では言っているがそこまで反感は持っていない。納得のいく理由と説明をもらったから。

「任されたからには、まずこいつの使い方と解明しなくっちゃね。」

「元々シンジさんのものとはいえ、自由に扱わせてもらえてよかったですね。」

「うん、遺産としてどうかと思つてたけど、ちよつと気に入ったよ。ちよつとだけね。」

シンジには、バディライザーを使用して、怪獣娘たちのサポートを行うことを依頼された。原理がどうあれ、戦力アップになることは間違いないのだから、これを放つておく手はないだろう。

「さつそくですが、シンシンと行動を共にするパートナーを決めたいと思います！」

「はいはい！あたしやりたいあたしやりたい！」

「痛い、痛いからそんな掴まないで！」

「一緒に行動するからには、体力と根性もしっかりつけてもらわねえと！オレが

みっちり鍛えてやるぜ！」

「だから痛いって！」

いくら少し強くなっているとはいえ、肉体派2人に組み付かれちやたまらない。既に両方の腕がギリギリと悲鳴を上げている。

「ちよつと2人とも、それじゃあシンジさんの体がもちませんよ！」

「お？ウインちゃんも立候補するの？」

「いえそういうわけではありませんが……順当にいけばアギさんが適任なんじゃないかなと思いますして。」

「ボクう？」

「たしかに、今一番近いのはアギアギかもしれないですね。ね？アギアギ。」

「それはそう……かもだけど、シンジさんは？」

「え？僕は……ちよつ痛いから！」

ひよんなことから、世の男どもが涙を流して羨むシチュエーションに出くわした。ここにいる美少女6人から、一人をパートナーとして選べとお偉いさんが言うのだ。それ

もここにいてただけでなく、選択肢を広げればまだまだ増える。うわあ、夢が広がりんぐ。

などと、無責任なことが言えるのは他所の人間だけ。当の本人はと言うと、あまりの事態に色を好むどころか困惑の色しか出ない。誰を選んでも、他の人から恨みを買ったりするんじゃないのか。選ばれた方も選ばれた方で内心嫌なんじゃないのかとか。つまり『誰にしようかな？』ではなく『どうすればいいんだ？』というのが目下の悩みだ。

と、そんな様子を後ろから（・・・）みたいな顔をして窺っていた人物が、シンジの頭に飛びついてアピールをしてきた。

「私がやるー！私がシンちゃんの面倒みるー！」

「ゴモたん?!」

「ねね、いいでしょう！アギちゃん！」

「う、うん。ゴモたんがやりたいっていうのなら・・・。」

「やったー！」

「お、あ、あ、あ、あ、あ、あ！」

チヨークスリーパーだとかアイアンクロードとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえホールディングを味わい、今日一番の叫びをあげるシンジだった。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

数日後、とあるイベントホールでの一幕。

「入場待機列はこちらですーすー4列になってお並びくださいーいー」  
「走らないでくださいーい。」

ミカとの共同生活(?)が始まった。ミカはゴモラ、もといゴモたんとしてアイドル活動に勤しんでいるので、そのマネージャーのようなお仕事が日課となった。

「でも結局アギさんも一緒なんだね。」

「ゴモたんは何故か気に入られちゃってて・・・。」

ゴモたんはその愛くるしいキャラとはつきりとした明るい性格で人気を博している。

その待機列を捌ききってひとまずは一段落して、休憩室でお昼を食べている。

「何人か女性のスタッフも見かけたけど、あれも怪獣娘さんなのかな?」

「そうだね、GIRLSのロゴを持つてる人はみんな関係者だよ。」

「怪獣娘さんからも人気なんだな。」

すげえよミカは。心の中でつぶやいた。

すると一つ疑問がわく。僕っていったいミカのなんなんだろうか? 接点は幼馴染で、今はGIRLSの見習いアルバイトとして一緒に仕事をしているところ。

「僕のとりえってなんだろう?」

「何突然?」

そもそも今ここにいられるのも、バディライザーを動かせたという点だけ。そしてバディライザーを一番に手にできたのも、父からの遺産だからということだけ。

「いや・・・僕以上にバディライザーを使いこなせる人間もいるんじゃないかな？つて。」

ありていに言えばこうだ。

「えっと・・・。」

「ごめん、変な事言つたな。忘れて。」

「エビフライもーらい。」

「あゝっ。」

「ゴモたん、いたの。」

最後にとっておいたエビフライを、横から搔つ攫われてしまった。

「なんてことを・・・。」

「変なこと言うシンちゃんへの罰だよーだ。」

「聞いてたんだ。」

「そりゃあ、いやでも聞こえるよね。こんなに大きな独り言されたら。」



「痛い痛いぐりぐりするな。」

右手の指でシンジの頬を刺しながら、いやみったらしく言ってみせるが、そこまですら快感を感じない。

「なにになに？私の人気に嫉妬しちゃったとか？それとも幼馴染が誰かにとられちゃうとか思ってたの？ねえねえ？」

「そんなんじゃないっての！」

「ほーん？じゃあなあに？」

「シンジさん、バディライザーがうまく使えなくて不安なんだと思う。あれから一回も成功してないから。」

「そうなのだ。あれから毎日暇を見つけては練習を繰り返してはいるのだが、一向に上手くないかない。」

「そんなことかあ。大丈夫だって、一回出来たんだったらその内またできるようになるよ！まだ数日しか経ってないじゃない。」

「それはそうかもしれないけど、もし1年経つても出来なかつたらと思うと・・・。」  
「その時は、その時までには別の何かを見つければいいんじゃないかな？道一つだけじゃないよ？」

「ミカ・・・。」

やっぱりすげえよミカは。

「お？惚れたかな？いやーゴモたんったら罪作りなんだからもー！」

「自分で言うな自分で。」

「つてわけで、シンちゃんの悩みが解決したところで、一発ギャグやってみよー！」

「うえええ？」

ああ、この流れもこの数日間何度も見て来たな。ミーティングが終わつたら一発ギャグ、仕事が終わつたら一発ギャグ、寝る前にも一発ギャグ、もはやお馴染みの展開だ。シンジもこの流れに乗るようになった。

「シンちゃんが！」「アギさんが？」

「あれ？」

「わーい引つかかったー！自分は指名されないって安心しきってたー？その油断が命取りー！」

「は？へ？」

「シンジさん、ファイト。」

「え？いや、え？」

「ってゆーわけで！シンちゃんこの後のステージの前座よろしくね！」

「ちよっ、おまつ。」

この後、シンジが3分を懸けて考えた命がけのギャグは、わずかに会場の空気とませることに成功した。その後、楽屋ではスプーンが思いつき叩きつけられる音が響いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「そのあなた、ちよつといいかしら？」

「はい？」

楽屋でひとしきり泣いた後、後片付けの為に廊下に出て少し歩いたところで、後ろから声をかけられた。振り返れば、・・・なんとというか青い女性がいた。GIRLS関係者かな？

「実はお話があつて・・・。」

「あつ、御免なさい、セールスはお断りなんです。」

「ちがう！ちゃんと許可をもらつて通つてきているわ…。私は、こういうものです。」

と、名刺をとりだしてきた。名刺は受け取ったら読み上げて確認するのが社会人のマナーだ。

「私立探偵事務所『ブルーコメント』の、天城ミオさん？」

「以後、お見知りおきを。」

GIRLSの所属ではない・・・けど、外注かなにかの人なのかな？

「あなたも、怪獣娘さんなんですか？」

「ええ、そうよ。今日はあいさつに來ただけだから、また会いましょう。」

「どうもこちらこそ。」

それだけ言うとミオさん去っていった。本当に、顔合わせしに來ただけだったんだろうか？ひよつとしたらミカやアギさんが何か知っているかもしれないし、後で聞いてみよう。

「と、はやいとこ戻ろうか。また一発ギャグさせられちゃかなわん。」

もらった名刺は本人の前ではしまわないのが社会人のマナーだ。名刺入れに入れるべきだが、生憎持ち合わせてはいない。GIRLSの社員証の中に挟んで、廊下をかけ

て行った。

「濱堀シンジ、あなたは怪獣娘の希望の光か、それとも底知れぬ闇・・・かな？」

天城ミオがそう問いかける。答えを知るものは、誰もいない。

いざお出かけ!

「その人、きつとベムラーさんだ。」

「ベムラーさん? たしか・・・一番最初に発見された怪獣娘さんだっけ?」

「うん、今は私立探偵をやってるって聞いた。」

「そう名刺には書いてあるね。」

イベントは終わっても今日の仕事はまだ終わらない。ゴモラ宛てに届いた大量のファンレターやプレゼントの仕分けがある。

「私立探偵が何の用なんだろう? 聞いたけばよかったな。」

「シンジさんの身辺調査とかじゃないかな?」

「僕頼んでないよそんなの。」

「そうじゃなくて、GIRLSからの依頼だったんじゃないかな。」

「なら調べるべきは僕じゃなくて、父の方だろう。僕はただの一般市民だし。」

一通のファンレターの封を綺麗に切り、中身を確認する。目を通して毒はないので、綺麗に戻してボックスへ入れる。今のうちちょうど30通目だ。

「シンジさんのお父さんって、今どこにいるかわかるの?」

「いんや、全く。あの家は一時期寝て起きるのに使っていただけらしいし、チョーさんはその時に作られたんだって。バディライザーだけは、最近海外から小包で送られてきたみたい。」

「海外って?」

「『フリドニア』って国らしい。他にも『ロリシカ』とか、色んな所を転々としてたらしいけど。」

後の二つは島の名前らしいが。父とチョーさんの間で、定期的に情報交換が行われていたらしい。自分の知らないところで、自分の情報が見知らぬ誰かに渡されていたのかと思うと寒気がする。

「会いたい……とか思う?」

「……全然。会ったところであ……って感じ。」



何を話せばいいのか。父のことを何も知らないのだから。

「さっ、口動かしてないで仕事しよ。まだまだいっぱいあるし。」

と、次の手紙を手にとって目を通すと、一瞬表情が凍り付いた。

「どうしたの？」

「いや・・・なんでもない。」

「・・・よくあることだよ、そういうの。」

「・・・『こういう人たち』がいるってことはわかってたけど、醜いね。」

これ以上雰囲気が悪くならないうちに話を切り上げたが、余計に暗くなった。その手紙、否燃えるゴミを雑に封筒にしまうと、足元の箱へ投げ入れた。まあアンチもファンの内とは言うし。

「今はこうでも、いつかは変わるよ。いや、ボクたちが変えるんだ。ゴモたんは特に頑

張つてると思う。」

「ミカは強いんだな。」

つい先日まで、記憶の片隅にまで飛んでいた幼馴染の背中が、今は大きく見えた。

「その言葉、直接本人に言つてあげれば良いと思うよ。」

「・・・恥ずかしいな。」

「まあまあ。これも一步を踏み出す修行だと思つて。」

ふふふ、といたずらっぽく笑つて見せるアギさんにシンジは苦笑するが、おかげで落ち込んでいた気分も回復した。

「アギさんも、ミカの影響を受けたんじゃないかな？」

「そう、かな？」

「うん、アギさんも優しいし、なんだかあったかいよ。」

「も、もう！そういうのはボクに言うんじゃないよ．．．。」

一瞬赤面したかと思うと、ぷーつと頬を膨らませて抗議してくる。それから特には葉は交わさなかったけれど、つつがなく明るく雰囲気最後までこなせた。ほんの一部、そういう人たちがいるだけで、いい人たちの割合の方が圧倒的に多い。

『ハアハア、ゴモたんの立派なツノ（意味深） p r p r したいお／／』

ただやつぱりこういうのは許しておけないなあ。今すぐ破り捨てたい衝動を抑えて、後でまとめて焚書してやる。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「おしごとおーつわりー！ごはん食べにいこー！」

「かえりたい。」

「せっかく名古屋に来てるんだから、名古屋に行こうよ！」

と、今は観光中。この後食べ歩きにも付き合わされるので、目一杯腹は空かせておく。

「ほら見てー、シヤチホコー！アギちゃん並んで撮つてくる？」  
「ダメだよ！」

名古屋城、金のシヤチホコで有名であり、名城、金鯪城、金城なんていう風にも呼ばれる。

ミカとアギさんがわいわいしている様子を少し離れたところから見ていると、やはり普通の女の子にしか見えなかった。本当に、本当に不思議な存在だ、怪獣娘とは。

「ねー、シンちゃんもそんなとこにいないで、写真撮ろー！」

以前、初めて彼女たちに会った時も同じ感想を抱いていたような気がするが、そこはやはり変わらない。故に知りたい、彼女たちの事を、もっと。

「なあ、ミカ。」

「なーにーシンちゃん？」

「今度、2人で一緒に遊ばないか？」

「うん、いいよ!」

「・・・え?」

「え?」

「シンちゃん、なんだって?もう一回言ってくれないかな?」

「だから、今度2人で遊ぼうって。」

「今度お?」

「うん。」

「2人でえ?一緒にい?」

「そうだよお。」

「わーい!行く行く!」

「あーう。」

自身の背丈の倍は跳躍し、抱き着きもと押しつぶして来た。これもここ数日の間は日常茶飯事で慣れたもんだ。



「ただいまー。」

「おかえりなさいませ、シンジさま。お風呂が沸いております。」  
「うん。」

シンジ、お疲れの帰宅。住み始めた頃は、天井の高さに違和感を覚えていたここでの暮らしにも慣れた。とは言っても、一日の内の活動時間の長さで言えば圧倒的に外にいる時間の方が大半だが。

「夕飯はいかがいたしましたでしょうか？」

「んー・・・そんなに空いてないから、軽い物でいいや。」

「承知しました。」

「・・・チヨーさん。ひとつ聞いていいかな？」

「なんでございましょうか？」

「父って、どんな人だったの？」

「あなたのお父上、ソウジ様は聡明なお方であられました。私と言う優秀なロボット

を作ったこともさることながら、お若いころは生物学、脳科学、人間工学の分野において様々な研究や論文を書いておられました。」

「・・・それが怪獣娘と関係あるのかな?」

「シンジさまが生れた頃は、『怪獣娘』ではなく、『怪獣』の研究をなされていたようです。」

「『怪獣』の?」

怪獣。怪しい獣。今では見る事も無くなったけれど、昔々に確かに存在していたという危険で強大な生物。

「そのデータって、あるの?ここに。」

「その件に関する情報には、プロテクトがかかっています。」

「ちえー。」

少しでもGIRLSに貢献できればと思っていたけれど、そう簡単に行っちゃくれな  
いか。



「まあそれは一旦置いておくとして、他には?」

「ソウジ様は、常にシンジさまのことを考えておられ、定期的にシンジさまの様子を覗かれておりました。」

「それってつまり、僕の情報が、僕の知らぬところで受け渡しされてたってこと? よくないなあ、そういうの。」

鞆に個人情報を書きまくった名札をつけていた人間とは思えない発言。

「それに、僕の事を思ってたなんて信じられないなあ。この歳まで放置されてたんだよ?」

「毎月仕送りをするよう、指示されておりました。」

「お金の問題じゃないんだよ・・・。」

「愛はお金で買えなくとも、Iはお金で買えると、TVでは言っておりますが?」

「そういう問題じゃなくって、どうしたら顔も知らない、どんな性格なのかも知らない人間の事を好きになれる?」

シンジの持つ、父への不信感はその一点に尽きる。そしてこの一点が、覆しようのな

い王手なのである。

「はあ、言いたいこと言えたらスッキリした。風呂入ってくる。」

「はい、いつてらっしゃいませ。」

まあ、ここにいない人間の事だとやかく言っても始まらない。それよりも、ミカとのお出かけについて考えていた方がよっぽど有意義だと思いを切り替えていく。

(どこがいいかな……。お昼はまたお好み焼きかな?)

湯船から上がって、髪を乾かしながらうんうんと考える。あつそういえば、と。

「右手……。もう治ってる……。よな?」

治癒力が上がっていても、ズキズキとしばらくは傷んでいたのだから、今日はまだ痛くなくなっていた。相当深く傷が入ったために回復も遅れていたの  
だろう。

「傷は男の勲章・・・男なら、どーんと行かねばな。」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「雨かあ・・・。」

「雨だねー。」

そしてデート当日。案の定というか予想通りというか雨だ。

「ごめんね、雨男で。」

「いいっていいって、シンちゃんのせいじゃないよ。」

GIRLS本部前を集合場所として、午前の10時を予定していたが、お互い30分前行動で同じタイミングで合流できたのだからすごい。

「それで、シンちゃんはどこに連れてつてくれるのかな?」

「ミカはどこか行きたいところある?」

「うーん・・・シンちゃんがいるならどこでもいいよ？でもお昼は粉もんがいい！」

「今日のお昼はカレーの気分だなー。」

「おっ、カレーもいいね！カツカレーたべたい！」

「カツカレーか・・・それがいいな。」

まずは映画でも見ようということになって、映画館に向かうこととした。

「ちよつとミクちゃん、あんまり押さないで。」

「よく見えないよー。」

「声が大きいです、聞こえちゃいますよ。」

近くに、いるな。普通に聞こえる範囲にいるけど、今は無視しておこう。ミカは既にポップコーンとチュロスを買っている。

「ポップコーンはキャラメルでしょ。」

「いやいや王道の塩だよ！チュロスが甘いんだし。お好み焼きがあればもつとよかつたけど。」

「シアターに匂いの強いものはダメでしょ。」

でも売店の前とか、イイにおいがしてるね。機械のガラス越しに見える、こんもりと積もつて黄金色に照らされた山をみると、つつい財布を取り出したくなる。シンジはドリンクしか買わなかったけど。

「90分ぐらいだと、お腹もすかないし、それにこの後昼食だし。」キュー

「その割には、お腹の自己主張が激しいけど?」

「お昼まで我慢する。」

「塩!バター!キャラメル!のコンボ!」

「そんなに食べて大丈夫なんですか?」

「こぼさないようにね。」

元気なのはいいけど、シアターでは静かにね。

く73分後く 予想より意外と短かった。

「いや、楽しい映画だったねえ！シンちゃん泣いてたし。」

「ぐすつ、登場シーンのBGMはアレ卑怯だよ……。」

子供向け番組だと侮るなかれ、子供向けだからこそ『本物』で出来ているのだから。そういうミカもポップコーンを食べる手を止めて見入っていた。シンジは氷が溶けて少し薄くなっていたジュースを飲み干して、時間を確認した。お昼には少々早いかもしれないが、店を探すがてらぶらつくのもいいだろう。ちよつと目を離れた隙にポップコーンの容器が空になっていたことにまた少し驚いたが。

「すつつつつつつげー！おもしろかったー！ビュンビュン飛んじやってバンバン行つちやつてもー最高ー！」

「お、あ、あ、あ……。」

「ミクちゃん、落ち着いて。」

一人でも多く楽しんでもらえて、同士が増えたなら幸いだ。後でちよつと語り合いたい気分だが、それよりもまずはミカとの予定が先になるけれど。

「でも、付き合ってくれてうれしいな。一人で観に行くのもちよつとだけ物悲しかったし。」

「まああえて言うなら、女の子とのデートでヒーローもの観に行くのは正直どうかと思っただけだね!」

「ご、ごめん。どういうのにすればいいか、正直迷っちゃって・・・。」

「んもー、こういうシチュエーションで行くとすれば、選択肢はひとつじゃないか?」

くいつくいつと、親指で指さされたポスターを見て。『ああ、そりやそうだよな。』と納得した。

「じゃあ、今度はアレ観に来ようか。」

「うん、また今度はね。」

折よく『次』の予定もできた。なんかイイね!と心の中でガッツポーズを決めたが、また気を使わせてしまったかとモヤモヤした。

(このままじゃイカン。もっとオトナな対応力を目指さなければ・・・！)

「それでシンちゃんはお昼どうしたい？」

「よし、そうだな・・・。」

選択肢は多いぞ。先ほどカレーがいいと言っていたので、もちろんカレー屋さんに行くべきだろう。しかし一口にカレー屋といっても、町で評判のカレー屋さんもあれば、全国展開されたチェーン店もある。辛さがウリの店や、歴史を重ねた老舗、雑誌で載った人気店、どれを選ぶか。それに『カレー』というカテゴリでいえば、本場のインドカレー屋さんや、タイカレー屋なんかもある、でっかいナンがおかわり自由とかの。タンドリーチキンも食べたい。しかしそこにはおそらくミカの好きな『カツカレー』はない。

「うーん・・・。」

「シンちゃん？」

いや、カレーならファミレスでも食べられる。旅行先で、食事に悩んだらとりあえず『カレーライスとコーヒー』してたシンジにはそれが慣れていた。カレー以外のメ



ニューもたくさんあるし、ついつい目移りするけど、そこが楽しいってのもあるだろう？（結局カレーを選んだんだけど）

「光か闇か……。」

「おーい?」

しかしミカは最初粉もんがいいとも言っていた。だからお好み焼き屋さんという選択肢だつてなくはない。僕に気を使ってカレーにしようとしているのなら、ここは譲り合つて僕の方からお好み焼き屋さん……いや、東京ならもんじゃ焼きをやっているところも多い。でももんじゃ焼きつて粉もんつて言えるんだろうか? たしかにどちらも材料が似た物で、鉄板で焼いて、コテを使うけど、焼いても固まらないし。いや、お好み焼きなら広島風つてのもあるぞ、焼きそばが入ってるやつ。以前、ベロクロンさんがやつてるとか聞いたこともあるけど、そこもいいんじゃないのか?

「うま味かダシか……。」

「もう! シンちゃん!」

「ウ、エツ、何?!」



デートと言えばここ・・・だと思いうスポット一位のカラオケボックス。その一室では人知れず、今を時めくアイドルのミニライブが行われている! って、なんか夢がある。

「ほっ。」

「ほらほらもつともつと乗つてよ!」

「ぶつ続けで10曲も歌つてて、辛くない?」

「へーきへーき! ライブで鍛えてるから!」

「すごい、人気だよな。ミカ。」

「えっへへー? すごいでしょ!」

「うん、ミカはすごいよ。」

「ちよつ、どうしたの急に?」

てへへ、とちよつと照れたように頬をかく仕草がまたかわいい。

「ミカ、すごい努力してるでしょ。アイドル活動も、怪獣娘としても。がんばってるミカ、とても輝いて見えるよ。」

「うん、大変なこともあるけど、楽しいし！GIRLSに入ってから、色んな子たちと出会えたし。」

「僕には・・・そんなに前向きになれないな。不安な事いっぱい・・・ちよつとだけ、ちよつとだけね。ミカのこと羨ましいなって思ってたんだ。ミカならなんだって出来ちやいそうだって、そんな気がするから。」

「そんなことないよ、私まだレッドちゃんに勝ててないし。いっぱい努力してるつもりだけど。」

「それでも、ミカならいつか越えられる。そう思うんだ。」

「ありがと、シンちゃん。」

胸の中を色々な感情が渦巻いて、何を言えいいのかわからない。

「それで、シンちゃんの調子はどうなの？あれから。」

「僕は全然、からつきしダメだ。バディライド出来なきや、結局僕はただの人間なんだ。」

「そんなに気に病むことなんてないじゃない、シンちゃんはシンちゃんだよ。」

優しく微笑んでくれたその顔が、今の僕には辛かった。そして今わかった。なんでこんなにモヤモヤしているのか。

「だってこのまま、なにも出来なかつたら・・・。」

「ミカに、愛想つかされるんじゃないかって。」

「ミカだけじゃなくて、アギさんたちにも。」

「シンちゃん・・・。」

「このバカちんがつ!!」

「ぶほっ!」

悪い子には鉄拳制裁。部屋が壊れるんじゃないかと思うが、そこはゴモたん、しっかりと手加減してくれた。

「私やアギちゃんたちが、そんな人間だと思ってたの?!」

「いや・・・そんな・・・。」

「シンちゃんのこと心配してたんだよ！私もアギちゃんもみんな！」

「うん・・・。」

「友達の事、見捨てたりするわけなんかないじゃん・・・！」

「ごめん、ミカ。」

こんなの絶対間違ってるってわかった。けど不安で仕方が無かった。その結果、目の前にいる女の子を悲しませてしまった。ダメダメだ、やっぱり僕って。

「だから、もつと私たちのことを信じて?」

「うん・・・わかった。」

「じゃ、罰としてシンちゃんもなんか歌って！振りつけ付きで！」

「えっ。」

「ほらはーやくー!」

「うひー!」

結局、時間いっぱいまで体を動かし続けることになった。けど途中からミカと一緒に歌ったりもして、楽しい時間を過ごせた。やっぱりミカはすごいって思った。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「あーたーのしかったー!」

「つかれた・・・。」

すっかり暗くなってしまった。時間が過ぎるのが早いと思えるってことは、それだけ楽しかったってことだ。

「今日は、ありがとね。誘ってくれて。」

「ううん、僕の方こそありがとう。ちよつとスッキリしたよ。」

「そりゃどーも。」

ニカツと笑って応えてくれた。夜なのに眩しい。

「そういえばひとつ、聞きたいことがあるんだけど。」

「なーに？」

「ミカが頑張れる理由、なんだろうって。」

「私が頑張る理由か……。」

うーんとちよつと考えると、スラスラと言いつつ切った。

「私は、みんなを笑顔にしたいから。大怪獣フアイトでも、アイドルでも。それになにより、『ゴモラ』のことを好きになって欲しいから！」

まっすぐ未来のビジョンを見据えて、より一層輝いて見えた。この都会の夜のネオンにも負けないほど強く瞬く、星のように。

地球の夜空では小さな6等星も、何万光年と離れた場所では太陽よりも強く輝いてい



る。ミカが、どんな思いでこの言葉を紡いでいたのか、僕はまだ知る由もなかった。

「この情報は・・・たしかなものなんですか？」

「そのツテの、確かな情報よ。信憑性は高いわ。」

「もし本当だったとしたら・・・。」

「これ以上、シンシンを怪獣娘と関わらせるのは危険ですね・・・。」

「人類にも、怪獣娘にとっても危険な存在よ。アレは。」

## 雨がやんだら

その日は朝から雨だった。もう何日も太陽を見ていない気がするが、昼間だというのに夕闇のように一段と暗かった。

「暴走？」

「そう。怪獣娘は心に孔が開くと、怪獣に心を支配されてしまうんだ。」

「怪獣娘が、怪獣になっちゃうのか。」

「そう、ソウルライザーはそうならなかったためのデバイスなんだ。」

「成程なあ。」

今日はシンジとアギさんと2人で、GIRLSに呼び出しをくらった。待たされている間に、まだまだ足りない知識を補ってもらっている。

「でもアギさんたち、優しいからそんなイメージわからないな。暴走なんて。」

「そうとも言えないんだけどね・・・。」

「?。」

「なんでもない、それにしても遅いね。」

話題を逸らすようにドアの方を見やるアギさん。シンジは顔に?を浮かべる。何か変なことを言ったのだろうか、と。

シンジの心で夢中になっているのは、幼馴染の黒田ミカツキのことだ。ずっと小さい頃、人生の中で見てみればほんのわずかな時間ではあるが、たしかにあった記憶のひとかから。それを無数の人々が行きかうコンクリートジャングルの中で拾い上げられたのは、奇跡と言ってもいいだろう。まあむしろ拾い上げられたというべきなんだろうけど。

「幸せだな・・・。」

「なに?。」

「いやなんでもない。」

思わず声に出してしまっていた。聞かれたら恥ずかしいが、それは事実だった。ミカ

と再会してから、何もかもが変わった。とにかく、とても楽しいのだ。

今ある幸せは、ミカがくれた。僕は、ミカになにが出来たろうか？それが今、シンジの悩ませていることであつた。

これ以上他人の心に踏み込み夢ということは、それ相応の覚悟を強いられる。自分にそんな甲斐性があるのか？そこが目下の不安要素である。そして、そこばかりに目が行つて、もっと大きな穴に目が行かない。

「お待たせですう。2人とも、今日の気分はどうですかあ？」

「良くも悪くも、いつも通りです。」

「天気も悪いよ。」

「いつも通り、ですね。」

ピグモンさんは今日も可愛い。しかし今日は、いつも快晴のようにさんと明るいピグモンさんも少しだけ暗かった。否、真剣な表情だった。

「突然ですが、シンシン。あなたは、自分のお父さんの所在を知っていますか？」

「父の？いえ、知らないです。海外を転々としているとは聞いていましたが。」

「フリドニア、だっけ？」

「そのフリドニアが、最後に分かっている国です。他には何も。」

「そうですか、やはり……。では次に、あなたのお父さんの研究内容を知っていますか？」

「チヨーさんが言うには、怪獣の研究をしていたとか。バディライザーもきつと、その産物なんだと思います。詳しい事はわからないですけど。」

「そう……ですか。」

一呼吸おいて、再びピグモンさんは切り出してきた。

「シンジさん、あなたは本当に、お父さんのことを知らないんですか？」

シンジは、少し答えることに息詰まった。自分が今質問されている内容ではなく、意図がわからなかった。アギラは事の成り行きを見ているしかなかった。

「知りません、全く。父の事で、何かあったんですか？」

「……」

表情を落とし、少し考えたように瞼を閉じてから、まっすぐシンジの眼を見据え、はっきりとした声で言った。

「シンジさん、あなたのお父さんは、テロリストに加担していた可能性があります。」

なに？無意識にシンジは口走った。その声は暗雲立ち込める空が放つ稲光にかき消され、誰の気にも留めなかった。

「バディライザーのことを、ひいては開発者であるあなたのお父さんについて、色々調べた結果、その可能性が浮き彫りとなってきました。」

「そのテロ組織『GSTE』は、怪獣娘を操り、暴走させて社会に混乱を招こうとする集団でした。」

「およそ5か月前、G S T Eの活動拠点とされる国家『フリドニア共和国』は内乱で消滅し、その動乱の最中に組織そのものも壊滅したとされています。」

パツパツとスライドが表示され、ピグモンさんからかなりわかりやすい説明を口頭でも行われている。肝心のシンジの頭にそれらの情報は一切入ってこないが。

「ちよつ、ちよつと待って。」

つまり『やーいお前の父ちゃんテロリスト』ということである。テロリストと言っても全身緑色で、手に刀を持って、頭にウ○コを乗っているようなやつのことではない。

「はあ……。」

「シンジさん……。」

「いや、大丈夫。どうせろくでもない人間だろうってわかってたから。それで、父は具体的にどんなことを？」

「・・・この手の組織は、怪獣娘の誘拐、それも未覚醒の状態の少女たちを拉致し、洗脳あるいは人体実験が定石です。」

「誘拐・・・。」

どんなに恐ろしい事やっていたのか。聞くだけでも嫌だし、それが事実であろうということがなお嫌だった。

「じゃあ・・・コレは？コレは一体、なんなの？」

「おそらく、それらの研究の末に作り出された、怪獣娘をコントロールする装置。そのプロトタイプです。」

手のひらに収まるぐらいの、ほんのちつぽけな発明が、多くの人々の運命を歪めさせ、そして狂わせていく。

「事実、先日のアギアギの急激なパワーアップ現象は、暴走に近い状態でもあったようなのです。」

「暴走・・・。」



「意図的に暴走させる仕組み、つてことか……。」

先ほど、暴走の事について聞いていたのでぞつとした。なにより、知らぬ間にその事態に片足突っ込んでいたアギさんの心情も穏やかではないだろう。

あまりの事実には、シンジは顔を覆った。血の気が引いていくのを感じた。

「シンジさん?!」「シンシン!」

「大丈夫……大丈夫……。」

ふっと、意識を失いかけて椅子から転げ落ちる。衝撃で机に乗っていたバディライザーも高い音を鳴らしながら、シンジの顔の前に落ちてきた。

目の前にあるこれが憎らしい。今、この場で、破壊してしまいたい衝動にすら駆られた。

「僕は……僕はどうしたらいい?」

バディライザーを拾い上げて、誰に言ったわけでもなく、呟いた。

「それは、シンジさんが決めてください。どうするかも、シンジさんの自由です。」

ああ、この人はこんなに険しい表情も出来るんだな。まあそれはそれとして。

『自由』と言う言葉は、簡単に口にできるほど自由なものでもない。押すか引くか、壊すのか守るのか、どの選択をとるのか自分で決めていいのが『自由』だ。だが、全ての選択には『責任』が伴う。

ちらり、と視線を隣に移してみる。不安げな表情の寝ぼけ眼がこちらを見返していた。

今の僕には、何ができる？この機械を、手足を動かすように扱えるわけでもない。怪獣娘たちを暴走させる危険性を孕んでいるのなら、なおのことだ。

答えは出ていた、話を聞いた時点で既に。

ゆつくりと、歩みを前に進めていくシンジを、ただただアギラは見ているしか出来なかった。

「……これを、預かっていてください。」

「……いいん、ですネ？」

「僕より……うまく『扱う』ために、好きにしてください。」

「きつと、こいつには、僕の想像も付かないような、すごく大きな力があります。いいようにも、悪いようにも出来る、そんな力が。……僕には、無理だから。」

哀しみ、怒り、失意、様々な感情の言葉を綴って、シンジはとぼとぼ歩いて部屋を後にした。

「待って、シンジさん！」

「行かせてやれ。」

「レッドキングさん……。」

隣の部屋で聞いていたのか、いつの間にかレッドキングさんがそこにいた。

「今のアイツに必要なのは、一人で考える時間だろう。」

「ずっと、いたんですか。」

「ああ、もしもの時のためにな。……よく耐えられたな、ピグモン。」

バディライザーとカードホルダーを託されたピグモンをそつと撫でてやる。アギラが見てみれば、ピグモンは頬を紅潮させ、目に涙を浮かべていた。

「よくこんな辛い仕事を引き受けたな、大したもんだぜ。自分にも責任の一端があるつてさ。」

「ふえええ……雷怖いですう……。」

「そつちかよ!」

(ピグモンさん、天然だ。)



「頭痛い……。」

そのような夢を見るのは、決まって風邪をひいたときだ。どうやら昨日の雨に打たれすぎたらしい。家に帰ってきてからの記憶がない。

「お目覚めですか、シンジさま。朝食はいかがでしたでしょうか？」

「……食欲ないや。」

「温かいスープなどはいかがででしょうか？」

「いらない……。」

そんな気分でもない。もうひと眠りしようと布団を被ると、黙ってチョーさんは出て行った。

（夢なんか見たくないな……。）

今の自分には、なにかもから逃げ出して、惰眠を食うことしか出来ない。どうにも

ならない、とも思いながら再び眠りに落ちる。せめて今日ぐらいはそつとしておいてほしい。明日には繋がらないだろうけども。

「こんにちはー！シンちゃんあーそーぼー！」

ドンドンドン！とけたたましく誰かが玄関を叩く音で目が覚めた。昼過ぎの事であった。

誰？というのは愚問だ。そんな呼び方をするのはこの世に一人しかおるまい。

（会いたくないな……。）

放っておけば気を利かせたチョーさんが対応してくれるだろうと思い、無視してもう一度目を閉じる。案の定、ミカの声はしばらくして聞こえなくなった。

やれやれと思ったその矢先に窓の外から声がある。

「シンちゃん！腹を割って話そう！」

腹よりも先に頭が割れそうになった。まあこうなるわなどは予想していた。頭痛もそうだが眩暈もしてきた。

「おつはよーシンちゃん！元気い？」

「・・・最悪。」

まだ雨降ってるのに、傘もささずに窓の外の木の枝からぶら下がっている幼馴染を見た。いつもと変わらぬ笑顔がそこにあつて、知らない間にほんの少しだけ安堵していた。

「シンちゃん、今日来なかったね。」

「GIRLSは風邪で休んじやいけないの？」

「だからって届け出もないのはいけないよお？」

「はあ・・・。もうGIRLSには関われないんだよ。」

「・・・なんで？」



「それは……。」

言おうとして、ちよつと戸惑った。本当の事を言うべきか言うまいか。いつそ嫌われってしまった方が、ミカにも迷惑をかけないんじゃないだろうか。そんな考えが脳を巡って口から出そうになった時、先に相手から切り出してきた。

「聞いたよ、全部。アギちゃんやレッドちゃんから。」

「聞いてたのに、わざわざ来たの？」

「シンちゃんの口から聞きたかったから。シンちゃん、今嘔吐こうとしたでしょ。」

「それって超能力？」

「ううん、幼馴染の勘、かな。」

てっへへと舌を出して見せる。

「お父さんのことがどうか、バディライザーがどうか、関係ないよ。シンちゃんはシンちゃんだって。」

「……ミカなら、そう言うと思った。」

「ホント？ 私たちで心伝心だね！」

「なら、僕の辛さがわかる？ たとえ関係ないんだとしても、それが父なんだって宿命が。」

あえて、意地悪な事を言ってみた。心がささくれまわってつい出てしまった。心中でしまったと思ったが、もう遅い。吐いた唾は呑めぬ。

「……ちよつとだけなら、わかるよ。どうしようもない、宿命って。」

「……。」

「ボクも同じだったから。」

「え？」

「……なんで自分が、とか。自分が何者なのか、とか。そんな事ばかり考えてた時期が、ボクにもあつたから。ずっと、『答え』が欲しかった。」

「……。」

「けど、その先の『自分が何をやりたいか』って、その答えを自分で出したんだ。大きな声で。その時、今の私が生まれたの。」

「自分が何を、やりたいか……。」

「その時まで、私たちは待つてるから。それだけ。風邪、早く治してね！またね！」  
「うん、また……。」

バイバイ、と手を振って木から跳び移って行って、窓からはすぐに見えなくなった。今のシンジには見送るしか出来ない。

「寝るか……。」

と、再びベッドで横になろうとした時、テーブルの上に置いてある物体に気が付いた。栄養剤とスポーツドリンクだ。チヨーさんが用意していたのだろう。とりあえずそれを口に放り込んで眠った。

瞼の裏には、先ほどのミカの顔が写っていた。あの顔は、懐かしそうな、寂しそうな、複雑な感情がこもっているようだった。

（何がしたいか、か……。）

答えは既に持っている。その言葉を反芻して、今はただ眠る。

「・・・あの日も、雨が降っていた。どちらへ転ぶかはキミ次第だよ、濱堀シンジ君。」  
青い傘を差した人影が、傘も差さずに走るゴモラの後ろ姿を見送りながら呟く。明日には雨も上がっていると願って。

## 私とボクの名前

「はやくいこーミカちゃん！」

「まってよシンちゃん！」

その日はたしか晴れていた。天気の良い日は布団を干して、子供は外で走り回る。そんなごくごくありふれた、普通の人間の日常だった。

ずっと忘れていた、僕とミカとの遠い記憶。あの頃はたしか、僕の方がミカを引っ張っていた。毎日大人しいミカを泥だらけにしたり、泥だらけにされたりして遊んだものだった。

その日が来るまでは。

「ミカちゃん！おいてくよー！」

「まってまってー！」

ほんの僅かな悪戯心だった。いつもやってることだった。僕だけ先に走って行って、後からゆっくり来るミカのことを座りながら待っている。それが習慣だった。

「シンちゃん．．．きやつ!？」

「ミカちゃん?!」

人気がない道に出たその時、一台の車が僕たちの間に割って入った。ドアが開いて、数人の大人たちがミカを捕えた。

「!!待って!!!」

僕は必死で追いかけた。けれど、子供の足で自動車に勝てるわけもなく、すぐに曲がり角で見失ってしまった。

「ミカちゃん!ミカちゃん!!」



一匹の『怪獣』であつた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

いつからだつたろうか。どこにいても、どんなときでも、子供の泣き声に反応してしまふ。なにかをしてあげたいという衝動にも駆られるが、自分にどうしろと言うのだろうか。誰かが助けを求めてる、どこかで誰かが泣いている。そう思うと走り出さずにはられない。

「答えは・・・既に持っている。」

じつと手を見る。今は何も握ってはいないけど、確かに一昨日まではあつた。

「答えは、既に持っている・・・！」

懐かしい夢から覚めた時、風邪は治っていた。相変わらず空は曇っているが、気にしない。服を着替え、身支度をしていた時、携帯が鳴った。



「ピグモンさん？もしもし。」

『シンシン、今大丈夫ですか？』

「元気澆刺、どこへでも行けますが？」

『そうですか・・・シャドウが現れて、ゴモゴモやアギアギが出動しました！』

突然だ、悪いことは何もかも。

でも、いいことだって突然なはずだ。

「ピグモンさん、すぐに会えますか？」

『・・・いつでも待ってますよ、ピグモンも、ゴモゴモも、みんな！』

「・・・はい！」

決断は済ませた、あとは実行するだけだ。

「お目覚めですか、シンジさま。」

「うん、行ってくる。」

「その前に、温かいスープはいかがですか？」

キュウとお腹が鳴った。そういえば昨日からロクなものを食べていなかったのを思い出した。

「軽いのを何か、ちようだい。」

「かしこまりました。」

元気が出る温かいスープと、ビタミンたっぷりのサンドイッチと、デザートのリンドを貰って家を飛び出した。まず目指すは、GIRLS本部だ！

「ハア・・・ハア・・・横っ腹痛い・・・。」

豪快に食べて走り出せばそうもなるが、今は我慢する。自分でも、こんなに早く走れるんだと驚きながら、目当ての建物に駆け込んだ。そしてエントランスのすぐのところ、ピグモンさんはいつもの笑顔で立っていてくれた。

「やっとなついた・・・ピグモンさん！」

「はい、なんですか？」

「バディライザーを、貸してください！」

「どうして、ですか？」

答えは一つ。

『僕がやりたいから』、です！」

自分でも驚くほどの大きな声が出た。

「シンシン、元気元気ですね！元気があればなんでもできます！」

「なんだってしてみせます。」

「はい、どーぞ、です☆」

一昨日渡した時と寸分変わらない、バディライザーを手渡された。シンジはそれを懐

かしむように撫でる。

「また何か調査して、わかったことかありますか？」

「いえ、調査もしてませんよ。っていうか、誰にも渡してません。」

「? どうして？」

「だって、シンシンから『ピグモン』に預けられたものですからー☆」

実際、本当にGIRLSの技術部へと預けられていたならば、昨日の今日でシンジの手元に戻ることはなかっただろう。

「その・・・いいんですか? こんなことしてて? 僕が言うのもなんだけど。」

「何が悪いんですか? ピグモンはただ、『友達』から大事なものを預かっていて、それを今返しただけですよ☆」

ピグモンさん、マジ天使。

「ピグモンさん、ミカは、ゴモラはどこに?」

「練馬です！」

「ちよつと遠いな……。」

「人間の足じゃあ、駆けつけた頃にはもう終わってるかもしれないねえ。」

それはそれでいい、と言うか、その方が危険が少なくていいと思うけど、

「今すぐ会いたいんだ！遠くつても行くぞ！」

「れっつごー、です！」

と言うより、今日を逃したらもうチャンスはないと思つた。何が理由かとか、そんなものはないけど、本能的にキャッチした。『今日』は出来る気がする。

本部の玄関を出て、いざ走り出そうとした時、蒼いバイクが停まっているのが目に入った。それに跨っていたのは……。

「ベムラー、さん？」

「覚悟、決めたの？」

「・・・はい！」

真つ直ぐ目を見て、そう答えた。ベムラーさんは納得したように頷くと、後ろを指さした。

「乗せてくれるんですか？」

「じゃあ、ピグモンも乗りまーす。」

「3人乗りはマズいんじゃないかな？道交法的に。」

「問題ない。」

手元のスイッチを弄るとガチャガチャと音を立ててバイクが変形した。

「さあ、テイクオフだ！」

「えっ、飛ぶの？」

「飛びます飛びます☆」

ちよつと待つてと言う暇もなく、マシンは青い流星となってビルの間を駆け抜けて

いった。なお、シンジはこの前のタワーの事件以来、高いところが苦手になっていた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

道路がひび割れ、ビルは瓦礫の山と化す。このような光景も、この世界では珍しくもない。街が危ない、火が迫る。

「ほわたっ！」

「ていやー。」

2人の怪獣娘が、次々と現れるシャドウの群れを蹴散らしていく。一方は素早いツノのラツシユで、もう一方は強靱な尻尾の一撃で。

「結構倒したね、大丈夫アギちゃん？」

「平気、けど今回多いね。」

「また巢がある。パターンかな？そっちはエレちゃん達を信じよう。」

「うん、となるとそろそろ……。」

ドカーン！と大きな音と地響きを伴って、道路を割って巨大な姿が出てきた。

「もはや様式美だね。アギちゃん、ちっちゃいやつらヨロシク。」

「ゴモたん、一人で大丈夫？」

「へーきへーき！」

「シンちゃんにゴモたんが活躍するところ、見せてあげたいからね！」

（・・ω・）bグツと親指を立てて見せるゴモラを、アギラは軽く笑みで見送る。

（ボクは、ボクに出来ることをする・・・。）

左手で近くにいたシャドウを吹き飛ばす。

（今自分に出来ることに、命を懸けて。）



ツノで正面のシャドウをなぎ倒す。

(だから信じてる、『ボクと同じ』、シンジさんを。)

両手で掴んだシャドウを振り回し、周りの奴らを巻き込んで投げ飛ばす。

飛んで行ったシャドウは、巨大な流れ弾を喰らって消滅した。シャドウビーストだ！

「かったいねー、おたく。」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

「私の尻尾もダメ、ツメもダメってなると、あとはアレしか……。」

古代怪獣ゴモラの、隠された能力。本来は地中を削掘するための能力を、攻撃手段へと転化させた技。まさに、奥の手なのだ。

その技を放つ隙を伺う。敵は強靱な手足と、太い尻尾を武器にする、ゴモラと同じスタンダードな『怪獣』のタイプだ。

(そうだね、キックのあとは尻尾使いたくなるよね!!)

だからこそ、どう動いてくるかをゴモラにも察知できる。

「どん、どん、どーんの、はい、今！」

尻尾でうまくバランスをとりながら、空中で一回転して着地、そして横に滑りながら向きを合わせつつ、ツノに力を溜める。

タイミングよし！角度よし！狙いよし！パワー充填完了！

「『超振動波』！」

そう叫んだ瞬間！ゴモラの三本のツノから稲妻のような熱線が放たれた！



「ゴモたんーん！」

とうとう超振動波のすべてを吸収し終えたシャドウビーストは、嘲笑うように吠える  
と、纏めてお返しとばかりに猛烈な火炎を吐いてきた。体力を使い果たしたゴモラは、  
成すすべなく炎に飲み込まれてしまった！

「・・・ぐっ・・・あ・・・。」

「ゴモたんーん！」

体から煙を漂わせながら、ゴモラは力なく倒れた。援護に入ろうと、アギラは手近な  
ところにあつた車を投げて、シャドウビーストの気を引いた。

(応援が来るまで、ボクが頑張らないと・・・！)

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

寝ぼけ眼に闘志を滾らせ、アギラは構える。次はお前の番だと言わんばかりに、シャ

ドウビーストは吠え、轟く叫びが無人のビル街に木霊する。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

遠くに雄叫びが聞こえる。すぐ間近で起こっていることが、ずっとずっと遠い世界のように思えた。

(ボクは・・・やられちゃったのか・・・。)

体が鉛のように重いのは、ダメージのせいだけではない。今まで無敵を誇った超振動波を破られたショックもある。けれどそれ以上に辛かったのが、他ならぬ幼馴染のことであった。

(また・・・嫌われちゃったかな・・・。)

シンジとの関係が再び始まったあの日あの時、ゴモラはとても嬉しかった。幼馴染の友達として、もう一度やり直せると思ったから。自分の手で壊してしまった、あの思い

出の日々を。

もしも自分が怪獣娘じゃない、普通の女の子だったら、怪獣とかそんなのが無い世界だったらとか、そんなことを思う時はある。

(けどそんなこと考えるのは、今じゃないね。)

痛む体を起こすため、目を開けて力を入れる。アギラが戦っているのが見える。そうだ、今の自分は大怪獣ファイトの期待のルーキーで、あの子たちの頼れる先輩なんだから。

「しっかりしなよ・・・ゴモラ・・・!」

『ミカアアアアア!!しっかりしろおおおお!!』

「ほえ?」

自分を叱咤する言葉に続いて、自分を叱咤する言葉が聞こえてきた。上から。

「シンちゃん……?」

「ピグモンもいますよお?」

「しんどい……。」

ふよふよとピンクの風船にぶら下がって、2人の人影が降りてきた。心配そうな顔をしているピグモンに対して、シンジは具合の悪そうな顔をしている。

「シンちゃん、ピグモンちゃん……ここ、危ないよ?」

「わかってます!だからピグモンたちも応援に来たんですよ!」

「ミカ、立てる?」

「へ、平気だよ、ぜんぜん……。」

「無理するな……って言っても、無理やっちゃうんだろうな。」

「わかってるじゃん、シンちゃん。」

「ううん、ミカがどんな思いで怪獣娘をやってるのか、全然わかってなかった。」

へへへと笑っちゃうミカの顔を見て、シンジは少し安心した。そして、落ち着いた口調で切り出した。

「大体のことは、ピグモンさんや、ベムラーさんに聞いたんだ。」

「ベムラーさん？」

空を見上げれば、青い流星がシャドウビーストの気を引いている。乱雑に放たれる火炎を華麗に避け、時折青い熱線が放たれる。ピグモンも、風船を飛ばしてかく乱している。

「ミカが、怪獣娘が世間に受け入れられるように努力しているのは、なにより『ゴモラ』のことを好きになって欲しいから。怪獣娘としてのゴモたんでも、その正体であるミカのことでもなく、『怪獣』のゴモラを、みんなに受け入れて欲しいからがんばってるんだって。」

「……。」

「怪獣がみんな、恐ろしいものだけじゃない、共に生きていける仲間だっていうことを、ミカはみんなに伝えたかったから……。」

「……うん、おかしい、かな？」

「そんなことない！そんなことない！！ミカはずっとずっと未来を見てたんだ。人間も



怪獣も、手を取り合って生きていけるような、そんな暖かい未来を……。」

何が言いたいんだろう、いや、色んな事を言いたい。今はただ、ミカと向かい合っていたかった。

「そんな、ミカのことを知って、やっぱり思った。自分に何ができるかとか、自分のためのにしているのかとかよりも、」

どんな風に受け止められるか、知ったこつちやない。これが、今僕が一番やりたいことだから。

「僕は、ミカと一緒にいたい！」

「ミカともう一回友達になりたい！幼馴染としてじゃなくて、仲間として！」

振出しに戻ってしまったのなら、もつと強く足を踏み出す。そうしたいという強い願い、仲間と自分自身と向き合った末に導き出した答え。

「！」

「それは・・・?!」

光と共に現れた、一枚のカード。前方に湾曲した特徴的な首、三日月のようなツノ、太くて長い尻尾。これが今の、僕たちの切り札。

たとえば拭ええぬ闇から生まれた？力だとしても、精一杯向き合い、光に染めていこう。その為に、行使することをいとわない。

「行こう、ミカ。まだ行けるだろ？」

「その前に、ひとついいかな？」

「なに？」

「名前、まだ呼んでもらってない。」

「名前？」

「そう、『私』と『ボク』の名前！知らないわけじゃないでしょ？なんせ、みんなに愛されるアイドルで、大怪獣ファイトの期待のルーキーなんだから！」

「・・・そっか！」

『グワアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

シンジが納得したその時、シャドウビーストの放った紫色の光線が、背後のビルを破壊した。その瓦礫の大きな塊が、シンジたちのところへ降ってきた。

「ゴモたん！シンジさん！」

「あぶないですよ！」

目と目合わせ叫び、そして生まれ変わる。怪獣娘とそのパートナー、そして怪獣と人間が手と手繋げる、新しいステップへ！

「バディライド！」

！  
一瞬の閃光の後、カラを破るように、振り上げた拳で瓦礫を粉碎してゴモラが現れた

「はあああああああああつハアツ！！」

炎のようなオーラが、粉塵を吹き飛ばす。アギラもピグモンも、そしてベムラーも、思

わず言葉を失った。ゴモラの姿が、普段以上に大きく見えた。

「うっオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!! イケる!!!」

「前の時よりも、強い『叫び』を感じる・・・!」

燃える、燃える、心も体も炎のように!! 『隣にいる』シンジも、その姿に圧倒される。バディライザーを持つ手がビリビリしているが、それが心地よくもある。バディライドできたということもあるが、それ以上に、こうして隣にいれることの喜びに震え、熱い鼓動をかき鳴らす。

「本当に、本当にすごいよミカ・・・!」

つと、のんびり眺めてもいられない。気にくわないものを見つけたのはシャドウビーストだ。やつつけてやったちっこい奴が、なにやらパワーアップして立ち上がってきたのだから。もう一度踏みつぶしてやる! と吠える!

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!』

アスファルトの地面が割れる、コンクリートのビルが揺れる。巨大な壁のような威圧感が迫ってくるが、2人は動じない。大きく息を吸って、真っ直ぐ見る。

「行けえ、ゴモラあああああああ!!!」

「いっくぞー!!!!」

その声を皮切りに、大決戦が始まった！自分の数十倍の体格はあろうシャドウビーストに向かって、ゴモラは突進する。

「だあつ！」

『ガアアアアアアアアアア!!!』

繰り出された拳を、ゴモラはその身一つで受け止める。しばらくギリギリとかちあつた後、大きく一步を踏み出して、その勢いで持ち上げた！

「すいっ……！」

アギラたちはその様をただひたすら見ていた。いや、見ているしか出来なかった。怪獣娘の戦闘力を明らかに超えた、『怪獣同士の戦い』。まるで、神話の光景を見ているような感覚だった。

『『押しつぶし』だあ！』

「でりゃあっ！」

倒れた相手への追撃も忘れない。尻尾で大地を蹴って空へと舞い上がり、重力加速に任せたボディプレスをかます。このまま黙ってやられるシャドウビーストでもなく、反撃をしかけるが、これはシンジの指示で危なげなくかわせた。

（意識のシンクロもしている……？）

「がんばれ♡がんばれ♡」

「まだまだあ！」

ゴモラが飛び退いた隙に慌てて立ち上がったシャドウビーストは、今度は尻尾を振り回してきた。

『『大回転打』だあ！』

「おっしやー!!」

強大な力がぶつかり合う衝撃で、空気がキンッと鳴る！打ち合いに勝ったのはゴモラだ。尻尾勝負でゴモラに敵う者はいない！

「足をもってけええ！」

「っそおい!!」

『『ゴオオオオオオオオオオ．．．!』』

そのままの勢いを維持して、シャドウビーストの足を掬う。







勝った。

「やった・・・。」

「おつ、シンちゃん大丈夫？病み上がりなのに。」

「大・・・丈夫・・・じゃないかも。ちよつとハシヤギすぎた。」

一気に貧血となって倒れ込んで、気を失った。

「空が・・・青いな・・・。」

「大丈夫？顔色青いよ？」

いつの間にか、遠くから人の声が聞こえてきたので、応援が来たんだろう。安心感と充実感に満たされて、目を瞑った。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「ん・・・。」

「おっはよ、シンちゃん。」

「もう、夕方か・・・。」

赤い光が眩しい。シンジはゴモラの膝枕で目を覚ました。

「もう大丈夫？」

「うん、ありがとう。」

「どういたしまして。」

ゆっくりと体を起こして、周囲を見回す。少し離れたところのビルが壊れているのが見えた。

「・・・夢じゃなかったんだ。」

「何が？」

「いや、夢みたいないな体験だったから。」

「もう二回目なんですよ？」

「何回やつても感動するもんだ。ミカもそうじゃない？」

「・・・そうだね、毎日色んな発見があるよ。」

「でも・・・初めての時は、怖かった。」

「・・・そっか。」

「ミカ、昔は自分のことを『ボク』って呼んでたよね。」

「うん、でも今は私の中に『もう一人』いるから。」

「『ゴモラ』か。」

「うん、もう一人の自分。」

「そのゴモラのことでも好きになって欲しい、って意味だったんだな。」

「えへへ、そのとおり。」

「あの日・・・。」

「ん？」

「いや、僕の中にあつた疑問がひとつ解けたかなって。誰かの力になれたらって、願いの理由だ。」

「それは？」

「あの日、『泣いてる』ミカのこと、ずっと助けたかったからだった。」

「シンちゃん……。」

「僕、今ミカの助けになれてるかな？」

「そんなの、いわなくてもわかってるでしょ？」

「そっか、これでいいんだ。」

「あつそうそう、もうひとつ正すべきところがある。」

「それは、なに？」

「僕が前、ミカは後ろだ。」

「は？」

「子供の頃は、僕が前でミカを引っ張って、ミカが僕の後ろをついてきてたじゃないか。認めないぞ、ミカが前なんて！」

「……ぶつ、なにそれ？」

「これからは、ミカの隣にいたいってこと。言わせんなハズカシイ。」

「いいよ、シンちゃんは特別だからね。」

他愛無い話をずっと続けていた。こうしていらられる幸せを感じていた。

「ゴモたんさん、シンジさん、そろそろ行きますよー!」

「早くしないと日が暮れちゃうよー!」

「2人とも疲れてるだろうから、無理しなくていいのに・・・。」

「大丈夫だよー!今行くー!」

「ちよつと待って、いてて体の節々が・・・。」

もう日が暮れる。そろそろみんなのところへ帰ろう。仲間たちのところへ・・・。

「いよーし!本部までランニングしよー!」

「無理だよ、足並み合わせるなんて。」

「そうですよミクさん、私だってもうクタクタですし・・・。」

「お腹もすいちゃったし。」

「おっ、じゃあ帰る前にご飯たべてこーかー!」

「先に方向に帰りましょうよ・・・。」

ミクさんは相変わらず元気だし、ウインさんは真面目だし、アギさんは寝ぼけ眼だし、なんだか、初めて会った日のことを思い出す。ただ違うのは、空がとっても綺麗だったこと。

「あつ、一番星。」

「えつどこどこ?」

「一番星は西の空、明けの明星は東の空だけど。」

「あれかな、一番大きい星。」

「ステキですね・・・。」

「へー、シンちゃん、幸せなんだね。」

「どうして?」

「一番星は、幸せな人間にしか見えないんだって!」

「・・・幸せだよ、とつても。」

「それとね、見つけたよ、僕のやりたいこと。」



「どんなのどんなの?」

「怪獣娘さんみんなと仲良くなりたい。ミカだけじゃなくて、アギさんたちも、まだまだ会ったことのない人とも、これから出会う人とも、全員と。」

「じゃあ、私はその最初の一人なんだ。」

「うん、これからもよろしくね、ゴモラ!」

「うん!」

手と手繋ぎ、進んでいく。優しく暖かい未来を掴むために…。

## 見えない絆

「すまない、待たせたかな。」

「いえ、全然。」

あの激闘から数日後、GIRLS本部のサロンで、シンジはベムラーさんと会っていた。今回は以前と違って、眉間に皺が寄るような雰囲気ではない。

「また父のことでなんやかんや聞かれるのかなーと。」

「まあ、そんなところだ。もつとも、今回は私が言う側だが。」

連日、GIRLSのお偉いさんやら好奇心旺盛そうな怪獣娘さんやらに同じような事を聞かれては、曖昧な受け答えしか用意できない現状に辟易としていたところだった。口々に答えられなくて申し訳ないという意味で。

その中で疑いの目や奇異の目に晒されることもあったが、そんな中でもミカやアギさ

ん達の存在は救いだった。

「少しフォローをしておきたかったからな。」

「フォロー？僕なにかやらかしましたか？」

「いや、君は悪くないんだ。」

既に色々やらかしてしまっているような気はするが。ベムラーさんが持つてきてくれたコーヒーズをずずずと啜って自問する。

「あ、それとも父のことはもう関わりたくないと思っっていたりは？」

「大丈夫です、もう覚悟決めましたから。」

「なら、なおさら聞いておいて欲しい。」

あくまで可能性の話なのだが・・・と小さく呟きつつ、鞆から書類を取り出して渡してきた。

「これは？」

「君のお父さんの調査結果だ。元々はGIRLSから依頼だった。」

「そのために、あの時僕と接触したってことですか。」

「そういうことだ。君に対して個人的に興味も沸いたのだけれどな。」

「えっ？」

ふふつと意味深げに笑うベムラーさんに一瞬気を取られるが、すぐに元の表情で見つめ返してきたので慌てて書類に視線を落とした。

以前ピグモンさんから説明されたことと、大体一致していた。GSTEのこと、フリドニアのこと。以前無かった情報としては、顔写真があったことだろうか。

「これが、父の顔……。」

「20年近く前の写真になるがな。それしか手に入らなかった。」

シンジはじいっとその古ぼけた写真を見つめた。なんとも、不服そうな、むすつとした不愛想な表情で写っている。言われてみれば、少し自分に似ているかもしれない。20年前となると、今の自分より少し上ぐらいの年頃だったんだろうか。

「当時は『二階堂』という名前で、若くして古生物学、生態学のスペシャリストとして大成し、学会でも注目されていたが、ある時追放された。」

「怪獣のことを研究していたから？」

「そう、怪獣を蘇らせ、操る事を可能だと発表したんだ。元々プライドが高く群れることを嫌い、浮いた存在だったこともあって、学会からは危険視された挙句追放というわけだ。」

「……むしろそんな危険人物を、野に放つほうが間違いだったんでは？」

「私もそう思う。が、当時としては『ありえない』と思われるいたんだろう。まだ『怪獣娘』の存在が明らかになる前のことだったから。」

と、当のその本人が言う。シンジは口を一字にしてページをめくった。

「それから表舞台から姿を消し、しばらく行方をくらませていた。しかしある時、そんな彼に手を差し出すものがいた。」

「それが、GSTE。」

「そう、怪獣娘の存在が明るみになり、その力を悪用しようとする者たちが現れ始め

た。その中でもGSTEは、学会を追放された天才に目を付けた。」

「そして、バディライザーは作られた・・・。」

コトツと机の上にその機械を置いた。あれから、何度か起動することに成功している。その度に入念な検査が行われているが、今のところ僕にもミカにも問題は出ていない。力はまた付いてきているが。

「ここまでがGIRLSの依頼に関する話だ、何か質問はあるかな？」

「えっと、GSTEは壊滅したんですね。たしかフリドニアごと。」

「そうだ。これも調べたところ、どうやらGSTEが原因らしい。」

「自分たちで自分たちの拠点を壊したんですか？」

「ああ、GSTEは怪獣娘たちを使って非人道的な実験を行っていたらしい。その怪獣娘の力が暴走した結果、巡り巡って全てを破壊したらしい。」

「その怪獣娘さんは？」

「それも消息不明だ。目撃情報を照らし合わせた結果、『ジラーズ』に似た怪獣である可能性が高い。」

「ジラーズ？」

えりまき怪獣 ジラース

身長：4.5m

重さ：2万トン

イギリスのネス湖に生息していた恐竜の一種。口から吐く青い熱線が武器だ。

「へー。」

「岩のような黒い体や、青い熱線が目撃されていた。しかし気になることに『えりまき』が無かったそうだが。」

怪獣図鑑を見て感嘆の声を漏らす。怪獣っていろんなのがいるんだなと。

「父もGSTIEと運命を共にしたんでしょうか？」

「いや、そうとも言い切れない。フリドニアの壊滅と、バディライザーが日本へ送られてきたタイミングはほぼ一致している。危険を察知して、いち早くバディライザーだけを君の元へと送ろうとしたのかもしれない。」

「もつとデータを集めさせるために？」

コツンコツンと指でバディライザーを叩く。せめて説明書のひとつでもつけてくれれば、こんなに苦労することもなかったのだけれど。

「で、だ。ここから先は『探偵』としての話。」

「探偵として？」

「濱堀ソウジへの、個人的な解釈意見を述べさせてもらう。キミは、父のことをどう思っている？」

「・・・最低の人間だな。誰にも彼にも迷惑ばかりかけてるし。」

「ほう？」

「僕が生まれる前に、家を出て音沙汰無し、母はいつも苦労していました。家は貧乏だし。」

「そうか・・・。」

こうして今はその理由がわかったが、マイナスがさらにマイナスになっただけである。



「濱堀博士がG S T Eに入ったのも、ちょうどその時だろう。しかしここに疑問点がある。」

「どんな？」

「当時使っていた名前だ。二階堂という名前で博士号をとり、G S T Eにも参加していた。しかし、彼の本名は『濱堀』だ。なぜ偽名を使っていたのか？そして使い続けたのか？」

「単純に身元が割れないようにするためでは？実際情報がほとんどなかったんではないか？」

「そう、『身元を割れさせなかった』。そこにひとつの『答え』があるんじゃないか？」

「つまり、どういうこと？」

ぴくり、とシンジの指と眉が動いた。

「あえて偽名を使っていたのは、君たち家族のことを隠すためだったんじゃないか？そう私は思える。」

「隠す？」

「研究に何かがあった時、君たちにも危害が及ぶ可能性を危惧していたんじゃないか。例えば人質にされたりとか。」

「自分の弱みになるから？」

「そう思うなら、最初から作らなければよかった。そのはずだろうか？」

「たしかに。」

「それに、バディライザーを君に託したということ。君の事を信じていた、と言うことなんじゃないだろうか？」

「心配してるんなら、そんなものよこすなっと思えます。」

「君に継いで欲しかったんじゃないだろうか、自分の夢を。」

「怪獣娘を使って、世界を滅ぼすことを？」

「本当にバディライザーが、怪獣娘を暴走させるだけの機械なんだろうか？ 暴走させることが目的なら『それだけでいい』はずだ。なのに、バディライザーの使用条件は……。」

「怪獣娘と、心を通わせること……。」

「そう、今使いこなすことが出来るのは君だけだろう。そんな不確かなシステムを、支配するために使うだろうか？」

「……よく、わからないです。」

「じゃあなにか？父は僕を愛していたと？」

「そうだ、とも言いきれないが、そうかもしれない。」

窓から入る日差しが、強く2人を照らしていた。その火照りに促されるように、会話もヒートアップしていた。

「さっきも言いましたが、本当に愛していたならこんな危険なものを送ってくるのはおかしいんじゃないですか？」

「さっきも言ったが、自分の後を継いでも欲しかったんだらう。両方だ、その矛盾する両方なんだ。」

「危険に巻き込みたくないけれど、継いで欲しい……。」

「だから、君に手紙を出したんだ。『遺産を継いで欲しい』という手紙を。そして、君は来た。」

あの時の手紙をは、今も上着の内ポケットに入っている。頭を抱えなくなった。

「……でもそれも、ベムラーさんが言ってる事全部、想像の話ですよね？」

「そうだ、あくまで私の頭の中の空論だ。可能性があるというだけだ。」

「いや、きつとそれが最大限、最善の可能性なんでしょうね。」

「事実は小説よりも奇なりとも言う、もつと斜め上の真実かもしれないし、もつともつと最悪の真実かもしれない。けれど、空想する分にはタダだ。どう『思っけていても』いい。」

「そこになんの意味が？」

「ない。ただ、どう思っけていてもいいなら、少しでもいい方を選んでいたいだろう？箱を開けてみるまでどっちが正しいかはわからないが、どっちであつてほしいか願うことは出来る。ただの人生の先輩としてのアドバイスだ。」

泣いて暮らすも一生、笑つて暮らすも一生、か。

「話はこれだけ。付き合わせて悪かったな。」

「いえ、少し気持ちが悪くなりました。」

「ならよかった。困ったことがあれば相談しに来ると良い。力になる。」

「はい、ありがとうございます。」

「それと、これをあげよう。」

「これは？」

ピンク色のこの駄菓子は・・・すもも漬け？

「おいしいぞ。」

「はあ・・・？」

「ではな、アリーヴェエデルチ。」

そうして、ベムラーさんは去って行った。

「・・・どれを選ぶかは、自分で決められる。」

べりつと封を開けて口に入れる。この後は、GIRLSのお偉いさんの教授に会う約

束がある。見習いのバイトじゃなく、本格的にGIRLSで働くための面接のようなものだ。

「どんな圧迫面接でも負けるつもりは無いけど!」

食べ終わったゴミを捨てると、よつしと気合を入れる。空が眩しい。雨男が嘘のようだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ネタの解説ほど野暮なものもないよね。」

「何よ突然。」

「いやさ、せっかくボケたのに笑ってもらえなくて、笑いどころを説明しなきゃいけないのってミジメだね、お笑い芸人として。」

「ミカお笑い芸人だったっけ?」

GIRLSの仮身分証や『ニコニコ生命保険』のパンフの入ったカバンを脇に置いて、

鉄板越しにミカと向かい合っている。他人の金で焼き肉が喰いたい！ということ、今日はミカに奢ってもらうこととなった。2人でGIRLSの合格祝いと言ったところだ。アギさんたちからも誘われたので、明日もみんなでやる。

「それでどんな話したの？」

「シフトの話と、保険の話と、ちよつと世間話だけ。」

「私も大概そうだったかなー、意気込みとか聞かれた？」

「うん、そんなところ。」

金網の上でジュウジュウと音を立て、脂と香ばしい薫りを出す様はとてもおいしそうだ。何故客観的な物言いなのかと言うと、シンジが焼いた端から、ミカが食べていってからの。

「シンちゃんどんどん食べなよ。せつかくの私のおごりなんだからさー。」

「そういつてミカ、さつきは野菜しか焼いてなかったじゃん。肉焼こうよ。」

「こういうのには順番があるんだって！」

好きなものを好きな順番で食べて何がいけないというのか。

「シンちゃんは調査課に入るのかな？」

「うん、新しい人を見つけて、仲良くなるのが仕事かな。結構余裕があるから、他のこの応援にも行くだろうけど、」

「そっか、じゃあまた私のマネージャーやれるんだね！」

「うん、いいよ。ミカの頼みならなんでも。」

「そこは一回でも『えー？』とか言うところじゃないかなあ？ノリ的に。」

「僕がミカのお願いが聞けないと思う？」

「うっ、そんなハツキリ言われるとハズカシイ…。シンちゃん、この短期間でちよつと成長しすぎじゃないかな？」

「それもミカのおかげだよ。」

「はキュン・・・♡」

ミカの箸が止まった。今がチャンスだ、食べごろのお肉をかつさらえ。

「ま、まあこれからのシンちゃんの成長に期待だね。わかってる？これからが大変な



んだよ?」

「ん?たとえば?」

「体を鍛えなきやいけないし、知識も付けなきやいけないし、あとコミユカも重要になつてくるよ!」

「ミカは全部揃つてるね。」

「いやいや、私だつてまだまだだよ。弛まぬ向上心こそが、日々の未来を作っていくんだよ!」

「ほへー、まあなんとかなるっしょ。」

「よーし気分がノツてきたー!もう一軒いこー!」

「え、僕もうお腹いっぱいだよ。」

「じゃじゃ、カラオケ行こ!カロリー消費できるし体力もつくよ!」

「明日も早いんじゃないかな?」

「明日からは、またみんなと一緒にだから・・・今日だけは、離したくないかな。ダメ、かな?」

ちよつとうるんだ瞳で、いつもと違う雰囲気で、イイ感じに火照った頬を染めて、薄

暗い道でそんなこと言われちゃったら、断れません。

「・・・ちよつとだけね。」

「やったー！シンちゃん大好きー！」

どうやら、シンジはミカには一生勝てない性を背負っているようだ。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「ミクさんは切り込みつつ前進を！」

「ほいさー！」

「アギさんはミクさんの援護を！」

「おっけー！」

「ウインさんは撃ち漏らしの迎撃を！」

「はい！」

次の日、お祝いパーティーの最中に警報が鳴った。シャドウ出現の報せだ。当然これ

に駆り出される一行は、2手に別れてシャドウの巣食うビルへと進軍する。その一方、いつもの3人ことアギラ、ミクラス、ウィンダムに同行することとなったシンジは、遠くから指示を飛ばす任に着いた。

「ミクさん！上からも来てます！一旦ストロップ！」

「へーきへーき！つてわあ！」

「ミクさん！」

「シンジさん！」

「うん！バディライド！」

スパーク！アギラさん、パワーアップ！

「ヒューツ！すつごいねー！あつという間にブーツと片づけちゃったよ！」

「この調子で、先を急ぎましょう！」

「うん、一気に決めよう！」

「ちよつ、置いてかないで……。僕、足はそんなに速くなってないから。」

RPGで例えるなら、ミクラスは壁役にもなる剣士、アギラはアタッカーの格闘家、ウインダムは遠距離攻撃の弓使い、シンジはブースト役の魔法使いだろうか。ならば攻撃魔法なども覚えておきたい。

「ついた!」

「おつ、アタシたちが一番じゃない? まだ先輩たち来てないよ!」

「競争じゃないんですから、急ぐべきではありませんけれど!」

「ちよつと・・・待って・・・」

道中現れるシャドウをちぎっては投げちぎっては投げの快進撃で歩を進め、わずか2分で目的地まで到達出来た。辺りには不穏な空気が立ち込めており、今にも何かが飛び出してくさそうだ。

「心臓が飛び出しそう・・・」

「大丈夫ですかシンジさん?」

「皆元気よすぎ・・・」

「アタシたち元気がとりえだからね!」

これだけでヘタレる自分が情けないと思う反面、女の子に体力で負けたくないとは常々思う。彼女たちは強い怪獣娘だけど、本質は普通の女の子だ、と言う前提があるから。

「つと、そろそろ来るんじゃない？ボス。」

「そうだね、今までのパターンから察するに。」

「私たちだけで大丈夫でしょうか？」

「へーきへーき！今のアギちゃんなら何も怖くない！」

「フラグやめて！」

その言葉を皮切りに、待っていたかのようにビルの壁を破壊して巨大なシャドウが姿を現した！

「よっしゃー！いつけーアギちゃん！」

「ボク任せ？」

まずアギラが先手をしかけ、隙をついて2人が攻撃する。シミュレーション通りだ。この戦法は幅広く応用がきいて、シミュレーションでも実用性が高かった。

そう、シミュレーション上では。

「いづくぞ・・・あれ？」

「どうしたの？」

「なんか・・・力が・・・。」

「あれ？あれれ？」

「どうしたんですか？」

「バディライザーが・・・待機状態に戻っちゃった。」

『グルルルルル・・・』

「まさか、」

「時間制限が、」

「あつたの!？」

「知らなかった……。」

『ギヤアアアアアアアアアアアン!!!』

「やっば。」

不測の事態だ。まわりにはちっこいシャドウもウヨウヨ湧いてくるし、目の前にはでつかいのもいる。もしかしなくても孤立無援のやべー状態だ。

「シンジさーん！もう一回バディライドできないのー?!」

「やってるけど反応しない!」

「どどどどどうするんですか!いくらなんでもこの数はまずいですよ!」

「一旦退避しよ……うっ……。」

「アギちゃん!」

一気に体力を失ったアギラが、膝をついてしまった。

「アギさん！」

「シンジさん危ないよ！」

自分のせいでこうなったんだ、せめてこれぐらい、命張らさせて欲しい。

「シンジさん、来ちゃダメ……。」

「うおおおおおおおおお!!」

無防備な彼女の、命の盾ぐらいにはなれる！せまる炎に背を差し出し、歯を食いしばって覚悟する。

「……熱くない？」

「これは……！」

いつまでたつても痛みを感じないので、ゆっくりと振り返ってみれば、そこには透明な壁があつて、僕たちを守ってくれていた。



「バリアー？」

「ゼットンさんだ！」

気が付くと、周囲に異変は起こっていた。小さなシャドウたちが次々に倒れていく。速すぎて目で追えない何かが、片っ端から叩きのめしているようだった。

「あつ、あそこ！」

「どこ？」

「上だよ上！」

ようやくシンジはその姿を捉えた。黒いボディのクールビューティ、噂に聞いていた最強の怪獣娘、ゼットンさん。

「あれが……。」

新たな標的を見つけた威嚇か、それとも仲間たちを倒されて怒ったのか、それともビビったのか、吠えるシャドウビースト。地面も空気も揺らさんその咆哮に、普段の僕た

ちなら身じろいでいただろう。しかし、今は全然そんなことはなかった。

なにせ、既に必殺技の体勢に入ったゼットンさんがいるんだから。

「一兆度の炎、体感してみる？」

『ギャアアアアアアアアン!!!』

哀れ爆殺。シャドウビーストは見せ場の一つもなく退散してしまった。

「ゼットンさん……。」

「アギラ、平気？」

「はい、ありがとうございます。」

「そう……。」

アギラの無事を確認して、ゼットンさんはワープで去って行った。少し微笑んでいたようだった。

「行っちゃった……。」

「アギちゃん、シンジさん、大丈夫？」

「うん。」

「あれがゼットンさんなんだね……。強いなあ……。」

「うん、ボクもまだまだだね。きつとバディライドしても、まだゼットンさんに敵わないと思う。」

「アギさんなら、いつかなれると思うよ。僕がいなくても。」

「そう……。かな……。」

「シーン……ちやああああああああん！」

「おわっ！」

「大丈夫だったシンちゃん？アギちゃんも平気？」

「う、うん、ゼットンさんが来てくれたから。」

「相変わらずはええなあ。」

「レッドキングさん、お疲れ様です。」

「おう、調子はどうだシンジ？」



「やーだーむーりー!!」

なんか仮面のヒーローとか5色の戦士とかが戦ってそうなどつかの採石場に、ブロロロロ〜!と鉄の獣の唸り声が響く。

現在は、レッドキングさん指導の元、その弟子のザンドリアスと共に、根性をつけるための特訓中である。

「やめてください!!レッドキングさん!!」

「泣き言を言うな!お前の涙でシャドウを倒せるか!!」

「どわー!」

あやうくジープに轢かれかけるところを飛び退いてかわせた。まだザンドリアスが逃げ続けているのを、死んだ魚のような目でぐったりとしながら見つめている。

「休憩は済んだか?じゃあ次いくぞ!」

「やめてください、今度こそ、本当に死んでしまいます。」

「いやー！ママー！」

「いよつ、やつてるねレッドちゃん！」

「ようゴモラ。」

「あつミカ助けて！」

「おい、お前もか！これじゃオレが虐めてるみたいじゃねえか！」

「やっぱり虐めてるようにしか……。」

「差し入れ持ってきたんだよ！」

ミカ他、いつもの3人が来てくれた。神の助けか、地獄に仏か。

「愛の鞭ですな先輩！」

「喰らってる方からしたら痛いだけなんだけどなあ。」

「そうそう、鞭だけじゃなくてアメもそこそこあげないとね。」

「なかなかシビアなことというじゃないかミカ。」

「よーし、じゃあここで一個アメちゃんをあげようつてことで、一発ギャグいつてみ

よー！シンちゃんが！」

「どう考えても鞭じゃないか。」

「レッドキングさんの鞭と、どっちがいい？」

「・・・正直、どっちも嫌。」

結局どっちもやらされたシンジであった。

「つてえ、わたしのことは無視い!？」

「ごめんごめん、タコ焼き食べる？」

「いただきますあす！」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「もしもし？お母さん、元気？」

「うん、元気だよ。こっちの生活にも結構慣れたし。」

「うん、うん、大丈夫だよ。友達もたくさんできたし、ミカ覚えてる？子供の頃一緒

だった。そうそう、あのミカ。」

「うん、すごい変わったよ、色々。それが一番うれしかったかな。」

「じゃあ、またかけるから。じゃあね。」

「え？大丈夫だって。うん、じゃあね。」

命の危険を感じた時、脳内をよぎったのは優しい母の顔であった。別にザンドリアスのように叫んだりこそしてないが、心の中には浮かんでいたのでも自分も同類か。ところで、戦場で恋人や女房の名前を呼ぶ時と言うのは、瀕死の兵隊が甘ったれて言う台詞だ。そうだ。

「シンジ様、コーヒーをお持ちしました。」

「ありがと、そこ置いといて。」

「先ほどの電話のお相手は、マユミ様ですか？」

「うん、久しぶりに話した。」



チヨーさんの淹れてくれたコーヒーは、温度も砂糖の量もちょうどいい。正確さを求めるならやはり機械に任せるのが一番だ。

ほうと一息吐きながら思い浮かぶのは母の事。女手一つで自分をここまで苦労して育ててくれた大切な親。

あんなに優しい人を、どうして父は置いていったのか。いや逆か、母は何故そんな父を選んだのか。と言うか、どこで出会ったのか。気が向いたら聞いてみるのもいいだろう。それよりも自分は目下勉強中。

「機械工学に、量子力学、それにまつわるエトセトラ。どれだけ覚えても足りるといことが無いよ。」

「私も微力ながらお手伝いさせていただきます。」

「頼りにしてるよ。」

GIRLS調査部がこの家と、この家に隠された研究施設に本格的に立ち入り、天井

裏から床下までひっくり返して調査を行った。

「ベッドの下まで探られなくて本当に良かったですね。」

「やめれ。」

その結果、数々の研究データが見つけられた。かつての怪獣の出現記録から割り出された、怪獣の眠りを呼び覚ます音波の周波数。怪獣を手懐けるにおい。そして、怪獣の力を利用する兵器。まるで本物の怪獣が現れることを想定していたかのような内容であった。

「少なくとも今の時代では使えないような代物ばかりだった。」

これから先そんな時代が来ないとも限らないがさておき。しかし怪獣娘さんたちのために利用できないこともない。そしてその父の研究を引き継げるのは、息子であるシンジしかないいと、自分で名乗りを上げた次第だ。

そしてそれは受け入れられ、今に至る。あとは努力を続けていくだけだ。

覚えれば誰にでも出来たことかもしれない。けれど、誰にも真似できないレベルまで高めれば、それは自分だけにしか出来ない個性となる。

「よーし、がんばるぞ．．．！」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「んにゅ．．．？朝．．．？」

いつの間に眠っていたんだろう、足が痺れて口の中が渴いている。

「朝ごはんは何かな．．．ん？」

窓の外に影を見た。まさかシャドウか？

「おつはよー！シンちゃん！」

「玄関から入れ！」

人影の、正体見たり幼馴染。

「もう10時だよー、今頃起きたの？」

「昨日も遅くまで勉強してたから……。」

「だろうね、顔に書いてあるよ？」

「何が？」

「数式。」

鏡を見ると、たしかに顔に数式が描いてあった。

「ノートに突っ伏したせいか……。」

「とりあえず、顔洗ってきたら？それまで待つてるよ。」

「待つてる？何を？」

「んもー！今日デートする約束だったでしょ？」

「……そうだっけ？」

「そうだって！ほら行った行った！」

とりあえず大人しくコーヒーでも飲んでもらおうとして、いそいそと支度をする。

「ちらっ。」

「いやんバーガー。」

用意された朝食をとって、さっそく出かける。行き先は、また映画館でいいか。

「じゃあ、行ってきます。」

「行ってくるねー。」

「はい、いつてらっしやいませ。」

ガチャつとドアを開く。眩しい光が目飛び込んでくる。

今日も、  
いい天気だ。

## 私闘!ゴモラ対ゴモラ!

「あけましておめでとう!」

「一週間ぐらい前にも聞いたよそれ?」

「お年玉ちようだい!」

「幼馴染からたかる気?」

世間は既に正月ムードから抜け出して、平常運転が始まる今日この頃。正月ボケが抜けてないのかとんでもないことを言い出したこの幼馴染は。

「突然だけどシンちゃん、戦おう!」

「なんで? 本当に突然だね。」

「いやー、お正月ってついついダラダラとかゴロゴロとかしちゃうじゃん? だから体鈍っちゃってさー、シンちゃんもそうじゃない?」

「んー、そんなことはないけど?」

さすがのシャドウもお正月は休んでいたようだったけど、僕には正月とはいっても事務仕事はあるし、日課のトレーニングだって欠かしてない。むしろ周りが動いてない分、よけいに働いている気がする。

「でもミカだって、お正月の特番とかに出てなかった？バラエティとか歌番組とか。」  
「いやー、それがそのね：お正月の料理っておいしいから、つついっ食い食べ過ぎちゃってね？もう！女の子にこんな話させるなんてシンちゃんたらー！」

「知らんがな……。」

そういえばテレビでおいしそうなの食べてたね、エビとかカニとか。それにお餅もカロリーが高い。ミカの好物の粉もんだって意外と侮れない。

「そこところ、僕は毎日代わり映えしない栄養バランスのいいものを食べてたね。」

「食べてたんじゃなくて、食べさせてもらってたんでしょ、チョーさんに。」

「……否定はしない。それで、ミカはどうしたいの？」

「だからいつちよ戦おう！今の私になら、シンちゃんも勝てるんじゃないかな？」



「要するにダイエツトがしたいんだ。」

確かに、特訓を始めてからミカとの戦績は50戦50KO負けという結果が続いている。そりゃもちろん、相手は大怪獣ファイトの期待のルーキーだし、そもそも僕は人類に毛の生えた程度の力しかない。はなっから勝負にならない相手だけど。

「まあ・・・いいかな？」

「よっしや!負けたら一発ギャグね!」

は。さりとして誘われたからには乗らないわけにはいかない。意地があんだろ。男の子に

「むしろお笑い芸人のサガじゃないかな？」

「誰がお笑い芸人だ誰が。」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

なにも丸腰で戦いに行くわけではない。

「あー、ピッチリ。」

こういう戦いの時には、対・特殊事件用スーツS・R・I（特殊反射インナー）を着込んでいく。ある程度の防護能力は保障してくれるし、夏は暑くて冬は寒い優れたものがある。GIRLS支給品の保護スーツにちよいと手を加えただけなのだが、そのちよいが重要なのだ。

「生体電流・・・良好。システムオールグリーン。」

スーツの調子を告げるバイブライザーを腰にマウントし、鏡に向かう。

「もうちよつとデザイン凝りたかったなー、仕方ないとはいえ。」

オレンジを基調とし、いくつかのラインが走っている。特に脚の縦ラインが、足を長く見せる効果を持っている。が、どうにもシンジには物足りなく感じられ、もうちよつ

とカラフルな感じにしたいらしい。

「でもそうになると性能が落ちちゃうからなあ、配分が難しい。」

「オレからしたらまだ地味すぎるぜ。もっと腕にシルバー巻くとかさ!」

「うわお!」

「オッス、調子はどうだ?」

鏡に夢中になっていたシンジは、後ろから近づいてくるレッドキングさんに気づかなかった。独り言まで聞かれてしまったのなら恥ずかしい。

「鏡の前でなにボケーっとなつ立ってんだよ?アレか?色が気になるお年頃ってか?」

「そりゃ誰でも色ぐらい気にするでしょ?服ならなおさら。レッドキングさんだって、今日の尻尾のリボンいつもと違うじゃないですか。今日のもかわいいですね。」

「かわっ!／／／ハズカしいこと言ってるじゃねえよっ!」

「たわばっ!!」

ゴングが鳴るより前にノックアウトされそうな一撃がシンジを襲う。少なくとも備え付けのベンチは粗大ゴミ行になってしまった。

「いやーそんな面と向かって言われるとハズカしいぜ嬉しいけどよ．．．／／／」

「おーいちち、それでレッドキングさんはなにここにここへ？」

「おうつ、ちよつと激励をしにな。」

「首が逆方向むきそうなほどにブン殴るのが激励？」

「悪かったって．．．。」

「んまー、なんだ。確かにお前は負け続けているのかもしれないけど、それでも何度でも挑戦するのはいい度胸してると思うぜ！」

「そりゃあ、あれだけレッドキングさんにしごかれてたら、意地でも負けたくなくなりますから。」

「嬉しい事言ってくれるじゃねえか！師匠に冥利に尽きるつてもんだ。けどなシンジ、オレの教えた戦い方にこだわる必要もねえと思うんだ。お前にはお前の勝ち筋があると思う。オレにはない戦い方ができると思う。」

「その結果、50戦50KO負けですが。」

「ハハハ、ならそれだけじゃダメだったってことさー!51回目を頑張ってこいよー!」  
「・・・ラジャー!」

レッドキングさんにグツと親指を立てて見送られ、シンジもグツとしてはにかんで答えた。

「よし・・・行くぞー!」

階段を上がつて出た先は、やはりどつかで見たような採石場のようなフィールド。あまり目にかけてたことはないが、同じような見た目の崖や廃工場や海岸もあるらしい。いつか行く事があるんだろうか。大怪獣ファイトの初期は、山奥の田んぼのそばや竹藪の敷地を借りて撮影していたと聞くんが、真相は定かではない。

「来たかい、弟ー!」

「いつから僕が弟になつたわけ?どつちかっていうとミカが妹でしょ。」

「私はむしろアギちゃんを妹にしたいけどね!」

「わかる。」

『何言つてんのふたりとも。』

少し離れた観客席に、いつもの3人やピグモンさんの姿が見えた。他にもチラホラ人影が居るのを見ると、結構ヒマしてる人が多いんだらうかと疑いたくなる。

「ところで、さっきの話覚えてる?」

「負けたら一発ギャグ、つてやつかい?」

「そ、今のうちに考えといたら?」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ、ゴモラ。」

「ほーう? いうねシンちゃん。」

「今日は、『太陽の塔』以外を見せて欲しいね!」

「させてみれば?」

まだゴングは鳴っていないというのに、火花が散っている。ここにいる二人は既に仲良しの幼馴染ではない、鎬を削り合うライバルなのだ!

「ゴモゴモもシンシンもがんばれ♡がんばれ♡」



「だあっ！」

「おっおっ？」

このまま押し切られるか？というところで、シンジは体勢を変えて下からゴモラをすくいあげた。ゴモラは大道芸のようなポーズでシンジの上に掲げられた。というよりも倒立している。

「いいぞいいぞー！」

「あそこからどうするんでしょうか。」

（ますますシヨ―染みてきたかも。）

「がんばれ♡がんばれ♡」

「とらあっ！」

肩をひねって、ゴモラの体を空中錐もみ回転で投げ飛ばす。プロペラのように少し上昇する頂点で、シンジもその体に飛びついて、最初の技のポーズに入る。



「落ちろあッ!パイロドライバー!」

「甘いねっ!」

「ぐはっ!」

回転で視点が定まらないうちに、一気に畳みかけようという算段であったが、これぐらいのことはゴモラも予測済み。尻尾で打ち返して逆に空中でバランスを取り戻した。

「ちえッ!さすがにそううまくいかないか。」

「何回戦ってると思ってるの?今度はこっちからいつくよお!」

姿勢を低くして突撃の構え。ツノかち上げからのパンチの流れか。こっちだって何回も見てる。

「それはフェイクだ!」

「もちろんね!」

こっちも負けてられない。ツノ突きに見せかけての尻尾での足払いを、宙返りでかわ

してゴモラのサイドをとる。

「そしてすかさず！」

尻尾が元の位置に戻る前に、自分の左足ゴモラの左足をとらえ、ゴモラの右脇に回り込んで、左腕を首の後ろに伸ばし、さらに右手でホールド！

「コブラツイストお！」

「ぐっぐぐぐぐぐぐ．．．!!まだまだ．．．！」

2、3回尻尾で叩かれるが、意地でも解かない。とにかく固め技で体力を奪ってから、必殺をかける。これが今のシンジの主な戦い方だ。

いくら相手が強い怪獣娘だからといって、女の子に手を挙げるような真似は出来るだけしたくないシンジの心の表現でもある。じゃあ固め技ならいいのかというツツコミはさておき。

「はっ、甘いねシンちゃん。カスタード入りタイ焼きよりも、ねっ!」

「ぐあっ!」

『あー、解かれちゃった。』

器用に尻尾を使って足をすくい、フリーの両手でホールドを解いて脱出されてしまった。お返しにとむんずと頭を掴んで背負い落す。普通死ぬ。

「人間同士のプロレスならまだしろ、怪獣娘の大怪獣ファイトじゃあ、ちよつと地味だ、よっ?!」

「人間様に何求めてんのさっ!」

ゴモラの追撃のストンピングを両腕で抑え、逆に蹴り返すが簡単にいなされる。慌て飛び退くと、ストンプされた地面がひび割れて碎ける。

「ちよつとはホンキ出したら?待っててあげるよ。」

「そうやって、自分のリングで戦いたいだけだろ!」

「それでもあるけどっ!」

大剣、否大槌のように脚を振り下ろし、地面を衝撃波を伝わらせる技、アースクラッシュャー。本来はレッドキングがその剛腕でやる技であるため、これはその簡易版だ。

(ゴモラのやつ、また技にキレがかかってやがるぜ……。)

自身の渾身の技を、見様見真似で会得されたレッドキングさんであったが、その表情は嬉しそうであった。

嬉しくないのはそれが眼前に迫るシンジの方である。こうなれば逃げ場はひとつしかない。

「跳ぶー！」

「逃がさないよ！超振動波！」

「うおおおおおおおネバギバツ!!」

迫りくる超振動波に向かって拳を振りかざすと、流星のようなスピードでゴモラめがけて落ちていく!

「ひぐつ!!ふふつ・・・ようやく、骨のあるやつがきたね・・・。」  
「言ってる、燃やすしつくしてやるぜ!」

『超振動波を押し返した?!』

これはシンジの着るS・R・Iの機能によるもの、瞬間的に身体能力を上げることができるブーストだ。電気的刺激で筋肉を活性化させることもできる。

『だが、今見せた芸当はそれだけによるものじゃなさそうだけだな。』  
『まだ隠している能力が?』

「隠し芸かな?でも隠したまま落ちちやわらないようにね!」

「能ある鷹は爪を隠すってね!オラッ!!」

「あたたたたっ!」

パンチ！パンチ、パンチ、パンチ！技を捨てた足を止めての殴り合い、戦いはヒートアップしていく。

「ぜえっ！ぜっ！！」

「どらああっ！！」

しかし、いくらパワー重視に攻めたところで、ゴモラの圧倒的優位に変わりはない。なにせ、かの怪獣退治の専門家すらも、万全状態のゴモラには肉弾戦で全く歯が立たなかったのだから。二戦目の、ゴモラの尻尾が切断された状態というアドバンテージがあつて、やつと倒せたぐらい、ゴモラは強い。

「そおれ！」

「ぐわあっ！！」

怪獣娘となつて、その力は衰えるどころかより一層格闘能力に優れた形となつて表れている。加えて、今のゴモラには卓越したセンスと柔軟性が備わり、まさしく、鬼に金

「棒と言った状態なのである。」

「連続、メガトンテール!!」

（一発でガードごと吹き飛ばされるような一撃が、連続で襲い掛かってくるなんて、まさに悪夢だ!）

そんなゴモラのメガトンテールを、片腕で防ぐレッドキングさんのすごさがよりおわかりいただけたであろうか?

「やっぱつれえわ。」

「なにが?」

「色々あるけど、やっぱ強すぎるわゴモラ。」

「あれあれ?シンちゃんはそのツノのついてない頭は、帽子を乗せるためだけの台座なのかな?」

「ぬかせ!パワーがてめえなら、スピードはオレだ!一生かかってもおいつけんぞ!」  
「まだまだ元気じゃん!」

気合を入れなおして攻め方を変えてみる。じっくり観察して隙をうかがう。

「ぐぬっ！フェイントばかりじゃつまらないよーだー！」

「いやならそつちから攻めて来な！どんな攻撃でも受け止めてやる！」

「ホントお？どんな攻撃もツ！」

ゴモラが選んだのは、範囲の広い尻尾の横薙ぎ。強い風圧も発生するが、シンジは身をかがめることで被弾を最小限に留めつつ、最適な距離を保つ。

「今だっ！」

「にやっ！ぐむっ！」

すかさず技をかけに行く。両腿でゴモラの頭を挟み、バク宙の形で投げる！

「フランケンシュタイナー！」

「ぎゃん!!」

『おおー！決まった!!』



『ミクちゃん、興奮しすぎだから……。』

さらに畳みかけるようにフライングニードロップの体勢に入った!

「甘いつて、言ったよね?わたし。」

「はっ?!」

「おりゃあつ!」

仰向けだったゴモラは、両手両足、それと尻尾で地面を叩いて飛翔し、シンジの膝を迎え撃った。

「あ、足をやられた……。。」

「油断しすぎだよ、シンちゃん。」

墜落するシンジを見下し、窘めるように言う。

「どうする?もうギブアップして一発ギャグ行っちゃおう?」

「・・・そうだね、一発芸はしようかな？」

「あれ？マジで？」

「うん、マジ。でも・・・。」

「ギブアップはしないかな。」

バンツ！と跪いた状態から地面を蹴って、ロケット頭突きでゴモラを突き放す。

「てて、なにすんの？」

「こうすんの！」

腰にマウントしてあったバディライザーを手に取り、反対側にあるホルダーから、一枚のカードを取り出す。

「モンスライド！」

「ゴモラ!!」

カードをバディライザーに入れ、それをスーツの左肩にセットする。

すると、肩口を起点として、一層激しい電流と発光が生じた。

「ぬぬっ・・・これは!？」

『なんだアレー!？』

『ボクは前ちよつとだけ見せてもらったけど・・・。』

『新兵器・・・ですか!？』

巖の如き赤褐色の肌に、腹部には棘のような無数の突起。指先からは鋭い爪が、肘とカカトからはスパイクが伸びるその姿は、本物のゴモラを模したものであった。

「ただし尻尾は別売り。」

全体的に、ゴモラを模したマツシブな体躯となった。また、胸からは中央のツノ、右肩からは三日月ツノの片方が生えている。

スーツそのものを変性させ、怪獣のデータを人間の体で再現する。これぞ強化スーツの進化の形、『モンスライド』だ。

「それが、一発芸なんだ？すごいじゃん。」

「・・・まあね。」

「どしたの？元氣ないじゃん？」

「いやね、今滅茶苦茶暴れたくてウズウズしてる。いつもこんなのに耐えてたんだね、ゴモラは。」

「そだよー？でも今は解放してもいいんじゃない？そのための大怪獣ファイトなんだ

よっ

「そっか・・・そうだね。それなら・・・。」

ドンッ!と重い音が聞こえた時、ゴモラの体は後ろへ吹っ飛んでいた。

「がっ……は……?!」

「ごめんゴモラ、ちよつと耐えて。」

アリーナに設けられた岩々を砕き、なぎ倒しながらゴモラが飛んでいく。少し遅れた、先ほどまでシンジのいた後ろの岩が衝撃で吹き飛ぶ。

対して、シンジの右肩のツノからは白煙が上がっていた。先ほどゴモラを襲った衝撃は、このツノを使ったシヨルダータックルだった。強化された脚力は、音速を越えるスピードを発揮していたのだった。

「気が高まる、溢れるウウウウウウウウウ!!」

『あれ、ちよつとマズいんじゃないの?』

『まるで暴走してるみたい……。』

『止めましょう!このままじゃゴモたんさんが!』

『待ちな。』

『レッドキングさん、どうして?』

『まあ見とけよ。』

「ダアアアアアアアアアアアアッ!!」

「せいっ!」

先ほどまでとは打って変わった、野性味溢れる荒々しいファイトが展開される。

「さつきより、正確になってるじゃん・・・!」

「ゴモラの技とパワーをトレースしたということは、ゴモラの動きを把握しきつたということだ!!」

「理性とばしたものの言うセリフじゃないね!ぐっ!」

一手先を読まれるように、ゴモラは一方的に殴られている状態に陥った。

「ははっ、はっ、ちよつとしんどいね。」

「超、振動・・・波アアアアアアアア!!!」

壊れた機械のように肩のツノから火花をあげ、胸のツノから超振動波のビームを放たれる。おもわずフツと息を吐いてゴモラは眼前に迫る脅威を見やると、キツと目を吊り上げ、

「これが本家本元の、超振動波だああああああ!!!」

『す、すごいエネルギーだ・・・!!』

『すごすぎてなにも見えません!』

『ほあー!すっげえー!!』

ぶつかり合う、振動と振動。震える大気が悲鳴にも似た異音を放つ。アリーナは怪獣無法地帯とも呼ぶべき惨状をあらわした。ゆらぐ空に、在りし日の大怪獣の姿すら見え

その様に驚嘆の声を上げるもの、もはや何もかもを見失うもの、ただじつと見据えるもの、

そして、勝利を確信して口角をあげるものがある！

「たしかにそのパワー、ボクと同じか、それ以上かもね。」

激しい光の中を、燃える炎を走り抜け、古代怪獣は吠える。

「けど、尻尾の無いゴモラなんて、マヨネーズのかかってないタコ焼きみたいなものだよー！」

模造された獣が気付いた時には、もう遅い。

「ゼロ・シユートオオオオオオオオオオ！」

「ガアアアアアアアアアッ!!」



シンジの胸に、熱く滾るもうひとつのツノが突き立てられた!

「どうしたの? まだ一分ぐらいしか経ってないと思うけど?」

そしてゴモラの黄金コンボ、かちあげ攻撃!

「太陽の塔は見飽きた? なら、私も見せてあげるよ! 新しい一発ギャグ!」

シンジの両脇をゴモラの足が踏みつけて固定、下半身を上へとのけ反らせて両足を掴み、大きく開かせる。自身の尻尾は空を指し示すように上へと向かせる。あたかもパイロドライバーを前後逆にしたような姿で落下する。

「これは芸術点高いよー! 『新・太陽の塔』!!」

そのまま地面に激突すれば、頭部、両肩、股裂きの3つの顔が出来上がる。太陽の塔を模した新技の完成だ!



よー?。」

「いやいやいや、全然大丈夫じゃなさそうでしたよ、シンジさんが?!」

「とうか、なんで生きてるの?」

「アギさん、なんて言い草だ。」

「ごめん、そういう意味じゃなくって・・・。」

見事にスーツはボロボロにされてしまったが、おかげで今生きていられる。こういう時のために、ダメージを生産させる対消滅機能もつけておいたのだった。

「ピグモンヒール!どうですか?」

「うん、平気です。」

「ゴモゴモも、あんまり無茶しちやダメですよお?」

「無茶だけど、無理じゃなかったからね。いやーまさかあんな隠し芸を用意してたなんて、私もビックリだよー!」

「まだまだ改良の余地は大きいけどね。」

「技術の改良だけじゃなくて、他にも鍛える必要があるぞ?カイジューソウルのコピーに引つ張られて、理性を失っちゃまうなんて修行が足りない証拠だぜ!」

「善処していきます。けど、ちよつとでも怪獣の心に触れられて、よかったです。」

技と体だけじゃなく、心もなりきらなきやいけない。けれどそれは冷酷で残忍な心ではなく、熱い闘志を秘めたソウル。ここにいる怪獣娘さん達は皆、その境地にいるんだ。

これはますます、負けてられない。全部まるつと包み込めるような、あつついハートを結んでみせるんだ。

「ところでさ、すつごい戦いで興奮したんだけど。」

「ん、なにミクさん？」

「やつぱりゴモたん強いよね！これはレッドキング先輩も危ういかも？」

「おいおい、そりやないぜミクラス。オレはゴモラにまだまだ負けちゃあいないぜ？」

「ふつふーん、レッドちゃんもそんなじゃ甘いよ？もうすぐ私追い抜いちやうから。」

「ほう？じゃあ今からやってみるか？オレも戦いたくてウズウズしてきたところだ



記憶健忘！今日は誕生日だった！

「ほんつつつつつつとうに申し訳ない!!」

「……。」

(どうしようこの空気。)

(アタシたちは悪くない・・・よね?)

(でもどうにかしたいですね。)

ひとつ、シンジは土下座している。ふたつ、ミカはすぐぐ立腹である。みつつ、空気がスカイドンより重い。

「いやー、おこってないよ?ぜんっぜんおこってないから。」

ここはGIRLSの談話室。ここで今日はパーティが行われていた。主賓は今頭の中がソドムより熱くなっているゴモラこと、黒田ミカヅキ。そしてなんのパーティなの

かと言うと。

「まあまあ、せっかくゴモたんの誕生日パーティーなんだから、ちよつと落ち着こうよゴモたん。」

「私は冷静だよお?シンちゃんをどうやって料理してあげようか考えてるところだから。」

(あ、ダメだわ。)

1月8日はゴモたんの誕生日です。じゃあそのゴモたんが、どうしてこんなに怒り心頭なのか。順を追って話をしよう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

↳数時間前の同じ場所

「おはよー、レッドキングさんは・・・ってみんななにしてるの?」

「おつはよーシンジさん!手伝って手伝ってー!」

「ああいいけど、レッドキングさん知らない？」

「レッドキング先輩はゴモたんと一緒に戻ってくるよ！それまでに急いで用意しないと！」

「そっか・・・でもなんの？」

「なんのつてそりやもちろん・・・あつアギちゃんウインちゃん、ピザ買った？ピザピザ！」

「シンジさん、おはようございます！」

「おはよーシンジさん。買ってきたけど、まだ食べちゃダメだからね？」

「はーい、でもいいニオイ！」

ピザなんて何年ぶりに見ただろうか。郵便受けにチラシが入っていれば、注文するつもりが無くてもついつい眺めてしまう。

「よいしょ・・・こらしよ・・・」

「で、一体なんの・・・」

「あつピグモンさん、一人でそんなに持ったら危ないよ？」

「だいじょぶですよ、ピグモンひとりでなんとか・・・あわわ！」



「あぶないあぶない!」

「はわわ!ありがとうございます、アギアギ、シンシン!」

「少し持つよ、どこに持って行けばいい?」

「あつちです〜」

ダンボール箱?何が入っているんだろう?中身は紙類みたいだけど。

「ねえ、ピグモンさん、これ中身は・・・。」

「あー、ミクちゃんまだ開けちゃダメだつてば!」

「ニオイだけ・・・ニオイかぐだけだから・・・!」

「それもうニオイだけじゃ済まなくなるやつですから!」

キュウ・・・とお腹が鳴る。朝ごはんはちゃんと食べたし、お昼までもうちよつと時間があるはずなんだけどなあ。ニオイの力つてすごい。ここにいるとニオイだけで空腹にやられちゃいそうだ。

「レッドキングさん、探しに行こうかな・・・。ちよつと出てくるよ。」

「うん、12時には戻ってきてね。」

「なんのパーティーなんだろ？」

すっかり聞きそびれたのを、すっかり忘れてしまっていた。ここがケチのつき初めだった。

〜1時間ほど後〜

「ただいまー。」

「おかえり、ゴモたん見つかった？」

「いや、レッドキングさんも見つからなかった。ここで待ってたほうがいいのかなと思つて。」

「だろうね、なにか用でもあつたの？」

「いや、大したことじゃないんだけど・・・。」

「おーっすみんな揃つてるからー。」

「あつ、レッドキングさん。．．．そちらの方は?」

「エレキングさん!」

「ああ、シンジは初対面だったかな。こいつはエレキング、どっちかっていうと、調査チームのメンバーだけだな。」

「エレキングです。よろしく。」

三日月のツノに、長い尻尾、ここだけを表現するとゴモラと被るかもしれないが、その体色は白と黒。マツシブなゴモラに対して、スマートな印象だ。そして何より、一番ゴモラと、否ミカと異なっているのは．．．。

「ど、どうも．．．。初めまして、シンジです。」

「お話は伺っているわ。調査課として仲良くしましょうね。」

「は、はい。恐縮です．．．。」

「．．．ちよつと、いいかしら?」

「はい?なんでしよう?」

「初対面なのに、目を合わせて話さないなんて失礼ではなくって?」

「あ、ご、ごめんな．．．さい。」

「はあ・・・こつちを向きなさい。」

「はぎっ！」

無理！顔を見る以前に、ついつい視線が下に行つちやうし。そつちの方がよつぽど失礼になるつての！

「・・・そういう反応をされることにも慣れてはいるけれど、これからも怪獣娘と関わつていくのなら早く慣れてしまつてほしいわ。」

「ごめんなさい。」

「あれあれ？シンシンはエレエレに一目惚れしちやつたんですかあ？」

「ピグモンさん、違うから。」

クール・・・というか落ち着いた人だな。どつちかというところにはこういう人の方がタイプだ。

「お前鼻血出てるぞ。」

「うっそお、ホントだ。」

「大丈夫ですか?ピグモンがちよちよいと治してあげますよ!」  
「ありがとう、ピグモンさん。」

あーもう第一印象滅茶苦茶だよ。そしてこれが1番目の失態。

「それはそうとレッドキングさん。」

「ん?なんだ?」

「今度どっか一緒に遊びに行きませんか?時間があればですが……。」

「うえっ!?オ、オレとか?!」

「はい。」

「そ、そりやかまわねえど、オレなんかと一緒にいっても……といふかなんでこんな  
タイミングで……。」

「タイミング?」

これが2番目の失態。

「はあ……。」

「あれ？ミカどこに行ってたの？レッドキングさんたちと一緒にいるって聞いてたけど。」

「そうだね、一緒だったんだよ、さつきまでね。で、ちよつと外で待ってて言われてたんだ。」

「？なんで待つ必要があったの？」

「・・・シンちゃんは今日が何月何日か知ってる？」

「今日は・・・1月8日。」

「何の日だと思う？」

「えーっと、成人の日。それから元号が平成になった日。」

「そうなんだ！」

「そうだよ。」

「そうじゃなくてッ！」

「なに?!」

「今日は、『誕生日』なのッ!!」

「誰の？」

「ンンンンンンンンンンンンンンンン!!!」

「もしかして・・・ミカの?」

「そうなんだよっ!」

キヨロツ、キヨロツと周りの面々をみやると、皆それぞれ頭を抱えていた。

もしかして、やつちまった?

「ごめん、僕何も用意してなかったや・・・。」

「ブンツ!!」

これが3番目の失態。

あー・・・GIRLSのビルってこんなに高かったんだな・・・。ガラスのシャワーを浴びながらの3秒後のシンジの心情であった。アスファルトにできた人型を尻目に、玄関から入って何食わぬ顔でエレベーターに乗り込み、談話室に戻って開口一番。

「ほんつつつつつとうに申し訳ない!!」

冒頭に戻る。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「もう、そのぐらいにしときなよ、ゴモたん。」

「んむう・・・。」

「本当はあんまり怒ってないんでしょ？納まりが付かなくなっちゃっただけで。」

「そうなの？」

「頭が高い！」

「ははあ！」

まるで戦国武将のように仁王立ちしていたミカ、否いつの間にかソウルライドしていたゴモラであったが、土下座し続けるシンジを前に膠着した状態に痺れを切らしたアギラが話しかけてきた。

「そうだよ、きつとシンちゃん覚えてないと思ってたよ。ちよつと前まで私のことも



忘れてたんだから。」

「返す言葉もございません。」

「でもそれもしようがないと思ってたよ、言葉にせずに思ってるだけのことが、伝わるはずなんかないのに。ボクがそうだったらいいなって期待してただけ。お年玉とか、ダイエツトとか!」

(昨日のあれ、アピールだったのか。)

「でも、でもねえ!目の前で突然エレちゃんにデレデレしだしたり!」

「いやべつにデレデレとは・・・。」

「だまらっしやい!」

「はい。」

「突然レツドちゃんのことをナンパしだすし!」

「ナンパじゃなくて・・・いやナンパだわ。」

「突然あんなこと言われたら、私だってハズカシイぜ・・・みんなの前で・・・。」

「えーつと、総括すると。」

「あなた、ちょっとデリカシーが欠けてるわ。」

「がーん！」

たしかに、最近ちよつと調子に乗っていたのかもしれない。少しずつとはいえ力を付けてきていたことに、慢心していたのかもしれない。

「ごめんなさい、ミカ、ゴモラ。」

「謝るのは私にだけでいいのかな？」

「みんな、ごめんなさい。もっと精進します。」

「気にすることはないわ。誰でも失敗はあるものだもの。」

「うんうん、シンジさんもまだまだこれからだつて！」

めでたしめでたし、かな。これで全部丸く収まった・・・。

「で、シンちゃんは私になにしてくれるのかな？」

「ドキッ！」

「ごめん！埋め合わせになんでもするから、今日だけは見逃して！」

「ん?今何でもするって?」

「ゴモたん。」

「わかっているわかってる。シンちゃんの性格からして、今日誕生日パーティーがあるってわかってたら、『どこかに行こうぜ』って誘えるわけないって思ってるから。」

「知らなかったから、当然のようにナンパしていたのね。」

「エレエレ!」

「は、ハズカシイ・・・1時間前の自分の行いが恨めしい・・・。」

「そーだなー、うーん、どうしよっかなー。」

「一発ギヤグ?」

「それもいいけど・・・うん、決めた。」

「落下しながら一発ギヤグ?」

「違うよ!シンちゃんの贈り物だから、シンちゃんが決めて欲しいな、やっぱり。」

「それはつまり・・・。」

「シンちゃん、私をデートに誘いなさい!」

「・・・ちよつと考えさせて。」

「まさか、レッドちゃんのを先にとか?」



「ん?それは僕がやったら次はアギちゃんかもっと面白いのをやってくれるってこと  
でいいのかな」

「えっ。」

「アギさん見ててください、僕の『一発ギャグ』!」

このあとメチャクチャベッドでジタバタした。そして目が覚めたら泣いた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「日付はOK、プレゼントもよし、コースも・・・たぶんいい。」

あの日からからもう数えて32回目のチェックを済ませ、いざ当日!という時。不安要素は可能な限り取り除いた。落とし穴が無いか入念にチェックした。それはもう、どこまでやっても足りないってぐらいに。けれどそれは、この空を覆う曇り空のように晴れることはない。

「午後からは晴れるって言ってたけど・・・。」

ボヤいていても仕方がない、行こう。いざとなったらプランBで行く。

「行つてきますー！」

「いつてらつしやいませ。」

歩いてても十分に間に合う時間だが、つい走つてしまう。はやる気持ちを抑えつつ、脳に酸素を送り込む。

「おはよー、シンちゃん！」

「おつ、はよー・・・。」

「さつそく嘸んだねシンちゃん。」

「・・・走りすぎて舌が回らなかった。」

「そんなに私に会いたかった？照れちゃうね。」

約束の時間の30分前に合流できた。ここまでは想定内。

「じゃあさっそくだけで、ご飯食べに行こうか!」

「ズコーツ!」

初っ端からこれでは先が思いやられる。

「ミカ、今日は僕がエスコートするってことになってたはずだと思うんだけど・・・。」  
「じよーだんだって!それで、どこ連れてってくれるのかな?」

「まずはね・・・。」

デートの定番、遊園地。今はちょっととしたイベントで、スケート場が開かれている。  
夏はプール、冬はスケート場というわけだ。

「でもシンちゃん、滑れるの?」

「ローラーズスケートならやったことあるし、平気平気!」

と、思っていた時期が僕にもありました。

「ヤベエわこれ。」

「ヤバイねー、チヨー楽しいよ！」

「ま、待って！引つ張らないで！」

まあ、楽しめたんならいいか・・・。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「楽しかったねー！」

「うん、楽しかった・・・。」

服の下に青痣出来てそうだけど、楽しめたからよし。

「次あれ乗ろつか！観覧車！」

「いいね、ちよつと高いけど・・・。」

しれつとまた主導権を握られているが、これはもういい。



「あつ、アレなにかな?」

「たしか動物の展示もやってるって書いてあつたけど……」

「かわいい!リス?ネズミ?」

「いや、プレーリードックでしょ。」

ガラスの向こう側にいたのは、30cmほどの大きさの毛むくじやらの動物。シンジの言う通り、プレーリードックである。おそらくつがいの。

「石の上に立ってる!」

「プレーリードックは、ああやって巣穴周辺の見張りをやるんだ。危険が近づくと犬みたいな声で警告するから、ドックってつくんだって。」

「へー。」

ちなみに、プレーリーは縄張り意識が激しく、オス同士で喧嘩する果てに、生き埋めにしたりされたりするそうさ。

2本足で立ち上がってキョロキョロとあたりを警戒する様は非常に愛らしい。すると、警戒している方にもう一匹の方がやってきて、口を合わせてキスをした。

「わっ！なにになに？なにやってるんだろアレ？」

「あれがプレーリードックの挨拶なんだって。」

「へー・・・そうなんだ。」

2頭はしばらくわちゃわちゃとすると、巣穴替わりのバケツの中に入って行って、仲良く眠り始めた。

「そろそろ行こうか、観覧車。」

「う、うん、そうだね。」

「プレーリードックか・・・。」

「どうしたのシンちゃん？」

「いや、大したことじゃないんだけど・・・。TASおころで知っているか！観覧車を回すギアには、大きなゴムタイヤが使われているのだ！そうすることで振動を抑え、天

辺まで行っても揺れが少なくなるのだ。」

「知らんがな。」

それはさておき。観覧車のゴンドラに、2人は向かい合って座っている。

「山の上にある分、結構高いね。」

「そうだね、遠くの町までよく見える・・・あつ。」

突然、シンジは立ち上がって前のめりになった。

「な、なに?どうしたのシンちゃん?」

ミカの脳内には、先ほどのプレーリードックのことがよぎった。

(こ、これはまさか・・・?!そんな、気が早いよ・・・)

真面目なようで、どこか抜けている純朴そうな幼馴染が、こんな計画を建てていたな



「ここがテツペンだね。」

「そうだね。」

「?なんか機嫌悪い?」

「自分の胸に手を当てて考えてみれば?」

「・・・ドキドキしてる。すごく。」

「えっ。」

「高いからね、ここ。」

「そういえばシンちゃん、東京タワーから落ちたんだってね。」

「うん、あれが全ての始まりだったね。」

あそこから、ずいぶん遠くまで来たとおもう。いくつもの出会いを重ねて、今僕はここに  
いる。

「なんか前にも言ったような気がするけど。」

「うん?」

「ミカのおかげだった。今の自分がいるのってさ。」

「ほほう？続けたまえ。」

「ミカとこうして向き合っていると、本当にいつもそう思う。」

「これって、『憧れ』なんだと思う。」

「憧れ？」

憧れは、僕たちの手と足を動かす。

「最近、そんなに近くにいることも少ないけど、ずっと変わらないよ。その憧れの感情は。」

「・・・それなら私を見習って、そんな回りくどいいい方せずにハッキリ言っただけいいかな？」

「え・・・。」

「ほれほれー！言ってみろー！」

「そ、そんな、恥ずかしい事言えないよ！とてもじゃないけど・・・。」

「そんな恥ずかしい事まわりくどく言っただの？シンちゃんの手さげべー！」

「うるさい！真面目に言おうと恥ずかしくなるんだから、まわりくどく言うのは普

通でしょー!」

しつとりムードからとたんに騒がしくなってきた。

「ははは・・・やっぱり笑ってた方がいいね。」

「うん、そうだね・・・ん?」

騒がしいのは、ここだけではないようだ。

「シャドウ反応・・・!?!」

「場所は・・・あつ?!」

シンジは見た、隣のゴンドラの上に乗っている影を。

「ちゃんと500円払えよ!」

「そこ?!つて下見て下!」

他にもシャドウが現れて、人々を襲っているのが見えた！なんとというタイミングで！

「行こうシンちゃん！」

「ああ！でも、どうやって？」

「もちろん、『降りる』！」

「やっぱり?!」

ドアを蹴破り、シンジを抱えてミカは飛び出した！

「ソウルライド！ゴモラ！」

「ちよっ、怖い怖い!!」

ズドーン！つと砂ぼこりを舞い上がらせ、ゴモラが着地する！続いてお姫様抱っこのポーズでシンジがキャッチされる。

「さーて、片っ端からやっつけてやりましょうか！」

「待って、シャドウの反応がいくつか固まってるみたい。」



「アトラクシヨンの列に並んでるのかな?」

「そんな律義な性格してなさそうだけど。」

バディライザーの機能で、シャドウの居場所を割り出す。こういう時には画面が大き  
いと便利だ。

「おーい!ゴモたん!シンジさん!」

「おつ、さっそく応援が来た。」

「つていうか、ずっとそばに居たんじゃないかな。前みたいに。」

「ゴモたん!シンジさん!一緒に行こう!」

「いえ、ここは一旦別れて分担したほうがいいのでは?」

「そうだね、この辺り地形が高いからよく見えるし、ここから僕が指示を飛ばすよ。」

「おっけー!戦うのはまかしてよ!」

「シンジさん、一人で大丈夫ですか?」

「平気、下にS・R・I着てるから。」

「常に着てるのそれ?」

「そうじゃないと意味ないでしょ。寒っ!」



『こつちももう終わったよ!』

「これで全部かな・・・おつかれさま。」

『楽勝だったね!』

『一旦集まりましょうか。』

「一応、避難した人たちの確認だけしたほうがいいかも。応援来るまでまだちよつと  
かかりそうだし。」

『了解。シンジさんも気を付けて。』

一旦通信を切つて一息つく。緊張が解けたら急に寒くなってきた。あつたかい飲み物でも探すか・・・と自販機に近づいた。

「シンちゃん。」

『なに?』

「どうしよつか、デートつて空気じゃなくなっちゃったし。」

『とりあえず本部に戻つて報告しなくちゃね。』

「あーあ、せつかくいいところまで行つてた気がするんだけどなー。本部戻る前に、ご飯食べてかない?粉もんがいいな!シンちゃん?おーい?聞いているの?」

「シンちゃん？」

『ごめん、聞いてなかった。なに？』

「どうかしたの？急に黙り込んで。」

『急用が出来た。』

「なにそれ？」

「今囲まれてる。」

『シヤドウに?!』

「シヤドウに。おっと。」

『すぐ行くから待ってて!』

「なるはやでお願い。」

ひい、ふう、みい、数えただけで10体はいそうだ。今こそ、修行の成果を見せる時。

「どりゃっ！」

まず手近なところにいたこちらを窺っていたやつに、跳び蹴りをかまして一目散に逃げだした。

「追ってくる?追ってくるよな?」

後ろをちよつと確認して、突進を横つ飛びに躲す。少し開けた場所に出ると、そこで改めて向き直る。

「ゴモラの力をトレースして・・・フィスト!」

まず一匹目!さつき突撃してきたやつにチョップを浴びせてから、角?を掴んで振り回す!

「ハンマー投げだあ!」

近場にいたもう一体にぶつけてやる。よく見れば、追ってきたのは4体ばかりだ。これだけならなんとかなるだろう。こちらの思わぬ反撃に、シャドウもたじろいでいる。

「なら、こつちから行つてやるぜ！」

掴みかかつてボコボコに殴る蹴るする。タツクルをして体勢を崩してやると、連続ストンピングで追い打ちをかけ、トドメをさす。

「まだまだあ！バックドロップはヘソで投げる！」

最後に一匹、逃げようとしているやつの中を捕え、一通り打ち据えると腰に力を入れる。

「これで、フィニッシュだあ！」

にゆるん、と変な感触だが、しっかりと頭から着地させる。

「よっしやー！」

最後の一匹が、痙攣して動かなくなり霧散すると、ガッツポーズをして勝利を喜ぶ。

直接シャドウと戦うのは今回が初めてだったわけだが、それによって色々見えてきたものもある。以前ゴモラの言っていた、コブラツイストが地味という発言。確か見るからに軟体なシャドウに対しては関節技の効き目は薄いだろう。やってみなければわからないこともある。改めて実感した。

「さて、残りのやつらはどこに・・・っと、その前にミカと合流しようか。」

追ってこなかったやつらが気になる。まずは通信して、無事を知らせよう。

「こちらシンジ、ひとまず問題は解決した・・・あれ?通じてない。」

まさか壊れた?それとも通信障害か。いずれにしろ、直接会あわねばなるまい、動き出そうとしたその時。

「おわっ、揺れてる?!地震?違うか!」

見れば、先ほど自分のいた観覧車周辺が怪しい。バチバチと火花が上がり、支柱は折れ曲がって倒れた。

「め、目玉?!」

見えたのは巨大な目玉のようなシャドウビースト。それが地底から出てきたのだ。観覧車が倒れ、鼓膜が破れそうな轟音が響く。

「通信障害も、こいつのせいなのかな。こればかりはみんなに任せたほうがいいのか……。」

衝撃で、どこからか安全第一の看板が降ってきたが、まさにその通り。一旦離れて体を立て直そう。応援ももうすぐ来てくれるだろうし、そうなれば余程のことが無ければシンジはお役御免だ。

「ゲートの方に向かえばいいかな……。」



ふと、その足が止まった。何か忘れていないか、不安がよぎる。

「あっ!」

と呟いた時には足は動いていた。

「にやろー!弱い者いじめすんな!」

先ほど癒しをくれたプレーリーさんたちや、他の動物たちをシャドウが襲っているのが見えた。これは放っておけない。

「オラオラオラアン!?かかってこいやあ!」

もう滅茶苦茶に叩きまくって群がるシャドウを檻から引きはがす。中の動物たちは無事のように一安心だった。

「ぐっ、この！」

シンジ、後ろからどつかれる。物陰に隠れていたのか、目測の10倍は数がいた。

「お、多すぎる！」

それらが一斉になだれ込んできて、狭い空間にスシ詰め状態で身動きも取れなくなつた。

「まさか、狙いは僕の方だったって言うのか？ぐっ……。」

気づいた時にはもう遅い。通信は妨害されてるし、アギさん達はシャドウビーストの方に行ってしまったっているだろう。

「こうなったら……モンスライドして一気に……。」

腰のホルダーになんとか手を伸ばそうとする。

「……あつ!ダメだ、こんなところで暴れたら、この子たちも巻き込んでしまう……!!」

すぐそばに動物たちもいるし、なにより未だに自制が出来ていない。パワーアップしたところで無駄にエネルギーを浪費してそのままやられる可能性もある。

「本気でヤバイこれ……。」

怯える動物たちを見た。キャンキャンと鳴いている。助けなければ、いけない。

「がっ……うっ……ぬっ……。」

蹴られ、殴られ、いたぶられる。肺から空気が漏れだす衝撃も、血が流れだすような痛みも、だんだん感じなくなっていく。

とうとう終わるのか。こんなところで、なにも達せられずに。死ぬのか。黒い影に、

覆われて。

死んだら、もう会えなくなる。大切な人にも、伝えられなくなるのか。

嫌だ。

そんなの嫌だ！

「ミカあああああ!!!!」

残った体力を振り絞って、最後の声を上げた。口の中に鉄の味がする。こんなところで、届くはずもない。

太古の眠りを覚まさんとす叫びが、影を威嚇し。

地をも割らんとする猛りが、影を蹴散らし。

友を救わんとする憤りが、影を照らす。

「シンちゃああああああああああああん  
!!!!!!」

「あつ……うつ……。」

「シンちゃん?!大丈夫?」

「……じか……。」

「なに?なにシンちゃん?」

「動物は……無事……?」

薄暗い空に目が霞んで見える。いつも元気で笑顔なはずの顔も滲んでみえない。

「……大丈夫だよ！みんな生きてるよ！シンちゃんも！」  
「……よかつ……。」

再びシンジは意識を失った。

「シンちゃん……。」

傷ついたシンジの体をぎゅつと抱きしめ、山の上をみやる。そこではまだ戦いが続いている。先輩の自分が、急いで加勢しなければならぬ。

「……っ……。」

けれど、彼を今置いていくわけにはいかない。いや、『置いていきたくない』。

「……ごめんね、シンちゃん。すぐ戻るから。」

ミカは、『怪獣娘』であることを優先した。後ろ髪を引かれるようにしながら、その場

を抜け出して走り去った。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「んっ……、くすぐりたいな……。」

全身がズキズキする。レッドキングさんとの特訓の、初日の夜よりも辛いかも。目を開けると、自分が助けたプレーリーさんが、自分の顔に口をよせつけていた。

「よかった……無事だったんだな……いつてて。」

力が入らない・痛みを感じてるってことはまだ生きてるってことを実感したからなのか、今頃襲われた恐怖を感じたからなのか、その両方なのか。

「ミカ……ミカ……?。」

ついさつきまで、彼女がそこにいた気がした。いや、間違いないと確信していた。

「……行かないや……キツいな。」

手も足も出血している。背骨も動くと言痛が走る。だけでも動き出した体は止まらない。

「おまえら……もうちよつと隠れてろよ。もうちよつとの、辛抱だからな……」  
バケツを被せて隠してやると、外へ向けて歩き出す。

遠くで戦いの音が聞こえる。苦戦しているのだろうか。相手はかなりの大きさと不気味さだった。なにより、人間を罫に嵌める狡猾なやつらだ。何か手を打つ必要があるかもしれない。

「通信は……ダメか……。やっぱりアイツのせいなのか？」

このノイズは、磁場の乱れのような、強い磁力によるものだ。それがアイツとなにか



関係があるのだとすれば……。ダメだ、頭が回らない。

「うづつ……。」

ちよつと休もう。喉も乾いたし、おなかもすいた。

「磁気嵐……。じきあらし……。」

自販機も壊れているのか、缶が大量に排出口に詰まっている。財布は服と共にどこかに行ってしまったので、お金を払えないのが申し訳ないがいただこう。ついでに食べ物もつけいしよう。

「強い磁力か……。」

モリモリとホットドックを口に詰め込み、ジュースで流し込みながら考える。何故遊園地に現れたのか。そういえば、いくらかのシャドウは最初固まってあらわれていた。場所はたしか、各アトラクションの近くだ。

「何の目的があつて……。」

人を襲うため？いや、人の集まる出入口の方は、アギさんがかなり容易く制圧できていた。避難だつてスムーズに行われていた。

「とすると……エネルギーか？」

遊園地は毎日大量の電力を消費している。電気を狙つたとすると……。

「アイツの体は、電気を纏っているのか……？」

ここからではよく見えないが、巨大な目のようなものが見えた。地下から伸びてきたということとは、地面より下は細長い形をしているのかもしれない。

「放電攻撃しているのか……。ん？これは……。」

転がっていたスチール缶が、坂を転がり昇りはじめた。

「そうか!もしかしたら!」

まずはシャドウが集まっていた場所に行ってみるか。ひよつとすると、この予想は当たっているのかもしれない。食べて飲んで頭を使っていたら、いつの間にか元気も回復していた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「もー!なんなんだよコイツー!ビリビリして全然近づけないじゃん!」

観覧車のあつた場所で戦うゴモラたちは、苦戦を強いられていた。

「近・中距離は放電で、遠距離は物を飛ばして攻撃してくる・・・。」

「もう一回、レーザーショット!」

「・・・しかも、バリアまで持つてるなんて。」

ウインダムの発射したレーザーが、見えない壁に阻まれて立ち消える。大きな目がギョロリと動いて不気味だ。

「このままじゃ罅があきませんよ！」

「ゴモたんなんか方法ないのー?!」

言葉を投げかけられた当人は、瓦礫を乱暴に投げ捨てて、己に言い聞かせるように啖呵を切った。

「このシャドウは、ボクが殺る!!」

「アイツ・・・どうしちゃったんだ？」

「レッドキングさん！来てくれたんですね！」

「ああ、けどあんなに荒れてるゴモラも初めて見た。」

「なんかゴモたん怖い・・・。」

「うん・・・。」

もう誰の手も借りない。自分一人で片を付けてやる。

「超振動波!超振動波!!ちようしんどうはー!!!」

電撃もバリアも力づくで突破し、目玉を殴りつける。その分エネルギーのロスも、返ってくるダメージも大きい。手や足が傷つくのも構わず、ゴモラは前進する。

このままでも倒せていたかもしれないが、ここで異変が起こった。

「あれ?電撃が止まった?」

「本当だ。」

『……ちらシン……応と……』

「おつ、シンジか?そつちは大丈夫か?今どこにいるんだ?」

『外の変電設備です。遊園地への電気を止めさせてもらいました。通信が復帰したつ

てことは、予想が当たってたみたいです。』

「つまり、シャドウが弱体化したってことだな。」

「やるじゃんシンジさん！」

『それで、今ミカは、ゴモラはどこに？』

「ゴモラは・・・今戦ってる。一人で。」

『大丈夫なんですか?!』

「大丈夫だ。」

「終わったよ。」

「だ、そうだ。」

「ゴモたん・・・。」

「ごめん、後にして。シンちゃん迎えに行かないと。」

『ミカ、大丈夫?』

「平気、シンちゃん今どこ?」

『今さっきの動物コーナーに向かっている。』



「これも・・・中身は大丈夫かな？」

ポケットに入っていた小さい箱を探り出すとため息をつく。これも変形してしまっている。

「シンちゃん。」

「あつ・・・ミカ、おかえ・・・り。」

振り返った先にいた、肩で息をしながら戻ってきた幼馴染も、ボロボロだった。手足や顔をすりむいて、火傷もしているようだった。

「ミカ・・・。」

「シンちゃん・・・生きてるよね？シンちゃん死んでないよね？」

「生きてるよ。ミカこそ、痛くない？」

「平気だよ・・・。」

気が付けば、僕たちはお互いの体を抱きしめ合っていた。先ほどまで戦っていたミカ





「んもー！親切で言っただけであげてるのにー！」

夜。GIRLS本部の屋上で二人は佇んでいる。本来のデートコースのものとは違うが、ここから見える景色もなかなか悪くない。

「・・・いつかね。」

「ん？」

「いつか、こんなことが起こっちゃうんじゃないかって不安だったんだ。私は怪獣娘だし、シンちゃんはただの人間だし。」

「僕も、考えたくも無かったな。体験するまでは。」

「・・・でも。でもシンちゃんの自分で選んだ道なんでもね。私には、『やめて』なんて言えない。けど。」

「けど、本当はシンちゃんには、戦ってほしくないんだ・・・。危険な目に遭ってほしくないんだ。」

「・・・そっか、そうだよね。」

シンジも、なにも言えなかった。本当に死にそうになったし、あんな目に遭うのはもうごめんだと思った。

けど、一度決めた道を、そんな簡単に諦めたくもない。

「はーつ、やめやめ!こんなこと話しても困るだけだよね。」

「そうだね、明日考えられることは、明日にしよう。」

「うんうん、ケセラセラってね!」

「おつ、意外だな。ミカがそんなオシャレな言葉使うなんて。」

「なにさー!私だって女の子だーい!」

「そっか、女の子か。じゃあそんな女の子のミカヅキさん。少し目を瞑ってください。」

「へ?なにいきなり。」

「いいから、目を瞑るんだよ。」

「なになに・・・?」

ミカ、ちよつと期待する。二人つきり、夜景が綺麗、タイミングもバツチリ。

「・・・はい、開けていいよ。」

「これ・・・ペンダント?」

「そう、三日月の。そして上をご覧ください。」

「上?空?あつ。」

空にもポツカリと三日月が浮かんでいた。それと同じ、三日月のペンダントがキラキラと輝いている。

「ミカ、ゴモラ、誕生日おめでとう。」

「あつ・・・あつ・・・。」

「これでもちよつと考えたんだよ。どういうプレゼントがいいかとか、どういうシチュエーションにしようかとか、どこで渡すかとか。一番悩んだのは、三日月の日かな。ほら、今日曇ってたでしょ、午後から晴れるって言ってたけど。それでダメだったらもうどうしようもないって思ってたよ。それに・・・えつとその・・・。」

早口で捲し立てるシンジも、少し照れくさそうにそっぽを向いた。

「……よし、これも言っちゃおう。ミカ。」

「……なに?」

「ミカのこと、大好きだよ。」

「あー言っちゃった。あーあ、あー……。」

「ありがとう……。ありがとうシンちゃん!!!私も、ボクも、だいだいだあああああ  
ああああああああい、すきっ!!」

「うん、ありがとう。」

二人は、またいつの間にか抱きしめ合っていた。ただちよつと違うのは、どちらもとても嬉しそうにしていたというところ。

「シンちゃん……。」

「ミカ……。」

「大好き、だよ……。」

「うん……。」

ゆつくりと、2人の顔も近づいていく。恥ずかしさも迷いもなにもない、ゆつくりと、まっすぐと。

「ふたりともー！焼き肉食べに行こー！！レッドキング先輩のおごりー！！」

「あー、いいね、焼き肉。」

「そ、そうだね、ボクもお腹すいちゃったよははは……はあく……。」

「あれ？2人ともなにかしてたの？」

「いーえ、ぜんぜん。」

「なーんにも、しておりやしませんよ。」

タイミングが良いのか、悪いのか。

「ミクさーん、ゴモたんさんたちいました?」

「いたいた!二人一緒だった!」

「二人一緒だったって・・・ごめんね、2人とも。」

「いーえ。」

「なんにも。」

「なにになに?なんの話?」

「なんでもないってば!行こつ、シンちゃん!」

「ああ。」

今日は本当に色々あった。

「あれ、ゴモたんソレ・・・。」

「これー？ふふーんいいでしょ！」

辛いことも嫌なことも、楽しいこともうれしいことも。

僕はきつと、生涯今日の事を忘れない。

「ハッピーバースデー、ゴモラ。」

三日月だけに聞こえるように、そう祈った。

いてっ、転んじやった。最後までしまらないなあ。



うたかたの。

ここは闇の底。すべてが暗雲に包まれた、絶望の最中。彼方には赤黒い塔が、天を指すようにそびえ立っている。

「みんな．．．どうしちゃったんだ．．．。」

一人息を切らせ、ゴーストタウンと化した街をシンジは走る。光差さぬ闇の中を、懸命に逃げ回っていた。

「ああっ！」

突如、地面が割れ、影が瓦礫や砂をまき散らしながら飛び出してくる。それらは、人のような姿をしていた。

「ゴメス、デマーガ、テレストン．．．！」

怪獣の名を呟く。目の前にいるのは、それらの魂を宿していたはずの怪獣娘

『ギャオオオオオオオオオオン!!』

『ギュラアアアアアアアアアア!!』

『グロロロロロロロロロロ!!』

だった、怪物たち。今の彼女たち、いやヤツらは、凶暴性に支配された怪獣そのものだった。

「・・・ハア、いい加減、しつこい。」

来た道を引き返し、今度は別の道を行く。またその先に怪獣があらわれ、その度にまた逃げて・・・を繰り返す。

「どうすれば・・・どうしたらいい?」

どうにもできない。目の前のピンチを切り抜けることすら、シンジには出来ない。

「はっ……また……今度はなんだ？」

聞き慣れたはずの声、一瞬だけ希望を抱かされた叫び。誰だ？と問うまでもない。

『ガアオオオオオオオオオオオオ!!』

「ゴモラ……。」

ゴモラだけじゃない。レッドキング、エレキング、ザンドリアス、ウインダムもミクスラスも、アギラもいる。

「みんな……なんでだよ……。」

涙交じりの呼びかけも、全く意に介さず迫りくる。

「ちくしょう！ちくしょうちくしょう！！」

轟く叫びを背に受けて、無我夢中で走り出した。もはや逃げ場はない、どこへ行けばいいのか見当もつかない、ただひたすら延命のためだけに走り続ける。

「ああっ……ああ……」

そして最後の影が現れた。明滅する黄色い光と、燃えるような青い光。

「ゼットン……ベムラー……」

もうおしまいだ。すぐ後ろにはゴモラたちが、目の前にはゼットンたちがいる。

縋るように空を見る。分厚い黒雲が覆う、闇が広がる。

その闇、哀しみの空を壊すように、一筋の光が差し込む。

燃えるような、照らすよな、赤く熱い光。

「あれは……。」

光は、シンジの前で人のような姿となった。

『ヘアアツ!』

その表情は、像のように動かなかつたが、優しく微笑んでいるようにも、激しく怒っているようにも見えた。

『シュワツ!』

『光』はあつという間に怪獣たちに囲まれた。けれど『光』は、片っ端から怪獣たちを討って行った。

「またもやシンジは、見ているしか出来なかった。かつての友や仲間が倒されていく様子を、ただじつと眺めているしか出来なかった。」

あのゼットンすらも、徒手のみで下し、最後に残ったゴモラにも挑みかかっていく。

『へエツッ!』

『グオオオオオオン……』

尻尾を切られ、ツノを折られ、何度も何度も投げ飛ばされるゴモラ。

「やめて……。」

ふらふらと力なく倒れても、未だ闘志を折らないゴモラ。

『へアツ!』

「やめてええええええええええ!!!」

『光』は腕を十字に組み、必殺技を放った。

シンジの体は、ゴモラを庇うように、その前へと割り込んでいた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「……っは……こころは？」

あと一瞬のところ、目が覚めた。顔から布のようなものがはらりと落ちたが、シンジは気がついていない。それよりも、見知らぬ天井と、寝心地の違うベッドに気が向いた。

「……ひどい夢だった。」

ひどいことは夢の中だけで起きるに限るが、見たくないものはやはり見たくない。夢というのは時に自身の想像すら上回るようなことが起こるが、これが何かの予兆だと思おうと気分が重い。

「ここは・・・GIRLSの施設かな？」

少なくとも自分の家ではない、ということにはわかった。服も、昨日借りたGIRLSのジャージのままだ。それにお腹が空いている。

「顔でも洗うか。ミカも探して・・・あれ？」

バディライザーがない。誰かに預けたんだっけ・・・と昨晚ことを思い出そうとするが、記憶にない。

「まいつか。」



ともかく先に洗顔だ。ベッドから降りて、履き物もない事に気が付く。別に靴下だけでもいいが、スリッパがないか部屋の中を探す。

と、その最中、部屋に誰かが入ってきた。服装を見るにナースさんのようだけど。ちようどいい、スリッパを借りよう。

「おはようございます。あの、スリッパ……。」

「キヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

すごい悲鳴を上げて走って行ってしまった。サンダルも脱ぎっ散らかして。しょうがない、ひとまずはこれを借りておこう。

「顔になんかついてるのかな？」

洗面所を探してブラブラと歩き回る。

この後、お手洗いでのおんびり顔を洗っている中、突如入ってきたお医者さんとピグモンさんに非常に驚いた顔をされた後検査室へと連行された。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

暗い暗い闇の中、そこにミカはいた。

『ゴモたん……。』

「……入ってこないで。」

雨戸を締め切り、電気の灯っていない部屋の中、ベッドの上で体育座りをしたミカはいた。その眼には、生気が無かった。

『辛いのはボクだつてそうだよ、けどこんなところで閉じこもつてたつて。なんにもならないじゃない。』

「アギちゃんになにがわかるのさ!!」

「ボクだつてわかんないよ．．．ボク目の前で、シンジさんは突然．．．」

『そんなはずないもん！シンちゃんを置いてどこにも行かないもん！』

「現実を見てよ！ここから出てきてよ！」

『やだー!!』

「泣きたいのはボクだつてそうだよ．．．」

「アギさん．．．」

「アタシも信じらんないな．．．シンジさんが死んじやうなんて．．．」

「私もです．．．まだ、出会つて間もないのに．．．」

出会つて間もない、半年ぐらいしか経つていないというのに。やっと事態が好転してきた、仲良くなつてこれたという時だった。

「．．．これからどうなるんだろうね。」

「いろんなこと、宙ぶらりんなままですからね．．．」

「まずゴモたんをどうにかしないと．．．ん？ピグモンさん？」

今は、誰の顔も見たくない。それどころか、動くことすらままならない。

「ダメ……出てきちゃダメ……。」

怪獣娘は、その心に孔が開いた時、カイジューソウルが暴走する。今まさに、それを抑え込んでいる状態なのだ。

右手をぎゅつと握りしめる。その手には、昨日プレゼントされたペンダントが入っている。

「こんな……こんな辛い思いをするなら……こんなもの……！」

投げ捨てようとするが、それは出来ない。振りかざした手がプルプルと震え、きつく胸に抱きしめる。

「シンちゃん……。」

「生き返ったあ!?!」

「しかも超元気い!?!」

『そうなんですう!ピグモンもビックリなのですう!』

バコオオオオオン!と衝撃音が響く。

「ゴモたん?なに今の音?……ゴモたん?」

多少強引に鍵を開け、部屋に入ると、その目に飛び込んできたのは、ゴモたんの形をした立派な穴だった。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「それで結果は……。」

「まったくの正常値です。健康そのものと言っていいです。」

「バランスのとれた食事が効いたね。」

「まったく、一体何だったんだよ？」

「僕が知りたいです。」

検査が終わり、二元の病室へと戻ってきたシンジと、付き添いのピグモンとレッドキング。昨晚、本部の屋上で突然倒れたシンジは、そのまま心停止、息を引き取った……かに思われたがこうして今は生きている。

「みんな心配してたんだぜ、ゴモラも、エレキングも、アイツら3人も、あのゼットンすらついさっきまで来てたんだぜ？」

「ゼットンさんも？」

「特にゴモラなんか……。」

突然、ズドドドドドドドドという地響きが襲ってくる。地震ではない。

「なんだなんだ？」

「あー、こりや多分。」

何かを悟っていたレッドキングに対して、慌てて窓を開けて外を見たシンジに、超特急の影が突っ込んできて押し倒した。

「シンちゃん！シンちゃん生きてるの?!レッドちゃん！」

「あー、3秒前までは生きてたんだけどな。」

「死んでないです。」

「!!!シンちゃん!!!」

「死ぬ。」

首がペコちゃん人形のように揺らされまくり、ミシミシと背骨をベアハッグで折られる。

「生きてた・・・シンちゃん生きてる・・・。」

「ミカ……。」

ミカは今涙を流してくれている。僕のために。生きていてよかつたと心底思う。

「ん……。」

「なに、シンちゃん？」

「いや……。」

ゴモラのツノを撫でながら、ふと夢の事を思い出した。

「シンちゃん……そこくすぐりたいよ……。」

（ちゃんといっているよな……。）

折れてるところかキズ一つ入っていないツノを確かめて安堵する。続いて、ゴモラの腰の、尻尾へと手を伸ばす。

「切れてない……なっ。」



「もー！シンちゃんのえっちいー！」

あつ、飛んでる。今日も空が青いなあ。

「違う、落ちてる。」

そう気づいたのも束の間、直後に地面と接触して目が覚める。

「シンジさん？こんなところでなにやってるの？」

「・・・穴に埋まっているんだ。」

遅れてやってきた三人娘に助け起こされ、パンパンと土を払う。なんだ、よく見れば GIRLS 本部のすぐそばの建物じゃないか。

「わー！ホントに生き返ってる！」

「むしろ死んでたって実感がないんだけど。」

「だからって、怪獣娘の尻尾を触るなんてこのスケベー！」

「え？尻尾つてそういう扱いなのか？」

「ボクも尻尾触られるのは恥ずかしいかな・・・。」

「レッドキングさんが毎日尻尾のリボンを変えてるぐらい大切な部分つてのはわかったかな・・・。」

「急にオレにパス回すな！」

「しかし、結局原因はなんだったんでしょうか？」

「わからん。」

「いやいや、どう考えてもあのスーツが原因でしょ、電気ビリビリってたし。」

「ああ、アレは絶対体に悪いぞ、客観的に見ても。」

「そうですか？痛気持ちいですけど。」

「気持ち悪いからダメ！」

「ちよつとシヨック。」

「あつ、もうすぐ2時だ。」

「2時がどうしたんだ？」

「トレーニングに行かなきゃ。」

「待てい、自分がどんな状態かわかってんのか？」

「わかりません。」

「なおさら悪いわ！しばらくは休め、先輩命令だ！」

「はい。そういえばバディライザーが無いんですが？」

「ここにありますが、はいどーぞ。」

「ありがとー……って画面割れてるじゃん！」

「そうなんですー、シンシンが倒れた時、割れているのが見つかったんです。」

「落としただけで壊れるものかなあ？散々殴られたり落ちたりしたのに壊れてなかったのに。」

一応電源は入るし、操作も受け付ける。が、ちゃんと動いてくれるかどうかは、動かしてみなければわからない。

「じゃあちよつと試して……。」

「ダメ！」

「だよね。わかった、大人しくしてる。」

「まあ何はともあれ、無事でよかった。」

「うん、心配してくれてありがとう。」

「なにかあったら、すぐ呼んでくださいねー。」

じゃーねー、と帰っていく一同を見送り、壊れたバディライザーの画面を見つめる。割れたガラスに自分の顔が映る。

「ミカ、行かなくていいの？」

「ううん、もうちよつといる。」

バディライザーを持つ手に、ミカが手を重ねてくる。

「うん・・・ちゃんと脈あるね。」

「うん。」

「ちよつと見せて。」

「なに？痛い痛い首が折れる。」

突然顔を掴まれ、瞳を覗き込まれる。目と目が合うシチュエーションって、もつとド

キドキするものじゃなかったっけ。

「瞳孔も開いてないね。」

「今まさに開きかけたよ……。」

「心臓も……動いてるね。」

「ああ……。」

シンジの胸にミカは耳を当て、シンジもそれを受け入れる。今気づいたけどドキドキするシチュエーションは、生きていることを確かめると似ている。

「ねえシンちゃん……死んでる間どうしてた？」

「なにそれ？どうしてたって、死んでたら何も出来ないじゃん。夢は見てたかな。」

「どんな夢だった？」

「……哀しい夢かな。あまり思い出したくない。」

「ボクは……ずっと辛かった。数時間しか経ってないはずなのに、もう何年も離れ離れだったような気がする。」

「昨日も言ったけど、シンちゃんには危険から離れてて欲しいんだ……。」

「……どのみち、しばらくは戦えないよ。」

「今はね、でもこれからどうするのか、シンちゃんはどうしたい？」

「僕は……。」

「ごめんね、ボクのワガママだよ。決めるのはシンちゃんだから、気にしないで。」

「ふわああ……安心したらなんだか眠くなってきた。」

「寝てないの？」

「眠れなかった……昨日はね。」

「なら休んだら？」

「そうする、おやすみ。」

「そこ僕のベッドじゃないのか。」

「ぐーぐー。」

わざとらしく寝息を立て始めた。ちよつと外へ出ていよう。

「いっしょに寝てくれないのー？」



『承知しました。』

「あー、でも一回着替えを取りに帰るよ。」

『用意しておきます。』

「えーつとそれと……。あのさあ、」

『はい?』

「もしも僕が二度と戻れなくなったら、チョーさんどうするの?」

『なにも。』

「え?」

『なにもしません。私は、シンジさまが『いつてきます』とおっしゃられれば、お戻りになるまでに部屋を掃除し、夕飯の支度をし、いつお戻りになられてもいいよう、スープを温めておくだけです。』

「そっか……。ありがとう。」

『どういたしまして。』

通話を終え、柵の向こう見える景色を見て思いをはせる。

「あの夢はなんだったのかな……。」



妙に質感がリアルだった。感じた恐怖も、哀しさも。

「……最近こんなんばかりだな……。」

空が青いなあ……。

「ここにいたの。」

「ん？ゼットンさん……。」

いつの間にか、すぐ後ろにゼットンさんがいた。

「えっと、こんにちは。」

「ええ、こんにちは。」

あまり話したことが無い、というか掴みどころが無くてよくわからない。

「お見舞いに来てくれたそうで、ありがとうございます。」

「いい、その時あなたは……。」

「今は、平気ですけど。」

心配して来てくれたのだから、やっぱり優しい人なんだろうけど。

「……。」

「……。」

何話せばいいんだろうか。

「空が青いですね……。」

「そうね……。」

ゼットンさん、わかっていることは、すごく強いってこと。そんな強い人には、周りはどう見えているんだろうか。

「あの、ゼットンさん。」

「なに？」

「ゼットンさんに怖い物とか、怖い体験とかってあるんですか？」

「……。」

黙り込んでしまった。怒らせてしまったか？

「リゼ料理……。」

「え？」

「なんでもない。なにかを恐れることは、とても当たり前のことだと思う。」

「はあ……。」

「もう行く。」

「あつ、ありがとうございます。変なこと聞いてしまって……。」

「いい。それじゃあ。」

ピシユン、とテレポートでどこかへ行ってしまった。アギさん曰く、河原にいたことが多いらしいけど。

「着替え取りに行くか……。」

行つて、帰つてきて、まだミカは寝ていた。時間つぶしがてら、家の研究室から持ってきた怪獣の資料を眺める。

「蘇り……再生怪獣。」

死んだ怪獣が蘇ったり、蘇らされたりする例は何件かある。古代の眠りから覚めたミイラ怪獣ドドンゴ。バラバラにされた状態からゾンビのように蘇った海象怪獣デツパラス。海岸に流れ着いた死体が、落下のショックで蘇生したゾンビ怪獣シーリザー。

逆に蘇らされるパターンとして、生物の魂を奪い、その死体を操る幽霊船怪獣ゾンバイユ。人間の脳にバイオチップを埋め込み、手駒として操った邪悪生命体ワロガ。一番有名なのは、怪獣たちを蘇生させ、怪獣軍団を率いて人類に攻めようとした怪獣酋長ジェロニモンだろうか。ウララー

あるいは、ただの人間の死体を操っただけのシャドウマンというのもある。今の僕も、ひよつとしたらシャドウマンなんだろうか？ シャドウと同じ名前の……。

「お邪魔します。」

「邪魔するんやつたら帰ってや……ふにや……。」

「寝ながら反応するな！ いらつしやい、エレキングさん。」

「おはようございます。」

「おはようございます、もうお昼ですよ？」

「ただの挨拶だから。」

「アツハイ。」

ゼットンさんの次は、エレキングさんが訪ねてきた。

「ピグモンから聞いたけど、元気そうね。」

「はい、おかげさまで。色んな人が心配してくれたそうで、とてもありがたいです。」

「それはなによりだわ。」

ゼットンさんと同じ、クールな人だけど、大分話しやすい。今度はちゃんと目を合わせていられる。

「それで、今日はなにをしに？」

「そこで寝ている甘えん坊を引き取りに、ね。今日も予定があつたそうなの。」

「成程、さつきからずっと寝てますけど。」

「それだけ昨日は眠れなかつたんでしょう。けどそれはそれ、これはこれだから。」

今はとても安心して眠っている。

「あら？それは・・・何を見ていたのかしら？」

「これですか？これはちよつと、蘇る怪獣について調べてました。」

画面は割れているが、以前問題は無し。サツサツと情報をめくって見せる。

「自分が蘇つたことに、何か関係があるんじゃないかと思つて。」

「そう、それでなにかわかつた？」

「全然。こういうのとは関係ないのかも。そうそう、エレキングさんといえば、怪獣のエレキングの中にも、蘇った個体がいるみたいですね。」

月光怪獣再生エレキング。初代の個体が、月光エネルギーで復活した姿だ。電気のかわりに火炎で攻撃する。

「月を見て踊ったり、側転して得意げに笑ったり、なんかかわいいですね。」

「かわいい・・・かしら？」

「それからエレキングって一口に言っても、様々なバリエーションがあるみたいですよ。」

二酸化炭素を発する個体や、鋭いツメを持った個体。昼寝が好き、なんてやつもいる。

「中でもかわいいのがコレ、リムエレキング！手乗りサイズですつごいかわいいんですよー！」

「かわいい・・・。」

「エレキングそのものがかわいいですから。勿論エレキングさんもかわいいですけ

ど。」

「はあ・・・ついでのように褒めないでちょうだい?」

「うっ、ごめんなさい・・・。でも、エレキングさんをかawaiiと思ったのは本心です

よっ。」

「はあ・・・一言余計よ、あなたはまったく。今度は私をナンパしているのかしら?」

「あつ、いえそんなことは・・・あだつ!」

「うにやうにや・・・。」

「・・・ミカ、起きてる?」

背中を尻尾で殴られたが、ミカはたしかに寝ている。

「さて、そろそろその寝坊助を連れて帰りましょうか。」

「だつてさ、ミカ起きろ。」

「あと5分・・・。」

「少し、離れてくれるかしら?」

「これぐらい?」

「もう少し。そこ。」



一体何をするんだろうかと首を傾げたのも束の間、エレキングさんは尻尾を取り外すと、それを寝ているミカに巻きつけた。

「しびればびれぶー！」

眠れる古代怪獣が痙攣して跳び起きた。

「んもー、ちよつとシゲキ的すぎだよエレちゃんー！」

「はやく起きないからそうなるのよ。」

「大丈夫ミカ？」

「へーきへーき！これぐらい電気風呂みたいでちよいどいい湯加減だよ！」

「あら、なら毎朝やってあげようかしら？」

「丁重にお断りするよ！」

ふわあつと欠伸をして、ポリポリと顔をかいたりしながらミカは歩きだした。

「じゃあシンちゃん、またね。」

「うん、エレキングさんも、また。」

「ええ、またね。」

二つの背中を見送り、今度はゴモラのバリエーションについて調べてみようかと思いつく。

ジョンソン島で平和に暮らしていたのを、万博に展示するために連れ去られ、空輸中に落下したシヨックで本能が目覚めた古代怪獣。

見た目はゴモラそのものだが、腕からロケット弾や拘束光輪、ツノから破壊光線を発するゴモラⅡ。実は初代のようなゴモラザウルスではなく、微生物の変異体だという。

アンデス山脈で見つかったミイラが、大雨を浴びて蘇ったパワードゴモラ。その生態はのっそりとした水牛のようで、蘇生してほどなくして自然死してしまった。

元はとある国に生息する珍獣だったものが、テロリストの実験によって凶暴な怪獣に

されたしまった、というのもある。なんか聞いたことがあるというか、他人事のように思えない話だ。

また、タイに現れ、超能力を用いて天変地異を引き起こしたり、怪獣軍団を率いたりした・・・という未確認情報があるという。あまり触れないほうが吉だろうか。

総じて言えるのは大抵のケースで、ゴモラは人間の身勝手によって目覚めさせられたり、暴れたりしているということ。ゴモラだけじゃない、一部の怪獣も人間の身勝手な考えによって不当な扱いを受けたことがあるという。

「これは・・・トップシークレット・・・。」

ゴモラに関して、2つ3つ不明なデータが存在する。それらを纏めてもってきたが、中身はわからない。

「バデイドライドしたとき、ゴモラの体が燃え上がるのと何か関係があるのかな？」

間近で感じたが、あれは幻覚などではない。まるで太陽のような燃える熱気を感じた。

萌えるじゃなくて燃える。その熱に当てられて、僕自身も何でも出来て島のような錯覚に陥るぐらいだ。

「こんにちは、久しぶりだねシンジ君。」

「あ、ベムラーさん、お久しぶりです。」

次はベムラーさんが来た。最後に会ったのは、GIRLSへの所属が正式に決定したあの時だったろうか。

「突然の訃報かと思えば、情報が二転三転して驚いた。」

「その当事者の僕が一番驚いてますよ。」

お土産に持ってきてくれたすもも漬けを食べながら話をする。食事制限なんかはされていないし、食べても問題ないだろう、多分。

「この情報も無駄になってしまいかと思ったが、その心配もなさそうね。」

「なにか進展があつたんですか？」

「ああ、まっさきに君に伝えるべきだと思って。独占スクープだ。」

そう言つて、鞆の中から取り出したるは大きな封筒。中には写真と、数枚の書類が入っている。

「この写真は・・・？」

「それは小笠原諸島にある大戸島という島で撮られたものだ。その写真の、右上の部分をよく見てくれ。」

「右上？人が写つてただけですが・・・この人がもしかして？」

「そう、君の父だ。撮られたのは2か月ほど前のことだが、事前情報と99%一致している。」

何気ない観光写真に見えるそれに、とても重大な情報が載っていた。

「隣にいる・・・女性は？怪獣娘さんなのかな？」

「以前言っていた、フリドニアで暴れた怪獣娘だと思われる。今は一緒に行動しているんだろう。」

「いい年した息子がいる親が、妙齡の女性と一緒にいるって、なんか浮気調査みたいですね。」

「言うな、私だって気づいたけど言いたか無かったのに。」

女性の方の顔や表情はよくわからない。白いワンピースに、白い帽子という、絵に描いたような『少女』というべきその存在は、神秘のヴェールに包まれていた。様々な理由が重なったとはいえ、一国を滅ぼした、恐るべき『怪獣』だというのに、シンジもその美しさに魅せられようとしていた。

「とにかく、父は生きています。そういうことですね。この二か月の間に不慮の事故でもあってなければ。」

「そういうことだ。そしてかなり日本の・・・いや、君の近くにいる。」

「僕に会いに来たってわけではなさそうですけど。」

写真は一旦置いておいて、次なる興味は数枚の書類の方に移った。なにかの研究レポートのようだ。

「『怪獣と地球外鉱物の相乗関係』なにこれ？」

「ソウジ氏が研究していたが、学会へは未発表だった論文だ。半分焼き捨てられていたものもある程度復元できたんだ。」

「そんな技術があるのか。」

「色々あるんだよ。」

簡単にまとめるところだ。怪獣は、ある種の周波の波動を感知して現れることがあったという。その根幹を司る物質が地球外には存在し、それらが隕石となって地球へ降り注いでいるという可能性があるということ。

「そして、ソウジ氏は実際にそれを発見し、精製することによってある機械のパーツとした。」

「それが、バディライザー。」

「そういうことだ。怪獣を操る研究というのは、あくまで全体からみた一部分だった

のだろう。本来の目的は、別にありうる。」

「それは？」

「現在調査中。大戸島で見かけられたことと、何か関係があるのかもしれないが。」

情報をすべて封筒になおしてベムラーさんに返すと、窓の外を見た。あの空の向こうにいるかもしれない人を思つて。

「・・・父は何を考えているんでしょうか。」

「それは調査中だ。」

「そうじゃなくて・・・以前の話の続き。どんな人なんですか。」

「ああ・・・。」

少し、ベムラーさんの表情が変わったようだった。

「僕の事を、放置しているわけでもないし、構つてくれてるわけでもない。よくある、家族よりも仕事の方が大事つてやつなのか。」

「・・・。」



「お母さんも、あんまり父のことを話してくれなかったんですけど、父から手紙が来た時、すごく喜んでました。だから、お母さんは父のこと、愛してるんだと思います。」

話題を切り出した方がいいが、何を言えばいいのかわからない。頭の中でぐるぐるしていた考えをぶちまけていく。

「父にとつて、父の研究にとつて、これが大事なものなんだってわかります。それを託されたつて意味も、なんとなく理解してます。けど・・・その、父はこれを『うまく使え』とは言つても『どう使え』とは聞いてないんです。その、実際にそう言われたわけではないけど、そう言われたような気がするつてだけなんですが・・・。」

「そうか・・・。」

「本当は、本当はね・・・仕事のことでも、家族のことでも、どっちでもよかったんです。ただ、父が僕のことを見てくれたつてだけで。」

「でも、じゃあ、父にとつて僕は、都合のいい道具なのかなつて?」

「・・・そんなことは、ないさ。」

少し間があつて、ベムラーさんは応えた。はつきりと、強い言葉で。

「君の事を本当に都合のいい道具だと思つてゐるのなら、それこそ、『都合のいい道具』を使うさ。人間なんて腐るほどいるんだから。君は腐つた人間なんかじゃない。」

「何故なら、君の周りには『光』があふれている。目を開けて周りを見渡してみれば、いつでも見えるだろう。」

思い出せるもの、多くの友達、仲間たち。

「光あるところ影もあるが、君には影ができる隙間も無いほど、周りから照らされてゐる。私も、私自信をその一つだと思つてゐる。虚勢でもハツタリでもなんでもなく、君は一人じゃない。」

そういうベムラーさんの目はとても暖かった。

「それだけ。元気がでたかな？」

「はい、ありがとうございます。」

「ならよかった。また会おう、ではな。」

小さく手を振ってベムラーさんは行つてつしまつた。

少し、目頭が熱くなってきてしまつた。布団にくるまって目を閉じる。

悩んで複雑な事を言つてしまつたが、こんなにも簡単に言いくるめられてしまつた。

(ああ、こんなことに悩んでたんだな、僕。ちよつと疲れてるんだ。)

眠りの世界へと落ちていく。先ほどまでミカが寝ていたベッドだ、心地よい夢が見れそうだ。安心につつまれながら。

「焦げ臭つ、ひよつとして電気ショックのせい？」

この後滅茶苦茶洗濯した。

## ヴァージョンアップ!

パチン、パチンと駒を進める音が病室に響く。二つ音がしてからやや間があつて、一  
つ目の音が鳴るとすぐに二つ目の音が鳴り、また少し間が開く。

「・・・これで、どうだ？」

「はい。」

「んぐっ・・・。」

「どうする?。」

「いいや、待ったはしない待ったはしない。・・・どうすつかな。」

うーんと唸るシンジに対して、余裕のあるアギラ。相変わらずの寝ぼけ眼が、次なる  
出方を窺う。

「・・・こうするしかないかな。」

「王手。」

「ぐわあーん、だな。参りました。」

「と金をちよつと狙いすぎたね。」

「バレた?。」

「バレバレだよ。」

「男を手玉に取るなんて悪い女ね。」

「何それ、意味わかんない。」

「負けたシンジは折り畳み式の将棋盤を仕舞い、アギラは席を立つて部屋の中を見まわす。」

「それにしても、この部屋こんなに物が置いてあつたっけ？」

「色んな人が来てくれたから、どんどん増えてつたんだ。」

「そんなにいっぱい来て、迷惑じゃなかった？」

「全然、むしろ注目されて嬉しかったぐらいだよ。」

「それも今日で終わりだが。およそ一週間、毎日検査が行われたが、これといつて問題は見つからず、また起こらなかつたため、今日で入院生活も終わりを告げることとなつた。」

「でもこんなに持つて来られたら、返しに行くのも大変だね。」

「ほとんどは『くれた』つてことになつてるけど。この漫画とか。」

「『おまピト』……ウインちゃんから？」

「そう、全刊持つてこられてもなあつて。」

『少年ツブラヤ』の本誌は読んでいないが、どちらかというとおまピトと同じくツブラ

ヤ連載の『マッスルマン』の方が好きだ。ミクラスも好きだったようで、その話でたまに盛り上がる。

「読んでみたら結構面白かったけどね。」

「そうなんだ。こつちのぬいぐるみは？」

「それはレッドキングさんとザンドリアスから。僕が特訓に来なくなった分、よけいにしごかれてるってザンドリアスが泣きついてきたんだよ。」

「はやく戻ってあげられるといいね。」

「うん、僕もそう思う。」

他にも色々来てくれた。GIRLSで出会った怪獣娘さんたちや、お偉いさんがたも。今もこうしてアギさんが来てくれた。

「荷物はこれでおつけーつと。」

「忘れ物ない？」

「大丈夫、あつても取りに来れる場所だしへーきへーき。」  
病院を後にし、帰路に就くこととする。

「・・・。」

「どしたの、アギさん？忘れ物した？」

「いや・・・そんなんじゃないんだけど・・・。」

アギラの見つめる先にあつたのは、赤くそびえ立つ塔。東京タワーである。

「タワーがどうかしたの？」

「なんか・・・嫌な予感がしてて。」

「嫌な予感？」

「前もこんなことがあつて、その後シャドウが現れたから・・・。」

「虫の知らせか・・・。」

東京タワー、色んなことを思い出させられるのは言わずもがな。

「あそこで、アギさんに助けられたんだよね、僕は。」

「ん？」

「いやさ、色んなことあつたけど、あそこでの体験が一番キツかったかもって。」

「展望台から落ちたもんね、シンジさん。」

「でもアギさんが助けてくれたし。あの時の自分の情けなさといったら・・・。」

「そんなことないよ、あの時誰よりも早く動いたのはシンジさんだったじゃない。」

「でも、それ以降がダメダメだったし。」

「ボクだって、他に何かが出来たわけじゃなかったよ。せいぜいシンジさんたちが落ちた時の衝撃を少しだけやわらげられたぐらいだろうし・・・。」

「？ 無事に着地できたのって、アギさんのおかげじゃないの？」



「ボクにはそんなことできないよ。」

「じゃあ、あの時感じた暖かい感覚はいつたい?」

「それは・・・ボクも感じたかな。」

ちよつと、衝撃的だ。今まで勘違いしてたの? いや、もつと不思議なことに出会っていたのか?

「だから、シンジさんも特別な人間なんじゃないかなって、思ってたんだけど。」

「そんなまさか、ただの人間だよ僕は。」

「前はそうだったかもしれないけど、少なくとも今は違うよ。」

「・・・そうだね、僕の周りにはいろんなものが溢れてる。」

腰からバディライザーを取り外して見つめる。

「まずは、これを直すところから始めないとね。明日からまた頑張るよ。」

「うん、頑張つてねシンジさん。」

じゃあね、と別れた2人。

「嫌な・・・天気だな。」

「何かが起こりそう、とてつもない何かが・・・。」

だがその2人は、違う場所から同じところを見ていた。東京タワーの上を集まる、マガマガしい黒雲を・・・。

|| || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || ||

この宇・・・球に危機が・・・いる

かつて我・・・戦った・・・の・・・が・・・

君に先行し・・・査・・・を・・・

わかりまし・・・輩方の・・・

「今度は、何の夢だ? いや、夢だったのか? いや、それよりも……。」  
深夜2時を周る頃だったろうか。自室で目を覚ましたシンジは、すぐさま研究室へと向かった。バディライザーをその手に持って。

「コレが……原因です。」

「何かの、部品ですか?」

翌朝、シンジがピグモンに提示したのは、指先よりも小さいチップだった。

「これは、バディライザーの中核ともいえる、『シンセナイザー』という部品だそうです。」

怪獣の魂とシンクロし、それを操ったり強化したりする、バディライザーの根源。その正体が、こんなちっぽけなチップだった。

「ここから逆に流れてくる怪獣娘の激しいエネルギーの奔流が、僕の体を痛めつけていた。簡単に言うところいうことだったんです。」

「どうして、そんなことがわかったんですか？」

「夢で見た……って言ったら、笑いますか？」

自分が言っていることに、自分でバカバカしくなっている。正式な部隊であれば謹慎を命じられているような『ありえない』理由だった。だがピグモンさんは真剣な面持ちで聞いてくれている。

「最近……よくない夢を見てるんです。怪獣娘さんたちがみんな暴走したり、その暴走した怪獣娘さんを『裁く』光が現れたり。それで昨日見た夢が……。」

机の上に置かれたバディライザーをつつく。

「……ただの夢とも思えない、何かげっさりするような恐怖心でした。」

「だから、戦うのをやめたいと？……ピグモンはそれでもいいと思います。」

「以前もこんなことがあって、その時もシンシンは戻ってきてくれました。」

「でも、ちょっと違うのは、前は周りの怪獣娘への危険を考えてのことでした。」

「今回は、シンシン自身の命に関わる問題です。だから、ピグモンには何も言えませんでした。」

「また辛い役割だったな、ピグモン。それだけ、信頼されてたつてことなんだろうけどよ。」

「けれど、もしシンシンが戻ってきた時、ピグモンはこれを返せるかわからないです……。」

ピグモンの手にはシンセナイザーが握られていた。

「それに、シンシンが言っていた夢のこと。ピグモンも思い過ぎだと思えないんです。」

「怪獣娘が皆暴走する世界と、光か……。」

「このことは、誰にも言わないで欲しいのです……とくにゴモゴモには。」

「もう聞いちやつてるんだなあ、これが。」

「盗み聞きなんて、いつからそんな悪い子になったんだゴモラ？」

「悪い子は私だけじゃないし？」

ぞろぞろと壁の向こうから人が出てくる。

「アギアギたちに、エレエレも。」

「別に立ち聞きしていたわけではないわ。たまたま聞こえてしまっただけ。」

「自分が止めたくせに・・・。」

「ミクちゃん嘯みつかないの、ボクたちが出てつたら余計シンジさん混乱させちゃうただらうから。」

「ゴモゴモは、シンシンのことで平気なんですか?」

「んー、私はむしろホツとしてるかなー。シンちゃんが戦いから離れてくれるのなら。」

「本当ですかあ?」

「ホント。」

(本当にそうかな?)

ゴモたんがもしも喫煙者だったらタバコを逆さに啜えていそうなぐらい、アギラには動揺しているように見えた。いつも素直なゴモたんが珍しく己を隠している。半分は本心だから平気でいられるのかもしれないが。

「それにしても、シンジさんの見た悪い夢って・・・。」

「アギラの言う通り、東京タワー周辺に異常がないかチェックしているところだ。けど、そんなことしなくてもいいぐらいピンピンに感じてるぜ・・・。」

窓の外を見上げてみれば、昨日よりも暗い雲が巻き起こっている。

「事態が急変するのも時間の問題になりそうですね……。」

「これはもう用意しておいた方がよさそうだね。」

「避難準備も進めておいた方がよさそうね。」

思い過ごしであつたならそれでよし、常に最悪の事態を想定して動く。

得てして現実是最悪の更なる上を行くのだから。

(シンちゃん……これでいいんだよね?)

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

その数時間後、観測所は東京タワー上空に異常なエネルギーの高まりを感じし、G I R L Sもそれを受けて怪獣娘を派遣した。事前の用意もあり、避難は滞りなくすすめられた。

そんな喧騒から離れた河原に、シンジはひとり佇んでいた。天を指すようなビル群に挟まれたこの場所からはその騒ぎは見えない。

『観測史上最大規模のシヤドウ反応です!』

『都外に散っている怪獣娘にも応援要請を!』

『現在避難状況は全体の70%。完全に避難しきるまで1時間ほどかかると思われま  
す!』

「……。」

ビデオシーバーをオープンチャンネルに合わせ、その内にスイッチを切った。

「……どうしようか。」

切ったからと言って足が動き出すわけでもない。膝を抱えたまま川の水面を見つめる。ゆく川の流れば絶えずして。こうしている間にも、タイムリミットは刻一刻と迫っている。

今の自分に何ができるのか、そんなことはわかり切っている。けど、そこまで行ける勇気がない。それ以前に、果たしてその答えが最適解かもわからない。実際僕が行かなくてもなんとかなると思う。

ではこの心に重くのしかかる不安感は何だ？あの夢の意味は？

「怪獣娘の、暴走……。」

暴走という言葉が使われているが、はたしてそれは『暴走』なんだろうか？怪獣は元々強く、荒ぶる生き物だった。そりゃあ、モノによっては大人しいやつや、友好的なやつもいる。けれど、『初めてあらわれたゴモラ』が古代の眠りから覚醒し、暴れまわったように、『暴れている方が本来の姿』とも考えられるのだ。

あくまで『暴走』という表現は、人間の側から見た言葉、いわば人間のエゴなのかもしれない。



こうして考え事をしている間は、目の前の問題から目を背けていられる。じゃあそろそろ現実に戻ってこよう。行くのか、行かないのか。行けないなんてことはない。自分には足が生えてるから。

「けどこの力を使ったら、ヤバいことになる。」

さつき考えた暴走の話、それが『本来の力を引き出す』ということならバディライザーとは合点がいく。解き放つことも、従えることも出来るこの力は、闇であり、光である。一つ間違えば、あの悪夢のような光景をも作り出せる諸刃の剣。触れてはいけないパンドラの箱。プロメテウスの火。禁断の力。

「これを使うことは、本当に正しいんだらうか？」

自分が危険に置かれるという意識はさらさら無い。ここで死ぬつもりもない。ただ怖いだけ。

自らの手で世界の破滅のトリツガーを引くことでも、戦いの中で自らの命を散らすことでもない。あの、絶対的な力を持った『光』が怖い。

「やつば……ダメ……だよな……。」

ビデオシーバーに当てていた手をどける。ここで待つて居よう。呼んでいないくても、明日はやつてくる。

「けど、自分の明日は自分でしか掴めないぜ？」

「えっ？」

いつの間にか、背後に人が立っていた。黒いコートに、帽子を被り、首から金属のなにかをぶら下げている、若い男性だ。しかしその立ち振る舞いには、長年旅をし続けてきたような渋さも感じる。

「限界を超えた時、初めて見えてくるものがある。掴みとれる、力が。．．昔ある人から聞いた言葉だ。」

「限界を超えた時．．．。」

「あんたにも、越えたい壁があるだろ？叶えたい夢も、掴みとりたい未来も。」

そういつて、男性は．．．その風来坊は、ピンを渡してきた。ごく普通のラムネだ。

「ありますよ、途方もなく遠い夢が、たつくさん。」

「たとえば、どんなんだ。」

「．．．世界中の怪物娘さんと友達になる事。」

「素敵な夢じゃねえか。」

カポン、つとラムネを開けて飲む。ずっと昔、ミカとも一緒に飲んだことがあったっけ。その時と変わらない味だ。

「けど．．．僕に与えられたのは、『闇』なんです。人が手にしてはいけない、振るっちゃいけないような、禁断の力なんです。そんなの、僕みたいな軟弱物が使つていい権利も無いんです。」

「力には『権利』なんてないぜ、あるのは持つべき『責任』だ。一度生まれた力なら、いくら地の底奥深くに埋めようと、いずれ誰かが掘り返す。そいつが『責任』を負えるとも限らない。」

「だとしても……!」

「それにな!」

風来坊は、一層強い語気で言い放った。

「たとえば闇だつて、力尽く消せばいいつてわけじゃない。逆に抱きしめて、自分自身が光を放てばいい。そうすりゃ、闇は生まれなくなる。」

シンジは、いつの間にか風来坊の目を見ていた。暗黒の宇宙に浮かぶ幾千もの星の輝き、それが、見えた。

「闇を……抱きしめる。」

「そうだ、人間には皆、そんな力があるんだ。『愛』つていう、この宇宙で唯一永遠なものだ。」

「『愛』……。それつて、どこにあるんですか?」

嘘、もう知つてることだ。

「さあな、自分で見つけろ。あばよ、少年。」

風来坊は、振り返らずに去っていく。

「あの!あなたの名前は!」

「誰でもない、ただの風来坊さ。」

「いつかまた会うだろう。地球は、丸いんだ。」

♪

ハーモニカの音色が聞こえてきた。少し切ない、けれど、どこか懐かしいような不思議なメロデー……。

「ここにいたか、シンジ君。」

「ベムラーさん。」

土手の下にバイクが急停車し、ベムラーさんが声をかけてきたので振り返った。その



「？」

東京タワーの大展望台に、デカデカとそいつは巢食っている。ヘドロのような気味の悪い物質が糸を引き、巨大な玉のような形をしている。その表面にいくつか発光体をもち、そこから火の玉が飛んでくる。

「やっぱりダメです！レーザーショットが弾かれます！」

「近距離もダメ、遠距離もダメってなるとどうすりやいいんだよ！」

「いつそ地下から進むとか？」

「超振動波の本来の使い方ー！」

誰かが口にした案を即断即決して、地下特攻隊が組まれることとなった。

「いやー、地下からなら安全に進めるね！」

「ここには攻撃が来てませんね。」

「地下のトンネルを掘ったら、直上して攻撃に移るよ。」

ようするにいつものゴモラ+かぶせるが1人ずいつもの3人だ。

「あともうちよつとかな？アギちやんたち、準備しといてね！」

「おっけー！」

「ん・・・？」

「どうかしましたか、アギさん？」

「今、なんか変な音が……。」

超振動波が掘削する音とは異なる、別の音。

「上？」

『オマエら！すぐそつから離れろ！』

「へ？わあ！」

トンネルの床を突き破って、触手が伸びてきた。

「これもシャドウ?!」

「ゴモたん！」

「そつち行けない！アギちゃんたちは逃げて！」

「でも！」

「いいから早く！」

この密閉空間で瞬く間に分断され、ゴモラは孤立する。

「こりやちよつとヤバいかも。」

前へも後ろへも行けない。となれば、行く道は一つしかない。

「上つきやないよね……！」

ズドドドつと真上へ掘り進んで追撃を回避する。

「危機回避！つとはならないか……。」



外に出たということは、また弾幕に晒されるということ。しかも外に出たことでようやくわかったが、シャドウの姿は大きく変化していた。雷龍のような長い首が生え、全身が鉱物のように硬質化している。背部からは触手が生え、発光器官も大きくなっている。

「進化……いや、分裂しようとしてる?」

「下がれー!ゴモラー!狙われるぞー!」

言われなくてもスタコラサツサだぜー!という応える暇もなく火球と触手の波状攻撃が襲ってきて、ゴモラは走り回るだけだった。

「とつとお!お?」

「ゴモラ、平気?」

「ゼットンちゃん……ナイスアシスト!」

攻撃に飲まれる直前。ゼットンさんがレポートで割って入って、そのまま無事に後退できた。

「ナイスだぜゼットン。」

「ゼットンも来てくれたんですねえ!」

「けれど、これは厳しい。」

「はあ……はあ……時間を置くごとに、だんだん進化していつてる?」

「はやくなんとかしねえと・・・いつそ特攻するか？」

「それは危ないですよ！」

助けに入れば、そいつも危なくなる。リスクを冒してでも一心に突撃するしか、突破する方法はないと思われた。

「囨にはオレが行く。隙を見てゼットン、お前が攻撃しろ。」

「・・・。」

「なんだよ、なんか文句あるか？」

「危険が大きすぎる。リスクにリターンが見合わないわ。」

「エレ、お前まで弱気だったのか？」

「現実的に考えてそうなるってことよ。ゴリ押しと力押しは違うわ。」

「なにい？」

「ああ、なんか険悪なムードに・・・。」

「こんなことしてる場合じゃないのに・・・。」

「・・・あつ、あれ。」

「ん？」

「こんな時こそ冷静であってほしいわ。」

「オレは冷静だ!」

「はいストーツプ! 喧嘩はそこまで!」

ベムラーさんのバイクの後部席からシンジが呼びかける。

「濱堀シンジ、ただいま到着しました!」

「私立探偵から運送会社に鞍替えした方がいかしら?」

「シンジさん、来たの?」

「来たよ!」

「なんで来たのシンちゃん!」

「僕がやりたいから! っつてことでピグモンさん、シンセイザー返して。」

「はい☆どーぞ、ですう!」

「ピグモンちゃんも!」

受け取ったチップをテキパキとバディライザーに組みなおす。画面が割れたままだが、それは今はいい。再起動させて状態をチェックする。

「システムは問題ないな・・・いけるいける!」

「シンちゃん、自分が危ないってこと、わかってるんでしょ?」

「わかってるよ、自分の身は自分で守れるから、ゴモラは自分の戦いに集中して。」

「そうじゃないよ！心配なんだよボクは！」

「じゃあ、ミカは僕と立場が逆だったら、黙って見てられるの？」

「それは・・・。」

「僕も同じだよ。なんでこの力を手にしたのか、どうして僕なのか。あれからも何回か悩んだ。けど、その度に出す答えは同じだった。」

「やっぱり夢を諦めたくない。怪獣娘全員と友達になるって夢。」

一周まわって元の場所に戻ってきたけど、それでいい。これが、本当の僕なんだ。何度迷っても、時には立ち止まっても、必ず帰ってくる。多分螺旋階段をぐるぐる回ってる。

「だから、みんなの力を貸してほしい。次に進むために、明日をさがすために。」

しばし沈黙があつて、意外なところから返答は来た。

『いいよ！わたしの力貸すよ！』

『私のも使つて！』

『この力、ゆめゆめ粗末にしてくれるなよ？』

「えっ？誰？」

「さつきまで、ここ一帯にいる怪獣娘全員と通信が繋がつてたんですよお。指示のた  
めに。」

「みんなに聞こえてたみたいだな、さつきのセリフ。」

「あつ・・・なんか恥ずかしい・・・。」

「いいじゃん、それがシンジさんの気持ちなんですよ？」

「私たちだって、同じですよ！」

「みんなで掴みとろう、未来を！」

「みんな・・・。」

今この場にいるのは、アギラ、ミクラス、ウインダム、レッドキング、エレキング、ピグモン、ゼットン、ベムラー、そしてゴモラ。それぞれの顔を見まわして、皆頷いてくれる。通信の向こう側からも、たくさんの人から応援が来ている。

「ありがとう・・・!!」

その時、不思議なことが起こった。

「!、これは!」

腰のカードホルダーがブルブルと震えている。恐る恐る触つてみると、

「どわっ!!」

「うわっ!なんかいつぱい出てきた?!」

何十枚というカードが飛び出てきた。それぞれに違う怪獣、超獣、宇宙人の絵が描かれ、それらが宙に浮いている。

「レッドキング・・・オレのか!」

「私もある・・・」

「まさか、今ので全員のカードが出来たの?」

「よーし、これなら・・・」

「シンジさん、まさかこれ全部を?!」

「無茶だけど、無理じゃない!多分。」

「止めても無駄そうだね。」

こいつは僥倖だ!絶対に勝つ!取り出したバディライザーに、スツとゴモラが手を重

ねてくる。

「シンちゃん……。」

「ミカ、止めてくれるなよ。もう覚悟してんだから。」

「そうじゃなくて、これ終わったら、今度こそ焼き肉食べに行こう!約束!」

「……ああ!」

「いくぜ、みんな!」

前に掲げたバディライザーに、全てのカードが集まっていく。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!バディライド!」  
「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

闇を抱きしめる。今までこの力を、半分忌むべきものだとも思っていた。それは、父への思いと重なっていたのかもしれない。

さんざんほっぴり出して、今だって連絡一つ寄越さない、横柄な父への怒りだったの

かもしれない。

けど今なら、父の気持ちに少しだけ触れられた気がする。

解き放つのも、従えるのもなく、怪獣娘とひとつになるための力。

それがバディライド、そしてその時は今なんだ！

「怪獣娘の力、お借りします！」

口から自然にこんな言葉が出た。不思議としつくり来る言葉だった。

「ぐっ……うっ……なんつーエネルギーだ……！」

今までのとは非じゃない衝撃が腕を振るわせ、体にまで沁み込んできた。

「これは……怪獣たちの記憶？ いっぱい流れ込んでくる……。」

様々な風景、感触、感覚、すべてが脳内に流れ込んでくる。時には山で、時には海で、時には街で。火を吹く、光線を吐く、怪力を振るう。皆それぞれ違う能力を持った怪獣としての記憶。あまりの量に全てを詳細に確認することは出来なかったが、それらほぼすべてに、共通することがある。

「光の……巨人。」

その多くが、かつて光の巨人と対峙していたという記憶。その時の記憶が、特に鮮明



に映し出された。

「夢で見たあの赤い光の玉と、同じ……。」

そして確信した。あの夢の意味と、今自分が何をすべきなのか。

「……みんな、行ける?」

「おう! パワーが溢れてくるぜ!」

「感情も、意識も高まっているのを感じるわ……!」

「怪獣娘全員と、もつともくくくつと仲良く気分です!」

『うおおおおお! バーニンニング!』

『なんか……気持ちいいかも……!』

『昂る……昂るぞ!!』

パワー全開! 皆120%でいける!

「パワーアップしたのはいいけどよ、なんか作戦あんのか?」

「作戦、というか、あいつのパワーの根源には心当たりがあります。」

「マジで!?!」

「そこを断つことが出来れば、勝機も上がるかと。」

「確証はあるの?」

「僕の予想が当たっているなら、間違いないかと。」

「……。」

「あーわかった！これなら上手くいきます！命かけてもいいから！」

「また小学生みたいな文句を……。」

「冗談よ、試しただけ。」

「じゃあ全員聞いて、あいつは……。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『ギギイイイイイイイイイイイイイイイイ!!』

作戦会議している間に、首長竜型シャドウビーストは、球体から分離して地上に降り立った。額と腹の部分に大きなコアのようなものも出来ている。だがこいつの対処に関しては、普段通りのシャドウビースト戦を思い浮かべいいので割愛する。

ここで相手にするべきは球体の方。大切な要素は三つある。第一、まずは火球攻撃についで。

「オラオラア！どこ狙ってやがるノーコンがあ！」

「タネが割れば目え瞑ってても避けられるね！」

火球にも三種類の飛び方がある。一つは、標的に対して真っ直ぐ飛んでくるストレート。二つ目は、標的の動く先に飛んでくる偏差型。三つ目は、全く関係ないところに飛

んでいく目くらまし。

要はこの内の二つに注意していれば避けるのは問題ない。常に動き続けて、時折降りかかる火の粉を払えばいいのだから。

「そーれ!そーれ!風船どうぞー!」

「しかもやたらめつたら動くものに反応してるから、ただの風船でもデコイの役割になつてくれる。」

「ピグモンも、みんなの役に立てて嬉しいですう!」

「こーやってオレたちが囷になつてる間に……。」

「アギちゃんたちが!」

第二、触手について。

「ダイノダツシュ!」

「バツファアローフレイム!」

「レーザーショット!」

戦いの最中、突然触手が生えてきていた。それと同時に、地下から近づこうとしていたゴモラ達の接近にも気づいた。迎撃するために触手を伸ばしたのか?違う、逆なのだ。

「ヤツは、集まった敵の数に対応するために、大量の火球を発射している。それも、か

なり正確に狙ってきている。」

「あの発光器官は『口』だ。火球を吐き出す発射口だ。では『目』はどこについているのか？それが『触手』なんだ。」

「つまり、触手で敵を感じて攻撃してきている、ということね。」

「そう。イソギンチャクと同じで、触手が触角の役割にもなっているんだ！」

エレキングさんが尻尾ムチを振るい、触手も火球もまとめて薙ぎ払う。

「エレキングさんは両方やれるのか……。」

「こつちだつて負けないぐらい千切つてやるもんねー！」

「つて、こつちに攻撃が来ましたよ！」

「させるかあー！」

作戦はこうだ。飛び道具持ちや素早いアタッカーは触手を攻撃し、レッドキングやゴモラなどのパワー系怪獣はタンクとして火球をひきつけて援護。

「目立つのなら得意だよ！」

「ちよつと、忙しいわね。」

『イけるイける！私にも出来ちゃう！』

『カ・イ・カ・ン♡』

『よき力だ……。』

ぶつつけ本番、打ち合わせ無しでも皆お互いをカバーし合いながらうまくやれている。全員同時にバディライドしているおかげで、心が近くなっているのかもしれない。

「おっと、コイツの相手もしてやらねえとな。」

「調査チームのエレちゃんに負けてらんないっしょ！こっちはまかせて！」

山を蹴散らし、ビルをなぎ倒さんとする巨大なシャドウビースト。火を吐き、首を伸ばして攻撃してくるが、こんな単調な相手に後れを取る大怪獣ファイターではない。

『あーあー、こちらベムラー、もうすぐ目的の場所に着くぞーぞー。』

「こっちもOKです、いつでも始めてくださいどぞーぞー。」

『だってさ、行くよゼットン。』

『わかった。』

そして第三、ヤツのエネルギーはどこからやってきているのか？

ある一点を拠点として動かず、遠距離攻撃で敵を寄せ付けないというスタイルは、以前遊園地で暴れた眼球シャドウと似ている。遊園地のやつの場合、地下から電気をよせ集めて己の物としていた。

「園内に固まって現れたやつらは、電気のケーブルを奪っていたんだ。」

さらに、観覧車下の地中で、集めた電気を使って電磁力を発生させ、操っていたというのが正体だった。

今回の東京タワーに巣食う巨大な球状シャドウも、同じくどこかからエネルギーを集めていると考えられる。

「けど違うのは、『地下』からじゃなくて『空』から得ているということ。」

そのための東京タワー、日本有数の電波塔と言う舞台だ。

「見えたよ。すごいエネルギーが渦巻いてる。」

「読み通りです。」

『すごいね、天才少年。』

「それほどでも。」

先行してタワー天辺のアンテナの確認に向かったベムラーさんが目撃したのは、空、いや宇宙から降り注ぐ膨大な宇宙エネルギーだった。そしてアンテナの下部に、シャドウの黒い糸のようなものが絡まっている。

『ここ数日の不穏な天気も、このエネルギーの仕業だったってことね。』

「果たしてシャドウが呼んだものなのか、それとも自然に降り注いできたものをシャドウが利用しているだけなのか、定かではありませんが……ともかく、アンテナの『解体』を。」

『了解、手早く終わらせようか。』

波動エネルギー、ダークマター、あるいは恐怖の宇宙線か、宇宙には未知なるエネル

ギーが存在するという。それがこのような形で人類に牙を剥くこととなった。自然は必ずしも、人間の味方とは言えないのだろう。

『修繕費用とかもろもろ、GIRLSの方が持つてね!』

「だいじょぶです!上にはピグモンが説得しますから!」

『なら安心だな。つと、こつちにも気づいたか。』

一旦通信を打ち切り、ベムラーは目の前の事態に集中する。先ほどの間での地上の地獄絵図と比べれば、今自分に向かってきている刃は雀の涙のようなものだ。しかし今は回避に専念しておく。

「こうしてこうして・・・ヒューツ!スリル満点!じゃ・・・あとはよろしく。」

「問題ない。」

アンテナ周辺が手薄になった瞬間、テレポートで現れる一つの影。当然、ゼットンさん。

「トリリオン・バースト・・・!」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

上空に強烈な爆裂音が響いて、誰もが一瞬視線を上をやった。それが出来るだけの暇がみんなにはあつた。

「やった……！」

そう誰かが口にした。ひよつとしたら誰もが言ったのかもしれない。

「見て！シャドウの様子が！」

「縮んでいく……。」

見る見るうちに球体シャドウは収縮していった。明らかにパワーダウンの状態だ。発光器官から火球は途絶え、触手もへなへなと萎れていった。

「チャンスだ！一氣にたたみかけろー！」

「「「「「「おー!!」「」「」「」」」」」」

レッドキングさんの合図を皮切りに、怪獣娘たちの一斉攻撃が始まった！先ほどまでとは逆の、火炎放射やビームの波状攻撃だ！

「最大出力レーザーショット!!」

「放電光線！」

「風船！風船！」



「ピグモンさん、もう風船はいいから。」

わずかにしがみついている球状シャドウの糸を切り裂き、飛び道具のない怪獣娘も、ビルの上から手あたり次第に物を投げまくって追撃する。

『はいみんな下がって——!』

おまけに空から壊れたアンテナが降ってきて、展望台にくつついていたシャドウ本体もとうとう地に落ちた。発光器官は、命が尽きたように止まった。

「あとはコイツだけだな!」

「こいつはまだ元氣そうだね。」

分離したことでエネルギーも独立したものとなったのか知らないが、バックアップのいなくなったタンク役などただの的だ。

「これでとどめだ! 本家本元の、アースクラッシュャー!!」

「超振動波ア!!」

大地が裂けんばかりの二大怪獣の必殺技が炸裂!!! 長かった戦いよ、さらば!!!

「勝った!」

首長竜シャドウビーストは、腹を地割れに破壊され、首を超振動波でもぎ取られて倒された。誰が勝者なのかは、火を見るよりも明らかだ。

「やったやった! やったよ!」

「勝ちましたね!! 私たち!!」

「なんとかなって、よかったね!」

最後の一撃が決まった時、一斉に歓声が湧き上がった。

「パ、パワー切れ・・・。」

「シンちゃんだらしない! もっと誇りなよ!」

「そうだぜ! 今回の功労者はお前だ!」

「あいてっ! ちよつと強く叩きすぎですよ。」

「あなた、中々やるのね。冷静で的確な判断だったわ。」

「君は本当によくやったよ、ここにいる皆が保証する。」

「エレキングさん、ベムラーさん・・・ありがとうございます。」

ただ、自分に来ることをやっただけだ、本当にがんばったのは戦ってくれたみんなだ。

「みんな・・・本当にありがとう!」

「うんうん! 帰って焼き肉行こうね!」

「ああ、今日はオレが奢ってやるやるよ! 好きなだけ食いな!」

ほんの一瞬前まで戦場だったビル街に、楽しい笑い声がこだまする・・・。





しかし、暗雲はまだ晴れない。

「!？」

「なに．．．これ．．．?!」

ドクン．．．ドクン．．．と心臓の鼓動のような寒気がやってきた。

「もう．．．終わったはずでしょ．．．？」

「はあ．．．はあ．．．。」

それは、墜落して朽ちていくだけだったはずの球体から発せられている。

「みんな・・・構えろ、第二ラウンドだ・・・。」

「ただでさえ消耗しているっていうのに。」

やがて球体はひび割れ、中から瘴気とも言うべき禍々しき気配が漂ってくる。

「あれは・・・。」

「人型の・・・シャドウ・・・？」

二本足で立ち上がり、真つ黒で堂々たる体軀を見せつけてくる。肩からは邪悪な赤いツノが生え、その両腕には鋭利なハサミを持ち、顔には表情など微塵も感じさせることのない球体が嵌め込まれ、代わりに胸には目のような発光体がある。

『ゲッゲッゲッゲ・・・』

「いくぞッ！」

「みんな！気を付けて！どんな能力があるかもわからないよ！」

先鋒はレッドキングが務める。岩山をも砕くその拳を顔面に叩き込むつもりだったが、

「クツ、かわされ、ぐあッ！」

人型シャドウ・・・『シャドウマン』か。シャドウマンは一瞬でレッドキングの背後をとって右腕を振るう。

「テレポート、そいつはさんさん見てきたぜ！」

すぐさま体勢を立て直したレッドキングはリアットで反撃する。

「ぐっ・・・なんつーパワーだ・・・。」

『ゲッゲッゲッゲッ・・・』

「何笑ってやがん、だッ！」

組み付いた状態から、レッドキングは頭突きをくりだした。が、シャドウマンは大したダメージを受けた様子もない。

『ゲツゲツゲツゲ．．．』

「ぐわっ！」

「レッドキングさん！」

「援護します！」

頭部の球体からレーザーを発射してレッドキングを撃った。そこへすかさずかぶせるが、割って入った。

『ゲツゲツゲツゲ．．．』

「何!?!」

「増えたあ?!」

「分身ですか!」

なんと、戦線に新たに加わった3人に対して、シャドウマンも3人増え、それぞれがそれぞれと戦い始めた。

「ぐえっ!強い．．．!」

「全く歯が立ちません．．．。」

「パワーもスピードも、段違いだ．．．。」

見れば、そこかしこで戦っている怪獣娘一人ひとり、それぞれシャドウマンひとり



ずつと戦っている。『相手の数だけ分身出来る』とすれば、数的優位は無いに等しい。

「悪魔か……。」

今度ばかりは、皆で徒党を組んで集中攻撃することも出来ない。しかももうバディライド終了によりパワーダウンだつてしている。回復も装備変更も無しにラスボス2連戦させられるようなものだ。

「こんな、こんなことつて……。」

シンジの脳内に浮かんだのは『撤退』の二文字。一旦体勢を立て直して、改めて反撃に転ずる。逃げるのだつて立派な戦略だ。

「うう……。」

「やられた……。」

「これは厳しいわね……。」

『ゲツゲツゲツゲ……』

「今度はなんだ?」

全員を平等に痛めつけたシャドウマンは、分身を消して自分が出てきた球体のところに戻ってきた。

「まさか、パワーを吸収しているのか!?あの球体から!」

あの球体は、シャドウマンの卵、いや繭だったのか。それとも、繭がシャドウマンの本体なのか。いずれにしても、これは撤退する事もリスクが伴うこととなった。撤退して身支度をしている間にも、やつは優々とパワーをたくわえることが出来るのだとすれば……。

「もうダメだ、おしまいだあ……。逃げるんだ、勝てるわけがないよ。ヤツは、伝説の超シャドウなんだあ……。」

「なにを寝言言ってる！不貞腐れてる暇があつたら戦え！」

ここに来てシンジがへたれた。無理もない話であるが。

『ゲツゲツゲツゲ……』

シャドウマン、繭からパワーを吸収して滾る。そして胸の発光体をスパークさせて、今にも何かを発射せんと構える。

「やばい！なんかやばい！」

ザーツ!!とノイズのような音と共に、閃光が迫る。街も道路も何もかも飲み込む、破壊の光だ。

「ゼットンシャッター!」

間一髪、光の壁が皆を守った。

「ゼットンさん……。」

「……っ!」

普段無表情なゼットンさんも、今はすこし苦悶の表情を浮かべている。すでにその体にも多数の傷が見られた。

「これ以上は……早く、逃げて……。」

「みんな……撤退して!はやく!」

渴いた喉で声を振り絞る。破壊光線によってゼットンシャッターもミシミシと音を立てはじめた。

「もう……ダメ……。」

「……うわあああああああああ!!」

遂に無敵のゼットンシャッターが破られた。だが辛うじて、喰らったのは余波だけで済んだ。ゼットンさんが来てくれなかったら、全員やられていたところだったろう。

「ゼットンさん……。」

「平気……?」

「ゼットンさんこそ……。」

「私は大丈夫……あなたは、撤退して……。」

ゼットンさんが片膝をついている。未だかつて大怪獣ファイトで見たことのある光景だったろうか?

「私にはまだ、やることがあるから。」

「ゼットンさん……ぐっ……。」

衝撃で全身を痛めた。誰もがそうだ。こちら側は満身創痍、対して相手は健在。

圧倒的絶望、圧倒的な『壁』。

(これが……かつて怪獣たちが戦っていた相手……?)

思い出される、先ほどのフラッシュバック。その中で見た、光の巨人の圧倒的な強さ。

「……ぜんぜん違う。」

そんなわけがない。光の巨人からは『見た目』からも、どこか安心させられるものがあつた。けどこいつにはそれが無い。

「・・・あつたまきた・・・。」

「なに？」

「ゼットンさんこそ、下がってて、僕が行く！」

「無理、危険すぎる。」

「あんなもんに・・・！あんなもんに僕たちの未来をとられてたまるか!!」

体の痛みはどこへやら、ふつふつと沸き起る怒りを闘志に変えて、シンジは走って立ち向かっていく。ボロボロになった上着を破り捨て、下に着こんでいたS・R・Iを晒す。

「二対一なら、時間を稼げる。」

多人数で攻めかかっても意味がないなら、逆に一人ずつ戦っていれば時間を稼げる。これに賭けるしかない。ホルダーからカードを一枚取り出し、バディライザーに挿入して、スーツの肩に嵌める。

「モンスライド！ゴモリア!!」

バチバチとバディライザーから火花が散る。勝率はゼロに等しいどころか、まず勝て

るはずがない。それでも、この一手に全てを賭けたかった。己の命を含めたすべてを！

「おや？」

火花は散った、しかしそれ以外何も反応が無い。

「まさか？」

慌ててバディライザーを取り外して確認してみる。

「壊れたのかよ、さっきので。」

がーん、だな。出鼻をくじかれた。

かっこわる。破壊光線の第二射が来た。もうおしまいだ。

（あーあ・・・結局、なんも出来なかつたな・・・。）

せめて痛みもなく葬ってくれんことを祈って、目を閉じた。

己の無力さに、悔しさに、自然と涙すら流していた。

ブウウン！という疾走音に気が付いて目を開けた。直後、シャドウマンにぶち当たって破壊光線を阻止したソレが、シンジの前に降り立つ。



『グルルルルルルウ……。』

「ゴモ……。ラ……。?」

「ゴモ……。たん……。?」

「ゴモラ……。」

『誰だ……。』

しかしそこにいたのは、シンジの知る、否皆の知るゴモラではなかった。

『誰だ……。誰だ!シンちゃんを泣かせたのはああああああ!!!』

燃え上がる。ゴモラの体から、熱いオーラが迸り。

ゴモラの体を進ヴァージョンアップ 化させる!!!

「……。すごい……。」

そう誰もが口にした。

全身をもっと深い色をした棘のような鋭い甲殻が包み、肘からも鋭いスパイクが生えている。なによりゴモラの特徴であつた尻尾が、より長く、鋭く変化している。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

暗闇の底で何かが叫んだ。ボクの心の中にいる、もう一人のボクだ。

わかっている、まだ終われない、まだ戦える。まだ、未来を掴んじやいない。大切な人と共に生きる未来を！

だから限界を越えられる！

「本当の戦いは……。」

その大切な人が、今まさにピンチだ。

「本当の戦いは……。」

ならやることは一つだ。

「本当の戦いは、ここからだ！」



「変わってない。」

「え？」

「変わってないよ、ゴモラはゴモラだ……。」

涙交じりの声でシンジは言った。

進化したゴモラは全身凶器と言える鋭さを持つ手足で攻め立てる。一撃一撃が、進化前よりも桁外れの威力となつてシャドウマンの装甲を削る。

『ゲツゲツゲツゲ……』

『グルルルルルルア!!!』

対してシャドウマンもレポートでゴモラの背後をとるが、直後にその考えは甘いと思ひ知らされる。

「尻尾が……!!」

「あんなに長く伸びるのか！」

槍のようになつた尻尾がシャドウマンの体に突き刺さる。すごい威力だ！

「もはやゴモラはゴモラを超えた……EXゴモラ……。」

「EX……ゴモラ……。」

『ゲツゲツゲツゲ……』

『ガアアアアアアア!!』

突き刺さったシャドウマンを引き寄せ、爪で叩き落とす。

「やった!今度こそ!」

「なんかフラグっぽい台詞ですね。」

「まだ動くみたい・・・。」

ウインダムの懸念とアギラの読み通り、シャドウマンは苦も無く立ち上がった。見れば、貫かれた傷もみるみる再生していくではないか。EXゴモラも負けじと立ち向かい、殴り合いへと発展する。

「もはや怪獣娘の領域を超えた、怪獣同士の戦い・・・。」

「今のうちに、撤退しましょう。」

「でも、ゴモたん一人置いてくの?」

「悔しいけど、ボクたちにはあんな戦いについていけないよ・・・出て行っても足手まといになるだけだ・・・。」

ビルも道路も、飴やウエハースで作ったみたいにも簡単に破壊しながら戦っている。自分の背丈よりもずっと大きい建物も、今では『壁』ではなくただの『障害物』に過ぎない。

「行こうミクちゃん、ウインちゃん、シンジさんも。」

「僕は……ここにいます。」

「危ないよシンジさん！ただでさえ足手まといなのに！」

「ミクさん、ちよつと酷くありませんか？」

「足手まといでも、ここにいたい。いなきやいけないんだ、ゴモラの、ミカの戦いを見届けないと……。」

「シンジさん……。」

パワーアップしたとはいえ、EXゴモラとシャドウマンの強さはほぼ互角か、それかこちら側が不利かもしれない。一進一退の攻防を繰り返している。

「ゴモラ……あんなに強くなりやがって……でも。」

「レッドキング先輩？」

「ゴモラー！」

光線で吹き飛ばされるゴモラに、レッドキングは叫ぶ。

「いつかオレを越えるんだろ！だったらそんなヤツに負けてんじゃねえぞ!!」

「レッドキングさん……。」

「そうだ、がんばれゴモたん!!大怪獣ファイトの期待の星!!」

「ミクちゃん……。」

「がんばれーゴモたん!!」

「まけるなー!!」

「が、がんばれ!!」

「みんな・・・。」

「みんなシンシンと同じ気持ちですよ!ピグモンも応援します!風船もいつぱいつくりますよ!」

「いや風船はもういいんじゃないかな・・・。」

「がんばれ!まけるな!それゆけ!そして鳴りやまないゴモラコール。それに応えるため、ゴモラは一層激しく戦う!

「あともう一息だというのに・・・。」

「なにか・・・なにかないか?」

「がんばれ!がんばれ!まけるなゴモゴモ!」

「風船・・・そうだ!」

思いついた!それと同時にシンジは走り出す。向かうは、あの繭。

「シンジさん、何する気?!」

「わるあがき!」

勿論、それだけで終わらせるつもりもない。あの時シャドウマンは、繭から得たエネルギーを、直接破壊光線へと転化させていた。なぜ一度にエネルギーを自身の体内へ取

り込まなかったのか？

「それはあいつ自身が、エネルギー全部に耐え切れないからだ！」

ならばそれを一遍に喰らわせてやれば、風船のように膨張して自壊する。その確証がある。

「よつと、ここか……。」

繭からは不穏なエネルギーが漏れ出している。これをすべて、ヤツにぶつける。

「最後まで、役に立ってくれよ！バディライザー！」

怪獣娘のすべてのエネルギーを受け止められるコイツなら、可能なはずだ！カードをリードする要領で繭のエネルギーを吸いつくす！

「うおおおおおおおおお！！ぐっ……がああ……！」

当然その反動は自分にも返ってくる。今度こそ本当にお陀仏かもしれない。

「けどやるんだ！僕にしかできないなら！！！」

バディライザーも火花をあげている。全てを飲み込む『闇』が、シンジの体をも蝕んでいく。

「闇を……抱いて……光となる!!」

僕もコイツも、生まれた時から運命づけられていた。この瞬間の為に、命張って頑張る。一所懸命ってやつだ。だから、こんなところで倒れるのだけは御免だ。



その最後の祈りに応えるようにバディライザーも輝きを放ち始めた。

「できた……!」

繭にはエネルギーは残っていない。しおしおと枯れ始めている。

「あとは……これを……っ!」

間一髪、頭の上を光線が掠めていった。シャドウマンがこつちを向いている。

「これを……どうやってぶつけたらいいんだ?」

肝心なことを忘れていた。EXゴモラはダウンをとられて動けないでいる。

『ゲツゲツゲツゲ……』

シャドウマンがテレポートで距離を詰めてくる。あれを、いくら強化されているとはいえ人間の反射神経で見切ることが不可能だ。それどころか、他の怪獣娘たちにも出来なかった。

「うわっ!」

他の怪獣娘、ならば。

『ゲツゲツゲツゲ……ゲゲ!』

「この技、見切れなかったようね……。」

ゼットンさんの一撃が、シャドウマンの不意を突いた。さすがのシャドウマンもこれにはたじろいだ。そこへ、

「オラオラア！保険下りねえぞお！」

『ゲツゲツゲツゲエ?!?!』

ベムラーさんのバイクが突っ込んできて、そのまま引き摺りはじめた。

「行けえ！シンジ！」

「決めろー!!」

「シンジさん!!」

「勝って!!」

バイクを破壊して止めたシャドウマンに、

「エネルギーが欲しけりや・・・」

バディライザーを押し当てる!!

「くれてやる!!!」

ザアアアアアア!!つという爆音とが響き、誰もが耳をふさいだ。眩い光に誰もが目を覆った。





『グルルルル・・・』

「ふう・・・終わった。」

「ゴモたん！ゴモたんすつげえー！！」

「本当にすごかったですゴモたん！！」

「ちゃんと戻った？指何本に見える？」

「戻ってるよー！元の愛らしいゴモたんだよ！」

「一瞬本当に暴走しちゃったのかと心配したぜ。」

「私がそんなんするわけじゃないじゃん！」

無事にゴモラも元に戻った。他の怪獣娘たちも集まってきた。

「よかった・・・本当に・・・。」

「シンジ・・・。」

「ゼットンさん・・・おつかれさまです。」

「あなたは・・・。」

「大丈夫、僕はもう、十分に生きて・・・。」

空は青く、太陽が人々を照らしていた。

その逆光の中に、フラフラとシンジの体は揺れた。そして仰向けに倒れると、ゆっくりと瞼を閉じた。

「シンちゃん?! シンちゃんしっかりして!」

シンジにはもう何も聞こえなくなっていた。

その目の前には、泥のような闇だけが映っていた。

そして、  
突然赤い光が割って入ってきた。

## 光へ

ここは、どこだろう？

僕は、死んだんだろう？

じゃあここがあの世？

あの世って随分赤いんだなあ。煉獄ってやつかな？

『気が付いたか？』

「誰だ？天使？死神？」

それとも、何の変哲もないこの僕にチート能力を授けて異世界転生させてくれる都合のいい女神とか？



『そのどちらでもないよ。私は、M78星雲の宇宙人だ。』

「M78星雲の宇宙人？」

『ある地球では、『ウルトラマン』とも呼ばれている。』

「ウルトラマン……。」

目を閉じて眠っているはずの自分が、そのウルトラマンを見上げていた。銀色の肌に赤いラインが入った体と、暖かい光を蓄えた目と柔らかな微笑みを浮かべた口元のマスクを持っている。

もしかしなくても、かつて怪獣たちと戦っていた、あの光の巨人だ。たしかに夢で見た光そのもの……けれど、あの夢で見たような不安感はない。神秘的なその姿に、安心感すら覚えた。

『君の体は、深いダメージを負い、危険な状態にあった。そこで私が一時的に一体化することで、その命を繋ぎ留めることにしたのだ。』

「じゃあ、僕は生きていられるってこと？」

『そうだ。かつて私が地球に留まっていた時もそうしていたのだ。』

あの時確かに、自らの命が体を離れていくのを感じた。けれど今は心地よく感じるのは、そのせいなのだろう。

「ありがとうございます、ございます。おかげでまた仲間たちのところへ帰れます。」

『お礼を言わなければならぬのは、我々の方だ。君たちは本当によくがんばってくれた。おかげで希望が見えた。』

「それは・・・どういう意味？」

「そこから先は俺が説明しよう。」

「今度は誰？」

驚いて。今まで閉じていた目を開いた。すると目の前に、今度はグレーと青の制服を着た青年が現れた。これは不思議なことだが、今自分は横たわっているはずなのに、目の前の青年は『立って』いる。この空間には上も下も無いのだろうけれど。

「俺の名はレイ。地球人のレイオニクスだ。」

「レイ・・・オニクス？」

「レイオニクスは、かつて宇宙を支配していた『レイブラッド星人』の遺伝子を持ち、怪獣を操る能力を持った者たちのことだ。コレをつかつてな・・・。」

青年、レイが掲げたのは青と金で出来たツノのようなものが生えた機械。バディライ

ザーに少し似ているかもしれない。自分の物と比べてみてみるが、バディライザーは黒焦げてボロボロだったことに気が付いた。

「こいつは『バトルナイザー』。レイオニクスが一つづつ持つものだ。」

「バトルナイザー……。」

「そしてかつて、巨大な悪が振るつた、100体もの怪獣を操れる特別なバトルナイザーがあった。」

「その名は『ギガバトルナイザー』。」

「俺たちは、その悪と『怪獣墓場』で戦い、勝利した。その時、ギガバトルナイザーも消滅したはずだった……。」

「けれど、消えずに残ってしまったギガバトルナイザーの欠片が、怪獣墓場を飛び出して別の宇宙にまで飛び散ってしまった。」

『怪獣墓場は、あらゆる宇宙と繋がっている。我々もそこを通ってここへ来たのだ。』  
「そしてギガバトルナイザーの欠片は、この宇宙の太古の地球に落ち、今この時代に蘇った。」

「それがこの、バディライザーのシンセナイザーだったんですね……。」

壊れたバディライザーの割れ目から、件のシンセナイザーを取り出す。レイの持つバトルナイザーに反応するように、それは光っていた。

「俺たちはそれを探しに来たんだ。レイブラッドの力を悪用されないよう、封印するために。」

「元々、あなたたちの世界の物だったんですね。これは、おかえしします。」

途中から話のスケールの大きさに若干追いつけなくなっていたが、この力が悪用される未来……それなら容易に想像できる。あの悪夢の正体も、今なら理解できる。

「いつか起こるかもしれないという懸念が、僕にあの夢を見させたのだとしたら。最悪の事態を避けられるなら、そうするに越したことはないでしょう。これもなにかの運命なんだろう。」

安心半分、少し落胆した。シンセナイザーを失うということは、もうバディライド出来なくなるということ。

「そうだな。だが、人間には、そうした運命を乗り越えていける力がある。」  
「え?」

「俺たちレイオニクスもそうだった。精神だけとなったレイブラッド星人の新たな肉体を選ぶために、俺たちは生み出されたんだ。」

レイは、バトルナイザーを見つめて言った。

「けど、最後にはレイブラッド星人も倒して、その運命を乗り越えられた。」

「そこにはいくつもの光があったから。たくさんの仲間たちや、同じレイオニクスのライバル。そしてなにより……。」

シンジもよく知っているはずの怪獣。

「ゴモラ……。」

レイは無言で頷いた。

「仲間がいれば、どんな苦難も運命も乗り越えられる。お前には、そんな仲間たちはいるか？」

「……はい、守りたいものも、共に戦う仲間も、いっぱいいます。」

ホルダーの中には、たくさんのカードが入っている。今まで戦ってきた仲間たち、これから出会う友達。

「なら、大丈夫だ。俺はそいつをお前たちに任せていいと思う。」

『私も同じ意見だ。君の周りには、そして君たちの未来には、暖かく強い光が見える。』

「お前の未来を決めるのは、お前自身だ。お前は、どうしたい？」

そんなの、決まってる。

「僕に……これを、預かせてもらっていいですか？きつと平和のために役立てて見せます。」

「ああ、頼んだぜ。」

『困ったときは、これを使うといい。』

カードホルダーに光が宿り、一枚のカードが追加された。

「これを・・・使うとどうなる?」

『ヘッヘッヘ：シンパイスルコトハナイ。』

「不安だよ!」

「ははは・・・俺たちはもう行くぜ。こうしている間にも、新たな危機が迫っているかもしれない。」

『君の体はもう大丈夫だ。』

「はい、ありがとうございます・・・そうだ、僕の名前。」

「名前がどうしたんだ?」

「僕まだ挨拶していませんでした。僕は濱堀シンジ、えーと・・・ごく普通の高校生です。」

「そうか、シンジ。また会おうな!」

「はい!今度はゴモラとも会いたいです!こっちのゴモラと一緒に・・・。」

『さらばだ、シンジ。』

ウルトラマンが、ステイックのようなものをシンジに向けて、それが眩い光を放つ

た。

「戻って……きたのか……。」

瞼を開けると、右手を高く掲げたポーズで地上に立っていた。空の上には、赤い光の球が浮いている。

「ありがとう、さようなら……ウルトラマン、レイさん。」

ウルトラマンが頷いているように見えた。シンジは飛び去る赤い球を見送り、いつまでも青い空を眺めていた。

「おーい！シンちゃん!!」

「ミカ、ただい……うわつと!」

「もー!心配したじゃん!!!一体なにがあったの?体は?指何本に見える?」

「おーい、また死んでるぞそいつ。」

お約束の光景だ。

「うえつへえつごへえ……昇天しかけた……。」

「大丈夫シンジさん？」

「大丈夫・・・みんなこそ平気？」

「平気だよ！シャドウもばっちりやつつけたし！」

「ゴモたんさんとシンジさんのおかげです！」

「いや、僕はそんなに大したこと出来なかつたかな・・・。」

「謙遜しちやつてー、もー！シンちゃん大活躍だつたじゃない！」

「ミカの方こそ、すごかつたじゃん。」

「濱堀シンジ。」

「エレキングさん？」

「先ほどの私の発言、撤回するわ。あまりに無謀すぎる。お世辞にも冷静な判断とは  
言えないわ。」

「ちよつとー！せつかくシンジさん頑張つてたのにそりやないんじゃないの！」

「客観的に見た意見よ。」

「・・・そうですね、自分でやつてて危なかつたと思います。」

「けど、あなたの的確な判断のおかげでみんなが助かつたわ。ありがとう。」

「え、ああ、どういたしまして。エレキングさんに褒められると嬉しいです。」

「ならいいのだけれど、と言ってエレキングさんは下がっていった。彼女なりに心配し





『この世界は、我々が手出しせずとも平和を守っていけるだろう。あの怪獣使いの遺産を使いこなす少年と、怪獣の魂を宿した彼女たちがいれば。』

「地球は人類自らの手で守ってこそ意味がある・・・けれどいつか、俺たちと肩を並べて戦える日が来るのかもしれないね。」

『そう願いたいものだ。』

この星にはまだ無限の可能性が眠っている。まだ見つかっていない怪獣娘もいる。その数は計り知れない。

『バムラー、レッドキング、ピグモンにゴモラ、そしてゼットン。懐かしいな。』

「かつて戦った怪獣たちが、今はこうして人間として生きているなんて、不思議な宇宙もあるんですね。」

『私も驚いているよ。そして嬉しく思う、彼らが幸せに生きていられるこの世界のこと。』

少し遠くに、その彼女たちの姿が見える。

『そしてその中心にいるあの少年・・・シンジ。未熟な面もあるが、可能性を秘めた若さを持っている。』

「最初にあいつのことを見た時から、そう思っていました。あの日、彼女たちと出会ったあの時から・・・自分の危険も顧みない無鉄砲さも。」

何万年と生きるウルトラマンたちにとって、半年など瞬きするほどの時間もないだろうが、それでも貴重な思い出だった。

『私はそろそろ行こう。今も宇宙のどこかに、私たちの助けを必要とする場所があるだろうから。』

「俺もそろそろ、旅に戻ります。またどこかでお会いしましょう。」

『ああ、さらばだ。』

人知れず、赤い光の球は地球を去って行った。風来坊だけがそれを見届けた。

「お前は月だ、シンジ。太陽の光を浴びて、夜の闇を、また別の誰かを照らす。そんな優しさを、お前は持っている……。」

風来坊も、やがて夕焼けの光の中に消えていった……。

「うーん、いないか。お礼言いたかったのに。」

人知れず二人の宇宙人が地球を去ったところ、シンジもまたその近くで途方に暮れていた。ラムネの瓶を二本手に持って。

「名前も連絡先も聞いてないし、どうすつかなあ．．．ん？」

河原の土手をもう少し行った所にゼットンさんの姿が見えた。

「ゼットンさん、お疲れ様です。」

「シンジ．．．体は大丈夫？」

「はい、もうすつかり。デブリーフィングの後にまた検査されましたけど、異常なしつて。」

「そう．．．。」

やっぱり心配してくれていたんだな。アギさんが憧れるのもよくわかる。

「ゼットンさんは、この辺りで風来坊さんを見ませんでしたか？黒いコートでハーモニカを吹いてる人なんですけど。」

「．．．さつき会った。ファンだというから、サインをあげた。」

「ゼットンさんがサインを？」

雑誌のインタビューなんか敬遠して避けているというゼットンさんには、ちよつと珍しいことなのかもしれない。

「名前とかは、聞いたんですか？その人の。」

「聞いていない。ただ、いつかまた会えると思う。地球は丸いから。」

「あの風来坊さんも言ってたな．．．いつか会えるならいいか。じゃあこれ、ゼットン

さんにごうぞ。」

「……。」

「ラムネ……いらなかったですか？」

「ううん、ありがとう。」

一人で二本も飲むつもりもないので、一本ゼットンさんにあげた。

「ちよつとこぼれちゃった……。」

「……。」

「素朴な味ですけど、いいですね、これ。」

「……。」

「ケプツ……。」

（ゼットンさんが……『ゲツプ』した……。）

ふふ、その、下品なんですけど、『可愛い』と思っちゃいました……。

（また今度あげようかな……。）

などと邪悪な企みを浮かべていた。そうしている間に、ミカたちがやってきた。

「シンちゃん！ゼットンちゃんも！なにやってんの？」

「黄昏れてんの。」

「ラムネだ！私にもちよーだい！」

「ない。」

「いいじゃんひとくちー！」

と、シンジの飲みかけを強奪する。間接キッスとか全然気にしない。

「ぷはー！懐かしい味だね！へック！」

「下品だぞミカ。」

「いいじゃん、2人しかいないんだし。」

「あれ？さつきまでゼットンさんがそこに……。」

「もう行っちゃったよ。」

騒がしいのが嫌いなのか……いや、きつと気を使ってくれたんだろう。二人つきりになれるように。

「シンちゃん、本当に体はなんともないの？」

「なんともないよ。ウルトラマンに助けられたからね。」

「本当に、ウルトラマンに会ったんだね、シンちゃんすごいね。」

「かつてこの地球にいたウルトラマン本人なのかはわからないけどね。『この宇宙』とか言ってたし。それにもう一人会ったんだ、怪獣使いのレイさん。」

「怪獣使い？」

「かつて、怪獣を操る宇宙人同士で争っていたことがあったんだって。その時レイさ

んもゴモラをパートナーにしていたんだってさ。」

「へー、そっちのゴモラにも会ってみたいな……。」

「そういえば。」

「なに？」

「ミカの方こそ、体大丈夫なの？」

「ボクは平気だよ！だってみんなのゴモたんだし！」

「理由になつてないと思うけど……聞いたところによると、レイさんのゴモラもミカみたいに進化するんだって。怪獣使い、レイオニクスの力で。」

「ふうん、そうなんだ。じゃあシンちゃんもあの時なにかしたの？」

「ううん、僕は何も。バディライザーも壊れてたし。」

その後に無茶した結果、今はもっとボロボロになつてるけど。

「つてことはやつぱり、ミカ自身の意志で進化した、つてことなのかな？」

「どうなんだろう、わかんないや。でもなろうと思えばなれると思うよ。コツは掴めたし。」

「あの一回だけで？すごいねミカ。」

「けど、大怪獣ファイトでは使えないかな。あれつて完全に『殺す』ための力だし。」

「ボクは、怪獣娘の力を『生かす』戦いがしたいから。」

「生かすための力か……。」

「だからかな、シンちゃんのことを思った途端、急に力が沸いてきたんだ。あの時は……あの時だけは『君だけを守りたい』って思ったから。」

「……そつか、ありがとう、心配してくれて。」

「思えば簡単な話だったよね。シンちゃんを危険にさらしたくなかったら、ボク自身が強くなればいだけだって。なんでこんなことに気が付かなかったんだろ？」

「……暴走する危険があったから、とか？」

「……そうだね。本当に怖がってたのは、ボクの方だったんだ。自分を見失うことが怖かった。」

「けど、僕を『生かす』ために力を発揮できた。それが、『闇を抱いて光となる』ってことじゃない？」

「闇を抱いて？」

「光となる。さつき風来坊さんから聞いたんだ。……きつと、あの人も……。」

「風来坊……か……なんか珍しいね。」

カラン、つと空になったラムネの瓶を置いて、2人で夕陽を見つめる。

「……ミカが進化して。」

「ん？」



「その後目が合って、頷いてくれたでしょ？」

「うん。」

「どんな姿になっても、どんなに力に溺れそうになっても、僕はミカとゴモラのことを信じてる。僕の事を救ってくれた、ミカと、ゴモラのことを。」

「うん・・・ありがとう。」

夕陽を見つめたまま、ぎゅつと手のひらを重ねた。その顔は非常に晴れ晴れとしていた。

「おーい！ゴモたん、シンジさーん！」

「なにやってんの2人で？」

「黄昏れてんの。」

長い影を引き連れてみんながやってきた。

「お腹空いたから、みんなでご飯食べに行こうよー！」

「ミクちゃんさつきお菓子食べたばかりじゃない。」

「お菓子は別腹だって！アギちゃんこそめしめし食べてたじゃん！」

「別腹って、メインを食べる前から発動できるものなんでしょうか・・・。」

「30分後くらいに満腹中枢が働いてくるから、メインがあまり食べられなくなると思う。」

「じゃあ、晩御飯までランニングしよー!」  
「もつとやだよ。」

あんな戦いの後だつてのに、元気なもんだな。とシンジは感心した。けれどそれは、決して怪獣娘だから、というだけではない。

「これが若さか……。」

「シンジさん、おっさんぽいよ?」

「自分だけ大人びたふりをして!」

「なにがあ!」

「本当は御自分が一番冷静だと思っているのでしよう!」

「それでもあるがあ!」

違う、疲れてるんだ。変なことを口走る程度には。

「まあそれはそれとして、早くいこ! ベムラーさんがお店抑えててくれるからさ!」

「走って?」

「ロンモチ! いくよー! あの夕日に向かって走るんだー!」

「ちよつと待ってミクちゃん……速すぎ……。」

「そつち反対方向ですよ!」

「行つちやつた……。」

「のんびり行こうよ、自分のペースでさ。」

「そうだね……。」

よく耳を澄ましてみれば、彼女たちの笑い声に混じってハーモニカの音が聞こえてきた。けど、今はいい。今は彼女たちと一緒にいることを選んだ。

「地球は、丸いんだ……。」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「ただいまー。」

「おかえりなさいませ、シンジさま。」

「んー。」

日付が変わる前に家に帰ってこれた。2次会3次会でさんざんあちこち連れまわされてボロボロだ。正直シャドウを相手にしている時より疲れた。

「シャドウを相手にするよりも大変だったかも……。」

「温かいスープなどいかががでしょうか?」

「一杯だけもらおうよ。」

「かしこまりました。」

上着を脱いでハンガーをかけると、ダイニングに移動して待つ。しばらくする、ほか

ほかと湯気を立たせた皿が運ばれてくる。

「今日はオニオンスープか、いただきます。」

「脂っこい食事には合うと思います。」

「ありがとう、うん、おいしい。」

動き回って汗をかいて冷えた体に染み渡る。胃も少しスッキリするし、血管もサラサラになる。

「ごちそうさま。」

後は風呂呂入って、歯磨いて、また来週だ。

「シンジ様、他に何か仰せつかることはございますでしょうか？」

「……さすがに何もできないほど子供でもないしな……そうだ。」

家事に掃除、炊事までやってもらってる身だし。ただ、ひとつ思い出した。チョーさんにしか頼めないこと。

「んんっ。覗いてるのか、それとも報告を送らせてるのか知らないけど。」

「……。」

「二人息子が会いたがってるんだから、連絡の一つくらい寄越したらどうだ？と、伝えておいて。伝えられる機会があつたら。」

「承知しました。」

「それだけ、おやすみ。」

「おやすみなさいませ。」

長い長い一日がようやく終わりを迎えた。文字通り命を燃やすような出来事の連続だったが、まだ終わりじゃない。今日と同じくらいか、それ以上の出来事が起こるだろう。

けど、もう何も心配はない。

今の僕には、かけがえのない仲間がいるのだから。

苦難を共に乗り越え、これからも共に歩いていく仲間たちが……。

「おはよー！シンちゃん!!」

「ふぁ・・・？おはようミカ・・・なんでここにいるの？」

「起こしに来たんだよー！今日デートでしょ？」

「・・・いや、さすがに今日はデートの約束した覚えはないぞ？」

「私じゃなくて、レッドちゃんだよ！」

「え？約束したっけ？ていうか、今日だっけ？」

「昨日約束してたでしょ？次の日曜って！」

「次の日曜って・・・今日か！」

「曜日感覚失くしすぎだよ。」

「・・・入院生活してたせいか・・・。」

「だろうと思った。来てよかった、レツドちゃん待たせるところだったよ?」

「ありがとう、用意するからコーヒーでも飲んでな。」

「ういうい!」

さつそくこれだ。急いで支度をして朝ごはんも済ませる。

「いってきます!」

「いってらっしゃいませ。」

でも、やっぱりこれが僕らしいってことなんだ。こんなに騒がしい毎日をおくっている僕が、一番僕らしい生き方なんだ。

「でも今日から大変だね?」

「なにが?」

「だって、明日はエレちゃんとデートだし、明後日はミクちゃんと。そのまた次の日はウイン・・・ダム子とで、その次の日はアギちゃんと!」

「・・・えつ。いつの間にそんな約束を・・・？」

「だから昨日してたじゃん、覚えてないの？」

「ぜんぜん・・・とんでもないことをやってしまったのか・・・僕は？」

「まーまー元気だしなよ、せつかくのいい天気なんだからさ！」

とほほ・・・と頭に雲がかかっている。

「あーもう！こうなりやヤケだ！とことん楽しんでやる！」

「その意気だよー、人生は楽しんでなんぼだよー！」

泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生。なら、笑ってないと損だよね？



## 夕焼けの決闘

話は少しさかのぼる事、シンジがゴモラに決闘を申し込まれた日。その午後。

「ハリケーンミキサー！」

「グワー！」

シンジはアリーナの宙を木の葉のように舞っていた。

「一発！」

「二発！」

「散髪。」

「四発！」

「一体何のバカ騒ぎかしら？」

「あら？ エレちゃんおはー。」

「見てのとおり、試合だ。ルーキー同士のな。」

「あらそう、猫がじゃれて遊んでいるようにしか見えなかったわ。」

「厳しいなー。」

観客席にエレキングさんが入ってきた。この時点ではまだシンジとは面識がない。

「あれが、例の男の子かしら？」

「そ、シンちゃん。私の幼馴染なんだー。」

「今まさにボロ雑巾のように地面に叩きつけられているけれど、いいのかしら？」

「いいの、私もさつききたねえ花火にしたから。」

「そう。」

「心配しなくても、あいつはなかなかタフだぜ？ 成長するのが楽しみだ。」

そういうレッドキングの視線の先で、シンジは立ち上がる。

「さっきの技は……。」

「ふっふーん、『マッスルマン』の『デビルバッファロー』の必殺技だよ!」

「ミクさんも『マッスルマン』好きなんだ?」

「シンジさんも?あの熱いバトルと、友情がたまらないんだよねえ!」

「僕も結構、あの漫画を参考に技とか覚えてるからね……。」

「やっぱりー?!なんかそんな気はしてたんだよね!」

思わぬところで同胞に出会えた。『マッスルマン』は今から40年も前、週刊少年ツブ  
ラヤで連載されていたプロレス漫画だ。既に原作は完結を迎えているが、ゲームやアニ  
メで今なお根強い人気を誇り、原作者自らの手で新シリーズが最近開始されたばかり  
だ。

なお、初期は怪獣退治ものとして連載開始したり、登場人物が女体化されたり、主人  
公の息子の名前がタロウと、なにかと縁があつたりする。

「あたしが好きなのは『デビルバッファロー』なんだ！まさに力こそパワー！って感じで！」

「ミクさんらしいね。」

「シンジさんは誰が好きなの？マッスルマン？ジエントルマン？」

『「こらー、おしゃべりしてないでちゃんと戦えー！」』

「だってさ、話は後にしよっか。」

「う、そうだね・・・いっくぞー！」

ハリケーンミキサー、それはデビルバッファローの必殺技。主人公たちの10倍以上のド迫力パワーをもって放たれるそれは驚異の一言だ。

「くらえー！」

「でもここは、四角いリングじゃないんだぜ？」

周囲に所々岩こそあるが、それらを差っ引いてもプロレスのリングよりずっと広い。

そう何度も喰らうものではない。

「まだまだー！」

「こつちだこつちー！」

かまわず突っ込んでくるミクラスの突進を、岩へと誘導してダメージを誘う。しかしいくらぶつけさせても、その勢いはとどまるところを知らない。

「なんて頑丈さ・・・いや、馬力なんだ。」

「みよー！カプセル怪獣一の500万馬力のパワーをー！」

500万馬力、馬500万頭分パワーと言うことだ。同じツノを持つ怪力怪獣、300万馬力のシルバゴンのパワーアップした姿、キングシルバゴンが470万馬力だというから、それよりも強い。より簡単に言うと、初代ウルトラマンが100万馬力なので、パワーだけならミクラスはウルトラマンの5倍強いのだ。

なお、馬力という単位が制定された当時の馬と現代の馬を比較すると、現代の馬は4

倍強いらしいぞ良い子の諸君

「言っておくが、このS・R・Iスーツがあったところで、発揮できるのは50万パワーが限界つてところだ。」

「つまり、あたしの方が10倍強いってことだ！」

「人間には力が無くとも、知恵と勇気がものをいうのさ！」

ホップステップジャンプと助走をつけて、足のばねを強化して飛び込む。

「そして、キイイイック！」

「なんの、こつちもドロップキック!!」

空中で交差し、片方が弾き飛ばされ、片方が難なく着地する。

「ぐわっ！」

「へっへーん、どうよ？」

地を舐めたのはシンジの方だ。当然だ、パワーがダンチなんだ。この問題は一生付き纏う。

「とても賢い人間の戦い方とは思えないわね。」

「まあそう言うなって、時々あつと驚かせるようなことをするのが、あいつの強みなんだよ。」

「だったら道化にでもなったらどうかしら？」

「まあこのままじゃピエロだわな。」

人を楽しませる仕事をするのが道化。その中でもマヌケなことをして観客から笑いを買うのがピエロだ。ピエロには目の下に涙のマークがついている。心では泣いているというサインだ。

シンジは滅多なことでは涙を流さないが、負けて悔しくないはずがない。その為に頭を使う。

「なら……これならどうだ！」

「今度は両足つてわけか．．．！」

岩の上に立ち、再び攻撃の準備に取り掛かる。両足にパワーを集中させ、さらなる高みを目指す。

「50万+50万で100万パワー！」

先ほどよりも高く飛び上がり、アクロバットのように宙を舞う。

「いつもの2倍のジャンプがくわわって、100万×2の200万パワーっ！」

狙いを定め、コマのようにスピンする。

「さらにいつもの3倍の回転を加えれば200万×3の」

「ミクラス！おまえをうわまわる600万パワーだ！うおっくっ！」



シンジの体が600万パワーの炎を纏う！空気との摩擦によって起こった炎の追加ダメージだ！

「なんの！こっちはツノで勝負だ！ハリケーンミキサー！」

両社の激突によって起こった爆発に、思わず誰もが目を覆う。そして各々が目にしたのは、見事に着地したシンジと、宙に投げ出されたミクラスの姿だった！

「シンジさん、やったの?!」

「いや・・・あれは失敗だ。」

「ウギヤァー!!」

「よっ・・・と。」

着地できたはずだったシンジは前のめりに倒れ込み、ミクラスは空中でバランスを取り戻して難なく着地する。

「勝った！」

「負けた……。」

「結局パワーってなんだったんですか？あんな簡単に増やせるものなんでしょう？」

「理屈は悪くなかったが、実践するには技量が足りなかったな。無茶なスピンの回転軸がブレて、うまく直撃しなかったんだ。」

「試験なら落とされていたわね。」

「あれ、エレちゃんもう行くの？」

「ちよつと寄つただけだから。まだ仕事がある。」

「そう、がんばってねー。」

「あなたたちも、もう少し緊張感を持つたらどう？最近シャドウの動きが活発化しているし、不穏な動きも見せているのよ？」

「はいはい。」

緊張感を持つと言われて持つミカではない。勿論それなりに注意はしても、ペースは乱さない。むしろ乱している姿の方が、エレキングは見たことがないぐらいだった。

「負けました。」

「惜しかったね、今度は勝てるといいね。」

「いいいいいい！見てた？あたしのハリケーンミキサー！」

「やはりミクさんのパワーはすごいですね、大抵の相手なら薙ぎ倒せるんじゃないかってくらいです。」

「いやー、それほどでもー？戦ってて楽しかったし、またやろーねシンジさん！」

「今度はもつとお手柔らかにお願いね？」

「うっし、じゃあ次はオレが行くか！」

「さつきはゴモたんと戦ってましたけど、次は誰と？あたし？」

「いや、シンジ立て。」

「はい、なんですか？」

「来い。」

「はい？」

「来いっつつつてんだよ！」

「恋？はしゃぐコイは？」

「池の鯉、って違うわ！次はオレが相手してやるってんだよ！」

「ナイスノリツツコミ。」

わけもわからずに、なんだかんだと再びアリーナに戻された。

「本当にやるんですか？」

「まあ、ちよつとした洗礼だと思えよ。お前の基礎的などころもつと見たいと思ったしな。」

「これってパワハラ？」

「ちがう、『可愛がり』だ。」

「レッドキングさんの方がよっぽどかわいいですよ？」

「バカ！そんなこというな！／＼／＼」

「うおっあぶねっ！」

照れ隠しに岩をぶん投げてきた。さすがにまっすぐ飛んでくるだけの岩には当たらない。

「歯あ食いしばれよ！」

「その歯が全部抜け落ちるような攻撃は勘弁！」

ブオン！という音と共に鍛え上げられた丸太のような腕が頬をかすめる。避けた先にあつた岩が粉微塵に砕け散る。

「こんなん喰らつたら骨が折れる程度じゃ済まないんじゃ！」

「大丈夫だ、ジェロニモンの力で生き返れる！」

「ウララー！」

よしんばそれで生き返つても、腕の形が変わつたりするのは御免だ。ひとまず距離をとる。レッドキングには岩投げなどは出来ても、固有の飛び道具というものは持つていないはずだ。

「なんて考えてたんなら、お慰みだぜっ！」

「ぐおっ……口から岩が……！」

しかも、爆発性のある危険なやつだ。ほぼ爆弾やロケット弾を撃つて来ているのと同変わらない。

「常に相手がどんな動きをしてくるか予想しておけ！実際はその上を行くからな！」

「これでもイマジネーションは結構あるほうだと自覚してますよ？」

「そうか、なら、こいつは予想できるか?！」

剛腕を振るって地面を殴る。すると、ひび割れが走ってシンジの足元に迫る。ゴモラの見せたアースクラッシャーとは違う、元祖・アースクラッシャーだ！

「おおー！これが本家か！」

「見た目もゴモたんが使った時より派手だね。」

「そりゃー、レッドちゃんが元祖だからね。」

「でも、シンジさんあそこから動きませんか?!」

「見た目は派手だが・・・。」

「今のをよく『避けなかった』な。」

「レッドキングさんが、こんな単調な攻撃しかけてくるはずないと思ってたので。」  
「言ってくれるじゃねえか。」

見事に、シンジの周りにだけひび割れが走っていた。慌てて避けていたならば、たちまち餌食となっていただろう。

「かといって上に飛び退けば、岩で撃ち落とされていた。」

「そこまで読んでいたんなら、10点やろうか。」

「あと90点は？」

「オレを倒せたらやるよ！」

赤点にならないようがんばろー！パワー自慢のレッドキングに殴り合いを申し込むのは自殺行為に等しい。いっちょここは躲して殴っては退くのはヒットアンドアウェイで行こう。

「せいっ！せいっ！」

「そんなへなちよこパンチ効かねえぜ！」

「おわつと！」

躲すこと自体はそこまで難しくはない。目をしつかり凝らせば軌道が見える。しかし一瞬の隙や気の緩みが生死を分ける緊張状態に、徐々に精神が摩耗していくのを感じる。

そして精神が摩耗してくると、普段しないような判断やチョンボをする。

「そこっ！」

「ぐっ……！」

「あっちゃー、いいのもらっちゃったね。」

「これ以上は持たないかな……？」

「いいや、シンジさんがんばれー！」

がんばれなんて、軽く言ってくれる。脳震盪で目は回るし、肺から空気が漏れて息も



し辛い。けど、応援してくれているからには、おちおちやられているわけにもいかない。

「こんのつう！」

「おっ！」

飛んできた拳を寸でのところでないして、腕を掴んでジャンプして落とす。ジャンピングアームブリーカーだ！

「そしてすかさず！」

「うっ！やったな！」

倒れた相手の上に覆いかぶさり、神業的速度で腕ひしぎ逆十字固めに持つて行く！面食らったレッドキングさんはなすがままにされてる。

「なかなか・・・やるじゃねえか・・・！」

「結構練習しましたから・・・。」

練習したのは半分、もう半分はS・R・Iスーツにインプットされた格闘技のデータのおかげ。あらかじめプログラミングされた動きを、必要に応じて半自動で技をかけてくれるのだ。

「けど、このまま塩試合になるのは勘弁願うぜ！」

「うおっ！」

力尽くで振りほどかれ、逆に掴まれる。やっぱり固め技は地味なんだろうか？ 絵面的に。

「そらよっ！」

「あーあーあーあーあー！」

そのままぶんぶん振り回されて、挙句岩に向かって投げ飛ばされた。レッドキングの得意技のジャイアントスイングだ。

(あっ……。)

背中に衝撃が走り、意識がとぶ。脳内に、今までの人生がフラッシュバックしてきた。何も出来なかったあの日のこと、雨が降ったの日の事、すべてが始まった日のこと。

(死ぬな、これ……。)

正直、今まで感じた事も無いレベルに、生命の危機を感じ取った。

「気絶してるヒマはねえぞ！もっと熱くなれよ!!」

無理無理、もう燃やす物残ってないって。風前の灯火どころか、風にとける灰も同然。

「シンジサーン!」

「おっ……と……?!」

気が付けば、体が勝手に動いていた。向かってくるレッドキングさんをいなして、思

いつきりすつ転ばせていた。

「やりやがったな……！」

すべてがスローに見える。S・R・Iによる補助とは違う、もつと生な、感覚的なスローだ。相手の動きが見えるだけでなく、次にどうしたらいいかもわかってしまう。

「だらあっ！がっ……！」

「あの構えは……。」

シンジが自然ととっていたのは、猫背ばつて手を前に突き出した、柔道のようなポーズ。相手の出方をみつつ、時に掴み、時に受け流すことに特化した構えである。

「がっ……ああ……！」

倒れて一瞬レッドキングの気がそれた刹那、一気に距離を詰めると、その両手で首を

締めあげ、チョップを喰らわせ、その状態で宙に持ち上げる。

「あれで一気に体力を奪うつもりだね。」

「ちよつと・・・激しすぎませんか？」

「今まで散々、もつとすごい怪獣ファイトを見て来たけど？」

「なんというか、生々しい戦い方だね。」

脇に手を通し、ジャイアントスイングの要領で振り回し、投げ飛ばす。

「ててて・・・オレの十八番をやりかえされるとは・・・ちよつとショックだぜ・・・。」

「そいやつ!!」

これでトドメだ！脳に酸素が行き届かず、未だグロッキー状態にあるレッドキングの首を再び掴み、ハンマー投げで地面に叩きつける！

もうもうと砂埃が舞い散り、その中心にシンジは佇む。

「はあ……はあ……勝った……？」

「うっそー、シンちゃん勝っちゃった？」

「すごいです！」

「すっげー！シンジさんすっげー！」

ついさつきまで、自分はなにをしたのか？そのあたりの記憶が曖昧であるが、目の前の現実は本物だ。

「やた……やったー！初白星だー！」

シンジは諸手を挙げて喜んだ。今まで無理だ無理だと口にし、頭の中でも諦めていたけれど、マグレでも本当に勝ててしまったらそれは嬉しい！今日は人生最高の日かもしれないぞ！

「シンちゃんー！」

「ミカー！見てたー？今の超ファインプレー！」

「後ろ後ろー！」

むんずつ

「へ？」

頭に強い握力を感じ、振り返ってみれば、そこには太陽よりも明るい笑顔を浮かべたレッドキングさんが立っていた。

「・・・さよならー。」

「待てい！」

逃げ出そうとする暇もなく、肩と頭を掴まれ、空へと放り投げられる。

「あー。」

「よくもやりやがったな！こいつはお礼だぜ！」

両脚を両手で掴まれ、両腕を足でロックされ、上下逆さまの状態で地面へと突っ込んでいく。

「コイツがレッドキングの、『レッドライバー』だ!!」

ズガンー！と、先ほどのとは比じゃない砂埃舞い上がる。

「あちやー。」

「良いところまでいったのに。」

「油断大敵、だね。」

戦場のド真ん中、シンジの墓標が建った。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||



「ひどいめにあった。」

「戦場ではしゃぐからこんなことになるんだよ。」

「まあ途中まではオレもヤバイって思ったけどよ、あそこでガッツポーズはねえよ。」

「そこはオマケして負けておいてくれるところじゃ?」

「世の中そこまで甘かない。」

怪我の治療をされながら、ぶーたれるシンジであった。ぬか喜びに水の泡だったのだから仕方がない。

「じゃー、シンちゃん負けたから、なんか罰ゲームね!」

「え?そんな約束してたっけ?」

「したよー、今さっき。」

「後出しじゃないか。」

「でもどうせ負けるでしょシンちゃん?」

「それだったら最初っから約束なんかしないっての。」

ひどい言われようだ。ミカは別に悪気があって言っているわけではないとはわかるけど、さすがに傷つくわ。

「大体、こんなことになったのもミカがダイエットしたいとか言い出したせいでしょう。これ以上付き合う必要がある？」

「うっ・・・そりやまあ・・・そうだけどき・・・。じゃあせめて、特訓として付き合ってくれたミクちゃん和レッドちゃんになにかお礼したら？」

「あたし？あたしは別に・・・そうだなー・・・うーん・・・。」

「オレも、気にしてくれなくていいぜ？なかなか楽しかったしな。」

少し残念そうにミカは食い下がった。今となつては昔の話だが、この時にもう少しシンジも気を使つていられたら、あんな大ごと（誕生日騒動）にはならなかったのだが。

「じゃあ・・・今度一緒に遊びに行きませんか？」

「おついいねー！どこ行こつか！ジムとか？」

「遊びに行くのに汗流したくないかな・・・。」

この後は、色々遊ぶ予定だけを立ててお開きとなった。具体的な日時などは決めていない、ただの空論であったが、今はそれでよかった。彼ら彼女らにはその為の時間がいくらでもあつたから。

今は、そんなありふれた『明日』があることが、とても幸せなことだと思えた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

それからしばらくカレンダーをめくつたある日の朝。

「うーん・・・慌てて飛び出してきたのはいいけど・・・。」

「何か不安？シンちゃん。」

「いや、どこ行くかとか全然決めてないし。」

「私が思うに、レッドちゃんの喜びそうなところがいいと思うよ！」

「そりゃそれが一番だけどさ。」

二人並んで小走りで本部前に行く。全く身に覚えのないこととはいえ、約束してし

まったからには行かないわけにはいかない。そんなことしたら男の風上にも置けなくなる。

「ついた・・・けど、レッドキングさんいない？」

平日ならば行きかう人も多いこの場所も、休みの日となると人影もまばらだ。時間は午前9時、お店もあまり開いていない時間だ。

それはともかくとして、この場にはレッドキングさんはいない。ひよつとして、約束はしたけど、来てくれなかったとか？いや、レッドキングさんに限ってそんなはずはない。そもそも約束した記憶すらないんだけど。

「ねえミカ、待ち合わせ場所ってここで合ってるの？」

「うん、そうだよ。いつもここにしてるじゃん。」

「それはそうだけど・・・じゃあなんで来てないんだろ？」

「そりゃあ、約束の時間まであと4時間ほどあるからじゃないかな？」

「は？」

「午後の1時でしょ？約束は。」

「……。ミカ、いい加減殴っていいか？」

「優しくしてね♡」

へなへなと座り込むシンジと、相変わらずあっけらかんに笑うミカ。人のいない広場に、コツンと乾いた音が響いた。

「考える時間をくれたんだね、ありがとう。」

「どういたしまして。中でちよつと休もつか。」

また忙しい日々が始まる。フンドシ、もといハチマキを締めなおそう。しかしこの幼馴染には締め上げてても簡単に逆襲されるであろう。

「……空が青いな……。」

## 怪獣娘は隣にいる

シンジはひとり談話室にて、カチャカチャと工具と部品を弄りながら机に向かっていく。ボロボロになったバディライザーの外装を外して、中の配線を整えている。

「これで・・・ひとまずはいいか。」

「おっ、もう直ったのそれ？」

「ボロボロだったみてくれと、最低限の機能だけはね。本格的に使うにはもつとい  
る。」

とりあえず電源は入って、中のライブラリやデータを見ることはできるようになった。元々通信機能が付いていない機械だったし、データが見たければコンピューターで抽出すればいい話だったが。

「一応ボディも応急処置ぐらいしたかったけど、こればかりは新しいのに交換するしかないか。」

「それで色だけ塗って誤魔化してるんだ？それなら持ち運ぶ必要もないんじゃない？」

「なんかもう、愛着が湧いちゃったから。手放していると落ち着かないよ。」

「それスマホ依存症って言うんだよ。」

「通信も出来ないスマホか。」

「それだって、スマホの画面が壊れたままでも意地でも使い続けようとしているようなもんでしょ？」

「いや、それはちよつと・・・まあそうだな。」

少し改良を加えれば、通信ぐらい出来るようになるが、それをしたせいでなにかしらのバグが発生したりしたら大変なので手が付けられないでいる。実際通信には携帯かビデオシーバーで十分だし。

「そういえば、カードが増えたんだよね？前は私とアギちゃんのしか無かったけど。」

「うん、あの場所にいた怪獣娘さん全員と、それから・・・。」

赤い怪獣カードの中で、一際目立つ銀のカード。そこに描かれているのは、光の巨人。

「これがウルトラマンかー。怪獣の映像は見たことあるけど、ウルトラマンは初めて見たな。」

「会ったのはウルトラマンだけじゃなかったんだけどな……。」

「なに？」

「ううん、なんでもない。」

このバディライザーのルーツも含めて話すとなると、色々ややこしいので今日は説明はやめておこう。

「それに怪獣カードもこんなに！30枚ぐらいあるのかな？」

「いっぺんに増えたね。怪獣だけじゃなくて、ウルトラマンのカードもあるよ。」

「おおーホントだ！」このカードにはどんな効果があるの？」

「それもわかんないや。詳細なことは教えてくれなかったし。ただ、使わずに済んだらそれが一番じゃないかな。」

「それもそうだけど、どうなるか興味ない？」

「よしんば何か起こったとして、実害被るの主に僕だからやらない。」



「えー、つまんないの。」

「それはそうと、今は目の前の問題をどうにかしないと。」

テーブルに7並べのように広げていたカードを仕舞い、すべてを腰に戻すと本題に入った。

「レッドキングさんって、なにが好きなんだろう?」

「やっぱ筋トレとかじゃないかな? 都内一周マラソンとかどう?」

「休日にもで訓練とかしたくないなあ。それデートって言える?」

「楽しかったらデートなんじゃないかな。レッドちゃんがどこ行きたいかも大事だけど、シンちゃんが楽しめる場所でもないダメだよ?」

「うーん、一理ある。」

デートの場所⇨相手が楽しめる場所であっても、相手が楽しめる場所⇨自分が楽しめる場所とは限らない。勿論そういうところも纏めて飲み込めるのが人との付き合いってものなんだろうけど、今はまだその前段階だ。軽くジャブで牽制してみるのもいいだろう。

「僕だったらそうだな・・・最近なにかと忙しかったから、『癒し』が欲しいな、かわいい動物とか。」

「と、いうわけで。」

「なにがというわけなんだ？」

時計の長針が3回ほど回ったところで、レッドキングさんと共に、場所はお洒落な店の立ち並ぶアーケードへと移っていた。

「で、どこに行くんだ？」

「ここです、ここ。」

「ここって・・・。」

ファンシーなお家のような外観に、1時間1000円と書かれたオシャレな看板。そして窓から覗くモフモフな生命体。

「猫カフェです！」

「猫……ネコ……」

思わずにやーん！と口にするところを思いとどまり、レッドキングさんの反応を窺う。シンジの目には無反応、というか放心状態のように映った。

「レッドキングさん、ネコ嫌いでしたか？」

「いや……別に嫌いじゃないぜ？……かわいいのはむしろ好きだし。」

「OK！レッツゴー！」

店内に入ると、休日なだけあつて結構な客入りであつた。老若男女問わず猫と戯れている。ドリンクを注文して適当な席に座ると、一口啜つて話を切り出す。

「お前、こういうところ来たことあるのか？」

「いいえ。猫カフェは無いですが、動物園のふれあい広場にならあるんですが。」

「そことはどう違うんだ？」

「うーん、猫だけじゃなくて、犬にも触れました。あとアルパカとかカピバラとか、プ

レーリードッグもいました。」

「動物園か・・・最後に行ったのいつだったかな・・・？」

「この前ミカと行ったのは、動物園もある遊園地でしたけど。やつぱり、生で見る動物もかわいいですね。写真や動画とも違って。あつ、ほら、ネコちゃん来ましたよ。」

「おつ・・・。」

トテトテと、白い毛におおわれた仔猫がやつてきた。まだ小さいからか、色んなものに興味津々なんだろう。

「かわつ・・・、ああつ。」

「逃げちやった。」

いきなり手を出されてびっくりしたのか、仔猫は逃げて行ってしまった。

「やつぱ、オレみたいなガサツなやつには懐かないのかな・・・？」

「そんなことないですよ。レッドキングさん、私服もかわいいですよ。」

パンツルックで活発そうな服装で、髪にはかわいいリボンがあしらわれている。

「特に、髪型にはそうとうこだわってるんじゃないですか？その縦ロール、女の子らしくくつてかわいいと思いますよ。」

「そ、そうか・・・？変じゃないか？」

「ぜんぜん、その髪だったら服もロングスカートとか着ても似合うと思いますよ。」

「そうか・・・似合うか・・・。」

「よーし、じゃあこうしましょう。」

「なんだ藪から棒に？」

「今日はレッドさん『オレ』って言うの禁止で。」

「はあ？」

「そんなにご自分の可愛さに気づけないのなら、もうちつと口調とか気を使ってみればいいんじゃない？と思って。」

「なんでオレがそんなこと！」

「はい、1ペナ。」

「ぐぬっ・・・まだやるって言ってねえし・・・。」

「じゃあ、これからやるんですね。」

「そうでもなくつてな……！」

「あつ、また来ましたよ、さっきのネコちゃん。」

「ん？」

さっきの仔猫がまたやってきていた。楽しげな雰囲気を感じて、惹かれてきたのかも  
しれない。

（レッドさん、今度は触らずに、近寄ってくるまでじっとしてみましようか。）

（そうか、わかった……。）

トテトテとレッドキングさんの足元まで寄ってきた仔猫は、すんすんと鼻を動かして  
脚をくすぐった。

「あつ……。」

（まだ動かないで……。）

「ほっ……ほっ……」

やがて気に入ったのか、仔猫はレッドキングさんの膝の上に乗ってきた。居心地がいいのか、丸くなって動かなくなった。

「かゝつかつかつかつ……」

「もう大丈夫じゃないですか？触ってあげたら。」

「お、おう……はあ……」

背中や頭を撫でてやっても、今度は逃げずにいてくれる。レッドキングさんの顔も思わずほころんでいる。

「かわいいく〜く〜♡」

「よかったですね、レッドさん。」

「なあ〜これすつげえあつたかいよ！この重さが、すつごい幸せだ……」

大怪獣ファイトの時や戦闘の時のような荒々しくも凛々しい先輩怪獣娘はなく、そこ

にいるのはただの可愛い物好きな女の子であつた。

(ここに来て正解だつたな。)

「なあ、お前も撫でてみるよ。」

「あつ、はい、じゃあ失礼して。」

思った通り、毛は柔らかい。一見硬いと思いきや、思いのほか柔らかい。そしてなにより暖かい。

「・・・おい。」

「はっ。」

「なんでオレを撫でるんだよ!」

「あまりに可愛すぎたんで、つい・・・。」

「アホー!」

超音速の拳が、弁解を述べる口を強引に閉じさせて吹っ飛ばした。天井から青空が覗いてる。



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あなた、バカ？」

「返す言葉もございません・・・。」

翌日。今度はエレキングさんと、お洒落なカフェテラスでお話中。

昨日は結局、お店に多大な迷惑をかけてしまい、うやむやなままにお開きとなった。なお、壊した建物の修理代などはGIRLSにつけておいた。

「いくら親しい仲だからと言って、女性にみだりに触るなんて失礼よ。」

「ミカとのなれ合いで、麻痺していたようです・・・。」

「なら、もっと好感度を上げてから出直してらっしゃい。」

（触ることについては否定しないのか・・・。）

落ち着いた大人の雰囲気を漂わせるエレキングさんの言うことには、黙って従わざる

を得ない『重さ』がある。その恰好も加味すると、なお一層の事だ。

「エレキングさん、オフの日もスーツなんですね。」

「ええ、私は普段からこの恰好よ。」

「そのせいで、なんか学校の先生と面談してるような感覚ですけど。」

「なら、先生の言うことは聞いてちょうだい。」

「はいせんせー。」

曰く、いかなる時もTPOを選ばず、コーディネートを考える時間を削減できる選択らしい。なんつーか、テスト勉強のためにテキストのページを丸々暗記するような暴論である気もするが。

というか、仮にも(仮じゃないけど)デートだったのに、ファッション選ぶ気もないって、それってつまり、僕との付き合いも仕事上の話でしかないってこと？ちよつとシヨック。

「服装の話をするなら、あなただって普段からあのスーツを着ているのではなくって

「？」

「はい、今も下に着てます。いつでも戦えるように。」

「見せなくていいわ。」

常に待機状態のS・R・Iスーツを着込んでいる。そのために、服は脱ぎやすいものを選んでいいる。脱ぐだけなら少なくとも電話ボックスは必要ない。

「でも、そのメガネは最高にクールです。」

「ありがとうございます。」

シンジの正直な意見に一言だけ応え、温かいお茶をすすり、甘い香りの立ち込めるパンケーキにぱくつく。このお店の一番人気メニューが、この『帝王パンケーキ』だ。家で作る物よりも分厚く、それでいてふわつとしていいるスポンジに、生クリームやシロップがこれでもかとふんだんにかけられている、まさにスイーツのエアーズロックだ。

「……ふっ。」

ふと一瞬、エレキングさんの口元が上を向いたように見えた。本当に刹那で、見間違いかもしれないと思ったが、ただその一瞬だけ、目の前にいるのが年相応な女の子の素振りに見えた。その一瞬をもう一度見たくて、ついエレキングさんの顔を凝視していた。

「なにかしら?」

「いえ……頬にクリームが。」

「あら……ありがとうございます。」

声をかけられたとき、鐘が響くように胸が高鳴るのを感じた。なんというか、不思議な魅力のある人だ、この人の瞳は、声は。

「お待ちせいたしました、こちら『アイゼンパフェ』になります。」

「おつ来た来た。これ一回食べてみたかったですよ。」

「そう。」

シンジが注文したのは、イチゴの赤とメロンの緑が特徴的な大きなパフェ。一人分とするには、少々大きすぎる。

「注文できるのが『カップル限定』だったかしら？」

「そうそう、そのためのスプーンもふたつ。どうですか？一口。」

「結構よ。」

「さいですか・・・。」

おいしっ、と口へと放り込んでいく。甘いはずのクリームが、ちよつとしょっぱく感じるのは気のせいだろうか。

「それが食べたかったのなら、最初からゴモラとここに来ればよかったのではなくて？」

「ミカと一緒にだと、大抵ソース味のものになるので。タコ焼きも嫌いじゃないんですか。」

「ならなおさら、たまに別の物をつて提案するべきじゃないのかしら？」

「いやーでもその、なんというか、ミカと一緒にいる時は、タコ焼きが食べたくなくなるん

です。金曜日には必ずカレーを食べるとか、最初の一報は信じてもらえないとか、右顎は必ず折られるとか、そんなお約束なんです。」

「そう。仲が良いのね。」

食べ始めると、会話が弾まなくなる。元々弾むほどの会話のキャッチボールをしていたわけじゃなかったけど、食べながら喋るのはマナー違反だと言われそうで言い出せない。なのでもくもくと目の前の山に挑む。クリームばかり食ってちや胸焼けして体に悪いぜ、間・・間にフルーツを食べるんだ。お茶もちよつと渋いぐらいがいい。

「・・・。」

「どうしました？じつと見て。」

「・・・メロン、もらっていいかしら？」

「どうぞ、はい。」

はい、とやっつてはたと気が付いた。今、自分の手はどこを向いているのか。そのスプーンは誰のものか。

「……いただくわ。」

「ごめんなさい……。」

「なにが？」

「いえ、なんでも……。」

つい、『いつもの癖』で、相手に『食べさせて』しまった。自分のスプーンで、相手の口に。

エレキングさんは何事も無かったかのように自分のパンケーキに戻っていった。慌ててお花摘みに行かれたとか、そんなことされたりしたらもう泣いてたね。

「……。」

じゃあ、このスプーンはどこに置こうか？自分も何事もなかったかのように使い続ける？それとも、あらかじめ用意されていた、もう一本のスプーンに持ち替える？どっちをやっても気まずくなるだろう……。

「・・・じゃあ、持って帰る？」

「ダメよ。」

「はいせんせー。」

どうしよう、甘さに舌が痺れてきたのかな、味がしなくなってきた。コーヒーが足りない。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「へー、そんなことが。やっぱり疲れるよね、あの人とタイマンなんて。」

「別に喧嘩してたわけじゃないんだよ？」

翌日。ミクさんとアリーナにて。今日は新必殺技の開発に付き合うこととなった。遠巻きにアギさんとウインさんもいるが。

「それにしても、いやな天気だね。」

「一雨来そうだね、早いところ完成させよ？」



「おっけー！じゃあこっちに向かって走ってきて！」

曇天の下、特訓が開始された。

「これってデートって言えるのかな？」

「本人たちが楽しめているなら、デートなんじゃないでしょうか・・・。」

ミクラスは、突進してくるシンジをラリアットでかちあげ、空中で足を掴んでブレインバスターの体勢に入る。

「とりやー！！」

「ゲエツ！」

ズガン！と地面に脳天を突き立てられる。ちょうどこれと似たような状況を、つい先日目の当りにしたばかりだ。

「うーん・・・レッドキング先輩のみたいに綺麗に行かないなあ・・・。」

「無理に再現する必要ないんじゃない？」

「でもアタシもなんかオリジナルの必殺技欲しいし！なんか参考になるかと思っただけ。」

そこまで行くまでにシンジの体が持つかはともかく。大怪獣ファイターとして活躍するミクラスにとっては、これは大きな問題だろう。レスラーたるもの、フィニッシュホルドの一つ持っていなければならぬ。

「でもアタシ、頭使うの苦手だし。」

「その為に僕がいるんでしょ？決してサンドバッグやカカシの目的で連れてこられたんじゃない。」

「なにかいい案ある？シンジさん。」

「そうだな……。」

実際のところ、多少強化はされどシンジには怪獣娘ほどの超パワーは持っていない。それゆえ、シンジに出来ることは人間のプロレスの延長線上でしかない。

「だから、最大限怪獣の力を振るうには、ミクさん自身のひらめきが必要になると思う。」

「人任せじゃいられないってことだね、わかった。」

「それで、両方のドライバーを受けた身としての意見だけど。」

「ふんふん。」

「なんというか、レッドキングさんのはかなり『加減』されてた気がする。」

「加減？手加減ってこと？」

「手加減もそうだし、なによりコントロールされてた。バランスや角度を正確に、地面に突っ込まされたって感じ。ミクさんのは、メチャクチャ力任せに叩きつけられてたって感じだった。」

「えー、それこそ力こそパワーじゃん？」

「えつとね……どんなに肩力があっても、それをストライクゾーンに投げられなきや名ピッチャーにはなれないんだよ。レッドキングさんの技は、力任せなようでその実かなり計算されてるよ。」

「そうなのか……。」

「あのレッドドライバーは、乱戦で出せる技じゃないや。トドメの一押しなの、決まれば

確実に勝てる、まさしく『必殺技』なんだ。」

要は戦闘開始初っ端から放った光線技が弾かれるのと一緒に。

「ミクさんには、どっちかかっていうと乱戦中からチャンスをもぎ取るようなタイプの技がいいんじゃないかな？ スピアータックルでマウントとるとか、バックブリーガーで離さないとか。」

「なるほど・・・じゃあさっそく試してみようか！」

習うより慣れろとも言おう。さっそく訓練にとりかかる。

「でりやー！」

「ゲエフツ！」

タックルからのパワーボム、ジャイアントスイング。バッファローの脚力と膂力を持って、反撃する隙を与えない技のラッシュ。ひとまずは形になってきた。

「うん、なんか習得できたかも！」

「そりやよかった、付き合った甲斐があつたつてもんだ。あいたたた。」

体の節々が痛むけど、それは別に構わない。この笑顔には変えられない。

「じゃあ、次はアタシがシンジさんの技に付き合うよ！」

「そう？ そうだな・・・ちようど色々試したいものもあつたから、それでもいいかな？」

「おーけーおーけー！」

そいじゃさつそく・・・と、シンジは一つのカジエツトを取り出した。

「なにそれ？ 銃みたいだけど？」

「そう、銃。やつぱり丸腰で戦うのもなんだと思って、ちよつと作つてみたんだ。『ライザーショット』つてところかな。」

シリンドアを引いてカートリヅジを詰め、安全装置を外して適当な岩に狙いを定め、トリガーを引くとレーザーショットが発射され、岩が爆散する。

「へー！すつげーカツコイイじゃん！」

「でしょ？カートリッジ交換で麻酔弾や冷凍弾も撃てるんだ。これも怪獣娘の研究の賜物だよ。」

怪獣娘のデータを使えば、シャドウにだつてきつと効果があるだろうという算段だ。

果たしてこれが、怪獣娘の力を兵器として転用するという、以前から抱いていた懸念事項に引っかかるかはさておいて。

「じゃあ、ちよつと戦ってみようか、模擬戦。」

「おっけー！またやつつけてやるじゃん！」

「僕だつてやられっぱなしじゃないよ。」

「パンツ！と拳同士をぶつけて意気込む。毎度ボコボコにされているけれど、さりとてこれ以上負けたくないと思ひ、また無謀にも挑んでいく。」

それでも日々様々な策を弄しては、皆をあつと驚かせるようなものを投じてくるのは進歩と言えよう。

「いっくぞー！まずは顔面にボディブローだ！」

「どっちだよー！」

振るわれた腕をとって、小手捻りで軽くないす。

「銃使わないんだ・・・。」

「なんか、いざ撃とうと思ったら申し訳なくなっちゃって。」

「気にしなくていいよ、練習になんないじゃん。それに、同じ怪獣娘にだって飛び道具持つてる人はいるし。」

ミクラスにとつても、飛び道具への対処の掴み方にはなる。ならば遠慮なくと、

「構えて、撃つ・・・！」

「させるかおりゃー！」

シンジは冷静に狙って撃ったつもりだった。が、突進してくるミクラスに当てられなかった。

「ぎゃっ！」

「もいっぱっ！ハリケーンミキサー！」

対象が近くに寄ってくると、焦って照準がブレやすいという。この辺りは射撃の腕前以上に、いかなる時も平常心を忘れない、精神力の問題となるだろう。空中に放り投げられながら心の中でかみしめる。

「レーザーなら、薙ぎ払って使うことも出来る！」

「くっ！」

シンジの反撃に、ミクラスは歩みを止めてしまう。そうなれば、ますます集中砲火の餌食となる。



「このまま押し切れるか・・・?!」

「なんのー! まだまだ!」

ミクラスは拳でレーザーを弾きながら、無理矢理突破してきた。とて、それを予測できないうんじんでもない。

「接近戦になると、レーザーは使いにくいか・・・。」

冷静に冷静に、かわして避けて退く。シリンダーを引いて、カートリッジを交換する。試しに当ててみるがひるむ様子もない。

「威力が足りないか・・・なら。」

再び振るわれる拳を受け止め、今度は銃口を突き付けてゼロ距離射撃を試す。

「ちよつとは効いた?」

「ぜんぜん、へっちゃらだし!」

おかえしにとボディに強烈な一撃をもらう。効かないと言われたが、やせ我慢だと思う。少しプルプルしている。

「なるほど・・・ちよつとわかった。」

「なにが？」

「無理に銃使う必要ないわ。」

ライザーショットを仕舞い、立ち上がって息を整える。

今回見れたのは銃そのものの性能と有用性。そこに使用者の技能が合わさって、初めて戦力になったと言えるだろう。つまり、要練習、要研究。

「じゃあ、もうやめる?」

「全然、性能テストと勝負はまた別だし。」

「そここなくっちゃ!シンジさんもなかなかのバトルマニアになつてきたね?」

「いつまでも、守られっぱなしってわけにはいかないからね!意地があるんだよ。男

の子には！」

研究していたのは武器だけじゃない。技の修練にも余念はない。相変わらずのプロレス技主体だが、その組み合わせ方は無限大だ。

「じゃあ今度はこっちが！バツファフレイム！」

「うおっ！そういうえばミクラスは熱線を吐けるんだった！」

ミクラスの資本は格闘能力にあるだろうが、かといって遠距離攻撃にも隙が少ない。パワー重視のオールラウンダー、思えばかなりの強敵を相手にしているんだと、己のうかつさを嗤った。

「けど、こっちには作戦があるんだ！」

瞬発力ならばミクラスが勝るかもしれないが、全体的なスピードには今のところシンジに軍配が上がる。

「将を討たんとするなら、まず馬を射よ！」

「なに？しよー．．．シヨウウインドウ??？」

「ちがうわっ！まずフランケンシュタイナー！」

一気に詰め寄り、足で相手の首をとって振り落とす。仰向けで地面に倒れた相手の片足を掴み、一回、二回、三回とそこを軸に回転して締め上げる！

「スピニングトーホールド！」

「あぎゃー!!」

「続いて！」

さらに相手をひっくり返してうつ伏せにし、もう片方の足も巻き込んで固める！

「テキサスクローバーホールド！」

「こ、この技は．．．『テキサスキッド』の．．．！」

「そうさ！足を徹底的に痛めつけるのさ！」

あらゆる攻撃、あらゆる格闘技において、足運びが重要なことは言うまでもない。その足を破壊して、徐々に有利な状況を作っていく。相手が武器を持っているなら、まずはその武器を奪ってしまえばいいのだ。

「決してあきらめず、最後には勝利をもぎ取る、それが僕の好きなテキサスキッドさ  
！」

「なるほどね・・・けどデビルバッファローのほうがパワーは上だよ!!」

「テクニックはテキサスキッドの方が上さ!」

もがくミクラスを制し、さらにギリギリと締め上げる

「ぐっうう・・・さすがにこれはキツイ・・・かも・・・。」

「どうだ! まいったと言え!」

「まだ・・・まだまだあ! アタシだって・・・もつと強くなるんだ! うおおおおお  
おお!!」

吠えるミクラス、それに呼応するように全身が熱く燃える。

「バツファローパワー!!」

「ぐうう・・・こんなパワーが・・・!」

持っていた足に、強引に振りほどかれ、たまらずシンジは飛び退いて様子を窺った。

「なんてすごい・・・だけど、十分にダメージは与えたはず!」

「アタシに・・・限界はない!!」

両腕を、前脚のように地面に叩きつけ、ロケット頭突きでシンジの足を掬う。空中に投げ出されたシンジに、さらに頭突きの追撃を行う。

「ハイ!ハイ!ハイ!ハイイイイ!」

「ぐわああ・・・!押され・・・るっ!」

「いける!今ならいける!」

その時、ミクラスに電流走る。天啓を得た、新たな技のひらめき!



「どうやらあの瞬間、ミクさんが潜在パワーを發揮したことによって、『あの場で最もトガった物体』として認識され、雷に狙い撃ちされたらしい。」

「どんな理屈ですか。」

そんなバカな、とあきれるウインダムをよそに、シンジはずんずんと歩を進めていく。その眼は渦を巻いて正気を失っているようにも見える。

「で、今日は『おまじト』の劇場版の再上映だっけ?」

「そうなんです、当初の予定より半年以上延長されたロングランから、さらに今回リバイバルまで決定したんですよ!」

「快挙だねー。」

「それよりもシンジさん!しつかり予習はしてきてくれましたか?」

「漫画は全巻読んだし、アニメも一通り見たよ。OVAと小説は見てないけど。」

「それだけあれば大丈夫です!さあ行きましょう!」

(Wikiとかで先にネタバレ見ちゃったんだよなあ・・・)



公開当時、ウインさんはひと悶着あつたらしいけど、今はこうして楽しくやってるんならいいんじゃないかな。

「上映時間になってからが長いよね。宣伝とか。」

「ああ、ありますね。」

「その中でも、明らかに映画そのものの対象年齢から外れてるような広告とか見ると、なんだかなあ……つてなったり。」

「ありそうですね、そういうの。」

「明らかに対象年齢『下』だろつて、思ったり。」

「『下』? ……ああ、そつちの。てつきり『上』かと……。」

「なに?」

「いえ、なんでもありませんアハハ……。」

……。3秒考えてシンジも悟った。

「ああ、そういうことね。ウインさん、女兒向けアニメとかも見ろの?」

「え!? あ、まあ、結構……ネットとかでもよく話題になりますので、一応。」

「決して子供向け作品が幼稚とか、そう言いたいわけではないよ？ 実際子供向け作品って、侮れないぐらい面白かったりするし。」

「そう……ですよね、いつ見ても面白いですよね。」

「子供向けだからこそ、大人も本気で作ってるんだなって、そう思う。」

「おまピトだって負けてませんよ、子供向けじゃないかもしれないかもしれませんが、製作者から作品への愛を感じます！」

「……中高生向けじゃなかったっけ元々、おまピト？」

「あつ……そうですね、中高生も子供ですよね、アハハ……。」

「えっと、つまり何が言いたかったっていうと、誰が何を好きなのかなんて、結局自由なんだって。それだけ。」

「私も……そう思います。今度は、シンジさんの好きなのをオススメしてくださいね。」

「と言っても、好きな漫画といえバツスルマンぐらいだけど……。」

「ミクさんも好きって言ってましたね。私も興味あります！」

「そっか、じゃあオススメのシリーズは……。」

「2時間後」

「面白かったね、原作愛に溢れてたと思う。」

「そうでしょう！そうでしょう！！特にあの一話のあのシーンがリフレインして……。」

リバイバルにあたり、追加された新グッズを手に劇場を後にした2人。

「なにか軽い物でも食べますか？」

「そうだね、今度はなにかしよっぱいものが食べたいかも。」

ファーストフード店でポテトとクリームソーダを注文した。クリームソーダは魔法の飲み物だ。何歳になってもその甘美な誘惑には勝てない。

「ソーダに氷を浮かべておかないと、アイスが沈んでとけちゃうから、家で作るときは気を付けようね。」

「外は寒いのに、アイス好きなんですか？」

「どっちかっていうと、クリームが好きかな。」

んー♡と甘いのを口にしては、しょっぱいポテトを味わう。交互に食べることで違う食感を味わうのだ。

「なんというか、幸せそうに食べますね。」

「うん、おいしいよ。ウインさんもアイス一口どう？」

「えっ。あー・・・じゃあ一口だけ。」

コーヒーのマドラーでアイスクリームを掬い、はむつと頬張る。口の中でじゅわつと溶ける甘味に頬が綻ぶ。

「なんていうか。」

「はい？」

「今までで一番デートらしいデートをしている気がする・・・。」

「大変・・・だったんですね。」

「うん、大変だった。」

「でもみなさん、それだけシンジさんのことを信じてるってことじゃないでしょうか」

? シンジさんのこともっと知りたいって。」

「そう思ってくれてたら、嬉しいかな。」

「・・・シンジさんって。」

「うにゅ?」

「力を恐れたことって、ありますか?」

「いつも恐れてるよ。コレに関しては特に。」

パンパン、と上着の上から腰を叩く。

「封印することも出来るかもしれないけど、それでもやっぱり逃げきれないと思うし。だからもう、一蓮托生って思ってる。」

「・・・強いんですね、シンジさんは。」

「そんなことないよ、みんながいるおかげ。」

「・・・こんなこと、言われても困るかもしれないんですが。」

「聞くよ、悩みごとでも懺悔でも。」

「私、以前は周囲と壁を作ってたんです。こんな趣味してるから、相入れないだろうっ

て思つて。」

「そのせいで、この映画が最初に放映された時、暴走しかけてしまつて。本当に自分が情けなくつて。もしも他に誰か、同じ気持ちを共有できる友達がいたら、もつと違つたのかもしれないなつて、今になつて思つてて。」

「あんな．．．あんな下らない理由なんかで、暴走しかけたつてことが、なんだか恥ずかしくつて。」

「下らなくは、ないでしょ。」

「．．．。」

「下らなくはない。僕だつて、小さいとき、そのマツスルマンのテキサスキッドが死んじゃつた時は本当にショックを受けたんだ。今だつてそう、好きな女優さんが結婚したり、好きなシリーズの打ち切りが決定したときは落ち込むよ。ウインさんの場合、それがたまたま当たり所が悪かつたつてだけでしょ？それに今はもう乗り越えられたんだろうし。」

「それは．．．。」

「あの映画、本当に面白かった。特にラスト5秒のパスラツシユからの逆転ゴールには、思わず息をのんだくらい。試合にどんなに負けそうになっても、最後逆転しちゃえばOKってことだよ！それにこの興奮を覚えてくれたのは、立ち直ってくれたウインさんじゃん。」

「……あつ。」

「その……正直言っちゃうと、最初はウインさんのことを知りたいって思ってた。けど今は純粹に、僕もおまピトのファンになったよ。ウインさんが教えてくれたおかげで。本当に、ありがとう。」

「だから、これからもよろしく。」

「……はいっ。」

ぎゅつと、固い握手を交わす。今ここに、同じ星の下に強い同盟が結ばれた。

「ふふつ、それにしても……。」

「なに？」

「ゴモたんさんと同じようなことを言うんですね、シンジさんも。」





「ぐぬっ、なら逆転してみせい。」

「望むところ。」

前回の対局との違いは、現状シンジが優勢だということ。アギラは盤面をじつと見て考え込んでいる。

「こつち……かな……？」

アギラは、自分が駒のひとつに手を伸ばしたその時、一瞬シンジの口角が動くのを見逃さなかった。

「やっぱこつち。」

「あ、あ、っ?!」

一瞬の油断が命取り。

「なんでだよ、なんなんだよ、一度ぐらい勝たせろよ……。」

「ゴメン、勝負は真剣だから。」

「つていうか、なんかごめんね。せつかくデートだっていうのにどこにも行かなくて。」

「ううん、ボクもゆつくりするのが好きだから。シンジさんも疲れてるでしょ?」  
「まあ、毎日大変だったからね・・・。」

「ずずつとお茶をすすって一息つく。連日ハードワークの体を気遣ってくれてか、G I R L S 本部での遊びを提案してくれた。やることと言えばボードゲームぐらいなものだが。」

「バディライザー、もう直ったの?」

「いや、もうすぐ発注してたパーツが届くから、それに交換したら終わりかな。」

「そんなことできるの?」

「うん、ほとんどのパーツはごくありふれたものだったし、それに勉強したからね。特別なのは一個だけ。」

「シンセナイザー、だっけ。」

「うん、バディライザーの中核部分にして、ブラックボックス。」

自分の指先よりも小さいようなちっぽけなパーツに、世界の命運を左右するほどの威力を秘めている。

「シンジさん、ちょっと詰め込みすぎじゃない?」

「なにが?」

「毎日、怪獣娘と会ったり、勉強したり、体を鍛えたり、もうちよつと自分の体をいたわったら?」

「うん、よく言われるよ。けど、どれだけやっても、どれだけ研鑽を積んでも、足りないような気がして。」

「足りない分は、ボクたちが補えばいいんだよ。もつとボクたちを、頼ってね。」

「うん、ありがとう。」

「・・・ホントにわかってる?」

「わかってるよ。」

「嘘、また指組んでる。」

シンジは自分の手を見て、あわててパツと離れた。

「シンジさんみたいな、人の事を頼りにし辛いヒトのことは、よくわかるよ。他人の事を信じてないわけじゃなくて、それ以上に自分を信じてないってこと。」

「ほ?」

「自分に自信が無いから、自分で何もかもやらなきゃいけないって重圧に考えてしま  
う、それでしょ?」

「まあ……たしかに。」

「けど、それを補い合つてこそその仲間でしょ。ボクに出来ないことを、みんなや、シン  
ジさんがやって欲しいんだ。」

「……じゃあ、今度一発芸フラれたら、アギさん身代わりなつてね?」

「ええ?!……つて、ボクは真面目に話してるんだよ!」

「ごめんごめん、わかったよ、今度こそわかった。」

「ほんとにいい?」

大事なことだけど、すぐ忘れそうになる。けど、忘れた時には思い出させてくれる。  
一人じゃないって。

「ほんとのほんと。アギさんの寝ぼけ眼見てたら、安心してきたよ。」

「んもー、地味にひどい事いつてる。」

「ごめんごめん・・・なんだか、僕も眠くなってきたや。ごめんね、せつかく一緒にいるのに。」

「ううん、それじゃあ・・・。」

「ひ、膝枕、してあげよつか？」

「・・・なんだって？」

「もー！人がせつかく勇氣だして言ったのに！」

「ごめん、ごめんって。いいのほんとに？」

「ボクがいつて言ってるんだから、いいに決まってるじゃない。」

「そっか、じゃあ・・・お言葉に甘えて・・・。」

とはいうが、内心シンジもバクバクだった。女の子の膝、どことは言わないが、女の子の大切な部分に色々近づいてしまう。多分、普通にハグするよりも緊張するん

じゃないだろうか。けど、アギさんの好意をフイにするわけにもいかない。さつき言われたばかりだ、ちよつとは甘えろと。だから、シンジもちよつと歩み寄ろう。

「失礼、します．．．。」

「ど、どうぞ．．．。」

ほどよく柔らかく、そして暖かい。自室のベッドの枕とも違う感覚、けれど安心感がある。

「ああ．．．。」

「ど、どう？」

「至福．．．。」

「そう、よかった．．．。」

こんな感覚、最後に味わたたのはいつだったろうか。いつか、ミカと抱き合った時とも違う、もつと柔らかい羽毛に包まれるような、元始に回帰するような、懐かしく暖かい光．．．。

(ああ……これだ……僕が欲しかったもの……)

本当に、アギさんには何もかもを見透かされる。不思議な人、とても大切な、僕の仲間……。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「おはよーシンちゃん！大変だったね！」

「あー、ミカか……。」

「なにさー！ミカか……って！ほかの女の子に夢中だから、幼馴染はもう眼中にないっての？釣った魚に餌やらんの？」

「なにそれ、意味わかんない。」

翌日、やっと平穩が戻ってきた。今日は、なにかしらをやるものの、なにもない日だ。今日の午後にはバディライザーのパーツも届く予定だし、それまでにもう少し修正する箇所があったので、そこを詰めるもよし、あるいは体を動かすのもいい。とにかくフル

に使う。

「それよりもシンちゃん！お楽しみだったんじゃない？」

「ん？そうだね、色々あつたけど楽しかったな。また約束出来たら、一緒に遊びに行きたいかな。」

「そっか、ところで、あと一人誰か忘れてない？」

「あと一人？」

「そう！あと一人、大切な人のこと！」

「うーん……。」

ポク、ポク、ポク、チーンと頭を回してひらめいた。

「そっか、ピグモンさん。ピグモンさんにはいつもお世話になってるから、何かお返ししない？」

「そうじゃない！そうだけどそうじゃないよ！」

「違うの？じゃあ……ゼットンさんとか？でもゼットンさん、そういうの断りそうだしなあ。」



「ちがうよー！」

「違う？じゃあベムラーさん。『仕事だから』って割り切られてそうだけど、やっぱり何かお返しもしたいし。」

「もー！わざとやってるでしょ！」

「わざともなにも、この前行ったばかりでしょうが！」

もはや漫才のようなかけあいだった。

「違うの！みんなと行ったんだから、次は私にも同じのが欲しいの！」

「同じのって？」

「ネコカフェ行って、喫茶店行って、バトルして、映画観に行って、膝枕してもらおうの！アギちゃんに。」

「最後のはアギさんに頼みなよ。」

「とにかく！絶対行くの！今すぐ！」

「いつかは行ってあげるけど、今日は勘弁して。もうクタクタだから。」

「ホント？じゃあ明日行こうね！」

「明日？全部？」

「イエス！」

「・・・わかった、他ならぬミカのお願いなら、一緒に行こう。」

「えっ、ホントに？」

「えってなんだえって。」

「だって、疲れてるんでしょ？無理してくれなくって、いいんだよ？」

「無茶だけど、無理じゃないよ。ミカと一緒にいきたいって思ってたのは事実だから。いつもありがとう、って気持ち。」

「!!!んもおく!!シンちゃん大好き!じゃあ明日ね!約束ね!」

ついつい、軽はずみで約束をしてしまった。けどまあいい、明日を楽しみにして、今日を過ごそう。

そして、翌日。時計は午前6時。

「シンジ様、お目覚めください。」

「ふあ・・・なに?自分で起きられるよ・・・?」

「朝早くから失礼致します。お客様がお見えになっておいでです。」  
「お客?」

お客、つて表現はミカには当てはまらない。顔パスで玄関を通つて、部屋にまで上がり込んでくるのがいつものミカだ。それに、こんなに早い時間に突撃してくるなんてことは今までなかった。

「わかった、すぐ着替えるから、ちよつと待つてもらつて。」

「それまでに、温かいスープなどはいかがでしょうか?」

「あー、一杯だけ食べるよ。あとパンも一つ。」

「承知いたしました。」

いそいそと支度をし、軽い朝食を流し込むと応接室に急ぐ。

ドアノブに手をかけたとき、何かを感じ取った。

これはまた、長い一日が始まるのかもしれない、と。

(鬼でも蛇でも、シャドウでも怪獣でも何でも来いだ。)

窓から取り込まれた、朝の陽ざしがシンジをつつんでいく……。

# 大変!キョウダイが来た!

やめて!わたしのために争わないで!

漫画とかでよく見る台詞だ。どんな漫画にあつたシーンかはよく思い出せないがさ  
ておき。しかしこの場面の中心で叫んでいるキャラクターは相当腹黒だと思われる。  
二人の人間が、自分を取り合つて争うさまを眺めながら悦に浸っているように見える。

「双方、矛を収めよ!家主の御前であるぞ!」

「シンちゃんはやつと黙つてて。」

「.....」

いつになくビリビリとした殺気を立てるミカと、もうひとり。ゴゴゴゴゴ.....と無  
言の威圧感を醸し出すのは、謎の少女。

「説明しよう。」

今からおよそ2時間前のこと。応接室にやってきたシンジは、その来客に会つた。

「お待ちせいたしました。」

「.....」

「どうも、こんな朝早くから.....あなたは、たしか。」

「・・・。」

なにを言っても黙りこんでいるが、父の写真に写っていた少女。写真と同じ、白いワンピースを今は着ている。

目を引いたのは、その瞳だった。まるで生氣を感じない、深い海溝の底のような暗さがあった。じつと見ていると吸い込まれそうな深淵がそこに開いていた。髪は黒と白でグラデーションがかかったような色をしている。長くもなく、短くもない長さだが、とても綺麗な艶をしていた。

ただ、彼女は不思議な雰囲気醸し出している。写真で見た時よりも、ずっと引きよせられるような魅力があり、それがかえって怖かった。いかんいかんと、邪な考えを打ち切つて席に着く。

「それで、なんの御用？父は一緒ではない？」

「・・・。」

「手紙？」

スツと一通の手紙を差し出してきた。封を切ると、そこに書いてある字は、以前の父からの手紙のものと同一の物であった。

「えーつとなになに・・・。『その子の名前はアイラ。お前の義妹になる。私は好きにした、君らも好きにしろ。』・・・どうしろっちゅうじやい。」

パーン!と手紙を投げ捨てる。と、したところですぐに拾いなおして読み直す。

「えーつと、君はアイラって言うんだね。」

「・・・。」

「なんかリアクションが欲しい。」

「・・・。」

「なにか食べる?」

「・・・。」

「困ったなあ・・・。」

とりあえず、チヨーさんに何かつまめるものを出してもらい、なんとかコミュニケーションを図る。しかしこうも無反応では、言葉が通じているのかすら怪しいぐらいだ。

『『好きにしろ』って言われても、どうすりゃいいのか・・・。』

「おまたせ致しました、ラスクとフルーツ盛りと、こちらコーヒーとなっております。」

「ありがとう・・・ミカンなんてあったつけ?」

「こちらのミカンは、ソウジ様からのお土産です。」

「ミカンねえ、愛媛にでもいるのかな?」

以前リングゴを送ってきたこともあった。その前はイチゴだったか。だったらメロン

をよこせ。

丁寧に皮を剥かれ、ヒゲまで取り除かれたミカンを一房ひよいと口に放り込むと、爽やかな甘みと程よい酸味が合わさったジューシーな果汁が広がる。サクサク食感のラスクも、コーヒールとあわせておいしい。ついさつき軽めの朝食をとったが、これならどんどんいける。

(おや?)

ふとアイラを見ると、アイラも口を動かしていた。少し不思議なのは、ミカンばかり食べて、ラスクや他のフルーツに手を出していないということ。この差は一体なんだろう、不思議だ。

「ひよつとして、父の寄越したものしか食べないの?」

「……。」

「また反応なし……。」

ますますわからん。彼女は一体どうしたのか? 父は僕に何をさせたいというのか? そして僕は何を見落としているのか……?

「……そうだ。」

肝心なことを忘れていた。人と人が出合って、まずしなければならぬこと、それは「こほん、挨拶がまだでしたね。僕は濱堀シンジ、多分知ってる思うけど、濱堀ソウジ



の息子です。よろしくね。」

「……! 私、アイラ、よろしく……。」

どうやら、これが正解だったようだ。南国の海のような透き通った声で返してくれた。挨拶は大事、古事記にもそう書かれている。

「アイラ、綺麗な名前だ。どうしてここに来たの?」

「シンジに会いに行けて、パパが。」

「パパ?! パパなんて呼ばせてるの?! いやまあそれはいい……僕に会って、それでどうしろって?」

「わからない……。」

「それじゃあ、僕も何をしてあげればいいのかわからないな……。」

なら、予定していたことをやればいい。まずはGIRLSに行こう。そこでアイラが何の怪獣娘なのかもわかるし、ソウルライザーだって渡せる。

「よし、じゃあさっそく……。」

「おなか、すいた……。」

キュルルツと腹の虫が鳴いて、情けない声でアイラが呟いた。

「あー、じゃあ何か食べようか? チョーさん、何か適当にお願い。」

「承知いたしました。」

今度はおつまみとは違うちゃんとした料理が運ばれてきた。パンにハムエッグにフルーツを添えて、そしてスープ。しかし目の前に運ばれてきた馳走に、アイラはなかなか口を付けない。

「……。」

「ん？どうぞ召し上がれ。」

「……！ いただきます！」

どうやら、言つてあげないと食べないらしい。けどきつきミカンは食べていた。

「ミカンだけは、自分が持ってきたもの、だからかな？」

「ふん？」

「ああ、食べてていいよ。ちよつと考え事してくる。」

考え事するにはトイレに籠るに限る。公衆トイレというのは、公共の場でありながらプライベートが約束される最高の場所である、と誰かが言っていたような気がする。

最も古いトイレは、古代メソポタミア文明にあつたと言う。しかもその当時ですら水洗式であつたとされる。ろくに下水道が整備されていなかった14世紀のヨーロッパでは、ペストが大流行して大勢の死人が出た。たかがトイレと侮つてはいけない。

「本当につまらない話で尺なんか稼いでいるバヤイか。」

いつでも綺麗な水が蛇口から出てくることは、とても幸せなことだけど、そんなこぼ

れ話は全て水に流して、本題に戻ろう。

「ただいまー、つてまだ食べてるの?」

「ふがっ。」

「ところでひとつ気になってたんだけど、アイラなんか磯臭くない?」

「・・・。泳いできたから。」

「泳いでつて、どこで?」

「海。」

アザラシかなにかか?何年か前に東京の川で野生のアザラシが目撃されていたのを思い出した。

「そのままだと不衛生だから、後でお風呂に入つてきなさい。」

「いいの?」

「いいもなにも、ここはアイラの家でもあるんだよ?同じ父を持つなら、キョウダイつてことになるし。」

「キョウダイ・・・。」

「僕がキョウダイじゃ嫌だった?」

「ううん、そんなことない。うれしい。」

そういえば、一人っ子だった僕は、小さい頃弟や妹をせがんだことがあったつけ。そ

れが今こうして叶ったわけだけど。あまり望まぬ形で。

「ごちそうさま。」

「綺麗に食べたね、よろしいおあがりで。」

ご飯を食べさせて、次にお風呂に入らせて、それからGIRLSへ連れて行こうとなった。

「今のうちに先に連絡だけ入れておこうか。」

いきなり行つても準備も何もないだろう。ソウルライザーも用意しておいてほしいし、アイラがどんな怪獣娘なのかも調べたい。とりあえずいつもの教授と・・・それからベムラーさんにも連絡しておこう。

「・・・ベムラーさん、出ないな。仕方がない。」

とりあえずGIRLSの方には連絡が付いた。いつでも来てくれたらいいとのこと。

「シンジ様、アイラ様のお召し物はいかがいでしたでしょうか？」

「服?・・・あつ、そうか女物の服なんて置いてないぞ。」

ワンピースも磯臭いので洗濯させてしまった。なんというウカツ!とりあえず仮にワイシャツを着せておくものとして、それではあんまりなので代替策を練らねばならない。

「うーん・・・どうしたものか。」

ていうか、なんか忘れてるような気がする。

「なにか身震いのするような、恐ろしいことを忘れてるような……。」

「とうとうバレンタインネタを入れそこなったこと?」

「はてさてなんのことやら……。」

「ホワイトデーは3倍返しだよ!」

「0には何掛けても0だよ。」

貰っていないもののお返しなどできるものか。今話している人物は、インターホンすら鳴らさず入ってきていたが。

「おはよう、ミカ。ちようどいいところに来てくれた。」

「おつはよーシンちゃん!なにがちようどいいの?」

「さつそくだけど、ミカの服が欲しい。」

「え……やだ……ちよつとこんな朝からそんな／＼／＼」

「君は何か勘違いをしている。勘違いするような言い方をした僕が悪いんだけど。」

「ところで、なんか磯臭くないこの部屋?」

「それなんだけど、実は……。」

タイミングがいいのか悪いのか。件の人物がやってきた。そう、今日は元々ミカとのデートの約束の日だったのだ。

「ほ？じやあ今新しい怪獣娘がいるんだ。ぜひとも仲良くなりたいたいね！紹介してよ。」  
「うん、そうなんだけどまず服をね……。」

「シンジ……これ似合う？」

「あ……すごく……マズイです……。」

「ほ？」

と、ここで冒頭のシーンに戻る。ミカは身構えている一方、アイラは動かない。

「ねえ、どうしてそんなに殺気立ってるのミカ？」

「シンちゃん……そいつなんか危ないよ？」

「今のミカの方が危ないと思うけど？どうどう。」

「なんなの、そいつは？」

「さっき言った怪獣娘の子だよ、名前はアイラ。僕の義理のキョウダイになったんだ。」

「キョウダイ？家族ってこと？」

「そう。」

「私よりも先にシンちゃんの家族になったって？」

「は？」

「なんでもない。とにかく、危険だよその子は。『ゴモラ』がそう言ってる。」

「危険だったら、なおさらほっとけないでしょ?」

「……。」

半分は納得したように、渋々構えを解いた。振り返れば、アイラは少し震えているようだった。

「アイラ、驚かせてゴメンね。こいつはミカ、僕の幼馴染、悪い子じゃないんだ。自己紹介してあげて?」

「……アイラ、よろしく。」

「黒田ミカツキ……さつきはごめんね、私もちよつと驚いただけだから。ゴモラ、ゴモラんって呼んでいいよ。」

「……ゴモラ!よろしくね。」

「……うん、よろしくね。」

ミカの差し出した手にアイラも応え、ミカの表情も明るくなった。

「シンちゃんが信じるなら、私も信じるよ。」

「ありがとう、ミカ。」

「それより、女の子にこんな格好させてちゃダメでしょ。マニアックだなあシンちゃん。ていうかこのシャツ、シンちゃんのだよ?」

「決してやましい気持ちはないぞ?だからミカの服を貸してほしかったんだよ。」

「わかってるよ、適当にいいの見繕ってくるから、待ってて。そういつて出かけてから、ものの数分で帰ってきた。」

「おまたせ！アイラにはスカートの方が似合うかな？」

「アイラ、着てくれる？」

「わかった。」

衣料が色々入った鞆を持って、奥の部屋へ消えていった。

「あんなにいっぱい服持つてくる必要あった？」

「だって、女の子なら色んなの着たいでしょ？シンちゃんわかってないな。」

「はいはい、どうせ女心は把握できてませんよ。」

「ホントにねー……。」

はぁ……とミカはため息をついた。しばらくしてアイラが戻ってきた。

「どう……かな？」

「いいじゃん、かわいいよアイラ。」

「うん、似合ってるじゃん、さすが私の見立て通り！」

「ありがとう……。」

先ほどまで来ていた白いワンピースとは違う、赤紫なタイトスカートとニット服の組み合わせ。落ち着いた雰囲気のお洒落な着こなしだ。



「つていうか、ミカがこんな服持ってたのが意外だったかな。今まで着てたところ見たことないし。」

「だって、私は今のこの服の方が好きなんだもん。」

「なら、今度着て見せてよ。」

「うん、いいよ。」

「うーん……。」

「どうしたのアイラ?何か問題でも?」

「ちよつと、苦しい……胸が。」

カッチーンと、何かが弾ける音がした。

「やっぱ敵だわこの子……。」

「ミカ、なにもそんな青筋立てなくつてもいいだろ?」

「どうせシンちゃん巨乳の方が好きなんですよ!エレちゃんといいレッドちゃんと

いいー!」

「いやあ……そんなことは……ないよ?」

「目を見て話せコノー!」

この後、ヘソを曲げてしまったミカを宥めるのに時間がかかり、GIRLSに到着したのは昼前の事であった。



「ピグモンもそう思いまーす!」

「調査よ。」

「しかし、アイラが元はどんな怪獣だったのか、皆目見当がつかないけど。どうしたもんかな・・・?」

「?」

「どうすればいいかって?それはもちろん綺麗なものをたくさん見て、おいしいものをたくさん食べるんだよ!」

「まあ、そうしたら仲良くはなれるかな?」

どっちかっていうと友達フレンズになるためのフリーズのようだけど、今はそれでいいだろう。日常のふとしたことに、きっかけが見つかるかもしれない。

「アイラの好きな食べ物ってなに?」

「・・・クジラ。」

「シブいもん食ってるなあ・・・。」

専門店とか、北海道とかに行かないと食べられないんじゃないかな?

「好きな歌は?」

「・・・歌は知らない。」

「じゃあ趣味は?」

「・・・ない。」

「じゃあ、これから作ろっか！」

「よし、じゃあまずは景気づけっことで・・・。」

「ことで？」

「一発芸いってみよー！ミクちゃんが！」

「えっ、アタシ!?」

「直球勝負の私だって、たまにはボール玉も振るよ！」

「アタシ牽制球かよ・・・。」

「一発芸って？」

「なにかギャグを言えっことで。」

「・・・ギャグならひとつ知ってる。」

「おっ？アイラまじ？やってみてやってみて！」

(助かった・・・のかな?)

皆が固唾をのんで見守る中、中央に立ったアイラは、その場で飛び跳ねて、

「シエー。」

「古っ、いや逆に新しいか？」

何度もピョンピョンとしながらやる姿は、驚いたポーズというよりも勝利の舞かなに

かのように見えた。

「アイアイぴよんぴよんしてますねえ、ピグモンもぴよんぴよんするですう!」

ぴよん、ぴよーん!とウサギのようにいつしよに跳ねまわって遊んでいる。それにしてもアイアイって、南の島のおさるさんさか。マダガスカルに生息するそのおさるさんは、童謡のような愛らしいものではなく、現地住民からは『悪魔の使い』として恐れられ、中指が異常に長いという非常に冒瀆的な生物であることは割と知られていることである。

＝＝＝＝＝☆＝＝＝＝☆＝＝＝＝☆＝＝＝＝☆＝＝＝＝☆＝＝＝＝☆＝＝＝＝

「ごめんね、本当に。」

「なにが?」

「今日の約束、守れなくって。」

「ああ、なんだそんなこと。気にしてないよ、しょうがないって。」

「買い物したり、買い食いたり、遊びまわって日が暮れた。ごくごく普通の子供らしい日常を満喫できた一日だった。」

「アイラ、いい子だね。」

「最初はあるなに邪険に扱ってたのにな?」

「あれは・・・なんて言うんだろうね、怪獣娘の勘ってやつが働いたのかな。」

「単純な嫉妬心とかじゃなくて？」

「それは・・・どうかな？」

そうは言ったが、ミカの言うことにも一理あるだろう。なんせアイラは、一国を滅ぼしたという謎の怪獣娘だから。結局今もアイラの正体について何も掴めていない。

「けど、やっぱりアイラも同じじゃないかな、私たちと同じ。」

「ただの怪獣娘？」

「ただの女の子ってこと。」

河原の土手に腰かける2人から離れた場所で、アイラを含めた彼女たちがバトミン  
ンで遊んでいる。

「えいつ。」

「アイラさん、上手い。」

「ミクさんお願いしますー！」

「あいよー！」

水面も大地も朱に染まる夕焼けの光の中、一分一秒でも長く共にいることを楽しんで  
いる。しかしそれもそろそろ終わる時間だ。

「もう暗くなるから、そろそろ帰ろうぜ。」

「帰ってアニメを見る時間だわ。」

「よい子は『夕焼け小焼け』が聞こえてきたら帰るんです。」

夕焼け小焼けで日が暮れて。全然関係ない話だが、光の国と姉妹都市提携しているある市では、夕方には夕陽の似合う巨人のテーマが流れているらしい。

「アイラ、帰ろうか。お家に。」

「帰る……。」

「アイラさん、また明日ね。」

「また明日!」

「また……明日……。」

それぞれが帰路について、再びアイラと二人つきりになった。

「また、会えるの……?」

「また明日、一緒に遊べばいい。もう友達になったんだから。」

「友達……。」

「アイラは……。」

他の友達はいるの?と聞こうとして止まった。アイラが何の怪獣娘なのかもそうだけど、アイラの過去もよく知らない。GSTEに酷い事されていたのかもしれない、辛いことだらけかもしれないと思うと、聞くのを躊躇ってしまう。

GIRLSでは、そのことについての調査を命ぜられた。このまま正体不明のアンノ

ウンとしているわけにも、当然いかない。GIRLSの掲げる『救助』と『指導』には、当然必要となる情報なのだから。

いずれ聞くか、調べなければならぬことであつたが、その時はすぐに来た。

「おかえりなさいませ、シンジ様、アイラ様。お客様がお見えです。」

「ただいま。お客さん？」

誰だろう？ひとまず荷物をチャヨーさんに任せ、応接室へと向かう。

「来たね、シンジ君、そして、アイラという少女……。」

「ベムラーさん、来てたんですか。」

「君が留守電を残してくれたからな、急いで戻ってきた。」

コーヒーカップを片手に、ベムラーさんは待つていた。シンジの後ろにいたアイラの姿を見やると、わずかに微笑んだ。テーブルにはミカンの皮もあつた。

「……。」

「アイラ、この人はベムラーさん。同じ怪獣娘さんで、私立探偵をやつてるんだ。」

「ベムラーだ、よろしく。」

「……アイラ、よろしく。」

ベムラーさんが、目くばせをしていることに気が付いた。

「アイラ、疲れたでしょ？先に休んできなよ。お風呂にでも入つて。」



「わかった。」

「パジャマも、新しいの買ってたよね? チョーさん、あとよろしく。」

「かしこまりました。」

「これでよかったですか?」

「察しがよくて助かるよ。これからもその調子で頼む。」

「それで、君の父はなんと?」

「この手紙の通りです。」

「なんとも・・・大雑把な内容だな。」

ベムラーさんもその内容には苦言を呈した。ベムラーさんの方も結構行き詰まっているところだったらしい。

「居場所の手がかりどころか、本人が来てしまつては、これでは私立探偵の名折れだ。」

「なら小説家にならなれますか?」

「考えておこう。それよりも・・・。」

コーヒーを飲み干し、ソーサーに置いて本題を切り出す。

「君はあの子をどうしたいと思っている?」

「とりあえず、今日GIRLSに紹介して、彼女たちとも合わせました。それがベターだと思つて。」

「君自身の、意見としては？」

「・・・あんまり、戦いとかとは無縁でいて欲しいと思ってます。いつも何かに怯えるようで、とてもなにかと争ったりできるようなには見えません。」

「過去、一国一組織を滅ぼした実績があるけれど？」

「それは・・・だからこそ、そうさせないためのソウルライザーで・・・。」

「怪獣娘でいる限り、トラブルとは縁は切れない。力をコントロールさせるには、実戦を積ませることが有効じゃないか？」

「そうはそうなんですが・・・本人がどう思ってるのか。」

「いつ爆発するかわからない爆弾を、野放しにしておくわけにもいかないぞ？」

「・・・。」

そりゃあ、そうだけど。出来ればそうしたくないって思いが、胸の中がチクチクと刺さる。それをわかっていたのか、ベムラーさんは見かねて助け船を出してきた。

「ところで、あの子は何日ぐらい滞在する予定なんだ？」

「いえ、なにも聞いてません。ただ、明日すぐ帰るってわけでもないみたいです。明日も約束していましたから・・・。」

「約束・・・。」

「ただ、遊びに行くってだけですけど。」

「なら、もう少し様子見でもいいかもしれないな。今日のところは、私も失礼するよ。」  
「・・・ごめんなさい、気を使ってもらって。」

「いいさ、これでおあいこだらう?」

ぱつ、と立ち上がり、帰り支度をしていくベムラーさん。

「そうそう、それからもうひとつ。君の方は、なにか掴めたかい?」

「ラボのパソコンのデータベースですか? 少しずつなら紐解けていますが、アイラに  
関する情報は手付かずになってます。ロックがかかっているみたいで。」

「ハックすることはできないのか?」

「正規の手段以外で臨むと、破棄されるようになってるみたいで。それに、パスワード  
の入力も一回しか受け付けてないみたいで。」

「一回か・・・それはキツイな・・・よほど覗かれたくないのか、それとも・・・まあ  
いい。なにか進展があつたら教えてくれ。」

「はい、ベムラーさんも何かあつたら言ってくださいね。」

お土産がてらミカンをプレゼントして見送った。それにしてもミカンが多すぎる。  
絶対食べきれなくて底の方は腐るぞコレは。

「オレたちは腐ったミカンじゃねえ!」

「シンジ、どうしたの?」



「んー……昨日よく眠れなかったんで。」

翌日。また今日も一緒にいる。

「バディライザーの修理とか?」

「そんなところ。もうこれでオツケーなはず。」

「じゃあさつそく試してみないとね?」

「そうならないことを祈ってるよ。」

フレームを新しくして、ボディには新しくペイントも加えた。赤と銀でウルトラマンを意識した色合いにして、アクセントとして少々黒いラインも加えて引き締めた印象になった。

「今日はどこ行くー?ていうか、アイラどこ行きたい?」

「わからない……なにも私知らないから。」

「では、アニだらけに行きましょう!アイラさんにもおまピトの魅力を……!」

「ウインちゃん、さすがにそれはちよつと落ち着こうよ……。」

一つ屋根の下にいて、少しわかったことがある。アイラには『過去』がない。忘れてしまったのか、それとも元から無かったかのように、昔の事を何一つ覚えていない。どこで生まれたのか、何が好きだったのか、何一つ思い出せない。あるのは、父と会ってからの事。

だからだろうか。空っぽなアイラの心を、『ごく普通の女の子』としてのピースを埋めるために、ここに来たのだろうか？

でもそれ以上に、僕たちがアイラと築く思い出も重要となるんじゃないだろうか？

「アイラのことを、絶対忘れないように・・・アイラを強く記憶に遺せるように。」

「そうだね、じゃ、もつともつと仲良くならないとね！」

相槌を打とうとした、その時であった。

ズオオオオオオオオオオオン・・・

「なに!？」

「爆発? 敵襲?!」

少し離れた場所から、爆発音が響いてきた。暴走した怪獣娘か、それともシャドウか、

どっちにしろGIRLS出動の時だ!

「シンジ・・・。」

「アイラ・・・。」

不安げな目で、アイラが事の成り行きを見ていた。皆は既に爆発のあった方へ向かっている。

どうしよう、アイラも連れていくか? でもまだアイラは不安定かもしれない、戦いの

場に連れ出すのはまずいかもれない。

じゃあ、僕だけ残る?・・・それも出来ない、とうかしたくない。仲間のことより、何より自分も、戦いを見つめていたい。今後のことを考えるためにも・・・。

「・・・アイラ、ここで待つて。すぐに戻るから。」

結局、どれがベストな選択かはわからない。けど悩んでいる暇もない、悩むぐらいなら走る。前からそうしてきたから、今回もそうする。

「シンジ・・・!」

怯えるアイラをその場に残して、シンジも走り出した。」

1人に、させてしまった。

「シンジ・・・イヤ・・・イヤだよお・・・。」

アイラの背後に、忍び寄る影があった。

「はやく片付いてよかったね！」

「うん、はやくアイラのところに戻ろう！」

幸いにも、現れたのは小型のシャドウが数体だけ。すぐに片がついた。

「アイラ大丈夫かな？今になってやっぱり心配になってきた……。」

「少し、無責任が過ぎるわよ？右も左もわからない人間を置き去りにするなんて。」

「まーまー、さすがにアイラもこれぐらいなら平気だって、もう子供じゃないんだろ  
し。」

「幼児体形のあなたが言うの？」

「なにをー！いいもん、ハートはビッグだもん！」

喋りながら走って、急いで戻ってきた。

まずその眼に飛び込んできたのは、青い閃光。

「ウソ……。」

「アイラ……アイラ、どこ!？」

「これ……アイラさんの……。」





一匹の、否、唯一無二なる『怪獣王』だった。



中には、剥き出しの骨のような背鰭が並び、鋭利な刃物のようにもなっている。髪は生気を失ったかのように真っ白だ。そして眼は虚ろで、なにか存在しないものを見つめているようだった。やがてはつきりとこちら側の事を視認し、そして『外敵』とみなした。「暴走してる?」

「なんとかして、治めないと・・・。」

「シンジさん、なにか作戦ある?」

「はあ・・・はあ・・・。」

「シンジさん?」

ヴオアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「シンジ! さがれ!」

「うっ!」

危険を察したレッドキングさんに飛ばされて、シンジは道路を転がった。

「とにかく、押さええつけるぞ!」

「おぉー!」

レッドキングを筆頭に、ミクラス、ゴモラ、アギラと続く。エレキングとウインダムとピグモンはシンジの傍でカバーしている。

「シンシン? 怪我はないですか。」

「大丈夫……けど、あれは……。」

人間が進化を続ける中で捨てていったはずの本能が告げている。ただの人間、もといただの人間に毛が生えた程度であるはずのシンジにもわかった。

「あの時……ミカが、ゴモラを感じた脅威って……。」

今更悔やんだところで……あの時に何かが出来たわけでもなくとも……後悔先に立たずか。

「一体どんな能力を持つてるかもわかんねえ、十分気を付けろ！」

「はい！」

数で包囲して殴る。人類が、その叡智を手にする以前からとられてきた、もつとも有効な戦術と言っても過言ではない。レッドキングが殴れば、次はゴモラ、その次にミクスと、矢継ぎ早に攻め手を交代することで、相手に狙いを定めさせない。

「くっそ、どんだけ硬いんだこいつ！」

「殴られても、全然こたえてない！」

「なら捕まえる！」

それぞれが両手両足と、尻尾を掴んで地面に組み伏せる。

「ぐう……すげえ臂力だ……！」

「で、こっからどーすんの？」

「シンジのいつもの作戦で行く！」

体力を失うまでじっと待つ。アイラはソウルライザーを失い、暴走状態にある。となれば、エネルギーを無暗に消費し、先に変身が解除されるのは必然だ。

ただし、相手が抜け出せる能力を持っていなければの話。

ガアアアアアア・・・ググツ・・・

「こいつ、なにをッ?!」

「うわあああ!!」

アイラの喉の奥が一瞬光ったかと思うと、全身から強い衝撃波が発せられ、ゴモラたちを引きはがす。

「今の・・・熱線?」

「いや、ちがう。エネルギーを体内で爆発させたんだ。」

「じゃあ、熱線も撃てる?」

「だろうな。今はまだ使ってきていないが・・・」

ゴフツゴフツと咳払いするように輪っかの煙を吐いて、アイラは立ち上がる。散開して様子をみるゴモラ達を見やり、低く唸る。

「なら次は?」

「私にまかせて、みんなは技の準備を!」

「おう、頼んだぞ、ゴモラ！」

頭を下げた低姿勢による突進で距離を詰める。迎え撃とうとするアイラの攻撃を軽く躲し、脛に尻尾の一撃を加える。

「なんだ、結構遅いじゃん。このまま攻める！」

弁慶の泣き所を徹底的に叩く。いかに強固な皮膚を持つと、弱点であることには変わりない。理性のない獣は、怒り狂う。

「おっと！当たらないよ！」

仕返しにとばかりに暴走アイラも尻尾を振り回してくるが、これにはゴモラは当たらない。

「くらえ！バツファフレイム！」

「爆発岩石弾！」

ゴモラの作った隙について、ミクラスとレッドキングが後方から遠距離攻撃を仕掛ける。アイラは少しよろめく。

「少しは効いた？」

「油断するな！」

ギョロリとその眼にレッドキングたちを映すと、大きく静かに息を吸い込み始めた。

「背鰭が……。」

「光ってる?」

尻尾の先からうなじにまで続いている背鰭が、尻尾の先から順番に青い光を放ち始めた。

「なんか・・・なんか猛烈にヤバイ!」

今度は髪が青く染まり、ストロボのような音をも放ち始めた。

「伏せろッ!」

青い閃光。圧倒的、ひたすら圧倒的パワーの塊。アイラの小さな口から放たれた『暴力』が、ビルを数棟いとも簡単に薙ぎ倒す。

「う・・・あっ・・・。」

そして残ったのは・・・

「なんて・・・破壊力・・・。」

幾多の瓦礫の山と・・・

「・・・原爆・・・?」

ドス黒いキノコ雲であった。

「もうダメだ、おしまいだ・・・。」

「なにを寝言言ってるの?不貞腐れている暇があつたら戦いなさい。」

シンジは完全に戦意を喪失した。それまでに、既に戦う気力を失っていたが、もはや



逃げる気力すらも失っていた。

「勝てっこないよ．．．あんなの．．．。」

「立ってくださいシンシン！このままじゃみんなやられちゃいます！」

「僕のせいだ．．．僕があの時アイラを置き去りにしなければ．．．こんなことには．．．。」

「そんな、シンジさんのせいじゃ．．．。」

「いえ、私たちの責任よ。」

「エレエレ！」

「今更逃げてどうするといふの?!失敗を後悔するよりも、どう役目を果たすのか考えなさい！」

普段冷静なエレキングさんらしくもない、荒々しい語気で言い放った。

「私に行くわ。」

「エレキングさんも危険です！」

「それが、怪獣娘の役割よ。」

「エレキング．．．さん．．．。」

シンジは弱々しく目線を上げた。エレキングさんの手が、震えていた。

「待って、エレキングさん。」

「なに？」

「ちよつとだけ、勇気をください。」

「これが、勇気のある人間の手に見えるかしら？」

「だったら、僕のひと欠片と、交換しませんか？」

「ふっ……いいわよ。」

足の筋肉は、今にも逃げ出そうとせんばかりに震えている。けど逃げる方向は、アイラへの向きだ。

「なにか策はあるの？」

「ちよつとだけですが、アイラの動き方は見えました。今のアイラは、『不完全』です。ライザーショットを抜いて、黄色のシリンダーを込める。これは麻酔弾だ。」

「ウインダムさん、大丈夫？」

「私にはくれないんですか？ 勇気。」

「勇気だけでいいの？」

「じゃあ、今度ケーキを奢ってくださいね？」

「コーヒーもつけるよ！ ウインダムさんは、アイラの足元だけを狙ってください。当てなくていい。」

飛び出すエレキングさんに続いて、シンジも前へ出る。

「みんな、攻撃しちゃダメだ！」

「ああん？なんで？」

「アイラは攻撃を受けて進化、いや『学習』してるんだ！自分がどんな技を持ってるのか、思い出してるんだ！」

ゴモラの大回転打の後に尻尾攻撃、バッファフレームや岩石弾の後に熱線を吐いた。最初の全身からの衝撃波・・・体内放射も、単に『熱線の吐き方』がわからなかったからだ。

（アイラは、記憶を失ったんじゃないかと、『消された』んだ。）

きつと父は、どうにかこうにかしてアイラの記憶を消し、その脅威を取り払ったんだ、一時的に。けどそれが限界になってきたから、こっちに寄越したってこと？

「せいっー！」

グウウウウウ・・・

「効いてる？電気に弱いのかな・・・エレキングさんはそのまま攻撃して！レッドキングさんは、アイラの動きを封じて！」

「お前はとうすんだ？」

「なんとかして、麻酔を撃ち込みます！」

考えるのは後にして、今は目の前の問題に集中する。怪獣娘の打撃にビクともしなかった表皮に、今の麻酔針が刺さるかはわからない。せめてシエルを剥がせれば・・・。

「念には念を押す！ゴモラ、バディライド！」

「オツケー！」

カードを取り出して挿入する。機能は問題なく働いてくれる。

「ゴモラ、ゼロシユートだ！そのために・・・レッドキングさん！」

「あいよ！アースクラツシヤアアア！」

地割れがアイラの足元まで広がり、その動きを封じる。怒る獣は、熱線を吐こうと背鰭を光らせる。

「ミクラスは尻尾を押さえて！ウインダムさん、顔を狙って！」

「おっけー！」

「わかりました！」

真正面から攻めれば、たちまち狙い撃ちにされる。けどそこまで織り込み済みだ。

「持っててよかった、煙幕！」

一発だけ試作した煙幕弾を投げ、アイラの視界を奪う。こちらには、はつきり青い光が見えている。可能な限り意識を逸らさせて、一撃を狙う。

「行け、ゴモラ！超振動波・ゼロシユート！」

「うおおおおおお！！」

煙幕を突っ切り、ゴモラのツノが姿を現す。それと同時に尻尾を掴んでいたミクラス



アイラの動きが、僅かに鈍くなってきていた。しかし、まだ止まる気配はない。

「おい、麻酔本当に効いてるのか?!」

「アフリカ象だつてブツ倒れる劇薬ですよ！それも3発!」

「アギちゃん！逃げて!」

アフリカ象に効くものが、怪獣にも効くのかどうかはさておき。再び熱線のチャージが始まった。しかも今度は、光る速度が速い。

「チャージが速くなつてる!?!」

「伏せろ!」

再び地獄の釜が開かれる。アギラとシンジはまだ退避できていない。そこにすかさず一つの影が割つて入る。

「くっ……!」

「ゼットンさん!」

「はやく退避……して……」

ゼットンさんが来た。しかしゼットンシヤッターにもヒビが入っている。

「シンジさん、はやくこつちに!」

「もう……限界……」

「あつ……。」

ゼットンシヤッターに入ったヒビから、わずかに熱線が漏れ出した。

「シンジさん!!」

それが運悪く、本当に運悪く、離れようとするシンジのすぐ傍に着弾した。

シンジの体が、ボロクズのように宙を舞った。

「ゴハアツ!」

肺から空気が叩きだされ、痙攣して呼吸すら危うくなる。

「シンちゃん! しつかりしてシンちゃん!」

「あつ……ああ……ミカ……。」

一瞬視界が暗転したが、意識ははつきりしている。死んではいけない。

「シンちゃん! すぐに救護がくるから! いや連れていくから!!」

「ダメだミカ、ミカがいなくなったら前線はどうなる。」

「ゼットンちゃんが今がんばってくれてるから！はやくシンちゃん！」

「ダメよゴモラ、動かしては！」

「エレちゃん離して！シンちゃんが！シンちゃんが！！」

首が右を向いて動かせないので、ミカの声しか聞こえていない。しばらくして、レツドキングさんやミクラスもやって来たのを感じた。

「おいシンジ、しっかりしろ！」

「大丈夫です、大丈夫……大丈夫……。」

「シンジ……さん……。」

「大丈夫……だから……。」

全然痛くないから、本当に。全然、『痛くない』んだ……。

「ねえ、誰か……ミカ……アギさん……エレキングさん……。」

「シンちゃん！」

「シンジさん！！」

「……っ！」

「僕の左手……どうなってるの？」

左腕が、動かせない。それどころか、感覚もない、痛みがない。



「シンちゃん、大丈夫だよね?! 本当に大丈夫なんだよね! すぐ病院連れてくから!!」  
「動かしちゃいけない!!」

ミカが、エレキングの腕を振り切ってシンジの体を起こす。今のシンジに目が釘付けになっていた一同は、その制止が遅れた。

「ダメ!!」

「あつ・・・あう・・・?」

体が起き上がって、やつと気が付いた。今まで必死になって、理解しようとしなかった事実がわかってしまった。

「あつ、ああ・・・あああああ!! ああああああああああああ!!!」

「いけない、押さえて!!」

理解した途端、痛みが襲ってきた。痛みと恐怖がシンジの脳を食い潰そうとしてきた。心臓が激しく鼓動する。たちまちパニックになり、ビチビチと陸に上げられた魚のように手足をバタつかせ、暴れる。

「マズい! 出血が酷くなってきた! このままだとショック死するぞ!」

シンジは、出鱈目なことを口走った。

「止血しないと、ゴモラどいて!」

シンジは、誰かに向かって謝り始めた。

「ダメ！すぐ連れてかないと！」

シンジは、正気を失っている。

「シンジさん！シンジさん聞こえる?!」

「こうなったら・・・離れて！」

エレキングさんは、尻尾を振るってシンジの体に電流を流した。

「あびやあばばば・・・ああ・・・?あれ？」

「シンジさん?意識戻った？」

「ああ・・・はあ・・・。」

「今の内に止血を、ピグモン！」

「わかってます！」

「ああ・・・?・・・ピグモン・・・さん？」

「そうです、ピグモンですう！シンシンは大丈夫ですよ！」

「そ、そか・・・そっか・・・。」

一瞬気を失ったことで、正気と落ち着きを取り戻した。左腕はジンジンと痛むが、それがかえって正気を保たせた。正気を取り戻せば、すぐに冷静なシンジが帰ってくる。

「今、アイラは？」

「ゼットンさんが戦ってるよ。けど、それでも厳しいかも・・・。」

「今のうちに、シンジさんを病院に！」

「待って、まだやらなきゃいけないことが！」

「その体じゃ無理よ、どんな無茶だって出来ないわ。」

「わかっています、体が無理でも、頭は動いています。僕の銃は？」

「えっと・・・あつた、あそこ・・・。」

少し離れたところに飛ばされたライザーショットを、アギラが拾いに行く。

「これを、どうするの？」

「麻酔がダメなら、冷凍弾を・・・。片手じゃ無理か。アギさん、シリンダーを引いて、カートリッジの下のボタンを押して。」

「えっと・・・こうか。外れたよ。」

「じゃあ、この・・・こつちを詰め替えて、シリンダーを戻して。」

「これでいい？」

「それでいい。」

青いカートリッジが冷凍弾。—200℃まで一気に冷却にできる。

「それを、アイラの背鰭に撃ち込むんだ。表皮よりも、エネルギー器官に直に届くと思う。」

「・・・どうやって？」

「そんなの、狙って引き金を……。」

突然、視界が揺らぎ始め、頭も急に重くなってきた。貧血だ。

「ごめん……これ以上は僕もう無理だ……。」

「……わかった、なんとかするよ。だからシンジさんは。」

「ありがとう……ごめんね。」

アギラへ伸ばした手が離れていく。ようやくこの戦場から離れられるという安心感からか、シンジは少しの間気を失っていた。気が付いた時には、既に決着はついていた。

ここで冒頭に戻る。病院の一室を当てがわれていたが、眠る気にはならなかった。いてもたってもいられずに、GIRLS本部の方へと足を進めようとする。左腕に巻かれた包帯を擦りながら。

「なんか、騒がしいな。」

街は混乱している。あちこちで煙が上がり、遠くにサイレンも聞こえてくるが、もつと騒がしいことはすぐ近くで起こっているようだった。

「デモか、あれ?」

騒ぎが起こってまだ半日も経っていないというのに、もう反怪獣団体や、マスコミが

動き始めた。今までも話には聞いたことがあったが、実際に見るのは初めてだ。マスクミも、こんなところで出待ちするよりやることがあるんじゃないの？

「裏口から出入りさせてもらうか。」

GIRLS本部はすぐ目の前だというのに、とんだ遠回りを強いられる。

「おっと。」

裏口を出て角を曲がったところで、いかにもな一団がこつちに歩いてくるのが見えた。捕まったら面倒だと思い、一旦引き返そうかと思つたが、今度は来た道の方向からマスクミがやつてきた。おそらくその両方に、シンジの顔が割れていることだろう。

「しまった・・・。」

両手が空いているなら、塀を乗り越えてやり過ごすことも考えたが、生憎左腕はまだ完治していない。多少無理をしてでも、ジャンプして飛び越えられるか試そうとした、その時。

「こつち。」

「えっ？」

ピシユン、つと路地からシンジの姿は消え、デモ団体とマスクミはただすれ違つて終わった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「えっ?」

「大丈夫? シンジ。」

「ぜ、ゼットンさん?? どうしてここに? つてか、ここは?」

「GIRLSの屋上。」

気が付けば、見覚えのある場所へと移っていた。何度かミカとも2人でえ夜景を眺めたりもした場所の、昼の時間に今はいる。ゼットンさんと一緒に。

「これを、あなたに。」

「これ、ライザーショット・・・ どうしてゼットンさんが?」

「私が借りた。役に立った。」

「え? あれは・・・。」

すつとゼットンさんが指さした方向・・・東京湾、アクアラインの辺りに、巨大な氷塊が浮かんでいた。

「あれを、ゼットンさんが?」

「レポートであそこまで運んで、あなたの銃を使った。」

「この銃、そんな威力があったんだ・・・。」

自分で作って、使用を促しておいてこの言いようはないと思うが。ともかく、海水ごと凍らされたおかげで、溶けきるまで時間が稼げそうだ。そのころにはある程度は麻酔

も効いているかもしれない。

「みんなは、今どこに？」

「もうすぐ作戦会議がある。そこで集まっている。」

「僕らも行きましようか。」

「あなたは、平気なの？」

「・・・大丈夫です。行かないわけにもいきません。」

「そうなら、いいのだけれど・・・。」

平気なのかと言われると、そうでもない。後悔や後ろめたさに押しつぶされそうになっている。けど、ここで歩みを止めるわけにはいかない。

「今は一分一秒も惜しい状況ですから。」

「・・・。」

作戦会議、いつもの会議室を使って対策本部が作られている。

『『未確認怪獣娘対策本部（仮）』か・・・。』

本当に大事になってきたな・・・まあそれも仕方ない。

『現在、対象の未確認怪獣娘は、アクアライン周辺にて凍結中。氷の大きさ、使用された麻酔薬から、48時間は動かないことが計算されています。』

壇上で、ピグモンさんがブリーフィングを行っている最中だった。適当に席に着く

と、配られていた資料に目を通す。

(暴れた結果、ビルが6棟全壊、13棟半壊、怪我人が十数名と、死者は無しか……。) すごい被害だが、死者が出なかつたことだけが幸いか。それでも、怪獣娘への社会的なダメージは免れない。今すぐ外でやっているデモがそれだ。

「ソウルライザーで制御できないカイジューソウルを、どうやって治めるんですか?」 『それも現在は調査中です。ともかく今は、すべての怪獣娘の活動を停止し、いつでも万全の態勢でいられるよう心掛けていてください。』

つまり、『なにもできない』ということだ。会議室の中では不満の声も上がっているが、別にピグモンさんが悪いわけではない。

「シンジサーン。」

「アギさん、ミクさん。ウインさんは?」

「ウインちゃんは調査中。つて言つても、どこで何を探せばいいのかわからないつて言つてたけど……。」

「そう……。」

現状、アイラのことを一番知っているのは僕だ。だがそれでも不十分だ。その義務もある。

「僕が、行かないと……。」



「シンジさん、大丈夫？ 顔色悪いよ？」

「ああ・・・そういえば、昨晚はよく寝れなかったんだっただな・・・。」

「その上怪我までしてるんだよ、無理しちやだめだよ。」

「でも、僕にしか出来ないから・・・。」

「だからこそ、無理しちやダメなんだよ。休もう、ね？」

アギさんに促され、とりあえず場所を移すことにした。それなら最初から病室にいればよかつたのに、一体何をやっているんだろうと心の中で呟いた。外に出ることも出来ないし、どの部屋も空いていないだろう。なら屋上に戻るとしよう。

「騒がしいな・・・。」

下ではイカれた群衆がやいのやいの言っているし、上はヘリコプターがバタバタ言っているが、それは自衛隊やGIRLSのものではない。

「あんなに飛んでたら邪魔になるだろうに・・・。」

そのヘリコプターの向かう先は、アクアラインの氷塊。バディライザーの望遠機能で眺めてみると、近くの埠頭や展望台にも人が集まっている。観光でもしてるつもりか。

「・・・狂ってる、何もかも。」

「どうして?？」

「アギさん、いたの?？」

「シンジさん、休まないつもりかとも思ってる。」

「すぐ後ろにアギさんが来ていて、悪態をついていたことを見られてしまった。」

「何が狂ってるの?」

「狂ってる、というか矛盾してる。」

「矛盾?」

「怪獣娘が危険だっていう主張は、たしかに間違っちゃいない。あ、ごめん、アギさんたちがそうだって言いたいわけじゃないんだけど。」

「それはわかるよ、それで?」

「危険だ危険だって言ってる人間が、その危険の最前線に自分から入ってきている。下にいる連中も、あそこで写真撮ってる連中も。」

「そうだね、マスコミの取材も病院の前でもやってて、搬入の邪魔になってるみたい。」

「ついでにあの報道ヘリの数もね。」

「まるでお菓子の山に群がるアリや羽虫のようにブンブンと飛んでいる。」

「壊れたビルだって、みんな保険に入っているし、当人以外が文句を言える筋合いはな  
いはず。」

「今のご時世、怪獣保険に入っていないところなんてないもんね。」

『ニコニコ保険』のパンフレットなら、どの建物にでも置いてある。今や火災、災害に

次いで怪獣保険は無くしてはならないものだ。勿論お金の問題ではないのだけど。

「それに何より、なんでこんなに怪獣娘のことを責めるの？自分達とは違うから？そんなこと全然ないのに、みんなただの女の子なのに。」

「こうして被害が出てるんだから、それも仕方がない事だよ……。」

「でも守ったのも怪獣娘なんだよ?! GIRLSのみんなが頑張ったのに……なのに、『ありがとう』も言えないの!？」

「それは……。」

涙が出てきた。悔しさや怒りと、哀しみで。

「本当に悪いのは違うのに、みんなでもアイラでも……僕のせいなのに……。」

「そんな!……そんなこと……。」

これが一番の本音だった。慰められるよりも、ただ怒ってほしかった。なのに皆、僕に優しくしてくれた。それが何よりも堪えた。

「誰か、僕を叱ってよ……!」

「……そうだね、ボクはシンジさんの事嫌いだ。」

「……。」

「今みたいに、ウジウジして甘ったれてるシンジさんなんて嫌い!」

「アギさん……。」

「シンジさんを裁く権利なんて、ボク達にも、誰にもないよ。自分自身で立ち上がって、自分の手で見つけないと。シンジさんになら、出来るでしょ?」

「僕に……出来る?」

「シンジさんも、アイラのことも救えるのはシンジさんだけなんだよ、ボクはそう思う。ボクたちは、その手助けができるだけなんだ。だから、立って。」

アギさんが、手を差し出してくれた。こんな時にも、僕の肯定してくれた。

「そうか、そうだね……わかったよ。僕がやるんだ。」

「ボクたちが、ね。」

「うん、ありがとう、アギさん。」

ひとしきり泣いて清々した。立ち止まっているわけにはいかないんだった。大事なことなのに、すぐ忘れる。1人じゃないっていうのが、本当にこういうことなのかも。

「安心したら、なんだか眠くなってきた……。」

「寝てないんでしょ?少し休もう。また、膝枕してあげるよ。」

「いや、それは……お願いしちやおう、かな?」

「うん、どうぞ。」

ちよつとぐらい、甘えさせてもらってもいいかな?季節は冬だけど、今日は日差しもあつたかいし、お昼寝日和だ。

「けど、ちよつとうるさいな．．．。」

「じゃ、じゃあ．．．こうしてみる．．．?」

「おつ? おあつ!？」

「あんまり、動かないで．．．。」

「あつ．．．ああ．．．。」

「変な声も出さないで．．．。」

アギさんが、上体を折り曲げて耳を塞いでくれた。より柔らかい感触のサンドイッチ．．．暖かさも倍。

(胸の音が．．．心地いいな．．．。)

その鼓動に耳を傾けている内に、夢の世界へと入っていった．．．。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「．．．つはあ!？」

時計は2時を指している。しかし外は暗いので、午前の2時だ。自分の部屋の自分のベッドで、汗をかきながら目が覚めた。遊びに行く約束は今日の昼からだ。起きるにはちよつと早すぎる。

「あんまり、よくない夢．．．だった．．．な。」

枕元に置かれた水差しを傾け、一杯煽る。GIRLSに所属するようになってから、

こういった夢をよく見るが、予知夢の能力にでも本当に目覚めたんじゃないかな。それならもつと楽しい夢が見たいけど。

「……はあ……。」

しばし考えて、携帯に手を伸ばす。電話帳の中から『天城ミオ／ベムラーさん』の項目を選ぶ。こんな時間に電話をかけるなんて非常識、とエレキングさんになら叱られそうだけど、今はすぐにでもベムラーさんと話がしたかった。数回のコール音の後、明るい声色のベムラーさんが出た。

「もしもし、シンジです。夜分遅くに失礼します……。」

『もしもし、構わない。今も仕事だったから。徹夜はいい仕事と美容の敵だけだね。』

いつもと変わらない口調に安心感を覚えた。気を使ってくれたのか。

「その……今日のことなんですが……。」

『ああ、彼女の処遇についてかい？こんなに早く結論を出してくれるなら嬉しいよ。』

「いえ、本当はあの時に言うべきだったと……。」

『冗談だよ、どうしたんだい、こんな夜更けに？』

一呼吸おいて、喉の奥から言葉をひねり出す。

「……怖いんです、本当は『知る』ことが。」

『怖い?』

「アイラの過去のこと、父たちがアイラにしたことを知るのが怖いんです。アイラだけじゃない、父たちの実験の犠牲になった怪獣娘さんたちのことを考えると……。」

『……どんなことをされたのか、想像することが?』

「いえそうじゃないんです、いやそれもあるけど……『向き合うこと』が怖いんです、父の所業に、罪に向き合って、背負うことが……。」

「今までずっと……ほんの半年ほど前までは、父とも関係ない場所で過ごしていたのに、今は『ここにいます』。それがどうしても……。」

『飲み込めない?』

「そう、飲み込めないんです。みんなと出会えたことは、とても嬉しいことだけど、父の所業を思うと、後ろめたさに潰されそうにもなる。それを今、アイラの隣にいて実感してるんです……。」

『……そうか。』

ただ気楽に、仲間たちと一緒に過ごしていたかった。けどそれを、父は許してくれなかった。父だけじゃない、父の実験の犠牲になったものたちに……。

『以前私が、シュレディンガーの猫について言ったことを覚えているか?』

「本当の父は、どっちなのか開けてみるまで分からない、ってことですか?」

『そうだ、今の君はまさに、その箱の蓋に手を添えているんだ。そして「開けない」と言う選択肢が無い。』

『世の中には、不都合な真実がいくらでもある。目を背けていられないようなことが、生きている内にかくつても出会う。けどそれを乗り越えていくことが、「大人になる」という事なんだ。』

「大人になる・・・。」

『そしてもう、君は「選んだ」んだ。そのバディライザーを手にした時、この運命は決まっていることだったんだ。それを「わかっていた」ハズだ。』

「・・・。」

『大丈夫だ、わかっているけど、現実には直面すれば立ち止まってしまおうということもある。それを助けるために、私たち「大人」がいるんだ。私に頼ってくれればいい。・・・これが聞きたかったんだろう?』

「・・・はい!ベムラーさんには、かないませんね。」

『私の方がずっと大人だからな?それで、どうして欲しい?』

「僕は、父のことに直面することを避けていました。そのせいでアイラについての調べ事が遅れていました。」

『例の、データベースのことだな。』



「そうです、それ以上に、僕の頭ではパズワードを解けないようです。」

『だから私に依頼したい・パズワードの入力と、中身の調査を?』

「はい、お願いできますか?」

『いいとも、ちょうどこつちも行き詰まっていたところだ。新しいパズルが出て来たなら、そつちに手を出そうとしているところだった。』

「では、お願いします。チョーさんには、ベムラーさんがこの家のあらゆる物に手を出してもいいように言っておきます。」

『ベッドの下もかい?』

「そこはやめてください。」

『ははは、冗談だよ。わかった、任せてくれ。』

「お願いします、それから、ありがとうございます。」

『いいさ、報酬には期待しておくよ?』

「はい、ではまた。」

少しだけ、安心が出来た。これで枕を高くして眠れる・・・という時間でもないか。

「少しでも休眠しないと・・・明日も大変だぞ。」

正確に言えば今日になるけど。どんなどころへ行くだろう?色々遊んだけど、こんどはなにを・・・。

「シンジ様、お目覚めください。お客様がお見えです。」

「ふわあ・・・お客？ベムラーさん？」

「そうです、お召し物と、何か温かいスープはいかがですか？」

「いや、今はいい。すぐ済むはずだから、着替えだけ。」

「かしこまりました。」

時間は午前6時。いくらなんでも早すぎじゃないか？いや、深夜に電話した僕に言えることでもない。

「お待たせしました。」

「いや、平気だ。今日君の予定は？」

「アイラと一緒に、みんなと遊びに・・・。その荷物は一体？」

「ああ、しばらく厄介になるよ。住み込みで隅々まで調べさせてもらうからな。構わないね？」

「いいですけど、デザートは当分ミカンですよ？」

「はは、3食までつけてくれるならありがたいよ。」

チヨーさんに説明し、一部屋もあてがってもらおう。つくづく、一人暮らしには広すぎ

る家だと思った。

「でもくれぐれも、」

「わかっているベッドの下だろうか？」

「ベッドの下が、どうしたの？」

「ヴェっ、アイラ、起きたの?!」

寝間着姿のアイラが起きてきた。

「ねえ、ベッドの下にはなにがあるの？」

「えっと・・・その・・・。」

「ベッドの下には怪物が潜んでいるんだよ。」

「怪物?」

「そう、夜明かりを消す前には、戸締りを確かめて、ベッドの下には何もいないことを確認するんだ。そうしないと、明日の朝日が拝めなくなるかもしれない。」

「・・・怖い。」

「そうだろう、だからこの話はおしまいだ。もっと楽しい話をしよう。」

アイラはシンジの後ろに隠れた。

「アイラ、今日はどこに行くんだっけ？」

「みんなと一緒に遊びに行く・・・楽しいところに。」

「そうだね、でもその前に、朝ごはんを食べて支度をしようか。ベムラーさんもどうですか？」

「構わないかな？ちようど朝食はまだだったが。」

「アイラもいいかな？」

「うん、一緒がいい・・・。」

「じゃあチヨーさん、お願いできるかな、三人分。」

「かしこまりました。」

しばらく後。

「じゃあアイラ、準備はいい？ソウルライザーは持った？」

「うん、これも・・・。」

「つけてくれたんだね、そのストラップ。ありがとう。」

「ううん、シンジがくれたものだから。」

「じゃあ、行つてきます。」

「いつてきます・・・。」

「行つてらっしゃいませ。」

「ああ、楽しんでおいで。」

ガチャリと開けた玄関から、眩しい朝日が入ってくる。

今日も、  
いい一日になればいいな  
・  
・  
・  
。

ネバー・セイ・ネバー！

『お電話ありがとうございます、国際怪獣救助指導組織『GIRLS』東京支部です。』  
「あ、あのー！」

『大変申し訳ございませんが、ただいま大変回線が混雑しております。お手数ですが、時間を置いて……』

「ダメだ、通じない……。」

「きつと、苦情や問い合わせが殺到しているんですよ。この大騒ぎですから無理もありませんね……。」

「こんなすぐ目の前にいるっていうのに、手が届かないなんて歯がゆい……。」

彼らの言う通り、GIRLS本部はてんてこ舞いであつた。次々に寄せられる問い合わせに、電話回線もメールフォームもパンク。エントランス前は人ばかりでゴった返し、完全に立ち入り禁止状態であつた。

「あーっもう、邪魔な野次馬だなあ。こんなところで屯してたつてなんにもならないってのにー！」

「真実を知らない者ほど、大騒ぎしたがるという言いますしね。」

「私たちは違うっていうのに……。」

彼らがここにいる理由はただ一つ。『真実』を伝えること。しかしどれだけ声高々に叫ぼうと、愚鈍な群衆の前にはまるで無力だ。

「どうしますかキャップ?」

「このままここで待ってても、埒が明かないと思うけど?」

「そうねえ……。ん?」

「いつそ、裏口から侵入する?」

「そんなことしたら僕たち掴まっちゃいますよ、不法侵入ですよ不法侵入!」

「でも話せばわかってもらえるかもしれないじゃん。そうだ、シンさんの発明でなんとかならない? 透明になったりとか、催眠術とか?」

「ありませんよ、僕の発明にそんなちやちな使い方は!」

「ねえちよつと二人とも、アレ見て?」

「なに?」

「なんですか?」

雲一つない青空に、一つの影が見える。それに気づいたのは、この場においては彼ら三人だけだ。

「鳥か?」

「飛行機ですか？」

「いや、違う。」

「『自動車だ!!』」

乗用車が空を飛んでいる。夢でも幻でも、吹っ飛ばされて飛んできているのでもない、紛うことなく『空を飛んでいる』！

「あだあ！」

「ご、ごめんシンジさん……。」

「おっはよーシンちゃん。」

時を同じくして、GIRLS本部屋上。いきなり地面に叩き落されて、シンジは目を覚ました。

「あれ……ミカ？なんでここに。」

「なんでもなにも、シンちゃんを探しに来たんだよ。アギちゃんのことも。」

「ほとんどボクが目的だったんじゃないの……？」

「？」



「しーっ。それよりシンジさん、怪我してない？」

「怪我ならしてるよ、左腕が。」

「その、左腕の事なんだけど。さつきはごめんね、シンちゃん……。」

「ミカは心配してくれただけでしょ？僕がこうして生きてるんだから、平気だよ。」

「ボク、シンちゃんのこと心配で……そのせいでシンちゃんが余計に傷ついて……  
本当になんて言ったらいいのか……。」

「怪我を負ったのは、僕がドンくさかっただけだから、ミカのせいじゃないよ。」

「でも……。」

「大丈夫……大丈夫だから、さ？」

アギさんが、ジエスチャーでなにかを伝えようとしている。手を回して、抱き寄せる  
？マジですか。

（まあ、やつちやうんだけど。）

「シンちゃん……。」

「ミカ……ミカが無事でよかった。」

「うん……。」

「で、これからどうするの？」

「どうって？」

「アイラのこと。あのままにはしておけないでしょ?」

「うん・・・けど、なにが出来るんだろ。また暴れたとして、今度も力尽くで抑えられるとは限らないし・・・。」

「そうだよー・・・。」

遠くに見える氷塊は微動だにしていけない。けど、いつ動き出すかもわからない。G I R L Sはその対応に追われている。・・・はずなのだが実際のところ、クレームへの対応にひどく手を取られ、調査も思うように進んでいない。後手に後手に回っている。

「それに、アイラをどうにかしただけで解決するわけでもない。」

「そうだね、G I R L S、いや怪獣娘全体が苦境に立たされてる。」

今までの平和は、怪獣娘が積極的にその安全をアピールすることで成り立ってきた。けどそれも今は崩れた。世論は、怪獣娘を排除しようとする方向に動くかもしれない。

「・・・本当に、とんでもないことをしてしまったんだ・・・。」

「シンちゃん、元気出してよ。シンちゃんは怪獣娘と人間の架け橋になるんですよ。シンちゃんがそれじゃあ始まらないよ。」

「何か手はない? バディライザーを使って、とか。」

「そうだな・・・。」

おもむろに、カードを取り出して眺めてみる。今考えられる最強の手札、それは当然、「ウルトラマン……」。

「それ使ったら、アイラにも勝てるかな？」

「わからない、どんな効果があるのかも知らないし、勝てるかどうかもわからない。それに……」。

「それに？」

「力で解決しても、それだけじゃダメだと思う。」

「そうだね……」。

銀のカードを見送って、さらに進めていく。もしも、怪獣の怒りや興奮を抑える能力を持ったカードがあれば、それが有用な一手になれただろう。けどそれは今無い。基本的には怪獣は『破壊者』だ、攻撃的な存在が圧倒的多数を占める。

「殴れば、殴り返される……ん？」

「どうしたの？」

「いや……見覚えのないカードが。」

それは不気味なほど真つ黒なカード。黒く塗りつぶされ、何も描かれていない。描かれていたとしても、読み取ることとは出来ない。試しにバディライザーに挿入してみるのが、なにも反応しない。

「ひよつとして、アイラのカードなんじゃないかな？」

「アイラの？・・・アイラの、心なのか？」

なにもかも拒絶し、何色にも染まらない、黒。それが今のアイラなのか。

「ここでジーつとしててもドーにもならないけど、なにをしても空回りしそうだな、なんか。」

「ならもうちよつと休んだら？ 案外降ってくるかもよ？」

「答えが降ってきたら苦労しない。・・・と？」

携帯が鳴っている。マナーモードにしている気が付かなかった。発信者は・・・チョーさん？ 珍しい。

「もしもし？ チョーさん？」

『シンジ様、ベムラー様がお待ちしております。』

「なにか進展があつたつてこと？ わかった、すぐ帰る・・・つて、ちよつと外に出るのも時間かかるかも・・・。」

『ご心配なく、只今お迎えに参っております。』

「迎え？」

「シンちゃん、降ってきた。」

「降ってきた？ なにが？」

ズキユウウウン！と轟音響かせ、それは舞い降りた。

「車。」

「見りやわかる。なんだこれ、ウチにあった車じゃん。」

「シンジ様、お乗りください。」

「はあ・・・これ、飛ぶんだね。わかった、一旦帰ろう。」

「シンジさん。」

「シンちゃん！」

「うん、行ってくる。なにかあつたら連絡しようだい。」

グツと親指を立てて、後部座席に乗り込む。

「シートベルトを着用ください。」

「わー、こわい。たかい。」

ふわっとした浮遊感を味わい、お尻がムズ痒くなる。以前の東京タワーの事件以来、少し高所恐怖症の気が出ていたのを思い出した。

「うわっ・・・本当に人がいっぱい集まってるな・・・。」

「それでは飛ばテイクオフします。取っ手にお掴まりになって、舌を噛まないようにご注意ください。」

「そんなに飛ばすな・・・。」

言い切る前にエンジンに火がついて、Gで舌が引つ込んだ。

「シンちゃん・・・がんばって。私たちががんばるから。」

「うん、行こうゴモたん！」

「アギちゃんも、随分頼もしくなったね。先輩として嬉しいよ。」

「ゴモたんのおかげかな、それにシンジさんも。」

「じゃあ、さっきの続きも聞かせてくれるかな？」

「うぐつ、もー早く行こう！」

一体なにを話していたのかは、2人だけの秘密。

「あああああキャップ見てください、飛んでいきましたよ！」

「すっげえ・・・空飛ぶ車なんて初めて見た・・・。」

「レトロフューチャーに描かれた、エアカーのようですね・・・あのエンジン音は、おそらくイオンエンジンの一種ですね、ぜひ開発者とも話し合ってみたい・・・。」

「もう、それよりどうやって中に入るか考えないと！」

「ねえ、今の車に乗ってた人・・・どっかで見たような・・・そうだ、前に雑誌のインタビューで見た・・・。」

キヤップと呼ばれた女性が、携帯の画面を弄って、その答えを導き出す。

「これよ! 『怪獣娘とつながる少年』。この人になら・・・!」

「よしそうと決まれば、シンさん、あの車どこ行くか分かる?」

「まかせてください! 僕の発明したこの新式リーダーでなら、火星まで居場所を・・・」

「はいはい、時間は待つちやくつれないんだから、急ぐわよ!」

「Something Search People、出動!」

「了解!!」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「ただいま!」

「おかえり、さつそくだけでデータベースへアクセスできた。こつちへ来てくれ。」

家に帰れば、ベムラーさんが出迎えてくれた。さつそく成果があつたようで、重畳重

畳。

「その前にシンジ君、一つ確認しておきたいことがある。」

「なんですか?」

「本当に、見ても大丈夫だな? 踏み出したことに、後悔しないな?」

「・・・はい。」

「そうか、なら。」

データベースに繋がった。パソコンの前に来た。

「今の状況に、最適だと思われる情報だけをピックアップしてかいつまんである。……ちよつとショックかもしれないが。」

「……。」

それは実験の経過を記録した、日記のようなものだった。他にもある膨大なデータの内の、ほんの一部。一番最後、『26番目』の、実験データだ。

「カイジューソウルの、製造実験？」

簡単に言うと、カイジューソウルを人為的に生み出す計画だ。それまでの実験で、怪獣娘一人ひとりが引き出せる力には限界があり、それは先天的に備わった、一種の『法則』。『怪獣は必ずどこかで「負ける」という『運命』のようなものだ。その運命を乗り越えうる、究極にして無敵の怪獣を作り出すという計画だ。

「アイラは、生まれついでにの怪獣娘じゃなかったの？」

「薬物や、過度なストレス負荷による怪獣娘の実験が、それ以前から行われていた。その中で、アイラに使われたのは、一種の降霊術らしい。」

「降霊術？ コックリさんとか？」

イタコのように、伝説上の怪物や妖怪の類を、アイラの体に降ろした。そういうことだ。



「これとは別の、ソウジ氏の手記によると、降ろされた怪獣は、『別の宇宙』の存在だと言われている。それも、複数の宇宙から。」

「別の……宇宙……。」

別の宇宙に、別の自分がいるように、別の宇宙に同じ名前前の怪獣がいたりする。例えばレッドキングは、どくろ怪獣と呼ばれて、多々良島や日本アルプスに生息していたと言われるが、はたまた、ギアナ高地や、次元の境目を漂う幻の島に住んでいるものもいたという。どちらも間違いなく『レッドキング』ではあるが、その生息は大きく異なる。

「複数の宇宙に存在する、同じ名前前の怪獣を集めた……。」

「『破壊神』『虚構』『最終兵器』『自然バランスの調停者』『教育パパ』、そして『怪獣王』：様々な呼び名があったと、手記には記されている。」

「なんかひとつ変なのが混ざってませんか？」

「とにかく、同じ名前であっても、全く役割の異なる存在が、一堂に集められた。もはや残っているのは、『名前がもつ概念』だけだろう。『最強』という概念……。」

原初にして、頂点、怪獣の中の怪獣、怪獣王。アイラという少女に与えられた運命は、あまりに重い。

「名前……。」

「名前か、研究者たちは、26番目の実験体ということで、『ブネ』と呼んでいたらし

い。ソロモン72柱の26番目の悪魔で、悪霊を操る竜の悪魔だという。」  
「ブネ……。」

「だが、ソウジ氏は違う名をつけていたようだ。研究者たちが口々にしていた『神』と、26番目の最後の計画から『終焉』、そして『アイラ』。それらを纏めて……。」  
と、いいところでチョーさんに呼ばれた。

『シンジ様、来客のようです。』

「来客？ 怪獣娘の誰か？」

『いえ、怪獣娘とは関係のない人たちのようです。』

「誰だろう？ とりあえず出るよ。」

研究室から出て、インターホンを代わる。モニターには、女性が一人と男性が二人、皆大学生ぐらいの年齢の人たちがいる。

「はい、濱堀です。」

『ごめんください、私たち、『SSP』というものです、濱堀シンジさんのお宅で間違いないでしょうか？』

「そうですけど、マスコミは遠慮させてもらってます。」

『違います！ マスコミ……とはちよつと違うんです！ お話をさせていたただきたい……。』

「SSPってなにかわかる?」

「たしか・・・インターネット上で活動してる・・・オカルト研究チームだったかな? よくガセ情報とか掲載して炎上してるのを見たことがある。」

「マスコミより酷くない?」

「そうかもな、なら断つたらどうだ?」

「あの、すいません、やっぱり今日のところはお引き取りを・・・。」

『あの怪物娘さんについて、知って欲しい事があるんです!あの時暴れていたのには、わけがあつたんです!』

「えっ?!」

僕の知らない、アイラの情報。ひよつとすると、とんでもない情報じゃないのか・・・?  
?・良くも悪くも。

「ベムラーさん、どうしよう?」

「君は、どうしたい?」

そんなの決まってる。

「・・・中へどうぞ。あつ、車だけはガレージの方へ移してください。路駐だと邪魔になりそうなので。」

『・・・ありがとうございます!!』

3人を迎え入れ、応接室へと通す。リーダーのキャップと呼ばれる女性は、ちよつとおつちよちよいだけど、明るくて誠実な人。ジエツタという青年は、やかましいけれど、根はしつかりしてる人みたい。シンさんというメガネの人は、変な機械を持つてるし、言い回しが周りつくどいけど、かなり真面目な人だ。

「私『夢野ナオミ』です。」

「濱堀シンジです。」

「さつそくですが、これを見てください。」

挨拶もほどほどに、タブレット端末の動画を提示される。いきなり爆音から始まって面食らったが、その中心にいる人物はよく知っている。

「アイラー！」

「この怪獣娘さんが、暴れた……いや戦っていた最初の頃の時間です。突然、黒い影……シャドウが現れて、人を襲い始めたんです。」

アイラーが戦っている相手は、たしかにあのシャドウだ。あの時、僕たちが行った場所以外にもシャドウは現れていたんだ。その戦い方は、お粗末にも上手とはいえず、無我夢中で手足を振り回しているようであった。

「この戦いの中で、彼女は明確に人間を守ろうとしています。この人たちへのインタビューも、僕たちは行いました。」

「アイラが、守ってたんだ……。」

その内に、シャドウはアイラへと狙いを定め、数で一斉に取り囲み始めた。途端に苦しみだすアイラ。

「アイラ!」

そしてシャドウに覆いつくされ、アイラの姿が見えなくなった時、突然青い光がシャドウを吹き飛ばした。そして、その次の瞬間に映っていたのは、理性を吹き飛ばされた、あの状態であった……。ここで動画は途切れた。

「アイラ……暴走してたんじゃなくて、守ろうとしてたんだな……。」

タブレットの向こう側の、物言わなくなったアイラに指を添え、涙交じりに呟いた。本当は怖かったろうに、自分を喪つてでも、必死に戦おうとした。

「このことを、GIRLSへ伝えたかったんですが、生憎どこにも繋がらなくなつて。」

「それで、濱堀さんの姿がたまたま見えて、濱堀さんなら聞いてくれるだろうと思つたんです。雑誌のインタビュで見た、怪獣娘と人間の架け橋になる濱堀シンジさんなら。」

「ありがとう……ありがとうございます……!」

なんて、なんていい人達なんだ。無駄な喧騒や根も葉もないデマで埋もれてくだけだった真実を、ここまで真摯に訴えてくれた。人間、捨てたもんじゃないなど、心から

そう思った。

「本当にありがとうございます。アイラのこと、本当に信じていいんだって思えました。」

「よっし、これで、裏はとれた！これなら大スクープだよキャップ！」

「これでアクセス数稼げれば、家賃も払える！」

（やっぱ間違いだったかな？）

これだから人の本音というものは聞きたくない。けど、上っ面だけ綺麗ごとを並べて甘い汁をすすめるような連中よりも、こんな裏表が無くてわかりやすい人物のほうが好感が持てる。嘘がつけないんだろう、この人たちは。

「ともかく、この真実が公開されれば、怪獣娘やGIRLSへの信頼を取り戻すことが出来るかもしれない。」

「こちら側としても利益になる。Win—Winなところだろう。」

「じゃあさっそく、サイトにアップロードして……！」

「……通信？ピグモンさんから？」

ジエツタが意気込んでいるところで、シンジのビデオシーバーが鳴った。

『大変なんですシンシン！』

「はい??」



れだけは覚えておいて。』

「・・・わかりました。」

プツツと通信を切った。

「わかったもなにもないよ、どうするの!?!」

「状況が変わってしまった。今この動画をアップロードしてもなんの意味もないだろう。この混乱の渦に飲まれるだけだ。」

「・・・せつかく、ここまで来たのに・・・。」

アクアライン付近の埠頭では、緊急避難命令が敷かれ、SNS上にも不安の声が上がっている。アイラへの、怪獣娘への不信感が増す一方だ。

「アイラさん・・・どこへ行ってしまったんでしよう?」

「アイラが見つかったても、今アイラがどんな状況なのかもわからない。海底でエネルギーを蓄えているのかもしれないし、全然違うところへ行ってしまっているかもしれない。」

もしも違う場所で暴れ始めれば、被害はますます増えるばかりだ。そうなれば、もうカバーしきれなくなる。

「アイラあ・・・。」

「シンジさん、アイラさんを信じてあげて。アイラさんを一番信じられるのは、シンジ



さんだけなのよ。」

「そうだけど……。どこへ行ってしまったのか……。」

ふと、自分の言葉に思い当たる節があった。そしてそれは次に確信に変わった。

「キャップ、これ見てください。」

「なに、シン君?」

「今、東京湾の三浦半島沖の辺りに、微弱な電波が発せられているんです。」

「漁船の無線かなにかじゃないの?」

「民間の無線やビーコンに使われている周波数とも違う、特殊な電波のようです。」

「これってもしかして、怪獣娘が発してるとか?」

「いえ、これは生物の発するエコーなども違う、周期的なシグナルです。」

「ひよつとして……。」

バタバタとシンジは自分の部屋の机の上の機械を引っ張り出してきた。

「これじゃないかな? 迷子用のGPSを試しに作ってみたんだけど? その試作品をア

イラにあげたんだ!」

「この周波数、間違いありません! これです! このシグナルを追えば、向かう先も割り

出せますよ!」

「やったねシンくん! シンジさんも!」

「さすが名前が似てるだけある！」

「それ関係あるかなあ？」

アイラにあげたあのストラップ、あれがこんな形で役に立った。なにより、アイラがあのストラップをまだ持っていてくれていた、それが嬉しい。

「出ました、気流や海流を計算した結果、小笠原諸島の方に向かっていているようです。」

「小笠原？ そんな長距離泳いでいくつもりなの？」

「いや、アイラはこの家に来た時も、『泳いできた』って言ってた。泳ぐのが得意な怪物だったのかも……。」

「でも、小笠原のどこだろう？ ひよっとしたら、そのさらに南にまで行っちゃうかも……。」

「いや、小笠原だとしたら、心当たりがある。」

「どこです？ それは！」

「大戸島だ、かつてソウジ氏と一緒にいるところを目撃された場所。そこに向かう可能性が高い。」

生物には、生まれた場所へと帰る本能がある。アイラにとっての始まりの場所、それが大戸島なのか。

「大戸島、って？」



「ありました！大戸島の伝説の怪物！」

数時間後、タブレットに張り付いていたシンさんが声を上げた。

「伝説って？」

「はい、『太平風土記』という古文書によると『厄わざわいいの獣、森羅万象乱れし時目覚め、人魂をもちて、人々を断罪せん……』と書かれています。」

「人魂……青い炎？」

「それに、この姿、まるで……。」

黒い体表に、白い背鰭、そして口からは青い炎を吐いている。まさにアイラのあの姿そっくり。

「森羅万象乱れし時？」

「おそらく、環境の変化のことを指していると思われます。火山の噴火や、寒波の襲来、あるいは太陽の黒点の移動。それに伴う災害や飢饉を、『怪物もののけ』という形で表したのが始まりでしょう。」

「日本では古来から、怪物や妖怪なんかの邪悪なものも、神様として祀ることでその怒りを鎮めた、っていう話がいくつもある。厄わざわいいの獣も、荒神あらかみのひとつなのかも。」

厄わざわいいの獣の絵の隣に、大きな漢字が3文字書いてある。

「この、漢字は？」

「おそらく、名前だと思われます。呉爾羅・…『ゴジラ』と読めます。」

「ゴジラ・…それがアイラのもう一つの名前。」

「ゴジラか・…偶然か、それとも運命か。」

ベムラーさんも来た。手には資料を持っている。

「そちらもなにか発見が?」

「ああ、先ほどシンジにも言ったが、ソウジ氏はアイラのカイジューソウルに独自の名前を付けていた。『God』、『Z』そして『Illa』。綴れば『GodZIlla』:。」

「ガッツイーラ? いや、こつちも『ゴジラ』か!」

「そうだ、ゴジラという名前で呼ばれる、そういう運命を背負っているんだ、この怪獣は。」

「逃れられぬさだめ・…。」

ますます信憑性が増す。少なくとも、SNSで呟かれているゴミのような憶測よりもよっぽど信頼性が高い。

「それで、その古文書の続きは?」

「あ、はい。『獣の暴虐に立ち向かわん幾多の猛者、その牙に倒れる。しかし一人の賢人、秘蔵の附子ぶしを持ちて獣の口に飛び込まん。やがて獣、附子にて海へと還る。』とあります。」

「附子？ぶしつてなんだ？」

「毒草のトリカブトのことで、ブスとも呼ばれます。古くから暗殺などにも使われ、『武將の兜をとつてしまふ』という意味で、トリカブトと言われています。」

「つまり、毒薬を自分ごと飲み込ませて、退散させたつてこと？随分野蛮な方法ね……。」

「けど、あの表皮にはどんな注射針も刺さらないと思う。毒を盛るなら飲ませるしかないと思う。」

「『薬は注射より飲むのに限る』とも言うしな。」

「いえそんなはずはありませんよ、飲み薬は胃で消化されて、吸収されるまでのタイムラグがありますが、血中への注射ならすぐに効果が現れるもので……。」

「はいはい、ただのたとえ話だから……。」

「毒殺か……でもただの毒じゃ効き目なさそうだな。」

「秘蔵の附子と書かれていますからね、特別な製法を用いられた秘薬か……あるいは鉍毒かもしれません。大戸島は火山島ですから、そういうものが昔からあったのかも。」

「ヒ素や、鉛？」

「あるいは、『放射性物質』か。」

自ら悪魔の口へと飛び込む捨て身の戦法というのも納得がいく。そんな危険なものを扱えば、扱った本人もただでは済まない。

「ベムラーさんの方は、なにか?」

「ああ、ゴジラは、絶対に負けることのない無敵の怪獣として生み出された。平行宇宙を観察し、あらゆる兵器、あらゆる外敵、そしてあらゆる『事象』にも勝った怪獣として、ゴジラが選ばれた。」

「あらゆる、事象?」

「そうだ、おそらくその毒物にも勝ちうる『ゴジラ』の要素も備えている、ゴジラの中でも最強のゴジラ、それが今のアイラだ。ひよつとすると、『時間』ですらも『ころす』ことができないかもしれない。」

『『時間』……。』

「そして実験の最中、アイラは暴走し、GSTEもフリドニアも壊滅した。そのアイラを止める方法を、ソウジ氏は実行したんだ。」

「そ、それは、どうやって!?!」

「それは……『忘れる』ことだ。」

『『忘れる』……?』

「そう、忘れること。ソウジ氏はアイラの首筋に、特殊なコントローラーを埋め込んでいた。それを使って、アイラの中の『ゴジラ』の『記憶』の一切合切を『消した』んだ。『忘れる』・・・いや、『忘れられる』ことによって、『ゴジラ』も一時的に消えた。」

「人は、思い出の中で生きている・・・。」

「そうだ、逆に言えば、思い出の中から消えてしまえば、その時本当に人は死んでしまう。ゴジラもそれには逆らえなかった・・・。」

「じゃ、じゃあ、そのコントローラーを使って、もう一度アイラさんの記憶を消せば?!」

「『止める』ことは可能だろう。」

「けど、それじゃあ・・・。」

「そうだ、人間は一步も進歩していないということだ。同じ過ちを繰り返す、愚かな人間という証明だ。」

「それに、ゴジラの中には、『どんな兵器も一度受けたら耐性ができる』個体がいたかもしれません。同じ手が通用するとも限らない。」

「『私は好きにした』・・・。」

「え?」



「父の手紙に、そう書いてありました。『私は好きにした、君らも好きにしろ』、と。きつと、このことだったんでしよう。だから、父とは違う方法探さなければいけません。父とは違う道を……。」

それが、シンジがとるべき道。父を超えるという証明。

「でも……できるかな、そんなこと?」

「シンジさん……。『ネバー・セイ・ネバー』!」

「?」

「出来ないなんて言わないで!シンジさんならきつと出来る!だってシンジさん、怪獣娘全員と仲良くなるんでしょ?」

「……そうか、そうだった。ありがとう、ナオミさん。」

「どういたしまして!」

諦めたら終わりだ、僕の未来も、怪獣娘の未来も閉ざされる。

「よっし!じゃあ取れるだけの可能性を探そう!ベムラーさんは、もうちよつとデータベースを探ってみて。SSPの皆さんも、協力してください。僕は……可能な限り、自分の限界に挑戦してみます。」

「ああ、まかせておけ。」

「ええ、ここまで来たら乗りかかった船よ!!」

「俺たち、もう仲間だし！」

「最後まで一緒ですよ！」

ここにきて、頼もしい仲間が増えた。とても頼もしい『人間』が仲間になった。

出会えてよかった。心の底からそう思えた。まだ安心するには早い、希望が見えた。

## 君の名は、

「ここが・・・大戸島か・・・。」

「本当に人っ子一人いない、離島ね。」

怪獣娘たちの本隊より一足早く、シンジとSSPのメンバー、それに運転手のチョーさんが大戸島に到着した。あの空飛ぶ車を使って。

「いやあくすごい、感激です。未だかつてどこの機関でも開発されていないであろう新式イオンエンジンを体感できるなんて・・・。」

「お褒めにあずかり、光栄でございます。」

「ぜひ、これを開発した人とお話を・・・。」

「ちよつとシンさん、ここに来た趣旨忘れてない?」

「そうよ、これを逃したら一生無いつてレベルの大スクープなんだから!」

そう、この島で、今から史上最大の作戦が始まる。怪獣娘と人類の共存する未来、そしてシンジとアイラの未来を賭けた戦いが。そしてその中心人物がここに・・・。

「・・・。」

「シンジさん、大丈夫?」

「・・・酔った。」

「主役がこれじゃあ、この先思いやられるよ?」

「大丈夫、大丈夫だから。」

天気は曇り、やや風が強いがこの程度は問題ない。少し風に当たって酔いを冷ます。

『シンシン、状況はどうですか?』

「・・・問題ない。今からセットアップを行います。」

『顔色悪いけど大丈夫?』

「なんの、ただの武者震いさ。」

『どうせ酔ったんだろ、こっちも何人かそうなたてるけど。』

「心配事があると、船酔いしやすくなるって言いますからね。酔い止め以外にも、胃薬にも意外な効果があったりしますよ。」

「そういえばじーちゃんも、乗り物酔いの時はコーラを一气飲みすると効くって言うてたよ?」

「コーラ、買ってこようか?あそこ自販機あるし。」

「いや、いい。こういうところのジュースって、高くつくから。」

「この期に及んで貧乏が抜けない。」

「それにしても、この匂い・・・。」

「匂いが、どうかしたの？」

「これは硫黄の匂いですね。長らく噴火はしていないとはいえ、煙は漂ってきているようですから。」

「そんなの、戦ってる最中にドカーン！とか来たりしないの？」

「計測上は、向こう10年は噴火の見込みがないそうですが、なにせ相手は大自然ですからね、何が起こつてもおかしくはありませんよ。」

「ちよつと、怖い事言わないでよ……。」

かつては人が住んでいた島だったが、火山活動による避難命令が出されて以来、ここに住む者はいない。かつての家屋も、風に含まれる微量の硫黄によつて朽ちている。

『それだけ受け答えが出来ているなら、問題ないわね。』

『エレ、お前は落ち着きすぎだ。』

「いえ、レッドさん僕は大丈夫です。」

『そうか、ならいいんだが。』

『いい？あなたたちの任務を確認するわよ。』

確認されるまでもない、何を隠そう、その作戦立案者が、ここにいる面々なのだが。

話は数時間前に遡る。

「納得がいきません！こんなもの！」

SSPとベムラーさんを連れ立って、シンジはGIRLS本部の会議室・・・未確認怪獣娘対策本部（本）に戻ってきた。そこで告げられたのは、残酷な指令であった。

『アイラの正体を明かすことなく、秘密裏に葬り去れ。現存する戦力の総てをもつて、未確認敵性生物として葬り去れ』なんて、そんなの酷すぎる！アイラのことを、忘れろなんて！それがGIRLSのやる事か！

「今ならまだ、国連の力を使ってでもすべてを揉み消せる。そういう判断よ。」

「誰がそんなので納得するもんか！」

「ここにいる誰も、納得なんかしていないわ!!!」

エレキングさんも声を荒げた。叩いた机の上から、ペンが転がり落ちる。ここには、地球上全てではなくとも、日本中の集まる事が出来た怪獣娘がいっぱいいる。

「こんなこと、あつていいはずがないわ・・・。」

幸せは犠牲なしに得ることはできないのか、時代は不幸なしに越えることは出来ないのか。

「怪獣娘であるベムラーさんはともかく、民間人はここにいてはいけないわ」

「私たちだって、無関係じゃないわ！」

「もはや全人類に、無関係な人なんていません。これはもう、人類と怪獣娘全てがかつてるんです！最終作戦ファイナルウォーズの用意だつてしてきました！最後のチャンスをご覧ください！」

「私は、一介のGIRLS職員よ。私に決定権はないわ。．．．どこへ行くの？」  
「上に掛け合つてきます。」

「それでダメだったら？」

「身分証これを返すだけです。」

あの日、GIRLSに入った時にもらつた身分証明書。

「もう、GIRLSにはいられなくなるわよ？」

「思えば、簡単なことでした。GIRLSが全てじゃない。怪獣娘を守るための組織が、一人の怪獣娘、いや、一人の女の子を排除しようというなら、僕はもう．．．組織にはいられない。」

「たつた一人で行動するというのは？テロリストとみなされるかもしれないわよ。」

「．．．もう、嘘を吐きたくないんです。自分にも、向かい合う誰かにも。」

（これって、俺たちも巻き込まれてるのかな？）

（テロリストはいやですよ！）

（静かに！シンジさんを信じましょう。）

「たとえ一人でも、僕は行きます。」

「ちよつ・・・マジ!？」

「シンちゃんさあ、落ち着きなよ。」

「止めてくれるなミカ、僕はもう選んだんだア!？」

「まずお前が落ち着け。自分の言葉に酔うのもやめろ。」

ミカと、レッドキングさんに止められた。とうるか投げられた。

「私もね、シンちゃんと同じ気持ちだよ。私だけじゃない、レッドちゃんも、アギちゃんたちも、エレちゃんも、それに・・・ゼットちゃんも。一人で抱え込んだりしない? 何回も言ってるでしょ、仲間を頼れって。」

「ミカ・・・。」

「今更水臭えこと言うなよ。その最終作戦つての? 説明してからでも遅くはないだろ?」

「レッドさん・・・。」

「まったく、少し顔つきが変わったと思ったけど、私の見間違いだったのかしら?」

「エレキングさん・・・。」

見渡せば、皆が僕に注目していた。その眼には、皆同じ光が宿っていた。

「うん・・・シンさん、ベムラーさん。作戦の説明をします、手伝ってください。」



「ああ、まずはシン君からだな。」

「は、はい！……こんな女の子だらけの中での発表なんて、緊張するなあ。大学でのレセプションとはまた違う……。」

「はいはい、シンさんは私たちのブレインなんだから、もっとしつかりして！」

「……以上のように、この『太平風土記』に描かれた『呉爾羅』こそ、アイラさんの正体だと推測されます。したがって、この伝記に従う形に、本作戦はなりません。」

「具体的には、どうすればいいの？」

「次は僕が。伝記に従うとすれば、必要となるのは『秘蔵の附子』。大戸島の風土から推測された、この附子の正体は、『カドミウム』だと結論付けました。」

「『カドミウム』？水銀コバルト？」

「そう、高度経済成長期に、亜鉛鉱山から流れ出た廃水に含まれるカドミウムによって『イタイイタイ病』が蔓延したことが有名です。大戸島にも、僅かながら亜鉛の鉱脈があることがわかりました。カドミウムは亜鉛鉱に含まれていることが多いんです。」

詳しい説明は省く。作者の頭がそこまで追い付いていない。

「そうして開発されたのが、この『カドミウム弾』です。これを伝記のとおり、口の中に撃ち込めば、間違いなく『ころす』ことは出来ます。」

シンジは黒いカートリッジを取り出して見せた。ざわざわと会場内がざわつく。

「もうひとつ、ゴジラの能力について知るべき、恐るべき事実があります。ゴジラの発する熱線の温度は、50万度から高くして100万度程度。これは、みなさんの火炎攻撃や熱線と比べれば『低い』部類に入ります。」

元が人間だった怪獣、ジャミラの火炎は100万度。ミサイル超獣ベロクロンの火炎は1億度。ご存知、ゼットンのは火球は1兆度。昔見た怪獣図鑑のビデオだと、ベロクロンの火炎は100万度だって言ってたけど。どういうことなの？ 戦闘のプロさん？

「そして背鰭からも発せられる、あの青い光。ここから、ゴジラの熱線の正体、ひいてはエネルギー源は、『核融合』だと推測されます。」

会場内はさらにざわついた。

「ちよ、ちよつと待てよ？ 核融合だ?!? じゃああいつの体内には原爆があるってことか?!」

「『核融合』と『原爆』は、直接的な繋がりはありません。この辺りは……シンさんの方が詳しいかな。」

「はい、簡単に言うと、原爆には『核分裂』が、水爆には『核融合』が使われています。原爆は、ウランやプルトニウムといった放射性物質の原子核が起こす、核分裂反応に伴う莫大なエネルギーを使用しています。対して水爆は、重水素がヘリウムに融合する核融合反応に伴うエネルギーを用います。ただ、その核融合を起こすことそのものに、莫

大なエネルギーが必要になり、水爆の起爆には原爆が必要となります。水爆による放射能は起爆装置の原爆の放射能、という認識でもらって間違いはありません。」

「核融合そのものには、放射能は伴わないということ?」

「決してゼロではありませんが、そういうことです。ゴジラが行っているのは、その核融合なんです。」

「けれど、ゼロではないのだとしても、あの現場から放射線は検出されていなかったわ?」

「ゴジラが行っているのは、人間の科学力や常識を上回る、さらに進んだ核融合・・・おそらく、爆発してから数秒で半減期に入る、特殊な評者性物質が作られているとしか考えられません。・・・こんな不思議に直面するのは、生まれて初めてかもしれません。」

ちなみに、起爆に原爆を使用しない水爆の、純粋水爆というものもある。当然こちらに残留放射線などは少なくなる。つまり、これを使っているんだと思っていただけだ。

「カドミウムは、原子炉の制御にも使われています・・・が、これはほぼゲン担ぎです。カドミウムの毒性にかけるしかありません。」

「そんな、ふわっとした理論でいいのか?」

「こっちは本命じゃありませんから。本命は、もつと辛くて険しくて、丸く収められる

方法ですから。」

「本命？」

「ならそれを早く聞かせて頂戴。もう時間も無いのだから。」

「はい、いいですか……。」

冒頭に戻る。

「で、俺たちは記録して、拡散させる。」

「アイラさんが、怪獣娘さんたちと和解する、決定的瞬間をスクープするのよ。」

「ジエッタ君、カメラのバッテリーは大丈夫ですか？この前みたいなのは御免ですよ。」

「大丈夫、チョーさんがいっぱい持ってきてくれたし。」

SSPには、戦いの様子を記録してもらう。カメラは2台あり、ひとつはSSPが、もうひとつはシンジが持っている。録画、録音されたデータは、チョーさんが車で保管してくれる。

「シンジさん、S・G・M(Solid Graphic Monitor)の調子はどうですか？」

「問題ない、シンさんが調整してくれたおかげで、予定より前倒しに出来た。」

「それがもうひとつの眼にもなっていますから、壊さないようにしてくださいね。」

「わかっている。こっちの情報も、後々そちら側に回すからね。」

カメラ機能や、赤外線モード、昨今のビデオカメラやスマートフォンに備わっている機能が、大体この片目ゴーグルに入っている。

「今僕たちがいるのは、島の北側。ここから南西方向が波止場で、みんながここから上陸する。僕たちは、ここから南東方向へ行つて、場所を確保しておきましょう。」

「戦うのにちようどよくて、収録現場にもいい場所ね。」

「そう、皆さんの安全の為にも、いい場所をとっておかないと。」

「ビーコンは、島の南端を示しています。アイラさんはそこでしょう。」

「よし、聞こえましたか？今の。」

『聞こえているわ、今あなたたちの姿が見えた。アギラたちをそちらに回すわ。私たちは島中の搜索を行つてから合流するわ。』

「了解。じゃ、行きましようか。」

「SSP、出動！」

「了解！」

「了解。」



を立てることによって、本命の死亡フラグを折っておくのだ。

「まさにゴーストタウンって感じだな・・・あれ？」

「ジェツタ君、なにか見つけましたか？」

カメラのモニターと、実際の風景を見比べてよく確認したが、どうやら見間違いではないと悟った。

「シンジさん、あれ見てあれ？」

「なんですか？」

「なんです？」

「いやシンジさんじゃなくて・・・あの家の表札。」

「表札？」

廃屋のひとつ、もう何年も手入れされていない生垣が生い茂り、林のようにもなっている家。その門に掲げられた、その家の主を示す名前。

『濱・・・堀』？」

「ここに、シンジさんと関係あるのかな？」

「どうだろう・・・濱堀姓は父のものなんですが・・・それも偽名の可能性があるの  
で・・・。」

「つて、入っちゃって大丈夫なんですか？」

「ちよつと、ちよつと覗くだけ。」

ギイ……と門を開けて、中を見てみる。朽ちた物干しや、草の伸びきった庭、雨戸が締め切られていて、中の様子は見えない。

「玄関も……開いてないか。行きましようか。」

「シンジさんのお父さんって、どんな人だったんですか?」

「古生物学者……だったかな、怪獣を研究してたんだって。あの家の研究室とかも、そのための物だった。」

「そうじゃなくて、人柄とか、その出身とか。」

「……僕も全然知らないです。けど……ひよつとしたら。」

「ひよつとしたら?」

「いや、また今度に。先を急ぎましょう。」

シンジが先導して、坂を上って広場を目指す。この廃屋群、かつては住宅地だった場所の先に、目的地はある。それがなんとなくわかった。

「……か、結構広いな。」

「……なら十分じゃない? 見通しもいいし、傾斜もない。」

「風もあまり強くありませんね。」

果たしてその先にあった。衛星写真で見るよりも、それは広く見える。片方は崖に、



もう片方は森と、さらにその先に海に面している。

「あの崖、崩れてるわね。ひよっとして、アイラさんが？」

「いや・・・あの崩れ方を見るに、台風で崩れたんでしょう。それもかなり前に。」

「戦闘中に何かの拍子で崩れると危ないし、こっちの岩場に潜伏しましょうか。」

「そうだね、よっしシンさん手伝って。」

剥き出しの土と、その麓に積もった土砂。元々ここも開発の途中だったのかもしれないと推測できる。新しく家か何かが建つ予定だったところで、避難命令が出た・・・。それ以来手付かずのまま放置。

「ここ、お願いします。僕はもうちよっと先の様子を見てきます。」

「一人で大丈夫？」

「大丈夫です、無線はONにしておくので、なにかあったらすぐ伝えます。それじゃあ。」

シンジは一人、広場のさらに先の丘を登っていく。

『シンちゃんどこ行くの？』

「ちよっと、気になることがあって・・・。」

『単独行動は危険よ？』

「わかっています、ちよっと確認するだけ・・・やっぱりそうか。」

『知ってるのか？このこと？』

『じゃあ、やっぱりさっきの家も？』

「来たことがある・・・なんか見覚えが・・・ある。」

ぼんやりとおぼろげな記憶で、ただ『来たことがあるような気がする』という思い違いかもしれない。森ばかりで、こことよく似た景色が、日本中のどこにでもありそうだった。

『感傷に浸るのはほどほどにして、早く持ち場に戻って欲しいわ。アギラたちは、既に到着している頃よ？』

『私たちも、もうちよつとしたら合流に行くから、それからアイラを迎えに行こう！』

『お前が作戦の立案者で、要なんだからな！・・・おい、聞いてんのかシンジ？』

「ああ、聞こえてますよ。ただ、ちよつと問題が・・・。」

『何？』

「今日の前にいる。」

『・・・あ！な！！た！！な！！にやってるの！』

今シンジのすぐ目の前、アイラがいる。時間としては24時間も経っていないが、別れる前見た時と同じ格好で。ピーコンは島の南を指していたが、磁場の影響で実際の位置とズレていたのかもしれない。

『すぐに引き返せ!!オレたちも急行する!』

『シンちゃん逃げてー!』

『聞こえているの?シンジ!返事をしなさいシンジ・・・』

プツツ、とゴモラ達の声が聞こえなくなる。無線機のスピーカーだけを切った。波が岩場にぶつかり、砕け散る音だけが今は聞こえる。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「アイラあ!!」

波音に負けないぐらい大きい声で叫ぶ。ゆつくりとアイラは振り返り、その顔を向ける。相変わらず不愛想、というか無表情だったが、少し安堵の表情にも見えた。

「アイラは・・・自分が誰なのか、知っている?」

「・・・」

「僕は、知ってる。」

あれはそう、ミカがいなくなつてすぐの頃。家の周りが事件のゴタゴタで騒がしくなり、ほとぼりが冷めるまで実家を離れることとなった。それで来たのがこの島。父の故郷だ。

「そこで君と初めて会つた。・・・そこで会つた女の子が、君じゃないか?」

「・・・」

コクン、とゆつくり頷いた。シンジは頬を緩ませ、アイラも同じ表情をした。

「僕と君は、初めから従姉弟キョウテイだったんだな。．．．それなのに、父は君を．．．」

「パパは、私を助けてくれたの。」

「昔の事、何もかも失くして、暗闇の中にいた私に、外の世界の光をくれた。」

「地平線に沈まない太陽や、満天の星空を覆うオーロラ。色んなものを見た。世界には、綺麗なものがいっぱいあるんだって、教えてくれた。」

「でも．．．それも消えてしまう。私の中の、黒い私が．．．、私の知らない色んな私  
が、すべてを飲み込もうとする．．．。」

紐が千切れたストラップを、アイラはギュッと握りしめる。

「そうなる前に、私を、『私たち』を止めて？」

悲願するように訴えてきた。物事には、かならず終わりが来る。アイラはもう、『疲れ  
た』のかもしれない。埋まることのない、自分の『孔』に。

シンジは、腰のホルスターに手を這わせる。カートリッジは付け替えてある。今なら  
狙って、トリガーを引くだけで全てを終わらせられる。

「それは、できない。」

「．．．どうして？そのために、ここに来たんでしょ？」

「なぜなら、君自身がまだ諦めていないから。」





「バディライド！」

そして、最後にもう一枚。いつの間にか持っていた黒いカードを取り出す。

「アイラ、君が闇を抱きしめられないなら、僕たちが半分持つよ。」

バディライダーに入れられたとたん、そのカードは黒い火花を放ち始めた。そしてカードの表面が一枚ずつ剥がれていくように、いくつも重ねられた絵が散らばっていく。そしてその一枚一枚が、怪獣娘のゴジラの姿へと顕現する！

「アイラの中のゴジラが目覚めたあの時と、時を同じくしてこのカードが現れました。」

場面は、フリーフィンク会議場での発表会に遡る。

「最初はこのカードは何も描かれていない、真っ黒なだけのカードだと思っていました。」

パツと、場内全員に表裏を見せる。

「しかし解析してみた結果、このカードにはいくつもの絵が『重ねられている』状態であるとわかりました。何枚もの絵を透過処理して重ねられた結果、全てが混じって真っ黒で何も描いていないように見えていた、ということなんです。」

スクリーンに、立体的なモデルが提示される。解析された結果、一枚一枚に『違う』ゴジラの絵が描かれているのが確認できる。

「これが全部『ゴジラ』なの？」

「うん、データベースには詳しい情報は載っていなかったけど、大よそ特徴は一致する。」

「でも、細部まで見たらかなり違うぞ？」

体色が微妙に違ったり、背鰭の形が違ったり、はたまた骨格からして別モノなやつもいる。特に違うのが『顔』だ。目が大きいヤツ、白目剥いてるヤツ、耳が無いヤツ、歯並びがいいヤツ、明らかに『眉』があるヤツ。大別しても15、細かいバリエーションで30はあるかもしれない。

「そんな無茶苦茶なバリエーションのソウルが、アイラー人に集中させられているんです。」

「ソウルに向き合おうにも、ソウル全てが『オレもオレも』と自己主張が激しいから、一人ひとりと向き合って、制御することも出来ない……。」

「だから、その荒ぶるソウルを、僕たちで止める。」

「そんなこと出来るの？」

「そのための、バディライド。」



「バディライド中は、皆の心とリンクした状態になります。それは、同時バディライド中の怪獣娘同士にも当てはまりません。」

「じゃあ、みんなで一斉にバディライドした状態で、さらにアイラとバディライドすれば、ゴジラのソウルとも『対峙』できるってことか。」

「そう。」

なんか、あらかじめ用意して隠されてた方法にたどり着かされた、って感じが否めないですが。結局父の掌で踊らされているのか。

「けれど、百歩譲ってその方法があつていたとして、私たちはゴジラに勝てるの?」

「・・・正直、かなり厳しいかと。一体一体が一騎当千クラスの強さを持つていて、実質それらを同時に相手取ることになります。それでも、アイラ一人を相手取るより幾分温情なレベルですが。」

「何の慰めにもならないわね。」

「アイラの中のゴジラに、僕たちの味方に働いてくれる個体がいることを願うしかありません・・・。」

怪獣王とは言っても、個体ごとに性格だつて異なるはずだ。中にはイイヤつだつているだろうし、我関せずなやつもいれば、逆にメチャクチャ凶悪なやつだつているだろう。というか、むしろ同時に顕現したら、勝手に喧嘩を始めるんじゃないかとも思う。『今

の自分』を一番邪魔しているのは、紛れもなくすぐ隣にいる『自分自身』なんだから。

「予想通りというかなんとか。ここまで来るともはや滑稽だぞ。」

島のあちらこちらで熱線の嵐がレーザー演出のように吹き荒れ、怒号の重奏が鳴り響く。

「ライブ会場かなにかか！」

心なしか勇ましいマーチが流れてくるような感じだ。だがまあ勝手につぶし合いをしてきているなら助かる。

「物凄い光景です！まさにこの世は怪獣大戦争！」

「ジエツタ君！身を乗り出すと危ないですよ！！」

「キヤアアアア！」

SSPも命がけの実況をしている。編集が大変なことになりそうだ。

ギヤアアアアアアン！

「あつ、このアイラいい子だ。」

「あつちのはアイラは寝てる・・・。」

「あつちは笑ってますよ。」



「ブラックキング！」

「ライブキング！」

王のファイブカード!!<sup>キング</sup>

「戦法は変わらねえ！アースクラッシュャー！」

まずレッドキングが足を掬い、

「エレクトリックテール！」

エレキングが痺れさせ、

「デスト・レイ！」

「ヘルマグマ！」

キングジョーとブラックキングが攻め、

「わはー！」

ライブキングが踏みつぶす！

「即興にしちやあ、なかなか合ったチームプレーじゃねえの？」

「安心するにはまだ早いわよ？」

この程度で負けるゴジラではない。怒り狂ってさらに攻撃は苛烈になる！熱線は赤みを帯び、全身も燃え滾る様に赤く光る。

「すごいパワーだ……。まるで本物のマグマのよう……。」

「本当の戦いはこれからだっただけか？ やってやるぜ!!」

キングたちが戦う一方で、また別の戦いが起こっている。目つきがかなり鋭く、体形もスマートで、速さと破壊力を兼ね揃えた個体。幾多の怪獣たちをすべて薙ぎ倒し、最終戦争すらを生き残った絶対的強者に立ち向かうのは、大怪獣ファイトの絶対強者と、全ての始まりの怪獣娘。

「すもも漬けいる？」

「・・・あとでもらう。」

かかってくるなら、相手をしてやる。それがこのゴジラのスタンスであろう。他を寄せ付けない圧倒的な強さを持っている。

『ブルーコメント』  
『球体変化』!」

ベムラーが、青い光の球となってゴジラへと突進をしかける。しかしそれを見越したゴジラは熱線で迎撃する。

「くっ! そう簡単に当たっちゃくれないか!」

「ゼットンシャッター!」

「ナイスキャッチ!」

ゼットンが、光球化したベムラーを撃ちかえす。すかさずゴジラ、何を思ったのかゴールキーパーのようにベムラーを拾いに行く。

強さの中に、どこかユーモアを持ち合わせている。

「あんたにそっくりだね。」

「そうかな？」

「そうだよ。先輩の事はもつと丁寧に扱おう、ね？」

「わかった。」

「わかってないだろ！」

戦場の最中、白熱の怪獣バレーボールが開始された。

「もうやめて……。」

さて、ベムラーさん命が尽きようとしているのと同時、これもまたひとときわ異彩を放つゴジラがいる。全身血走るような赤みを帯び、目がどこを向いているのかわからな  
い。なにより、何を考えているのかすら読めない。この地球上の、あらゆる生き物と言  
う生き物を超越<sup>シ</sup>越<sup>ン</sup>した、完全なる生命体。それに立ち向かうは、無限の進化の可能性を秘  
めたタツグ。

「ゴモラ！超振動波！」

「いつくぞお!!オルアア!!」

シンジとゴモラの、シン・ゴモラコンビ！

グオオオオオオオ……

「効いてる!?自分でやっておいてなんだけど驚きー!」

「耐久力には難があるのかも・・・その代わり、カバーできるように適応能力が高いのかもしれない、気を付けて!」

「オツケー!どんな相手でも油断はしないよ!」

超振動波を受けたなら、口を大きく開いて反撃しようと試みる。ならこちらは、その手をつぶすだけ。

「冷凍弾をくらえい!」

「よく噛んで食べるお!」

口を氷漬けにされた、ならば今度はと、なんと背中から熱線のシャワーを浴びせてきた!

「くつ、本当に予想の一手上を行ってくれる!」

「ならこつちは、二手先を行くだけだよ!」

「よし!ゴモラ、EXだ!」

「ウオオオオオオオオオ!!!」

EX化したゴモラの硬殻で、熱線のシャワーを身をもって防ぐ。

「見せてやるぜ、人と怪獣娘の可能性!」

『何がしたいか』はわからずとも、『どうするつもりか』ならある程度予想が付く。最





「どれどれ・・・カッコいいじゃねえか？」

「ええ、ホントに・・・。」

強靱な手足に、長い尻尾、特徴的な背鰭。実にシンプルながら、これ以上に魅力的な要素はない。黄金比的な美しさすら感じる。

「よっし！これで最後じゃないかな？・・・みんな満足してくれたんだね。」

「うん、みんなお疲れ様！」

ここにゴジラのカードは完成した！そしてアイラも元の一人に戻った。

「シンジ・・・！」

「アイラ！やったね！もう大丈夫だ！」

「うん・・・もう、大丈夫・・・。」

「視聴者の皆さん、見てください！今ここに、新しい怪獣娘の仲間が加わりました！その名はゴジラ！」

「やったんですね・・・厄い獣を退けたんですね！」

「うん・・・これで!!」

アイラは自らの運命に打ち勝ち、世界に可能性を示せた。最高のシナリオだ。

「だが、無意味だ。」

「は？」

皆の気が緩んだその一瞬、アイラの口から放たれたのは、吐き捨てるような言葉と、青い炎。

「うわあああああああ!!!」

「みんな！アイラ、なぜ?!」

「なぜ？」

「敵を「ころす」のに、理由がいるの？」

その目は白く、まるで生気を感じさせないほど冷たかった。息を吐くように命を奪い、あらゆるものを破壊する、悪魔とよぶべきほどの冷酷さ。

「みんなは敵じゃない！アイラ、君の仲間だ！」

「仲間？貧弱、貧弱ウ！おれにとっての敵とは、この世に生きるもの全てだ！」

「厄いの獣とは・・・お前か!？」

その問いかけに応えんと、再び熱線を発する。異常とも言えるほどの威力と危険性を孕んでいる。成すすべもなく吹き飛ばされるシンジ。

「ぐわっ!」

「シンジさん大丈夫?」

「どうなってるの、これで万事解決なんじゃ?!」

「いや・・・見てくださいこのカードの絵・・・。」

「カード・・・もう完成なんじゃ!？」

そうしてSSPの下へと飛ばされてきた。そしてシンさんが指摘する。

「まだです、よく見てください。目が描き込まれていません。まさに『画竜点睛を欠く』、大事な一手が未完成なんです!。」

「未完成!? ってことは、まだアイラさんの中に?!」

「潜んでいたんだ・・・まさか、このタイミングを窺っていたのか!？」

異質だ、シンジとゴモラが戦ったゴジラもそうであったが、今アイラを支配しているゴジラは、『ゴジラ』の中で、最も邪悪で、最も恐ろしい存在。この世を呪うためにいる

ゴースト  
『悪霊』。

「こんな・・・こんなことって・・・。」

「シンジさん……。」

『シンジ、どうした。皆が戦っているんだぞ?』

「……誰?」

「どうしたの?」

「今、誰かの声が?」

『シンジ、わからないのか!』

「誰だよ?」

心の折れたシンジの背中を押す声の正体は、一体誰なのか。

「……いや、そうだ。もう、止まってちゃダメなんだ。」

「シンジさん?」

意を決したシンジが、銀のカードを手取る。

「どんな理由があろうと、暴力を振るうものを放っておくわけにはいかない。」

そう言い聞かせながら、バディライザーに挿入する。

「光の力……お借りします。」

眩い光が、シンジの体を包んだ。

グルル……

ゴジラもその輝きに目を覆う。

「この……力は……。」

S. R. I スーツが赤と銀に彩られ、胸の中心には命の灯火が宿る。顔は柔和な笑みを蓄えたフェイスガードに保護される。そして光り輝く視線が、『悪』を射抜く。

「あれが……ウルトラマン?」

その姿は、たしかにウルトラマンに似ている。誰も見たことはないが、誰もがそう直感した。

(与えられたこの力を、こんな形で使わせていただくことをお許し願います。ただこの一度、一度だけのワガママをお許しください。)

分かり合うはずだった。ぶつかり合い、励まし合い、哀しみのない世界を作る為の力だったはずだ。なのに、今自分はなにをしようというのか。

(けど、泣くのは後だ!)

『へアツ!』

掛け声高らかに、捨て身の戦いを始める。

「あれが、伝説の巨人の戦い?」

「なんか……荒々しいね。」

お世辞にもスタイリッシュとは言えない泥くさい戦いだった。掴んで、殴って、投げ  
て、

『シヨウワツッ!』

グワオオオオオオオ!

蹴って、絞めて、撃つ! シンプルを極めた、究極の『戦い』がそこにあった。光の力を帯びた攻撃に、ゴジラの黒い怨念のオーラも剥がされ、着実にダメージが加わっている。

「ヤベエ・・・なんか・・・ゾワゾワしてきた。見てるだけなのによ・・・。」

その戦いざまに、皆戦慄を覚えていた。しかし不思議と畏怖感はなく、心の底に眠る闘争心をくすぐられるものが多かった。

黙ってやられているゴジラでもない。伸ばされたパンチを喉で受け止め、逆に噛みついて掌を破壊しにかかる。

ならばとシンジも、ゴジラの背後に回り、首絞めで脱出を試みる。しかしその瞬間を待っていたのはゴジラの方だ。至近距離からの体内放射で一気に仕留めようと、シンジの首に尻尾を回して動きを封じる。

ガガガガッ!

『ドアアアア!!』

まんまと目論見は成功し、もろに攻撃を浴びるシンジだったが、吹き飛ばされる衝撃を逆手にとって、尻尾を掴んで投げ飛ばす。

お互いにボロボロになるほどのダメージを負っているが、それでも倒れようとはしない。

『ええい、何故戦う!? 何故ころす!?』

『この世全てに生きるもの全てが憎いからだ!』

『何故!?!』

『憎しみに意味などあるものか!』

吐き捨てるように熱線を撃つてくる。ガッチリとガードを固めることで防ぐ。

『だんだんこの体にも慣れてきた、これ以上はお前の好きにはならないぞ!』

『そうか・・・ならば!』

ゴジラはそっぽを向いて熱線の準備に入る。その視線の先には・・・

「ちよつ、こつち向いたよ!」

「はやくはやく逃げて!」

「む、無理ですう!」

SSPの、生身の人間たちがいる。すかさずその前にアギラたちが割って入るが、その前にシンジが攻撃を阻止しようと走り出す。

ニヤリッ

『何!?!』

しかしそのすぐ背後まで迫った時、ゴジラは反転して無防備なシンジに向かつて撃つた。ズルズルと地面を引きずられながら熱線に焼かれる。

『シユワア……』

胸のランプが青から赤に変わり点滅を始め、危険信号の合図だ。それをわかっているのか、ゴジラがトドメを刺そうと近づいてくる。

『そうまでして、人間が憎い？なんで？』

『誰にもわかるまい、わたしたちがどれだけ苦しめられたのか。生きるもの全てが、どんなに憎らしいか！』

『わたし……たち？』

他人にはどうやってもわからない苦しみが、ゴジラと、アイラの中にはあつて、そのことをシンジすらも知らなかった？

(いや、知ろうともしなかったんだ。)

アイラのことを、心のどこかでは避けていた。そのせいでこんな事態にまでなった。自分の事を、ますます許せなくなる。

『君のことを知りもしないで、ただ「誰かを傷つけるのをやめろ」とか、「本当の自分を取り戻せ」とか言ってたんだ……』

『……』



大変な思い違いだ。結局は、自分もネットの向こうから攻撃している人間とそう変わらない。それを『人類全体の業』だとか、適当な理由を見つけて見ないふりをしていた。『そんな自分に、腹が立つ！』

吠える。全身に気を滾らせ、立ち上がる。もう何もかもから目を逸らすのは御免だ。

『これが、最後の……八つ……裂き……！』

グオオオオオオ……

胸から後部へかざした掌が、まばゆい光を放ちながら高速回転する輪を形成する。それに合わせて、ゴジラも最後の一撃を放とうと息を吸う。

ガアアアアアアアアアア!!!

『コオウ……リイン!!』

寒空の空気を切り裂いて、断罪の光の輪がとぶ。しかし所詮は『線』の攻撃、その後ろにいる相手もろとも『面』の攻撃で焼き尽くそうとする。

『憎しみは憎しみを呼ぶだけだって、わかれ!!』

光輪が90度横を向き、熱線を防ぐ盾となる。激しい光輪の回転により、熱線も渦を巻く。その中心、リングが見通す先は無風だ。

『スペシウム……光線ンン!』

腕を十字に組み、思いつきり力を籠める。放たれた閃光が、リングと熱線を貫き、厄

いの獣をうつ。

ガアアア・・・グウウウウウ・・・ツガアアアアアアアア!!!

数秒間照射され続ける光線に無敵のゴジラもたじろぐ。その視線が未だ相手を捕え続けているのは、怪獣王の意地がそうさせているのか。

その視線も、自らの胸元で起こった爆発に遮られる。次こそ、次の一撃にこそ全てをかけて、すぐさま反撃の体勢に移る。

『ウルトラ・・・』

しかし、それでは少し遅かった。光線が当たった時、既にシンジの行動は終了していたのだった。

『かすみ切りイ!』

すれ違う瞬間、シンジの左手がゴジラの胸を切り裂く。一瞬反応が遅れて、ゴジラのリアットがシンジの首を捉える。

「シンちゃん!」

仰向けに倒れ込むシンジ。その場にカラント!と乾いた音が響き、シンジのスーツが変化したヘルメットが落ちてくる。

「うつ・・・いってえ・・・。」

呻きをシンジあげたのはシンジだった。

「ぐっ……。」

遅れてゴジラは、アイラはついに倒れた。

「シンちゃん！大丈夫？怪我してない？」

「ああ……ヘルメットが無ければ即死だった……。」

額から垂れる血を拭いながら立ち上がる。スーツの変身も解除され、飛んでいったヘルメットも粒子化して消えていく……。

「それよりも、アイラは……ぐっ……。」

一歩踏み出した途端、激痛が全身を襲う。アドレナリンが切れたせいか、急に意識を失いかける。

「あっ……。」

「アギちゃん？……おっ……。」

「雪……。」

曇り空から、ちらちらと白い粒が降ってきた。熱の籠っていた戦場が一転して、一気に冷やされていく。まるで幕切れカーテンコールを告げるように……。

「……うっ……。」

「アイラ……。」

目を覚ましたアイラに、シンジは一歩ずつ向かって行く。その途中、バディライザー

や、ライザーショットを落としたことにも気づかず、一心不乱に……。

「カードが……。」

「完成……したんですね。」

一枚のカードが、風に乗せられてくる。そこにあつたのは、邪悪に満ちた厄い獣ではなく、一匹の怪獣の絵であつた。

「シンジ……わたし……。」

「いいんだ……アイラは何も悪くないんだ……。」

ひしつ、とただの人間に戻つた二人が抱き合い、動かなくなつた。

痛みと、様々な感情に火照つた二人の体を冷ますように、しんしんと雪が積もつていく……。

## Echoes of Love

「シンジ様、朝食はいかがされましたか？」

「・・・いいらない。」

雪の降るある場所で、お互いの体を温め合うように抱き合う男と女。今、そんな映画のワンシーンを切り取ったような一枚の写真が、ネット上では話題になっている。

正確に言えば、その写真と同時期に上げられた動画と、それを掲載しているサイトが話題沸騰中だ。

「二応当事者なんだけど、すごい反響なってるね。」

「ええ、よく出来たシナリオだよ。」

「なーんか、腑に落ちねえけどよ・・・。」

そのサイトとはSSP。GIRLSと協力して、未確認怪獣娘の真実を公表し、怪獣娘と人類の未来を取り持った立役者。

「あくまで、作られた『真実』だけ。」

そう、全ては『劇』だ。ただスタジオではなく、現場で撮影された、臨場感も衝撃も全てが本物であるだけの、『見世物』だ。

「アイラの潔白と、怪獣娘の信頼を取り戻すためには、どうしてもあの映像を公開する必要があった。」

「けれど、それはGIRLSが流したプロパガンダではなく、あくまで民間人によつて撮影された『衝撃の真実』でなくてはならなかった。」

「決して嘘ではない、けれど全てが真実ではない……。」

曰く、上手い嘘の吐き方は、真実を織り交ぜることだという。

『歴史はスタジオで作られる。』誰が行ったのかは知らないが、それは当たっている。真実を語り継いでいくのは、それを見た大衆に委ねられる。ステージの上のスポットライトを浴びているドラマ部分が真実だと声高々に叫べば、それだけが真実になる。舞台裏や楽屋裏のドタバタ劇になど、誰も目もくれない。

勿論その煽りを一番受けているのは、公開しているSSPの方だ。

「Not even justice, I want to get truth.」

「真実は見えるか……。」

「案の定、炎上してるわね……。」

よりよい未来を求めて活動していた。だから、この動画の公開にも納得していた。けれど後悔していないかと言われると……。

「もうちよつと・・・なんとかならなかつたかなあ？」

「覆水盆に返らず、後の祭り、吐いた唾は呑めぬ。」

「今更どうしようというわけではないけど・・・。」

ジャーナリストとして、この行為は果たして正しかったのだろうか？煮え切らないままコメントは増えていく。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「はあ・・・。」

そして場面は一番煮え切らない人物のところへと戻る。

「何も食べないのはダイエツトにはならないぞ？」

「別に体形は気にしてませんよ。」

「ならなおさら食べるべきだな。」

サンドイッチのひとつをつまみながら、ベムラーさんが訪ねてきた。

「多少想定外の事こそあったが、概ね万事上手くいつていた。誰も120%の成果なぞ期待していない。それに関してはわかるだろ？」

「作戦のことじゃないんです・・・それに、作戦はみんなで考えたものですし、実行したのも僕じゃないです。」

「ではなんだ？アイラが今なお拘束状態にあることか？」

現在、アイラの身柄はG I R Lに預けられている。検査・入院という名目で。

「それも……あるんですけど、もっと個人的な話……。」

「それは？」

「僕が、アイラとちゃんと向き合えていなかったってこと。アイラのこと、ちゃんと知ろうとしなかったってこと……。」

「前もそんなこと言っていなかったか？」

「そればかり、頭の中をよぎるんです。僕がもつとしっかりしてれば……こんな事態にもならなかった。」

「所詮結果論だ。形はどうあれ、どの道ああいう事態にはなっていだろうさ。」

「それでも……。」

「自分のせいじゃなければよかったか？別の誰かがヘタを掴んでくれていればよかったか？」

「そんな！……ことは……。」

「百歩譲って君が原因だったのかもしれないが、君は治めて見せた。それで十分だろう？」

「その治め方も、結局最後は……力によって得た空しいものでした……。」

「『力』ねえ……。」



その力も今は手元に無く、机の上に置かれている。持ち主の指示が来るのをじっと待っている。

「ウルトラマンのカードは、消えてしまいました……。使い方が悪かったのか、それとも、ウルトラマンに愛想を尽かされちゃったのか、どっちにしろ、僕が持つべきではなかった……。」

「まるで、お気に入りのおもちゃを取り上げられた子供のようだな。」

「そう……。僕は、浮かれて舞い上がっていたんだ。自分が、なんでも出来るように錯覚していたんだ……。」

代わりにゴジラのカードが残った。

「ウルトラマンの力を発揮したとき、物凄い高揚感もありました。けど同時に、色んなものに鈍感になっていくようにも……。痛みとか、恐怖とかがどんどん薄れて行って……。」

「それはアドレナリンのせいだ。興奮すると息が荒くなったり、心臓が激しく拍動したりする生理現象だ。特別珍しい事でもない。」

「知ってます。気に入らない相手を叩き潰すのだから、人間の本能の一部分、『業』だっというのでも理解できます。けど、もつと穏便に、理性的に解決がしたかったんです、僕は。」

「そんな理想や常識が通用しない相手もいる。怪獣がその最たる例だ。」

「だからこそ、僕がやるべきことだったんです。なのに、僕まで力を振り回してたら一体どうなる？ 怪獣娘と人類の間に立っているべきなのに・・・。」

「ちよつと背負いすぎだ、お前は。人類の業とかを語るに、お前は若すぎる。そんな硬い使い方してると、その頭脳が泣くぞ。」

「不都合なことを飲み込んで、乗り越えていくのが大人なんでしょう？ そう言ったのは、あなたですよ？」

「確かに言った。だがな、身にふりかかる現実を、有り余る勢いで押し切る事を『青春』と言うんだ。お前は、そこまで老けちゃいないだろう？」

「青春？」

「そうだ、最後まで決してあきらめず、不可能を可能にして見せる。そんな勢いがお前にはあるだろう？ こんなどころで、膝を抱えている場合ではないだろう？」

「僕は・・・何をしたらいいんだ？」

「するべきことなら、いっぱいあるだろ。考えなくつたつて。」

「例えば？」

「飯を食え。」

「いただきます。」

喝を入れられると、急にお腹が空いてきたのを感じた。



あぶり出し、皆も子供の頃作ったことがあるだろう？「ねーよ。」ミカンを絞って、その汁で紙に文字を書くと、裏から火であぶった時に文字が宇浮かび上がるのだ。

「それが、あの手紙に施してあった。そしてそれがデータベースへのアクセスコードだった。」

『1954113』でしたっけ？何かの日付でしょうか？」

「当時、大戸島は季節外れの台風に見舞われ、それでソウジ氏の父親の妹、つまりソウジ氏の叔母が命を落としたそうだ。それを忘れないために、その日付をコードにしたんだろう。」

「つまり、僕の大叔母さんか。あの島で生まれて、あの島で育った……。」

それが、今回の件とどう関係があるのかはさておき。

「あつ、今お茶淹れてきますね。ちよつと待ってて。」

「じゃあ俺も、特製シフォンケーキをご馳走しちやおうかな！」

それぞれ台所へ取りに行った2人を見送って、今度はシンジとシンさんが科学話に花を咲かせる。

「そうそう、S. G. Mのレーダー機能を少し見直してみたんですけど、ちよつと見てみてくださいませんか？」

「どれどれ……ほうほう、生体探知機の応用ですね？」

「うん、主にカイジューソウルや、シャドウに反応するように色々試作してみたんです。」

「なるほど、あまり感度が高すぎると、よけいな物にまで反応しそうですね・・・もう少し周波数を絞ってみては？」

「私も機械いじりは好きだが、君たちはそれ以上だな。」

「シンさん、ひとつ気になっていたことがあるんですが。」

「なんででしょうか？」

「気分を害されてしまったら申し訳のないことなのですが、シンさんほどの腕なら、どこか有力な研究機関や、会社から声がかかったりとかはないんですか？」

「確かに、君ほどの頭腦の持ち主はなかなか見ないな。それこそ、引き抜きとかありそうならいだ。」

「・・・確かに、僕の子供のころの夢は、3位が獣医で2位がタイムマシンの開発者、1位は人の役に立つ災害救助用ロボットの開発でした。今も変わりませんが。」

シンさんは、しばし目を伏せて考えるように話し始めた。

「大学にいた頃は、ひたすら勉強漬けの毎日で・・・よく1人でいることが多かったです。」

「けど、そんな僕に声をかけてくれたのが、キャップとジェット君でした。」

「あの2人への、恩返しのために一緒にいる、ってことですか?」

「それもありませんが……それ以上に、あの2人のことが好きなんです。キャツプはそそつかしいし、ジエツタ君はやかましいけど……あの2人でないと、なんだか始まりません。」

「機械には温度は測れても、心の熱さは測れない。頭じゃなくて、心で物事を見る。僕の恩師の言葉です。僕は、自分の心に正直でいることを選んでいます。」

「自分の心に、正直にか……。」

「ごめんなさい、ちよつと説教っぽくなっちゃいましたね。」

「いえ、僕もその言葉に賛成です。かけがえのない仲間は、どんなにお金を積んでも手に入りませんから……。」

心や思いやりを、綺麗事だと罵るものもある。しかし綺麗事だからこそ実現する価値があるとも言う。

「おまたせ!紅茶でよかったかな?」

「シフォンケーキおまたせ!なんの話してたの?」

「なにも。お2人がいい人だつて話。」

と、いいところで帰ってきた。

「そうそう、要件はもう一つあつて。先日の戦いで必要になった費用を経費で落とせ

るんですが、SSPの皆さんの分も僕が立て替えておこうかと思つて。」

「いえ、それには及ばないわ。私たちはあくまで、私たちの取材で行つただから。」  
「でも、壊れたカメラの分ぐらい。」

「いいの、十分元がとれるぐらい、アクセス数も稼げてるんだから。」

「まあ、途中でカメラが壊れたおかげで、肝心のシンジさんの激闘のシーンは逃しちやつたけどね……。」

幸か不幸か、アイラが白目のゴジラに乗つ取られて再び牙を剥いたシーンから先は撮影出来ていなかった。ギリギリ最後の瞬間だけはシャッターに収められたおかげで、十分に『綺麗』な画が撮れていたが。

「うーん……でもなあ、これぐらいじゃ足りないくらいメロンの恩があるしなあ……。」

「まあ、そう言うなシンジ君。彼らが必要ないと云つているのだからマネーお金はいいだろう。それより、もう必要ない機材を引き取ってもらうとかはどうだ？」

「あつ、そうか。じゃあ、撮影の時に使つたデータの送受信機はいりませんか？あれならGIRLSではなく、元々ウチの家にあったものなので。」

「あつ、それ助かるな。いざつて時に容量が足りなくなるとか無くなるだろうし！」

「でもいいの？あんな高そうな機械。」

「いいんです。改造してくれたのはシンさんですし、それにももしもそういうのが必要

になったときは、またSSPさんに撮影をお願いできますし。」

「Win—Winな関係ということだな。」

「じゃあ、お言葉に甘えて……。」

商談成立。ベムラーさんはこういう手合いにも慣れていいのか、スツとフォローしてくる。

「それから、もうひとつ気になっていたことが……。」

「ああ……それって、報道の真理について？」

「はい、真実を公表することが使命であった皆さんのポリシーを曲げてしまうことになつてしまったんじゃないかと……。」

「たしかに、今は炎上してるけど、それが全てじゃない。」

「アイラさんつを含めて、怪獣娘さんたちと手を取り合っていくことが、僕たちの求める『真実』ですから。」

「だから、私たちは嘘を吐いたつもりはないわ。だって、アイラさんは本当は優しい人でしょう？そしてあなたは、それを救った。」

彼らなりに、そう飲み込んだんだと思う。いつまでぐじぐじとしていられない。賽は投げられた、The show must go onだ。

「大人なんだな、皆さん……。」



「まあ、私たちもたまにはバカだってやるよ?」

「それこそ、今まで鳴かず飛ばすの炎上続きだったけど、今回の件で注目されてるし、これから巻き返せる。」

「いい機会をくれたんですよ、シンジさんも。」

「「本当に、ありがとうございます。」」

「ええっ!?! いやいや、こちらこそ本当にありがとうございます!」

「「いやいやいやありがとうございます……。」」

「あつあつあつ、ありがとうございます……。」

お互いに深々と頭を下げては、また頭を下げるループを繰り返している。それを失笑しながらベムラーさんは眺めていた。

☆☆

「ん? 通信だ。はいこちらシンジ。」

『シンシン! ピグモンですう。シンシンとアイアイに会いたいという人が本部に来ます! 至急来てくださあい!』

「ということ、来ました。SSPさんと。」

「一応、今回の件の関係者ですし……。」

「まあでも、これ以上のスクープは期待できないと思うよ?」

「あつ、ゴモたんさん……サイン貰つていいですか？この前はそういう雰囲気じゃなかったの……。」

「ジエツタ君？」

「会いたい人つて、どんな人ですか？」

「アメリカから来た、シラガミ博士つて人だつてさ。」

「シニガミ博士？」

「イカ。アメリカからの遣いじゃなくて、個人で来たみたいだよ。」

「白神博士……聞いたことがあるような。」

「たしか、遺伝子工学の権威だったかと。以前論文を発表しましたね。」

「パッとそのニュース記事を出してくれる、さすがシンさん手が早い。」

「なにに？『花が環境に与える影響』？枯れない花による、砂漠などの緑地計画……」

「なんかすごくキナクさい。」

「まあそう言わないで。シンちゃんのお父さんとアイラとも知り合いらしいよ。」

「じゃあ、何故父本人が来ない？こんな大変な事態を放置して、代わりの遣いを超越す

なんて言いご身分だ。」

「何度此方から呼びかけても応答しないあなたが言えるのかしら？」

「エレキングさん……。」

「全く、いくら辛いからと言って、連絡の一つも寄越さないなんて失礼だわ。報告書も書いてもらわなければいけないというのに。」

「すみません．．．ご迷惑を。」

「そんなこと言つてー、一番心配してたのエレちゃんじゃないのー？ 仕事でもそわわしたりため息ついたりもがが．．．。」

「だまらつしやい。あなたもフラフラしてないで仕事のひとつを手伝いなさい。」

「ゴメンゴメン。私はみんなのケアしてたんだつてば。」

グリグリと音を立てながらエレキングがミカを締め付ける。

「心配、してくれてたんですね．．．ありがとうございます。」

「別に、普通の事でしょう？」

「照れちやつてもーあだだだ。」

「だから普通のことだと言っているでしょう？」

「じゃあなんでこんなに隠そうとしているのかな？」

「あの、その辺でやめてあげてください．．．それで、白神博士つてのは今どこに？」

「この先の部屋よ。あなたには会って話をしてもらわなければならぬ。」

「わかつてます。そのために来ましたから。」

「そう、なら行つて。アイラも迎えに行くわ。」

「がんばってねーシンちゃん。」

「僕一人だけ？」

「二人じゃ不安か、シンジ君？」

「全然！」

知らない人と会うのは、ちよつと心細いけど仕方がない。少しは大人になろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「失礼します。」

「やあ、はじめまして。濱堀シンジ君。」

「あなたが、父の知り合いの白神博士？」

「いかにも、私が遺伝子工学会の鼻つまみ者で、古生物学会の異端児こと濱堀ソウジの

友人。『花屋』の白神だ。よろしく。」

「異端児の息子です。」

ちよつとよれたコートを着た、ヒゲ面のおっさん。だらしねえな。やはり科学者とい

うのは変人なのか？それがシンジの第一印象だった。

「父はどこですか？」

「落ち着け、そんな剣幕ですごまれちゃ、ビビッて話もできねえ。居所が聞きたけれ

ば、俺たちに協力しろ。」

「OK?」

「OK!」

ズドン!

「待て、本当に撃つな。悪かった、悪ノリした私が悪かったから、さあさ、銃を収めたまへ。」

何故撃つたのか? お約束には誰も逆らえないからだ。お遊びもほどほどに、本題に入る。

「父はどこに?」

「うむ、君の父は生きているよ。まだ怪獣についての研究をしている。主にアメリカの、ある場所だな。」

「ある場所、とは?」

「言えないのだ。極秘の研究であるから。私はその通<sup>メツセンジャーボーイ</sup>達 役でしかない。」

「それじゃあ死んでいるのと変わりませんよ。二度と会えないのなら・・・。」

「近いうち、ソウジは君と会うだろう。そこでどんな会話をするのかは、私にはわからない。ただひとつ言えることがあるとすれば、君は少々父を誤解しているだろうということだ。」

「誤解?」

「ソウジは、君が思っているほど冷酷な人物ではないよ。確かにこと研究、いや『自分の世界』の事となると、ものすごく偏屈になるが、家族のこと、アイラのこととなると物凄く甘いぞ。メープルよりも。」

「つまり、家族やアイラのこととは『自分の世界』じゃないんですね。」

「ああ、言い方が悪かった。家族と自分の世界以外の事には無関心な男だ。それこそ、人里離れた場所に居を構えるぐらいにな。私は・・・偏屈同士の気が合ったんだがな。」  
ハハハ、と自嘲するように笑って、白神は別の話を切り出す。

「私にも娘がいる。娘、ローズは私の研究も手伝ってくれている。ソウジもそうして欲しいんだろう。だから君に手紙を送った。」

「父の手の代わりということですか？」

「違う、自分の子に、自分の夢を継いで欲しいんだ。」

「夢？」

「そう、夢だ。人間が己の限界を超えて挑もうとするのは、そこに夢があるからだ。だが人間には限られた時間がある。その限られた時間の中で、何を残し、何を伝えていくのか。それが人生の意義だ。」

「僕が父の夢を継ぐとでも？」

「継いでいるさ、既にな。」

さっと取り出したのは、雑誌の1ページ。シンジには忘れもしない、あのインタビュウの記事だ。

「この記事を見て、ソウジはアイラを送ることを考えた。そしてあの動画を見て、迎える決心をしたんだ。」

「試した……ってこと?」

「信じていたんだよ。」

少し、気にくわない。シンジは自分で道を選んだつもりだった。けれどそれは父の誘導に乗っただけだったというのは悔しい。

「それに、もしもこの道に乗らなかつたら、一生放置するつもりだったってこと?」

「いずれ君は乗っていただろうさ。それはきつと、君の『運命』だ。」

「『運命』……。」

「シンジ……。」

「アイラ!もう大丈夫なの?」

「うん、大丈夫……おじさん、久しぶり。」

「ああ、久しぶりだなアイラ。」

その場へアイラも合流してきた。声にも張りがあるし、顔色もよさそうだ。

「そういえばアイラと白神さんって、知り合いなんだっけ?」

「うん、知り合い。」

「アイラとローズは仲が良いんだ。本当の姉妹のようにね。」

見せてくれとも頼んでいないのに、写真を見せつけてきたところを見ると、白神博士は相当な親バカと見える。青々と生い茂る森のような緑の髪と、パツと艶やかに咲いた花のような赤い目が特徴の美人だ。

「へえ……。」

「娘はやらんぞ?」

「何も言つてませんよ?」

「シンジ、浮気ダメ。」

「しないよ?」

「色恋沙汰かな?どんな話だい?」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「お、戻つて来たね。」

「おかえりー、どんなこと話したの?」

「んー、色々。」

30分ほどして、皆が待つ談話室にシンジとアイラが戻ってきた。お茶を一杯注ぐとそれぞれも席に着いた。



「そうだな．．．まず、アイラはアメリカに行くみたい。」

「なんで?!」

「父がアメリカにいるから。今はちよつと騒ぎになつてゐるから、ほとぼりが冷めるまで父のところへ戻るんだつて。それに、元々アイラは父のところにいるのがいいみたいだし。」

「えー、そうなの? せつかく友達になれたのに．．．。」

「また、会いに来るから．．．。」

「他には?」

「他? うーん．．．白神博士に娘さんがいるとか、家族のこととかかな。」

「家族か．．．。」

「他には他には?」

「他あ?」

うんうんと唸るが、シンジはなかなか口を開かない。

「まあいいや! それよりシンちゃん、約束。」

「約束? なんの?」

「とぼけちゃつて! 今度こそ二人つきりでお出かけの約束だよ!」

「ああ．．．そうだね。けど、今外は出歩きたくないな。」



自室のベッドの上で、ミカに馬乗りになれながらシンジは呻く。

「なにが？なにを？」

「まだ言っていない事あるんじゃないの？」

「なんの？」

「かくしごと。それぐらいわかるよ？」

言っていないことは確かにある。言うべきか言わざるべきか、けどいざれ言わなきやいけないこと。

「わかつてるの、ホントに？」

「わかるよ、シンちゃんのことだもん。」

シンジの頬に手を添えていつになくマジなトーンで語り掛けてくる。いつだったか落ち込んだシンジを励ましに来た時も、こんな声をしてきた。

「ミカに隠し事はできないってことか……。」

「そうだよ！さあはけ……っとうわあ。」

「そうだな、じゃあ言うよ。」

ミカの脇をとってグルリと上下を入れ替える。

「僕……アメリカに行くよ。留学する。」

「……そっか。」

「向こうなら、色んな事を学べると思うし、それに父にも……父と、ちゃんと会って話がしたいから。」

「そっか。」

「止めないの？」

「止めないよ。」

右へ左へ、上へ下へ。言葉は少なくとも、お互いの心をキャッチボールのように体位を入れ替える。

「それが誰かの思惑でも、決められた運命だったとしても、そこを歩いていくのはシンちゃん自身なんだよ。途中で迷ったり、回り道するのは、シンちゃんが決めていいことだよ。」

「今一、納得は出来てないけど。父の掌の上でさ。」

「なら、最後に見返してやればいいじゃん。お父さんの思ってた以上の、すごいことやりとげちやつたりとか？」

「そうだね。鳴くまで待とうホトトギスってか。」

「私は、ううん、ボクたちは待つてるから。だから、いつてらっしやい。」

「うん、行ってくる。止めてくれた方が、それはそれで嬉しかったけど。」

「そう？じゃあ今度は止めてあげるよ。」

「ただし、ひとつだけ約束して？」

「それは？」

「向こうに行っても、浮気しないこと。向こうにもいっばい怪獣娘はいるだろうしね。」

「じゃあこつちだつて、他のかわいい怪獣娘に現まを抜かしちゃだよ？」

「そんなことしないよ、だつてボクは……。」

シンちゃんのこと、大好きだもん！

ああ、僕もミカのことが好きだ。

お互いの熱を感じられるほど、近く、そして強く今はいる。

「ん？」

通信機が鳴っている。多分エレキングさんだ。

「ダーメ。」



うことを、忘れるなよ？」

「はい、色々指導してくれてありがとうございます、ベムラーさん。」

夢は大きく、けど荷物は軽く。旅は身軽な方がいい、旅を楽しむのは最低限の力  
バンと、少々の冒険心。

「父と会えると良いな。」

「はい、なにを話したらいいのか、まだ決まってるんですけど。」

もう時間が来る。名残惜しいが別れの挨拶はそこそこに済ませ、搭乗ゲートへ向かう。

「では、行ってきます！」

「「「行ってらっしゃい！」「」」」

「ゴモたん、見送りに行かなくてよかったの？」

「いいの、こっから見えるから。」

GIRLS本部の屋上で、ミカとアギが佇む。雲一つない空には、一筋の飛行機雲が  
線を描いている。

（これは、お別れじゃないんだ。ちゃんと帰ってくるなら、バイバイは言わないよ。）  
何も言わず、ただ右手をかざす。それだけで十分だ。





「ああ、俺だ。お前の息子に会ったぞ。」

「なに？ああ、元気だよ。ありやまさしくお前の息子だ。まごうことなく。」

「どこがって？即断即決、お前の得意分野だよ。」

「なにより、あの眼だ。ここではない、もつと未来を見据えるような眼。あんな綺麗な眼をしている奴は、他には一人しか知らないよ。」

「ああ、そうだ。共にアメリカへ渡ることとなったよ。お前の望んだとおりだろう？」

「なに？・・・はあ?!正気か、お前？」

「・・・そうだな、お前は一度決めたらすぐそうするもんな。即断即決。」

「わかった、わかった。説明は俺がしておくから、イツテヨシ。」

プツツ、通話を切つて白神は大きなため息をつく。

「おじさん、どうしたの？」

「ん？んー・・・とな、あいつ、フィリピンの方で新種の化石が見つかったって言って出て行っちゃった。」

「いつ、戻るの？」

「わからん、おかげで入れ違いだよ。シンジになんて説明しようかな・・・。」

「元氣出して。ローズに会わせたら機嫌直すよ。」

「娘はやれん．．．しかしなあ．．．。」

それは出国の1日前のことであった。

## 夢

ジャラジャラと鎖を鳴らして歩く音が廊下に響く。しかしこれはファッションではなく、拘束具としての重々しい物だった。

(……は……?)

気が付けばシンジは、ほの暗い廊下を手錠や足枷を身に付けながら歩いていた。両脇にはロボットのようは無機質なマスクのガードマンが並んで歩いている。

「どいっ!」

見知らぬ場所に、自分一人。これがサバンナの大平原とかなら夢も広がるだろうけど、ここは閉塞的な……どこかの施設の中だ。声も壁に反射して返ってくる。

困惑しつつも、足は前に進んでいく。まるでシンジの意志に沿わないように、勝手に進んでいく。そして、その眼前には荘厳な扉が現れる。

「この部屋は……ぬっ……。」

ギギギ……と重苦しい音を立てながらゆっくりと開いていき、シンジの足はまたも歩み始めた。

「それでは、被告人濱堀シンジ氏へのリンチ、否稟議を行う。」

「つていうか裁判じゃないのこれ？」

扉を潜り抜けた先は、裁判所のようなであった。『ようであった』というのは、シンジの知る裁判所の法廷とは違い、シンジのいる証言台の周りが、自分を見下すように高く据えられており、シンジはその『底』にいる。

「それでは、被告人の罪状を読み上げる。」

「ひとつ、大怪獣ファイトが行われているのは、アリーナではなくジョンソン島に設けられたバトルフィールドである。また、撮影・中継もドローンによって行われており、周囲に人は配置されていない。」

「知らんがな」

おい検事、なにを読んでいる。それは3月30日に発売された怪獣娘のノベルじゃないか。さつくりと読めながら、中々読み応えのある作品じゃないか。

「ふたつ、天城ミオこと、ベムラーさんはもつと寡黙な人である。」

「みつつ、多岐沢マコト氏は現在教授ではなく、博士である。」

「誰だよ、いや知ってるわ。」

「あとその他諸々。以上の罪状から被告人は極☆刑でGE☆SUなwww」

「ふざくんない!!」

「こんな横暴な話があつていいものか！」

「『待った!』日本の法律では、故意のない罪は罰せられない!」

「『意義あり!』『知らないという罪』もある!」

そこに続くのは知りすぎる罠だ。知らなくてもいいことだつてある。

「判決を言い渡す。被告は有罪!禁固2万年と脳矯正を命ずる!以上閉廷!」

「な、なにをするきさまら!?!」

ドヤドヤとやってきた白衣の人間に取り押さえられ、ストレッチャーに乗せられる。

「おい!こんなのないぞ!横暴だ!反モラルだ!」

ストレッチャーに手足をベルトで固定され、身動きは取れなくなった。動かせるのは首から上だけだ。

そのまま、さつき来た廊下を通つて連れていかれる。シンジの目の前を、心許ない明かりがいくつも通過していく。

「離せ!自由にしろ!」

もがいても叫んでも、周りの人間は眉一つ動かさない。それどころか呼吸をしているようにすら見えない。ひたすら不気味だ。

やがていくつつかの扉をくぐり、エレベーターで地下へと潜つて行きついた先は、

「えっ……?!」

見れば壁は赤黒く染まっております、揺れる照明にちらちらと照らされている。その天井

裏からは、なにか黒い影がこつちを覗いている。耳をすませば、足音や車輪の音に混じって、不穏で形容しがたい悲鳴や金属音がする。血や腐敗臭とも違う生臭さが鼻をくすぐる。

「……。」

そこまで来ると、シンジも言葉を失った。異常だ、この状況自体が異常だが、それ以上はこの空間を信じられないでいた。まるで現実感が無い、異世界にでも落ちたような不条理さ。

廊下はまだまだ続く。シンジはもはや達観したように落ち着きを取り戻した。しかしその冷静さも、次の扉をくぐった先で早々に打ち碎かれることとなる。

「あれは……アイラ!?!」

アイラの、服だ。白いワンピースが黒焦げて落ちている。その周りには、ビルの破片や壊れた車の残骸がぶすぶすと煙を上げて燻っている。そんな惨劇の一場面を切り取った、ジオラマのような光景が眼に入った。

「アイラ……アイラはどこに……。」

そういうえば、今は自分しかいないが、仲間たちはどこへ?というか、なんで今はこちらにいるんだ?そんな考えも及ばなくなるほど、目の前のものに衝撃を受ける。

「タワーが……街が!」

黒く禍々しく変貌した東京タワーがそびえ立ち、街は瓦礫となっている。まるで、あのシャドウマンの時のような……。

「あつ……ああ!？」

次に見えたのは、道端に落ちた子供の靴の片方。けどシンジには、とても見覚えのあるものだった。

「ミカ……ミカああああああ!!」

ミカの靴。あの時落つこととしていったミカの靴だ。シンジのトラウマ。

「いやああああああ!!ミカああああああ!!」

トラウマを呼び起こされ、我を忘れて叫ぶ。そして運び込まれたの手術室。すでに術式の準備は整っているようだ。ぶつとい注射針がシンジの額に迫る。

「ああああああああ!!」

ぶすつと、額に孔が開くのを感じるが、不思議と痛みはなかった。その代わり、ジリリリリと脳内に警告音のようなものが響き、そこで意識はぶつぷりと途絶えた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

ジリリリリリリ!!

「ん……んっ……んんう……」

布団の中から手探りで目覚ましを止める。目を開ければ見知らぬ天井で、窓の外には

青空が広がっている。

「あ……そうか。もう引越してきたんだっけ。」

1LDKの部屋の中には自分一人。ベッドやイスなどの最小限の家具と、未開封のダンボールがいくつも積まれている。

そうだ、この春から東京の大学に通うため、一人暮らしを始めたんだった。家具家電は備え付け、駅まで数分の好立地。これから始まる新年度に不安半分、好奇心半分に心を弾ませる。

「いつてきまーす。」

いそいそと支度を済ませ、家を出る。お出かけは、一声かけて、鍵かけて。家に誰もいなくても、声は出そう。

ともあれ、今は大学の講義に集中しよう。高校の時と違って、講義室は広く、席も自由だ。皆それぞれもう友達を見つけたのか、それとも元から友達だったのか固まって席についている。

シンジはどうか？何も言うまい。

「あー、一人で食べる昼飯はおいしいなー。」

食堂は学生以外に一般の人でも利用できるのだからかなり混んでいる。友達連れだと席を複数確保しなければならないので、1人でいるのは気軽だ。



さて、今日の講義はもう終わった。東京の街をめぐってみるのもいいだろう。

「渋谷に着いたぞ。」

勿論、一人で。一人で渋谷って相当難易度高いと思うけど。

名所めぐり。まずはハチ公像から始まり、スクランブル交差点や109を眺めていく。平日でも人は多い。

街ゆく人は、列を作って目を伏せて歩く。人はたくさんいても、都会とは孤独な世界だ。おのぼりさんのシンジには少し抵抗感がある。それもじきに染まっていつて気にならなくなるだろうが。

しかしこんな若者っぽい街はシンジには少し合わなかった。今度は巢鴨にでも行こう。

「あれ・・・あれ・・・おかしいな？早起きしたせいかな？」

そんなことを考えていると、なんだか泣けてきた。理由はよくわかんないけど目頭が熱くなってきた。

故郷の友達に会いたいなあ・・・早くもホームシックだ。

「あの・・・大丈夫ですか？」

「え？」

気が付けば、知らない女の子に声を掛けられていた。目つきが悪い、というか眠そう

な眼の大人しい子だ。

「いや・・・大丈夫です。なんか、ホームシックみたいで。」

「春から東京で通うようになったとか、ですか?」

「そう、そしたらなんか、この都会の空気感に押されちゃって・・・。」

「そうなんですか、ボクもたまにはこう言うところに来てみようかと思っただけ、  
なんだか馴染めなくって。」

「ちよつと似てますね、僕たち。」

「そうですね・・・。」

波長が合ったのか、少し気が和らいだ。癒しのオーラでも出てるんだろうか、彼女は。

「じゃあ、一緒にお茶でもしませんか?」

「ナンパされた・・・生まれて初めて・・・。」

「あー、そうじゃなくって・・・せつかくだから、友達が欲しいなって思って・・・  
ダメでしたか?」

「ダメ・・・じゃあないけど、名前も知らない人にはついてっちゃダメだってお爺ちや  
んが言ってたから。」

「そうか、自己紹介もしてなかったね。僕は濱堀シンジ。あなたは?」

「ボクは・・・。」

と、その時。ハチ公像のところに着かれていた空き缶が地面に落ちた。風が吹いたわけではなく、すぐにその異変に誰もが気づいた。

「地震?！」

「結構強い!」

ただの地震とは違う。突然強烈な縦揺れが襲ってきた。すぐさまハトが一斉に逃げるように飛び立つ。

そして、道路を盛り上げ、砕きながら元凶が姿を見せた。

「怪獣だ!」

鼻先から歪んだツノを生やした、山のような大きさの怪獣が出現する。その口に地下鉄を咥え、それを乱棒に放り投げて捨てると、自分の存在を誇示するように大きく吠えた。

『ヴァオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

それは現実にいるどの動物と似ても似つかない異音、なにかの爆発音のようだった。ともかく、その合図を皮切りに一斉に人々は逃げだした。

「はやく逃げましょう!」

「うん・・・あつ!」

「うえええええん!おかあさああああん!!」

逃げ遅れている子供がいるのを見つけてしまった。脳は今すぐにでもこの場から逃げ出したがっていたが、足は勝手に動いていた。

「大丈夫？お母さんいっしょよ？」

「濱堀さん、あぶないよ！」

「うおおお!!」

シンジと子供の上に瓦礫が降つてきて彼女は警告する。シンジは思わず子供を彼女の方へと突き飛ばして避難させるが、その間を瓦礫に隔てられる。

「濱堀さん大丈夫ですか！」

「・・・大丈夫！なんとか・・・子供は？」

「大丈夫です！今そつちに行きます！」

「ダメだ！その子連れて早く逃げて！僕の事はいいから！」

「けど・・・！」

「いいから行け！僕も後から行く！」

「再会出来たら、今度こそお茶しに行こう。名前も教えて、な？」

「・・・わかった。絶対だからね！」

残念なことに、その約束は果たせそうにない。瓦礫に足を潰されて、動くことすらできない。遠目に見えるあの怪獣は、だんだんとこちらへ向かってきているようだった。



「はい。砂糖3つでしたっけ？」

「ミルクもな。」

自分のとミオさんの愛用のマグに注いで、砂糖とミルクを加えて。それから軽いお菓子も。

「おまたせー。」

「うん、ありがとう。」

入れ替わりに、今度はシンジが仕事を始めて、ミオさんは休憩に入る。せつせと仕事を片付けるシンジの背中を見つめながら、ミオさんはコーヒーを啜っている。

「な、なんすか？なんか変ですかい？」

「いや、なんでもないよ。」

あんまり見られてちゃ頬つぺた赤くなりますよ。無視して作業を黙々と続けることとする。

数時間後、辺りも暗くなり始めた頃。

「ふう〜、終わり。」

「お疲れ様。もう夕飯の時間だし、なにか奢ろう。」

「いいんですか？」

「ああ、なんでも食べたいものと言ってみな。」

「じゃあ・・・牛丼。」

「ははは、随分私の財布も安くみられたものだな・・・。」

「牛丼が好きなんです。」

そうはいいいつつ、ミオさんもいそいそと出かける準備をしている。大体シンジが外食をするときは牛丼と決まっているからだ。

「所長がいつつもすももづけ食べてるのと要は一緒。」

「すももづけのどこがいけない？ 駄菓子屋さんではお高くてお上品な駄菓子だぞ？」

「別にいけないとは言ってませんよ。」

今も事務所のスペースを占領しているのがすももづけの山だ。たしかにおいしいが、あんまりたくさん食べていると舌が麻痺しそうだ。

「その点牛丼は、様々なサイドメニューと合わせて様々な味や食感も楽しめるんですよ？ しかも早くて安くてうまい。」

「卵とみそ汁もつけてな。」

牛丼一筋300年♪そんな間抜けな歌が聞こえてくる店内でもぐもぐと食べる。牛丼屋の店内は、U字テーブル越しの客同士でいつ喧嘩がぼ発してもおかしくない雰囲気だとか聞いたことがあったけれど、別にそんなことは一切ない。

「いっつそさん。」

「ごちそうさまー。」

パツと食つてパツと出る。ファーストフード店に長居は無用だ。

「さあて、もう少し付き合つてくれるかな？ 今日終わらせられるものは今日で終わらせておきたい。」

「いいですよ、残業代出るなら。」

「さっきのが残業代の代わりだ。」

「ならもつと高いところによればよかつたかな……。」

「選んだのは君だろう？」

今日できることを今日することには賛成だ。僕とミオさんは何かと波長が合う。僕が今のこの仕事についてから、常々思っていることだ。

今のこの、天城ミオの助手としての生活にも、とても満足している。

けど最近、何か胸に引っかかるものがある。

「なにをそんなに悩んでいるんだ？」

「え？」

「なにをそんなに悩んでいるんだ、と言つたんだ。」

「なにを、つて？」

「仕事内容に何か不満があるとか、給料の支払いに不服があるとか？」



「そんなことは全然。」

「じゃあ、他にはあるのか？」

「ん……。」

そのことはミオさんにはお見通しだったようだ。今日片づけておきたい仕事って、このことかな？

「すごく、バカげた話なんですよ？」

「賢い君が考えていることは、バカじゃないことつてことだ。聞かせてくれ。」

「そうですか？」

「最近、夢を見るんです。」

「夢？ 将来の事か？」

「そつちじゃなくて、目を閉じてみる夢です。」

「ああ、予知夢というやつかい？」

「予知夢、とも違うんです。別の人生を体験する、ような夢なんです。」

「別の人生？」

ブルーコメット

「僕が、こここじやなくてGIRLSで働いてる夢です。色んな怪獣娘さんと出会ったり、仲良くなったたりするような、今とは違う人生……あ、別に今が楽しくないとか、そういうわけじゃないですよ？」

「そうだと嬉しいよ。それで?」

「それで思ってたんです。平行世界マルチバースの観点から言えば、その夢の中で見た人生も、平行世界の自分としてありえると思うんです。けどひよつとしたら、『今の僕は夢の中にいる』んじゃないかとも思ったりして……」

『胡蝶の夢』というやつか。」

「そう、それに、もしも違う人生だったら、出会えたりした人や経験もあるのかな、とも思ったら、世界の広さを感じてしまったり……あ、再三ですが、別に今の人生が楽しくないとかそういうわけでは。」

「わかっている、それはわかっているさ。けれど、『そっちの世界』についての未練や興味あるっていうことだろう?」

「そう……ですね。」

「成程なあ……。」

普通の人なら『何言ってるんだお前』と流されそうな与太話にも、ミオさんは真摯に向き合ってくれる。そういう人だから、この人についていきたいと思えたんだが。

「では逆に考えてみよう。そっちの人生でも、君は私と会えただろうか?」

「会えは……したと思いますよ。所属はG I R L Sですから。」

「では、こういうのは……どうかな?」

「えつ……ちよつ……」

突然、ミオさんは腕をシンジの首筋に伸ばして、抱き寄せてきた。

「この感触が、暖かさが、泡沫うたかたの夢幻だと思えるかな？」

「いえ……そんな……」

「私もそうであつて欲しいと思う。君の心と体を通して出ているこの力が、本物であつてほしいと願っている。」

「えつと、所長……」

「ミオと、今は呼んでくれ。」

「ミオ……さん……」

「こんなタイミングで、こんな形でしか表現できないが、言わせてくれ。」

「私は、君が好きだ。賢くて、可愛くて、何事にも懸命な君が好きだ。」

「ミオさん……」

シンジは、ギョツと抱き返すことしか出来なかつたが、それだけで十分であつた。

「嬉しいよ……シンジ君……私が君の元を訪れた時、君が私の元に来た時、こうすることを望んでいた……愛しいよ……」

「僕も……ミオさんのこと……」

「うん……ありがとう。」

「さっきの続きですけど。」

「うん？」

「たとえ別の選択や、人生があつたとしても、僕はそれを羨んだりはしてませんよ。」

「それは？」

「今こうしていられることが、とっても幸せですから。」

「そうか……私も幸せだ……」

指と指を絡め合い、ここにある確かな絆を確かめ合う。

「でもやつぱり夢なんじゃないかと思うなあ。」

「なんで？」

「今まさに夢みたいな状況ですから。目覚めたらキツネやタヌキに化かされてるんじゃないかと。」

「むっ、ひどいじゃないか。」

「あいたっ！」



だ。その内装には似つかわしくない渋い湯呑にアツウイ昆布茶を淹れて、窓際の椅子に座って雲を見下ろす。外に広がる雲海は、まるでクツシヨンのように受け止めてくれそうだ。もちろんそんなことをすれば、今度は地面と熱烈なキツスをするはめになるが。

「・・・さて、荷物を用意しておくか。」

本機はただ移動の足として使われて、さつきまでは仮眠をとっていたので、広げるような荷物もない。ただ、手荷物の中に忘れ物が無いかだけは確認しておく。

「えー・・・っと、これはある、これもある・・・あと手帳は・・・あつたあつた。」  
ベッド脇のチェストの上に、手帳がひとつ置いてあつた。留学に旅立つ前、ベムラーさんから貰ったものだ。自分の目で見た物、感じた物をひとつひとつ記していく、日記のようなものだ。手に取って、それまでのことを思い出すようにパラパラとめくつていくと、あるひとつのページに目が留まった。

「こんなの書いたっけ？」

つけられた題は『マルチバースとガリバーについて』。相当疲れていたか、それとも酔っていたのか、線がふにやふにやで読みにくい。到着までの時間、清書がてら読み直してみることにした。

「ガリバー旅行記において、ガリバーは様々な国を旅した。本来それは風刺として書

かれたものであるが、ひよつとするとガリバーは様々な平行世界マルチバースを旅していたのかも  
れない。」

ここまで読んで思い出した。そう、アメリカのGIRLS支部で出会った、大学教授もしている高山博士と話をする機会があった。その時、僕はよく見る不思議な夢について話したんだった。ミカと別れた過去を思い出させる夢や、シャドウマンの出現の予知夢、アイラへの不安から見た悪夢、大事な出来事の前には決まって必ず夢に見ていた。

そのことを高山博士に相談したとき、博士が引き合いに出したのがガリバー旅行記の話だった。ガリバーが様々な国を歩いたように、僕も夢の中で様々な平行世界を体験していたんじゃないか？そういうことらしい。

「それは、平行世界からの『警告』なのかもしれない。今この平和を壊しちゃいけないという危険予知だ。」

「それともう一つ。平行世界の自分自身について。」

僕だけじゃない、他のみんなも含めて、平行世界にもそれらは存在しているはずだ。ある一点の違いだけで、それぞれの人生は違う道をたどっていたことだろう。とすれば疑問が沸く。それらは僕たちと同一の存在であると言えるのだろうか？極めて非常に極端な言い方をすれば、名前が同じで、プロフィールも同じ人間は、果たして同一人物だと言っているのだろうか？

平行世界の内の僕には、いいやつもいればきつと悪いやつもいる。いつか今の僕も、そんな悪い僕に侵食されるんじゃないだろうか？という疑問が沸いた。

「端的に言えば、答えはノーだった。」

高山博士は、グラスを手を持って言った。『このまま手を離せば、このグラスは割れる。』床は固い、プラスチック製でもない限り間違いないと割れるだろうと思った。

『でも、それに意志が働けば？』、床にグラスが落ちるまでに、空いた手でキャッチしてみせる。大切なのは、『変えようとする意志』だ。ターニングポイント変わる点を待つんではなくて、チャンスを自分から作っていくんだ。

では、そうするためにはどうすればいいのか？と問うと、その答えをもう君は出している、と言ってくれた。

「この世界は絶対に滅んだりしない、未来を信じている限り。」

予言はあくまで予言でしかない。それを基に、未来をどういう形にするかは僕たち次第だ。高山博士は、曇りの無い瞳でそう言い切ってくれた。このページはその言葉で締めくくられている。

「いい人、だったな……。」

まだ若いのに、量子力学や物理学の分野において天才的な頭脳を發揮しているそうだ。シンジは知る由もなかったが、今乗っているジェット機や、シンジの家の空飛ぶ車



の基礎を作ったのも高山博士だった。それでいて、お高く留まってはおらず、常に子供のように好奇心を募らせている、夢のある人だった。もう一度会いたいな。

「さて・・・そろそろ時間か。」

機体の高度も大分下がってきているようだった。雲を抜け、眼下には緑が広がって見える。

『本日は、星川航空をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。まもなく着陸いたしますので、ご着席のうえシートベルトをご着用ください。』

アナウンスが流れてきた。いよいよ故郷の地だ。手荷物や備え付けの湯呑などを棚に仕舞って、席に着く。この瞬間が一番緊張するが、パイロットの腕は信用している。この道20年以上のベテランパイロットで、そのお父上も同じ仕事をしていたそうだ。もつとも、お父上の乗機はセスナ機で今はパイロットは引退して、そのころ体験した不思議な出来事を小説にしたためているそうだとか。

「ん・・・ついたか・・・。」

タイヤが滑走路を擦る感覚を感じてから、徐々にスピードが落ちていき、最後には景色も動かなくなつた。どうやら周囲を緑に囲まれた個人用の滑走路らしい。

「長旅お疲れさまです。足元お気をつけてどうぞ。」

「ありがとうございます、素敵なフライトでした。」

素敵なパイロットさんと握手を交わし、タラップを降りる。ちよつと湿っぽい空気が顔にぶつかって鼻をくすぐる。

「シンジ様、お迎えに参りました。」

「おかえり、シンジ君。」

「ただいま、チョーさんにベムラーさんも。」

懐かしい顔がみえた。しよつちゆう連絡は取り合っていたが、こうして直に会えるのとは違う。

「シンジ君、すこし遅しくなつたんじゃないか？体格がこう、がっしりしている。」

「そうですか？結構向こうでも鍛えてたのでそのせいかも。本場のルチャ・リブレも学んできましたよ。」

「ルチャ・リブレはメキシコじゃないかな？」

中南米で盛んに行われているプロレスの形態のひとつ、それがルチャ・リブレだ。軽快に跳びまわるアクロバティックな動きが特徴的だ。すばしっこいシャドウに対しては有効な戦術となりうるし、何より見た目も派手でカッコイイ。

「それに色んなガジェットも作つたし、色んな人と話もしました。」

「肝心のお父さんとは会えなかつたみたいだけど？」

「そうなんですよ！どうやら入れ替わりでフィリピンに行つてみたいで、一体なん

の為にアメリカに行ったのか……。」

「でも、おかげで安心したんじゃないのか？ 会わなくて済んだって。」

「それは、まあ……。」

荷物を車のトランクに詰め終わり、後部座席に座ると、間もなく車はチョーさんの運転で発進した。

「ふわ……ああ。」

「シンジ君、眠そうだな。時差ボケがまだ抜けてないんだろう？」

「仮眠はとったんですけど……途中で目覚めちゃいました。」

「また夢でも見たのかい？」

「いや、ベッドから落ちたみたいです。」

「ああ、その顔の痣はそれだったのか？」

「あざ……。」

「鏡見ろ鏡。」

「え？ うわっ、なんだこれ。」

ミラーで確認すると、シンジの右目の周りには痣が出来ていた。かつこ悪い。

「まあ、その内消えるかな……ふわあ……。」

「少し眠ったらどうだい？ 都心まで少し時間がかかるぞ。」

「そうさせてもらいます……。」

「どれ……。」

ベムラーさんは、ポンポンを膝を叩いてアピールしてきた。

「いいんですか？」

「どうぞどうぞ、減るものでもないし安いものだ。」

「じゃあ、遠慮なく……。」

バイク乗りらしく、引き締まった太腿だ。しかしそこから香るほのかな汗の匂いが、フェロモンとなってトリップさせるのか、シンジはすぐに眠りに落ちた。

「……かわいいな、君は。」

自らの脚に横たわる少年の頬をそつと撫で、腰に据えたバックパックにへと手を伸ばす。

「人の日記を盗み見るように申し訳がないが、そういうものを探るのが探偵という職業だし、それにこれは元々私があげたものだから構わないね？」

答えは聞いてないけど。と心の中で呟いて、そのページを開く。チヨーさんは運転に集中しているし、誰も咎めはしない。

もつとも、これは『仕事』としてではなく『個人的』な調査であるが。

「気に入った相手のことは、なんでも知りたくなる。そうだろう？」

何を言ったところで、当の本人はスウスウと寝息を立てているだけで、聞こえてはいないようだが。

安全運転で2時間はかかる道を、1台の車がゆっくりと進んでいく。『星川航空』の看板を背にして・・・。

## 激ファイト!? シンジVSガッツ星人

「シンちゃん……。」

愛しの幼馴染が旅立ってから数か月経った。その残り香を求めて、毎日のようにシンジの自室にミカはお邪魔している。

「すんすん……はぁ……。」

こうして定期的にシンジ成分を吸収して鋭気を養っている。自分が思っていた以上に、幼馴染に依存していたと思いきらされる。

「よっし……。」

『ゴモたん、またシンジさんの部屋いるの?』

「うん、今日もシンちゃん成分補充完了!」

『そんなことするくらいなら、通話すればいいんじゃないの?』

「それとこれとはちよつと違うんだよ……。」

ロクに通信網の発達していない時代ならともかく、今は人工衛星越しに繋がる時代だ。実際、現状報告がてらシンジからの通信は定期的に行っている。つまり、離れていても顔を合わせる機会はいくらでもあるのだ。

「シンちゃんが無事に帰って来るまで、私はシンちゃんとは連絡とらないって決めたの。」

『本当は、いざ通信しちゃうと気丈に振舞ってるのにボロが出そうだからしたくても出来ないだけじゃないの?』

「ほーほー、アギちゃんは会心のネタが出来たからぜひともみんなに見せたいと、そう言いたいんだね?」

『そうは言っていないけど、どうせいつでもそうさせるつもりでしょ?』

「わかってるならいいんだよ。」

「そ、わかってるならいいんだよ。私は大丈夫だよ!それよりも、シンちゃんの方は何か言ってた?今すぐゴモたん会いたいよー!とかミカがいなくて寂しいよー!とか?」

『ううん、淡々とその日あったことかを報告してくるだけ。録画映像なんじゃないかって疑うぐらいシンプルだよ。』

「そっか・・・でも、別に変わったところとかはないんだよね?怪我してたりとか。」

『うーん、絆創膏とかは貼ってたよ。特訓だかなんだかで。けど病気とかはしてないと思う。』

「そっか・・・ならいいんだけど。そろそろそっち戻るね。」

『うん、今日もまたイベント頑張つてね?』

「もつちろん! アギちゃん前座の一発芸考えといてね!」

『残念、今日は僕キングジョーさんのイベントに行くんだ。』

プツツ、と通信を切つて立ち上がる。ここでジーツとしててもドーにもならない。シンちゃんが帰ってくるまで、ボクはボクの役割を全うするよ。

「じゃあね、行つてくるね。」

無人の部屋にそう言い残して、ミカは小走りで会場へと向かう。

「うーん……。」

「どしたのアギちゃん? 今日のお昼はファミレスにするか牛丼にするか悩んでるの?」

「そんなんじゃないよ、シンジさんのこと。」

「病気とかはしてないんですよね?」

「病気じゃないんでだけど……ホームシックにはなってるかも。」

シンジは心情が顔に出るタイプだった。そうでなくとも、鋭いアギにはまるつとお見通しだが。





な歌が聞こえる店内で、久しぶりの大盛り・つゆだくに舌鼓を打っている。

「なんせ全日本牛丼愛好会の会員ですから。」

「そんなのあるのか？」

「レツドさんとミクさんも入ってますよ。」

「そうなのか・・・。」

「向こうではスライス肉の汁かけライスなんて食べられませんでしたから。」

別段食べ物に困っていたわけではなかったが、週に一度はこの味を食べなければ生きていられない体になっていたらしい。

アメリカにも牛丼屋はあるにはあったが、やはり味付けは日本のものに敵わない。日本人の舌だからかな。

「すいませーん、追加注文でカルビ丼お願いしまーす。」

「まだ食べるのか？」

「なんかやけにお腹すいちゃって。」

「そうは言うがもう5杯目だろう？最初つからメガ盛りを頼めばよかつたんじゃないか？」

「ネギだくやつゆ切りも食べたくなって。おっキタキタ。」

ちよつとリツチに、カルビ丼。カルビ丼の力の字はかつかつかく♪と店内BGMが変

わった。

「うん、これもイイな。」

「本当によく食べるもんだな。」

待ちぼうけをくらうベムラーさんも、何か追加注文しようかと思つてメニューを開いたその時、外で異変が起こる。

「おっ?爆発音。なんか懐かしいこの感覚。」

「いくらなんでも平和ボケしすぎじゃないか?」

外を見れば、ビルの向こう側で煙が上がっている。

「またシャドウかな?向こうでは全然見なかったけど。」

「すぐGIRLSが来ると思うが、我々も急ごう!」

「よーっし、修行した成果をみせてやるぞ!」

「うむ、その意気だ!」

「あと3杯食べたら。」

「もういいだろ!」

首根っこを掴まれ、チョーさんの待機する車に押し込まれると、間もなく車は発進した。

「・・・お金!」



「光線銃ならもう持つてるだろう?」

「向こうで本物の拳銃を撃つ機会があつて、リボルバーが気に入つたんです。」

これは実弾ではなくショックガン的一种で、弾薬の代わりに電池を6発弾倉に込める。

「よつしと・・・さあいこう!」

さつそくこちらの存在に気づいたミストに取り憑かれた人々が向かってくる。シンジは耳の後ろに人差し指をやると、そこからメガネのつるが伸びて、目の前に青いレンズが浮かび上がる。

「新しいメガネも作つたのか?」

「ひとついりますか?」

「生憎だが目はいい方だよ。」

「残念、ベムラーさんメガネ似合いそうなの、につ!」

向かつてくる人の脚を素早く撃ちぬく。3発撃つて3人倒れた。まあ及第点だろう。

「いい腕だな。」

「目がよくなつたので。」

S・G・Mにも改良を加えた。通信機能などはないが、周囲には見えないレーザーサイトで射撃を補佐してくれている。

「さて、銃はこんなもんでいいか。次は格闘だ！」

バツ！と上着を脱ぎすけると、こちらも新調したS・R・Iスーツを見せつける。上半身が青で下半身が赤、両腕にはヒレのような突起があり、これが風を斬る。さらに左胸に外付けのペースメーカーがついている。逆三角形型の青いランプが、生命維持装置のエネルギー残量を示す。腰の後ろにはバツクパックが巻かれている。これも使いたいものを瞬時に取り出してくれるスグレモノだ。

「とおらっ！」

まず一人、向かってくる相手にフライングニードロップを浴びせて沈める。続けざまに、右から殴ってくる腕を捕まえてロツクし、反対側から向かってくる相手に投げつける。

「よいそっ！」

殴りかかってくる相手をかがんで躲し、お返しに足払いで転ばせる。今度は二人続けてやってきたので、一人目を跳び箱のように飛び越え、そのままドロップキックで後ろのやつを沈める。

「ちよいさっ！」

転がりながら近づいて、足払いで跳び箱を倒し、最後の一人は腕のフリップでサマーソルトキックを放ち、顎を蹴り上げながらで起き上がる。

「おわりっ!」

「7点。」

「低くない?」

「ちよつとやりすぎじゃないか?ゴモラだつてもうちよつと手加減すると思うぞ。」

「ぐぬつ: : たしかに、サマーソルトはちよつとやりすぎだったかも?ごめんなさい。」

「気絶している相手に謝つてもしょうがないが。やれやれとベムラーさんは首を振る。」

「: : : 遅かつたか。」

「ん?あなたは: : : 。」

「腰まで伸びた長い髪に、赤いマフラー。キュロツトのようなミニスカートに縞々の夕

イツ。そしてびよこんと跳ねたアホ毛がチャームポイント。」

「ガッツ星人さん?おひさしぶりです。」

「: : : 。」

「あいさつしたのにあいさつが返つてこない。それどころか、怪訝そうにこちらの様子を窺つてきている。」

「あの、僕です、濱堀シンジ。アメリカ留学から今日帰つてきたんです。覚えてないですか?」

「: : : あなた、」

「おーい！」

やつと口をきいてくれた、と思ったところで誰かがやって来た。ただし誰か、という表現は適切ではない。よく知っている声だ。

「ガッツさん！まーたひとりやってんのー？」

「一体誰に似たのかしらね？」

「もう、いいじゃんそのことは！」

ドヤドヤとやってきた一団を見て、シンジも声を上げた。

「みんな！」

「おー！シンジさん！シンジさんじゃん！」

「帰ってきたんですね！」

「うん、さつきね。そしたらシャドウが出てきて。」

「おー！なんかシンジさんおつきくなってんじゃん！腕力チカチじゃん！」

本当はGIRLS本部で再会する予定だったけど、こんなところで会うとは。懐かしいみんなの姿を見まわしてみる。ミクさん、ウインさん、アギさん、レッドさん、エレキングさん、それにガッツさん・・・ん？

「シンちゃあああああああん!!!」

一足遅れてミカもやってきた、が、シンジの興味はそっちにはない。





スーツケースに詰め込んだみんなへのお土産をそれぞれ配る。特にお世話になって  
いる皆には、それぞれ趣向を凝らしたものを選んだつもりだ。

「おう！カーボーイハット！ウエスタウン！」

「ミクさんに似合うと思って。」

「コーヒー豆……。」

「旅立つ前、梅昆布茶をアギさんくれて本当助かったよ。」

「メイプルシロップ？」

「カナダにも行ったので。パンケーキ好きでしょうエレキングさん？」

「あつ、しまった。」

「どしたの？」

「ガッツ星人さんの分、増えてるとは思わなかったら……。」

「あー、別に私の分は気にしてくれなくていいよ？」

「え、でも……。」

「いいからいいから、それ、あの子にあげて？」

ガッツさんに渡すつもりだった小箱を、壁にもたれかかりながらこちらを見ていたも  
う一人のガッツさんのところへ持って行く。

「ガッツさん、これよかったですら……。」

「フンッ。」

ぺいっ、と差し出された小箱は片手で弾かれて飛んでいく。

「ちよつとマコ!」

「ええ・・・。」

飛んでいった箱をガッツさんが受け止め、もう一人のガッツさんに詰め寄る。

「ねえ、いくらなんでもこれはないんじゃない?何が不服なのよ?」

「あなたには関係ないことよ。」

「なにい?」

「2人とも落ち着いて・・・。」

「どうどうどう。」

喧嘩をはじめめる2人に、慌ててアギさんとミカが仲裁に入る。

「あなた、今すぐ私と戦いなさい。」

「はい?」

「まーまーマコちゃん、シンちゃん帰って来たばっかで疲れてるだろうから、ファイトな

らまた今度でね?」

「ダメ、今すぐよ!」

「ちよつとマコ、いい加減にしなさいよ!」

「大丈夫、僕なら大丈夫ですから！今すぐ行きますって！」

いてもたってもいられず、シンジは声を上げる。羽交い絞めにされていたもう一人のガッツさん・・・ややこしいのでマコさんということにしておくが、マコさんは絞めを振りほどいて、シンジに告げる。

「逃げたりしたら、承知しないからね？」

「・・・。」

それだけ言うと、マコさんは先にサロンを後にした。それを追うようにシンジも歩き出す。その手をミカに掴まれる。

「シンちゃん、疲れてないの？私が代わりに行こうか？」

「平気だよ、それにそんなことしたら、逃げたことになるんじゃない？」

「ごめんね、シンジ。あの子気難し屋なんだけど、本当は悪い子じゃないんだ。」

「わかってます。感じるものはガッツさんと同じものですから。」

「全く誰に似たのかしらね。」

「もー、言わないでよ！」

そういつて再び歩き出すと、自然とミカの手も離れていく。

「シンちゃん・・・なんか変わったね。」

「変わったって？」



まあ確かに、シャドウミストの取り憑かれた人間が相手じゃあ、シンジの力試しには力不足だった。なお『役不足』という表現は、力に対して役目が軽すぎることを言う。よつて、こういう場面では力不足という言葉が正しい。

「それにしても、随分ごてごてした格好ね。そんな重装備で山登りにでも行くの？」

「なーに、ほんのピクニツクさ。バおッ井ク当バ箱ック背負つてね。」

カーン！ 試合開始だ。合図とともにガッツさんはゆつくり距離を詰めながら、光弾を発射して牽制する。対してシンジは落ち着いてS・G・Mを起動してから左手でスパーガンRを構え、ジグザグに動いていく。ガッツさんの指先をよく見て、どつちを狙ってくるかの確に判断して躲す。

「動きは格段に良くなつてるな。」

「シンちゃん基礎を固めるのは得意だからねー。」

ガッツさんもあくまで牽制とはいえ当たるようには撃っているはずだったが、一向に当たらないことで痺れを切らしたのか足を速くして近接戦闘に持ちこみにかかる。対するシンジは、向かってくるガッツさんに冷静に銃口を向けてトリガーを二回引いて、ガッツさんは二回だけ拳を振るい、足を止めない。

「はあっ！」

「ふっ！」

ガッツさんの右ストレートをシンジは右手でいなしつつ、今度は至近距離から発砲する。弾丸を最低限の動きで躲したガッツさんは、その流れでスピッキクを放つ。

「ぬえいつー！」

「ちっ。」

上半身を後ろへ大きく反らせ、リンボードダンスのような姿勢でキックを躲すと、フリーな状態のガッツさんの背中へ弾丸を叩き込む。

「ふんっ。」

「ぐっー！」

ガッツさんはさらに姿勢を低くし、コンパスのようにその場でターンして足払いを放つ。よけきれずに足を掬われたシンジは背中を地面に叩きつけられる。その腹に目がけて断頭台のような脚をガッツさんは振り下ろす。

「ちいつー！」

「ふん。」

間一髪、横に転がってクリーンヒットを免れる。シンジは掌でスーパードガンRをクルリと一回転させ、手首の部分に留める。これで互いに素手の状態だ。

「はあっー！」

「はっー！」

そこからは格闘技の応酬が始まった。ガッツさんは目にもとまらぬ拳のラツシユを放ち、シンジはそれを躲ききれずに何発かもらう。しかしただ負けているシンジでもなく、一瞬の隙をついて腕をとり、脇固めをしかける。

「なにっ!?!」

「(っ)つちよ。」

しかし、腕を捕えたはずのガッツさんが忽然と姿を消し、シンジの真後ろに立っている。ガッツ星人もゼットンと同じく、瞬間移動の持ち主なのだ。悠長に向き合っているは相手の思う壺だと直感したシンジは、手首に固定していたスーパーガンRを持ち直し、声のした方向に早撃ちを決める。

「遅い。」

「ぐっ!」

しかしシンジの反応するより一步速く、再び瞬間移動シンジの背後の背後・・・つまり真正面をとって逆に光弾をぶつける。背中を焼かれて転がるシンジのその先に、再び瞬間移動して頭を踏みつける。

「あちゃー、完全にやられちゃってるよ。」

「あれ、大丈夫なんですか?」

「あれくらいで参るやつじゃないぜ、以前からな。」



前にマコさんに同じようなことをされたことのあるアギさんとしては見ていて辛い物もある。だがやられているということは、同時にチャンスもそばにあるということでもある。

「やられてたまるかつ!ドラゴンスクリュー!」

「くっ!」

隙をついて脚を掴み、ガッツさんを一回転させて今度はシンジが上に立つ。

「スピニング・・・くそっ!」

「甘いよ。」

「そこだあつ!」

「なにっ!」

シンジは得意のスピニングトーホールドを極めようとするが、瞬間移動で逃げられるが、それも承知の上のこと。今までのパターンから予測して、背後を何も見ずに銃弾を放ち、それは見事当たった。

「おお、ちよつとビックリだね。」

「ちよつとガッツの方が慢心してたな。」

「ガッツ気を付けないと。」

「いや私はあんなハマしないから。」

手ごたえを感じたシンジは、すぐさま右腿のホルスターからライザーショットも抜いてさらに追撃を加える。

「くっ、これは！」

「専売特許を一足お先に奪っちゃったかな？ バインド光線だ！」

ガッツ星人の得意武器、ビームバインドを模した拘束光線でガッツさんの動きを封じ、その隙にシンジは素早くスーパーガンRのバッテリーをリロードし、ライザーショットのカートリッジも交換する。

「このっ！」

「喰らえ！」

拘束を解いたガッツさんに、両手の銃でさらに畳みかける。左手からはショック光線を、右手からは破壊光弾を放ちつつ、一歩ずつ歩みを進める。

「ぐうっ！ 動こうとすれば……」

「そこを狙う。」

避けようと脚を動かそうとすれば脚を撃ち、反撃しようとして手をかざせば手を撃ちぬく。動きを封殺しながら距離を詰めて、今度はシンジがスピンキックでガッツさんの側頭部を蹴り飛ばし、倒れたガッツさんにさらに銃撃を加える。

「えげつないわね……」

「ホントにあれシンジさんなのかな？」

「人は変わる・・・けど。」

(シンちゃん・・・。)

観客席にいる者は皆いい顔はしていなかった。あるものは不安の表情を浮かべ、あるものは眉間に皺を寄せる。

「今までのアイツは・・・。」

「レツドキングさん？」

「普段からしてそうだったけど。アイツ、スパーリングの時も相手のことを気遣って、無意識的に手を抜いてたんだよな・・・。」

「今は完全に相手を倒すつもりでやっている・・・ということ？」

「それが果たして成長だと言えるのか？」

観客席の不安な空気をよそに、リングでは凄惨な戦いが続けられていた。スーパーガ  
ンRの弾が切れれば、ライザーショットを両手で構えて狙う。ガッツさんはひたすら防  
御して耐えるが、その間にシンジはゆっくり近づいてわき腹にサッカーボールキックを  
入れる。

「ぐあっ!!」

「終わりだ。」

最後の引き金を引く。しかしその弾丸が貫いたのは虚影。手ごたえの無い幻だった。

「分身か！」

「正解！」

カーン！と振り返って見たのは2人のガッツさん。すかさず撃てばそれらも幻、危うい雰囲気を感じて岩陰に身を翻し、再びスーパーガンRをリロードする。

「遅い！」

「おっと！」

身を隠していた岩が破裂する。一目見ただけで分身は3人、その3人が自分一人を狙って光線を撃つてくるのだからさあ大変。その弾幕をかいくぐる事は、到底不可能な話だったろう。それが以前のシンジであつたのなら。

「はあっ!!」

走りながら岩を蹴って三角跳びをし、空中で捻りを加えて見事に光線を避け切り、その内角に入る。着地の瞬間に一発、分身の一体に撃ち込むと霧散する。

「とどめ！」

両手の銃がそれぞれの標的を捉え、銃口が火を吹いて分身は消える。3体は全て分身だった。本物はどこに？

「ハッちだろ！」

「なに!？」

また後ろ、と思わせて実は斜め上。しかしその奇襲すらもシンジは見抜いて撃ちぬく。落ちてきたガッツさんに、再び斉射攻撃を加える。

「オラオラオラ、どうしやがった?強気だったのは口だけだったのかな?」

「くっ……舐めんじゃ……ないわよ!!」

ブワツ!とオーラを放ってシンジを怯ませる。シンジが一瞬目を逸らしたその間に、ガッツさんは強烈なボディブローを叩き込んでいた。

「かっ……あっ……」

「調子乗ってんじゃ……ないわよ!!」

血気迫るガッツさんから黒いオーラが漂っているようにも見えた、が、それは見間違いだ。ガッツさんはかつてシャドウミストに侵され、怪獣娘たちを襲っていたこともあった。だがそれも、GIRLSの協力によって払いのけられた。では、現に今アリーナで際立つ存在感を放っている違和感の正体とは?

「あれって……シャドウミスト?!」

「シンちゃんの体から出ているの?!」

「シンジはシャドウミストに憑かれていたのか!？」

そうなのだ。人の心の孔に入り込み、凶暴化させるシャドウミストが、いつの間にか

シンジに取り憑いていた。本人も全く無自覚のまま、今まで過ごしていたのだった。

「シャドウミストに侵された人と戦った時、やたら好戦的になっていたのも、そのせいだったのか……。」

「ベムラーさん、その時見てたの？」

「ああ、だがちよつと留学で揉まれて変わったんだと思っていたが、違ったようだな。これでは探偵の名折れだな。」

「じゃあじゃあ、今すぐガッツさんを助けないと！」

「みんな、待つて。」

「ガッツ……どうして？」

「あの子を、信じてあげて。お願い。」

ミコにとって、今戦っているマコは自分の半身であり、かつてはシャドウミストに負けた自分自身でもある。とすれば、今度はマコがシャドウミストを倒す番であり、ミコはそれを見届けるべきだ。

「シンちゃん……。」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

「こんのつ、やかましいっての！」

シャドウミストの影響が顕在化し、力も正確さもアップしたシンジの攻撃を危なげな

くガッツさんはいなしていく。シャドウミストは、シンジの心に掛かっていたリミッターを外し、一切の妥協を許さぬ冷酷な戦闘マシーンへと作り替えた。

「あの時の私に……私たちに足りなかったもの……。それが今はある！」

ガッツさんは飛び退いて、再び分身を作り、シンジは手数で対抗する。膨れ上がったシンジの闘気が、S・G・Mのゴーグルを妖しく羽ばたく蝶のようなバイザーに変える。その眼的的確に攻撃の予測地点や本体の位置を読み取り、怪獣娘にも引けを取らぬスベックをもたらず。

（射撃戦にかなり慣れてきている。ここは接近戦で仕留める！）

分身を見ればさかさず射抜きに行く。逆に言えば、分身に対しては否が応にも反応してしまっている。それに気づいたガッツさんは、分身を囷に距離を詰めに行く。結果は成功、銃の役に立たない至近距離にまで近づけた。

「ここからは！」

「グオツ！」

再び拳の応酬。今度は先ほどとは違い、シンジも的確にガッツさんのラツシュを捌いている。お返しにとシンジはキックを放ち、それをいなしたガッツさんの手刀が入る。が、それをシンジは逆に吹き飛ばすことよって衝撃を逃がす。

再び少しの距離を置いたその刹那、バックバックからアタッチメントを取り出して

スーパーガンRの銃口に取り付け、ガッツさん目がけて撃った。すかさず光弾で撃ち落とすが、その爆発と同時に厚い煙幕が発生した。

「くっ……めくらましかっ！」

毒ガスの類ではないが、視界を遮られる。神経を研ぎ澄まし、僅かな痕跡をも見逃さないよう耳を尖らせる。

「！そっちか！」

そこへ破壊光線が飛んでくる。だが特に苦も無く躲して、逆に撃ち返すと、それは爆発して上へと飛んでいく。

仕留めた！と心の中で思ったが、目に入ってきたのはオートで発射を続けるライザーシヨットののみ。

「囷か！」

「ドリアア！」

気づいた時には遅かった。ガッツさんのむいている方向とは真逆、その上方からシンジのフライングニードロップが迫る。シャドウミストによって強化された、必殺レベルの一撃。

誰もがそれを躲せないと思った。ただ一人を除いて。

「ガッツ！」



「えっ……。」

一番に驚いたのはガッツさんだった。突然シンジの体が吹き飛んだことではない。自分の腕が無意識のうちに、死角のシンジの方に向けられ、光弾を発射していたことだった。

「今よ!!」

「あ、ああ! 『ビームバインド』!!」

ミコの声に我を取り戻したマコは、得意の念導光線を放ち、シンジを固める。

「これで、トドメ!」

「グオオオオオオ!!」

そして腕をクロスさせ、発生させた十字架にシンジの体を捕らえる。放たれたエネルギーに焼かれ、シンジの体からシャドウミストが抜けていく。

「……終わった。」

「……うう……。」

十字架を解除し、シンジの体は自由を取り戻すが、そのまま気絶しまった。だがこれでもう安心だ。観客席にいたみんなが寄ってくる。

「あいつ……。」

マコには見えた。ミコがウインクをしているのを。あの時、完全に虚をつかれたマコ

の体を動かしていたのは、観客席からシンジの姿が見えていたミコだった。それがその場で出来た能力なのか、はたまた分身として生まれたマコが持った性質なのか、それはわからない。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「うつ．．．ん．．．なんか、哀しい夢を見ていたような．．．。」

「シンちゃん！」

「大丈夫ですかシンジさん?!」

「あつ．．．平気だよ。全然平気。」

しばらくして、シンジも意識を取り戻した。戦っていた最中のことはよく思い出せない。ただぼんやりと、自分の意識が自分の物でなくなるような感覚はあった。

「ガッツさん、気づいてたんですか?」

「別に。ただ気にくわないから叩きのめしてあげただけよ。」

「もうマコ、そんな言い方ないんじゃないの?」

「いえ、ありがとうございます。おかげで目が覚めました。」

「ふん。」

立ち上がってお礼を言うシンジに、マコはそっぽを向くが、少し満足そうにしているのがミコには見えた。そのことに気づいて慌てて表情を元のむすつとした顔にもどし

たが。

「でもいつの間にシャドウミストなんか憑りつかれてたんだ？そんな自覚あったか？」

「いえ……でも帰りの飛行機の間、よくない夢を見てたのは覚えてます。それがどんなのだったか思い出せないですけど。」

「よくない夢？」

「例えるなら……自分が自分じゃないみたい。その時にはもう憑かれてたのか、憑かれてたから見たのか。」

「自分が自分じゃないって？」

「……わかんないや。今自分が本当に起きてるのか、それとも夢を見てるのか。」

「シンちゃん……。」

ぎゅっと、ミカが抱き着いてきた。突然の事に皆があつとするが、シンジにはその感覚をじんわりと嘸み締められた。

「これでも、夢だっと思っ？」

「いいや、夢じゃない。幻覚でも意識だけの存在でもない。こうやってミカを抱くことが出来るんだから。」

「シンちゃんだって、私が抱けるからうれしいのよ……。」

「・・・もういいだろ！」

「熱々なのはいいけれど、それはもう他所でやってちょうだい。」

「あ、はい。ミカ？放してほしいんだけど？」

「シンちゃん・・・シンちゃああああああああん!!!」

「あ、ああ、あああああああ!!!やめ、やめてえええええええ!!!」

ベキベキと背骨が押し折れる音がする。正直戦いで受けたダメージよりも大きい。

「しぬっ。」

「大丈夫？」

「へいき。」

ひとまず、一段落ついた。

「そうだ、シンジ。このお土産なんだけど。」

「あつ、そういうええば忘れてました。」

「自分の用意したものなんだから忘れちゃダメでしょ。これつてさ、イヤリングだよね。」

「はい、ガッツさんといえは十字架なので。」

十字架をモチーフにしたイヤリングだ。ガッツさんは髪が長いのであまり耳が目立たないが、隠れたところでもこだわるのがオシヤレだ。

「じゃあさ、これ一個ずつ私とマコで貰って、それでよくない?」

「おー、いいじゃん!ペアルック!」

「そうか、そういう手が。」

「じゃあこれ、シンジさん。」

「なんで僕に?」

「君が渡さないと意味ないじゃん。ほらマコも。」

「ちよっ……。」

「えっと、ガッツさん……じゃなくてマコさん……でいいのかな?これ、よかったら、もらってください。」

「うっ……わかったわよ。一応もらっておくわ。」

「マコ、そうじゃないでしょ?」

「言われなくたってわかってるわよ……ありがとう。」

「どういたしまして。」

すっかりとマコさんは受け取ってくれた。

「さ、帰ろうぜ!今日はシンジが帰ってきた記念に、焼き肉にでも行こうぜ!」

「おおー!いいすねえ!」

「ただしベムラーさんの奢りで。」

「なんで!？」

「シヤドウミストに気づかなかったでしょ？そのペナルティってことで、おなしやす！」

「「「「じー。」「」」」」

「うー、わかった！奢ってやる！なんでも食え！」

「やたー！」

「ほら、マコも行くよ。」

「なんで私まで？」

「一緒に食事に行くのも仕事の一環だよ。」

「・・・しようがないわねえ。」

ようやく、元の空気が帰ってきた。今度こそみんなの元に帰ってこれたと、シンジは実感した。

「やっぱりいいな、日本は。」

「どしたの急に？」

「向こうでの暮らしも悪くなかったけど、やっぱりこつちがいいやってこと。」

「そっか・・・。」

「あのねシンちゃん。」

「ん？」

「おかえり、シンちゃん！」

「ああ、ただいま、ミカ。」

また激動の日々が始まるだろう。今までの留学はほんの骨休めだ。さらにパワーアップした新しい日々が始まる！

## 空の虹に怪獣は踊る

「……。」

「おはよーシンちゃん？どうかしたの？」

「……うん。」

シンジはベッドの上で違和感を感じていた。昨日は……楽しかった。留学に行っている間に、GIRLSに頼もしい後輩も増えて、彼女たちといっしょにしこたま遊んだんだった。

「大丈夫？お腹痛いの？」

「……胃がすごく痛い。」

「食べすぎ？」

「どうもそうらしい、動くと痛む。」

「お腹に優しい物作ってきてもらおうか？」

「お願い、ホットミルクが飲みたいな。」

「わかった、ちよつと待っててね。」

シャドウミストに憑りつかれて昨日の今日だが、それにしても色々つらい。何が辛



いって、胃よりもむしろもつと別の場所が辛い。

「シンちゃん、元気？」

「ああ、元気は元気だよ……ありがとう。」

ホットミルク、ハチミツ入り。やさしい甘さが体をいたわる。ミカも同じものを飲んでる。

「ふう……あつたまるね。」

「甘くておいしいね。」

こんな大したことのない一幕に幸せを感じられる喜びよ。

「今日は後輩ちゃんたちと遊びに行くんだっけ？」

「そうそう！昨日紹介したあの子たちね！」

「マガジャツパちゃんに、マガバツサーちゃんね。」

いつの間にか僕にも後輩が出来たことになる。マガジャツパちゃんは大人しくしておっとりな感じの子で、マガバツサーちゃんは逆に明るくて活発な子だ。全く正反対な性格の二人だけど、とても仲が良いようだ。

「姉妹だっけ？」

「ちがうよ！」

「さて、ちよつと落ち着いたかな。朝ごはん食べて出ようかな。ミカはもう朝ごはん

食べた？」

「うん、シンちゃんと一緒に食べたいって思ったからまだだよ！」

「それ、もしも僕が先に食べてたらどうするつもりだったの？」

「細かいことは気にしな—い！先に行つて待つてるね—。」

「うん、すぐ行くから。」

ミルクを飲み干したマグを回収して、ミカは部屋を後にする。さてつとシンジも立ち上がつて着替えを始める。

「……。」

ちよつと、元気すぎないか？ナニがとは言わないけど。

まあそれはそれとして。着替えて食堂に行くと、既にミカが着席して待ちわびていた。

「おそ—いシンちゃん！さつ、食べよ—！」

「うん、いただきます！」

食卓に並ぶ御膳は、白米に味噌汁、納豆とまさに純和風な朝食だ。

「納豆に味噌に豆腐つて、ほとんど大豆だね。」

「向こうじゃ毎日ハンバーガー食べてたから、このあつさりした感じが懐かしい！」

「なるほどねえ……。」

「なにがなるほどだ？」

「いやシンちゃん、太ったなと思って。」

「え？」

「いや、そんなはずはない：：むしろいっぱい運動してたから、筋肉が付いただけで：：決して脂肪がついているわけではないはずだ：：。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「だから食べるものには気をつけなさいと言ったのよ？」

「面目ない……。」

正直なところ、「やせ気味」だったのが「普通」になった程度なのだが、一度太ると癖が付く。

「米だったところを肉に、お茶だったところをコーラに替えればこうもなろう。」

「他に食べるものが無かったんです……。」

それと同時に、環境の変化によるストレスも一因と考えられる。野生動物も、いきなり別の環境に連れてこられればストレスで早死にするという。

「じゃあ今日本に帰ってきてるから、すぐ体形は戻ることだね！」

「そっか！」

『『そっか！』じゃないわ……この際だから、毎日のトレーニングメニューを見直し

てみるべきね。」

（ねえ、なんでエレキングさんこんなに僕に構うの？）

（多分、後輩2人の指導を任せられたから、教員魂に火がついたんじゃないかな？）

（結構面倒見がいいですからね、エレキングさんは。）

エレキングさんの熱血指導に多少期待はしたものの、その後テキストとしてスポ根漫画を持ってこようとしたことはまた別の話。ともあれ今日は後輩2人と親睦を深めるのだ。

「せんばーい！」

「お、おはようございましゅっ！・・・はうう・・・。」

と、そこへちやうど後輩2人がやってきた。マガバツサーちゃんやんはラフながらセクシーな格好を、マガジャツパちゃんやんは落ち着いた雰囲気の恰好をしている。こういうところでも性格の対照さが際立つ。

それにしても、2人とも年下とは思えないスタイルのよさだ。こうしてみるとミカが本当に可哀想でならない。

「シンちゃん、今なんか失礼なこと言った？」

「いいえ。」

「・・・すげえ。」

じとーっとした目でミカは抗議してくるが、気にしない。それより今日は、2人のリクエストで行く場所を決めるんだ。

「はいはい！わたし、大怪獣ファイトを体験してみたいです！」

「よしやろう！シンちゃん！」

「なに？」

「いつしよにやろう！ジャツパちゃんも！」

「ふええ?!」

「昨日の今日なんだけど？」

「シエイプアツプにもなるよ！」

「よしやろう。」

「よっしやー！」

「ええええ?!」

困惑するマガジャツパちゃんをよそに、マガバツサーちゃんの要望で大怪獣ファイトの模擬戦が行われる運びとなった。シンジはこの展開の速さと言うか強引さにもう慣れたけど、マガジャツパちゃんはまあ我慢してくれ。ミカと付き合ってたならこれぐらいのことは日常茶飯事だ。あとでジューズを奢ってあげるから。

「つてことで、先輩後輩タッグ対決を提案しまーす！」

「先輩後輩タツグ対決？」

「そ！私とシンちゃん、バツサーちゃんとジャツパちゃん、で組むタツグマツチ形式がいいなって！」

「先輩からの洗礼つてことつすね！やりますやります！」

「ジャツパちゃん、パワハラを感じたらすぐに訴えてくれていいからね？ミカはいつもこんなだけだ。」

「い、いえ、大丈夫です……。」

とはいえ、その遠慮のなさがミカのいいところでもあるのだけれど。後輩相手にもなにかと気に掛けてくれる、いい先輩なのだ、基本的には。ただそれが行き過ぎて、無茶振りさせすぎることもあるのが玉に瑕だ。

さて、いつものアリーナへ移動し、いつの間にかギャラリーも増えていた。最初の場にいたのは、ミカやかぶせるが、除けばエレキングさんだけだったが、今はピグモンさんにレッドキングさんにガッツさん達がいる。

この場にはいないが、少し前の事件ではキングジョーさんやノイズラーさんも協力したらしい。アメリカにいる間、何かとキングジョーさんの話は耳にしていた。一応以前にも顔合わせ程度にはお話ししたこともあったが、結構すごい人だったんだと改めて実感した。すごくフレンドリーというか、気さくというか、パワフルな人だったけど。

ノイズラーさんのことはあまり知らない。聞けば、ザンドリアスとバンドをやっているそうだ。それにしても、今はマガちゃんたちがいるからザンドリアスも先輩になったわけだな。喧しい妹みたいな子だからそういう風に見てたけど、知らないうちに成長しているものなんだな。

「さーて、シンちゃんの修行の成果を今度こそ見せてもらおうよ！」

「昨日はちよつとアレだったからね。今度こそ見せたいな。」

ガッツさん達にも安全などころを見てもらえば、ちゃんと信頼を得られるし。こういうところがあるから、ミカはいい子なんだよ。

「で、シンちゃん負けたら一発ギャグね！アメリカでの修行の成果を見せてよ！」

「別にお笑いの修行に行つてたわけじゃないんだけどなあ？」

アメリカのコメディは、シットコムみたいに観客の笑い声が入ってないと笑いどころがイマイチつかめない。それに、笑うにはユーモアを感じ取るセンスというものも必要になる。総じて難易度が高い話だ。例えばピエロのパリアツチみたいな。

「シンジさん、ルチャ・リブレの特訓してきたんだって？」

「うん、『ハーキュリーズ』って人達と一緒に特訓したんだ。」

「『ハーキュリーズ』って、あの『ハーキュリーズ』？すげーじゃん！」

「知ってるんですかミクさん？」

「うん、日本で一番のプロレスチームだよ！いいなー！」

あらゆる困難は気合と根性で乗り切る。それがハーキュリーズだ。アメリカへ遠征がてら修行に来ていたところを出くわして、一緒に特訓させてもらった。たまたま一緒に居合わせた高山博士もそれに巻き込まれてヒイヒイ言っていた。今は仲良くしているらしいが。

「じゃ、ボクたち観客席の方に行ってくるから。」

「うん、後でね。」

反対側のマガちゃんたちのところには、今頃レッドさんやエレキングさんが行つて檄を飛ばしているところだろう。

「でも、新人ちゃん2人にミカ充てるなんて荷が勝ちすぎるんじゃないかな？」

「そのためのシンちゃんだよ、ハ・ン・デ♡」

「僕は重荷になるつもりもないよ？」

「頼もしいじゃん！」

このこのと肘で突っついてくるのをいなしで、バックパックの中身を確認する。スーパードランの弾頭として使用するアタッチメントが主だが、他にも様々な小道具や非常食なんかもごっちゃに入っている。それらを一旦纏めてひっくり返して整理する。

「またなんか色々増えてるね。」



「色んなものを試作してたからね。」

「どう見てもおもちゃみたいなものもあるんだけど？なにこのヨーヨーは？」

「振り回して使う。」

「子供が真似して危ないからダメだよ。」

どこぞのスケバン刑事や超電磁ロボやおとなも子どももおねーさんも使うヨーヨー武器。とりあえず作ってみた方がいいが、上手く扱える自信が無い。せいぜい振り回して銅付き鉄球フレイルのように使うしかない。

「ま、要は組み合わせなんだけどね。」

「なにか考えがあるんだ？」

「まあね。」

ミソとなるのはバックパックに入っている物ではなく、その外に持っているものだ。

「これ使うのもなんか久しぶりになるな。」

「バディライザーね、向こうでもカードは増えたの？」

「うん、ちよつとだけね。」

全員が全員キングジョーさんのようにフレンドリーだったというわけでもないが、本当にいろんな人たちと仲良くなった。一番衝撃的だったのは、パワーゼットンさんの存在だろうか。僕らの知っているゼットンさんと似て非なる存在。それによく手合わ

せをしてもらった。パワードバルタンさん。一番仲良くなったのは、日本文化に興味があるペギラさんだろうか。

「なるほどねー、色々あったんだねー。」

「うん、どれも貴重な体験だったよ。」

思い出すのもほどほどに、今は戦いに集中するとしよう。今回の相手は新進気鋭な後輩ちゃんたち。しかもエレキングさんの指導付きときたもんだ。今回の対戦は、2人の成長を見るための物でもあるのだろう。

「シンちゃん作戦はある？」

「まずは相手の実力を測りながら、様子見かな。」

軽く準備運動をして、アリーナの入场ゲートへ。反対側のゲートを見れば既にマガちゃんたちはスタンバイしていた。マガバツサーちゃんはやる気満々だが、マガジャツパちゃんはまだ少しオロオロとしている。2人とも落ち着きが無さそうだという点については一緒だが。

「みんなあんな感じなんだよねえ、初めてのファイトの時ってさ。」

「そうなの？」

「そうだよ、シイちゃんもだけどシンちゃんもそうだったよ。」

「シイちゃん・・・シーボーズさんだっけ？」

「そうだよ、とミカは短く答えた。シーボーズさん、ミカが最初の対戦相手を務めた大怪獣ファイター。決して戦闘向きの怪獣ではなかったかもしれないけれど、最後までミカに喰らいついていったという。僕もそれぐらい出来ていただろうか？」

「先輩方、今日はおねがいしますー！」

「お、おねがいますー！」

「うんうん！胸を借りるつもりで、ドーンとおいでよー！」

「貸せるほどの胸もない癖に。」

「なんか言った？」

「いいや。」

ビターンつと大きな衝撃が背中を襲うが、すぐに立ち直って対戦相手に向き直る。既に全員戦闘態勢ソウルライド済み、いつでも行ける。

「よっし、行くよジャツパ！」

「うん！バツサーちゃん！」

カーン！試合開始のゴングが響く。まずは様子見・・・のはずだったのにミカは突出していくし、後輩ちゃんたちも構わず突っ込んでくる。作戦なんてなかった。

「そーれっ！」

「はっ！」

低空飛行しながら突進してくるマガバツサーちゃんに、ゴモラはお決まりの尻尾攻撃で迎え撃つが、マガバツサーはひらりと躲してノーダメージ。

「とおー！」

「うわお！」

「油断するなよゴモラあー！」

ひらりと躲したマガバツサーの影から、マガジャツパのマガ水流が飛んでくる！シンジはそれを素早くライザーシヨットで撃ち落とす。

「シンちゃんいい腕してるうー！」

「テクノロジ技術のおかげさ。」

そのまま続けてマガジャツパを狙い撃つが、その銃弾の全てがマガジャツパの腕から出てきた大きな泡に阻まれる。

「ふぬぬぬ・・・ばうっ！」

「なんっ!？」

銃撃を防ぎ続けていた泡が弾けて、それまでに吸収していたエネルギーが衝撃波となつて返ってきた！

「わたたっ！思ったよりもやるじゃん！」

「とーぜんっすよ！なんたつて『魔王獣』ですもんわたしたちー！」

「魔王獣？なんだそれ。」

「わたしたちにもよく……。」

魔王獣、それは大魔王獣の眷属にして、存在するだけで災いをもたらすとされる。

「わたしマガバツサーは、嵐を起こすことが出来るんすよ！」

「へー、そりやスゴイ。マガジャツパは？」

「わ、わたしは……その……。」

シンジの問いかけに言葉を濁すマガジャツパちゃん。魔王とつくからは、どんなすごい能力なのか気になる。

『あなたたち、口を動かしてないで体を動かしなさい。』

「おっと、ギヤラリーから苦情が飛んできたぞ。」

「よーっし！ならわたしもやっちゃうぞー！」

「うわっ！すごい風だ！」

エレキングさんからのブーイングに、マガちゃんたちは立ち直って攻撃が再開される。マガバツサーがその大きな翼で羽ばたけば、たちまち嵐が巻き起こる。対峙する2人は飛ばされないように地面にしがみつくのがやつとだ。

「シンちゃんどうすればいいの?！」

「竜巻の時は地下シェルターに避難するんだよ！」

「そうか！超振動波!!」

ズドドツと地面に大穴を開けて、そこに身を隠す。だが隠れてばかりいても敵には勝てない。

「で、これからどうするの?」

「ちったあ自分で考えろよ!空を飛ばれちゃどうしようもなくなるからなあ。」

「シンちゃんだつて飛び道具持つてるじゃない?」

「物には限界があるんだよ。」

黒鉄の城だつて空を飛べるようになるまで様々な苦難があつたのだ。おいそれと克服できるほど甘くはないのだ。

「一応、方法は無きにしも非ずだけど。」

「どんな?」

「それはねえ……ん?なんだこのニオイは……。」

作戦会議中の穴の中に、フローラルな香りが漂つてきた。

「なんかクセになりそうな……。」

「すごく……イイにおい……。」

「しかもリラックス効果つきだこれ……ねむい……。」

これはイカン、と慌てて穴を掘り進めて出口をつくる。

「こ、これでよかったかな？」

「待つてましたあ！ジャツパちゃんナイス！」

「ええいまたしても！シンちゃん！」

「おう！」

穴から飛び出して、攻撃がとんでくる前に体勢を立て直す。ゴモラの角にシンジは脚をかける。

「そーれっ！」

「うおおお!!」

「なにいい！そうきたか！」

あとはゴモラのツノかち上げの要領でシンジは飛ぶ、いや跳ぶ。滞空しているマガバツサーの元へ一直線だ。

「あらよっ！」

しかし単純に真っ直ぐ飛んでくるだけでは当たるものも当たらない。簡単にマガバツサーは避けてしまうが、そんなことを想定していないシンジではない。

「リストビュート、伸びろ！」

「うわっ!!」

S. R. Iの手首の部分からワイヤーが伸びて、マガバツサーの脚をとらえる。ヒー

ローの本場アメリカで学んだワイヤーアクションをスーツの機能に取り入れてみたのだ。

「これは使い勝手が良いな！」

「離せー！このー！」

「うわあ!!」

捕えたはいいものの、その状態でマガバツサーは全速力で飛び回るから、シンジは揺られるジェットコースターだ。

「ぬわああああああ!!」

「落ちろやああああ！」

「なんとおとおお!!」

調子づいたマガバツサーがシンジの体を地面に叩きつけようと、急降下を開始するの直前、ワイヤーを解除して空中に留まる。続いて、空中で体勢を立て直してからもう一度ワイヤーを引っかける。まるでイルカの背に乗って跳ねるアクロバットショーのようだ。

「再び、捕まえたあ！」

「くっ！こんのおしっこい！」

将を射んとすればまず馬を射よ。マガバツサーの戦闘力はその大きな翼に起因する。



背中に取り付いたシンジは、バツクパツクからアイテムを取り出す。

「必殺、本結び!」

「翼がっ!」

先ほどおもちゃと言ったヨーヨーを巧みに操り、一对の翼を固めて羽ばたけなくさせた。これでもう自由に空を飛ぶことは出来まい。

「そして、これで決まりだ!」

そのままマガバツサーの体を後ろへ反らせ、脚を脇に挟んで、されに腕を掴んで固定し、そのまま垂直落下する!

「人も建物も焼き払う、『カン釣パーナ鐘・エア爆レイド撃』だっ!!!」

『おぉーっ!あの技はっ!!』

思わずミクラスも感嘆の声を挙げる。この高度から決まればまさに必殺の一撃!

「させませんっ!!」

「なにっ!?!」

そのまま地面に激突して、大きな衝撃がもたらされると思っていたのに、帰ってきたのはボヨボヨンとした柔らかい感触。そのままランポリンのように跳ねて地面に落ちた。

「いてて・・・これは一体!?!」



「いやー参った参った。まさかあんな能力があつたなんてねー。」

「はううう……ごめんなさい……。」

「いやいや、おかげでよく眠れたよ。マガジャツパにはヒーリング効果があるんだね。」

「一家に一台マガジャツパちゃん！欲しいなあ〜!!」

「はわわっ!」

むぎゆつとミカは変身解除したマガジャツパちゃんに抱き着き、その匂いをかいでいる。たしかにフローラルな香りが出ている。マガジャツパちゃんの雰囲気とも合わせて、とても強力な癒し効果があるに違いない。

「で、どうだった大怪獣ファイトは？」

「すっげー楽しかったです！もつともつと戦いたいです!」

「それならよかつたぜ、こいつら相手で手ごたえが無さ過ぎたんじゃないかと思つたところだ。」

「ちよつとレッドちゃんひどくなーい?」

「お前らあつさりやられすぎなんだよ。大怪獣ファイターの期待の星がこんなじゃ、新人に舐められちまうぜ。」

「むむっ、それは聞き捨てならないなー!今度はレッドちゃんと勝負だ!」

「へっ、望むところだぜ！」

お昼寝して元氣いっぱいになったミカが今度はレッドキングさんと模擬戦を執り行う至りとなった。

「まーけたー。」

「また強くなってやがったな、EXもほぼ使いこなせてるみたいだし・・・。」

「すごいねミカ、いつの間にあんなに強く?」

「ふっふーん、戦うものは日々進化しているのだよ!」

短時間ながら地力でEX化して、一時はレッドさんを圧倒していた。すぐにパワーダウンを起こしていたが、あのまま続いていたならきつと倒せていたはずだ。

「さて、次はマガジャツパちゃんのリクエストを聞こうかな?」

「わ、私のことはいいですよ・・・。」

「いいからいいから、今日はマガちゃんたちのことを知るための日なんだから!なんなら今日は私がジャツパちゃんを持って帰って検証してみようかな?」

「ふえええ!!」

「ゴモラ、パワハラは見過ごせないわよ?」

「ジョーダンだって、ジャツパちゃんの好きな物つてなーに?」

「えっと・・・お風呂が・・・お風呂に入る事が好きです。」

「まさかGIRLSが温泉旅館まで持ってたなんてねー。」

「もっぱら職員の慰安用みただけだ。」

これほど大きな組織なら、こういったレジャー施設のひとつやふたつ持っていても珍しくはないが。まだ少々陽は高いが、今日はここに泊ることとなった。

「んじゃ、さつそく温泉にいこー！露天風呂もあるよ！」

「あの・・・すいません、私のわがままで・・・。」

「いいのいいの、たまにはじーっくりお風呂に浸かって骨休めするのも悪くないよ。」  
戦いで傷ついた体を癒すのにもつながる。命の洗濯だ。

「で、シンちゃんはどうちの入るのかな？」

「変な選択を迫るんじゃない。」

左は青の暖簾が、右は赤の暖簾がかかっている。別に露天風呂は混浴というわけではない。個室には家族用やカップル用のもあるみたいだが。

「ほら、行くわよゴモラ。」

「あーエレちゃんちよつとまってよー。シンちゃん、寂しかったら私が扉を乗り越えてきてあげるから、いつでも言ってる？でもこつちを覗いちゃダメだよ？」

「誰が呼ぶか！誰が覗くか！」

お盛んな修学旅行生じゃあるまいし。他にこの旅館に泊まっている人はいないみたい

だけど、よそ様に迷惑をかけるようなことはあつてはならない。

「じゃあシンジさん、また後でね。」

「うん、じゃあね。」

「ここレトロなゲームもいっぱいありますねえ！」

「マガバツサーちゃん、ゲームも好きなんだ？」

「チヨール好きです！最近は・・・。」

さて、皆を見送ったところでシンジも男湯に入っていく。そこでちよつとした出会いがあったのだが、それは本筋ではないので今のところは省略。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふう〜！いい気持ち！」

露天風呂の外から眺める景色も絶景で、気分も爽快！顔に当たる涼しい風が、湯船の熱さと相まって心地いい。

「二人だけだと、だら〜んとできていいな〜。」

誰もいないのをいいことにカエルのように平泳ぎしてまわる。「湯船を泳ぐなあ！」というお怒りの声が飛んできそうだが、それに、まだ陽のあるうちに入るお風呂というのも格別だ。キラキラと水面に反射する日光と、湧き立つ湯気のコントラストがこれも美しい。

「ああ……極楽極楽……。」

ひとしきり泳いだ後は仰向けになって水面に浮かぶ。これも家の風呂では出きないことだ。水面下に沈んだ耳には、自分の心臓の鼓動だけが聞こえる。

「はあ……。」

さて……これからどうしようか。与えられた力を、どう扱うのか。今すぐに答えを出す必要も無いけれど、シンジの性格上常に考えてしまう。ゆつくりと漂っている雲を見つめながら、じーつと思案に明け暮れる。

『……！……？』

「……ん？」

ぼーつとしていたら、誰かの声を聴きそこなってしまった。大方、塀の向こう側にいるミカの声だろうと察しは付くけど。体を起こして声に応えようとする。

『シンジさん、まだ入ってないんじゃない？』

『そっかなー？よっこせ……やめてよエレちゃん、足をひっぱるのは。』

『あなたこそやめなさい、壁を乗り越えようとするのは。』

『私にとって壁は乗り越えるためにあるものだけど！』

『冗談はいいから、迷惑になるからやめなさい。』

『向こうにいるのがシンジさんとも限らないでしょ？』

『むっ、そう言えばそうか。』

どうやら、こちら側の存在には気づいていないようだ。今のシンジは、わざわざ声をかけるような気分でもなかったので、放っておくことにした。

『まあそれはそれとして、マガバツサー。お前、いい体してるな、大怪獣ファイターにならないか?』

『え、マジですか?!』

『ああ、今日の戦いもすごかったしな。お前ならすぐ一流ファイターにもなれるぜ! 新しいファイターは大歓迎だぜ!』

『よっしゃー! マガジャツパもやろーよ!』

『ええっ?! わたしは・・・その・・・。』

たしかにマガちゃんたちの能力はすさまじい。並の相手じゃビクともしない強さがある。人材としてはどこからでも引つ張りだこになることだろう。

『それにしても、レッドキングさんもスゲー体ですね! 筋肉すっごい!』

『お、触ってみるか?』

『ヒュー! みろよレッドキングさんの筋肉を・・・まるでハガネみてえだ!』

『あはは、くすぐったいぜ。』

『それでいてこっちのほうも立派なんだから羨ましいよレッドちゃんは〜!』



『お、おいゴモラあ！そんなとこまで触るんじやねえよ！』

シンジ、鼻の下まで湯船に浸かるが、聞き耳はしっかり立てている。

『レッドキング先輩の体すごいよね！鏡の前でポーズとかもしてるんですけど？それも裸で！』

『ミクちゃん……。』

『だ、誰がそんな……いや……そ、そうだな……アハハ……。』

レッドキングは喝いた笑いを浮かべる。一方シンジは両手で顔を覆った。

『そういうアギちゃんの方は……どりやつ！』

『うひやあああん?!ミ、ミクちゃんなにすんのさ！』

『ふむふむ……これは将来有望ですなあ！さてさて次はウインちゃんにロック、オーン！』

『ふわっ!?や、やめてください……。』

『これもなかなか……。』

女湯の方はなにやら楽しい雰囲気になってきていた。シンジは一旦大浴場の方に戻ろうかとしたが、すぐに腰を降ろした。

『んもー、ゴモたんそのへんにしときなつてー?』

『ガツちゃん?そういうガツちゃんは余裕そうだねえ?』

『ん？そりやあアタシは無敵のガッツ星人ですし？スタイルにだって自身はありますけどお？』

『・・・アホくさ。』

『なにおー！そんなこと言うガッツちゃん達は2人まとめてー！』

『ひやううん・・・えつちー！』

『やめっ・・・やめろお・・・ひやううん・・・。』

『おおー、さすが双子だ、サイズもそうだけど反応も似てますなあ？』

あー、いい天気だなー。シンジは現実逃避を始めた。

『んもー、ゴモゴモつたらー、そんなことしちやダメですよお？』

『はあん・・・んん・・・やめ・・・っ！』

『そんなこと言いながらピグモンちゃんもレッドちゃんをわしわししてるじゃん！』

『嫌がつてなんかないですもんねー？ねーレッド？』

『そ、それは・・・ひゃん！』

シンジ、放心状態。

『さて・・・あとわしわしされてないのは・・・？』

『はあ・・・いい加減になさい！』

ざばあつ！と大きな飛沫を立ててエレキングさんが言い放つ。それと同時に、エレキ



「・・・ぶはっ！」

「おっ、起きたシンちゃん？」

「シンジさん大丈夫？」

「あ・・・ああ・・・頭が痛い。」

目が覚めた時には陽はすっかり暮れていた。夕陽の見えるテラスで、涼風に当たりながらまたしてもアギさんに膝枕されていた。相変わらずの寝心地のよさだ。

「ほい、シンちゃんのコーヒー牛乳！ひえひえだよ？」

「ひやつこい！」

冷蔵庫から出してしばらく経って結露した牛乳瓶を火照った頬に当てられ、思わず驚嘆の声をあげた。体を起こして受け取ると、フタを開けてグイッと呷る。

「うん、おいしい。」

「それでシンちゃんはなんで倒れてたのかな？」

「・・・のぼせてた。」

「シンちゃんのスケベ。」

「まだなんも言っていないだろ?！」

「どうせ私たちの話を聞いてたんでしょスケベ。」

「あんなでかい声で騒いでたらいやでも聞こえるわい！」

「やっぱり聞いてたんじゃないか。」

「しまった。」

誘導尋問に引つかかかってしまった。まさかミカがこんなに頭が回るとは。

「ほれほれ〜一体誰の声に興奮したのかなあ?」

「誰だっかっていいだろ・・・ところで、みんなはどこに行ったの?」

「みんな遊んでるよ。レッドキングさんとエレキングさんは卓球してるし、ミクちゃんたちはゲームコーナーに。」

「2人はいかないの?」

「んもー、シンちゃんを置いて行けるわけないじゃん。」

こっん、とげんこつでシンジの頭を小突いて、ミカはよいしょと立ち上がった。

「でもまー、シンちゃん元気そうでよかったかな、私も卓球してくるねー。すぐ来れば、エレちゃんのポロリもあるかもよ?」

「・・・行かないぞ?」

「その割には一瞬足が動いたね。まだもうちよつとゆつくりしてなよ。アギちゃんも、ね?」

「・・・うん。」

「せいじゃ、後は若いお二人で。」

ばいばーいと手を振るミカを見送って、アギさんと2人。陽はもうすぐ地平線に隠れようとしている。

「・・・いいところだね、ここ。」

「う、うん・・・そうだね。」

当たり障りのない会話。せつかく避暑地に来たのだから、もつと特別な会話をするべきだろう。

「・・・。」

「・・・。」

しかしいざ会話してみようにも言葉が見つからない。お互い前々から言いたいことはあつたはずだけど、なかなか切り出せない。

「あのっ・・・どうぞどうぞ。」

「お笑いやってんじゃないんだから。」

「なんで見てんだよ、はやく行けよ。」

「はいはい、おジャマ虫は退散しますよ〜だ。」

今度こそミカはどこかへ行った。まだいそうな気もするけど。

「それで、何シンジさん？」

「あー・・・じゃあ僕が先に言わせてもらおうね？」

少し恥ずかしそうに頬を掻きながら、シンジはゆっくりと口を開いた。

「なんとというか・・・アギさんとは『運命』みたいなものを感じている。」

「いきなり、ナンパされた・・・。」

「違う違う、そうじゃない。」

あーっと声を吐き出して、もっと別の言葉を探す。

「そのつまり・・・アギさんと出会えてよかったってこと。」

「アギさんと出会ったあの日から、何もかもが変わったって気がして。その、いい方向にね。」

脳裏に甦るのは、在りし日の思い出。初めて怪獣娘を目の当りした時、ミカと再会したとき、初めてバディライドした時のこと。

「ミカもそうだけど、いっつもアギさんが僕の傍に居た。僕が落ち込んだ時も、アギさんは励ましてくれた。辛い時にいる僕を、見つけてくれた。」

「だから、アギさんは僕にとって・・・大切な人、とても。」

「それだけ。次、アギさんの番。」

「雑っ！ボクは・・・ボクはね・・・。」

かなり乱暴にパスを回したが、しつかりアギさんはキャッチしてくれた。

「ボクにとっても、シンジさんは特別な人だよ・・・例えるなら、本当に『運命』って

言葉しか見つからないくらい。」

「正直言うとうと、最初はちよつと無謀な人だなんて思ってた。東京タワーの時とか、ボクを助けようとした時も。．．．今もそんなに変わってないかもだけど。」

「そんなシンジさんだから、つつい見守らないとつて思うようになつちやつて。そしたら、今は自然とシンジさんのことを目で追いかけるようになつちやつた。」

「それをゴモたんに指摘されて、やつとわかつたんだ。」

「これが、『恋』つてもものなんだつて。」

アギラは、いやアキは照れるようにくすつと笑つて言った。

「ホント、笑つちやうよ。本当なら恋敵になるはずのゴモたんに、背中を押されちやうんだから。」

「アギさん、それって．．．。」

「黙つて聞いてて。」

「うん．．．。」



「こんな風になってからというもの、毎日がすごく生き生きしてるよ。『誰かを愛する』ってことが、こんなに楽しくて、嬉しくて、夢中になれるなんて、思ってもみなかったから。」

「これが『生きてる』ってことなんだなって。」

「だから・・・その・・・シンジさんの心は、ゴモたんの方に向いてるのかもしれない。だから、これはボクワガママ。」

「シンジさんのこと、『好き』でいさせて・・・。」

ぎゅっ・・・とシンジの腕を抱いて身を寄せる。そのアキの頬にそつと手を添える。「アギさん、ちよつと卑怯だよ・・・顔を見て言ってくれないと、なんて言えばいいのかわからないじゃないか・・・。」

「なにも言わなくていいよ・・・今はこうさせて・・・。」

体と体が密着し合って、ドキドキしている。だが後ろめたさは感じない、むしろ暖か

くて、安心を感じる。

「アギさん……。」

「シンジさん……。」

「あそこで見てる連中は何やってるんだらうか？」

「へ?!」

「あは☆バレてた？」

「丸見えだよ、何人いる？」

「みんなみんな一緒ですう☆」

「あわわ……//」

テラスの出入口から出るわ出るわ、ミカを始めとしてそろそろと全員が姿を現した。

「みんないるじゃないか！エレキングさん以外？」

「エレちゃんもいるよー、こっち側に。」

「別に聞いていたわけじゃないわ、聞こえただけ。」

「そんなこと言ってー、一番最初に張り込んでたじゃん。」

「いやー、アギちゃん一世一代の告白だったんじゃない？アギちゃん的笑顔をはアタ

シのものなのだー!」

「も、もおー!みんなひどいよ!」

「また無視された!」

「今まで散々自分の気持ちに嘘ついてきた罰ゲームだと思って、ね?」

珍しくアギさんはぶんすかと怒ってみせるが、全然怖くない。ピグモンさんといいい勝負だ。

「でもミカ、なんでアギさんの事を焚きつけたわけ?」

「だってアギちゃん煮え切らないんだもん。私のこと気を使ってるつもりなんだろうけど、シンちゃんを見る目がハートになってるし。それならいっそハーレムにしちやったらどうかって思って、シンちゃんの。」

「僕は別にハーレム願望無いよ?」

「そういうところだよー、シンちゃん。」

「なにが?」

「そういう口では『僕関係ない』って言うっておきながら、実のところ下心満載なんだから、このむつつりスケベ!」

「はあ?」

「だからいっそのこと、シンちゃんを囲い込もうと思って。エレちゃんがね。」

「しっ。」

「なにさー！言い出したのエレちゃんじゃないかー！」

「エレキングさん・・・あなた一体なにを?!」

「賢<sup>さか</sup>しいだけのあなたが、何を言うの?」

「賢<sup>かし</sup>くて何がいけないというの?!」

「私は好きでもない男性とカフエになんて行かないわ。」

「わかった、これまた夢見てるんだ。」

「いだだだだだ。」

「ふむ、痛いということは夢じゃない。」

「なにすんのさ!」

「あいだっ!」

隣にいるアギさんの頬をつねってみて、逆に殴り返されて現実だと悟る。

「アタシもシンジさんのこと好きだよ?何でも頼んだら付き合ってくれるし!」

「才、オレもお前の事好きだぜ・・・?」

「・・・くだらないわ。」

「そんなん言つて、昨日『やりすぎっちゃったかな?』心配してたの誰だったかな?」

「ピグモンもシンジンのことだ〜いすきですう!」

「なんだこの展開は。」

いきなりの告白祭りにドン引きする。

「さあシンちゃん、今度はみんなの想いに応える番だよ？ 覚悟しろよオ？」

「なんでそうなる？ 何をさせるつもりだ？」

ギシツ、とテラスの手すりに身を寄せる。しかしそれがいけなかった。そこはサスペ

ンスドラマの断崖絶壁ばりに危険な場所なのだ。

バキッ！

「あつ。」

あー、また落ちてら。時間にしては一瞬のその間に、遠きアメリカの血に置いてきた妹の姿が蘇る。

「助けて、アイラ……。」

バゴオツと鈍い音ともに再び意識を手放した。出来るなら、これで夢からも目覚めて欲しい。決して嫌な夢じゃないけれど、これはこれで悪夢だ。

「大丈夫ですかシンジさん?!」

「あつ……ああ、大丈夫。」

「もう慣れたもんだなお前も。」

「慣れたくはないですけど。」

気を失っていたのは一瞬。目が覚めると今度はウインさんが顔を覗き込んできている。た。

「それはそうと、レイカ、じゃなくてウインさん。」

「はい？なんででしょうか。」

「浴衣、似合ってるね。可愛いよ。」

「えっ……／＼あ、ありがとうございます！」

「おっとお、まさかウインちゃんが一步リードするとは?!」

「あなたたち、いつの間にそんな関係に……?」

「そ、そんなじゃないですよ！まだ……。」

やいのやいの騒がしくなってきた皆の元を離れて、2人で話しているミカとアギさんの元へ行く。

「2人してハメやがったなあ。」

「そ、そういうつもりじゃ……ごめん。」

「いやー、まさかこんなことになるとも思ってたよ。ゴメンゴメン。」

「嘘吐け、絶対確信犯だったろ。」

「たはは。」

「それで、なんでミカはアギさんを焚きつけたわけ？」

「そうだよ。」

「うーん、アギちゃんだけじゃなくって、みんなもそうかな。みんなシンちゃんのこと気にしてるし。」

「まあ、好意があるって言っても、それぞれ形は違うだろうけど。」

ミクさんには体のいいサンドバック程度にしか思われてないだろうし、ピグモンさんに至ってはあれで平常運転だし。

「だから正直、いつシンちゃんのこと盗られちゃうかと心配してたんだあ・・・アメリカでも相当仲良くなった娘、いるんじゃないのお?」

「うーん、否定はしない。けど浮気したつもりもない。」

「どうだかねー、人の心って変わっちゃうもんだし、何か変えてるのかもわかんないし。」

「どうしてボクを見るのさ・・・。」

「アギちゃんはその典型だから。」

このこの、と指でつつくが、そこに一切の悪意や嫌悪感はない。本当にいい友達が出来た、そうシンジの目には見て取れた。

「だから、いつそのことシンちゃんの周りを囲って、お互いがお互いを監視できる環境にしたいのだよー!」

「びっくりするほどディストピア。」

「それでシンちゃん好きな女の子を囲えるから、これでWin—Winってわけね！」

「むしろ囲まれてるんですがそれは。」

ああ、逃れられない！

「そういうわけで、これからもどうぞよろしくね。シンちゃん！」

「あ、うん．．．よろしくね、ミカ。それに．．．アギちゃん。」

「うん、シンジさんこれから大変だね。」

「あー、他人事だと思って！」

「ふふふ．．．。」

やれやれ、まさかこんな展開になるなんて思いもしなかったけど、やっぱり今いるこの『世界』が一番楽しい。



## 燃えろ!大怪獣ファイター!

「大怪獣ファイター・タッグマッチトーナメント?なにそれ?」

なにそれ?と聞き返す必要もないわな。大怪獣ファイターのタッグマッチのトーナメントだ。

「何って、大怪獣ファイターのタッグマッチのトーナメントだよ!」

「それは知ってるよ。」

あら?知ってることを聞くなっておかしいわね、と作業を続けながらエレキングさんは言った。今日はそのエレキングさんの作業の手伝いに来た。そしてそのエレキングさんも、雑務の手伝いの為に来た。つまりシンジとミカは手伝いの手伝いだ、下請けかなんかか。

「今日刷ってる書類も、それ関連のだよね?トーナメントってことはイベントなのかな?」

「そー!最近なにかと怪獣娘の評判落ちることあったじゃん?それを取り戻すのがこれの目的なんだって!」

「それに、大怪獣ファイターの新規要員の獲得も念頭に置いているそうよ。」

ミカたちにはシャドウガッツさんの事件が記憶に新しいだろうし、シンジにとつては忘れもしないアイラの暴走事件のこともあった。たしかにあの時は世間からのバッシングも激しかったのをよく覚えている。

「成程ね、人気と人材を一度に集めるって寸法か。これを機に大怪獣ファイトにハマる人も出てくるだろうし。なんとしても成功させたいね。」

「でしょでしょ?？」

「別にアナタが考えたわけではないでしょう?」

「参加者だからいいの! エレちゃんが出ないの?」

「私は遠慮しておくわ。戦闘タイプじゃないから。」

(嘘でしょ?)

今まで散々エレキングさんの戦いっぷりを目にしてきたが、どう考えても戦闘タイプではないというのは嘘だろう? 頭は切れるし、腕もいい、何より自分の限界を知っている。クールかつクレバー、だから好きになったんだけど。

「お?どつたのシンちゃん、エレちゃんに見とれちゃってるの?」

「ちがわい! 仕事するよ仕事!」

「むつつりスケベえ!」

「じゃかあしい!」

「五月蠅いわ。」

「サーセン。」

まったく・・・とあきれた声を挙げつつも、仕事の手は緩めない。大人しくプリントアウトされたレジユメを纏めていく。

「なんというか、紙の無駄だよねこれ。今は何でも電子で出来る時代なのに。」

「それは以前から思っていたわ。電子パッドでなら楽に会議だって出来るはずなのに。」

「今度掛け合ってみますよ。最近、会議に出ることも多いので。」

「お願いするわ。」

「シンちゃん、エレちゃんの気を引こうと必死だね。」

「だまらっしゃい!」

「おーこわww」

ミカ、妬んでいるというよりも単に楽しんでるだけのようだ。

「エレちゃんこそ、アギちゃんの次ぐらいにストレートに表現したんじゃないの？」

「このこの?」

「あんた、凍らすよ?」

「おーこわww」

「ミカ、仕事の邪魔しに来たの？」

「ごめんごめん。」

キーボードを叩く音が一瞬止まったかと思うと、エレキングさんの口からこの世の物とは思えないほどに冷たい怨嗟の声が出た。

「まあそれはそれとして、タッグマッチなんだよね？ミカのパートナー決まってるの？」

「シンちゃんやりたい？」

「僕人間。」

「シンちゃんも出ても問題ないと思うけどなあ。」

「たとえ出られたとしても遠慮するよ。これ以上は荷が勝ちすぎる。」

お生憎様、大舞台に立てるほどに十分に成熟しきっていない。

「でもシンちゃん、大一番には強いじゃん？」

「・・・それとこれとは違うんだよ。ただ、人前に出るのが怖いんだよ。」

「雑誌のインタビューには応えていたのに？」

「あれは・・・あれに関しては割り切つていられたんですけど、いざ衆人環視の前に立つとなると、震えが止まらなくなるんです。」

口の中が渴いて、手が変な震え方をする。

「人間が怖いのか?」

「・・・そうかもしれない。」

「それよりもっと怖いはずの怪獣娘が平気なのに、ずっと弱い人間が怖いなんて、おかしい話ね。」

「本当に、ね・・・。」

対人恐怖症、というわけではない。人ではなく『人間』という集団が怖い。

「ま、それはそれとして。はやく仕事終わらせて、遊びに行こうよー!」

「そう思うんなら邪魔しないで。」

「ちゃんと手伝って。」

「ハイハイ。」

湿っぽい会話になっていたところにミカがちよいとちよつかいを出してくれた。そこから先はつつがなく仕事を終わらせられた。

「さて!どこ遊びに行こうか!」

「エレキングさんどこがいいですか?」

「あなたに任せるわ。」

「じゃあお好み焼き食べに行こう!」

「じゃあ、ちよつと行ってみたいお店があるんですけど、そこでいいですか?」

「構わないわ。」

「ヒドくない？」

向かったのは都内某所のイタリア料理店。まだ開店準備中らしいが、構わずシンジはその扉を叩いた。

「大丈夫なの？」

「大丈夫です、アツポとつてありますから。」

「準備が いい のね。」

「まあ、ね……。」

お洒落でいい匂いにする店内に足を踏み入れると、すぐに奥から黒い服を着た人がやってくる。彼がこの店のオーナー兼シェフだ。

「いらつしやあい……またお会いしましたね、シンジさん。」

「ええ、今日はお招きありがとうございます、JJさん。」

「いえいえ、シンジさんは同じおジョーさんファンのお土ですからね！」

「シンちゃん、この人って確か……。」

「あつ、ゴモたんさん！ご活躍はいつもテレビで拝見させております……。」

「あつ、どもども。ゴモたんだよー！」

「キングジョーのファンの人ね。」

「そうです、ここのお店穴場なんですよ。」

見れば、店内にもキングジョーさん関連のグッズがちらほら。余程熱心なファンだと見える。

「この前キングジョーさんとお仕事の帰りに、たまたま立ち寄ったのがこのお店だったんですよ。」

「どんな確率だよ。」

「これはもう運命だね。」

「ささつ、立ち話もなんですのお席の方へどうぞお？」

怪獣娘を応援してくれる人がいるだけでとにかく嬉しい。窓際の見晴らしのいい席に案内され、しばらくして見た目にも鮮やかな料理が運ばれてきた。

「おいしいねこのイタメシ!」

「でしょ? 僕もすつかり常連だよ。」

「お店の雰囲気もいいわね。」

「身に余る光栄に存じます、お嬢さん。シニョリーナこちらジエラートになります。」

イタリアンのフルコースを堪能し、一行は満足で店を後にする。

「おいしかったねー! また来ようね!」

「そうだな、また・・・一緒に。」





「私も・・・どっちゃかって言う情報系なので・・・。」

「なるほどなあ・・・。」

たしかに、アギちゃんは目立つことを嫌いそうだし、ウインさんは戦闘そのものが苦手そうだし。決してそういうわけではないんだろうけど。

「それで今から探しに行くんだ!シンジさんいい人心当たりない?」

「そうだなあ・・・とりあえずミカを頼ってみようか。」

困ったときはとりあえずミカ。出先で食べるものに困ったらとりあえずカレーか牛丼屋を探すようなものだ。たしかミカは今日はトレーニングルームにいるはずだ。

「おいミカ。」

「おつシンちゃんおつすおつす!」

「こ、こんにちはシンジさん。」

「あれ?シーさんもいっしょなのか。」

ミカと一緒にいたのは、以前話していた大怪獣ファイターの後輩のシーボーズさん。この時点で悪い予感がしている。

「ひよつとして、ミカはシーさんとコンビを?」

「そう!お笑いコンビ『Gボーン』の結成だよ!」

「あれ?ミカとシーさんはM―I―Iに出るの?」

「ちがいます!」

「なるほどねー、ミクちゃんの相方かー。」

「そうなんつすよー、ゴモたん他にいい人知らないですか?」

「うーん、そりゃあ色んなファイターの子は知ってるけど、その子達ももう今頃は相方を見つけてるんじゃないかな?」

「うっ……やっぱり? そんな気はしてたんだ……。」

「まあまだそうとは決まったわけじゃないし、色んな人を当たってみよう?」

「それなら、レッドちゃんに掛け合ってみたらどう? ミクちゃんの憧れでしょ? まあみんなそうだろうけど。」

レッドキングさん、大怪獣ファイトの初代王者。一般のファンのみならず、ファイターの中でも憧れる人は多い。その腕力に物を言わせたパワーファイトは、まさしく怪獣の戦いの王道を征っている。シンプル・イズ・ベストとはまさにこれ。

「そうだね、レッドさんなら快諾してくれそうだし。」

「うん……アタシも最初はそう思ったんだけどね……。」

「もしかして、もう断られちゃったの? それともパートナーをもう見つけてたとか?」

「ううん、まだ聞いてないんだけど……。アタシ、今回はレッドキングさんとは組まないつもりなんだ!」

「それは、どうして?」

「もちろん、レッドキング先輩はアタシの憧れの人だし、一緒に戦えたらいいなーっとは思ってた。けど、それでいいのかな? って逆に思っちゃって・・・。」

「レッドちゃんの影に隠れてしまわないか心配なの?」

「いや、ぜんぜん! そんなことはないんだけど・・・。」

「レッドキングさんに頼りっきりはいけないって思った、ってことですか?」

「そう! それにアタシ、うまく言えないけど・・・レッドキング先輩と、戦ってみたくなっただ。今までずっとレッドキング先輩の背中を見て戦ってきたけど、今度は正面からぶつかってみたいんだ!」

「ミクラスさん・・・そこまで考えて・・・。」

「いやー正直言うとな、レッドキング先輩と一緒に組んでも、アタシ足引っ張っちゃうんじゃないかって心配なだけなんだけどね! はは・・・。」

「ううん、ミクちゃんらしい考え方だと思うよ私は。ダイジョーブ! ミクちゃんなら誰と組んでも上手くやれるよ! 私が保証するから!」

「ミクラスさんは頑張り屋さんですから、足を引っ張るなんてことは絶対ないと思いますよ!」

「!」モたん・・・シーさん!」

「じゃ、ミカまた後でね、シーさんも。」

「はい、また練習しましょうね！」

「ばいばーい！練習ガンバってね！」

「・・・行っちゃったよ2人とも？」

「え？」

「ああ・・・そのようだ。」

女子3人で話している間、扉の影にいる誰かにシンジとミカは気づいていた。誰？なんて考えるまでもない。あの尻尾のリボンをよく知っている。頭隠して尻隠さずとはこの事か。やはりかわいい。

「レッドキングさん！いたんですか？」

「途中から、な。あいつらには言わないでくれよ？」

「手塩にかけてた後輩が、あんな風に考えてたなんて、シヨック受けた？」

「いいや、嬉しいぐらいだ。教えた身としてこんなに誇らしいことはないぜ。」

「じゃあ、『寂しい』とかですか？」

「・・・そうだな。オレとしては、誘われたら受けるつもりだったんだけど、その必要

も無かったみてえだ。」

腕を組みながら、廊下を歩いて行った2人に思いを馳せる。いつの間にかデカイ口叩けるようになったもんだな、無論いい意味で。

「ホントに、いいパートナーが見つかるといいですね。」

「本当はもう見つけてるんだろうけどね・・・それに気づけるかどうか。」

「そうだな、あいつらどつか抜けてんだからな。」

「そういうレッドちゃんこそ、大丈夫なの?」

「なんだよ?」

「レッドちゃんの方こそ、パートナー探しは大丈夫? 案外向こうから声かけてきてくれる人はいないかもよ? ミクちゃんほどじゃないけど、レッドちゃんに気が引けちゃってさ。最終的にペア組んでないのはレッドちゃんだけだったりして?」

「いや・・・そんなまさか・・・。」

はいい2人組作ってー。これほど憎たらしい言葉はない。

「いやー・・・さすがに・・・それは・・・ねえだろ?」

レッドさんの背中に嫌な汗が立つ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「うーん、なかなか見つからないね。」

「そうだねー……みんな手が早いんだなあ。」

タッグマッチの情報が開示されて、その時間は経っていないはずなのに、もう皆ペアを見つけている。というか、ミクさんだけが見つけていないという方が正しい。

「練習する時も、大抵レッドキング先輩が相手だったからなあ、あとザンドリアス。」

「そのザンドリアスはノイズラーさんと組むって言ってたし。他に心当たりとかは？」

「うーん、アタシいつつもあの2人といえるからなー。」

「あの2人はそのつもりが無いし……。」

土下座して頼み込んだら引き受けてくれそうだが、そこまでするぐらいなら参加しないことを選ぶだろう。

「よっし、じゃあ逆の発想で行こう。」

「逆の発想って？」

「逆に、誰も組まなさそうな人に頼みに行く！」

「それって、誰？」

「ゼットンさん。」

「いやいやいやいや、ムリっしょー！」

そりゃあ、ゼットンさんと組んだら優勝だつて楽勝だろう。だってよ、ゼットンさん

なんだぜ?だがおそらく誰一人として声をかけてはいないだろう。『いやさすがにそれはねーよ』って良識のある人間ならが思っているだろうし。

「なら僕がやらねば誰がやる!行くぞお!」

「えー!?でもどこにいるのかわかんの?!」

「どうせいつもの河原でしょ。最悪の場合アギちゃんを交渉のダシに使うことも視野に入れる!」

「もつとダメでしょ!」

適当に当たりをつけて動く。そしていた。

「あれ?なんか見覚えのある人影が・・・。」

「やあ、シンジ君にミクラス。」

「まさか、先を越された?」

「そのようだな。私たちはついさつき『ブルースファイア』を結成した。タッチの差だったな。」

「それが大人のやることか!」

「大人だからやるんだよ!」

(シンジさん人のこと言えないんじゃない?)

当のゼットンさんはというとどこ吹く風だが。それにしても、ゼットンさんも参加す

るのか。群れることを嫌うタイプだから、大会なんかにも興味が無いと思っただろうか。

「参加要請が来た・・・現チャンプだからって。」

「成程。そこへベムラーさんが声をかけに来たから渡りに船と・・・でも、ベムラーさんはどうして?」

「私の目当ては優勝賞品さ。」

「優勝賞品?」

「チラシをよく見た前ワトソン君。」

「なにになに・・・。」

「どうやらゼットンさんへの参加要請と同時にチラシも送られてきたらしい。」

「優勝ペアには、黄金のトロフィーが贈呈されます・・・執務室にでも飾るんですか?」

「いや、そつちじゃない。副賞の方だ。」

「わっ!すごい!賞金200万円だって!これだけあれば牛丼いっぱい食べられるよ!」

「一杯300円ぐらいだとして、およそ6700杯。」

なるほど、これはたしかに魅力的だ。黄金のトロフィーといい、随分大盤振る舞いだな。よほど今回のイベントは成功させたいと見える。

「最強の怪獣ゼットンと組めば、200万円はいただきさー!」



「一人、100万円でしょう?」

「ゼットンはいらないと言っている。」

「ゼットンさん、まさかアギちゃんを人質にされたとか?」

「私は賞金には興味が無い。」

(シンジさん、あんたって人は……。)

まだシャドウミストに憑りつかれているんじゃないかと疑いたくなる。

「これでようやく悲願の……。」

「別荘でも建ててるんですか?」

「いや、私の愛馬<sup>バイク</sup>を直せるし、もつといいパーツも調達できる。誰かさんを助けたおかげで、お釈迦になってそのままだったからな。」

「さてなんのことやら。」

そう言われてみると、この2人の接点も見えてくる。

「まあとにかくだ、勝負となれば私だつて容赦はしないぞ?その時は正々堂々と戦おう!」

「いけしやあしやあと……その前にまずパートナーを探さないとはいけません。」

「……」

「あーあ、誰と組めばいいんだろうなあ……。」

「……ミクラス。」

「ぬっ、なんですか？」

何かと付き合いは長いはずだが、ミクラスがこうしてゼットンさんと話すのは珍しい。というか、ゼットンさんから声をかけられること自体が珍しい。

「あなたには、もう答えは出ているんじゃないの？」

「答え？」

「誰と組めばいいか、じゃなくて、あなたが本当に組みたい相手は、誰？」

「えっ……それは……。」

「それだけ。じゃあ。」

またレポートでどこかへ行ってしまった。

「さっそくタツグパートナーを置いていくとは……。」

「相変わらずマイペースですね。」

「足並みをそろえるだけが付き合いじゃないさ。それじゃあ私も行くよ。いいパートナーが見つかるといいな。」

「はい、ありがとうございます！」

河原にもうすぐ夕日が沈む。結局、今日一日歩き回ってみたが、パートナーとなる人物は現れなかった。

「・・・っ。」

「まだ1日目だよ、大丈夫。すぐに見つかるって。」

「う、うん・・・だといいんだけどね。」

違う違う、そうじゃない。ミクラスの心はそう叫んでいるが、その声が喉を通ることはない。

|| || ☆ || || ☆ || || ☆ || || ☆ || || ☆ || || ☆ || || ☆ || ||

「ダメだなあ・・・。」

「ダメだねえ・・・。」

昨日に引き続き、一向に人材は見つからない。それどころか、昨日よりも人は減っていると言える。あっちこっち出向いてくたびれたので、今はサロンで休憩中。

「あと声をかけてないのは、エレキングさんぐらいかな?」

「無理無理!あの人苦手だし!」

「いい人なのになあ・・・。」

「あつ、ミクちゃんシンジさん。」

「その様子だと、パートナーまだ見つかってないみたいですね。」

「みつからないよー!」

「聞いた話によると、マガちゃんたちも出場するんだってね?」

「うん、すごい気合入れてたよ。マガジャツパちゃんは相変わらずオロオロしてたけど。」

あの2人なら初出場でもいいところまで行けるだろう。単純に空を飛べるというだけでなく、十分なアドバンテージを得られるのだから。

「おーつす、なにやってんのみんなで?」

「ガツツたちに、ゴモたんもいる。」

「ちやおつす! シンちゃん景気はどう?」

「不景気。」

「あつそ、気晴らしにケーキ食べに行こう!」

「・・・別に奢らないぞ?」

まあ別に奢ってあげてもいいけど。けどこの人数はちよつとなあ・・・。

「もう、いいかな・・・。」

「いいかなって、なにがミクちゃん?」

「アタシ、今回大会出なくてもいいやって! 見つからないんじゃないもん。」

「ミクさん・・・。」

「諦めないでください、ミクラスさん!」

そこに待ったをかけたのは、後ろで見ていたシーボーズさんだった。

「シイちゃん?シイちゃんが声張るなんて珍しいね。」

「ミクラスさん、昨日言ってたじゃないですか!自分の力でレッドキングさんに立ち向かいたって!」

「それは・・・そうだけど。」

「それを聞いて、レッドキングさんだって嬉しそうにしてたんですよ!ミクラスさんも強くなったって、それなのに!」

(あー、それ言っちゃうのか。)

「でも、ファイトならまだチャンスがあるだろうし・・・。」

「今を逃したら、次なんて永遠に来ないですよ!」

通常のシングルマッチならまだしろ、タッグマッチトーナメントが今後も組まれるかはわからない。ひよつとすると、今回が最初で最後になるかもしれない。

「私だって、ミクラスさんと戦うの楽しみにしてたんですよ・・・!」

「えっ?」

「ゴモたんと一緒に戦えるのと同じくらい、ミクラスさんと戦いたかったんです・・・それが叶うんだって・・・思ったのに・・・。」

ぼろぼろと雫をこぼして、シーボーズさんは訴える。

「・・・ごめん、シイちゃん、アタシまた弱気になってた。」

「ミクちゃん!」「ミクさん!」

「アタシ、まだ諦めないよ!このチャンス、絶対掴んでみせるから!」

「けど、問題は何か一つ解決してないわね。」

「ガッツはどうなの?」

「わたしはマコと一緒に『ジェミニイ』を組んでるから。」

「やつぱり、私かアギさんが組んで・・・。」

「いや、ムリしてくれなくていいんだよ2人とも?」

「なによ、簡単な話じゃない。」

「マコさん、簡単ってなにが?」

「あなたがミククラスのパートナーになれば済む話じゃない。って話よ。」

「えっ。」

「別に『人間が参加しちやいけない』なんてどこにも書いてないじゃない。自分が賢い自覚があるなら、もつと頭使いなさいよ。」

「いや、それはバカの真似事だよ。」

「なんだって?」

「いやその・・・その考えがなかったわけじゃないんだよ?」

「一応、最後まで見つからなかったら、僕が立候補するつもりではあったんだ。あくま

で最後の手段として。」

「なんでそれを先に言わなかったの?」

「一昨日も言ったけど、僕は正直あんまり目立ちたくないんだ。人前に出るのが怖いってのもあるけど、それ以上に『戦いたくない』って気持ちがあって……。」

「戦いたくない?」

「いくら大怪獣ファイターがスポーツだからといって、女の子に手を挙げるようなことはできるだけしたくないんだ……いや、女の子じゃなくても、他人を傷つけるようなことはしたくない。したくない。」

「……あんた、ちよつとセコいよ。」

「?」

「あくまで大怪獣ファイターはスポーツだって、それはわかる。けど、あんたが他人を傷つけたくなって戦えないのは、自分の弱さから逃げてるってだけよ。他人を、私たちが逃げる理由にして。」

「うっ……ごめんなさい。」

「別に。ちよつとでもあんたのことを見直した私の方がバカだったってだけ。」

「ちよつとマコ!」

「あんたはだーつとれい!」

また痛いところを突かれてしまった。マコさんはシンジに対して容赦がない分、齒に衣着せぬことを言ってくる、ミカとは別のベクトルで。

「シンちゃん、たしかにシンちゃんの言いたいことはわかるし、気持ちも理解できるよ。」

「ミカ……。」

「けど、だからこそシンちゃんは間違ってる。大怪獣ファイトはスポーツだよ。スポーツだからこそ、全身全霊、力と心を込めてぶつかり合えるんじゃないかな？これは戦争とは違う、『愛』のある戦いなんだよ。」

怪獣とは、戦う本能を持って、それを破壊のために使う生き物だった。

殺し合うのが正義でないと知って戦うのが戦場だ。では、その『正義』を持って戦える居場所はどこか？

そのために大怪獣ファイトという舞台がある。

「怪獣娘のことを知るには、もつと直接ぶつかっていく必要だってあるか……。」  
「そうだね、見ているだけじゃわからないことだってある。」

「よし！決めた！僕も出場するよ！」

（今更だけど心配になるぐらいチョロいなあ。）

シンジが乗せられやすいのは今に始まった話ではないが。その様子を見てほくそ笑



んでいるのが一人。

「ふんっ。」

「やるじゃん、さすが私。」

「調子乗らないで私。」

「で、だ。改めてお願いするよ。ミクさん、ボクとタツグを組んで欲しい。」

「うん!こつちこそお願いだよ!シンジさん!」

「めでたしめでたしだね。」

「けどこれからが大変だよ?」

「そうだよ、戦う相手は大怪獣ファイトの猛者ぞろい、そうじゃなくても、今まで見たことない怪獣娘も参戦してダークホースだらけなんだから。」

「私たちとかね。」

「ガッツは強いからね・・・。」

そう言われると急に不安になってきた。少なくとも無様に負けて醜態を晒すようなことはしたくないが・・・。

「おーっし!怪獣・超獣・宇宙人なんでもこいやあ!」

「おーやる気だねミクちゃん!」

けど、こんなにやる気満天なパートナーがいればきつとうまく行ける。なんせ今度の戦いは、2人のパワーで戦うのだから！

「どうやら杞憂だったようね。」

「お前もやっぱり面倒見いいよな。」

「勘違いしないで。」

その様子をドアの向こうから聞いていた者が二人。

「あいつら、どんな戦いを見せるだろうな？」

「そうね、ミクラスのパワーに、シンジは機転を利かせて上手くフォローしてくれるでしょうね。」

「えらく高評価じゃねえか。」

「別に、客観的な意見よ。」

「それで、あなたは?」

「ん?オレ?」

「あなたも立ち聞きしてきたわけじゃないんでしょう?」

「やっぱり普段から立ち聞きしてるって自覚あるんじゃないか?」

「・・・パートナー、なってあげないわよ?」

「頼む!それだけは許してくれ!」

「まったく、人の心配をするよりも、まず自分の面倒を見なさい・・・。」

「恩に着るぜ!」

どうやら、こっちも上手くいったようだった。レッドキングさんの財布が少しだけ軽くなったことを除いて・・・。

## 風来坊は温泉が大好き

「つ、疲れた・・・。」

「おかえりなさいませシンジ様。」

ミクさんとのタッグ結成から数週間後、毎日が特訓と調整の連続だ。今まで何度か手合わせをしたことはあっても、こうして本格的に共闘することも、シンジとしては大怪獣ファイトに参加することも初めての事だ。

「疲れすぎて食欲もわかないや・・・ミクさんはすごいけど。」

「温かいスープなどはいかがでしょうか?」

「・・・軽く流し込めるやつをお願い。」

「かしこまりました。」

本当ならガツリスタミナのつく肉と、体を動かすガソリンになる米が食べたいところ。その点については牛丼が優秀だが、生憎胃が受け付けていない。かと言って、人間食わなきや死ぬ。食事することを煩わしいと思ったことはないが、こんなに辛いと思った事も無い。

「い、ちそうさまー。」

その考えも、ホクホクのジャガイモやニンジンと歯ごたえのいいソーセージが入ったポトフを口にしたとたん消し飛ぶ。体の疲れをお風呂で洗い流し、冷たいアイスを持って自室に戻ると、パソコンの電源を入れる。

「メッセージが一件・・・ネバダか。」

メールの発信されたサーバーアドレスから察する。とすると、アメリカ留学の頃に一緒に研究していたラボチームからのメッセージだろう。わざわざ暗号化されて秘匿通信で送ってきたということは、進めていたプロジェクトに進展があったということか。

『えつと・・・こんにちは、シンジさん。あつ、それともおはようかな？いつ開くかわかんないし・・・』

「こんにばんは、ですよ。大地さん。」

ビデオメールなのでシンジの言葉が届くことはないが、その相手の変わらない生真面目さに思わず頬を緩ませる。

おおぞらだいち  
大空大地さん、アメリカ留学の時に知り合った若手のサバネティクス研究者だ。彼

の所属するネバダの研究所でシンジはもっぱら研究活動と勉強に勤しんでいた。

『はろはろー！シンちゃんげんきー？ルイルイだよー！』

『アハハ、ごめんなさいシンジさん。お元気ですか？マモルです。』

その大地さんの後ろから声をかけてきた2人の研究仲間。やたらハイテンションな

少女は高田ルイさん、通称ルイルイ。もう一人おっとりとした男性は三ヶ月マモルさん。日々大地さんと共に研究に勤しむラボメンバーだ。本当はあともう一人、フアントン星人の怪獣娘さんもいるのだが、どうやら今はシエスタの時間のようだ。こうなるとテコでも起きないから。

『聞いた話によると、シンジさんも大怪獣ファイトに参加するそうですね。』

『ゴモたんちよーかわいいよねー!』

『僕たちの方でも、新しいバリアシステムの発送が終わりました。3日以内には日本に到着するはずですよ。』

ファイトの舞台を囲う電磁バリアー。その最新型でいつちゃん強力なやつが今回の為に用意されたが、それを作ったのが彼等なのだ。

『それともう一つ、以前から温めていたプロジェクト・・・僕達とシンジさんの共同開発の一つも完ロールアウト成しました。』

『詳しくは、いつも通りの暗号を解いてね☆』

『まあ、軽い頭の体操だと思つてチャレンジしてみてください。シンジさんなら解けるはずですから。』

シンジはメールに添付されたファイルをクリックして、中身を確認した。

「クロスワード・・・」

雑誌の懸賞のように、出来上がった単語をパスワードに入力すれば開く仕掛けだ。

「よっし、やってやるか・・・。」

『シンジさんが帰ってから、ラボも少しだけ広くなった気がします。』

『けど、デスクはそのまま残してあるので、いつでも使ってくれていいっすよ！』

『また来てねー！今度はエレキングちゃんのこと教えてねー☆』

サクサクと問題を解きながら、メッセージを聞き流す。思い出されるのは、アメリカ留学の日々。

彼等に会ったのは、白神博士の紹介だった。ネバダ州はエリア51にほど近い怪獣娘に関する研究所に案内され、そこに所属するラボチームが大地さんたちだった。

その主な研究内容は、怪獣娘の力をデータ化し、それをサイバーの力で再現するというものだ。その研究に、バディライザーと怪獣カードが大いに役立った。シンジとしても、その力をもっと発展させることが出来たので万々歳だった。

なにより、こんなに楽しい仲間が増えたことは僥倖だった。同じ科学オタクの仲間には高山博士もいるが、ラボチームとは歳が近くて、怪獣娘に近づくための研究をしていたのでより意気投合できた。

特に大地さんは、ゴモラのファンだというから余計に仲良くなって、サインをねだられてしまった。僕のじゃなくてミカのね。





シンジが大怪獣ファイトに参加することが決まって数日後。旅立つ前お世話になったSSPの事務所へと足を運んだ。

「キャップにはカップのセット、ジェッタさんには帽子、シンさんには隕石のカケラを。」

「へえー、お洒落ね。ありがとう！」

「かつこいいじゃん！気に入ったよ！」

「これはひよつとして、アリゾナはバリンジャークレーターの・・・！」

「具体的にはどこに行ってたんですか？」

「主にエリア51近くのラボで研究漬けでした。結構忙しくあちこち動き回ってましたが・・・。」

「エリア51って、宇宙人の研究所があるっていう、あの？」

「そうですね、中に入ったわけじゃないんですけど。」

「でも、怪獣娘がいるのに、宇宙人ってのもなあ・・・。」

出されたおいしいケーキに舌鼓を打ちながら、旅の思い出を語る。研究、特訓、研究、特訓、あと観光な毎日だったが、それらすべてが充実していた。

「宇宙と言えばそういえば・・・。」

「どしたのシンさん？」

「いえ、この前譲っていただいた電波受信器のことなのですが。」

「なにか問題でも?」

「いえ、問題というよりもここは進展と言った方が適切かもしれません。あの後、詳しく機械そのものについて調べてみた結果、あの装置はどうやら宇宙からの電波をキャッチしていたようなんです。」

「宇宙からの電波?」

「宇宙からは常に莫大な量の電波が降り注いでいます。その中には、地球外の知的生命体、つまり異星人が発した人工的な電波も含まれている可能性があります。」

「あの装置は、その宇宙人の電波もキャッチしてたつてこと? SETI みたいに。」

「そうです、かくいう僕も SETI には参加していたのですが・・・ちよつと失礼。」

「ところで、SETI ってなに?」

「Search for extraterrestrial intelligence 地球外知的生命体探査の略です。莫大な情報量に組織が対応し

きれないから、民間のボランティアにも手伝ってもらうつていうプロジェクトもあるんです。」

「へー。」

「あの装置が収集していた電波の情報をちよつと纏めてみたんです、がつ!」

「あーあー、またこんなに散らかして！いい加減にデジタルで保存したら？」

「紙媒体が一番信頼のおけるデータベースになるんです！えーっと・・・これです、これ。」

「1420MHz・・・？」

「水素の発する電波の波長です。水素は宇宙で最も存在する元素のひとつですから。」  
原子番号1、電子殻1の、もつともシンプルな原子。それが水素だ。ビッグバンでこの宇宙が誕生したとき、電子がそれぞれ寄り集まって様々な原子を作り出したが、水素はそのなかでもあぶれた、いわばポッチなのだ。

「そんなにありふれてるものなら、別に珍しい物でもないんじゃないの？」

「超新星爆発・・・とか？」

「確かに、世界初のSETIとなったオズマ計画の発端は、30日間にわたる1420MHzの電波の観測でした。しかしそこからは結局、知的文明の痕跡は見つからなかったのですが・・・このデータを見てください。」

「・・・明らかに定期的に、周期的に観測されてるな。それもこの数か月の間で。」

「ひよつとしたら、今までもこの先もずっとこのパターンで来ていたのかもしれない。」

「ってことは、外宇宙からの信号をキャッチしてること?!」

「すごいスクープじゃない！なんで早く言わなかったのさシンさん！」

「まだ決定的な証拠があるわけではないので・・・それに、まずはシンジさんに報告するのが先決だと思います。」

「そ、それもそうか・・・ちよつと早合点だったか・・・また炎上するところだったかな。」

「急いでは事を仕損じる、つてね。まずもつと調べてみてからでいいんじゃないですか？ひよつとしたら、人工衛星かなにかの電波をキャッチしてるだけなのかもしれないし。」

パラパラとデータをめくり、一通り目を通してみるが、他には何もめぼしいものは見つからなかった。強いて言うなら、明らかに大きい反応が、突発的に起こっているところだが、これについては心当たりがあるので省略しておく。

「それにしても、宇宙からの電波か。アメリカで知り合った人もそんなことを言っていたな。」

「ネバタの研究員さんですか？」

「そう、大空大地さんっていう人なんですけど、大地さんも『宇宙の声』を聞くのが好きなんだつて。」

「宇宙の声？」

「さつき言った、宇宙から降り注ぐ電波を音声パターンに解析して聞くんです。電波は様々な配合で降り注いでくるから、音にも二つと同じものが無いんです。まるで万華鏡みたいな……。」

「ロマンティックねえ……。」

(キャップには似合わなさそうだけど……。)

「なんか言った？」

「いやなにも。」

「ぜひ一度お会いしてみたいですね、研究の事とかも話し合ってみたいです。」

「そういえば、SSPの方はどうですか？」

「あれから好調よ。ときたま調査の依頼が舞い込んできたりするわ。」

「ほとんど根も葉もない噂ばかりだったりするけどね。」

「そう……悪い事とかはないんですか？」

「んー、まあブログやら掲示板やらに荒らしが来たりすることもあるけど、気にするよなものもないわ。シンジさんに気を使ってもらおうようなことは特にないわ。」

「そうですか。」

「そうそう！今度大きな仕事が入ったんだよ！」

「ジエツタ君、あの話ならまだ決定事項ではないはずですよ？」

「いいじゃん、絶対今度も成功するって！シンジさんもいることだしさあ！」

「なんの話ですか？」

「えつとね、まだ声がかかったただけなんだけど、大怪獣ファイトのタッグトーナメントの実況をやることになったんだ、オレたち！」

「へー、すごいですね！」

「以前の、アイラさんの事件の効果があつたみたいです。怪獣娘への関心を惹く為に、私たちが適任だつて。」

「なるほどなあ……。」

そういうことなら合点がいく。あの一件以来、単純にSSPのフォローになった人もいるだろうし、幅広い層から大怪獣ファイトへの、ひいては怪獣娘への関心を惹けるとなるならいい判断だろう。

「というわけで、シンジさんもがんばってね試合！」

「あれ、その話ももう行ってるの？」

「大会開催の情報も出ましたし、それと同時にシンジさんのことも出回ってますよ。」

「うえつ、本当だ！知らなかった……。」

「シンジさんのファンもいるってことだよ。」

一応公用にしているSNSアカウントにも、既に激励の言葉が寄せられてきていたの



「ムー？」

その、すごく・・・肌色です。

「Oh、ゴモラの言っていた通り、シンジはムツツリさんですネー。」

「否定はしませんが・・・というかキンググジョーさん、ラジオ収録なら変身する必要なかつたんじゃないですか？どうせ見えないのに。」

「甘いデスよシンジー、ゴーフルよりも甘いデース。」

「ゴーフル？」

神戸・元町にある風月堂の名物お菓子。ワツフルのような薄焼き生地クリームがサンドしてあって、見た目も上品でおいしいよ。

「ファンの皆サンが求めているのは『キンググジョー』なのデース、だからワタシもキンググジョーになる必要があったのデース。」

「キンググジョーになりきる・・・。」

「まあ、元から私がキンググジョーなんですけどネー。けどそういう考えって大事だと思いまース。」

演じている自分、というわけでもない、キンググジョーさん自身の素なんだろう。けど、そこには血の通った信念がある

「だからシンジも、普段皆という時のようにしてください。違う自分を演じる必要



なんかないんですヨー。」

「違う自分か……。」

人は心に仮面を被っているという。『本当の自分』とは素顔のことなのか、それとも『誰もが知っている』仮面の方のことなのか。ともあれ、目の前にいる彼女は変身を解除し、元の人間の女の子に戻った。

「サテ……ワタシも今は『クララ・ソーン』ただの女の子デース、エスコートしてくださいネ、シンジ？」

「エスコート、つて？」

「今日はワタシももうフリーですから、シンジと一緒にどこかへ行きたいデース！それでもっと仲良くなりまショウ！」

「レッツゴー！と先陣切って歩き出すキングジョーさん、もといクララさんを追ってシンジも慌てて駆け出す。」

「とは言ったものの、行くアテとかあるですか？」

「ないデース☆行き当たりばったりデスねー。シンジは普段どこを歩いているんデスカ？」

「んー……みんなと一緒ですね。アキバ行ったり、原宿行ったり、巣鴨行ったり。」

「シンジ自身はどこへ？」

「・・・あんまり出歩かないかな、いつつも研究所かジムで。」

「そこがアナタの場所なんですネ。なら今から行きまショウ！ワタシとアナタだけの場所へ！」

このフレンドリーさは間違いなくクララさんの美德だけど、並の男なら間違いなく勘違いさせられる。

「とりあえずランドマークを目指して歩いてみまショウ！」

「おー。」

それから数十分後。

「結構いろんなものがありましたネー！カワイイお土産屋さんやお洒落な家具屋さんトカー！」

「そうですね、あんまりあいうお店は覗かないんですけど。」

「シンジはラボで研究している方が好きデスか？」

「他にやることがないからやっているだけ、というのもあるかもしれませんが。まあそうです。」

「ワタシも機械いじり得意デスよ！」

「開発のペガッサさんもそうですけど、クララさんはどっちかって言うソフトの人ですよ。僕はハードの人。」

「けど、乙女のガードはとってもハードですよ?」

「はいはい、わかっております。」

軽いようでその実非常にしたたかだ。シンジはどちらかというところ、こういう人の方が好みなのだが……。言葉通りそのガードは異常に固すぎる。

(それだけ場数を踏んできたということか……。戦闘でも人間関係でも。) そうでもなきやモデルなんかやってらんないだろうけど。

「もうすぐお昼デスねー。」

「そうですね、あと20分ぐらいで正午ですね。」

太陽がもうすぐお空の真ん中に着く。

腹が、減った。

「お昼ゴハン、どこかで食べまショウか。」

「そうですね、キングジョーさんは何かリクエストは?」

「ソウですね……。ココはシンジのチョイスに任せマース♪」

「それなら……」

牛丼、と喉が求めようとしたのを間一髪湧き出た唾液と一緒に飲み込み、慌てて言いなめる。

自分一人ならいざ知らず、相手は女の子。デートに牛丼を選ぶなんてデリカシーのな

い男だと思われる！かといってファミレスというのはちよつと味気ない。決して悪いとは言わないけど、せつかくお洒落な街に来たのだから、

「小さくても、お洒落なお店がいいですね。ナイフとフォークを使うような。」

「Oh, フレンチやイタリアンですネ♪」

「そのどつちかなら、イタリアンがいいかな・・・。」

「いいデスね！」

フランス料理なら、ガレット、フオアグラ、エスカルゴといったところか。しかしそんなお上品なのは、貧乏舌なシンジの口には合わない。米と肉で腹を膨らませるのが、シンジの一番好きな『料理』なのだ。そういう意味でも牛丼が好物なのだが。

シンジの好みはさておき、一方のイタリア料理ならピザ、スパゲッティ、リゾットなんか、日本でも親しみのある料理が多い。これならシンジも安心して食べられる。

「それではさつそく探しまシヨウか！スイッチ・オンつと・・・。」

「地図アプリですか？」

「色んなレビューサイトの情報を纏めたアプリですよ♪グルメ以外にも、シヨッピングやサービスにも対応してマス♪」

クララは歩きながらソウルライザーを起動させ、スラスラと指でなぞってお店を探す。でも歩きスマホはやめようね！

「フーン……もう少し歩いたところに、よさそうなお店がありますネー。ソコにしますか?」

「そうですね、ちよつと歩くぐらいなら……ん?」

同意しようとしたところを一瞬辞めて、クンクンと鼻を動かす。

「このニオイは……チーズかな?」

「ソノようです……ネ。」

「あつ、あのお店かな?」

キヨロキヨロと辺りを見回すと、一軒の小さなお店が目に入った。

『Un gigocoliere』多分イタリア語で書かれた緑の看板があつた。英語ではないことは確かだとして、ひよつとするとフランス語かもしれないが、フランス料理店なら看板の色は『青と白と赤』<sup>トリコロ</sup>だと思う。あのお店の外観は、看板が緑、壁が白、窓枠やドアが赤だ。

「アプリにはあのお店のこと、書いてありました?」

「ウーン……いいえ、無いデスね。デモちよつと覗いてみませんか?」

そう言うや否や、クララさんは入口に近づいていく。

「どうやら、まだ開店準備中みたいですネ。開店は12時からって書いてありますし。」

「イクスキューズミー?どなたかイラッシャイますカー?」

「入っちゃったあ!」

さすがアメリカン、文化が違うぜ!

「入って大丈夫なんですか?」

「大丈夫デース!こつちにはテレビの力がありマース!」

「アツハイ。」

おお、ナムアミダブツ!なんという職権乱用であるか!

「すいゝまつせん、まだ開店準備中ですので。もうしばらくお待ちいただけますでしょうか?」

「ああ、ごめんなさい、もう少し外で待っていますから。ほらクララさん。」

「ハイイ♪」

「んん?!?!その声は?!」

奥から店主と思わしき声が聞こえてきたので、シンジは一言謝って一旦外へ出ようとしたが、突如クララの声に反応したその主が厨房から顔を出してきた。

「アラ、アナタは……。」

「!!やっぱり!おジョおおおさんでしたか!!なぜここに?」

やたらテンションの起伏の激しい、黒一色の恰好をした男性が現れた。

「クララさん、この人は？」

「ワタシのフアンの人ですよ！」

「おやあ？あなたは・・・まさか!？」

「いや、フアンの方が予想するような人間ではありませんよ？」

「たしか、濱堀シンジさん・・・でしたよね？GIRLS特務課の。」

「特務課というか、雑用課というか・・・。」

「今日はワタシのマネージャーなんですよ。」

そのフアンの、JJさんの本業がここのお店だったというわけだ。

「ささ、立ち話もなのでどうぞお席へ。」

「開店前なのにいいんですか？」

「いいんですよ！今日はツイてますから！」

窓際の見晴らしのいい一番いい席に案内され、お冷と共にメニューを渡される。

「そうデスねえ・・・ワタシは『今日の日替わりランチ』をお願いします♪」

「かしこまりました！」

「えつと・・・僕はそうだな・・・。」

クララさんと同じ日替わりランチでもいいと思ったが、今日はメインがアクアパッツアだという。魚の気分でもないし、どうせならピザやパスタが食べたかった。

と、ここまで考えたのはよかった。しかしこの先を余計な知識が邪魔をした。

(でも、本場のイタリアでメインは肉か魚の料理で、スパゲッティはそのひとつ前なんだよなあ。)

そもそも、貧乏舌のシンジにはフォークやナイフを正しく扱える技能もない。知識はあるにはあるが。

「いや、でも一番食べたいのピザだしなあ・・・。」

「シンジさんシンジさん？」

「はい？」

「マナーやコースがどうかヨリも、まずはおいしく好きな物を食べることが大事ですよ?。」

「え・・・。」

「うんうん、おジョーさんの言う通りです。お店はお客様の注文通りに作って、提供するのが役割ですから。」

「! じゃあ・・・スパゲッティはボロネーゼを、それから・・・ピザはシンプルなマルガリータを。あと・・・食後にイタリアンコーヒを。」

「かしこまりました、ピザは焼き上がるまで少々お待ちいただきますが、よろしいでしょうか?。」



「はい、お願いします。」

一礼し、JJさんはメニューを回収して厨房へと入っていった。その後ろ姿を見送り、お冷を口にして店内を眺めてみる。よく見ると、キングジョーさんのグッツがちらほら見受けられる。

「こんなに並べられると、チョッピリ恥ずかしいデスね……。」

「でも、本当にJJさんは熱心なファンなんですね。」

「エエ、とてもマナーがよくて評判なんデスよ。」

その中に何故かシーサーのぬいぐるみがあったが、沖縄土産か何かなんだろうか。

「お待たせいたしました。こちら、アンテイバスト前菜のカプレーゼになります。」

「トマトとモッツアレラチーズのサラダですネ♪」

一品目、インサラータ・カプレーゼ。イタリア語で『カプリ島のサラダ』の意。スライスされたトマトの上にモッツアレラチーズを乗せ、バジルで彩り、塩コショウとオリーブオイルで味付けしたサラダだ。この赤、白、緑の3色はイタリア国旗にもある。

「トマトのジュシーさと、チーズのまろやかさのハーモニーに、バジルがほどよいアクセントになっていいマスね！」

例えるなら、ナツクル星人とブラックキングのコンビ！グドンに対するツインテール！

「こちらのプロシユートはサービスになります♪」

「兄貴イ！」

二品目、プロシユートの生ハムメロン。メロンの甘みに、イタリアの生ハム・プロシユートの塩味がいいコンビだ。シンデレラの少女にはフライドチキンもいいけど。

「日本のハムよりも、結構塩分が強いんだね。」

「氣候の違いでシヨウね。」

「お待たせしました、こちら第一主菜のカルボナーラと、ブリモ・ピエットボロネーゼになります。」

「待ってました！」

三品目、カルボナーラとボロネーゼ。ホワイトソースに、塩漬け豚肉のベーコンを混ぜて、黒コショウでトツピングしたカルボナーラ。その意味は、炭焼き職人。炭焼き職人が作ったら、炭の粉が落ちてこんな見た目になるんじゃないか？という洒落な発想で作られた。ボロネーゼは、日本ではミートソースとして親しまれているが、このお皿にはなんと肉団子が入っている。これには泥棒一味も満足だろう。

「ソー♡最高デスね！」

「こんな贅沢なスパゲッティが、一生のうちに一度は食べてみたかった！」

そうこうしている内に、メインディッシュがやってきた。

「お待たせいたしました、こちら第二主菜のアクアパッツアになります。」

「Oh, これはスゴイデスね!」

四品目、スズキとアサリのアクアパッツア。副菜のミニサラダが添えられているが、あくまでメインは魚。東京湾で獲れたメインの魚介類をトマト、白ワイン、それからなんと海水で煮込んでいる。なかなか豪快な料理だ。

「これこそマサに、『海の味』デスね!」

「へー、おもしろいそうだな。」

「シンジも一口、どうデスか?」

「えっ?!」

そう言つてフォークに差した魚肉をきつと出してきた。勿論元々使っていたのとは別のフォークだが。「ええっ?!」つて声と皿が割れる音が厨房の方から聞こえて来たが、それはさておき。

「さあ、ドウゾ?」

「じゃあ・・・せつかくだから・・・。」

これが相手がミカだったら、一切の躊躇なく頬張っていたところだったが。少しだけ、ほんの少しだけためらうと、なされるがままに頂く。

「うん、おいしい!」

「デシヨウ?このお店を選らんで正解でシタね!」

「はい、他のみんなにも教えてあげたいですね。」

「他のミンナ……デスカ。」

今度はミカと……いやそれよりもエレキングさんと一緒に来たいかな。どういうタ  
イミングがいいか、色々想像を膨らませると、やつとお目当てのお皿がやってきた。

「お、お待たせいたしましたしグフウ……。」

「だ、大丈夫ですか？」

「なんでだよ……なんなんだよ……ハッ。お待たせいたしました、こちらマルガリー  
タです。」

五品目、シンプルなマルガリータ。バジルの緑、モッツアレラの白、トマトの赤、ま  
るでイタリア国旗だとはイタリア王妃・マルゲリータ談。シンプルが故に揺ぎ無く、奥  
深い。ちよつと端が焦げているが、ここがなかなか香ばしい。

「んっ……最高！大満足！とろけるチーズと、口の中で潰れるトマトの酸味がジュー  
シー！」

「おいしそうデスね。一切れ、いいデスカ？」

「どうぞ、さっきのお返し！」

「アッアッアッアッ!!」と声にならないような声が厨房から響いてくるが、それは  
さっておき。

「お、おま・・・ガクツ・・・。」

「大丈夫ですか本当に？」

「やつぱ・・・キツツイわ・・・お待たせいたしました、こちらエスプレッソになります。」

食後のドリンク、エスプレッソコーヒー。イタリアやフランスで飲まれるコーヒーといえどエスプレッソだそう。普通のコーヒーカップよりも小さいカップに抽出されたこいつは闇よりも暗く、炎よりも熱い。それはまぎれもなくヤツさ。

「苦ッ！夜明けのコーヒーとはこういうものか・・・。」

「ワタシはカプチーノをお願いシマース。」

シンジの飲む、JJのコーヒーは、苦い。曰く、イタリアで料理修行を終えた饞別に貰ったエスプレッソマシンを愛用しているとのこと。

クララが頼んだのはふわふわのミルクの泡が乗ったカプチーノ。まろやかな口当りに、もれなく鼻の下に白いおヒゲができる。あざとい。

「けどこの酸味クセになりそうです。口の中がリフレッシュされる感じ。」

「十分堪能出来マシタネ。」

というこゝで、

「「ちそうさまでした！」」

大満足だ。おいしい料理に、いい雰囲気のお店、そして可愛い女の子が相席と来れば何も文句はない。

「お会計は御一緒で？」

「イエ、別々でお願いしマス、あと領収書もお願いしマス。経費で落としマスから。」  
「ちやつかりしてらあ。」

値段もなかなかリーズナブルでいいね。

「あと・・・よろしければ、サインを・・・。」

「あ、『上様』でお願いします。」

「そうじゃなくて、おジョーさんに・・・あと良ければ写真も。」

「いいデスよー！」

有名人がお店にサインを飾るといふのはよくある話だ。クララも慣れているのか快諾した。有名人の隠れ家的小店としては、このお店の印象にはピッタリだ。

「あつ、サインならこの色紙どうぞ。」

「準備がいいデスねシンジ。」

「よくミカと一緒にいるので。色紙とペンはいくつか常備してあるんです。」

四次元バックパックからサインのセットを取り出すと、サラサラとクララは筆を走らせた。

「はい、バター。」

「それを言うならチーズでシヨウ？」

「面白くない？」

「ゼンゼン。」

はつきり言っちゃってくれる。

「ありがとうございますいまあああす！また来てくださいな！」

「エエ、また食べに来マスね！」

「GIRLSの皆にも宣伝しておきますね。」

じゃあねえと店の外まで見送ってくれたJJさんに手を振り再び歩き始めた。

「いいお店でしたね。」

「アソコにして正解デシたね。」

「なんというか・・・すごく充実した『食事』だったと思います。」

「それはちよつと大袈裟デスよお。」

家で食べるにはいいものを食べている。というか食べさせてもらっている。しかし自分の手で料理するということはごくごく稀だし、他人に作ってもらうのはもつと稀だ。チヨーさんはヒトじゃないし。

「いい食事には何を食べるかも大事デスが、誰と食べるかも重要だと思いまスよ？」

「誰と食べるか、か・・・。」

そういうえば、誰かと食事をするのもずっと久しぶりだった気がする。アメリカでもラボや特訓の仲間たちと社交辞令として食べることはあったが、日本では少なかった。デート以外での話だが・・・。

「実のところ、ワタシも牛丼スキですよ？ビーフポウルはニホンのファーストフードの代表格デスから！」

「えっ、そうだったんですか？」

「だからマタ一緒に食べに行きまシヨウね！」

「はい、よろしくお願いします。」

クララ・ソーンさん、すごくいい人だ。面倒見が良くって、なんだか包容力もある。また一緒に、どこかへ出かけたいな・・・。

そういうえばこれってデートだったんだろうか。

「今頃デスかあ？」

「クララさんは・・・そのつもり・・・だったとか？」

「乙女のヒミツデース♪」

手玉に取られているような感覚だが、それも悪くない。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



「へえ、いいところだな。」

マガちゃんたちと模擬戦をやつて直後のこと。マガジャツパちゃんのリクエストで温泉にやつてきたシンジは、一人男湯にいた。

「さーて、まずは泡風呂に……。」

「待ちな兄ちゃん、かけ湯してから入んな。」

「え？」

よく見ると、大浴場に先客がいた。

「あ、あなたは！」

「よう、また会つたな。」

「……誰だっけ？」

ズコーッ！と派手に飛沫を上げてその男性は湯船に突つ込んだ。

「いやいやいや！会つたことあるだろ！俺そういう顔してるだろ！」

「おお……おん？」

「ただの風来坊だよ！」

「風来坊？ああ、ああ！風来坊のお兄さんね！」

ようやく記憶の中の人物とが一致した。

「あのコートとハーモニカの音で覚えてたので、一瞬誰だか分らなかつた。」

「忘れてくれるなよ、人の顔を。嫌なことや恥ずかしいことは忘れてもな。」  
都合の悪いことをすぐ忘れるのは悪魔の生き方だつて聞いたけど。

「まあともかく、まずは体を先に洗えよ。温泉でのマナーだ。」

「はい。」

言われるがまま、蛇口の前に腰かけてタオルを泡立てる。

「そう、言っておかなきゃならないことがある。」

「えーつと、湯船にタオルは漬けない、髪も湯船に浸けない。」

「それから静かに入ることな。ただそうじゃなくて、もつと大事なことだ。」

「風来坊さんつて、あれですよね・・・もしかしたら・・・。」

「・・・皆まで言うな。もしかしなくてもそうだ。」

雲つた鏡を擦つて、その姿を目に留める。肩まで湯船に浸かっているあの人は、実は・・・。

「まず、お前が失つたと思つているウルトラマンさんのカードは、今もちゃんとある。」

「それは、どこに?」

「お前の中だ。お前自身の、体と心の中両方だ。」

「・・・融合状態つてことですか?」

「あんまり驚かないのな?」

「アメリカで、ちよつとだけ自分の体について研究してたので。」

「そうか・・・それ誰かに言ったか？」

「・・・信頼できる人達とだけです。」

「ならいいが。」

アメリカに旅立つてしばらくしてから、自分の体の変調に気が付いた。腕力がついたのは以前からだだったが、妙に平熱が上がつていたり、いやに筋肉の付き方がよくなったり。逆に寒さに弱くなつたりもしたが。研究した、と言つてもそれらの変調を具体的に数字化してみたただけだ。

「カードはあくまでウルトラマンさんの『力を形にした』だけであつて、本人と融合していたわけじゃない。いわば、ウルトラマンの因子つてやつだ。」

「因子?」

「ウルトラマンは、元は皆地球人と同じ姿をしていたんだ。彼らが光の巨人となつたのは、その因子によるものだ。」

「じゃああなたも、元は人間?というか、今が本来の姿?」

「そうだな、俺もウルトラマンになつてから結構な年月が経っている。」

「それつて、どれぐらいですか?」

「・・・地球で言えば、人類史の誕生前だな。ここの地球とは違うが。」

「そんなに?!」

「ウルトラマンの年齢ならそれぐらい普通だ。」

西暦の場合は大体2000年というところだが、それより前の石器時代の終わり（簡単に言うと農業のはじまり）は9000年前、現人類の登場が4万年前頃だと言われている。その現人類が、地球の原住種族なのはさておき、ウルトラマンの種としての紀元は26万年前の太陽の消滅と人工太陽の完成と同時である。（ウルトラの星の文明そのものは、それ以前からあった模様。）

「気が遠くなりそうです・・・。」

「話が逸れたな。そのウルトラマンの因子が、今もお前の中には残っている、というか融合している。このままだと、お前もウルトラマンになってしまおう。」

「本当に?」

「正確に言うと、ウルトラマンへと進化していく。体の変化もその前兆だ。」

「具体的には他には?」

「まずウルトラマンには、特別な能力が備わる。光線とか飛行能力とかな。」

「けど人間の姿ままだやあ、光線の反動には耐えられないし、マッハで飛べば体が千切れるんじゃないですか?」

「そうだ、そのために銀色の肌に変化するんだとも言っている。」

つまり、体に変化したから能力を得るのではなく、能力を使うために体に変化する、ということだ。

「その変化が既にもう現れ始めている。例えば額にビームランプが灯ったりな。」

「え？おデコのこれ傷じゃなかったんですか？」

「気づかなかったのか？」

「カサブタだと思っていました。」

大人になりたい僕らのわがままをひとつ聞いてくれ、とは言わないが。アイラとの決戦の時、最後に喰らった額の傷を鏡を見ながら擦った。たしかに×印型の痕が消えずにずっと残っている。

「本来なら、一時的にウルトラマンさんの力を借りるために、カードという形で別に保管させる予定だったんだが、お前の場合ウルトラマンの因子と親和性が良すぎた。だからこうして警告しに来た。」

「警告？」

「お前が間違った力の使い方をしないようにな。」

「僕そんなに信用無いですか？」

「悪い意味じゃない、いい意味でだ。ある意味悪いんだが。」

「どっち？」

髪をシャンプーで梳かしながら受け答えを続ける。目を閉じていても声はちゃんと返ってくる。

「お前の場合、深く考え込みすぎる。それこそ、ウルトラマンの重<sup>プッシュ</sup>圧に潰されそうなくらいにな。」

「まあ、自覚はあります・・・。」

「大いなる力には、大いなる責任が伴う、と前には言ったが。その力をなんのために、いつ使えばいいかは説明していなかった。」

泡を洗い流して鏡を見たが、そこに彼は映っていないかった。代わりにドアが開く音が聞こえると、そこへ風来坊が入っていった。あわててシンジはその後を追いかける。

「望まぬ力を持つて困惑するということはわかる。だが、力を持った時周りの人間にも影響を及ぼすこともある。そしてそれは、大抵悪い結果を招く。」

「・・・僕がウルトラマンのカードを手にした時、すごく浮かれていました。それこそ、自分にはなんでも出来るんだって、思いあがるくらい・・・その結果、アイラの苦しみに気づけなかった・・・。」

「ウルトラマンだって、完璧じゃない。時に間違いもするし、救えない命も、届かぬ想いもある。」

「・・・暑い。」

風来坊はとても暗い声でそう言ったが、シンジは話半分にしか聞こえていない。オレンジ色の明かりが灯り、熱気の立ち込めるここは密室。

「だが、どんな時も決して諦めず、不可能を可能にしてみせる、それがウルトラマンだ。」

「あちい・・・。」

「ウルトラマンさんが一番伝えたかったのはそれだ・・・おい聞いているのか？」

「あついです・・・もう無理。」

「やれやれ、ムリはするなよ？」

フラフラと出口へと足を動かし、サウナを後にすると、今度はすぐ傍の冷たい場所へとやってくる。

「その為には、自分の力の限界を把握しておくことが必要だ。つまり自分の能力をコントロールできるようにしておくこと。」

「冷たい！冷たいい！」

「大前提として、無理はしても無茶はするな。過ぎた無茶は自分の身を滅ぼす。」

「無理無理無理！」

「ちゃんと汗流してから湯船に入れよ？」

つくづく水風呂は人類が入っていいものじゃないと思う。シャワーをさつと浴びて





「成人男性はカップ一杯が適量だ。」

飲泉、お湯を飲んでミネラル補給だ。ただし用量は守る事。

「そんなところだな、俺が教えられる基礎の部分は。基礎を鍛えるのは得意だろう？」

「普通に温泉を楽しんでいただけでは？」

「楽しむ心を忘れたら、心が渇くぞ。」

最後に、大浴場に戻ってきて並んで浸かる。やつぱりここが一番落ち着く。

「最後に一つだけ、俺自身からのアドバイスだ。失敗に悩んだり、自分を見失って迷うことは誰にだってある。」

「ふんふん。」

「だが、どんな結果や、そこに至る過程があっても、それが今の自分だ。そんな自分のことを信じてくれる仲間がいるなら、自分で自分を信じろ。それが『本当の自分』だ。」

「はあ……？」

「いずれわかるさ、今はわからなくても。どれだけ遠回りすることになるかもわからねえけど、辿り着いたらそれが一番の近道だったと思える。」

「長つたらしく話すのは俺のガラじゃねえや。じゃあ俺はもう行くぜ。」

「はい……ありがとうございました。」

「その言葉は、信じて待つてくれる仲間と言いな。」

ざばあつと立ち上がり、タオルを取つて彼は出ていく。

「あ！そういえば。」

「なんだ？」

「名前、『次に会つた時』でしたよね？」

「ああ、そういえばそうだったな。」

「俺の名は・・・『クレナイ・ガイ』だ。」

「クレナイ・ガイさん・・・また会いましょうね。」

「その時には、旨い菓子でも用意していてくれよ。あばよ！」

その人、ガイさんは・・・普通に出口から出ていった。本当にウルトラマンなんだろうか？と思いたくもなるが、きつとヒーローの多くは、こんな『どこにでもいそうな人』なんだろう。ちよつと変わつてるけど。

「自分を信じる・・・か。」

僕は、僕を信じているだろうか？ミカたちは僕を信じてくれている。それに応えらるだろうか？以前ガイさんに言われた『闇を抱ける強さ』を、本当に僕は持つているん

だろうか？そもそも、その強さってなんなんだろう。

「・・・考えすぎるのもよくないか。」

少しのぼせているのかも。こういう時は気分を変えよう。まだ外の露天風呂には行っていないかった。景色でもじっくりと眺めるとしよう。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「・・・はっ。」

「起きた？」

「アギちゃん・・・今何時？」

「8時半かな。」

目が覚めると飛び込んできたのは、こつちが眠くなりそうな寝ぼけ眼。ちよつとだけ休むつもりだったけど、もう用意しないと。体を起こすとすごく重い。

「もうちよつと休んだら？どうせまた寝てないんですよ。」

「でも、みんなを待たせちゃうし。というか、てつきりミカが来たのかと思ってた。」

「ゴモたんは今日仕事。みんなにはボクが連絡しておくから、もうちよつと寝てていいよ。」

「いやでも・・・。」

「もう、シンジさんがんばりすぎ！」

「アバー！」

むんずつと腕を掴まれてベッドに放り投げられる。だんだんアギちゃんも乱暴というか雑になってきた。

「シンジさんが頑張ってるのはみんな知ってるから、少し休んでも誰も文句言わないって。」

「体動かしてないと不安なんだけど・・・。」

「じゃあ、ボクがここにいてあげるから。」

「・・・積極的になったよね、アギちゃんも。」

「誰のおかげかな？」

「わかった、ちよつとだけ休ませてもらうよ。」

ナチュラルにアギラが膝を差し出してきたので、シンジも一切躊躇いなく頭を乗せる。

「ぬひいゝ寝心地最高〜。」

「なに変な声だしてるのさ・・・。」

「こうなつたらとことん休んでやるからなく覚悟しておけよ〜？」

「いいよ、シンジさんのためなら。」

「・・・普通に返されたらなんか面白くない。」

「なにそれ意味わかんない。」

「それにしたって、シンジさん頑張り屋さんだよ。」

「ただ自分に出来る事を最大限努力してこそだよ。」

「だからって、ちよつと気負いすぎじゃないかな？ 見てる方が心配になるぐらい。」

「そうかな？」

「そうだよ。・・・今ならゴモたんが前に言つてたこともわかるな。」

「前に言つてたつて？」

「シンジさんに危険な目に遭つてほしくないっていう心配。シンジさんのことを、もつと大切な人だつて思うようになってからね。」

「でも、がんばるのやめちゃつたら、僕じゃなくなっちゃうから。」

「そういうところも含めて好きなんだつてわかつてるけど・・・それでもなんか、ほつとけないよ・・・。」

アギラの指がやさしくシンジの頬を撫でる。慈しむように、悔やむように、温かい感触が線を描いては止まる。

「本当はどこにもいかないで欲しいって思つてる・・・そんなんじやダメだよ、シンジさんの自由なんだから。」

「僕は・・・どこにも行かないよ。行つたとしても、必ず帰ってくる。次もまた、アギ

ちゃんに膝枕してもらおうために。」

「んもー、ボクは結構に本気にしてるんだよ……。」

「本気で思ってくれてるなら、嬉しいよ。アギちゃんのいる場所が僕の帰る場所なんだって思えるから。」

「あつ……。」

シンジの手のひらが、アギラの頬に当たる。じんわりとお互いを温め合うように熱さが伝わってくる。

「だから信じて欲しい。僕の事を、僕がもっと高く跳べることを。」

初めてかもしれない。『僕を信じて』なんて言葉を誰かに使ったのは。

「……そんなの言われたら、なんにも言い返せないじゃん……。」

「この前の仕返しだよ。」

「むう〜。」

「ふわあ……ちよつと眠くなってきたので寝る。おやすみ。ぐう。」

「あつ……この……。」

わざとらしく寝息を立てていたが、やがてそのうち本当に眠り始めたので怒るに怒れなかった。

「しょうがないんだから……。」

攻めたり攻められたりの、シーソーのような関係。だからずっと対等でいられる。同じ地に足を着けて立っていられる。

「シンジさんがそんなこと言うんだったら、ボクだって・・・。」

今なら、誰も見ていない。だったら、これぐらいしたっていいよね？

「シンジさん・・・ダイスキ・・・。」

他の誰も知らないけれど、誰かさんの唇と、誰かさんの唇が触れ合った。

## 50キ口を突つ走れ!

とうとうこの日がやって来た。あの血の滲むような訓練も、汗を流した技の開発も、涙を飲んだ減量も、全ては今日という日の為。減量が必要だったかは知らないが。

「でもなんで江ノ島集合なんだろうね?」

「予選はここでやるんじゃないかな?」

島全体が龍の巣で、九月九日には例祭が行われるという、ここは江ノ島神社。日本三大弁財天のひとつで、縁結びの御利益もあるという。

「龍と怪獣をかけてるんだろね、それに縁結びつてのがタッグつて形にもなつて。」

「ふーん、シンジさん来たことあるの?」

「ないよ。今日が初めて。」

もつとも、今日に限ってはデートしているカップルの姿は見当たらないが。その代わりに大勢の女の子たちが集まっているし、皆怪獣娘だ。

「50組ぐらいいるのかな?」

「これだけ集まるとすつごいね、みんなとここで戦うのかな?乱闘?」

「さすがに神様祀ってる境内で乱闘はまずいでしょ……。」



その中でシンジが会ったことのある怪獣娘は半分ぐらい。ミクラスはもつと少ないかもしれない。日本中から怪獣娘が集まってきたのだ。

「おーいシンちゃん!ミクちゃん!」

「おつ、ゴモたんだ!おーい!」

「おはよ、シイさんも。」

「おはようございます!」

その中で見知った顔にも会えた。

「オッスお前ら!」

「レッドキング先輩!げっ、エレキングさん……。」

「げっ、とは大層なお言葉ね。」

「レッドキングさんのパートナーはエレキングさんだったんですね。」

「エレちゃん出ないかとも思ってた。いっつも戦闘タイプじゃないって言ってるし。」

「レッドキングに泣きつかれたから、仕方なくよしかたなく。」

「おいエレ!それ言うなよ!」

「レッドさんも大変なんですネ……。」

「それに、あの子たちの事がちよつと気になったから。」

「あの子たちって……マガちゃんたち?」

「そう、あなた達に勝つてすっかり調子づいちゃって、失敗しないか心配だわ。」

「でもそのためにここに来たんでしょ？エレちゃんやっぱり面倒見いいねえ。」

エレキングさんの指さす先に、件の少女たちはいた。明るく活発な性格のバスサーは既に見ず知らずな怪獣娘に声をかけて仲良くなっている。一方ジャツパの方も、そのフローラルな香りになれそうですね。」

「すぐ人気者になれそうですね。」

「声かけに行かないの？」

「その必要は無いわ。」

その内に向こうの方から声をかけに来たのだから。

「オハヨーございます！エレキングさん！レッドキングさん！」

「おはようございます、ゴモたんさんにシーボーズさんにミクラスさんにシンジさん。」

「ええ、おはよう。」

「あつ、ベムラーさんとゼットンさん。」

「おはよう、シンジ君。」

「おはよう。」

一方シンジは遠巻きにポツンと佇んでいたベムラーさんたちを見つけて駆け寄った。

「なんでこんな端っこに？」

「みんなゼットンを見て萎縮してるんだよ。」

「慣れてる。」

「がんばってくださいね。」

「ああ、だが戦うからには手加減しないぞ?」

「はい、真剣勝負で行きましょう。」

シンジとベムラーはグツと握手を交わし、それを見ていたゼットンさんも手を差し出す。

「・・・がんばって。」

「はい、ありがとうございます!」

ああゼットンさんが万に一つも負ける要素は無いか。

「ハローシンジ!ゼットンも!」

「えつ、キングジョーさん?キングジョーさんも出場するんですか?」

「ハイ!今日はワタシのシスターと一緒にです!」

「シスター?」

キングジョーさんの後ろに、誰かが隠れている。

「ホラ、挨拶してクダサイ! <sup>トウ!</sup>II!」

「は、はじめまして……。」

金髪縦長ツインの、キングジョーさんによく似た女の子。ナイスバディなキングジョーさんに比べると一回りほど小さいが。色々と。

「妹のキングジョーIIデース!」

「キングジョーさん妹いたんだ。」

「アノ……あの、初めまして……。」

「妹は引つ込ミ思案なんデース。だから今日はソレをコクフクしてもらおうと思ったのデース。」

「結構スパルタだねキングジョーさん。」

可愛い子には旅をさせよとは言うが。

「こう見えてIIはトツテモ強いデースよ!ワタシに負けないぐらい!」

「そりゃ強敵だ。よろしくね、II。」

「は、はい……。」

ベムラーさんが差し出した手に、おずおずとIIも応える。先輩らしく振舞うベムラーさんの姿になんだか微笑ましくなる。

「シンジさん、そろそろ予選が始まるんだって!」

「そっか、じゃあ向こうに行きましようか。」

「ハイ！予選ってナニをするんデスカね？」

「ここが江ノ島で、本会場が国立競技場だから、やることはある程度絞られてくるが。」  
特設モニターの前には既に人だかりが出来上がり、今か今かその放送を待っている。

「くう・・・緊張するなあ・・・。」

「ミクラス大丈夫か？まだ始まってもないのに倒れたりするんじゃないぞ？」

「大丈夫ツスよ！武者振るいです！」

『皆さん！おはようございます！こちらは国立競技場特設実況席、実況はオレたちSPのジエッタと！』

『松戸シンです！今日はよろしくお願います！』

ようやくしてついに放送が開始された。中継の一部がテレビ放送されるほか、ドローンによる映像が逐次ネット放送にもあげられるそうだ。

『そしてなにより今回の大会は、普段の大怪獣ファイトと違う大きな点があります！』

『普段はジョンソン島からの中継放送ですが、今大会の本戦トーナメントは、ここ国立競技場で行われるんです！日本列島本土の、それも東京のド真ん中で行われるのは今回が初の試みとなっておりますねえ!!』

そう、今回はなんと大怪獣ファイトが生で見られるのだ。既に観客席には大勢のオーディエンスが詰め寄せ、超満員となっている。

『皆さんこの初めての、ひよつとしたら一度きりかもしれないチャンスに大いに期待の声をあげております！聞いてくださいこの歓声！』

『チケットも僅か1時間経たない間に完売したとも聞いていますが、それほどの熱狂ですよこれは！まるでこの国立競技場建造の元となった、1964年の東京オリンピックを思い出させられます！』

『さて、会場の状況はひとまず置いておいて、まずは予選の内容の発表から始めましょうか！現場のピグモンさん！』

「はーい！こちら江ノ島のピグモンです！みなさん、お元気ですかー?!」

「はーい!」

「あれー?おかしいですねー、こんなに怪獣娘さんがいっぱいいるのに、全然聞こえないですよー?お元気ですかー!」

「!!!!!!はーい!!!」

「あれれー?まだまだ足りてないですよー!お元気、ですかー!!」

「!!!!!!はーい!!!」

『ピグモンさん、そろそろ進めてください!』



「16位か・・・。」

ざっと見ただけでここには50組はいる。とすれば、30組以上に勝たなければならなくなる。

「しかも空を飛んでもいいのか。」

「海を泳いでもいいのかな？」

「でも、二人三脚でゴールしなきゃいけないえだろ？どっちかだけが空を飛べても、相方を抱えて飛ばなきゃいけないぜ。」

「よほど飛行能力に優れていなければ、あまり推奨できないわね。」

江ノ島から国立競技場まで、直線距離なら47kmほど、交通に沿えば60kmほどになる。フルマラソンよりちょっと長い程度だが、怪獣娘の脚ならあつという間だろう。

「それではみなさん、封筒の数字の通りの順番でスタート地点に並んでくださーい！以上、予選ルール説明でしたあ！カメラお返ししまーす！」

モニターは再び国立競技場の様子に戻り、SSPによる大会開催のいきさつや、会場の安全性についての説明が行われている。こういう時、進行役のジェットタさん、解説役のシンさん、このバランスがいい。

あと一人忘れていたような気がするが。

さて、その説明はここでは割愛するとして、続々とスタート地点となる青銅の鳥居に



出場者たちは集まっっていく。

「シンジさん、あたしたちは何番だったっけ?」

「7番、結構前の方だよ。」

「ラッキー!」

ラッキーセブン、幸運の証だ。前の方にいれば当然早くスタートできるし、前の人に進行を阻害されることも少なくなる。ここで幸運を使い果たしていなければいいけど。

「みんな結構後ろの方に行っちゃったみたいだね。」

「そうだね、レッドキング先輩大丈夫かな?」

「レッドさんたちなら大丈夫だよ、他人の心配するぐらいなら、まず自分のことを心配したらどう? ってエレキングさんなら言いそう。」

「わかるなー、なんかそれ。」

スタートの合図まであと数分だが、余計な緊張感はない。最初はリラックスして、飛ばしすぎないことを心掛ける。

「それでは皆さん、いよいよスタートですよお! がんばってくださいね! いちについてー……。」

「シイちゃん、準備OK?」

「はい! いつでもいけます!」

「おっしや！一気に飛ばすぜ！」

「ハリキリすぎるとコケるわよ？足並みを揃えなさい。」

「あわわ・・・き、緊張してきちゃった・・・。」

「ダイジョーブ！わたしが運んであげるから！」

「よい・・・ひゃん！」

パアン！とピストルの音に一番ビッグモンさんが驚いているが、その音を合図に一気  
人の波が動き始めた・・・

「んがあっ!？」

「なにい!？」

突然、先頭付近がつんのめって将棋倒しが起こった。そこに一番最初に巻き込まれた  
のは、

「まさか・・・くじ引きの時点で運を使い果たしていたとは・・・。」

ラッキーセブンだったはずのシンジ・ミクラスコンビであった。

「なんだこの・・・岩？」

「貝殻じゃないかな？おーいたい。」

突然、目の前にあったバカでかい巻貝のような物体が、スタートの合図とともにシン  
ジたちの目の前に転がってきた。それに巻き込まれた2人が倒れている間に、続々と後

続に抜かれていく。

「だいじょーぶシンちゃん?」

「大丈夫ですか?!」

「平気!先に行つてて!」

「先に行つてるぞお前らあ!」

「怪我しないようにね。」

「はーい!いってて・・・。」

気が付けば、はるか後ろにいたはずのミカやレッドさんに抜かれ、空を見上げればジャッパちゃんを抱えたバツサーちゃんや、キングジョー姉妹が飛んで行っていた。

「んにゃー!起き上がれないのですう!」

「ちよつとお!なにしてんのさこんな時にい!」

「ガタたんは一度転ぶとなかなか起き上がれないのですう!」

さて、この巨大な巻貝も当然怪獣娘だ。どうやら頭が大きすぎて、すぐバランスを崩して転んでしまう子らしい。

「せーのつ、よいしょお!」

「うわあ!」

「あーキツかった・・・キミ大丈夫?」

「大丈夫なのですう！ありがとうなのですう！」

全身を見てみると、頭には巨大なアンモナイトがついていて、その両端には巨大な蛇のような頭がある。本体の方は、一見するとミカと同じスク水のような恰好の小さな女の子だ。

「ガタたんはすぐこれなんだから。でもこれじゃあ二人三脚なんて出来ないよ。」

「それでキミがこの子のパートナーか。」

「そう、レイキュバスだよ！」

もう一人のほうは、赤い体に左右非対称な大きさのハサミを持った怪獣娘。2人とも共通して体が小さいが、保護者とか大丈夫なんだろうか。

「おーい、なにやってのさこんなどころで？」

「みんなもう行っちゃった。」

「あつ、ベムラーさん。そりや僕たちも好きでこんなところで立ち止まってるわけじゃどわあ?!」

「成程、大体わかった。」

「また転んだのですう！」

よつこらしよつと、今度はベムラーさんたちにも支えられて立ち上がる。

「これじゃあいつまでたってもゴールできないのですう！」

「困ったなあ、まさかこんな予選だったなんてえ……。」

「……2人とも、水棲系の怪獣娘じゃないの?」

「そうですね、泳ぐのなら得意なんですよ!」

「なら、海を泳いで川を登っていけばいいんじゃないかな? 水中なら浮力も働くだらうし。」

「そつかあ! そうするですよ! ありがとうですよ! 行こうレイキュバちゃん!」

「じゃっばーん! と海に元氣よく飛び込んで、2人の姿は見えなくなった。とんだトラブルに見舞われたが、これで安心してスタートできる。」

「それにしても、こんな時にまでおせっかい焼かなくたってよかったんじゃないのかい?」

「はっ! そうだ、急がないと!」

「ベムラーさんたちこそ、立ち話なんかしていいんですか?」

「いいのさ、すぐ着くからな。じゃあ、あとはがんばれ。」

ピシユン、つと一瞬にしてベムラーさんたちの姿は消え、代わりに本会場の方で歓声があがった。

『おおっと! はやくも最初のコンビが到着だあ! 1位通過はベムラーさん&ゼットンさんのコンビー!』



なっていた。その先頭をのんびりと談笑しながら行くのは、レッドキング&エレキングペアと、ゴモラ&シーボーズコンビ。

「どうすつかな・・・この状態。」

「あら、平和でいいじゃない。」

そろそろ道も半ばとなる頃だが、ここまで一切のアクシデントがない。普通こういうイベントでは参加者たちがごぞつて足を引っ張り合い、血で血を拭うサバイバルになりそうなものだが、そんなことは一切なく、いたって平和だった。

「みんな『妨害したら、やり返される』って思ってるからだね。」

「これを一般的には『抑止』というわ。」

『道中妨害禁止』とも言われていないが、みな暗黙の了解でお互いに手を出さないでいる。

「でもこれじゃあ『ドキツ☆怪獣娘二人三脚フルマラソン』ポロリもあるよ」と変わらないうわ。」

「ポロリはねーよ。」

「エレちゃんはしそーだし、レッドちゃんも当てはまりそーだけど。」

「しないわよ?。」

なんというか、首がね。

「それにしたって、このままじゃつまんなくない？ なにかパーンっ！なるようなイベント起こらないかなー？」

「そんなこと言ったって……。」カチツ

「カチツ？」

相方が何かを踏んだようなのを感じたミカだったが、何事もなかったのでそのまま足は止めずに走る。が、次の瞬間事態は一変した。

ズガアアアアアン!!

「なに!？」

「爆発?!」

ゴモラたちの少し後ろ……先ほどシーボーズが『何か』を踏んだ地点で、突如として火柱が上がった。

「地雷か?!」

「一体誰が? いつ?!」

「いえ、問題はそこじゃないわ……。」

抑止というのは、お互いが『やったらやられる』という考えを持つことによつて成り立つ。その均衡がひとたび破られれば、たちまち『やられたらやりかえせ』の地獄絵図へと変貌する。抑止力の下での平和とは、砂糖菓子のように甘く脆い。



「どわあ! 撃ってきたよ!」

「この状況じゃ、見境いもねえな!」

激闘は、一発の銃声から始まった。誰が仕組んだ地獄やら、友達・仲間が笑わせる。お前もっ! お前もっ! お前もっ!!

「だからこそっ!」

「オレのために『墮<sup>死</sup>ちろろ』!」

食うものと食われるもの、そのおこぼれをもらうもの。牙を持たぬものは生きていけない暴力の渦。勝ち残るのは誰か、出し抜くのは誰か。その戦端は切つて落とされる。

「これは逆に言えばチャンスだ、後ろが揉めている隙に一気に進める。」

「けどそれは、無防備な背中を晒すことになるわ。地雷だつてまだ残っているかもしれないし。」

「けど、お前なら平気なんだろう?」

「ええ、既に解析中よ。」

絶えず余裕なエレキングさんのツノがグルグルと回り、進むべき道を照らす。

「やはり点在しているようね。それも、さつきまでと同じように『二度踏むと爆発する』タイプかもわからないわ。」

「ならやつぱり避けて進むしかねえみたいだな。」

「よーっし！レッドちゃんエレちゃん任せた！」

「お前らも走れよ！」

要は上位に入ればいいのだ。だからこうして協力するものも自然と現れてくる。そんな彼女たちを抜き去って、大きな一つの影が走る。

「一気に突っ切りますよーナミさん！」

「ええ、お先に失礼するわよ、『レッド』キングさん？」

片や、胸に青い光の宿る犬のような姿の怪獣娘『ガーディ』。片や、漆黒の鎧をまとった騎士のような怪獣娘『ブラックキング』。レッドキングたちが慎重にまごついているのを尻目に抜き去る！

「あつ！あんにやろー！負けてられつかよ！行くぞエレ！」

「別にアナタまで突撃する必要ないんじゃない？」

「これはプライドの問題なんだよ！」

「はわわ・・・行っちゃいました。」

「私たちもそろそろ行こうか？」

「はい！」

戦いはなおも続く！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『おおっとお!ここで一気にトップに躍り出たのはブラックキング&ガーディペア!それに負けじとレッドキング&エレキングペアも走り出すう!』

(何かアクシデントがあつたようですね?)

(こつちからはよくわからないけど、なんとも言えないね。)

さて一方本会場では実況中継が行われていた。ドローンが映像を集めてくれてはいるが、その範囲が広域であるために細かいところまでは拾えていない。

「ミクちゃんとシンジさんは今どこかな?」

「大分後ろの方だとは思いますが・・・。」

会場の警備にあたつているアギラとウインダムも、巨大スクリーンの映像に目をやり、友達の活躍を収めようとする。

「ゼットンさんはやっぱり1位だったね。」

「さすがといふかなんというか・・・。」

「2位争いも結構白熱してるけど。」

よくわからないけど、トーナメント進出を賭けた争いはヒートアップしてるようだ。やはり怪獣同士の戦いとはこうでなくては。元来争うことがそんなに好きじゃないアギラにはあまり関係ない話だが。

「あつ、ゴモたんたち抜けたみたいだね。」

「そうですね、キングジョーさんやマガバツサーさんたちは空を飛んでいるから無事みたいですが。」

「ガッツは大丈夫かな？」

「ガッツさんは強いですし大丈夫でしょう？」

「こういう時ガッツとマコさんとで反りが合わなさそうで。」

「たしかに・・・。」

ミコの方はかかってくる相手に最低限の対応で済ませようとするけど、マコの方はキツチリ片をつけそうで、足踏みが揃わないかもしれない。

「2位にはゴモたん来るかな？ブラックキングさんたちも速いけど。」

「アギさん。」

「なに？」

「本当は、アギさんも出たかったんじゃないですか？」

「え？なんで？」

「いえ。なんとなく、そう思えただけです。」

「そんな顔してる？」

「はい、『シンジさんと一緒に出ればよかったかなー？』って顔ですよ。」

「うう．．．そんなハズないんだけど．．．」

「アギさん、正直ですよね．．．」

アギラは嘘が付けなかった。

「そういうウインちゃんこそ．．．」

「ドリンクいかがですか？オススメはしゅわしゅわコーヒーですよー！」

「あれ？なんか聞いたことある声だっと思ったら。」

「夢野ナオミさん？」

「あつ、アギラさんにウインダムさん！ドリンクいかがですか？」

「いや、なにやってるんですかこんなところで？」

「SSPは実況なんじゃ？」

「そうなのよー！そのはずだったのに当日来てみれば私はいらなくて！仕方ないから今日は売り子のアルバイトしてるってわけなの。」

「そうなんだ．．．あ、なんか買います．．．」

「ありがとうございます☆」

「しゅわしゅわコーヒーって、炭酸入りコーヒーなのか．．．」

「どう？おいしい？」

「ちよ、ちよつと味わったことのない味です……ね……。」

「正直、微妙。」

嘘の吐けないアギラであった。

『おつと、今度は空の上新しい戦いが始まったようです!』

パツとモニターが上空の様子に切り替わると、そこには大きな青い翼が一つと、金色の二つの鋼が映し出された。

「おジョオオオオオオオオオオさああああああん!!」

「誰あれ?」

「たしかキングジョーさんのファンの方……でしたよね?」

「イタリア料理店やってるって聞いたけど。どうかしました?」

「いや、なんか他人な気がしなくて……。」

「知り合いですか?」

「いや、あんな変態知ってるわけがないんだけど……。」

人、それを運命という。

さて、モニターの中の戦いにも目をやろう。ビルをも見下ろす高さで戦いは起こっている。片や新たに怪獣娘の仲間に加わったばかりのマガ姉妹。片や硬い装甲に身を包んだキングジョー姉妹。その2つのチームが上位を巡って争っている。

「おりゃー!」

「負けマセンよー!」

「ふえええええ!!」

主に戦っているのはキングジョーさんとマガバツサーだけで、その相方同士は振り回されているが。

時に妨害、時に牽制しながら、抜きつ抜かれつのデッドヒートだ!

「うりゃっ! マガ衝撃波!」

「デスト・レイ!」

最高速度ではマガバツサーに分があるが、マガジャツパをぶら下げている分だけ少し落ちる。対してキングジョーとIIは二人とも飛べるために軽快さがあるが、IIが少し及び腰の為になかなか攻めあぐねている。

「つていうか、ここで私たちが争う理由ないんじゃない?」

「なに言ってるのさジャツパ! 気持ちの問題だつて!」

「戦うコトに迷いはアリマセン! 行きますヨII!」

「ひえええ...」

巻き込まれているほうとしてはたまったものではないが、2人とも闘争心に火がついてしまった。

「空を飛ぶことなら、私は負けないよ！」

「ワタシだって、海であろうガ空であろうガ戦う場所を選びマセン！」

地上にも空にも、もはや安全な場所などない。死にたくなければ前に進め。

『再び決戦のようです！果たして大空の王者となるのはどちらの・・・』

『あつ、あれはなんでしょうか?!』

カメラの奥に、また新たな影が横切った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「方向は?!」

「オツケー！進路クリア！」

「よし！じゃあとぶぞお！」

ギリリと引き絞られた弦が音を立て、解放される時を待っている。その端は、シンジ

の両手首へと繋がっている。

「よし、引けえ！」

「ちよいさあー!!」

そのシンジを背中あわせの形で、ミクラスは足を踏み込んでより一層強く弓がしなる。

「今だ！放て！」



「ほいやああああ!!」

バイーンツと解き放たれた運動エネルギーが、パチンコの要領で二人を空中へと打ち出す。

「ねえ見た?」

「何が?」

「今カメラあつたよカメラ!ピースしちゃった!」

「ジェットコースターの記念写真みたいだな。」

正直、ミクラスのその気楽さがシンジには羨ましかつた。ただでさえ高所恐怖症だというのに、それを高速で落ちているんだから。

「うわっと!」

「Oh!」

「今キングジョーさんたちとすれ違った?」

「そうだよ!やっぱり空の方が下より安全だった!」

渋滞の最後尾に追いついたところまではよかったけれど、そこから先を無傷で進むのは不可能な状態だった。そこで、比較的安全な空のルートを思いついたといわけだ。

「シンさんなら『まるで古代兵器のバリスタのようです』って言いそうだけど。」

「バリスタ?コーヒー?」

「それとは違うバリスタだ。」

と、放物線運動が頂点を迎えたあたりで、体勢を立て直す。離陸したときと同じように、ミクラスの足でランディングする。安全のために空中でブレーキをかける。

「それがこのパラシュートだ！」

手首から伸びる紐が、一旦繊維にまで分離し、それらが再び合わさって一枚の大きな布になる。シンジのS・R・Iを始め、リストビュートやその他の装備を構成する特殊繊維のなせる業だ。

「ちやくちー！」

「よっし、もう一回だ！」

「おろ？シンちゃん？」

「もう追い付いてきたのか？」

つと、ここで先を行っていたミカたちと遭遇した。予想以上の距離を稼いでいたようだ。

「・・・お先に失礼！」

「あつ、ずりい！」

暫定トップ（ゼットンさんを除く）のレッドさんたちを抜ければ、それすなわち僕らがトップということ！これを逃すつもりは無い！

「いつくぞー!」

レッドキングさんたちを追い抜いてさらに空を進むと、眼下には最後のペアが見えてくる。ブラックキングさんとガーディさんのペアだ。

「後ろ後ろ!後ろからも来てるよ!」

「ここが正念場だ!ラストスパートだ!」

「おう!」

ミクラスもリストビュートを掴んで、思いっきり引つ張る。ブラックキングさんたちもこちらの存在に気付いたようで、そちらもペースを上げる。

「負けるもんかあ!ナミさんフルパワーだ!」

「レディ!」

「そっちが足の速さで勝負するなら、こっちは腕の力で勝負するのさ!」

二人三脚では、いくら個人の足が速くとも、息を合わせるからには出せる速さに限界がくる。だが今シンジたちの行っている跳躍なら、ミクラスの500万パワーで思いっきりワイヤーを引けばいいだけなのだから、そんなことはお構いなしに行けるのだ。

「一二いっけえええ!!」

最後のコーナーで2チームは並ぶ。いや、わずかながらも後ろにいたキングジョーペアとマガ姉妹も追い上げてきている。勝つのは誰か?!



「やた?! やったああああ!! ししよーに勝ったー!」

「ギリギリだった、けどね。」

『ザンドリアス&ノイズラーペアだあああ!』

「「え?!」」

「なんで? いつの間はこの2人が割って入ってきたんだ?」

「スリップストリーム・・・デスね。」

「なに!？」

「一足遅れて飛んできたキングジョーさんが冷静に分析する。」

「ワタシたちの超スピードによって出来た空気の流れに乗って、ザンドリアスさんたちも急加速してきたんデスね。」

「いきなりブオオオって来るんだもん! 私たちも驚いて止まっちゃったよ!」

「どうやら、ザンドリアスさんたちの手助けをってしまったらしい。」

「わーいわーい!! やったやったー!!」

「まだ優勝したってわけでもないのに、単純なやつ・・・。」

「そういうノイズラーさんも表情は嬉しそうだった。」

「まあ、あの笑顔が見れたならいいかな・・・って、そんなわけないじゃん! くやしい

よお〜!!」

「まあまあ、まだ本戦があるんだから。」

それから続々と他の参加者たちもゴールしてきた。上位16位までが決まるのもすぐだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『……さて!以上を持ちまして、大怪獣ファイトタツグトーナメント、予選を終了いたします!』

競技場に設けられたリングの中心に集まったのが、今回本戦入りしたメンバーだ。レッドキングさんやミカはもちろん、キングジョーさんやマガちゃんたち、ガッツさんもいる。他にも大怪獣ファイトで見たことのある人や、全く見たことのない怪獣娘も多数いる。彼女たちがどんな戦いを見せるのか、今から楽しみだ。

「シンちゃん!すごいね!3位だって?」

「すごいです、シンジさんミクラスさん!」

「いや、ミクラスさんのパワーがあつてこそだよ。」

「いやー、それほどもー?なっはっはっはあ!」

「けど、本戦ではこうはいかねえぞ?ぶつかつたら徹底的にやりあおうぜ!」

「レッドキング先輩!よろしくおねがいます!」

「精々、それまでに負けないようにね。」

「エレキングさんこそ、気を付けてくださいね。戦闘タイプじゃないんだから。」

「ええ、そのつもりよ。」

途中、スタンドに友達の姿が見えたので手を振り返す。アギちゃんたち、しつかり見てくれてたかな？

『みなさん！おつかれさまでーすう！江ノ島から戻ってきたピグモンでーす！』

ピグモンさんの口から予選終了のアナウンスと、本戦トーナメント表の告知が行われる。しかし、その前にひとつ・・・

『いよいよみなさんお待ちかねえ！優勝賞品の黄金のトロフィーの開示ですう！みなさんご注目くださいーい！』

会場を見下ろすスタンドの中央に、赤い幕に隠された秘宝が現れる。その幕をピグモンさんが引きはがすと、おおおっ！というどよめきの声が会場中からあがる。

「あれが・・・黄金のトロフィーー！」

「黄金だけじゃなくて、赤いのと青いのもあるー！」

かつて3億5千年の眠りから蘇り、この国立競技場で争ったという2匹の怪獣。それを横した2つのメタルの像に支えられた、黄金の杯。そこに注がれるのは勝利の美酒か、それとも争いの果てに絞られた赤色の鉄か。

「つていうか、あの怪獣コンビじゃむしろ喧嘩するんじゃないのかな？」  
素朴な疑問はともかく、いよいよ本戦がスタートする！

「……どこですかあ?!」



「海なのは間違いないのですう！」

## ライザー光る時

『さて！トーナメントの発表の前に、ここでもう一度会場の安全設備の紹介をしたいと思います！』

予選終了後のインターバルで、シンさんによる設備の説明が行なわれる。選手たちは、体を休めつつその放送を聞いたり、昼食を食べたり、思い思いの方法で休憩している。

『皆さんのいる観客席のすぐ内側に、ガラスのような透明の壁が張られているのがご覧いただけますでしょうか？これが「特殊吸収防護フィールド」、通称S・A・Pと呼ばれるものです。今は普通のガラスやアクリル板のように、通常は基底状態にあります。この状態で外部からのエネルギーや物理的ショックを受けると、励起状態となって、光や音を放出します。』

と、ここで2人組の人物が競技場内に入ってくる。シンジにはこの2人に見覚えがあった。ラボチームのマモルさんとルイルイだ。

『百聞は一見に如かず、これからビーム兵器を照射してみ、その威力を実践してみるッスー！』

『ちなみにこのビームガンちゃんは、ダイナマイト100発分の威力だよ☆』  
ざわわ、と会場はざわめくが、それに構わずルイルイは派手な見た目の銃を斜め上に  
向けてトリガーを引く。

『あわわ!!どうやって止めるんだっけえ?!』

『トリガーを離してえ!』

ドバーつと放たれたビームがあらゆる方向へ飛び交い、地面や空を飛ぶ雲に跡を残す  
が、肝心の観客席には傷一つつかない。ビームの当たった場所が、六角形の光を放ち、同  
時に腹の底に響くような重低音を出す。

『このように、フィールドがショックを受けた瞬間だけ、エネルギーを通すことで、  
ショックを対消滅させます。攻撃を受けた瞬間にだけバリアが発生するようなものな  
ので、電気使用量も非常に少なくて済むツス。』

『加えて、S・A・Pそのものは六角形のハニカム構造のピースで作られています。  
六角形は最も強固な図形であり、自然界でもよく見られる形です。』

シンさんとマモルさんの解説で、会場の人々も納得できたようだ。

『それよりさーエレキングさんちよーカワイかったよねー??みんな見たー?ツノがグ  
ルグルしててね〜♪』

『あー、以上で解説は終わります!それではみなさんお楽しみください!』

ルイルイが話を脱線させて長くなりそうだったのでそそくさと退場させられた。カメラは切り替わり、再び実況席が映り、アナウンスが続けられていく。

「お久しぶりです、大地さん。」

「久しぶり、シンジさん！」

放送の途中から控室を抜け出して、向かった先は地下にある電力供給室の、その隣に急造されたモニタールーム。そこでアメリカ留学終了の時以来に顔を合わせる友人。2人は固く握手を交わし、その再会を喜び合った。

「まさか、本業の傍らに研究していたシステムの方が先にお目見えするなんて、意外でした。」

「必要性としては、こ<sup>S</sup>こ<sup>A</sup>こ<sup>P</sup>ちちの方がせっつかれていたので。目に見えて安全のためになるのは、やっぱり身を守る盾の方だから。」

「けど、本来の研究の方だって、立派にみんなの役に立つ装備なのに。」

「それを君が、一つの形として完成させてくれた。それだけで十分だよ。貴重なデータ収集にもなるし。」

「そう、ちよつと見てみてくださいか？なかなか脳波コントロールユニットの調整が難しかったですけど……。」

「シンジさんはどちらかというところの人だからね。ソフトウェアの方はこっちは

9 割完成してるから、最終調整だけ済ましちゃうよ。」

「お願いします。」

シンジが片手に持っていた鞆から、手のひらに収まるサイズの小さな機械を取り出し、大地に渡した。その同じころ、公開実験を終えたワタルとルイルイもモニタールームに戻ってきた。

「あつ、シンちゃんおつゝ！予選見てたよ！」

「すごい活躍でしたね！いきなり3位だなんて！」

「いえ、ルイさんの研究していた液体繊維のプロットと、ワタルさんの物理演算装置のおかげです。それに、ミクさんの協力があつてこそその大ジャンプでした。」

「そのミクさんとは一緒にやなかったの？」

「ミクさんはお昼ご飯中です。」

第一試合が始まる前には戻ってくると言っておいたので、今頃レッドキングさんとお話でもしているんだろう。

「そういえば博士は？一緒にだったんじゃない？」

「今食後のお昼寝中。」

「またか・・・試作品見て欲しかったのに。」

「試合開始までには起きてくれるよ。」

「私たちも手伝うよ！シンちゃんがどんなプログラミンングしたのか気になる気になる！」

「ほとんど手伝ってもらったんですけどね……。」

GIRLS開発部のペガツサさん。ソウルライザーの雛型も作ったスゴイ人だ。このラボメンバーやSSPのシンさんも含めて話し合ったら、色々すごいものが出来るんじゃないだろうか。

「なるほど、アームユニットに直結させて、そこから出力を……。」

「糸まきまきはその実験段階ってコトだったんだね！」

「糸まきまきって……否定はしないけど。」

「ははは……けど、あとは僕たちのプログラムと、フィードデータを組み合わせれば上手くいきそうだね。」

「どれぐらいかかりそうですか？」

「まってねまってね、すぐ終わるから。」

カタカタカタとすごい勢いでキーボードを叩き、情報を機械へとインプットしている。シンジは完成を間近に控えたそれを、オープンの前で菓子が焼き上がるのを待つように見つめる。

「けど、とってもスゴイ発明なのに、それを最初に武器という形で世に出していいもの

だろうか。自分で作っておいてなんだけど。」

「じゃあ、なにか綺麗なものも出せるようにしてあげようか??お花とか!!」

「それすると、またプログラムを書き直す必要が出ますよ・・・?」

「花か、拳を突き出されるよりも、花を差し出す方が平和になりそうだけど。」

「正しい形か。果たして何が正しい形なのか、常に問いかけ続ける必要があるって、前にどこかで聞いたけど。」

「そうですね、正義というのは時代によつて変わります。昨日まで敵同士だった相手とも、次の日には味方になっていたりとか。」

「そう考えると、争うこと自体が無意味なことって、思えて来るよね。」

怪獣という存在が、まさにそれだ。一時期、怪獣頻出期の頃は、怪獣とは悪の象徴であつたという。それが時代が進むにつれ、怪獣とは同じ星に住む生物であつたり、共存していく仲間であつたり、仲良くなれる友達になつたりもしていった。

「だから、シンジさんの考えるように、まず武器として形にするのは、間違つてないと思う。なによりシンジさんはずっと『賢い』人間だから、間違つた使い方は出来ないはずだよ。」

「僕は・・・そんなに賢くはない。」

「そう自分で思つてるだけだつて!シンちゃんは私たちに出来ないことだつて出来る

もん！」

「誰だつてそうつす。だから助け合つて、僕たちはここにいるんすから。」

「だから、俺たちの代表として、これをお願いします。怪獣娘と並んで、共に生きるための力にしてください。」

出来上がった機械を、3人そろつて手渡される。

「これが、完成形……。」

大いなる可能性を秘めた、そのデバイスを右手に装着すると、シンジは誇らしげに掲げた。

「ところで、ゴモラのサインはどうなったの？」

「……本人がすぐ近くにいたんだから、直接貰えばいいんじゃないかな？」

「やった!!日本に帰つてきてよかつたあ！」

大地さんはやや冷静な人だけど、こう言うところで年相応な面を見せる。

「ところで、シンちゃんゲート行かなくていいの？」

「ゲート?なんの?」

「だつてシンちゃん1番手だよ。もうすぐ試合も始まるんじゃないかな?」

「……え?」

パッとモニターを見ると、そこでは既にトーナメント表が開示され、Aブロック一回



戦第一試合の組み合わせが読めた。

「第一試合『ミクラス&シンジペアVSナツクル星人&チブル星人』??」

「・・・急いでシンジさん!!」

「このままじゃ不戦敗になっちゃうつすよ!!」

「わー!!」

あわてて廊下に飛び出し、来た道を駆けて行った。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「あのつ、濱堀シンジさん、ですよね?」

「はい?」

ゲートへ向かう途中でシンジは呼び止められた。振り返ってみれば、金髪ブロンドの美少女がいるではないか。

「僕に、なにか?」

「あの、私シンジさんのファンなんです!よかったら、握手してもらえますか?」

「あ、ああ、どうぞ!」

なんだただのファンの人か、と手袋をとって握手に応じる。女性にしては少し硬くて、ひんやりとした手の感触をしていた。

「それじゃあ、がんばってくださいね！」

「はい！ありがとうございます。」

タタタ、と女性は廊下を行ってまった。

「ちよつと、ツイてる・・・かな？」

いけないいけないと邪な考えを振り捨てて、もう一度走りだした。

よくよく考えると、関係者以外立ち入り禁止の場所なのに、ただのファンの人がいるというのはおかしいと気づくのは、試合後のことであつた。

「おつそーい！もうエントリーはじまっちゃつてるよー！」

「ごめんごめん、まさか一試合目だとは思わなくつて。」

「それはアタシも驚いたかな。トーナメント表だと、レッドキング先輩とは決勝で会えるみたいだよ！」

「うわあすごいフラグ臭。」

『決勝で会おうな！』は不確定要素や、新たな敵へのかませで敗北フラグ。いきなり廊下で膝に矢を受けても知らないぞ。

「大体、その前にゼットンさんに当たるんじゃないの？それ以前に、レッドさんが負ける可能性だつてあるし。」

「レッドキング先輩は絶対負けないから！たとえゼットンさんと戦つても今度は勝て

るかもしれないじゃん！」

『たとえ』ってことは、ゼットンさんA<sup>こっ</sup>ブロック<sup>がわ</sup>にいるんじゃないの？」

「うっ、それはそうだけど・・・。」

「どうあがいてもゼットンさんに勝てる自信ないよ僕は？」

全く策が無いわけではないのだけれど。それでも0が万に一つになったたよりも低い。

「つて、そんなことより今はもつと大事なことがあるよ！」

「そうだね、まずこの試合を勝たないと・・・。」

「それもそうだけど、アタシたちのタッグネーム決めてないじゃん。」

「タッグネーム？ミクラス&シンジでいいんじゃないの？」

「えー他のみんなはカツコイイ名前持つてるのに、アタシたちだけ付けてないなんて

おかしいじゃん！」

曰く、レッドキングさんとエレキングさんは『R/L』という名前にしたらしい。

「なんて読むんだこれ。」

「あーるえる？」

「アールエツ！」

「具体的にはどんな名前がいいの？候補とか。」

「んーと、1000万パワーズ！とかどうかな？」

「僕はジンギスマンか。どっちかって言うともーボーマンの方が好きなんだけど。」

「それか・・・7番だったから、ラッキーセブンスとか!」

「なんかタバコみたい。ここにいられるのはラッキーというより、もはや奇跡ってレベルだし。」

「じゃあ、『ミラクルナンバーズ』とか!」

「ふうん・・・いいんじゃない?」

昔レッドさんにミラクルマンと呼ばれたことを思い出した。出会って間もない頃の話だったが、今こんな状況なことを知ったら、当時の僕はどんな顔をしていただろう。

「よし!名前も決まったところだし、行こうか!」

「おう!って、シンジさんなそのハチマキ?気合十分だね!もつと熱くなろうよ!」  
「冷えピタがついてるんだけどね。」

熱くなるどころか冷える。頭はクールに、でもハートはホットに。

☆☆

『さあみなさんお待ちかね!栄えある第一戦を飾るのは、この2チームです!』

実況席のジェッタの声を皮切りに、重々しくゲートが開かれる。ワアアア!と歓声  
が上がり、その始まりを祝福する。

『予選3位通過!それを成し遂げたのは大怪獣ファイターのルーキーと、本大会唯一

の人間としての参加の、ミクラス&シンジの『ミラクルナンバーズ』！」

名前を呼ばれて若干慌てながら衆目の元に姿を現す。予選の時よりもより多くの人がスタンドを埋め尽くしている。手を振りつつ、先ほどと同じように友達の姿を捜そうとするが、あまりの人の多さに焦点も合わない。

『対するは予選順位12位のナツクル星人&チブル星人の『アサシンコマンド』！賞金稼ぎとしてその道では有名なナツクル星人さんと、高度な技術力での武器製造を得意とするチブル星人さんのコンビだあ！』

反対側のゲートから現れたのは、白い毛皮のコートを纏い、獲物を狙い爛々と光る眼のような紅玉を身に付けたナツクル星人さんと、黒いローブに身を包み、棘の生えた触手をもつチブル星人さん。2人とも自信満々といった感じでスタート位置につく。

「シンジさん、作戦は？」

「……ふんふん、ナツクル星人は格闘が得意で、チブル星人は頭脳はいいけど戦闘はからつきしみたい。先に後衛を潰すのが戦いの基本だね。」

「よーし！じゃあアタシ、ナツクル星人と戦うね！」

（……本当に理解したの？）

「……予選は随分張り切っていたみたいだが、それがこんな駆け出しの青二才とはな。これは今回も頂きだな？」

「それよりあんた、今回の分け前もわかってんやろうね？」

「私とお前で半分ずつ、だろう？」

「ちやう、トロフィー貰うで。溶かしてパーツにするんや。」

「お前ちよつと足元見すぎだろ？」

「なにゆーてんねん、ウチがおらんかったら予選も突破でけへんかったやろ？」

「抜かせ。」

(チブル星人、関西弁だったのか・・・。)

いくら元がタコみたいに見える目だからって中身までタコ焼きになる必要ないだろうに。ともあれ、向こうはかなりこちらを甘く見ているらしい。こっちこそアツと言わせて、手堅くいたたいちやおう。

『さて、第一戦開始の前に、もう一度ルールの確認をしておきましょう！』

『形式は2対2のタッグファイト。怪獣娘さんの変身が解除されるダウンか、バリアに触れる場合外判定か、ギブアップによって勝敗は決します。』

リング上にはわずかながらの障害物となる岩が点在している。ジョンスン島でのリングと大して変わらない仕様になっているというわけだ。

そのほか、武器の仕様も可。元々怪獣娘に変身した時に、武器も手にする怪獣娘が多いからだ。シンジの場合はこのルールを最大限利用させてもらうことになる。

ただ、反則行為なども特に定められていない。本家の大怪獣ファイトと違い、今大会はファイターではない一般怪獣娘も多く参加しているため、かたつ苦しいルールを廃止してあるそうだ。これから先、また大会が開かれて行く上でルールも整備されて行く事だろう。それは今回の結果次第だ。

『それでは、いよいよ第一戦を開始します！』

『大怪獣ファイト・・・レディー・・・』

GO!!! ファンファーレと共にスクリーンに明かりが灯って、長い一日の幕が開く！

「いっくぞおー！」

「行くー！」

ミクラスは得意の脚力を持って、シンジはライザーショットを抜いて走り出す。

「ハンティング、開始だ。」

一方ナツクル星人は余裕そうに歩を進める。チブル星人はその場から動かずに、手元の機械をなにやらいじっている。

「ちえすとおー！」

先にしかけたのはミクラスだ。突進からの渾身のストレートを放つが、これはあつさりとなツクル星人にいなされる。まっすぐ行ってぶっ飛ばすのが通じるかは、よほど地力を離していないと難しい。

「目標をセンターに入れて・・・スイッチ！」

シンジの方は落ち着いて自分の戦いを始めている。S・R・Iスーツも少しだけバージョンアップしたし、S・G・Mゴーグルもより精密になった。それでもって放たれた銃弾は、まっすぐとチブル星人めがけて飛んでいったが、狙われている当人は一切焦っていないかった。

「『チブローダー』起動やで！」

カツンツ、と手にした装置を叩くと、たちまちチブル星人の体には厚い装甲に覆われたアーマーが装着される。

『おおっと、はやくもチブル星人は奥の手を出してきたあ！さながらロボットのようだあ！』

『どうやら、戦闘能力の低さをカバーするためのパワードスーツのようですねえ。まさしく機動歩兵のようですよ！』

装着者自身が呼んだチブローダーという名のそれは、シンジの使っているものとは違う、パワーアシストや補助用の物ではない、兵器の満載された兵器としてのそれだ。

自身の巨大な脳髓を保護し、それと同時に誇示するような透明のカプセルに、自身の手足の何倍もの太さを持った四肢。両肩にはレーザー砲やミサイルポッドが積まれ、両腕にはガンも装備している。成程、拡張性がありそうでまさに男の子好きなスタイル



だ。乗っている本人がおれに当てはまるかは定かではないが。

「これはおつりや、とつときやあ!」

「ツリは募金箱に入れといて!」

一度は言ってみたいね。ミサイルが2発、シンジの方へと向かってくる。明らかに渡した分より多くなってる。

「こんな商売やってて儲かるの?!」

「あんたのガラクタも拾ってがっほがっほ儲けたるわ!」

「ガラクタじゃないやい!」

S・G・Mがあるとはいえ、シンジには一発撃ち落とすのがやつとだ。コンピューター制御されて正確な狙いでもってくるミサイルが、シンジの足元で爆散する。

「ぐっ・・・一戦目からキツツイのと当たっちゃったかな・・・?」

「心配するな、これがお前らの最終戦だ。」  
ラストゲーム

「その言葉、そっくりそのまま返すよっ!」

「ふんっ。」

一方ミクラスの方も攻めあぐねている。ナツクル星人は神経を研ぎ澄ました動きで相手の攻撃を見定め、素早く拳で打ち返すカウンター戦術を持っている。ひたすら攻め一辺倒の野獣が如きミクラスにはちと荷が勝ちすぎる。

「まだまだっ……!!」

ならばっと、あえて打たせて討つ、単純ながら同じ手を使う。これならば、耐久力において分のあるミクラスも互角に戦える。

「少しは出来るようだな……では、これならどうだ？」

「ぎゃんっ!!」

突然呻きをあげて腹を押さえて離れるミクラス。ナツクル星人の右手には、いつの間にか銃が握られていた。

「それ……映画で見たやつ……」

「ならば知っているだろう。この格闘技を極めることにより、」

「ちいっ!!」

「攻撃効果は120%上昇し、」

「ぐっ……!!」

「防御面では63%上昇する!」

その攻撃は、踊りのように銃撃と格闘を織り交ぜ、たちまちミクラスを壁際にまで追い込んでいく。

『あれはもしかやガン⇨カタ?!』

『敵のいる位置や、相手の攻撃してくる場所を予測して銃撃を加えるという、某国に伝

わる戦闘技法のことですね！ガンⅡカタは本来二丁拳銃を用いる格闘術ですが、その基礎の応用によって他の武器でも行えるそうです。』

『さすが暗殺宇宙人、格闘技については達人級の腕前のようにです。』

「スペシヤリストだ。」

「ダアン！と更なる追撃が重なる。それはミクラスのツノに当たり、反射してバリアに打ち消された。」

「さあ、どこを撃ち抜かれない？5秒以内に答えればリクエストに応えてやる。」

「ふざつ、けんなああああ!!」

「時間切れだ。」

まずは脚を撃って動けなくさせる、次に腕を狙って攻撃できなくさせる、トドメに頭だ。勝利への常套パターンに忠実に従う、それが強したたかなナツクル星人のやり方だった。

しかしこれがタッグマッチであることを失念するとは、ナツクル星人の考えも少し甘かった。

「オラオラオラオラオア！」

「なんや！あぶないなあ！」

「チツ！」

「そこだあ！」

ここで上手く横槍が入ってくれた。シンジの放った銃弾がナツクル星人の足元をかすめ、それに気をとられた隙についてミクラスがタツクルを放った。

実際のところはシンジが適当に乱射した流れ弾があらぬ方向へ飛んでいき、たまたま当たっただけだったのだが。

「近くに寄つたらこつちのもんだあ！」

「ぐっ．．．なんというパワー．．．。」

　　☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『おおつとミクラス！マウントをとつて、銃を奪い取ると、遠くへ投げ飛ばしたあ！』  
『まさに一進一退の攻防ですねえ！』

一回戦から中々見ごたえのある試合展開に、会場も大盛り上がりだ。より正確に言えば実況が盛り上げている、というのが正しいが。

「2人とも調子いいんだからー。」

「こつちの調子はどうですか？」

「あんまりよくないわね．．．。」

「あの2人にも宣伝を手伝ってもらつては？」

「普通に飲んでもらうだけで宣伝になるかも。」

「そっか、そうしてみようかな。」

スタンドの片隅に、先ほどと同じくアキラ、ウインダム、ナオミの三人がたむろしている。

「ミクちゃんもシンジさんも頑張ってるね。」

「相手は賞金稼ぎだそうですけど、2人なら勝てますよね。」

「勝てるわよ！ 私たちが信じてる限り！」

チブローダーから、再びミサイルが発射されるが、シンジの投げた二つの爆発物によつて無効化される。

『おっと、突然煙幕が張られたかと思うと、ミサイルがあらぬ方向へと飛んでいったあ！』

『煙幕弾と、チャフでしょうね。アルミ片をばら撒いて、電波を攪乱する兵器です。おそらく、ロボット怪獣への対策に用意していたんでしょね。』

『まさに転ばぬ先の杖！ 人間の叡智はどこまで粘りを見せるのかあ！』

あらぬ方向へとは言うものの、シンジの本当にすぐ後ろに着弾して火柱があがる。だが一瞬でも視界を奪えたこの機会を逃すわけにはいかない。

「何の光?!」

スーパードガンRのアタッチメントの一つを真上に放つ。これで赤外線も惑わさせ、同時に視線を上へと向けさせる。

「信号弾？ちやう、フレアか？」

「正解！」

「な、なにすんねんー！」

そろつと後ろから近付いてきたシンジが、肩のミサイルポッドにしがみつく。

「ええい、このコードだ！」

「そんなところ触らんといて、えつちい！」

「誤解を招くようなことを言うんじゃありません！」

ポッドを繋ぐケーブルを切断し、無効化させる。

「これでもう、ミサイルは使えまい！」

「ジョーダンによしときや！まだまだ商品エモノはぎよーさんあるんやで！」

「全部クーリングオフしてやるよ！」

チブローダーの体から飛び降りて、ズザーつと地面を足で擦ると、カツコイイポーズで手をつけて着地する。

「おーおー、2人ともやるじゃん！このままいけば勝てるかも？」

「ゴモたん、控室にいないの？」

「次の試合レッドちゃんたちのだから、私はまだ先だからねー。」

「ゴモたんさんは、対戦相手のあの2人のこと知ってますか？」

「うーん、ナツクルちゃんのことにはよく知らないかなー。なんか、一匹狼っていうかミステリアスっていうか、つるむタイプじゃないから。チブちゃんと一緒にタコ焼き食べたりする仲間だけどねー。」

「やつぱり大阪出身だったのか・・・。」

「ずぞぞぞ、といつの間にか買っていたしゆわしゆわコーヒーを飲みながら観客に徹している。」

「油断しないでね、シンちゃん、ミクちゃん。」

　　☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「うおりゃあー!!」

「くっ・・・しっこいヤツめ・・・。」

ミクラスとナツクル星人の戦いは、完全にミクラスがリードしていた。体重と腕力に任せたパワーファイトで、マウントを決してどかないミクラスが一方的に殴っている状態だ。

「これで・・・トドメだあつ!」

しかし優勢と劣勢には翼があり、常に戦う者の間を飛び交っている。たとえ絶望の淵に追われても、勝負は一瞬で状況を変える。

「今だつ!」

「ぐうっ！」

ミクラスのトドメの鉄拳が刺さろうというその刹那、浮いたミクラスのマウントを抜け出してナツクル星人の右手が喉へと伸びる。

『おおつとナツクル星人、一瞬の隙についてネックハンギングツリーで逆襲だあ！』

『あの一瞬で逆転を掴むとは、まさに歴戦の勇士といったところでしょいか・・・。』

「かつ・・・あつ・・・。」

「ぬん！」

ブウンと腕を振るってミクラスを投げると、じつくり品定めするように大手を振るってのっしのっしと歩いて近づくと、

「げほっ・・・げほっ・・・があああ!!」

膝で立っていたミクラスの側頭部、こめかみを思いつきり殴った。

『ああつと、ナツクル星人、先ほどまでの華麗な格闘術とは打って変わって、残酷なラフファイトを始めたー!』

『人体の急所を的確に狙う、なんともむごい攻撃ですね・・・。』

こめかみを殴られると平衡感覚を失い、まともに立てなくなってしまう。先ほどまでの仕返しとばかりに、今度はナツクル星人がマウントをとって殴りつけると、無理矢理立たせてまた地面に叩きつける。



「あわわ、なんて残虐な……。」

「大怪獣ファイトは、基本的にクリーンなファイトを想定してるから、こういうのも珍しいんだけど……。」

「ミクちゃん！しつかり!!」

さて、パートナーがひどい目に遭っているとはいえ、迂闊に助けに入れば自分が背中を撃たれるというこの状況。最適解はさつきと始末して応援に回るところだろう。

「ホントかったいなこの！雷おこしより硬いんじゃないの?!」

「それをゆるなら粟おこしやろ！」

ガンガンと殴りつけてもビクともしない装甲にさすがに辟易としてきた。それはちよこまかと動き回られて攻撃の当たらないチブル星人にとつても同じだった。

『ここでシンジ選手、チブル星人にバックドロップをかけにかかる!』

『しかし、これは失敗したようですね。チブローダーの重さが計算違いだったようです。』

ならばと投げ技で攻めようとするが、その重量を持ち上げきれずに途中で断念する。

「ホンマはこの手は使いたくなかったんやけど、このままやと赤字やししやーないか……。」

「どんな手か知らないけど、今の内に破産申告でもしときな！」

装甲がダメなら関節を狙うのがセオリーだ、とシンジは大地を蹴ってチブローダーの腕にしがみつくと、肘を反対方向へと曲げさせる。

『シンジ選手、チブル星人の腕をアームブリーカーにとらえたあ！』

アームブリーカーというよりは腕ひしぎ逆十字固めなのだが、チブローダーの腕の長さに体格が足りず、腕にナマケモノのようにぶら下がる形となっている。とはいえ、技としては完成しているので、このまま背筋力に物を言わせれば引き千切ることも可能だったろう。

「そんなん・・・ポチツ、とな！」

「ぐっ、ぐわああああ!!?!!」

『おおっとシンジ選手、技を解除してしまったぞお?!』

『なにかダメージを受けたんでしうか、苦しんでいるようです!』

チブル星人が何かのスイッチを入れると、たちまちシンジは痙攣して墜落してしまっ  
た。

「う、腕がシビれる・・・。」

「そーれっ!」

「ぐあはああ!!」

チブローダーの腰の部分が駆動し、回転ブランコのようなパンチでシンジを遠くへ弾き飛ばす。

「があああ．．．なんだ．．．これは．．．ぐっ．．．」

「オマケや、Sマインもくらえ！」

ボシュツと空へと打ち出されたカプセルから、多数の胞子が吐き出される。それらはシンジの周りに降り、爆風を浴びせる。

「あの爆弾．．．」

「ひよつとして、予選の地雷もあいっらが?！」

控室で次の試合の準備をしていたレッドキングたちも反応する。その声に応えるものはいなかったが、その答えはYesだった。

「シンジ．．．さん．．．」

「他人の心配をしているヒマがあるのか？」

「他人じゃねーし．．．パートナーだし．．．」

ふらふらな足取りで立ち上がるも、そこへ容赦なく最後の技が決められる。

『ああーつとナツクル星人、両足でミクラスの両腿をロックし、両手で両腕をチキンアームのように反らせていくうー!』

『これは．．．当時校長先生によって禁止手とされた、伝説の凶悪技．．．!』

『パロスペシャル』だあつ！」

「ぎやああああああつ・・・!!」

これほど簡単に、かつ残虐に痛めつけられる技もそうないであろう。肩が反対を向き、そこから全く脱出できないという苦しみは筆舌に尽くしがたい。

『ミラクルナンバーズ二人とも完全にやられてしまったあー！一回戦もこれで終わるかあ?!』

「終わりだつ！」

「ぐっ・・・うううう・・・!!」

その時、ミクラスの目に映ったのは、爆風に包まれるシンジの姿だった。次に見えたのは、スタンドにいる友達の姿。

思い浮かんだのは、師匠との特訓の日々。毎日疲れ果てるまで走り、夕焼けを受けて伸びた影が重なって、より大きな存在に見えていた。あの背中に追いつくんだと決めたこと。

そしてこの大会がやってきた。共に戦うと決めた仲間が隣にいる。共に歩んでいくと決めたあの日のこと。

それらが脳をよぎって、電流火花が体を走る！ツノを通じて、全身にパワーを滾らせる！

「まだ……。」

「あん？」

「まだ、終わってない！ 『バツファローパワー』!!」

「おおっ?!なんだこのパワーは!？」

『あぁつと！突然ミクラスの体から火の手があがったあ！』

それは追い込まれた獣の気迫が見せる蜃気楼ではなく、実際に熱を帯びている。その熱気にあてられ、ナツクル星人もたじろぐ。しかしなによりの驚きは、

「お、押され……ぐげっ！」

「どおおおおおおおおりゃああああああ!!」

脱出不可能と思われた肩力の檻を、力尽くで折り曲げると、看守の顎へと頭突きの一撃を喰らわせ、さらに頭を掴んでの背負い投げをお見舞いする！

「シンジさん!!」

「ミク……さん……ぐうっ……。」

「立てる？」

「……立てなくても、立たせるんでしょ？」

「勿論！アタシはまだまだ止まんないから！」

笑顔で差し出された手に、バシッと固い握手で応えてシンジも立ち上がる。

「ん？」

「どしたの？」

「いや・・・シビレが止まった。」

どうやら、スーツや機械の不調ではなかったらしい。まあいい、それは重要じゃない。今必要なのは、

「どうやってアイツら倒す？」

「心機一転、戦う相手を入れ替えてみようか！」

「オツケーー！」

こちららが作戦会議している間に、ナツクル星人は落とした銃を拾い、チブル星人も新しい武器の用意を始めていた。だが恐れることはない、恐れを跳ねのけられるだけの激しさが今の僕らにはあるから！

「『本当の戦いは、ここからだ！』」

「もつとちゃんときいやホンマに！」

「うっせ、黙ってる。」

悪態をつきながらナツクル星人は敵を狙う。ミクラスのあのパワーに真正面からぶつかるのはもうこりこりだ。ならばもつと頭のいい方と戦おうと、クルクルとガンプレイを魅せる。

「ここはガンマンらしく、クールに戦おうか。」

「来い！こっちは西部仕込みだぞ！」

それぞれ横に動きながら、障害物となる岩に隠れたり、足の動きを止めて避けたり、激しい銃撃戦を繰り広げる。

「くらえっ！」

「スモークか！」

ナツクル星人の視界を遮る煙幕が張られる。投げた当人はS・G・Mゴーグルを起動させ、赤外線モードで姿を確認する。

「舐めるなよ！こちとら暗殺宇宙人を通ってるんだよ！」

額に輝くルビーの目が、同じくシンジの姿を捕捉する。

「もういっばあああああつ!!」

「同じ手は・・・ぐわああ!!」

投擲物を撃ち落とそうとしたナツクル星人の目を、激しい閃光が襲う。

『今投げたのはスタングレネードだったようですね。強い光と音で相手の感覚を奪う兵器です。』

『ナツクル星人、強化された視力でモロに浴びてしまったようだあ!』

おまけにこれは変身怪獣ザラガスや目潰し星人カタン星人といった怪獣娘の能力を

使つて作られた特性のスタンングレネードだ。

「目があ！目があああ!!」

「これから死ぬ気分はどうだ大佐あ！」

「ふざけやがつてえええ！」

シンジは両手に銃を持って弾幕を張るが、怒りで乱れた精神を正したナツクル星人はそれをピーカーブースタイルで突破して来て、戦いは格闘戦へと移行する。

「お返しだあ！『アサシンパンチ』!!」

「おわつと!!」

急所を狙う速攻パンチの連撃に、銃を取り落とすが致命傷をなんとか免れる。

「小賢しいお前にい!!真つ向勝負で勝機はあるかあ?」

「だからやつてんだよ!!」

啖呵を切つてパンチを受け止め、レッグシザーで投げ返す。泣く子も黙る暗殺拳の使い手と、泣く子を救う活人拳の戦いが始まった。

「パワー勝負なら負けないぞー！」

「なんやコイツ！ものつそい。パワーやないか！」

真正面ら受け止めた機械の腕がきししみ、悲鳴を挙げる。

「ほんならコレならどうや！」



「ぐっ！しびれる!!」

ポチッとスイッチを入れると、機体から電流が発せられ、ミクラスの体に流れ込む。

「こんの・・・まだまだ・・・!」

「まだ動けるんか!ホンマおつそろしい猛牛やで!」

手を振り払って、バーニアを噴かせて距離を稼ぐと、腰を据えてチブローダーの最後の武器を取り出す。

「こんなどころで使いとおなかつたけど、しやーない。それ行けや!」  
パンツアーフォー

『午前0時の軍隊』!!」

チブル星人の号令を受けて、チブローダーの背部のコンテナから戦車が飛び出してくる!

「うおっ?!って、ちっちゃ。」

「ちっちゃくても威力はホンモノやで!!」

世界各国の様々な戦車が、キュルキュルと無限軌道を鳴らして迫ってくる。サイズはミニチュアとはいえ、デイトールがなかなか凝っていて、接写アングルならば本物と見分けがつかないだろう。

『先頭の機体はドイツのV1号戦車、通称タイガー戦車です。他にも旧ソ連のT-34や、イギリスのチャーチルもありますねえ!あの大きさなら部屋にひとつ欲しいぐ

らいです……。』

『多分経費では落ちないよ。』

「それっ、攻撃開始や!」

「いててっ! いてーなこの!!」

バンバンと打ち上げ花火のような発砲音が響き、弾丸がミクラスの体に刺さる。もし本当におもちゃだったら蚊に刺されたようなものだっただかもしれないが、これが正直かなり痛かった。

「こんのお! 『バツファフレイム』!」

怒号と共に吐き出された火炎が、戦車隊を飲み込んで爆発する。すると今度は頭の上からポツポツとなにかが降ってくる。

「うわっぷ!! こんどはなんだあ!?!」

『今度は空から戦闘機の襲撃だあ!』

『B-29やイリュージンなどの爆撃機の他に、F-15やゼロ戦なんかの戦闘機も飛んでますね!』

地上部隊は囷。本命は空からの攻撃だったようだ。空を飛ぶ手段を持たないミクラスにとって、これほど戦いにくい相手もない。

「おらあ!」



「勝ったね！ご飯食べてくる！」

「ゴモたん、」

「それフラグです。」

「そりやあ！」

「くっ・・・！」

一瞬の間隙について、シンジはナツクル星人の銃を叩き落すことに成功した。

『あぁとナツクル星人万事休す！これは勝負あつたかあ?!』

「そりやあ！そりやあ！！そりやそりやそりやああ！」

「どおーあ!!」

『ミクラス選手も、チブローダーを渾身のバックドロップで粉砕しましたね!』

ガシャーン！とチブローダーの脳天を叩き割り、ポンコツの一步手前にまで持つて行く。

「くそっ・・・くそっくそっ！」

「おらあ！」

もはや勝敗が決したような状態だが、ナツクル星人は悪態をつきつつもガツチリとシンジの腕をホールドしに行く。

「2人に勝てるわけないだろ！おとなしくギブアップしたらっ?！」

「ギブアップだと？ふざけるなあ!!」

「私は賞金稼ぎだ！時には汚い手も残虐な手段もとるが、勝てる可能性がまだ残っている内にギブアップなんかするわけないだろ！」

「たとえそれが砂一粒の儲けだったとしても、勝ち取りに行かなきゃあ、お飯まんまの食い上げなんだよ!!」

渾身のパンチがシンジの頬に刺さり、数mも吹っ飛ばされる。

「シンジさん！」

自分の相手は仕留め、次は相方のフォローに廻ろうと、ミクラスは駆けだそうとする。

「待ちいや・・・っ！」

「あべっ！まだ動けたのか！」

しかし、半壊して攻撃する事すらできないチブローダーを、無茶を言っただけで動かしながらチブル星人がミクラスの脚に縋りつく。

「なんや、ケチなネズミがウチに頼ってきたから乗っつてやったもんやけど、おかげでエライ大損こいたわ・・・。」

「このっ！離せ！離せよお！」

ミクラスはゲシゲシと片足で腕を破壊しようとするが、そうなりきる前に、チブロー

ダーのバーニアがぶすぶすと煙を立てながら火を吹く。

「そ、そのウチに……こ、こまでさせたんやから……」

「負けたら……承知せえへんで……」

「ちよつ、アレこつちに来てない？」

ミクラスを抱えたまま、チブローダーはスタンドへと突貫する。

「わー!!ぶつかつたー!!」

キヤアアアと観客席では悲鳴が起るが、誰一人怪我をした者はいなかった。全ての運動エネルギーをバリアが打ち消したため、残骸は地面へと線香花火のように落ちたのだった。

『ああーつとなんということでしょう!チブル星人はミクラスを巻き添えにバリアにぶつかりに行つたー!!』

『バリアに触れたことで、2人は場外となります!したがって、チブル星人選手とミクラス選手は失格となります!』

「ミクさんー！」

「よそ見ー！」

他人の心配をするよりも先に、自分の心配をしろ。目の前の敵から気がそれたその刹那、シンジの目の前には『星』が舞った。

『おおっとナツクル星人、突然長い武器を取り出したあ！どこに持っていたんだあ！』  
『鎖付きのフレイル、明けの明星のようですね。』

それはエレキングのムチのように、怪獣娘として生まれ持った武器のメイスだった。ただの人間だったならば、頭蓋が粉碎されて脳みそがプリンのようにプチ撒けられていただろう。幸いなことに、少しの間失神するだけで済んだが、攻撃はまだ終わっていない。

「そおらあー！夕暮れ時の磔刑！！」

「ぐうううおあああああ！！！」

ナツクル星人の振り回す鎖付き分銅、逆さ十字架にシンジの四肢は囚われ、たちまち自由を奪われる。

「ぐううう……。」

「ギブアップするのは……お前の方だぜ！！『ナツクルアイビーム』！！！」

ナツクル星人の額の紅玉から、それと同じ色の真つ赤なビームが放たれ、逆さの磔に

されたシンジを襲う。

『決まったあ！ナツクル星人のビームが命中した！』

『逆さ十字架への磔からの、光線での追撃、まさに処刑ですね……逆さ十字架というのは、皇帝ネロに処刑されるキリストの弟子ペトロのようですね……』

ナツクル星人の逆さ十字架は、tの字ではなくX字のものだったがさておき。

「ジ・エンド……」

「……まだだ、まだ終わってない。」

「!？」

立ち上る煙の中に、一筋の光が灯る。それを見た瞬間、ナツクル星人は嫌な予感を感じとり、すぐさま鎖を引く。煙の中からあっさりとした手ごたえと共に、十字架だけが杖の戦端に戻ってくる。そこには、磔刑にされた罪人はおらず。

「……切り抜け、やがったのか。」

「こつちにも、隠し玉があつたんでね。」

吹き抜ける風の帳とばりの向こうから、光の剣を携えて跪く勇者が、天命を待っていた。

『なんとシンジ選手！無事だあ！しかもその手には、新たな武器が掲げられている！』

『光……いえ、あれはまさか、超電子メーザーの剣?!』

シンさんも驚く、その手甲に込められた驚異のテクノロジー。その発現に、笑みを浮



かべる一団が地下にはいる。

「どうやら、第一段階はうまくいったようツスね。」

「ルイの作った液体繊維に超電子を纏わせ、発振させることによつて破壊力を生み出させる。」

そのエネルギー伝達と同様の技術が、S・A・Pに使われている。が、むしろこちらは副産物で、本命となるのはもう少し違う場所にある。

「第二段階ではデザインにも凝つてみようよ！もつとこう、デコつてる的な？」

「外観デザインも、イメージを伝えるのに重要になるからね。」

自分達の作った発明が、友達の手で活躍していることが嬉しい。その中心にいる大地にとつては、さらにもう一つ嬉しいことがある。が、それは今回の本筋ではないのでカット。

フレイルが威嚇するようにブンブンと風を切つて唸る。光の剣が挑発するように虚空に円を描く。

『次の一撃で勝敗が決するのか・・・緊張の瞬間です・・・』

スタジアムにいる全員が、固唾を飲んで成り行きを見守る。

勝つのは、暗殺者か。それとも、勇者か。

「だああああああああ!!」

「ぬうん!!」

互いに武器を構えた姿勢のまま、一直線にぶつかりに行く。

さきにしたけたのは、ナツクル星人の方だ。鎖に指をかけ、カタパルトのように腕全体のエネルギーを乗せて飛ばす。ぶつかり合うと見せかけての、奇襲攻撃だ。

シンジにはそれを避けることはしなかった。勢いづいた脚を止めることも、止まることも出来ない。ここで避けてしまえば、勢いが死んでパワー負けすることは明白だったから。

「つらぬけえええええ!!」

「向かってくるかあ!!」

光の剣で向かってくる流星を最小限の角度で受け止め、滑走路を無理矢理胴体着陸するように火花を散らせながらいなす。

「折れたあ!」

「貰った! 『アサシンパンチ』!」

剣は最低限の役目を果たすと、ポツキリと焼き菓子のように折れた。その最大のチャンスに、ナツクル星人は黄金の右手で勝利を掴みに行く。

「まだああああああ!!」

「うおおあああああ!!!」

ここはひとつ、逆転の発想と行こう。頼みの綱の右の剣が折れたなら、左の拳を使えばいい。ちょうど今は『右手にブレーキがかかって』いる。

『クロスカウンター!!!』

『とつさに右手を後ろへ引いて、時計回りに回転して左手に勢いを乗せたんですね!!』  
ジエツタは端的に、シンさんは冷静に解説した。リングで戦う2人は密着し、どちらの拳が深く刺さったかはよく見えない。

沈黙、その数秒後

「濱堀シンジ……と言ったか……」

白い体が、膝から崩れ落ち、

「次は・・・こうはいかん・・・ぞっ！」

観客は勇者を讃える喝采を贈った。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

『それでは、第一試合の勝利者インタビュ―と参りましょう！まずはミクラスさん！』  
 『いやー、アタシは途中で抜けちゃったし、今回の勝利はシンジさんのおかげだよ！』  
 『ううん、ミクさんが手を引いてくれたから、僕も立ち上がったんだ。ミクさんのおか

げだよ。』

『なにそれ照れるなー、もー!』

次の試合との幕間に、2人へのインタビュースクリーンに映し出されている。最初から白熱した試合模様には、観客も選手たちも興奮気味で食いついている。

『それではシンジさん、優勝したら賞金は何に使いますか?』

『ええつ、えーつと・・・や、焼き肉100人前食べてやる!』

『アタシも牛丼100杯食べちゃうよ!!』

「2人ともなんか硬いな、相当緊張してるんじゃないかねえか?」

「あなたほどテレビ慣れもしてないんでしょう。ましてこの大舞台じゃ。」

「お前は、賞金の使い道とか決めてるのか?」

「マンガアニメゲームスマホ。」

「即答か。」

「そういうあなたが欲しいのは、お金じゃなくてトロフィーでしょう?」

「そうだなー、でもあんなデカいと部屋におけないだろうし、エレの家に着くか?」

「遠慮しておくわ。」

次に戦うレッドキングとエレキングは、新人の2人とは打って変わって非常に余裕の

ある様子で待っている。

「さて、あの2人が健闘したんだ。今度はオレたちが会場を盛り上げないとな。」

「せいぜい自分まで熱くなりすぎないことね。」

「おまえはクールすぎるんだよ!」

ベンチを立って、ゲートへと向かう。モニターの向こうでまだインタビュ어가続いているのを、横目に見ながら。

「・・・決勝で会おうぜ、ミクラス、シンジ。」

「見事なフラグね。」

「堂々と立ってりゃ、折りやすいだろ?」

戦いはまだまだ始まったばかり。各々が戦いの中で求め、見つけるものは何か。

「ナツクル星人、腕は悪くなかったけど、勝負に弱い。」

「チブル星人、頭はいいけど、感情に流されやすい。そして、影で動くモノの正体は、一体何なのか？」

「なんか、どんどん流されて行ってる気がするのですが?!」  
「戦いの海は、ガタタんの触手で漕ぐのですう!」



## 風林火山を超えてゆけ!

『ししよー! やめてくださいー!!』

『逃げるなー! 向かってこーい!』

叫んで逃げるはザンドリアス、叫んで追うはレッドキング。今戦っているのは、予選2位通過のザンドリアス&ノイズラーの『Roll in Rock』と、予選7位通過のレッドキング&エレキングの『R/L』。ここで一度、予選通過順位とタッグ名を確認しておこう。

1位：ゼットン&amp;ベムラー（ブルースファイア）

2位：ザンドリアス&amp;ノイズラー（Roll in Rock）

3位：シンジ&amp;ミクラス（ミラクルナンバーズ）

4位：キングジョー&amp;Ⅱ（ペダニウムシスターズ）

5位：マガバツサー&amp;マガジャツパ（マガ・ポテンシャル）

6位：ブラックキング&amp;ガーディ（Complete Control）

7位：ガッツ星人×2（ジエミニイ）

8位：ゴモラ&amp;シーボーズ（Gボーン）

9位：レッドキング&エレキング（R/L）

10位：ベロクロン&バキシム（different dimension disaster D D D）

11位：ヒツポルト星人&テンペラー星人（ジ・ゴク・アク）

12位：ドドンゴ&ギランボ（ナイト・オブ・リザレクション）

13位：ナツクル星人&チブル星人（アサシンコマンド）

14位：ゴルザ&バリケーン（風林火山コンビ）

15位：クレージーゴン&ビルガモ（スクラップ&ビルド）

16位：キリエロイド&ノーバ（ジェーン・ドウズ）

対戦カードは、このランキングの8位以上までと9位以下で一組ずつ当たるようになって、それをさらにA、Bブロック二つに分ける形となっている。

『オラア！せっかく上位に入ったんだからもっと気張れえ！』

『むうりいく！助けてノイズラーちゃん!!』

『こつちだつてそれどころじゃないって!』

『よそ見している暇があるの?』

そして今行われているのがBブロック1回戦第1試合。この後、Aブロック第二試合、Bブロック第二試合、Aブロック第三試合・・・てな感じに続いていく。しかし1回戦だけで8試合もあるなんて長すぎやしないか、と思われるが1試合5分でインター

バルが10分だとしても1回戦が終わるのは2時間後ぐらいだ。

『応援してくれてるやつらがいるんだから、もっと頑張れよ!』

『ママがご近所さんも集めて応援団結成してるの言わないでえ!』

観客席の一角にカメラが向くと、『ザンちゃんがんばれ!!』とデカデカと書かれた横断幕やフラッグが並んでいる。その中央にいるのはやたら妖美なマダム。

第一回戦の対戦カードは以下の通りだ。

Aブロック

①ミラクルナンバーズ×アサシンコマンド

②Gボーン×風林火山コンビ

③ブルースファイア×DDD

④ペダニウムシスターズ×スクラップ&ビルド

Bブロック

①Roll in Rock×R/L

②CoC×ナイト・オブ・リザレクション

③マガ・ポテンシャル×ジェーン・ドウズ

④ジェミニ×ジ・ゴク・アク

いくつか既に結果が見えているような試合もあるかもしれないが、上がるまでは一天地

六の賽の目次第とも言うので、結果だけじゃなく経過も見て欲しい。ではでは。

『がんばってー！ザンちゃーん!!ファイトよおー!!』

『がんばれー!』『やっっちゃえー!』『ループでもがんばってー!』

「んママーっ!ハズカシイー!」

「逃げてばっかじゃ示しつかねえだろっ!」

「んぎゃー!」

実際かなり手を抜いているのであろうとはいえ、レッドキングの攻撃を全て躲しているザンドリアスもなかなかのスピードだ。立ち向かいながら躲すのは簡単だが、逃げながら躲すのもこれで結構難しいのだ。

「お互い苦労するわね、喧しい。パートナーを持って。」

「そうですか?アタシは結構好きですよ、アイツのこと。エレキングさんもそうじゃないですか?」

「答える必要は無いわ。」

「・・・ツンデレ。」

その騒がしい戦いが起こっている一方で、静かな決戦も行われている。ノイズラーは普段明るくてハキハキとした性格をしているが、なぜかザンドリアスという時は一転してクールを装うようになる。案外こつちが素の性格なのかもしれない。

「エレキング先輩、結構やりますよね。」

「おだてても何も出ないわよ?」

「アタシも結構、親父に指導されて格闘技とかやってみましたけど、エレキング先輩はきつとそれ以上ツスね……。」

「護身術は乙女のたしなみよ。」

「違うわー……エレキング先輩ってやっぱ違うわー……。」

バシイン! つと2人の間に閃光が走る。

「勝ちを譲る気はさらさらありませんけどね?」

「奇遇ね、私も同じ考えよ。」

ジャアアン! とノイズラーはギターをかき鳴らし、エレキングは盾を構えて駆け出す。

「いざ尋常に!」

「勝負!」

『大怪獣ファイトの初代チャンプのレッドキング選手とベテランGIRL調査員のエレキング選手による先輩コンビ』『R/L』! 曰くこれは『ルール』と読むそうです。』

『対するのは新米GIRLS隊員のザンドリアス&ノイズラーの後輩コンビ、『Ror

l in Rock』! 下剋上なるか!』

引き続き実況のジエッタ&シンさんも試合を盛り上げていく。その傍らには、我らがキヤップの買わせたしゅわしゅわコーヒーが置かれている。

「んにゃー!!」

「いつまでも逃げてつと本気でぶっ飛ばすぞお！」

「どつちにしろぶっ飛ばされるんじゃないですかー!やだー!!」

レッドキングの投げた岩の一発が、逃げ回るザンドリアスを捉えた。トンボとりのように撃墜され、地を舐めた。

「ううっ……もおやだぁ……。」

「そら立てよー!」

目をウルウルとさせながらザンドリアスは跪いて懇願するが、レッドキングは許さない。  
い。

『ザンちゃん!がんばってー!夕飯はカレーよー!』

ふと、ザンドリアスの耳に聞こえてきたのは母の声。生まれた頃より耳にし続け、今までずっと寄り添ってきてくれた声。

最近はそれがなんだかウザったく感じたりして、つい反抗したりしてしまったり、素直になれなかったりしているけど、それでも一番好きな人。

「ママ……ママに……いいとこ見せないとー!」

涙を拭いてすつくと立つと、意を決したように空へと舞いあがる。その姿には、確かな『決意』が見て取れた。

「ぐすつ・・・わああああああ!!」

「へっ、やつとつその気になったかよ!」

ザンドリアスは、足で助走をつけると飛行機のように上空へと舞い上がる。先ほどまでの逃げの飛行から、戦いへの飛行へと様相を変えている。

『ザンドリアス選手の体内では、戦うためにアドレナリンを大量分泌していることでしょう!まさしくFight or Flightです!』

『つまり火事場の馬鹿力ってヤツだね!』

強大な困難を前にして、己を奮い立たせる体の機能と言ってしまったら、それを可能とするのは心に『愛』を抱いているからだ。感受性多感なお年頃だからこそ、それを無意識に行えるのがザンドリアスなのだ。

(勝つことよりも、応援してくれるヤツらに応えるのがファイターの使命だけ、ザンドリアス!)

相手が自分より上か下かなんて関係ない。ただこの一所に命を懸けて!

「自分になにが出来るか、自分が得意なのは何かって言われたら、アタシにはコレが一番ツスね!!」

「国立競技場でリサイタルなんて、誉が高いでしょうね？」  
「夢は武道館ですけどねっ！」

ノイズラーは風を斬って飛びながらジャジャーン!!とギターをかき鳴らし、旋律の波紋が目に見えて広がる。一見ただ飛び回っているだけのような行動に、エレキングは警戒を強める。

「どうしました？ 攻撃しないんですか？」

「・・・ギターの音に超音波を混ぜているわね？」

「それが？」

人間の耳に聞こえる音の高さには限界があり、2万ヘルツを越えると人間にはもう聞こえなくなる。感覚の鋭敏化した怪獣娘にとってはその限りではないが。

『どうやら、ノイズラー選手はモスキート音を利用しているようですね。』

『シンさん、モスキート音ってなに？』

『モスキート音、単にモスキートを呼ばれることもあります。1万7千ヘルツほどの領域の音波はギリギリ人間が、それも若い人だけが聞き取れる、例えるなら蚊が耳元で飛び回るような不快な音なんです。高すぎる音も低すぎる音も、人間にはストレスになります。その音を使ってノイズラー選手は牽制しているのです。』

『成程、例えるなら黒板やガラスを引っ掻くような音ってことだね。』



加えて、ノイズラーの生態には大きな特徴がひとつある。それは騒音を好んで食べることで、食べられた音は周囲には聞こえなくなるということ。

「アタシ、これでも結構音感には詳しいんで、『超音波以外の音』だけでも食べられるんですよ。」

「好き嫌いするのは、よくないわね。」

「唐揚げについてるパセリなんて食べなくていいでしょ?」

パセリ農家のみなさんごめんなさい。パセリを食べるなら刻んでスープに散らしたり、ライスに混ぜて炒めるのがいいと思う。

「けれど困ったわね、私の放電光線は空を飛ぶ相手を狙えるほど精度は高くないのよ。」

「奇遇ですね、今はアタシも出来る限り相手の様子を窺いたところなんですよねえ。」

「そう、ならよかったわ。」

「ビシュッ!と空気を切り裂いて、白い刃が宙を舞う。」

「そこはまだ私の尻尾の射程距離よ。」

「・・・っ! たく危ないのお!」

寸でのところで、ノイズラーはエレキングの尻尾を躲す。だがそのせいでギターの演

奏は止み、超音波の障壁は途絶え、隙が出来る。

（あの距離から躲すなんて、なかなかやるわね。単に反射神経がいいだけじゃないさそうね。）

（一瞬手が動く音を聞き漏らしてなくてよかったあー！）

均衡が崩れ、試合に流れが生まれ始める。シーソーのように風は行きかい、どちらに傾くかは読めない。だが順当に行くならば、ここは実戦経験の多いエレキングが勝るだろう。

『エレキング選手！一切の容赦なくノイズラー選手に畳みかけるうー！』

『あのムチがあるとはいえ、距離を置かれると不利なことに変わりはありませんからね。この距離を守りたいところでしようか。』

攻め続ける理由はもう一つある。経験で勝つてこそはいるものの、この後輩にはまだまだ未知な部分が多い。事実、ストレートもフェイントも織り交ぜたこれだけの攻勢をかけても、ノイズラーは冷静に躲し続けて居られている。

「不思議ね、既にあなたの体は2度は黒焦げになっているハズよ。」

「アンプなら間に合ってますよ？」

怪獣とはそれぞれ特異な能力を持つているものだ。レッドキングやエレキングのよいうなタイプは王道とも言えるが、その王道を外れた特殊なタイプの方が割合は多いはず

である。そしてその能力にハマると、ちよつとやそつとの力でゴリ押すことは難しいということは歴史が証明しているし、現にエレキングの指導した2人はその最たる例だ。

「ふうん……。」

「終わりですか? ならば、こっちのターンですよッ!」

「!」

ノイズラーは翼をはためかせて急加速し、エレキングの懐、ムチの内角へと飛び込んだ。

「セイヤツ!」

「くっ!」

空手仕込みの正拳突きがエレキングの頬をかすめたのを皮切りに、今度は逆に目もとまらぬラツシユがエレキングを襲う。

「はあッ!」

「なんの! セヤツ!」

「ぐっ……!」

負けじとエレキングも盾で薙ぎるように払うが、それを見越していたかのように頭を下げて避けると、ノイズラーは返しにアッパーを顎に喰らわせた。エレキングはわざと大きく跳ばされることによって、その衝撃を受け止める。

「ツ……手の内読めたわ。耳がいいのね。」

「そのとおり、ほんの僅かな物音や気配も聞き逃すことはありませんよ！」

エレキングが攻撃を仕掛けた時、ノイズラーの耳がピクピクと動くところが見えた。攻撃の予兆を聞き逃さなかったのだ。

「アタシにはどんな攻撃も当たりませんよ！たとえ四方から同時に攻撃を受けても躲せる自信がある！」

「逃げてばかりじゃ成長しないわよ？」

「モチロン、この際だからアタシのとっておきを見せてあげますよ！」

ズサーッと身を引くと、どこからともなくアンプを取り出し、ギターを携えて指先に神経を集中させる。

「『3Dエクスペリエンス第一幕：ゼロ系新幹線』！」

「なにっ!？」

プワアアアアアン！という警笛の音がアンプから放たれると、それと同時にエレキングの視覚には、先端の丸い白い車両が飛び込んできた。慌ててその場から飛び退くが、片足を引っかけてもんどりうって倒れる。

「今のは……幻……ではないわね？」

「いいえ幻ですよ。アタシは好きな『音』を吸収できる。なら逆に、吸収した音を再現

すれば、相手は『聴覚』を刺激されて『視覚』からもダメージを受ける!今再現したのは『ゼロ系新幹線』の騒音、したがって聴衆は新幹線の衝撃を受けたというわけですよ!

迫る新幹線が見えていたのはどうやらエレキングだけではなかったようだ。音ばかりはS・A・Pでも完全に防ぎきけることは出来ず、観客の中にもその衝撃を受けたものがいたようだ。とはいっても、目の前に迫ってくるように見えただけで、実害を被ったものはいないだろうが。

「これがアタシの奥義『3Dエクスペリエンスつす!恐れ入ったでしょう?』」

「ええ、こんな能力があつたなんてね。・・・うまく使えばあんなものやこんなものも具現化できるのかしら?」

なにやらエレキングさんは一瞬邪な考えを抱いたようだが、すぐにそれを頭の中から払拭する。

「次イ!『3Dエクスペリエンス第二幕:F-15戦闘機』!」

キイイイイン!という耳をつんざく音と共に、三角形の翼を持ったジェット戦闘機が飛び出してくる。惜しむらくは、その両翼の下に携えられたサイドワインダーがただの飾りに終わっていることであるが。

「あのアンプを作ったのって・・・?」

「ワタシデース☆面白いアイディアだと思いましタ♪」

「キングジョーさん驚異のメカニズム!」

控室で見ている面々も、新人口ツカー2人の活躍に目を離せないでいる。やはりこの大会は開催されて正解だったと言えよう。

「まだまだ、こんなもんじゃないですよ!この世のあらゆる音がアタシの味方です!」

「そう・・・なら力を借りるとしましょうか。」

「それって誰の?レッドキング先輩とか?」

名前の挙がったレッドキングはというと、空を飛び回るザンドリアスに以外にも苦戦を強いられている最中であつた。

「ええい、逃げ足ばっかり磨きやがって!」

「あれ?あたしって結構やるんじゃないの?」

その内に調子に乗り出したザンドリアスは空から一方的にレッドキングを口から吐く炎であぶる。やはり空が飛べるというアドバンテージは大きかつたか。ダメージとしては微々たるものであつたが、レッドキングは手が離せそうにない。

「じゃあ一体誰の手を?・・・って、スマホいじってるし!」

「作戦は既に完了したわ。」

スマホ、正確にはソウルライザーなのだが、戦闘中にSNSのチェックなんかをする

エレキングさんではない。同じキングつながりの仲間から貰ったソフトウェアを使い、ある場所へとアクセスした。

「なんだこの曲?!」

「ふう・・・やはりいいわね。」

にわかには会場の全スピーカーが騒がしくなってくる。観客の多くは頭に「？」を浮かべているが、一部の女性を中心とした者の中には大きく反応するものもいた。

『おっと、この曲は一体?こつちなにもしてないよねシンさん?』

『この曲は・・・たしかどこかで聞いたような?』

「こ、これは・・・この曲は・・・!」

「どしたのウインちゃん?」

「西湖さんのキャラソン!!」

「それも『おまピト』?」

「これはエレキングさんの推しのクニマスの西湖のキャラソンですう!」

「説明どうも・・・。」

「ドウやら、ワタシの作ったハックツールを使ったようデスねー。」

「キングジョーさん、そんなのも作ってたの?」

「趣味デスよ趣味。しかしまさかエレエレが使うとも思ってたませんデシたねー。」

「エレキングさんのMP3フォルダを全部解放してることか・・・。」

理屈は簡単だ。会場の音声管理システムにアクセスして、自前の音楽ファイルをスピーカーから流しているだけ。ただそれだけのことだが、

「あああああ・・・気が散る！けどこの程度じゃ負けないし！」

「♪」

ノイズラーが好きなのは軽快なロックミュージックだが、大音量で響く低音ボイスに耳を塞ぎたくなる。魚嫌いなのに魚料理しか出てこない料理屋に連れてこられたような気分だ。そうなってしまおうとノイズラーとしては死活問題だ。

「こんなの・・・ロックじゃないし・・・うおおおおお！」

「自分の主張ばかりをかき鳴らしていても、相手には届かないわ。」

「ぐふうっ・・・!!」

「演奏するものがないて、聞くものがないて、初めて音楽は成り立つの。それは対話も同じ。孤高のギタリストでは、良いバンドマンにはなれないわ。」

「そんな・・・理屈！」

「だが、正しい物の見方よ。」

未知の音楽に調子が狂ったか、精神的な動揺があったのか、いずれにしろエレキングの目的は既に達成していた。



「どんなに魅力的なグッズが目に入ろうと、それで本命の品を逃したことは、一度もな  
くつてよ?」

「はは……負け……ました……」

ノイズラーの胴に巻きつけられた、エレキングの尻尾。それが意味するものはただ一  
つだ。

『『エレクトリックテール』!!』

「びやああああああ!!」

迸る高圧電流、ノイズラーの喉から放たれるは断末魔。ようやく一試合片付いた。

「まだあだああああ!!アアアアアアアアアア!!」

「……来いよ!」

ザンドリアスも最後の攻勢にかかるもはや勝機などない、だが最後の最後まで足掻  
く。

「へんしくん!!」

「ちよつ、これはさすがに……」

『おおつとザンドリアス選手、巨大な石柱へと姿を変えたく!』

赤く明滅する隕石の姿となったザンドリアスは、そのまままっすぐとレッドキングの  
頭上へと降っていく。

「けど、逃げるわけにはいかねえな．．．うおおおお!!」

『ガアアアアアアアアア!!』

もはや駄々っ子ではなく暴れん坊と評するべきほどの咆哮と地響きがスタジアムを揺らし、そのすべてを覆い隠すほどの土煙が立ち込める。

『レッドキング選手、隕石をまつすぐに受け止めたあ!』

『あの質量だと数十トンはあるたかもしれないね．．．』

やがて土煙が晴れてくると、煙たがるような仕草を見せるエレキングが見えた。そしてフィールドの中央には．．．

『巨大な石柱が突き立っているう!レッドキング選手の姿はどこにも見えないぞお!』

『あの大きさには、さすがのレッドキングさんにも耐えられなかったんでしょか?』

「おお．．．ザンドリアスすごい．．．!」

「駄々っ子の底力ですね。」

「レッドキングせんぱい!」

「心配ありませんヨ、レッドならきつと．．．。」

赤い光を放つ石柱の様子を、しばらく警戒していたエレキングであったが、すぐにそ

の構えを解いた。

「ふっ……ふっふっふっふっ……」

『おっと、この声は潰されたレッドキング選手の!』

「この程度で潰されるオレじゃないぜ!そおらっ!」

ズズズツと石柱が持ち上がっていき、その下から白い体が姿を現す。

「たしかにスゲエ威力だったがよ、これぐらいで参るようじゃ怪力怪獣No. 1の座が聞いて呆れるぜ!」

とうとう完全に石柱を持ち上げると、勝ち名乗りを挙げるように声を張り上げる。

「くらえ!オレの全身全霊を込めたブレーンバスターを!!!」

ぐらりっ……と背中側に揺れ、地面に突き立てられた時以上の衝撃が全てのものを襲う。

「ぐっへえ!」

「勝負あつたぜ……」。

割れた石柱の中から、ザンドリアスが放り出される。

「わ、わたし今回は……が、がんばったのになあ……」

「よくやったぜ、お前はよ。師匠のオレが誇らしいぐらいだ。」

もはや立ち上がる力すら残っていないザンドリアスであったが、心の中は何かを満た

されていた。

「だ、誰かわたしのこと見て笑ってる・・・？」

「誰も笑ってなんかいないぜ。」

会場はワアアアアアア!!と色めき立ち二つのタッグの健闘を称える。

「このオレが笑わせるもんか。」

『決まったああああ!! Bブロック第一試合を制したのはレッドキング&エレキングの  
R/L!!』

『今、フィールドではお互いをたたえ合うように手を取り合っています!』

エレキングはノイズラーの手を取って立たせ、レッドキングはザンドリアスを抱え上げてその存在を誇示した。

「ちよ、ちよつとししよー!高い高いとかハズカシいですつてえ!」

「いいだろ別に!オレだって嬉しいんだよ、まさかお前があんなにやるなんて思わなくつてよー!そーれそーれ!!」

「やめてー!ししよー!」

『ザンちゃん!がんばったわねー!ママ誇らしいわー!』

「ママもやめてー!」

きやいきやいと騒がしくも楽しそうに引き上げていく様がスクリーンには映し出さ



たることになるだろうしなー、どうかな？どっちを応援すればいいかな．．．」

「どっちも応援すればいいんじゃない？」

さて、そんな画期的な夢のようなシステムであるが、一つ問題がある。それは『使用者にはサイキックパワーが求められる』という点である。当然普通の人間には超能力など持っていないし、ただ実験するだけでも苦心する事となる。ただ一人、とある事情で望まずも『念力』を得てしまったシンジを除いて。

「へんぶくしっ！」

「どしたのシンジさん、風邪？」

「ちよつと汗かきすぎたのかな．．．」

その本人は控室でゆっくりコーヒーブレイク中。

「ところで、そのハチマキはなんなの？」

「ちよつと頭を冷やすためのものだよ。戦闘になると余計にエネルギー発散しちゃうから、その予防策。」

「ふーん、ところでこのコーヒー。」

「炭酸入りだね、珍しい。」

「けっこうイケるねこれ！」

「そう？」

アギちゃんたちから差し入れに貰ったものだが、ちびちびと飲み進める内にすつかりぬるくなつてしまい、コップが大粒の汗をかいている。

「炭酸入りのコーヒーよりも、炭酸抜ききのコーラの方がよさそうだけどな、こういう時つて。」

「あつ、なんかそれ知ってる。あと消化にいいものがないんだっけ。」

「少なくともカツ丼食べて勝つことへのゲン担ぎはあんまりよくなさそうだね。」

「そうこうしている内にそろそろ次の試合が始まる時間だ。」

「ねね!ゴモたんの試合はスタジアムの方観に行こうよ!せっかくすぐ近場にいるんだからさ、テレビじゃなくて生で!」

「えつ、僕この後またガジェット調整に……。」

「いいからいいから!ゴモたんの試合だけでも、ね!」

「しょうがないなあ、と思う一方でそれもそうだなと納得する。ミクラスに手を引かれて控室を後にする。」

「そうだ!ゴモたんたちに会ってこうかな?」

「もう今はダメなんじゃないかな?入場ゲートに行っちゃつてると思うし。」

「ふーん、まあゴモたんなら大丈夫だよね!なんせ期待のエースなんだから!」

「うん、僕もそう思う。」

それは揺るがない事実として、シンジも十二分に理解していた。

果たしてここで無理に会いに行つて、それで結果にどう関わるかは知つたこつちやないから。

「あつ、ミクちゃんシンジさんこつちこつち。」

「おーつすアギちゃんウインちゃん！どう警備のお仕事は？」

「今のところなんの問題もありませんよ。バリアのおかげですね。」

「おつかれ、コーヒーご馳走様。」

「シンジさんこそ、さつきはお疲れ様。」

「すごい戦いでしたね！」

「えへへー、すごいっしょ！」

「なんでミクちゃんが威張るのさ。」

『さて、続いてAブロック第2試合を始めたいと思います！まずは選手の入場です！』  
一回戦注目のカードが始まる。それを務めるのは本家大怪獣ファイトのエアースと、それが初陣を務めた期待のルーキー。

『ゴモラとシーボーズのGボーンと、ゴルザとバリケーンの風林火山コンビ！』

片や、ゴモラと同じ古代怪獣の分類でありながら、岩肌のような硬い甲殻に覆われた、パワーと防御力双方に優れる『超』古代怪獣ゴルザ。



「おおー! ゴルザだ!」

「大怪物ファイトのベテランだっけ。雑誌に載ってた。」

「ミカとの勝率はほぼ五分五分らしいね。」

「もう一人、バリケーンさん?」

「ミクちゃん知ってる?」

「ううん、大怪物ファイトじゃ見たことないや。」

片や、海に浮かぶ水母クラゲのようにふよふよとした柔らかい笠と触手を引つさげた、台風

怪物バリケーン。どうやら彼女は元来ファイターではないらしい。

「知ってるわ。」

「うおっ!?! いきなり後ろから?!」

「レッドキングさん、エレキングさん、お疲れ様です。」

「よう、オレらもこっちに見に来たぜ。」

「ザンドリアスとノイズラーさんは?」

「おやつ食べに帰ったわ。」

先ほどの試合を終えたR/Lも観客席へとやってきた。つい先ほどまで激しく動いていたというのに、息一つ切らしていないのはさすがというところ。

「エレキングさんはバリケーンさんのこと知ってるんですか?」

「前に社交界で会ったわ。実家の。」

「社交界?! そんな世界が本当にあるんですか!？」

「私は興味は無かったけれど、これも経験の内だと思つてね。その時に彼女に会ったわ。」

「どんな性格でした？」

『オーツホツホツホツ! みなさまご覧あれ! ワタクシの鮮烈にしてセンセーショナルなデビュー戦を!!』

「あんな性格よ。」

「だいたいわかった。」

高飛車、傲岸、高慢ちきとはまさにこれ。あんなプライドの高そうな相手とコンビを組むのは相当難しいことであつたらうに。むしろゴルザさんはよくぞOKを出したものだ。

「あいついつも金に困つてるからな。大方大金で雇われたんだらう。」

「お金遣いが荒いんですか？」

「知らん、とにかく月末はいつも水ばかりの出やがる。」

ナツクルさんのような賞金稼ぎというわけでも、守銭奴というわけでもなさそうだけど。まあお金の使い道にケチつけるのはナンセンスだらう。趣味であれ生活費であれ

道楽であれ、必要なものに必要なだけ使うことの何がいけないか。

「あつ、ミカこつち見たかな?」

「ゴモたん! がんばれ!!!」

「ここから聞こえてるんですかね?」

さすが人気なだけあって、ミカが手を振って観客席にアピールすると、ワアアアツ!! とミクラスの声をかき消さんばかりの歓声が上がる。シンジたちが手を振ると、ミカも手を振り返し、シイさんも軽くお辞儀をしてきた。

「聞こえてなくても聴こえてるみたいだな。」

「ミカー! がんばれ!」

「よーっし行くよシイちゃん! 準備はいい?」

「はいっ! よろしくお願いしまひゅっ!」

「それは相手に言おうよ!」

「はじめましてゴモラさん。いつもご活躍を拝見させていただいておりますわ! ワタクシの初陣にちょうどよいですわ!」

「あー、まあよろしくな、シーボーズも。．．．なんか調子狂うなあ。」

「何か言いました?」

「いいえ、なにも。」

挨拶もそこそこに、両チームとも臨戦態勢をとる。約一名、これが初戦闘だというお嬢さまを除いて……。

（せっかくの機会なんだから、シンちゃんにはちゃんと『イイところ』見せないかね！）  
「とか思ってるんだろな。」

「なにか言ったか？」

「いえ、そういえばミカとはタイマン張ったり共闘したことはあっても、こうしてマジな試合を『生』で見るのは初めてかも？ って。」

「まあ、生試合見るのはここにいるほとんどが初めてだけどな、お前に限らず一般人は。」

何度でも言うが、本来大怪獣ファイトは離島で行われるものを、今回は特例的かつ試験的に大都市のド真ん中で行われている。非常時でなければ滅多に起こりえない、貴重な体験なのである。

「そういう意味では本当に『希少種』だなアイツは。」

「アイツって、バリケーンさんのこと？」

「そうだ、本来ファイターでもないやつが、こうして本戦に残るってこと自体が稀の稀だろ。」

「単にゴルザさんが強すぎるだけなんじゃ?」

「果たしてそれだけかな・・・。」

「考えすぎツスよ先輩!ゴモたんなら絶対勝ちますって!」

長年の経験からか、それとも怪獣としての勘か、未知数なバリケーンに対してレッドキングは警戒を強める。

『さて、それではいよいよゴングのお時間です!勝つのは期待のエースか、それとも今大会きつてのダークホースか!大怪獣ファイトオ!』

『レディイイ!!』

『『ゴオオオオオオオオオ!!!』』

「では、後はよろしくお願いしますわ。」

「ん。」

開始早々、バリケーンは頭の笠を回転させて空へと舞いあがっていつてしまった。

「いきなりい?」

「なら一緒にゴルザちゃんをやっちゃうよ!」

フンツ!と筋肉をアピールし、ガードを固めたゴルザに対して、2人は代わる代わるの素早い連携攻撃を浴びせていく。しかしそこへ助太刀する様子もなく、バリケーンはただふよふよと浮いているだけだ。

『おおつと早くも試合放棄かあ?! バリケーン選手空中から戦いを見下ろすばかりでなにもしていないぞお!』

『まさに、高みの見物ですな。会場からもブーイングの声があがっているようですねえ。』

「オーツホツホツホ、ブーブーブー騒がしいブタさんですことねえ。」

「こんな貧乏くじ引くなんて、ゴルザちゃんもツイてない、ねツ!」

「今はな。今はまだ、な。」

「なにか作戦があるんでしようか?」

「て言っても、空飛ばれちやうとなあ……シイちゃん、お願い!」

「はいっ! やつてみます!」

前線から一步引いたシーボーズは、んんくっ! と胸に力を込め、ポンツ! と解き放つ。

『おおつと、シーボーズ選手の胸から、ボールが飛び出してきた!』

『あれは、サッカーボールでしょうか? 骨のデザインの。』

亡霊怪獣シーボーズ、その魂を受けた少女・滑川シイナの特技はサッカーであった。怪獣娘として目覚めたが為に、普通のサッカー選手としての道は絶たれてしまったが、その時抱いていた夢は変わらず今も彼女の胸の中に燃え続けている。

「これが、『サッカーボーン』です!」

骨のサッカーボールだから、サッカーボール。名付け親が誰かはともかくとして、放たれたシュートは軽く弧を描きながら正確に空を舞うバリケーンへと吸い込まれて行く。

「あらっ。」

「外れたっ?!」

ふよふよと浮いているだけの標的を撃ち損じた。ただそれだけの事であったが、シーボーズは少し驚いていた。そりや今まで戦ってきた相手にも空を飛ぶやつらはいた。そいつらは『ただ浮いている』だけじゃないんだから、当然避けたりだつてするさ。

だが今のバリケーンは、『避ける』ことすらしなかった。それどころか、ボールの方が外れたように見えた。

「なにか・・・変!」

「よそ見。」

「させないよ!」

考えることに夢中になって、周囲への警戒がおろそかになっていたシーボーズを、ゴルザの爪が狙っていたが、それをゴモラは受け止める。

「シイちゃん、考えるのは後あと!」

「よし、もいつばあああああつツ!」

今度はさらに勢いをつけたオーバーヘッドシュートを放つ。急激な螺旋を描きながら、今度こそバリケンへと向かって行く。

「あらあら、どこを狙ってらっしやるの?」

「そんな!」

今度こそはと放たれた必殺シュートを、またしても外した。余裕しやくしやくという態度でバリケンは見下してくる。

「所詮あなたたちのような空を飛べない怪物は、地べたを這いつくばって右往左往するのがお似合いでしょ! オーツホツホツホツ!」

「タツグパートナーに言えるのかそれ!!」

「うるさいですわね外野が!」

あまりの横暴な発言に、思わずシンジも野次を飛ばす。空を折べることは確かにアドバンテージだが、ただそれだけで勝ったつもりでいるとは言語道断である。

「気流ね。」

「え?」

「バリケンの周囲の気流が乱れているのを感じるわ。」

「そうか、それでボールが上手く当たらなかつたんだな。」

エレキングの三日月レーダーがクルクルと回って、フィールドの状況を分析する。



「どうやら、何の考えも無しに宙に浮いているだけでは無さそうね。」

「ゴルザは囷で、自分は何かの下準備をしているってことか?」

「あの不遜な態度も、油断を誘うための演技だと?」

「あれが演技かどうかは知らないわ。」

ひよつとすると素で言ってるのかもしれないが、それはさておき。

「相変わらず硬いねゴルザちゃんはさっ!」

「戦うことしか能が無いから。」

「ホントお堅いよね。」

ゴモラは得意のテールスマッシュを浴びせ続けるが、それをゴルザ意に介さず突っ込んでくる。真つ向からの殴り合いともなれば、その剛腕が意識を彼方へと吹き飛ばす威力になる。

『『ソニックヘッドバット』!』

「ぐっはあ!」

武器となるのは腕だけではない。足を踏み込めば地は裂け、頭を振りおろせば星が舞う。まさにこれ、全身凶器。

「おラアッ!」

「ぎひいつ!よ、容赦ないのも相変わらずだね・・・。」

ロックアップで組み合えば、超音波エネルギーを込めた頭突き『ソニックヘッドバット』で地面へ叩き落とし、さらに転がる相手に蹴りを喰らわせ続け、そして、

「『超音波光線』！」

『出たー！ゴルザ選手の必殺コンボ！』

『超音波は波長が合えばあらゆる物体を破壊できます、まさに死のコースですなええ！』  
そのほか、お風呂にマッサージ効果をつけたり、洗浄機に利用できたりと大活躍だ。

「負けるかつ！『超振動波』!!」

『おおっとゴモラ選手も超振動波で打ち返してきたあー！』

超音波と超振動が、鎬を削る。この鉄火場を制するのはどちらか？

「風が・・・。」

「エレキングさん？なぜ突然男子高校生のようなセリフを？」

「断じて違うわ。」

火花散らす戦場に割って入ってきたのは、一迅の風であった。

「オーツホツホツホツ!! ついに来ましたわー！わたくしの『春』が!!」

吹いたのは春一番、始まりを告げるプレリユード。

「ここからはネクストステージ! わたくしのターンですよ!!」

「ようやく始まったか・・・。」

「これは・・・この風は?!」

みるみるうちに、フィールド内を巡る空気には流れが生まれ、それはやがて巨大なマイルシユトロム『大渦』となる。

その発生源こそ、宙に漂うバリケーンである。

『おっとこれはどうしたことか!?! 今まで静観していたバリケーン選手を中心として、フィールドに竜巻が起こっています!』

『まさに台風の目ですね!』

「わたくしは『台風怪獣』、わたくしは世界を廻す風、つまり! わたくしこそが世界の中心なのですわあ! オーツホツホツホツ!」

そうこうしている間にもどんどん風は強くなる。

『物凄い風だあ! フィールド内の風速計が、40mを指しています!』

『風速40mというと、非常に強い台風の規模です!』

あまりの強さに、ゴモラとシーボーズも身を支えるのに必死になる。その一方で、ゴ

ルザは風の中も平然としている。

「ひううう……これちよつとマズいかも……?」

「このままじゃ……飛ばされちゃいます!」

リングアウト、会場を守っているバリアに触れると即刻負けとなる。にわかはその危険性が跳ねあがってきた。

「そうか、風林火山、こういうことだったのか!」

「どういうことだ? シンジ。」

<sup>と</sup>疾きこと、風の如く。

<sup>しず</sup>徐かなること、林の如く。

<sup>しんりやく</sup>侵掠すること、火の如く。

動かざること、山の如し。

「バリケーンさんはさつきまで宙に浮かんでいただけのように見えて、エネルギーを貯めこんでいた、それが『林』。一方ゴルザさんは、ひたすら攻撃に耐えて反撃するチャンスを探っていた、これが『山』。」

「そして今のバリケーンは、エネルギーを開放して攻めに掛かる『風』、というワケか……。」

つまり、攻めと守り、陰と陽、対極を持った戦法と、それを可能とするコンビ。ごく

ごくシンプルな話であるが、それ故に極めやすい。

『風林火山』とは、戦国時代の武将・武田信玄が用いたとして有名な四字熟語ですが、その源流は中国の兵法書の『孫子』にあるんです。孫子は様々な形を変えながら、現代でも生かされている有名な戦術書でもあるんです。例えばビジネス論や人付き合いなど……。』

例えば、『戦争に勝つ智将は、戦いの前に計画を練るものなり、戦争に負ける愚将は、先頭前の準備を怠つたものなり』というものがある。あらかじめ用意をしていた方と、何もしていない方とでは、どちらが勝つかは火を見るよりも明らかだ。こういう基礎的なことを纏めてあるのが孫子である。

その他、『城攻めをするときは敵の3倍は兵力を用意しとけ』とか、『即断即決速攻スピードは命』とか、なろう小説でも流用できそうなありがたくくくくい格言が乗っているから物書きを志すならオススメする。さつきも言った通り、現代でも孫子を元にした本は探せばいくらでも見つかるから。マンガで読みたいなら『デッドプールの兵法入門』がオススメだ。絵付きだとなおよく理解できる。

### 閑話休題

「で？なにが言いたいわけ？」

「地の利はわたくしにありましてよ！つまり、この戦いを制するのはわたくしという

「ことですわー！」

「どうやらあの人も孫子を読んだらしい。」

「教養はいいようね。」

「ただ経験が足りないな。」

「空を飛べるのが、そつちだけだと思わないでくださいー！」

再び、シーボーズはオーラを高める。そして具現化させるのは、赤い装飾の施された銀色の流星。

『なんとおー！シーボーズ選手、今度はロケットを生み出したあー！』

かつてシーボーズが宇宙へ帰るために用意された、ウルトラマンを模したロケット。もはや何でもござれ。

「これでっ……！！」

「いつけーシイちゃん!!」

「たしかにオドロキですけど、そんなおもちやでは物の数にもなりませんわよ！」

『あぁーつと、しかしロケットは風に煽られて非常にアンバランスだあ！』

『ロケットの打ち上げには天候も大きくかわりますからねえ。』

予定されたコースを大きく外れ、ふらふらとした軌道で天へと昇っていく。

「ちよつと……ピンチかも？」

それでも降りる気はさらさらない。

「ならちよつと、『本気』で行かせてもらおうかな!」

「・・・来るがいい。」

はああああああ・・・

ゴモラが息を吸い込み、全身の力を『丹田』に込める。生きとし生けるものは皆、秘められた力を持っている。その多くは、進化の過程で忘れていくものであり、それは怪獣として例外ではない。

事実、かつてジョンソン島で暮らしていた初代ゴモラは、凶暴性を失い、穏やかに暮らしていた。

「あああああ・・・ハアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その体の奥底に閉じ込められていた野生、凶暴性、それらを纏めあげる『闘争本能』が目覚めます!

「これがツ! 『EXゴモラ』だ!!」

『出ましたっ! ゴモラ選手の最強形態『EXゴモラ』!! その姿が今! 第一回戦にして披露されました!』

『これは早くも勝負ありましたかねえ?!』

「そんなっ! わたくしの嵐が・・・!」

嵐が逆流し、熱風が巻き起こる。進化への余剰エネルギーが、バリケーンの風を封じ込める。

「すうー・・・シイちゃん!! 今!!」

「はいっ!!」

軌道を取り戻したシーボーズロケットが、今度こそバリケーンを狙い撃つ。

「くっ・・・よくもわたくしの体にキズをつけましたわね!」

「そういうの流行らないんですよ、大怪物ファイトじゃあ!」

高速で飛び回りながら、バリケーンを包囲するように突撃を畳みかける。

「この姿になったからには・・・3分、いや1分でケリをつける!」

「やってみろ、『超音波光線』!!」

『『テールスピアー』! ダダダア!』

一瞬のうちに、鋭利な尻尾がゴルザの体に3突きされる。その実、放たれたのは4発で、最初の一発は超音波光線をかき消すために使われた。

「まだまだあ! 『ローリングアタック』ウ!!」

体を丸めて体当たり、ギザギザと鋭利になった体表で放たれるそれは、簡単に相手を



轢き潰すローラーになる。

「くう……やはり、やる……。」

散々殴られても蹴られても堪えなかったゴルザが、一転してダメージを負い始めた。

「やっぱり、すげえよミカは。」

「つえー! ゴモたんつえーよ!!」

「ああ……。」

「レッドキングさん、どうしたの?」

「……静かすぎる。」

「え?」

レッドキングのそんな言葉に、アギラだけでなく大怪獣ファイトに疎いものたちは頭に?を浮かべた。

「たしかにゴルザは物静かな、何考えてんのかよくわかんねえところもあるけど、ここまで一方的にやられ続けているなんて……。」

太古の眠りより目覚めた古代怪獣を止められるものはいない。

「これでトドメだあ!! 『EX超振動波』アアアアアアアア!!」

『ゴモラ選手! 極太の光線を発射したあ!!』

しかし、もしいたとすれば、それは、

「待っていた……この瞬間を！」

なんと、ゴルザはEX超振動波を大の字で受け止める。

『ゴルザ選手、もろに喰らったあ?!』

『いえ、待ってください……超振動波のエネルギーがどんどん消滅していきます!!』  
どこから持ち出していたのか、シンさんの持つ機械がピコピコ音を立てて、その異常を伝える。

「こんのお……なにを?!」

「まだまだあ……。」

やがて、会場全体が目を覆わんばかりの眩い超振動波の光は勢いを衰えさせはじめる。

「はあ．．．はあ．．．そんな．．．まさか．．．?!」

「もらったぜ．．．『ガイア<sup>地球</sup>ストリーム<sup>叫び</sup>』．．．」

それとは対照的に、今度はゴルザの胸が赤熱化していた。まるでマグマ吹き出す地殻の様に．．．。

「『地球<sup>ガイアストリーム</sup>の叫び』．．．ってなに?」

「そういえば、アメリカにいたとき聞いたことがある。地球そのものは生きていて、絶えず『命を生み出す』力がどこかでは湧き出していると．．．」

地球は生きている。その上で生きているモノと、地球は相互に反応し、時に反発する。ある一定の『エラー』が発生すれば、それを地球は『排除』しようとする。つまり地球には、自己を統制するシステムが備わっている。それを『ガイア理論』という。

『ガイアストリーム』とはつまり、そのエラーを排除するための種のある種のオーガニック的な、『意志の力』である。

『サバンナでシマウマが草を食べ、そのシマウマをライオンが食べ、やがてライオンが死ねば大地に還り、草を育てる．．．その食物連鎖のサイクルも、ガイア理論のひとつと言えるでしょう。』

『地球そのものの力・・・それって・・・なんか・・・すげえじゃん。』

「つまり、EX化も『地球の叫び』の力の一端だったと?」

「わかるな、そもそも初めてあの姿を見せた時も、シャドウとの戦いの中でだった・・・。」

「その神髄を得るために、ゴルザはわざと攻撃を受け続けていたのか!」

「そんな・・・?!」

「『地球の叫び』によるパワーアップが、お前だけのものだと思うな!」

纏うはマグマ、地球の血潮。遙か46億年前より、未だ燃え続ける原初の力。それを手にし、操るは3000万年の眠りより目覚めた『超』古代怪獣。

「『ファイヤーゴルザ』・・・そう呼んでもらおうか!」

『山』は目覚めて『火山』となる。

「こんな・・・こん・・・な・・・っ?!」

シヨックに打ち据えられるEXゴモラの体が淡い光を放ち始め、やがて元のゴモラの姿へと戻る。

「1分、時間切れだな。」

『なんとお！誰が、誰が予想できたでしょうか!!この展開、この逆転劇を!!』

『それだけじゃありませんよお・・・地球の神秘を・・・垣間見ました・・・!』  
スタジアムはワツと湧き立ち、再び『風』が巻き始めていた。

「また・・・嵐が・・・うわっ!？」

「言ったでしょう?わたくしこそが『世界の中心』である」と!

空の上では、伸びた触手がシーボーズを捉え、強力な電流を発する。

『スカイクラーケン・シヨック』ですわ!」

シーボーズの四肢を拘束し、電気椅子の拷問のように生命力をみるみると奪っていく。

「はあ・・・ホネは地面に埋まっていなさいな。」

操る糸がプツツと切れたように、シーボーズの体は真つ逆さまに転落する。

『おっと、シーボーズ選手!ダウンです!一方バリケン選手はなおも健在!』

「シイ・・・ちゃん・・・。」

『ゴモラ選手、打つ手なしなあ!?!』

「オーツホツホツホツ!他愛無いですわねえ!大怪獣ファイトというのも!」

バリケンは降りてくるなり、ゴモラとシーボーズを貶してくる。確かに戦闘そのものが初めてだというのにこの戦果には目覚ましい物がある。

「なあに……まだまだ、これからだよ……。」

「見苦しいですわねえ、もうわたくしの勝利に揺るぎはありません事よ？あなたがどんなに足掻こうが、地を這う獣に空を飛ぶ鳥は落とせませんことよ？」

「へっ……あんたなんか言ってるんじゃないんだよ、これだから素人は困るんだよねえ……。」

「なんですって？」

「ボクが相手したいのは、ゴルザちゃんだけだよ。大怪獣ファイトのイロハも知らない素人は、先に帰ってていいよ？」

ワナワナ……と目に見えてバリケーンの機嫌は悪くなっていく。それから何かを言おうと口を開いた時、ゴルザはそれを制した。

「待つてもらおうか。」

「……なんですか？あなたはわたくしに雇われた身、わたくしの方が上でしてよ？」

「なら、お客様には『プロフェツショナル』に任せてもらいたいものだな？……ゴモラとは、私が戦う。」

口調は変わらず物静かなそれであつたが、目力がバリケーンを威圧する。まだ何か言おうとしたようだったが、存外あっさりとは折れて一步引いた。

「……わたくしに意見したこと、覚えておくことよ？」

「契約書の裏面にでも書き加えておいてくれ。石頭なんぞな。」

ふわりと空に上がって、バリケーンは再び高みの見物を決め込んだ。

「言ってくれるじゃん、ゴルザちゃんも。」

「さあな、私は仕事を万全に全うするだけだ。」

ゴリゴリツと腕を鳴らすゴルザ改めファイヤーゴルザに対して、ゴモラは尻尾を大きく振り乱して威嚇する。今だ闘争心は折れてはいない。

「ほわたあつ!」

「ハアツ!」

ゴツ!!と重たい衝撃を空間に響かせ、大怪獣ファイトが再開された。

「上がってるのは、パワーだけじゃないみたいだね!」

「昂る・・・すべてが・・・今まで感じた事も無いほどにな!」

強大なる獣が、走る、跳ぶ、そしてぶつかると。これが真の大怪獣ファイトだ!と観る者全てにアピールせんほどの激しいぶつかり合い。そこに野次や茶々をいれるものはいない、泣く子も黙る闘争。

「けど・・・たしかにパワーアップしてるけど、EXほどの力じゃないね!」

「・・・ツ哀しいかな、やはりお前は天才だよ。」

「そりゃ、そうだよ! なんとたつてボクは!!」

ちらつ、観客席のある一点に一瞬だけ目をやる。  
そして目が合った。

「大怪獣ファイトの、怪獣娘1の、『人気者』なんだからあ!!」

意地があるんだよ、女の子にも! 渾身の力を込めたテールスマッシュを叩きつける。  
さすがのゴルザもこれにはふらつくが、すぐに立て直す。

「もう一発う!!」

「ぐう．．．つ!!ぐうううう!!」

わき腹への攻撃を、なんとか掴んでみせる。

「こ、これ以上、付き合つてられないぞ、お前の根性には．．．!」

「全然、こっちはまだまだ元気だよ!!」

そういうゴモラであるが、息も完全に上がり、肩を大きく上下させている。無理もない、EXの力を最大限振り絞り、さらに今なお戦っているのだから。もはや気力だけで動いていると言っても差し支えない。

「そうか．．．なら．．．今、楽にしてやるッ!!」

「ぎいっ!!ギャアアアアア!!」

脇で抱えた尻尾を無理矢理引つ張り、ゴモラの腰を同時に蹴り、痛めつける。いや、痛めつけるなどという生易しいものでも無い。



「オオオオオオオオン! ドリヤアアアアアア!!!」

「ぎやあああああつ!! ああああああ!!!」

大蛇のような、ゴモラのトレードマークとも言える尻尾が、

『千切れたあ! なんと腕力! 恐るべし、ファイヤーゴルザの猛攻!!』

千切れた尻尾は乱暴に投げ捨てられると、しばらくビタンビタンと動き回っていたが、やがて力を失って消えてしまった。

「があつ・・・ああ・・・ツ!!! まだあ!!!」

「・・・ハアハア・・・来い。」

それでも、まだ倒れない。倒れるわけにはいかない。古代怪獣としての本能が、大怪獣ファイターとしての誇りが、そして、誰よりも、なによりも・・・

「ミカあああああ!!!」

「ボクが倒れたら!!! 次、シンちゃんが戦わなきゃいけないんだから!!!」  
ただ君だけのために。

『ゼロ・シュート』オオオオオオオ!!!」

ゴモラのもう一つのトレードマークであるツノが、ファイヤーゴルザの胸に突き刺さり、ありったけの超振動を流し込む。

『決まったあ!!!今度こそ逆転かあ!!!』

漏出したエネルギーの奔流は、地を走り、空を裂き、

「きゃっ!?!」

『天』にまで届いていた。

『今、フィールドの中はもうもうと土煙が立ち込めています!果たして、立っているのはどちらなのか!?!』

皆が固唾を飲んで見守っている。しかしその目当ては『試合の勝敗』ではない。

「そうか、そういうことか・・・ならばっ!」

キツと、ゴルザも『覚悟』を目に宿して、ゴモラに向き直る。

「見せてやろうか、お前に捧げるに鍛えた技!」

と、自らの胸に突き刺さったツノに手をかける。

「『怪獣角折り刑・キャストレーションサージ』!!」

「ボコツ!と鈍い音がした。」

「……あつ……はあ……。」

脆くも崩れ去る、矢尽き刀折れる体。

「ごめんね……シイちゃん……巻き込んだ……ね……。」

そこにあつたハズのツノの片割れは、『火山』の手元に。

「ありがと……ゴルザ……ちゃん……。」

誇りと意地をかけた『最後の一撃』は、『火山』の中腹胸に突き刺さっている。

「それから・・・シン・・・ちゃん・・・。」

瞳に映ったのは、最愛の人のぼんやりとした輪郭。

Aブロック第2試合は、波乱の展開で幕を閉じた。

## 謎呼ぶ名無しの仕掛け人

「うーん……。。」

「どったのシンジさん？」

「いや、こういう時どうしたもんかなって。」

「ゴモたんのこと？」

現在、Bブロック第2試合は、ブラックキングとガーディーのCOCVSドドンゴとギランボのナイト・オブ・リザレクションが行われているが、シンジと、一部の者たちにとってはそれどころではなかった。

「まさか負けちゃうなんてねー……。。」

「そりゃミカだつて負けることぐらいあるさ。事実、ゴルザさんとの戦績だつて五分だつて言つてたし。それよりもやつかいなのは、あのバリケンさんだよ。」

「そうだよ！ ホンツトムカツクよー！ 大怪獣ファイトをなんだと思つてるんだよ！」

「ミクちゃんどうどう。」

怒り心頭のミクラスをアギラがなだめ、その様子をレッドキングたちが後ろで見ているがその表情は穏やかではない。

「完全にノーマークの相手だったわね。」

「エレキングさんは、もつとバリケーンさんのこと知らないですか？」

「前に少し話をした程度よ。その時でさえ、自分のことばかり話していてウンザリしていたわ。」

「自己顕示欲が強い、か……。」

それは戦いの中での会話を見れば明らかだ。常に他人を見下すことしか出来ない、浅はかな人間である、と言いきれればいいのだが、しかしその実力は確かなものだろう。

「次戦うのはお前らなんだから、しつかり対策は練つとけよ？ 頭使うのは得意だろ？」

「頭？ そっか頭突き！」

「違う、そうじゃない。」

山積みになった問題を一つずつ解決していこう。

「じゃあ、とりあえず僕らは一旦別れます。」

「どこ行くんだ？」

「ちよつとラボでガジェット貰いに。」

X i o は必ず起死回生の一手となるだろう。

「あとでお前らもゴモラの控室に來いよ？」

「……はい。」

生返事をして去っていくシンジの背中を見て、レッドキングはうーんと唸る。

「・・・アイツも拘ってるな。」

「なにを？」

「いや、心配するだけ無駄なことさ。」

確かに次に戦う相手は強いだろう、だけれども、レッドキングはただ信じるだけだ。己の弟子や後輩たちのことを。

「こんちゃーつす。」

「大地さーん・・・あれ？」

「おつ、シンちゃんいらっしやーい☆」

「大地さん、今寝込んでるつす。」

「やつぱり大地さんもシヨックだったんだね・・・。」

「シヨックなんてものではなかったぞ。あれほどまでに取り乱す大地を見たのは初めてだった。」

出迎えたマモルとルイの他に、奥から別の人物の声が聞こえる。機械の影から姿を見せたその人、白衣を纏い、オレンジの体色をしたチヨイポチャ系の少女。

「ファントム博士、お久しぶりです。」

「うむ、見ておつたぞ一回戦の戦いぶりを。相変わらず元気が良さそうではないか？」

「博士こそ、相変わらずの大食いですね。」

見れば、ドーナツやらクッキーやらのお菓子の袋が散乱している。どれだけ脳を回転させてもあれほどの量の糖分を使い切るのは無理だろう、人間ならば。

「じゃーん！Xioニューデバイス！今度はデザインも凝ってみたよっ♪」

「勿論性能も段違いっす！今まで以上に、柔軟に使い分けられることまでできるようになったはずっす！」

「ありがとうございます、それともう一つ、開発に協力してほしいものが……。」

「うむ、キミのパートナーの分だな？」

「えっ、アタシ？」

今まで傍らで事の成り行きを見守っていたところへ、突然話題を振られて困惑を覚えるミクラス。

「でも、今からガジェットを用意する暇なんてあるんすか？」

「いくつか試作したものがあから、それを試してもらおうと思つて。自分で作つておいて、使わないのも申し訳ないし。」

「それなら次の試合までになんとかなるな！」

「つてことで突然だけど、使いたいブキを選んでよミクさん。」

「ええーっ！いいの？」



「ルール上は何の問題もなからう。」

「いやその、ルールとかの問題じゃなくて、ポリシーの問題っていうか……。」

「ポリシー？」

「どうせ勝つなら、正々堂々真正面から向かっていつて勝ちたいっていうか……。」

「んー、気持ちはわかるっす。ルールがどうあれ、スポーツマンシップに乗っ取りたいつてことっすね。」

「そうそう！レッドキング先輩だって、一番の武器は自分自身の力なんだし！」

「しかしなあ、現状の戦力であのコンビに勝てる可能性は限りなく低いぞ？」

「うっ、それはそうだと思うけど……。」

「気合と根性だけでなんとかなれるほど、この世はうまくは出来ておらんよ。現にGボーンがそうであつたらう？」

ミカたちは、自分たちなりの戦いをして、そのうえで負けてしまった。これは紛れもない事実である。それほどまでに相手は規格外パリケーンかつ想定外ファイヤーゴルザなのだ。

「ミカ……ゴモラの戦闘力をもつてしても、あのファイヤーゴルザさんには勝てない。その上、空を飛べるバリケーンさんにはもつと手も足も出ない。だから、新しい武器が必要だつて、ミクさんもわかるでしょ？」

「だけど……！」

「・・・じゃあ、もっとシンプルに考えようよ。」  
椅子を並べて横になっていた大地がムクリと起き上がり、こちらへと歩を進めてきた。

「初めまして、大空大地です。」

「あつ、どうもミクラスです・・・。」

「ミクラスさんのファイトも結構見えますよ、これからのご活躍に乞うご期待つて。」

「あ、ありがとうございます?」

「それでミクラスさんは、次の試合を『どう戦いたい』?」

「どう・・・つて?そりゃ・・・『勝ちたい』よ。」

「ミクラスさんにとつての『勝ち』つてなに?」

「そ、それは・・・。」

「相手を叩きのめすこと?バリケーンがやったように、相手をただ悔しがらせるだけのファイト?」

「そんなんじゃない!アタシは・・・。」

「・・・バリケーンさんに、本当の大怪獣ファイトを知ってもらいたい、かな?」

「そう、そうだよシンジさん!」

「うん、ゴモラも最後のゴルザとの戦いの時は、それを伝えたかったんだと思う。観客

だけじゃなく、バリケーンにも。けどその気持ちっていうのは、『相手が受け入れる』ところまで行かないと届かないし、それを力で無理矢理通そうとするのはエゴにあたるんだ。」

「・・・よくわかんない。」

「対等な対話をするには、まず自分自身が相手と同じ高さまで登らなければいけない。その為には、今はフアイトで勝つしかないんだ。勿論、それ以外の方法があるなら、そうするべきなんだろうけど・・・戦いフアイトを通しての相互理解も、対話の手段の一つだと思おう。」

「簡単に言うと、『少年漫画らしく、拳で語り合え』ってことだね。」

「僕たちが出来るのは、その『対話』のテーブルを作る為の土台だけ。そこから先、その力をどう使うかは、使い手次第になる。」

「だから、その僕たちの『夢』のチャンスを、引き受けて欲しい。お願いだ。」

『勝つため』ではなく、『負けないため』の戦い。相手にだけじゃなく、何より自分の限界に負けないために。

「んんー！わかった！そこまで言われちゃしようがない！アタシもなんだってやるよ！」

「よしてきた！僕が作ったものを見て欲しいな。」

「ほわあく・・・これは、おもちゃみたい？」

「これとかこれとか、絶対ロボットアニメの影響つすよね・・・。」

「いいじゃん、こういうの！」

幸い、ミクラスのお気に召す物がちょうど手元には合った。

「よおし、それでは早速・・・。」

「お仕事開始つすね博士！」

「いや、その前に腹ごしらえだ。」

「「「「だあく〜!!」」」」

「うー、早く食いたい、本場日本のしょうゆラーメンを！」

「あつ、アタシも食べたーい！」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

さて、シンジたちが地下でなんやかんやしている内に、Bブロック第2試合は終わっていた。

『ちよつとー？扱いが雑すぎない？いくら数合わせで埋めた枠だったからって、戦闘描写のひとつもないなんておかしいんじゃない作者あ？』

『ギランポちゃん、何言ってるの？』

「相変わらずカオスなこと言ってるんなアイツ。」  
ギランボ

「カオスというよりも、タブーの領域ね。」

勝ちあがったのはブラックキング&ガーディーのチーム。決まり手はブラックキングのヘルマグマを纏ったガーディーの突進攻撃『ウイニングラン』。

ギランボの異次元殺法や、ドドンゴの疾走攻撃も見ごたえある試合でしたちゃんちゃん。

『どうせ次のカードを赤王対黒王のキング対決にしたかったんだろう。ワタシらはかせ犬ですよ！犬はガーディーの方だっつーのに!!ノベルでも完璧な犬の扱いだったじゃないかい!』

まあそれはさておき。開発依頼が終わったところで、シンジとミクラスのやってきたのはゴモラとシーボーズの控室。

「うーん……。」

「今度はどしたの?」

「いや、なんて声かけたらいいのかなって。」

「またあ?」

先ほどレッドキングさんたちともすれ違ったが、今は部屋には二人以外誰も来ていないらしい。

「別になんて話したってイイじゃん。シンジさんが話したい事言えばそれで。」

「そりやまあそうなんだってわかりましたってんだけどね……。」

「んもー!ほら行くよ!」

思いつきり手を引かれて痛いけど、それに文句をつけるほどの暇も無かった。

「あつ、シンジさん、ミクラスさんも。」

「おつ、シンちゃんやつと来たねー。」

部屋に入ってまず目についたのは、目を赤くしたシーボーズさん。元来泣き虫な彼女が泣いていることについては、とくに言うことはない。

「ゴモたーん、シーさん、残念だったねー。」

「うん、結構ハデにやられちゃったよ。」

「あの時私が……もうちよつと上手くやれてたら……。」

「んもー、シイちゃん、それはナシだって。それ言ったら私だってもうちよつとねえ……。」

「めつちや腹立つよねー!なにあいつー!」

「はいはい、対戦相手のこと悪く言うのもナシね。」

「それにしたって2人とも遅いよー?さつきレッドちゃんたちも来てたけど、その前はアギちゃんたちだって来てくれてたのにさー。」

「ゴメンゴメン、さつき地下に行ってたんだー。」

「地下?」

「そうなんだよー! 地下にね、研究所みたいながあつてさ、そこでアタシ用の武器も作つてくれるんだつて!」

「へー、研究所? シンちゃんのお友達?」

「ん・・・ま、そんなとこ。」

「でさ、その人がゴモたんのファンでさ、すつごいシヨック受けてたみたいだよ。」

「あはー、なんか悪いことしちゃったかな?」

シンジは会話の輪に入らず、ぼんやりと端から見ているようだった。

「ミクさん・・・ちよつとジュース買つてきてくれない? シイさんも、おごるから隙なの選んできていいよ。」

「えっ? いいの? たつかいの買つてきちやうよ?」

「いいよなんでも。」

「でも・・・。」

「私のことはいいつていいつて、行つてきなよシイちゃん。あつ! たこ焼きあつたら買つてきてね! シンちゃんのおごりで。」

なににするー？とミクラスが先導してシイさんを連れて部屋を出ていく。

「それで？なんか言うことあるんじゃないの？」

「言うこと……っていうかなんというか……。」

「んもー、シンちゃん煮え切らないな。そういうとこキライだわー。」

ぶーつと膨れて文句を言うが、シンジはそれでも何も言えないでいる。

「……そりやまあ悔しいけどさ、勝負の世界なんだから負けることだってあるよ。レッ  
ドちゃんにも相変わらず負けっぱなしだし。」

「うん……。」

「けど、今回はちよつと堪えたかな？虎の子のEXまで出したのにさ、シイちゃんにも  
なんか悪かったし……。」

「うん……。」

「それに……その……。」

ミカは少しためらって口を開いたけど、そこから声は出てこなかった。

「シン……ちゃん……？」

「なに？」

「なんで……ボクは抱かれてるのかな？」

「僕が、そうしていたいからじゃ、ダメ？」



「いやー・・・シンちゃんのそういうところ、キライだわー。ちゃんと言葉にしてくれないと」・・・。」

「ごめん、けどこれが、僕だから。」

「こんなことしか出来なくて・・・ごめん。」

「シンちゃんが謝ることじゃないよ・・・けどやっぱり・・・。」

「何も言わなくていいから。」

「・・・そういうところ、キライだわ・・・。」

ぎゅっ、と一層強く抱きしめると。

「ふっ・・・ふええええええええええんん!!ごめんねえ!負けちゃったよボクうううう・・・  
うわああああああああん!!!」

「うん・・・。」

「シンちゃんと・・・戦いたかったのに・・・うわああああああん!!!」

「うん・・・。」

こらえていたものを全て絞り出すように、ミカは大声をあげた。

「落ち着いた?」

「うん・・・ありがと・・・。」

「あーあ、涙はともかく鼻でベタベタだ。」

「ごめん・・・つい。」

「鼻はちゃんとかみなさい。ほれ、ちーんして。」

「んもー！そんな子供じやないよ！」

「ごめんごめん。ついね。」

多少無理矢理だったかもしれないが、溜まっていたものを発散できたのならよかった。

「いやー、シンちゃんにはしてやられちゃったね？」

「もう平気？もうちよつと泣いとく？」

「いい！ボクは笑顔が似合う怪獣娘No. 1のゴモたんだよ？」

「そうだね、ミカは笑顔でいる方がいいよ。泣き顔を見せるのは、僕だけにしてほしいな。」

「おつ、なにそれ、新手的口説き文句？」

「さーて。」

ベタベタになった上着を脱いで、バトルス<sup>S</sup>ーツ<sup>R</sup>だけになる。

「あは、それいっつも着てるよね。」

「うん、気に入ってるし。着心地もいいし。」

「生地はなにこれ？ゴムみたいだけど。」

「伸縮繊維だよ。伸びる布なんだ。」

「へー。」

ミカは、ペタペタと腹や胸を撫でて触り心地を確かめる。

「なんか、謎な素材だね。」

「それを言ったら、ゴモラの獣殻だってスク水じゃないか。」

「それねー、なんでスク水なんだろうね？」

「僕が知ってるわけないよ。」

試合を完全なKOで敗れ、変身も解除されていたのを、今改めてシンジの前でソウル

ライドしなおした。

「触ってみる？」

「いい。」

「そんなこと言わずにー、先つちよだけでいいからさあ、ささっ！」

「男が言う台詞だろうに。」

「じゃあ・・・触って・・・欲しいな？」

どこを、とは言っていないが。言わんとすることはわかる。

「・・・。」

「んっ……頭かぁ……。」

さらさらの髪に、つるつるのツノ。先ほどの戦いで折られてしまっていたが、もうすでに治っている。そこから頬、顎、そして首筋へとだんだんと下に向かって手を動かしていく。

「……ちゃんと、生きてるな。」

「生きてるよ。大怪獣ファイトで死者が出るなんてこと、ないから。」

「生きてるなら、いいんだよ……。」

「あっ……。」

また、シンジはミカを抱きしめた。今度のそれは、自分の為にやることだった。

「ミカ……心配したんだからな。」

「ありがとっ、ボクは大丈夫だよ。シンちゃんこそ、平気？戦うのが怖くなったりしてない？」

「平気だ……ミカが繋いでくれたんだから、今度は僕が頑張らないと。」

『僕たち』が、でしょ。ミクちゃんとペアなんだから。」

わかっている。けど今はこんなにもこのちっちゃな躰が愛おしくてしかたがない。

「シンちゃん……。」

「ミカ……。」

「おーっすー！ゴモたん元気しとるー？タコ焼き買ってきたでー！」

タコがタコ焼きを買ってきた。

「・・・なんや、お取込み中やったんかいな。ほなさいなら。ところで、大人気アイドルの熱愛スクープって週刊誌持ってたら高く売れるんかいな？」

「ちーがーうーかーらっ！そんなんじゃないから！」

「じよーだん、ジョーダンやて。ウチがホンマにそんなんするう思たん？」

「え？しないの？」

「なんでやねん！むしろウチはそーゆー情報『消す』ことやってあるんやで。」

先ほどはシンジと戦っていたチブル星人さん。やはりというかミカとは旧知の間柄だったらしい。

「それにしてもゴモたんもツイてへんなー、あないなバケモンと当たるなんて。ウチもノーマークやったわ。」

「ホントにねー。まさかあんな強力な能力の持ち主がいたなんて知らなかったよー。」  
「というか、正規のGIRLS職員じゃないんじやないかな。僕も会ったことなかったし。エレキングさんが言うには、相当高貴なお方らしいし。」

「それやったらあの喋り方も納得やな。」

疲れた体にはソースの甘辛い味がよく染みこむ。アツアツなものもいいけど、チブルさんの買ってきてくれたこれはちょうどいい温度で一口で食べられてしまう。

「そういえばチブちゃんのパートナーはどしたの？」

「もう少しで来ると思うで。ちよつと調査を頼んどいたから。」

「調査？」

「そ、売れるモンやったらブキだけやのーで、情報だつて仕入れとくもんやし。」

ああ、とシンジは大体の事を察した。するとにわかには部屋の外が騒がしくなっていたのを感じた。

「だーかーらー！こんなところでなにやってんだつて聞いてんのー！」

「うるさい。」

「そーやってまた何か企んでるんだろー！」

「黙れ。」

ドアを開けて覗いてみると、ミクさんがスーツ姿の女性につつかかって、その後ろでシイさんがオロオロとしていた。

「ミクさん、なにやってんの？」

「あつ、シンジさん！こいつさつききの！」

「えーつと、ナツクル星人さん？」

「そうだ。濱堀シンジ。」

その鋭い目つきには見覚えがあった。

「おつ、来たんやね。売り物は集まったんかい？」

「ああ、一応な。」

「おつしや、ほな入り。」

チブルさんに手招きされて、ナツクルさんは部屋に入ってくる。その後をぶー垂れながらミクさんたちも入ってくると座って円になった。

「お探しの物はこれだろう。」

「OKOK、さすがやね。」

「勿論、プロですから。」

「なんの書類チブちゃん？」

「あのバリケーンの身辺調査よ。細かいプロフィールとか、把握しておけば役に立つやろ?。」

「どこの生まれで、どういう性格なのかとかが主だ。」

「そんなの何の役に立つの?。」

「ミクさん。」

「慎重なやつか、それとも調子に乗りやすいタイプか、それを知っているか否かだけで

も戦う時には役に立つ。それぐらいわかるだろう、突進系。」

「ア、ア、ツ?!」

「ミクさん、ステイ。」

「アンタも一言余計。」

「ふん。」

「大体さっきの試合でシンジさんが不調になったのも、この2人のせいなんですよ?!」

「そうなのチブちゃん?」

「せやで。」

「ゲートに行く前に握手したあの女の子が仕掛け人だったんでしょ?」

「せやで、ウチの謹製アンドロイドのレイちゃんや。」

「握手しただけ?」

「そ、手のひらにシールみたいな電極が貼ってあって、それがスイッチで電流を流して  
たんだ。」

「でも、なんで途中で動かなくなったんやろな?」

「故障したんですよ。」

「そんな卑怯な相手と、なんでそんな仲良さげに話してるのさ!」

「試合の外ならオフサイドだからだよ。」



卑怯な手段ではあったかもしれないが、それ以上にファイターとして実直な面も見れていた。でシンジは納得していた。ちよつと割り切りすぎな気もするが。

「じゃあ、早速その情報を見せて。」

「なんぼで？」

「は？」

「いくらで買う？つて聞いてんの。」

「金とるの?!」

「当たり前やろ？商売やねんから。」

「集めてきたのは私だがな。」

「シャラップ！あんた肉体労働、私頭脳労働。」

「情報収集はどう見ても頭脳労働でしょ。」

「で、なんぼなん？」

「100円。」

「やつす！でも交渉成立や。」

「おめでとう、眼兔龍茶一本は買えるね。」

「ジューズ一本分の働きだったのか私は……。」

さて、肝心の中身はというと……。

「えーっと、台風怪獣バリケーン。本名『野分<sup>のわき</sup> マミ』、10月15日生まれ。日本でも有名な財閥のひとつ、『野分コンツェルン』の令嬢で、城南大学に在籍中。」

「シンちゃんも城南大学じゃなかったっけ?」

「そだね。でも会ったことないなこの人。続きね。高校時代には文武両道において非常に高い成績を収めている。怪獣娘に目覚めたのは、割と最近みたいだね。」

「なんか、典型的なお嬢様タイプって感じだね。」

「そんな人と面識のあったエレキングさんって一体……。」

「って、これだけ?もう無いの?」

「この短時間ではそれが限界だった。」

「てか、SNSから引つ張ってきただけでしょこの内容。」

「100円の価値も無いじゃん。」

「それゆーたら、このレイコーアイスコーヒーもそんなおいしくないで。」

「ミクさんが買ってきたしゅわしゅわわコーヒを啜りながら文句を言い合う。」

「こうなると、やっぱり新兵器は頼りになるかな。」

「なんなん新兵器って?ゼニのニオイがする。」

「それは秘密秘密。」

「まあ大体予想はつくわ。あんさん1人で作つとるわけやないんやろ?」

「まあね。そうだ、チブルさんの作ったものを見せてくれない？何か使えるものがあるかも。」

「ええで！と言っても、今持ってきてるのはコレくらいやけど・・・失敗やったなー、アタツシケース一個分くらいは用意しとくんやった。」

と、見せてくれたのはさっきの試合でも使っていた模型飛行機型のドローン。

「飛行機か・・・台風相手にどれくらい役に立つかな？」

「こういうの基本使い捨ての消耗品やから、安定化装置とかそんなに上等なもん積んでへんねん。」

「ならちよつと安くしてよ。僕の財ポケットマネー布で払えるぐらいの。」

「しもた、弱みなんか言うんやなかった。商売人失格やで。」あきんど

こうして格安で入手したのは、翼が大きめで安定性の高そうなジェット戦闘機。

「ちよつと手を加えて、安定性だけでも高めておこうかな。テールスタビライザーもつけて・・・。」

「あと色もね！」

「色もね。そのためには時間があるけど・・・。」

見れば、もうAブロック第三試合、ブルースファイアVSDDDは終わっていた。

「あれ？さっき始まったばかりじゃなかったっけ？」

「えっと、ゼットンさんが……。」

ありのままに今起こったことを説明すると、異次元からありつただけのミサイルとバルカン砲の弾幕を張っていたはずのバキシムとベロクロンが、いつの間にかやられていた。何を言ってるのかわからねーと思うが、やられた当人たちにもなにをされたのかわからなかった。

「まあゼットンちゃんだから仕方ないね。」

「ゼットンなら仕方ない。」

そう、ゼットンなら。

「せめてもうちょつと時間稼いでくれてたらなー。」

「はなっから期待してなかったような発言!」

「だってそうでしょ。さて、次の試合は……。」

「マガちゃんたちと、『ジェーン・ドウズ』だつてさ。」

「あの子たちか……マガバツサーの童巻攻撃は、バリケーンの台風攻撃の攻略のヒントになるかも。」

「じゃあ見に行こうか!せつかくだしもつと生で試合見たいよ!」

バンツと扉を叩いてミクラスは外へ行く。その後を追ってシーボーズも出ていく。

「あつ、私も行きます!」

「私は……もう少し調べものをしてくる。」

「今度は何を？」

「次の対戦の、ジェーン・ドウズについてだ。彼女たちの情報も少ないから、今の内に集めておこうと思ってる。」

「ほな、ウチはその飛行機の改造やととくで？」

「またお金とるの？」

「アフターサービスや。」

「じゃ、お願いしようかな。」

「材料費は別やけどな。」

「しまった。」

チャリントンとゼニの鳴る音をさせながら、カバンを持ってチブル星人も引き上げていき、ナツクル星人もそれに追従する。

「ほな、また後でな。」

「じゃーにー、チブちゃん。」

「なにかわかったら連絡する。」

「お願いします。」

「さって、ボクたちも行こっか。」

「そだね、ここにいても埒が明かないし。」

「ところでシンちゃん。」

「なに？」

「すごく自然な流れになってるけど、次の試合『勝つてくれる』の？」

「勿論よ。ミカの仇つてのもあるけど、それ以上に誤解されたくないから。」

「誤解？」

「大怪獣ファイトはお遊びなんかじゃないし、怪獣娘が皆あんな傲慢な性格してないってこと。っその両方。」

「そっか、責任重大だね。．．．けどさ。」

「ん？」

「もつと肝心なこと、忘れてない？」

「肝心なことって？」

「はあ．．．とため息をついてミカは向き直る。」

「シンちゃん、これはタッグトーナメントなんだよ？」

「そうだよ？だから僕も出てるんじゃないか。」

「じゃあ、シンちゃんはタッグパートナーのこと、ちゃんと考えてる？」

「ミクさんのこと？そりゃ勿論．．．。」

「いや、ちゃんとミクちゃんのこと『見て』ないでしょ。今だって、先に走ってっちゃったの見送っちゃってるし。」

「うーん、たしかに。」

「ボクのことを想ってくれるのは嬉しいけどさ、今はミクちゃんのことを見てあげて？」

「わかったよ。」

しかしまあ、こんなミカの忠告も空しく、そのことを真に理解するのは試合中のこととなるのだが。

|| || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ☆ || || || || ||

『さて、波乱万丈な第一回戦もそろそろ大詰めです！Bブロック第3試合、マガバツサー&マガジャツパの『マガ・ポテンシャル』対ノーバ&キリエロイドの『ジェーン・ドウズ』が間もなく始まります！ところで、ジェーン・ドウつてなに？』

『アメリカでの身元不明人のことを『ジョン・ドウ』といいます、要は『名無しの権兵衛』のことです。ジェーンはその女性版ですね。』

『正体不明の二人組か・・・どんな戦いを見せるのか注目ですね。』

「アノ2人は・・・。」

「知っているんデスカ、お姉サマ？」

「・・・昔会ったコトのある2人だと・・・思いマス。」

かつてGIRLSが発足したばかりの、未だ人類を狙う脅威の姿が見えていなかったころ。人知れずシャドウと戦っていた者たちがいたことを知るものは少ない。

「もし彼女たちがそうなら、一体何故この大会に？」

『ワカリません、ケドただ腕試ししに來ただけとは考えにくいデス。』

「わかった、ありがとうキングジョーさん。キングジョーさんも次の試合頑張つて。」

『ハイ☆IIのスゴイところ一杯見せちゃいマスヨ！』

次の試合に備えて控室にいるキングジョーさんと連絡を取り合う。今日のキングジョーさんとはかく妹が好きらしい。

「あの2人、今日はどういう風に戦うのかな？」

「やつぱり2人とも能力が強いから、そこを前面に押し出した感じにするんじゃないかな？」

「あの2人には基礎訓練を徹底させておいたわ。」

「おつ、エレちゃん、レッドちゃんも。」

「2人とも能力は十分把握してるから、あとは基礎をしつかりとさせておけば色んな状況にも対応できるだろうぜ。」



「エレキングさんの指導がよかったおかげですね。」

「別に、これくらい普通よ。」

そう言うってなんでもないように振舞うエレキングさんの口角はわずかに上がっていた。

「けど相手は、オレたちよりずっと前からシャドウと戦っていたベテランなんだろう？」

「らしいですね。本人かどうかはまだわかってないですが、そうでなくとも恐らく強敵でしょう。」

「・・・この戦い、あの2人には荷が重すぎるわね。」

「おいおい、自分の教え子だろ？先生がそんな悲観的でいいのかよ？」

「むしろ私は、これを好機と考えているわ。」

「好機？」

「小手先のテクニックや能力だよりの戦法では、どうにもならない相手がいるという挫折を、身をもって味わってもらうのもいいわ。」

「うーわエレちゃんスパルタ。」

「こんな指導役にはなりたくないぜ・・・。」

（どの口が言ってるんだか。）

正直、ミカもなかなか先輩として厳しいところはある。主にムチャ振りするところと

か。けどそんなミカの一発ギャグが吹き飛ぶほどに、このクールな女教師の指導は厳しい。

「まあ、それが実戦でのことになるよりはいいか。これもある意味実戦なんだけど。」  
それでいて、ちゃんとタイミングは考えてくれてるんだろう。きつとそうだ。実際エレキングさんに褒められたらすごくうれしくなる。3回廻ってワンと鳴いてもいいぐらい喜べる。

『それでは選手入場です!』

片方のゲートから、青い翼と赤い鰭が元気よく飛び出してくる!

「いよっしやー!がんばるぞー!」

「はわわ・・・こんなに人がいっぱい・・・。」

マガバツサーは相変わらず元気だし、マガジャツパは相変わらず落ち着きがない。あの激しい戦いを目にしてなお、2人とも自分のペースを崩していないというのは、やはり大物の素質があるということだろうか。

「あつ!おーいエレキングせんぱーい!!」

「えっ、ど(ど)ど(ど)?!」

「あそ(そ)ー!」

こちらの姿を見つけた2人が元気に手を振ってきたので、振り返してあげると嬉しそ

うにしていた。なんだか、授業参観に来た親の気持ちが変わるような気がする。

それはそうと、もう一方のゲートからは静かに2人組がやってくる。片方は骸骨のよ  
うな風貌で、フードを目深に被って表情が見えない、キリエロイドの怪獣娘。もう片方  
は赤いマントに身を包み、顔の半分は割れた仮面に覆われている、ノーバの怪獣娘。

「表情が読めないな……。」

「2人合わせて0.5しか見えないですし。」

「私の裸眼よりはマシね。」

変身解除しているエレキングさんはメガネをしている。すごく似合っている。

「私もメガネしたらかしくそうに見えるかな？」

「ミカはじゆうぶんかしこいよ。」

「目を見て話せ。」

さて、アリーナのマガちゃんたちはやる気十分のようだ。マガバツサーはもとより、  
マガジャツパも覚悟を決めたようだ。

「がんばってえー！マガちゃんたちー!!」

「勝つたらシンちゃん焼き肉奢ってくれるってー!!」

「え？僕そんなこと……。」

「『みんな』と行こうって言ってたじゃん？ならマガちゃんたちだってそうでしょ？」

「ええー……。」

「イヤなの？ふーん？ほーん？」

「あーもうわかつたよ！」

『さて、いよいよ始まりです！Bブロック第3試合、』

『レディー……。』

『『ゴオオオオオオオオ!!』』

さっそくマガバツサーは羽ばたいて、リングの中央も中央、宙に陣取る。

「いくぞー!!『マガ竜巻』!!」

禍しき翼が空になくと、天地をひっくり返さんとするほどの疾風が吹く。

『おっとお！マガバツサー選手早速強力な竜巻を展開し始めたあ!』

『これは恐らく、藤田スケールでF3以上はある威力とみていいでしょう!』  
つまり、家がつぶれるレベルである。

「バリケーンさんの台風と、どっちがすごいかな？」

「エネルギーの溜め無しで、これほどの風を……。」

「でもこれじゃあ、マガジャツパも危険じゃねえのか？」

「その心配はないわ。お約束は教<sup>セオリ</sup>えてあるわ。」

「中心は無風！安全地帯！」

コンビを組むからには、お互いの特性を理解したうえでコンビネーションが求められる。

「仕掛ける。」

「ラージャ。」

ごく僅かな応答で、キリエロイドとノーバは動きだす。キリエロイドは身を屈めて、腕を斜め後ろに伸ばしながら疾走し、ノーバはその後ろをマントを靡かせながら突っ走る。既に人の体には耐えられないほどの猛風が吹き荒れているというのに、非常に安定して動いている。

「あの手のひらがなんかあるんだな。」

「・・・熱を感じしたわ。炎を出しているのね。」

「ダウンフォースと、スリップストリームってことか。」

「なに？ダンスホール？リップクリーム？」

「両方とも違う。」

原理は極々簡単。キリエロイドは炎を操ることに優れた戦士で、手のひらから出す炎で加速し、あのポーズによって生み出される下向きの空気の流れを作って地面に這いつくばっているのだ。その空気の流れに、ノーバもマントで上手く乗っているのだ。

「即興であんなコンビネーションを・・・いや、元から織り込み済みだったのか？」  
「どっちにしても、かなりやるみたいだね。」

新人の2人にはちと荷が重すぎる相手だが、2人は泣き言を漏らさない。それどころか次なる手に打って出ようと、しつかり前を見ている。自分の能力にそれほどまでに自信があるということか。

『『バブルランチャー!』』

ぼわぼわぼわと、マガジャツパの手から沢山の泡が飛び出てくる。が、ゆつくりと浮遊するそれらは竜巻に流されていつてしまふ。

『マガジャツパ選手のシャボン玉が、あらぬ方向へと飛んで行ってしまったあ!これはコンビネーションのミスかあ?!』

『いえ、そうじゃないみたいですよ?』

風はアリーナの中をぐるぐると廻っている。それに乗ったシャボン玉も同じく。

「ッ!」

「これは・・・?」

突然の横からの不可視の衝撃に、足の動きが僅かに揺らぐ。

「なにが起こったんだ?」

「風に乗った泡の攻撃・・・ですね。」

「そうよ、竜巻の勢いをプラスして、威力が上がっているわ。」

「でも、泡なんて全然見えないよ?」

「光の屈折率を弄って、見えにくくしているんだろう。ステルス攻撃だ。」

あの泡の見た目に反する頑丈さは、シンジも身に染みている。威力としては大したことが無くても、足止めには出来る。

「くっ!」

「作戦変更。」

そして足が止まれば、たちまち竜巻の餌食となる。先行していたキリエロイドの体がふわりと浮き上がるのが見える。

しかしこの正体不明の2人の勢いは完全に殺すことは出来ない。

『おっと!ノーバ選手のマントの下から、触手のようなものが伸びてきたあ!』

『それがキリエロイド選手の体に巻き付いていますよ?』

絡みついた触手がブンブンと音を立てて唸ると、風の壁を突き破る勢いで弾丸を放つ。

「おおっ?!」

「意外と力押しな解決法だね。」

「いえ、それだけじゃ終わらないみたいよ。」

飛ばされたキリエロイドが手のひらを合わせると、その中心に明々と燃える火球が姿を現す。

『炎魔の灯台《デモンズライト》！』

「よつと、当たらないよつと！」

大した勢いもなく投げられたそれは、ちょうどマガバツサーの下で停滞する。

「外した？ いや、違うな。」

「なるほど、別の光源を用意したのね。」

「ほへー、まるでちっちゃな太陽みたい。」

ミラーボールのようにギラギラと光を放つそれは、風の間隠れた泡の姿を照らし出す。光の加減で見えないなら、別の光を当てて可視化させればいいのだ。

「見える相手は、容易い。」

『ノーバ選手、鎌でシャボン玉を切り裂いていく！』

血のように赤い鎌で泡を排除しつつ、じわりじわりと距離を詰めていく。

「あわわ……マガバツサーちゃん……。」

「こんのー……おわあつと！」

「余所見厳禁。」

本来なら放物線を描いて落ちていくはずだったキリエロイドが、自らの作った火球を



踏み台にして、マガバツサーに迫る。その一瞬の気の乱れが、風の障壁にほころびを生む。

「・・・見えるっ！」

「きゃんっ！」

一足飛びに踏み込み、竦むマガジャツパに斬りかかる。が、その刃は届いていない。

「これは・・・。」

「あわわっ、あれ？いたくない・・・。」

それはマガジャツパ自身にも与り知らぬことで、巨大な泡がクッションとなつて、鎌を弾き返していた。

「あの泡強いですよね。」

「スパーリングでもまともに破れたことが無かつたぜ。」

「ただ、もうちよつと自分でコントロールできるようにするべきね。」

クッションというには、その泡は大きすぎた。運動会の玉転がしぐらいの大ききがある。

「ふんっ。」

「わわっ！『マガ水流』!!」

バーツ！と弾丸のような水が放たれたが、ノーバはそれを最小限の動きで回避して間

合いを詰めると、今度は触手で絡めとって締め上げていく。

「くうううう……。」

「……また。」

締まる首や手足に、エアバックが出来上がって触手を浮かせていく。攻撃に対して無意識的に反応できているということは、意識的な反応よりも厄介かもしれない。

「あなた、何者？」

「水ノ魔王獣ですう……ふえええ……。」

ノーバは表情こそ変わらないが、自分の思い通りにならないことに憤りを覚えていた。

「どおりやああああ!!」

「力任せな……。」

キリエロイドは炎のブースターで滑空こそしているが、一対の大翼で縦横に飛び回るマガバツサーには敵わない。竜巻を展開する『守り』から、積極的な『攻め』に転換したマガバツサーのスピードについてこれる者は少ない。

「『超音速の刃』!」

「ちいっ!」

翼から発せられる風の刃が、キリエロイドの逃げ場を奪う。ただ飛び回るだけで窓ガラスが割れる衝撃だ。

『それにしても、バリアが無かったら今までで一番被害が出てたんじゃないかな?』

『そうですね、音というものは無差別に攻撃を振りますから。』

バリアは、衝撃波を全て無害なレベルの音に変換してくれている。おかげでスタンドはものすごくうるさいが。

「とおー! 『イーグルキック』!!」

「そこおー!」

しかし直線的な動きともなればキリエロイドにも分はある。猛禽の爪をいなし、返し手で手刀を叩きこむ。

「成程・・・たしかにパワーもスピードも一級品だ・・・だが・・・」

まだ、足りない。我々の求めているレベルには。

「ノーバ、交代。」

「ラージャ。」

バツとノーバはマントを広げて空へと舞い上がり、反対にキリエロイドは地面へ降り立つ。

「見ろ! スーパーヒーロー着地だ!」

「あれ膝に悪いんだよねー。」

キリエロイドはカツコイイポーズで着地すると、半歩踏み込んでマガジャツパへと一気に距離を詰める。

「ふわあつー！」

「無駄アー！」

再びマガジャツパはエアクッションを作り出すが、キリエロイドの掌には炎が握られている。

「ひゃん!!」

するとどうだろう、エアクッションはあつという間に膨れ上がって甲高い音を立てて破裂した。

『おあーつと！マガジャツパ選手のエアバックが突然割れたー!!』

『どうやらキリエロイド選手は熱膨張によってエアバックを割ったようですね。』

一見すれば水と火、柔と剛、キリエロイドの相性は悪いように見えたが、それを塗り替えんテクニックが活躍する。

「これで決める！『コンビネーションキック』！」

そこからは目にもとまらぬキックの嵐が炸裂する。

「はわわ……。」

「これで……トドメだ！ 『獄炎かかと落とし』！」  
セイントフレイム・ドロップ

炎を纏った右脚が唸る、跳ぶ、打ち砕く。そこに一切の油断も隙も無い。

「空は……アタシのフィールドだっ!!」

一方空中では変わらずマガバツサーのターンが続いている。羽ばたきで巻き起こる風がノーバのマントをはためかせるが、当のノーバは一切揺れ動かない。

「空は時に……牙を剥く。」

ノーバの首元につけられた丸い顔……本来の『ノーバ』の眼が輝くと、その口から赤いガスが噴き出てくる。

「これは……雨？」

「赤い……雨……。」

『レッドクレイジーガス』、ノーバは技名を心の中で呟く。しとしと降る雨のように囁く。その足音がしたとき、そいつはもう終わっている。

「こんな……こんなまやかしくらいで!!」

「けど、痛みは本物。」

雨粒を切り裂いて飛ぶマガバツサーの翼が、だんだんと赤い雨に濡れて重くなる。マガバツサーの額に大粒が流れているが、それは汗か、雨粒か。

「……そいつ。」

「がっ……!?!」

マガバツサーが気づいたときには、その首には赤い触手が絡みついていた。赤い雨を切る軌道を、虚ろな瞳で見極めていたのだった。

そしてノーバは、絡みついた触手でマガバツサーを後ろへと強く引っ張り、

「……終わり。」

鎌で翼を切り裂いた。

「そんな……な……。」

翼を挽がれた獣は、真つ逆さまに重力に引かれて落ちていった。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

『決まったー! 2人同時に! 一瞬のうちに勝敗が決したー!!』

『何が起こったのか……僕には全然見えませんでした!』

その戦いの全貌を見届けられたのは、スタジアムでもごく一部だけであった。

「行こう、ノーバ。」

「ラー ज्या。」

獲物を仕留めたハンターたちは、そのまま踵を返して去っていった。

「うう……。」

「負け……た……。」

残されたのは、心も体も強く打ち据えられた2人だけ。

完敗だった。自分達の能力には自信があった。けどその自信は脆くも砕かれた。恐らく彼女らは全く本気を出していない、経験の浅い2人にもそれが感じられた。それぐらい圧倒的だった。

「2人とも。」

「あつ、エレキング先輩……。」

「エレキングせんばあい……。」

何より、自分たちを指導してくれたエレキング先輩に申し訳がなかった。

「……よく、がんばったわね。」

「先輩……。」

「はううう……。」

しかしエレキングはそんな2人をひしつと抱きよせると、優しくその労をねぎらった。

「アイツ、本当は小言のひとつでも言うつもりだったんじゃないの?」

「あはは、エレちゃんならあり得たかも?」

「マガちゃんたち・・・。」

「次は、レッドちゃんたちが背負って戦わないとね!」

「ああ、誰が来ようと負ける気はないぜ!」

レッドキングは燃えている。そしてエレキングも、心の中で静かに闘志を燃やす。勝ち残った者は、負けた者を背負って生きていく。勝負の世界とは、<sup>トーナメント</sup>厳しくも優しい世界である。

「うらやましいなー。」

「ああん? シンちゃんなんだってえ?」

「いや、なにも?」

「なーんか、ボコボコにされるのが羨ましいって聞こえたけどなー?」

「いや、そんなんじゃないかってエレキングさんにハグされるのが羨ましいなーって、あつ。」



「うん、そういうシンちゃんの正直なところ、とっても好きだよ！」

「どうしたミカ、目が笑ってないぞ。」

「さーてなんでだろーねー？」

それからギヤーツと悲鳴が上がって、スタンドの一部が吹き飛んだ。

「やれやれね。」

「ちゃんちゃん。」

「なかなか見つからないね。基準を満たせるメンバーというものは。」

「焦りは、禁物。」

「そうだな、まだ私たちの基準からすれば、大会はまだ始まってもない。」

廊下を歩くノーバとキリエロイドが相談をしている。

「ん？」

「どうした？」

「……。」

ふと、キリエロイドが立ち止まって、物陰に注意を凝らす。が、しばらくしてからその警戒を解く。

「……どうやら、予想以上に根は深そうだな。」

額から冷や汗を垂らしたナツクル星人が顔を出す。

「もう少し、調査が必要か……？いや、好奇心はネコを殺すとも言うが。」

ハツキリと感じた死線、修羅場をくぐってきたナツクルにはそれが見えた。あちら側  
とこちら側には、はつきりとした境界がある。

「1人では無理か……なら、仲間を頼らせてもらおうか。」

ここは一旦退こう。チャンスはまだあるはずだ。ナツクル星人はそう飲み込むと、一旦来た道を引き返し始めた。

「ガタたん、一体どこへ向かっているのですかあ?!」

「こつち・・・こつちからガタたんを呼ぶ声ですう!」

太平洋上のある場所ではまた別の波乱が起こっているが、それはまた別の話。



「いや、これは僕の不安みたいところだよ。なにせ未知数だから……。」  
「たしかに、あの相手はねー……。」

「いや、それだけじゃなくて、ミクさんの潜在パワーが未知数なんだよ。」

「えっ、アタシ?」

Aブロック一回戦最後の試合、キングジョー&キングジョーIIの『ペダニウムシスターズ』対クレイジーゴン&ビルガモの『スクラップ&ビルド』のカードだ。怪獣の中でも強豪ぞろいだというロボット怪獣同士の対決となる。

「それにしても、さっきまでと全然会場の熱気が違うね。」

「キングジョーさん人気だからねー。もっぱらモデルとしての活躍が多いけど、こうしてファイトの場に出てくるのも珍しいんじゃない?」

「あんなに強いのにねー。」

会場はわかりやすく色めきだっている。『大怪獣ファイト』目当てではなく、『出場者』目当てな観客も多い事だろう。作品そのものが好きでお渡し会とかのイベント行ったら、出演者目当てのファンが予想より多くてビックリしたことがある。というか、他のアニメのキャラが描かれた法被ハッピはやめとけよと思つた。

「目当てと言えば、この後の幕間インターバルにローランさんが歌うんだっけ?」

「それ目当ての人も多いかもな。」

「そういえば、チケットがやたら高額でオークションに出されていたわね……。」  
「転売か……。」

基本的に中古で買っても大元には得は行かないので、みんな転売からは買わないようにしようね。転売屋滅ぶべし、ナムアミダブツ！

「ライブか……よし！」

「なにがよしなの？」

「シンちゃん時間があるんでしょ？私が稼いであげる！」

「どうやって？」

「私も歌うの！もちろん飛び入りで。」

「いいの、それ？」

「いいのいいの！ローランちゃんだって一人でこんな大舞台で委縮しちゃうだろうし！」

「アイツはタマじゃねえと思うけどな……。」

「おつ、レッドちゃんも歌う？」

「お、オレエ?!オレは別にえーつと……。」

「じょーだんじょーだん！レッドちゃんはまだ試合あるもんね。私はもう終わったし。」

と、負けたことをもう自虐ネタにしているあたり、ミカは本当嬉しい。

「じゃっ、早速準備してくるね！」

「えっ、本気でやる気なの？」

「当たり前じゃん！有言実行！私はいつても明るいゴモたんだよー！」

「そう……が、頑張つて？」

「うん、そいじゃ後でねー！」

軽い口調で本当にミカは行ってしまった。こんな大勢の前で歌ってみせろなんて、多分シンジなら頼まれたってやらない。

「おっ、始まるみたいだな。」

「キングジョーさーん、がんばれー！」

「やけに気合入ってるわね。」

片や揃いも揃った金色の、よく似たシルエットのキングジョーの姉妹、片や同じ金色でも全体的に『角』な印象のクレイジーゴンと全体的に『丸』な印象のビルガモのコンビ。

皆元は無機質かつ頑強なボディを持ちながら、あらゆるダメージを負っても痛む心を持たない『機械』の怪獣であったが、今の彼女らはれっきとした『ヒト』である。

それにしても、カイジューソウルを持って生まれた彼女たちが怪獣娘なわけだが、と



いうことはロボットにもソウルがあったということになる。

前世がロボットであったという『記憶』が、彼女たちにはあるのだろうか？そう前にキングジョーさんに聞いたことがあった。

『イエース、もちろんアリますヨ！』

キングジョーさんのお仕事の手伝いで付いていた神戸での出来事だった。仕事終わりに神戸の街の案内をしてもらって、その最後に神戸港で佇んでいた時に、疑問に思ったそのことを聞いてみた。

『それってどんな記憶なんですか？ロボットだから・・・工場で量産されてた記憶とか？』

『シー・・・ソウデスねえ・・・。ワタシの場合ハ『宇宙ロボット』ナノデ、宇宙の夢をよく見マス。』

『宇宙の夢？』

『宇宙には多くの星があります。その中にハ、地球と同じようニ生物のいる星もあって、「ワタシ」はその間を縫うヨウに飛んでいくのデス。』

『ケド、その時の「ワタシ」はその光景に何も感じていないようデシタ。満天の星空モ、銀河を隔てる天の川モ、ワタシにとっては何の興味も惹かない物デシタ。』

『戦って、戦って、戦って、そして壊レル・・・それだけの生涯デシタ。』

『だからワタシは、戦う以外のことを知りたいんです。ワタシの中のモウ一人のワタシに、戦う以外の生き方を知ってモラウ為ニ……。』

ああ、この人もミカと同じなんだ。もう一人の自分と共に生きるため、素敵な物を見つげるための生き方をしたいんだ。

夕陽を反射してキラキラと光る波間をバックに微笑むキングジョーさんが、強く脳裏には焼き付いていた。

「おいシンジ、なにニヤニヤしてんだよ？」

「いや、こないだのキングジョーさんと神戸でのお仕事楽しかったなーって。」

「へー、どんなところ行ったの？」

「六甲山の牧場で馬に乗ったりとか、南京町でおいしいもの食べたりとか。」

「いいじゃん！楽しそうじゃん！」

「うん、でも一番よかったのは、キングジョーさんのカウガール姿やチャイナドレス姿を撮影できたことかな？眼福眼福。」

「へえー、そりやよかつたねえ？」

「あれ、ミカもう帰ってきたの？飛び入り参加はどうなったの？」

「うん、快諾してくれたよ。それよりもっと聞きたいなー？」

「おいおい、なんで首に手をかけてるのかなー？」

「ううん、ここはシンちゃんの悲鳴が聞きたいところだから、ちょうどいいんじゃないかな?」

「喉を絞られたら聞かせられるものも聞かせられないと思うんだけどなあ?」

「いいの、ボクには聞こえてるから。」

「コキツと小さい音がして、それからシンジは動かなくなった。」

「バカじゃないの?」

「オレもそう思う。」

ボロクズのようにうち捨てられたシンジはさておき、試合は始まった。

「撃ちい方ははじめえ!」

「ンマツシ!」

いきなりビルガモとクレイジーゴンの光線の照射が始まり、負けじとキングジョーも怪光線デスト・レイで応戦する。

「II!今デス!」

「ハイッ!」

「はやいつ?!」

目にもとまらぬ速さでキングジョーIIは相手の背後をとり、クレイジーゴンを突き飛ばして、ビルガモの腕をとる。

「あいだだだだだ!!!」

「見様見真似の、『パロスペシャル』!」

『おおーっと! キングジョーII選手、先ほどナツクル選手の使っていたパロスペシャル<sup>PALLO</sup>を真似<sup>parto</sup>しているう!』

「IIさんはセンスがいいのかな?」

「いえ、あれは戦闘<sup>コンバット</sup>パターン<sup>コンバット</sup>の再現ね。ナツクル星人とポーズが全く同じだわ。」

「スゲー、『ステレオチャンプ』みたい。」

ギリギリと肩関節を逆向きに押されて、涙目になりながらビルガモは呻く。一方、押し出されたクレイジーゴンは、シヨウグンギザミのような大きいハサミでキングジョーを攻撃する。

「ンマツシイ!」

「パワー勝負なら・・・負けマセンよお!」

ギギギ・・・と硬い金属の軋む音を立てながら、ロボット怪獣が克ちあう。

「シユウウウウ・・・。」

「コレは・・・蒸気?」

突然クレイジーゴンの体から、白いミストがまき散らされた。

「メカの故障かな?」

「そんなまさか。」

もくもくと白い帳とほりが立ち込め、アリーナが見えなくなっていく。

『完全に見えなくなってしまうましたねえ……。』

『これじゃあ何が起こってるのか全然わからないぞお！』

「塩試合かな？」

「これは……。ただの霧ではないようね。レーダー攪乱幕のようなジャミング効果を持つているようだよ。」

シンジのS・G・Mゴーグルにも何も映らず、ガタンツガタンツという重苦しい音だけが聞こえる。

次にその目に飛び込んできたのは、閃光だった。

「うおっ!?まぶしっ!」

「今度はなんだ?!」

一瞬リングの中央が光ったかと思うと、霧の壁の向こうから大きな塊が飛んでくる。

「くううう……。ツ!危ないデスねっ!!」

『おあーつと!キングジョー選手、バリアのギリギリ手前で持ちなおしたあ!』

『今のはセーフですね。』

空中で急ブレーキをかけたように制止すると、リングの方へ向き直る。

「やってくれマシたね……。」  
見れば、キングジョーの腕が少し焦げて、痙攣を起こしている。どうやら電流を流されたらしい。

「そうか、霧を媒介にして電流の威力を倍増させたのか。」

「頭悪そうな見た目なのに、結構やるじゃん。」

クレイジーとは名ばかりの、とつてもクレバーな戦い方だ。

「ふーん、オレだつて頭の良さなら引けをとらんぞ?」

「戦いの中だけ、ね。」

キングジョーはしばらくリングの様子を静観すると、デスト・レイを放つ。爆風によつて霧が晴れる。

「ワタシは口ほど器用じゃありませんから……自分の戦い方を貫くだけデス!」

ブースターを噴かせて再びクレイジーゴンと組み合う。

「ンマッ、ッシー!」

「同じ手ハ……喰らいませんヨ!」

戦いの場においてキングジョーさんは不器用かもしれないが、それを補つて余るばかりにキングジョーさんはお利口さんだ。

「感電防止にハ『アース』が有効デース!」

軀に流れる電気は、地面に逃がしてしまうのが一番効率がいい。

「なんとこの確で冷静な行動力なんだ。」

電流さえ来なければもう恐くはない。力には力を、腕力には腕力で押し返すキングジョーのパワーファイトが蹂躪する。

「必殺、『大雪山おろし』イイイ！」

クレイジーゴンのハサミを挿んだままぐるぐると大回転を始め、その勢いのままに投げ飛ばす。

「ンマッ！！って、やられたー！」

これにはクレイジーゴンもキャラを解いて恐れおののく。

一方、ビルガモはキングジョーIIにいつの間にか叩きのめされていた。

「どうしよう、肩が変な方に向いてる。」

「ご、ごめんなさい・・・ヤリすぎてシマイマシた・・・。」

ちよつと慌ただしい雰囲気の中、こうしてAブロックの一回戦は終了した。

☆☆

『ありえないから、絶対しないからねそんなこと。』

『んもー、マコー！』

次はBブロック一回戦の最後の試合。その出場者であるガッツ星人姉妹との通信機

## 越し的一幕。

『誰がアンタたちの都合なんかで「時間稼ぎ」なんかするのよ?』

「いや、別に頼んでるわけじゃ・・・というか、なんでそのこと知ってるの?」

『なんかもう噂になってるよ? 秘密兵器を用意してるとかなんとか。』

「もうそんなに広がってるのか・・・。」

『あたしが聞いた情報の出どころはゴモラなんだけどね。』

「うん、予想はしてたかな。」

『でもアタシはアンタに協力なんかしないから。』

「だから別に頼んでるわけじゃ・・・ただちよつと応援しておこうかなと思って。」

『なに? アタシたちが負けるとでも思ってるの?』

『マコ! ちよつと言いきすぎよあんた!』

悪いタイミングで話しかけてしまったか、マコさんの機嫌はすこぶる悪かった。

『ゴメンねー、この子ちよつちピリピリしてるみたいなんだ、本番前だから。』

「その気持ちはわかります、僕も結構緊張してたので。」

『でもでも、応援はしてくれても「心配」は余計かな? だって私たち、無敵のガッツ星

人ですもの!』

「そうですね、さくつと勝ちちゃってくださいね!」



『言われなくたってそうしてやるんだから。』

『あ、そうそう。この大会に出ようって提案したのはマコの方だから。またキミと戦いたいからって言ってたよ。』

『ちよつとお!!』

『おっと、もう時間かな。じゃね。』

背後がなにやら騒がしいまま、ミコさんは通信を切った。

「この後のライブの時間を考えても・・・なんとかなるかな?」

「もうちよつと休んだら? 目の下クマ出来てるよ。」

「アギちゃん。・・・アギに眠そうって言われるのって、相当?」

「ひどい。」

「冗談だよ。もうちよつとで終わるから。」

次の次の試合に備えて、控室でカタカタとキーボードを叩く音を響かせ、頭の中で考えを巡らせている。

「やっぱり多すぎだと思ったんだよなあ。」

「なにが?」

「出場者。16組もあると次の出番まで暇だ。時間が無いように感じてたけど、やっぱり暇なんだよ、矛盾してるけど。」

「緊張する時間が伸びてるせいじゃない?」

「きつとそれだね。相対性理論ってヤツだよ。」

光の速さに近づくほど、動くものにかかる時間は遅くなる。辛い状況に苛まれている時間が、やけに長く感じるのと同じだ。

「怖いのか?」

「・・・正直なところ。生死がかかっている戦いじゃないのに、こんなに緊張するなんて思っただけだった。」

「それって、ボクが隣にいるよりも緊張してる?」

「アギは癒しだから。初めて会った時から一度も緊張したことないと思う。」

「ひどくない?」

「むしろ褒めてると思うけどな。」

いかに長く感じていようと、時間は刻一刻と迫っていた。

『さて、いよいよ一回戦最後の試合です!ガッツ星人姉妹の『ジエミニイ』と、ヒッポリト星人&テンペラー星人の『ジ・ゴクアク』の対戦です!』

『ちよーつと待ったあ!!『地獄・悪』のイントネーションが正しい!』

『何言ってるだわさ!この私、テンペラー星人あつてのコンビでしょうに!だから

『ジ・極悪』が正しいだわよ!』

『なにをー!!』

ガッツさんたちの対戦相手はさっそく喧嘩している。本当に予選を勝ち残ったのかと疑いたくなるが、喧嘩するほど仲がいい、という言葉もある。

『試合開始ー!』

『ガッツダブルフラッシュャー!』

『ぎゃー!!』

「ミカもそうだけど、みんなそれぞれ自分の持ち場で、自分にやれることをやってるんだ。僕が参ってる場合はないよ。」

「そんなに背負いこんで、大丈夫?」

「平気だよ。負けるのは怖いけど、逃げるのはもっと嫌だから。せつかくミクさんに誘ってもらったのに。」

「・・・ひとつ、聞いていいかな?」

「なに?」

アギラがなにか言おうとしたタイミングで闖入者がやってきた。

「シンジさーん! 調整終わったー? 終わったんならライブ観に行こうよー!」

「うん、あとちよつとだから、先に行つて。」

「ん、わかったー！」

風のように一瞬で去っていった。

「で、なに？」

「いや・・・やっぱりなんでもないや。」

「？　そう。ボクも行ってくるね、シンジさんも来なよ？」

「うん、すぐ追い付く。」

お待ちかねのスターの登場に、アリーナは湧き上がっているが、シンジはひとり黙々と作業を続けている。まるで世界と自分が無関係であると主張するかのよう。

「ここにいましたのね！」

「ふああ？」

と、そこへまたも闖入者がやってきた。

「あら？　この美しくも雄々しき気品あふれるバリケーンさまが、はるばる次の対戦相手の部屋へと足を運んで差し上げたというのに、お茶のひとつの用意もありませんの？」

「・・・そのコーヒーでよければ。」

「いただきますわ！」

あまりの展開に、シンジの脳も処理が追い付いてないが、目の前の相手がコーヒーを

飲みはじめたところで我に返った。

「なかなか美味ですわね。気に入りましたわ。」

「な、ななんですか?? なにか御用ですか?」

「そう、そうでしたわ! 次のわたくしの対戦相手は、あなた方でしたわね? 挨拶に参りましたの。」

「挨拶?」

「こほん、わたくし台風怪獣バリケーン、本名は『野分 マミ』。以後お見知りおきを……。」

「あ、ドーモ、濱堀シンジです。」

さすがに社交界の出身というだけあって、礼儀作法はわきまえているらしい。尊大な態度こそ変わらないが。

「濱堀さんのお噂はかねがね耳にしていますわ。なんでも、怪獣と交信する力をお持ちだとか?」

「まあ、そんなところです。チョットチガウケド」

「ふふふ、ですがそんな力もわたくしの前には無力であることを、今日証明して差し上げますわ!」

なんか引つかかる言い方だ。

「野分さんは、」

「バリケーン、とお呼びください。ここではそれがマナーではなくって？」

「そうなの？じやあバリケーンさんは、いつ怪獣ソウルが目覚めたの？」

「・・・つい1年ほど前のことですね。それが何か？」

「いや、その・・・。」

「なんですの？殿方ならはつきりおっしゃってみてはいかがです？」

「そう、なら、こんな言い方したら失礼かもしれないんですが・・・。」

少々言葉を選びながら、ストレートに物を言う。

「バリケーンさんは、怪獣のことをどう考えてますか？」

「・・・意味がわかりませんわ。」

「えっと、バリケーンさんは自分の能力をはつきりと把握してるみたいだけど、それっ

てどうやったんですか？資料を調べたとか、自主トレしたとか。」

「それは、全部ですね。」

「全部、全部やったの？」

「勿論、なんせわたくしは全てにおいて頂点に立つものですから！」

おーっほっほっほー！と高笑い部屋に響く。聞く人によつては神経を逆なでられる

ような高慢ちきな笑い声であるが、これも怪獣ソウルが目覚めた影響なのだろうか。

「では、わたくしはそろそろお暇しますわ。」

「はい、また会いましょう。」

「ええ、その時はお覚悟を……。」

そういつてバリケーンさんは出ていった。宣戦布告のつもりだったのかな？ただまあ、思っていたほど嫌な人ではなさそうだった。

「ひよつとして、『アレ』なのかな？あの人って。」

話してみてなんとなくわかったことがある。キーボードを叩くのを再開しながら、あの人へ通信を開く。

『さーってここで、みんな大好きゴモたんの出番だよー!!』

「お、間に合ったかな。」

「シンジさんおそーい！もうローランさんの出番終わっちゃったよ？」

「ごめんごめん、その分下準備はバッチリ終わったよ。」

「じゃあ、完成したんだ？」

「おおー！見せて見せて！」

「後でね、後で。今はミカの歌を聞こう。」

さつきはあんなに泣いていたミカも、今はそれをおくびも出さずにとびっきりの笑顔を振りまいている。本当に立派なアイドルをやっている幼馴染が誇らしかった。

「ミクさん……。」

「なに？ シンジさん。」

「次の試合、絶対勝とうね。」

「もっちゃん！」

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

『さあ、長い一回戦を終えて、猛者がふるい分けられました。ここからは2回戦です！』

『2回戦にステージが上がったことで、フィールドにも変化があるようですね。』

ハーフタイムのライブの間に、大急ぎで工事が行われた。リング中央付近には、遮蔽物となる岩や壁が増え、外周には水が張られている。

「戦略の幅が増えたとみるべきか……。」

「水は大事よね。」

単純に遮蔽物が増えれば、相手の目をやり過ぎすることも出来るし、いざという時には身を守ることも出来る。怪獣のパワーにはコンクリートの壁など紙細工同然かもしれないが。



『それでは、選手入場です！Aブロック2回戦第一試合は、奇跡の逆転勝利を収めた『ミラクルナンバーズ』と、圧倒的パワーを見せつけた『風林火山コンビ』です！』

一回戦よりも熱の籠った声援を受けて、両チームとも歩みを進める。

「がんばってー！シンちゃん！ミクちゃん！」

「ミクさん！シンジさん！！」

「よっ・・・と。」

「おっ、アギちゃん旗なんか持って気合入ってるね！」

「前に応援団した時の旗ですね。」

「うん、持ってきてもらったの。」

バサアツと広げられた黄色い旗が、スタンドに一際目立つ。それはフィールドにいる者たちにも見えた。

「おっ、アギちゃんだ！やつほー!!」

「アギがんばってるね、普段大人しいだけに余計に。」

「シンジさんのいない間に、アギちゃんも成長してるんだよ。勿論アタシも。」

「じゃあ、その成果を見せてもらおうか。なんか今更だけど。」

「おう！」

ここに立つ前にはあつた緊張も今はどこ吹く風、不思議と落ち着いていられた。予選

を突破できたのはマグレだったかもしれない。一回戦を勝てたのは奇跡だったかもしれない。ならここから先は『実力』に物を言わせる。

『間もなく試合開始のゴングです！ファイターとしてはまだまだ未知数な面のある両者ですが、一体どのような戦いを見せてくれるのでしょうか！』

『カウント5秒前！4・・・3・・・2・・・1・・・』

『大怪獣ファイターオ！』

『レディイイイイイ・・・』

『『ゴオオオオオオオオオオ!!』』

「速攻で行く！」

「オツケー！」

その場で優に2 mは跳んだシンジが、ミクラスの両手に着地し、そのままバネのように舞い上がる。目指すは、宙へ飛び立つ前のバリケーン。

「させませんわ！」

「『超音波光線』！」

バリケーンが声を張り上げるとどちらが早かったか、ゴルザが超音波光線で迎撃すると、シンジは空中でひねりを加えて急制動をかけ、フィールドの真ん中に着地する。

「奇襲は失敗・・・いえ、まだあるのね。」

「そうさ、あいつらがこれで終わりってことはねえよ。」

「ミクさん！今あ！」

「りよーかいっ！」

リングに着地したシンジが地面に手と背中を付けて仰向けに構えると、そこへ加速したミクラスがすっ跳んでくる。

「ホップ・・・」

「ステップ！」

「ジャンプ!!」

掛け声を合わせて、上を向いたシンジの足裏にミクラスは着地し、2人同時に脚を延ばしてより高く跳びあがる！

『おおーっと！ミクラス選手、シンジ選手をジャンプ台にしたー!』

『これはサッカーにおいて夢のタッグ技とうたわれた『スカイラブハリケーン』のようですねえ!』

風には風を、嵐には嵐を、ちよつと見なよとミクラスがバリケーンに向かって行く。

「こんなこと・・・アリですの?!」

「これがタッグの強みさ!!」

心通わせたパートナーと一緒になら1+1=2以上のパワーを発揮できる。バリケーンを捉えたミクラスは、そのままの軌道で着陸し、マウントをとる。

「余所見厳禁！」

「無論だ。」

ミクラスの攻勢に続いて、シンジもゴルザに向かってキックを放つが、その程度で揺らぐ『山』ではない。

「軽いな、全然。」

「なんの、そっちがパワーなら……。」

ぴよいと大きく一歩退くと、周囲の岩を蹴りながら目まぐるしく跳びまわる。

「こっちはスピードで勝負だ！そらそらそらそらっ！！！！」

纏うスーツが青い残像を描きながら、シンジは走る風になる。

「トラアッ！」

跳び蹴りがゴルザの死角を突くと、また跳ね返って岩を蹴る。そのスピードには、もはや常人の目では着いて行けない。

『シンジ選手、高速で動いて攪乱している！まるで分身の術だあ！』

『分身の術は、残像を利用した目くらましという単純なようで、その実高い身体能力と耐久力が求められる高度な技です！』

「ハント、あんなのアタシたちの分身と比べちゃ屁の河童よ。」

「無茶言わないの、そりゃあたしたち『分身宇宙人』ですし、専売特許を奪われたくないのはわかるけど?」

「うっさい!」

怪獣の中には自前の能力で本物の分身を生み出す者もいるし、それらと比べれば大きく見劣りする。所詮小手先の技術の域を出ない。

「そこだな!」

「くっ!!」

『おっとお! ゴルザ選手、シンジ選手の動きを読んで足を捕まえたあ!』

『これは経験の差が出たんでしようねえ。』

「なんのお!」

「うおっ!?!」

掴まれたその瞬間、フリーなもう片方の足を振るって、シザーズ・ホイップの要領でゴルザを転ばせ、腕がから抜け出す。

「そしてすかさず、『麺類は人類』!!」

うつ伏せになったゴルザに馬乗りになり、顎を掴んで背中側へと反らせる。その姿がラクダの手綱を引くように見えることから、キャメルクラッチと呼ばれている。

「ふっ……舐められたものだ……。」

「なにい?!」

「この程度のクラッチ、大怪獣ファイターにはほんの戯れのようなものだ!」

グググッ……とゴルザが腹筋に力を込めると、シンジの額から汗がこぼれる。

『おおーつとゴルザ選手、力尽くでキャメルクラッチから脱出したー!』

「そらあつ!」

「グワー!」

今度は逆にシンジの首がゴルザに掴まれ、引っこ抜くように投げ飛ばされた。血の匂いが混ざった息を吐きながら、シンジは立ち直る。

「なんの……そのこれしき!」

再び高速移動を始める。勿論このままでは倒せる算段が承知の上だ。相方が上手くやることを願いながら精一杯時間を稼ぐ。

「この、離さない!不埒なツ!」

「喰らいついたら……離さないぜ!」

空中で揺らり揺られて、ミクラスは耐える。それを必死に引きはがそうバリケーンは呻くが、本来の腕力には差がありすぎてそう上手くは行かない。

「ええい、なら……『スカイクラーケン・シヨック』ですわ!」

『おおつとー！シーボーズ選手を撃墜した放電攻撃がミクラス選手を襲ううー！』  
伸びた触手がミクラスの胸を締め付け、さらに電流がやってくる。

「このまま真つ黒に焼けてしまいなさいな！」

「それは・・・どうかな！」

「なんですと!?!」

目にも眩しいほどの放電を浴びながら、ミクラスはニヤリと笑う。そこにダメージを受けた色は一切ない。

「コレをさっそく試させてもらおうよ！いけつ『モンスピナー』!!」

ミクラスがその名を呼ぶと、ブレスレットから二枚の円盤が出てくる。それらは火花を散らしてひつつき、ミクラスの掌におさまる。

「あれは・・・ヨーヨーかな？前にシンちゃんが使ってたのに似てるけど。」

「アタシの羽根結んだやつー！」

はじめは使うに使えず持て余していたガジェットだったが、今回に限っては役に立った。ミクラスに足りないものとして、リーチの長い攻撃手段があったが、その枠にすっぽりとハマる上に、『相性』もいいのだ。

『ヨーヨーの歴史は意外と古く、その起源は中国にあるとされていますが、古代ギリシアには既にヨーヨーに似た玩具があったと言われています。』

「わたくしの電氣を利用していきますの?!」

「そのとーりさー!」

シンジのサイコエネルギー研究のおかげで、しかも脳波コントロールできる。電氣を帯びることで使用者の考えた通りに動いてくれる、第3の手として働く。

『おおーつと! ミクラス選手のヨーヨーが、バリケーン選手の頭の傘に巻き付いていくー!』

『まるで投げ独楽コマのように・・・。』

「な、なにをなさいますの?!」

「こうするのっ!! モンスピナー、逆回転!!」

ミクラスの掛け声に合わせて、ヨーヨーは高速で糸を巻き取る。そうするとどうなるか?!

『あぁーつと! バリケーン選手の傘が、巻き取られる糸によって逆向きに回転していくー!』

『今まで上昇するために回転していたものが、逆回転をはじめたということ・・・!』  
当然、落ちるツ! あらゆるものを吸い上げていく竜巻は逆巻き、失速した竹とんぼのようにバリケーンは落ちていく。

「やったあ! 『風』に移る前に無力化できた!」



「風車は、風が無ければ回らない・・・か。」

生憎ここはダンスの腕を見せ合う舞踏会ではなく、技を競う武道会だ。哀れ汚れを知らなかった空色のドレスは土埃にまみれた。

「・・・やるな。」

「やってやるのさ!」

「ン?」

一方シンジはゴルザの正面から姿勢を低くとりながら突っ込んできていた。

「下か・・・? 『超音波光線』!!」

「上エ!」

「しまった?!」

股を潜り抜けてくると予測して足元を狙った超音波光線は外れ、シンジは軽く宙を舞う。

「引っこ抜くように! うおおおおお!!」

ゴルザの脇を掴みながら、一回転して脚を先に地面につける。そのままカナディアンデストロイヤーのようにパイルドライバーを決め込む。

「ぐっはあ・・・!?!」

「まだまだあ!」

仰向け倒れたゴルザの脚に攻撃を集中させる。ゴルザの左足をの右わきで挟み、右足を左足の下に通して自身の両腕でクラッチ、そして両足を抱えたまま体を翻せば完成する。

『『テキサスクローバーホールド』オ!!』

「がああああ．．．!!!」

『決まったー! シンジ選手の関節技がゴルザ選手の脚をとらえて離さない!』

『関節技はテコの原理を使うので少ない力でも威力を発揮できます。最小限の力で大限の働きを生みます。また投げ技は体重が重いほど地面に叩きつけられたときの衝撃は大きくなります。いわば防御を無視して攻撃できると言えるでしょう。』

いくら最先端のテクノロジーで武装しているとはいえ、怪獣娘との力の差は歴然だ。だがその差を埋めるためにこうして技を磨いてきていた。今がその時だと言える。

「あれ前に喰らったことあるけど、脱出難しいんだよねえ。」

「そうなのゴモたん?」

「うん、前は尻尾がフリーだったから脱出できたんだけど、今回はきつちり尻尾もロックしてあるからより難しいと思うよ。」

イカ焼きを頬張りながらミカが解説を挟む。その目には信頼と期待の色が見える。

「どりやどりやどりやー! 今度はこっちの番だー!」

「くっ……この程度、わたくしの柔術の敵ではありませんわ！」  
護身術はお嬢様の基本なのか、ミクラスの剛拳をいなし続ける。

「隙ありー!!」

「ぐっ……!!」

『ミクラス選手のスピアータックルがバリケーン選手に刺さったー!』

『一見鈍重なようですが、瞬発力は高いようですね。』

「これもミクラスの特訓の成果だ。ただ単に攻めるだけでなく、チャンスを待ったり技を組み立てたり。

「それらをすぐさま実戦に移せるのが、アイツの強みだとオレは思うな。」

「頭突き以外の頭の使い方が出来ているようね。」

「勿論頭突きにも使うけど。ともあれマウントをとったミクラスは、一切の反撃許さないほどに畳みかける。」

「オラオラオラオラオラアラオラ!!」

「ゴルザア! 助けるお!」

「かしこまつ。『超音波光線』!」

『なんとゴルザ選手! クローバーホールドにとらえられたまま光線を撃ったあ!』  
口を使わずに撃てるというのはいいことだらけだ。下方向への視線を遮られなくて

いいし、口を開けないような状態でも対応できる。クローバーホールドの痛みを意に介さず放たれた超音波光線は、ミクラスを撃ち抜いてバリケーンを解放させる。

「しまっ・・・たあ!?!」

「今度はこつちがお返しする番ですわ!!」

苛立ちと共に放った光弾がシンジの背中を焼くと、ゴルザもホールドから解放される。

「やれやれ、今度はこつちの番だな。」

「まだターンエンドじゃないよ!」

「ならばこれがラストターンだな。」

『先ほどまでとは打って変わってシンジ選手、防戦一方!これぞまさしくゴルザの逆襲だあー!』

『既にゴルザ選手はシンジ選手の動きを見切っているようですねえ。』

「ミクさん、タツチ!」

「オツケー!」

となればプランBの出番だ。戦う相手を入れ替えさせて、対応を遅らせる作戦である。車がかりの陣とはちよつと違う。

「またお会いしましたわね、シンジさん。やられる準備はよろしくつて?」

「そっちこそ、地を舐める覚悟はある？」

「ありませんわね。わたくし、いらぬ物は買わないようにしていますの。」  
(喧嘩は売りまくってるくせに。)

バリケーンは自分のペースを乱さない。周囲からの冷たい目線もどこ吹く風、マイペースで掴みどころが少ない。まさに天上の人。

「アタシはゴモたんほどじゃないけど、パワーなら絶対負けないよ！」

「ならこちらも、全力で相手しよう。はああああああ・・ハッ!!」

一方ゴルザも先ほどの戦いで見せた新たな力を顕現させようとしている。この道長いベテランファイターであるゴルザだが、今なおその進化は留まるところを知らない。これから先、戦い続ける限り進化し続けるというのは誰にでも当てはまるだろうが。

『ゴルザ選手、再びファイヤーゴルザになったあ!』

『もう出してきたということ、一気に決めるつもりなんですか?!』

「いや、ゴルザちゃんのアレはEX化とはちよつと違うんだよねえ。」

「そうなの？」

「うん、省エネっていうの？最大出力には劣るけど、持続性や耐久性に秀でてるみたい。」

「ということ、このまま試合が終わるまで持たせられる自信があるということね。」



「彼も飛び道具を持つてるから、この距離で空を飛ばば良的にしかならないわね。」

「ほーんつと、武器使用可でよかったね。」

「そうじゃなきやシンジさんも乗らなかつたんじやないかな。」

「言えてる。」

元から異種格闘技の面もあつたので、武器を使用する参加者がいてもとくにおかしいところはなかつた。そもそも一番おかしなのはシンジが参加しているということだが。

「ところで、あなたは一体何のためにこの大会に参加していますの?」

「僕? 怪獣娘ともつと仲良くなるためさ!」

「前にも仰っていましたわ、ねっ!」

「おつと! まあね!」

こっちはこつちで武道の大会で見られるような激しい演武が繰り広げられている。その完璧なまでの様式には振れば珠散り、飛ばば桜舞う美しさすら秘めている。

「じゃあ次はこつちね。バリケーンさんは、怪獣のことどう思ってるの?」

「それはさつき答えましたわ?」

「そうじゃない、バリケーンさんいやママさんは『怪獣と向き合えてる?』?」

「・・・ッ!」

円舞の中で、突然短剣を振りぬいたかのようなシンジの問いに、バリケーンも同じく

ナイフのような突きで応えた。

「うりやさつ！『小手捻り』だあつ！」

「くつ・・・こんな猫騙しにつ！」

「で、どうなの？そこんところ？」

「・・・卑怯ですわッ！」

「おつと！」

その口を真つ先に塞ぐようにバリケーンは貫手を放つが、その瞬間を待っていた。

「ここだつ！『コブラツイスト』オ!!」

「ぎいいいっ!!」

「出たー！シンちゃんのセクハラギリギリ技！」

「有用性とか抜きにして好みでかけているでしょう彼。」

「シンジさん・・・。」

「まあ、あいつも男だしな。」

『そこ聞こえてるぞー!!』

「えー違うのー？」

『違うわー!』

真偽のほどはさておき、シンジの技はギリギリとバリケーンのわき腹を締めあげる。



「こつちとしては、素直になつてくれるまで何時間でも固めてていいんだけど？」

「ぐぐつ……認めませんわっ！」

「そうかよっ?!」

「んぐつ! 認めたく……ありませんわ!」

「わたくしは……野分財閥の嫡子として、それに値する人間として精進をしてきましたの……それなのに……っ!」

グツと力を振り絞つたバリケーンは頭の傘を電動ノコギリのように回転させて、シンジの顎先を削り取ろうとする。それに驚いてあわててロックを解除しようとする動きを見逃さなかつた。

「あぶぶ……ギヤツ!」

「それなのに……その努力全てを『怪獣ソウル』に奪われただなんて、認めたくありませんわ!!!」

隙を見せたシンジに、触手が絡みついて電流が襲う。それにはバリケーンの、否、野分ママミという一人の少女の怒りや悔しみが乗っていた。

「だから……全部踏みつぶしてさしあげますの! 怪獣娘も、GIRLSも!!!」

「げっほ……ちよつと……やりすぎじゃない?」

「やってみせますわ!!」

触手で捕えられたシンジはふわりとした浮遊感を感じて、地面から足が離れていくのを見た。

「あー、僕高所恐怖症なんだ、高いところダメなんだけど?」

「ならすぐに叩き落してペシャンコにしてさしあげますわ!」

「あー今の嘘、高いところ好きだから離さないで。」

ずるずると引きずられるように宙ぶらりになつていき、足元が竦んできていた。強い風が吹き始め、再びバリケーンの独壇場が始まろうとしていた。

「あなたの減らず口も、これでジ・エンドですわっ!」

「一つ言わせてもらうけど、落ちたくなければ腕の力を抜かずに、下を見ないことだよ。」

「なんですつて?」

「僕ねえ、高いところは嫌いだけど、上に昇るのは好きなんだ!」

自分より上にいるバリケーンをシンジは見据え、その手から赤と銀の矢を放つ。まるで新しいおもちゃを見せびらかす子供のような、茶目っ気を含んだ瞳を輝かせながら。

「飛ベツ! 『アロー』!!」

『なんとおっ! 宙吊りにされたシンジ選手の手から、小さな戦闘機飛び出してきたあ!』

これがこの試合に持ち込んだ秘密兵器の第2。

「おつ、やーつとウチの飛行機の出番か。長かったな。」

「ままチブちゃん、おたのしみは後って言うやろ？」

「そやな、今回は許したろ。」

その大ききこそ手で抱えられるほどだが、雨にも負けず風にも負けないポテンシャルが秘められている。宙に浮く2人の周りをグルグルと旋回してから、バリケーンを口ケツト弾で砲撃する。

「ぐうう!!地味に痛いですわね！」

「流れ弾がこつちにまで！けど、これで抜け出せる!!」

「しまった！」

怪獣娘のパワーと比べれば僅かな物だが、その僅かな砲火が触手を焼き切る。

「あとは・・・ストリングス！で、引っ張られる！」

「!?まさか空を?!」

「飛ぶのさ！ちよつとだけね！」

アローに手首から伸ばしたロープをつなぎ、風に乗ってさらに飛び上がる。

「そして、再びクラッチ！」

『シンジ選手！空中で体勢を立て直して、バリケーン選手を逆に捕らえたあ！』

「おつ、あの体勢は確か。」

「うん、前に練習試合の時に使ってたね。」

「一撃必殺のお、『カ約ン鐘パー爆ナ・エ落アレとイド』!!」

触手や傘も強くホールドし、逃げられないようにしたジャベ+自由落下によるダメー  
ジの重ね技。

「うわー!? 動けない!?!」

「自由落下というのは、言葉で言うほど自由じゃないんだ!」

『シンジ選手の大技! これは決まったかー?!』

「前はマガジジャツパちゃんに防がれたけど、今度はどうかな?!」

「こんなもの・・・わたくしひとり力で・・・!」

自由の効かない空中で、手足や尻尾を完全にロックするこの技から脱出する方法はご  
くごく限られてくる。とれる対策があるとすれば・・・、

「シンジを『外』から攻撃するか、着地を阻止させることだが。」

「少なくとも、彼女一人では出来ないことね。」

「一人なら、ね。」

「いるさつ! ここに一人なつ!」

「なつ!?!」

シンジたちの直下には、少し傷つきながらも大の字で構えるゴルザがいた。

「させるかぁ！うおおお!!」

「ふぐっ……!!負けるかぁあ!!」

その背後からキャッチさせまいとミクラスがタックルを仕掛け、捕球地点から引き離すが、力尽くでそれを押し戻しにかかると、

「ぐぐぐぐ……っ!!」

「どいつ……てろっ!!」

冷静に大外刈りでミクラスをこかす。もはや一刻の猶予もない事を見たゴルザであつたが、走り出したその目に一切の迷いはなかった。

「おおおおおおおッ!!!」

『ゴルザ選手、ダイビングキャッチだぁ!』

試合はまだ中盤だが失点は辛い。メジャーリーグでも見ないような思い切ったディフェンスを魅せる。

『さあ捕れるか?!ゴルザ選手……!』

「ぐっはぁ!」

「あいたあつ!」

『ゴルザ選手、背中でキャッチだー!』

「しまった！」

ワアアアアアアッ！と会場は盛り上がる。バリケーンへ冷たい視線を向けていた観客たちも、ゴルザの身を挺したフォローには喝采を贈った。

「あなた……。」

「……お前が、どんな気持ちで生きていたのか、どんな理由でこの大会に参加したのか、私は知らん。クライアントの内情まではな。」

技が失敗してスタコラサッサと身を引いたシンジを尻目に、ゴルザは立ち上がってバリケーンをカバーする。

「だが、私はこの大会、否この一戦に命を懸けて挑んでいる。」

熱い心に燃える炎が、瞳に映って輝いた。

「だからお前も、他でもないお前自身を見ている者のために立て。私のパートナーとして。」

世界中が、君を見つめてる。

「……しかたありませんわね！下々の方々へ手を差し伸べるのも上流階級のお仕事ですわ！オーツホツホツホ！」

差し出された手を取って立ち上がると、いつもの調子で高笑いをあげた。

「どうやら、一皮むけたみたいだな。」

「私の最後の頑張りが響いたのかな？」

「多分そんなに関係ないと思うわ。」

「ふうんだ、シンちゃんはわかってくれたからいいんだもーんだ。」

一度は道を断たれても、別の道で輝く星もある。随分遠回りになったようだが、それを伝えられて安心したのは何人かいる。

「めでたしめでたし、かな？」

「いやいやまだ勝ってないから！」

「僕はもう満足だけだなー。」

「いやいやいや！ぜったい決勝までいくんだからさー！」

「はいはい、こっからもがんばろうね。」

勝負は仕切り直し。しかしこちらは手を2つ見せてしまっているし、向こうは調子が始めている。

「ミクさんは平気？」

「へーきへーき！まだまだ戦えるよ！」

「そのフィジカルが頼もしいよ。」

しかしミクラスもシンジも心持余裕だ。まだまだ手はある。グータッチで互いを鼓舞し合うと、改めて相手と向き直る。

「仕切り直しと行こうか。」

「第2ラウンドだ！」

「ですがラウンド3はありませんことよ？これでファイナルラウンドですわ！」  
「さあ戦いだ！攻め方は変わらず、速攻でバリケーンには空を飛ばせない。」

「今まで試したことも、試すような機会もありませんでしたが・・・わたくしの奥の手をお披露目いたしますわ！」

「させるかあ！」

「させるッ！」

果敢に攻め込もうとする2人の前に、不動の山となったゴルザが立ちはだかる。

「ぐっ、こうなったら、先にゴルザだけでも！ミックさん！」

「おう！」

せーのっ！の掛け声で同時にタックルをぶちかますと、それぞれがゴルザの片足を抱えて跳び上がる。

「『ダブルドライバー』!!」

『ミクラス・シンジ選手、パイルドライバーの同時掛け！威力も2倍だー！』

たしかに技は決まったが、2人の表情は暗い。いやに軽く技が決まった。いや、決めさせられたというべきだったか。



「準備完了！ですわ！」

「はやつ、やつぱりか。」

ゴルザからダウンは奪えたが、それも一時的なもの。

「さあ刮目なさい！このバリケーン最大の奥義を！」

ブオオオオオン・・・と低いうなり声をあげて、強い風が逆巻く。

「また竜巻？」

「いや、回転が『逆』だけ。」

「上方向ではなく、下へと吹き抜ける風・・・まさか。」

「なにか知らんが、わざわざかけられた技を受ける義理もないっ！やーっておしまい  
ミックさんー！」

「アラホラサツサー！健康優良怪獣娘、子供は風の子さー！」

風が強かろうと、それは大した問題ではない。それがただの風であったなら。

「うっ・・・なんだ・・・。」

「体がなんか重い・・・!?!」

中心へ近づくとつれ、その脚はどんどん重くなっていく。ここに来て疲れがたまってきたのか？いや、そうではない。

「こ、これは・・・雪?!」

「違う、これは『霜』だ!僕たちの体に霜が降りてるんだ!」

既に2人の脚には白い氷の細かい柱が立っている。試合中にかいた汗や空気中の水分が冷えて2人を襲っているのだ。

『なんとお!これもバリケーン選手のなせる業なのかあ?!たちまちミクラス選手とシンジ選手が凍り付いていくう!』

『どうやら強烈なダウンバーストが発生しているようですねえ!アリーナ内の温度計はマイナス10度を下回り、なおも下がり続けています!』

アリーナ外周の水は波打ったまま凍り、雪が初夏の地表を白く染める。

「これが!これこそが!空に君臨する『エアポケット深淵』、『ザ・フォールン・オブ・ネフィリム入道ノ御落胤』!!」

「ぐおおお・・・!!」

「がっ・・・あつ・・・」

バリケーンが声たからかにその名を呼ぶが、その様は2人には届かない。特にシンジにはもはや目を開けることも耳を澄ますこともできない。

「シンジさん?!平気?!」

「・・・はっ・・・あがつ・・・」

零下80度。吐く息どころか内臓さえも凍る。ヒトが生物が棲める世界ではない、極

寒の地獄。

「オーツホツホツホツ！これでシンジさんも完全にノック・アウトですわね！」

「くっそー！あぶぶ……。」

辛うじてミクラスは寒さに耐性がある。しかし敵もまた一人ではない。

「……ンオオオオオオ！」

『おーつと！ダウンしていたゴルザ選手も復活だー！一気にバリケーン・ゴルザチーム優勢になったー！』

「まだまだ……たとえ一人だつて！ドロップキック！」

膝ほどの高さに積もった雪を蹴つて、ミクラスが驀進する。

「こんなものか？そいつ！」

「ぐっ…….こんのお！」

「オーツホツホツホツ！こんな芸当もできましてよ！『黄昏時の欠片!!』」

トワイライト・チップス

バリケーンが手をかざすと風向きが変わる。風向きが変われば性質も変わる。

「ぎやつ！なんだこれ?!氷の塊？」

『あれは雹ですね！上空で上昇気流の中で大きさを増して、直径5mm以上の氷の塊を雹といいます。記録ではカボチャほどの大きさの雹がふったこともあるそうです！』

「でもゴルザまで喰らつてるじゃん！」

「・・・こんなぜんぜん効いてねーし。平気だし。」

「ならもつと勢いを強めて差し上げますわ！」

「やめて。」

さらに夕立と共に猛威を振るうのは雹だけではない。

「うわっ！雷!？」

「もはや何でもありだなアイツ。」

「こ、こんなにスゴイ能力の持ち主がいたなんて・・・。」

「恐ろしく汎用性のいい能力、そこにさらに知性が加わっているようね・・・。」

「だからやめろっつもの！」

「オーツホツホツホツ！一度崩れたバランスは、もはや何者にも止めることは敵いませんのよ！わたくし自身にさえも！」

「カツコつけてるけどそれダメじゃん!!」

戦局は泥仕合を迎えていた。バリケーンは奥義の為に渦の中央を動けず、ゴルザも驚異的な冷気に足元を掬われている。唯一動けるのミクラスだけだが、どうにもこうにも攻めあぐねている。

「ええい、これでは埒が明かん・・・やむを得ん、ファイヤアアアア！」

「ああつ！勝手に動かれては困りますわ！せっかく冷えてきたというのに！」

「やかましい！これでは観客席まで冷え上がる、わっ！」

「ぐうう・・・熱い！」

「なんですつて?!私に逆らうとはいいい度胸ですわ!これでもくらいなさい!」

「ぎゃんっ!!」

バリケーンのやけっぱちの雷の一撃が、ゴルザもろともミクラスを射抜く。が、それはこの試合中最大の誤りの一つだった。

「今のでビビッと来たね・・・!」

「なに?」

「こうなったら・・・アタシも見せてやるじゃん!奥の手!サンダアアアアア!!」  
両手を空に掲げてミクラスが吠える!

「これは・・・。」

「ミクさんに、雷が集中して?!」

「ビンビン来てるわね。」

雷光に身を輝かせ、雷轟に声を張り上げる。放電現象が氷の礫を伝って、フィールド全体を焼き焦がす。

「ふううう・・・おっしやー!!」

焦げ付いたフライメントが『生まれ変わった』ミクラスに気おされてはじけ飛ぶ。

「これが・・・『エレキミクラス』だッ!!」

体の表面やツノをスパークし、祝福のクラッカーを鳴らす。

「面白い、何が来ようが・・・叩きのめすのみだ!!」

「おっしや来いやあ!!」

空を焦がす雷と、地を焼く炎の戦いが始まる。

一方終末の迫る中、完全に凍てつく寸前の脳髓が生存を求めて脈動する。

(こゝ、このままではやられてしまう・・・なんとかしなくては・・・。)

飛んできた雷に打たれたショックと、炎の熱によって辛うじて息を吹き返したシンジだったが、まともに動くことすら叶わない絶体絶命の環境に、攻撃を寄せ付けられない風の障壁がついている。

(やはり風か・・・風を越えなければ・・・でもどうする?)

今のバリケーンは完全に守りに入っている。正面から抜くことは不可能に近い。

(死角!どこかに死角は・・・そうだ。)



「ミクさん！スピナーを！」

「むっ？オケー！」

シンジの声に反応して、ミクラスはモンスピナーを再度取り出す。そこに目がけて左腕のストリングを伸ばす。

「こつちの糸をこつちとつないで……引いてミクさん！」

「なんかよくわからんけど、モンスピナーフルスロットル！」

自身に帯びた電気を操って、繋がった糸を釣り竿のように手繰り寄せる。

「か、絡まれるっ！」

「そうか！なら……怪獣一本釣りだあ!!」

ふんぬつと腰を入れて力いっぱい引き抜くと、バリケーンは三度地面に叩きつけられる。

「今のどうやったんだ？」

「ハチマキに糸を括り付けて離れたようね。回転する風に乗っていれば、糸は必ず中央に引っかかるから。」

「うー冷えるっ。でも復活。」

「シンジさん！やったね！」

「うん、ミクさんはバリケーンさんにトドメさして。ゴルザは僕がやる！」



「えっ、大丈夫？」

「大丈夫、奥の手全部出すことになるとも思わなかったけど。」  
「じゃっ、と目を交わせてそれぞれの相手へ向かう。」

「おのれえ、またしても私に土を付けましたわね！」

「もう一回浴びてもらおうけどね！」

「これが最後の戦いだ！熱を帯びた拳を振るい、ミクラスは打って出る。」

「その動きは……。」

「もう見切ったあ！」

「そんなんっ！」

先ほどと同じく柔術で対応しようとしたバリケーンだったが、いともたやすく攻略され、驚嘆する。

「な、何故……わたくしの技を……？」

「もう見切ったもんね！アタシだって戦いの中で成長してるんだから！」

「何故……あなたは戦うの？」

「ん？んー……カッコいいから！かな？」

「カッコいい？」

「そう！心も体もゼ円ぶつかって、全力を表せたらカッコいいんだ！」



せるド派手な威力でしたねえ！」

戦槌が嵐を砕いたその時、ヒトの手で火山の猛りを切り崩そうとしている。

「さすがだよ、まさかこんなに追い込まれるなんてな。」

「そりやどーも、最初っから降りる気もさらさらなかったんでね。」

「それはこちらと同じだ。燃え尽きるまで私は戦う！」

「こつちだつて！」

ゴルザの勢いはなおも衰えない。むしろ爆発必至の巨大戦艦が最後の特攻を仕掛けようと最全速度で向かってきている。

「ほんつとスゴイ。こゝまで二重三重に策を巡らせてきたつもりだったけど、それを全部受けきつちやうんだから。プロレスラー明利につくつての？」

「これが受けの美学だ。ただ相手を叩きのめすだけではつまらん。」

「その懐の大きさ、まさに山より高く海より深いね。」

左手のデバイスを叩き、光の剣を再び取り出す。

『『エクスピームブレード』!!』

「その程度・・・敵ではない！」

『シンジ選手、先の試合で見せた光の剣で切りかかるー！だがゴルザ選手には全く効いていない！』

二、三太刀筋を見極めると、赤く燃える手で刀身を掴む。

「こういうのには、応用が利く『怪獣角折り刑』!」

「折れたあ!?!」

『ゴルザ選手!真剣白羽どりだー!』

哀れ押し折られた光の刃は、ゴルザが投げ捨てる時粒子となって消え去る。

「これで終わりか?」

「まださ……まだまだ!」

三角蹴りで牽制しつつ距離をとったシンジはそう吐き捨てる。とうとうシンジ自身の技は何ひとつ通用しなかったことになる。

「もう限界までがんばったんだから……そろそろ力借りてもいいよね?」

「誰から?お前の相棒は向こうでヘタレ込んでいるぞ?」

「僕は……いつだって一人じゃないさ。」

いよいよ奥の奥のさらに奥の手、必殺の懐刀を抜くときが来た。つい先ほど刃を折られたデバイスに右手をかざし、真の機能を機動させる。

「……Xio、『モンスアーマナー』、アクティブ!」

その言葉を待っていたと言わんばかりに、手甲が開いて接続口が現れる。

「今度は、なんの芸だ?」

「バディライザー、セット・オン！」

そこへ腰に下げていたバディライザーをセットし、新たな命が吹き込まれる。

「来たツス！アーマー電送、オールグリーン！」

「成功だよ♪」

「よしよし、データはこれで完成だな。」

「あとは彼自身の手で、うまく扱えるかだけだね。」

現状恐らく人類最先端の研究成果の結晶、全世界初公開。それにはこれ以上ない舞台であろう。欲を言えば、決勝までとっておきたかったが、それ以前に負けてしまっただけでもない。

「これが人類科学と怪獣娘のコラボ！『モンスアームズ』だ！」

より一層大きくなったガントレットの中央に、バディライザーが輝く盾が現れる。

「精密機械を盾にしまっただけなのか。」

「知らないわ。」

「それで？」

「さっそくお目見えさ。ゴモラ！」  
腰にぶら下がっているホルダーからカードを一枚引き抜くと、それをバディライザーにセツトする。

『『モンスライド・ゴモラ』!!』

選んだのは最も信頼を置く仲間の力。そのトレードマークの三日月ツノを模した爪を持つ武器へと装甲が変わる。斬ってよし、突いてよし、防いでよしのオールラウンダー。

『『ゴモラストインガー』!!意志を貫く力!!』

「ゴモラの力か・・・。」

「そうだ！あなたに倒された、ゴモラの無念を果たしてやる！」

『おおうつとシンジ選手！ゴモラ選手の敵討ちのために奮起している！』

『この時のための秘密兵器だったんですねえ、熱いです！』

「だがどれだけ熱い想いを乗せようと、この高熱の鎧は砕けんぞ！」

「繋ぐのは想いだけじゃない！たった一つ出来た弱点、それは・・・！」

矛先が鎧を切り裂いて火花を散らす、それすらも決定打にはならない。ただひとつ、突くべき弱点を除いて。

「……だああああ!!」

「ぐっ!? そ、そこは・・・?!」

ゴルザの胸の中央。そこにはただ一点だけ、つい最近できたばかりの傷痕があった。『なんと! 先ほどの試合でゴモラ選手が最後に付けた傷痕! そこへシンジ選手のゴモラステインガーがねじ込まれる!』

不動の山を貫いてきていたゴルザの体が、ぐっ・・・とたじろぐ。その隙に、シンジは己の脚に残されたすべての力を込めて踏み込む。

「いくぞ・・・ひっさあああああつ!!」

ゴモラステインガーの中央のツノ突き刺したまま、左右のツノがペンチのようにゴルザの体を挟みこみ高々とリフトアップする。そして最後の一撃の為のエネルギーが充填される。

「うおおおおお!!???!?これは・・・ゴモラの超振動波か?!?!」

『ハイ・バイブス・エンド!!』

勝ち名乗りを上げるようにその名を呼べば、空気すらも削り取らんばかりの衝撃波が生まれた。

『決まったー!! 長かった戦いを制したのは、ミクラス&シンジの『ミラクルナンバーズ』だあ!!』

ワアアアアアツ！会場が盛り上がる。逆転、逆転、また逆転の二転三転した試合運びも終わりを迎えた。

「シンジさん……平気……？」

「さすがに……もう……ダメ……」

バツタリと二人ともへたりこむが、それも仕方がない。ここまでの長丁場は、今日始まってから一番だった。これ以上の戦いがこの先にも待ち構えているのかもしれないと思うと、観客たちは盛り上がるが、当事者たちからすればもうたまったものではない。

「でも今はとにかく……お疲れ、ミクさん！」

「うん！戻ったらオヤツにしようね！シンジさん!!」

「ちよつと……お腹は空いてないかな。」

ただまあ、試合の熱さも今だけは忘れよう。熱を帯び過ぎれば体に毒だ。何事もほどほどがある。

「いつくし！……あれ、風邪ひいたかな？」

「湯冷めしたんじゃないかな、寒かったり熱かったりで。いつくし！」

「負けましたわね……負け知らずの野分ママ、いえ、バリケーンが……」

変身も解けて横たわっているのは、ただの一人の少女だ。



「負けるのは……こんなに悔しいんですわね……。」

嵐が去って澄み渡った空の青さが目に染みる。こうやって、空を見上げたのはいつ以来だったでしょうか。今までずっと、見下ろしてばかりだったような気がする。

「悔しいってことは、まだまだ強くなれるってことさ。」

「あなた……ふん、当然ですわ。わたくし、まだまだ飛べるんですもの。」

「それはそれは、頼もしいこつて。」

差し伸べられた手をとって、もう一度地に足を着けて立ちあがる。

「あーあ、私たちも早いところ引き上げよう。雨も降ってきたし。」

「雨？雨なんて降ってませんわ……。」

「雨だよ……とびつきり目に染みるな。」

上を向いているのは、一人ではなかった。

「……あなた、泣いてらっしゃるの？」

「バカ、こういう時は黙って見過ごしておくもんだ。これだから箱入り娘のお嬢様は。」

「むー！バカって言う方がバカなんですのよ！」

心と目頭になんだか温かいものを感じた。きっかけがなければ出会う事も無かつたであろう、かけがえのない人が出来た。野分マミのこの日の日記には、そんな素直な気

持ちが綴られた。

いあ いあ がたたん

冒流的、あまりに冒流的な光景が平和を謳う海の底に木霊する。

「世界中が・・・ガタタンを呼んでいます!!」

「やめるのですガタタン！」

大いなる神を讃える詩が、3000万年に渡る深き眠りを呼び覚ます。  
んぐるい むぐるうなふ がたたん るるいえ うがふなぐる ふたぐん  
不可侵にして不可視の領域、ここは地球の闇が眠る場所。  
時は止まり、死が死を迎える。終末は近い。

## 金と黒の戦い①

「んー、一汗かいたあとのタコ焼きはおいしいね！」

「でしよー？さすがミクちゃん！わかってるねー！」

塩分が欲しければスポーツドリンクとかの方がいいと思うんだけど。でもまあダウンバーストで冷えた体にはよく染みる。

「これが庶民の食事なのですね。水で薄めた小麦粉を丸く焼いて、ソースと鰹節と石<sup>あおさ</sup>蓴をかけて、箸ではなく爪楊枝を刺して食べるなんて変わっていますのね。」

「中熱いから気を付けてね。」

「この中身は・・・タコですの？」

「そりゃタコ焼きだからね。」

「タコが入っていればタコ焼き、では好み焼きには好みが入っているのですか？」  
「お好みの中身を入れるからお好み焼きなの。」

そこに相席してBブロック二回戦の試合を見ているのは、先ほど戦っていたバリケンさんとゴルザさん。戦いが済んだら、仲良くテーブルを囲みたいと誘ったのだった。試合の中で心境の変化があったのか、バリケンさんは快諾し、ミカも特にわだかまり

もなく参加してくれた。でもゴルザさんは何考えてるのか今一わからない。

「次の試合だね、ガーデーさんの試合。」

「レッドキング先輩もね！」

「彼女も怪獣娘になって、変わってしまった人なんですのね。」

「そつ。今はこうして元気でやってるけど、当時はすごい落ち込んでたんだつて。」

「バリケーンさんがこれからどうするか決めるのは、ガーデーさんを一目見てからでいいんじゃないかなつてね。」

早々に自分の分を食べ終わりシンジの分にまで手を伸ばすミカを放つておいて、全員モニターの方へ顔をむける。

『さて注目のカード！赤の王と黒の王、レッドキングとブラックキングの戦いです！』

『やれやれ、スター選手は注目されて困るぜ。』

『別に私はファイターというわけではないのだけれど……。』

かく言うブラックキングさんも、ガーデーさんと同じく陸上の道を断たれた身だった。この大会に参加したのも、道のひとつと捉えてのことと、友達であるガーデーさんから強く希望されたからだ。お互いにいい影響を与え合う仲間だ。

「私とシンちゃんも影響しあってるよねー？なんか褒めるスキルが伸びた気がするよー！ほれほれ！」



「そのようね、片足しか捉えられなかったのは初めてよ。」

「あり？」

ガーディーが知覚するよりも速く、全身をエレキングの放電が襲う。

「ひでぶっ！」

「おっと、慈悲深い仲間を持っているようね。」

「おいコラア、それじゃあオレが無慈悲みたいに聞こえるじゃねえか。」

「あなたを助けたことはあっても、あなたに助けられた試しがないわ。」

ブラックキングの火炎放射ヘルマグマに邪魔されて、放電を止めざるを得なくなった。パワー一辺倒な戦い方では、レッドキングには分が悪かったらしい。

「しょうがねえだろ、相手は得物大剣持ってたんだから！」

「ならもうちよつと頭を使って戦いなさい。頭突き以外で。」

「ハッ、なら選手交代！」

「いいわ。」

作戦会議もそこそこに、戦う相手を入れ替えて様子を見ることにしたようだ。実際肉弾戦オンリーで身体能力の実を武器にしてくる相手の方がレッドキングにはやりやすい。

「打たせて・・・殴る！」



「おっとー！」

「もう一発!!」

「ぐうっ!! さすが元チャンプ・・・。」

経験がものを言う。ガーディーとブラックキングはファイターではないため、どんな戦い方をするかは見たことが無い。が、どういう風に攻めてくるかは経験則でわかるというわけだ。

「元は余計だぜ元は！ いつか、いや今日こそ返り咲くんだからよ！」

この戦いを見ているであろうあの澄まし顔を思い浮かべながら吠える。恐らくなんのリアクションもしてないだろう。空しい片思いだ。

「強いっ・・・けど、負けっぱなしってのは、悔しいんだよねえ！」

さりとて圧倒されるばかりガーディーでもない。怪獣娘になる前の自分はまさに無敵だったと思う。才能も未来もあった。けど、それは怪獣ソウルの発現によって潰えた。

「けど、何もかも変わってみて、初めて自分が井の中の蛙だったって思えた！ アタシよりすごいヒトが、もっというんだって！」

今隣で共に戦っているブラックキング、黒柳ナミさん。それに、怪獣娘じゃないただの人間だけど、大切な友達のジュンだって本当にすごい。

「だから自分の可能性をもっと信じる！そのためにアタシは挑戦し続ける！」  
地面を蹴る力が強くなる。自分にも抑えきれないほど胸が熱く高鳴っている。

「おい、なんかピコピコいつてんぞー！」

「あつ、ホントだ。」

胸のカラータイマーが点滅を始め、危険信号の合図だ。だが、ガーディーは負けない！ブラックキングとジュンとの友情が、彼女の心の支えになっているからだ！！

「どおとおおおおりやあああああああ！！！」

「くつ、なんて速さだ！捉えきれねえー！」

なおも衰えない健脚で砂ぼこりを巻き上げ、レッドキングの周りに円を描く。リングに砂嵐が巻き起こり、たちまち視界を奪う。

「そこだあああ！！！」

「ぐおっ！！しまっ・・・?!」

一瞬の隙を突いて、ガーディーがレッドキングの足を払う。重力に体を引かれ、自由を喪うその一瞬。

「これで・・・決めるっ！！」

「ぐっはあー！」

サマーソルトのようにレッドキングの身体を蹴り上げる。無防備なまま空を舞う

レッドキング。今こそ最大のチャンス!!

『タイムアアア・・・』

左右に開いた腕を腰へと引き、胸の前で交差。それをカラータイマーの下に沿える。

フアアアアアアアアアッシュ!!』

砂塵の中に十字の光が灯り、やがて眩い虹色の閃光が煙幕を引き裂いて上空へと放たれる!

「これはっ?!!」

「すごい・・・綺麗・・・。」

超古代の守護獣が放つ極光、その光景に誰もが目を奪われていた。それは明らかに光の巨人の力と言っても相違ないのだから。

「まさか、ここまでの力があつたなんて・・・!」

「だからすごい、あの子は。」

クールなエレキングもこれには目を見開いて驚くが、ブラックキングはまるで自分の事かのように誇らしげに語る。一番そのすごさを見せつけられているのは、一番近くにいたブラックキングなのかもしれない。

「うおおおおおおお!!!」

虹の光が一層強くなり、太陽とも寸分違わぬほどの輝きが世界全てを覆いつくそうと

している。

「くっ……ううううう……!!」

だがその天下も既に終わりを迎えようとしていた。

「あれ?なんか光弱くなってきたくない?」

「どうやらあの技は体力を大幅に削るらしい。」

見た目は派手だが、どうにも燃費が悪いらしい。事実、これと同じ技を使った相手は、光に弱かったり、実体のない幻だったりするから。

「おおおおおおおっりやああああああ!!」

「ふがあっ!」

体内のエネルギーを撃ち尽くして勢いの弱まった虹の奔流を押し返すように、レッドキングの流星パンチがガーディーの鼻っ面をへし折る。

「へへっ……見た目は派手だけど……全ッ然効かなかったし……!」

ギリリツと歯を立てて、レッドキングは不敵に笑う。

「そうやって虚勢を張るなら、足の震えぐらいどうにかしたら?」

「武者震いだつての……ハハッ……。」

一方エレキングの方は割とあっさりどブツラクキングをK.Oしていった。

「お前こそ、尻尾焦げてるじゃねえか。」



今までずっと出番の無かったシーボーズさんにもやっとセリフが回ってきた。ずっといたんだよ？ ホントだよ。

「よーしよーしシイちゃんよくがんばったねー？ ちゃんと主張できてゴモたんは嬉し  
いよおろ？？よしよしよし．．．」

「はうう．．．やめてくださいやい．．．」

まるで飼い犬にそうするようにミカがシイさんを撫でまくる。まあ実際シイさんは小動物系でかわいいと思う。だからって本当に小動物のように愛でるのはいかなものか。

「お？ シンちゃんも撫でられたいの？？よーしよし!!」

「やめーい!」

「ほれほれほれ？ ここがええんかここが？」

「ちよつ、マジでやめろ!」

いつからこんなに的確に弱点を突くようになったのか。

### 閑話休題

「で、バリケーンちゃんはどうしたい？」

「わたくしは．．．」

「ここにいる全員が、バリケーンさんのことを支持するよ。なんだって力になる。」  
「シンジさん……。」

「アタシも、一回拳を交えて、一緒にタコ焼き食べたんだからもう友達だよね！」  
誰もがうんうんと頷き、期待の眼差しを向ける。

「……私も、今度からはノーギャラで助っ人に来てやる。」

「ゴルザさん……ありがとうございます、皆さん！」

目尻に水滴を浮かべて、バリケーンさんは微笑んだ。どうやらこれで一件落着かな？  
いや、これからが大変になるんだろう。

「さて……さっそくですが、シンジさん？」

「なに？」

「シンジさん、ご趣味はありますか？」

「趣味？」

「休日はなにをして過ごしていらっしゃいますの？」

「休日？」

「お付き合い、されている方はいらっしゃいますの？」

「まあ、いない、かな？」

「今度、ウチの別荘にいらっしやいませんか？父と母にも紹介したいですわ！」

ちよつとそれは気が早すぎるんじゃないかな。面談なら局長に任せたいし。

「ちよつとー！いきなり何手出してんのバリちゃん?!」

「あら？なんでも協力してくださるのではなくって?」

「そうは言つたけど、そうじゃないのー！シンちゃんはあげないんだから！みんなでシエアするものなんだからもー！」

「僕の人権は?」

いきなり大変なことになってしまった。

「やれやれだぜ。」

その空気にイマイチ馴染めないゴルザさんの溜め息が部屋の隅にこだました。



## 金と黒の戦い②

「ふー！おなかいっぱい！」

「食べすぎじゃない？次の試合大丈夫？」

「へーきへーき！腹八分目にしてるから！」

「お腹いっぱいじゃないのか。」

「じゃあ私はもうちよつと・・・。」

「ミカはもうやめとけ。太るぞ。」

「んもー、女の子にそんなこと言っちゃってー、デリカシーないなーシンちゃん。」

「今の僕が悪いの？」

「シンジさんが悪いですわ。」

「そんない。」

「なんやかんやあつて和気あいあいと話せるようになったバリケーンさんを交えて、引き続き控室から試合を観戦する。」

「次はゼットンちゃんとおジョーの試合だね。どっち勝つと思う？」

「うーん、そりやゼットンさんだと思うけど、キングジョーさんも強いからなー。」

本当にモデルかと疑いたくなるぐらい、キングジョーさんは硬い・強い・遅いと揃っている。そしてその遅さをカバーできるIIさんも一緒だ。

一方ゼットンさんの方はというと、ゼットンさん自身が文句なしの強さに加え、ベテラン怪獣娘であるベムラーさんが……。

「あれ、ベムラーさんってどんな戦い方してたっけ？」

「正直ゼットンちゃんが目立ってばかりでベムラーさんの戦い方全然知らない。」  
えーつとあれだ、東京タワーでのシャドウマンとの戦いの時。

「ゼットンちゃんと空の上だったね。」

「あとバイクで事故ってきた。」

じゃあ、アイラとの大戸島での戦い。

「ゼットンちゃんにバレーボールにされてたね。」

「ボコボコにされてたね。」

予選は……？

「ゼットンちゃんのテレポート。」

1回戦。

「ゼットンちゃんが瞬殺。」

「ひよつとしてベムラーさん、なにもやってないんじゃない？」

「ひよつとしなくてもそうだね〜。」

決して何もしていないわけではないんだらうけど、いかんせん目立たない。逆に言えばそれだけ秘匿できているということだけど……。

「そもそも、ベムラーさんって強いのかな？」

「それ言っちゃダメだよ。最初の怪獣娘さんなんだから。」

「最初の怪獣娘だからって強いって保障あるの？」

「……プレミアはついてる。」

むか〜〜のグッズとかなら、一個十万とかの値段がついたっておかしくないし。

「シンちゃんいつもお世話になってるのに、何も知らないの？」

「ベムラーさん、あんまり自分のことは教えてくれないから。詮索するのもアレだし。」

（多分シンちゃんが聞かないから言わないだけだと思うけど。）

真実は本人のみぞ知る。

「で、仮にゼットンちゃんが準決勝に進出したとして、勝算あるの？」

「あると思う？」

「諦めんなよ！どうしてそこで諦めるんだそこで！」

「全くないわけでもない・・・かな？」

「なにか作戦があるんですか？」

「わかった！ゼットンちゃんのドリンクに薬を・・・。」

「そんなことしないよ、チブルさんやナツクルさんじゃあるまいし。」

「なにが言いたい濱堀シンジ？」

「おっと。」

噂をすれば影が差す、そのナツクルさんがやってきた。

「まるで私が試合前に工作を行う卑怯者のような言い草は、やめてもらおうか！」

「言い草もなにも事実でしょうに。」

「ゴモラもそうだと行っていきます。」

「ぐぬぬっ。」

「で、なんの用です？」

「いや、チブルがこつちに来ていないかと思って。」

「チブちゃん？いないよ。タコ焼き買いに行っただんじやないかな？」

「外へか？面倒だな・・・。」

「なにかあつたんですか？」

「・・・秘密は守れるか？」

「情報料よこせって?」

「マネーのお話ですか?でしたらここはワタクシが……。」

と、バリケーンさんがさらっととんでもない値段を提示したために、ナツクルさんが失神したり。

「さすがにこんな大金は貰えませんよ。商品の価値以上の対価を貰うのは、私のポリシーに反しますので。」

「あら、ではこの値段に見合った商品を持つてくるのが商売人ではなくって?」

(なんでナツクルちゃん口調変わってんだろ。)

(あまりの巨額にシヨックを受けちゃったのか、媚びを売ってるのか。)

シンジは真面目に働くのが馬鹿らしくなっていた。

「で、どんな情報なんすか?」

「うむ、私が独自に調査した結果、あの『ジェーン・ドウズ』という2人についてだが……。」

「ほうほう?」

まるでクイズ番組のようにナツクルさんは口を噤んで間を作る。心なしかドラマロールの音が聞こえ、誰もが固唾を飲んで見守っている。

「『何もわからない』ということがわかった!」

「は？」

「あの2人の出自や目的、その他の情報は一切つかめなかった！以上！」

「自分商売人舐めとんの？」

「ミカ、言葉。」

「だーって、ここまで引つ張ってにおいてオチも無しとかお笑い芸人失格だよ？」

「誰がお笑い芸人か。」

「だってナツちゃん、チブちゃんとコンビ組んでM—1出るんじゃないの？」

「M—1グランプリってもう終わってないから。」

「うそ!? シンちゃんと一緒に出たかったのに！」

「出ないわ。」

「で、なんの情報も無いってどうゆうこと？なんかもっとあるでしょなんか？」

「恥ずかしながら、その言葉通りでしかないのだ。辛うじて2人の3サイズだけはわかったが、一体どこからきてそしてどこへ行くのか皆目見当がつかない状態で……。」

「その情報、もっとくわしく……。」

「シンちゃん？」

「なんでもないですハイ。」

「でも、なんの目的もなく大会に出たってことはないよね？少なくとも賞金目当てと



「あれーチブちゃんタコ焼き買ってきたんじゃないの？」

「そんなん買つてられへんわ！それよりもっと大変なことがあつてな！」

「お初にお目にかかりますわチブルさん、わたくしはバリケーンですわ。お噂はかねがね伺つておりますわ。」

「あーそりやおおきにな。だからな、今大変なことに。」

「あの・・・チブルさん・・・。」

「だから！それを！今！言おうと！しとんのや!!」

「あの・・・大丈夫ですかつて・・・ケガしてませんかつて言おうと・・・その・・・。」

「あー、チブちゃんつたらシイちゃん泣かせたー。」

「いーけないんだーいけないんだー。」

「せーんせーにー言つてやろー。」

「あん・・・ええ・・・？その・・・ごめんな？堪忍してな？つて、なんでウチが謝つてんの？」

「で、なにがあつたの？」

「せや！これ見てーな！この無残な姿を！」

「ぎやあなまくび。」

チブルさんが背負つていた袋の中身が床にぶちまけられると、ゴロゴロとシンジの足



元に人間の首らしきものが転がってきて悲鳴が上がる。

「あれ・・・この人、っていうかこのマネキン見覚えがあるような？」

「そうだ、たしか一回戦の前に僕と握手したフアンの人じゃない？」

「ウチが手塩にかけて作った<sup>そだてた</sup>『アンドロイド・001』ちゃんがこんな目に遭ったんや  
！」

「001？」

「13までいそう。」

「なんでこんなことになったんだ？」

「それが、例の2人組を追跡させてたら、いきなり信号がロストして、やっと見つけたのはゴミ捨て場やったんや・・・。」

「む、むごい・・・いくら作り物とは言え・・・。」

「そう？ マネキンと同じでしょ？」

「で、でも暗いところで見るマネキンや人形ってコワイですよね・・・。」

「昔、ガラス棚に入った人形を見るのがすごく怖かったですわ。」

数時間前に会ったばかりの人形が、今は見るも無残にバラバラになっている事実、少し物淋しさに駆られる。

「あれ、記憶媒体<sup>メモリー</sup>が無い？」

「そうなんよ、本体は壊されてもせめてデータさえあれば……っと思っつたんやけど、ハードディスクが無いんよ。」

「壊されたわけじゃなく、丸々『無い』？つてことは、犯人が持ち去ったつてことか。」

「あの2人が？」

「一体何のために？」

「そりゃ、探りを入れられたからとか、見られちゃマズいものを見ちゃったとか……。」

「そんな言うても、あんまりええ映像撮れてないで？かろうじてレッドちゃんの自主規制あーんなシーンぐらいとか……。」

「なんだつて?!大変じゃないか!早く見つけないと!」

「シンちゃん?」

「なんでもない、なんでもない、なんでもないから顔から手離して。爪が、爪がすごい食い込んでるから。」

ギ、ギ、ギ、ギィィィィ!つと右から左へ突き立てられた爪がスライドし、シンジの顔に赤い痕がつく。

「これはひよつとすると、『警告』なのかもしれんな。」

「警告?誰に?」

「あの2人を調べようとする、そういうやつら全員に対してさ。」

「どうゆうこと?」

「理由はどうあれあの2人だって、この大会に参加しているからにはトラブルは避けたいはずだ。とすれば、干渉してくる相手は邪魔になるし、それに過剰に反応するわけにもいかない。」

「な、なるほど……全く気付かれずに『始末』できるんだぞ、っていうアピールでもあるんですね。」アイテテ

「じゃあ、ウチはやられ損?泣き寝入り?」

「まあまあ、ここは怪我しなかつただけ儲けものつて思つとこうよ?」

「そんな……。」

くすん、と落ち込むチブルさんを慰めるようにミカが撫でる。

「ほらほら、次の試合始まるよ?今は楽しもうよ!」

「そうだね、次の次が件の2人の試合だし、まずそれを見てみてもいいんじゃない?」

「んー……せや!」

その時、チブルの脳内に悪魔的発想が走る。

「なにすんのガラクタイじつて?」

「ふふん、次に作る子はおジョー似にしたる思てな!今のうちにおジョーの色んなアングルを撮影しとこうと……。」

「いいのそれ？」

「撮影は禁止されてなかったと思うけど・・・。」

「よっしゃ！ ついでにおジョーの秘蔵写真も高たこうう売れるんちやうかな・・・。」

「それはダメでしょ。」

「・・・上手くいった暁には、シンちゃんにはプリップリな生写真あげるから。」

「協力は惜しまない。」

「シンちゃんくん？」

一同は、モニターに顔を向けてその激闘を見届ける・・・。

「そりゃあ僕が口を滑らせるのがいけないとはいえ、ここまでされる謂れはあるの？」

「自分の胸に手を当てて考えてみる。」

「動いてるから生きてるのはわかる。」

## 金と黒の戦い③

「おう、お前らもこっち来たのか。」

「レッドキングさん、お疲れ様です。」

「レッドキングせんぱーい！すごかったツスねー！」

「あんまり活躍していたようには見えないけど。」

「それ言うなつての！」

部屋を出たシンジとミクラスはアリーナの観戦席にやってきていた。モニター越しでばかり見ていたが、生の熱気というやつに心も高鳴ってくる。

「レッドキングさんは、どっちが勝つと思いますか？」

「そりゃあやつぱり・・・自分で言っちゃまうのが癪だが、やつぱゼットンが勝つだろうなー。」

「うーん・・・やつぱりレッドキングさんもかー。」

「なにがだ？」

「いや、みんなゼットンさんゼットンさんって言うけど、ベムラーさんはどうなのかなつて？」

あと一人、ゼットンさんLOVEな寝ぼけ眼はというと・・・ウインさん共々遠くの方で売り子をやっているのが見える。なんであの2人までしゅわしゅわコーヒー売っているのか。あとで買ってあげよう。

「あーそつかお前ベムラーさん大好きだもんな。」

「ヘアア?!なんでそんな話になるんですか?」

「あつはは、ジョーダンだつての。」

「でも別に冗談の感情ではないのでしょう?」

「え?あつうん。」

「マジかよ。」

「ふーん・・・。」

「なに、この空気?」

好きか嫌いかわからないといけないの?と問いたくなるが余計にややこしくなりそうなので口にはしない。

「でも、ベムラーさん強いよきつと。能力とか、パワーとかじゃなくて。」

「例えば?」

「・・・目を合わせて喋ってくれるところとか、かな?」

「目線の話?」

「確かに背高いし、スタイルいいもんねー。やっぱシンジさんスケベじゃん、ゴモたんの言う通り。」

「違うつての。エレキングさんも微妙に距離取らないで、傷つくから。」

実際、あの人の顔が近づいてドキドキしたことは何度もある。ひんそーでひんにゅーでちんちくりんなミカとは違う『匂い』だつてする。自然とヒートアップする心臓を落ち着けるのに苦労していたし、反面そばに居ると不思議と心地いいと感じていたのも事実だ。

「そうじゃなくつて、心の強さの話。人の心の動き方というか、揺れ方というか、そういう感情の起伏を読み取ってくれる『頭のいい人』だから。」

「レッドキングには無理な話ね。」

「そこでオレに振るなよ。」

「事実よ。」

「そこはほら、力こそパワーだから！」

（頭痛が痛い的な？）

「それに、そんなベムラーさんだからこそ……。」

「おつ、始まるみたいだな。」

「シンジさん、なんか言った？」



「・・・なんでもない。」

試合が始まるというアナウンスが響き、スクリーンに対戦カードが映し出される。観客は本日最大と言つてもいいほどの盛り上がりを見せている。

その片隅で、小さくコール音が鳴る。

「あれ、ベムラーさん？」

「どしたの？電話？」

「うん、ちよつと外れるね。」

ちよつと歓声が大きすぎて通話するには齟齬が出る。出入口の少し奥まった場所で、耳にイヤホンマイクを挿しこんで着信に出る。

『もしもし、シンジ君？』

「ベムラーさん、もう試合なんじゃ？」

『ん、まあそれはそうなんだが。君の調子はどう？』

「ん・・・普通です。バリケーンさんとも仲良くなれました。」

『そうか、それならよかった。・・・やはり、君ならやってくれると思つていたよ。』

「そうですか？ありがとうございます？」

『うん、じゃあ私はそろそろ行くから。見ていてくれよ？』

「・・・はい！がんばってくださいね！」



人気者であるキングジョーはさすが注目を浴び慣れているようだが、その妹は恥ずかしそうにしている。曰く、今回の大会参加は、姉が妹を勇気づけるために計画したらしい。

『対するは予選をぶつちぎりで突破し、一回戦も瞬殺したゼットン&ベムラーの『ブルースファイア』!』

「……。」

「……なんか言ったら?」

それに対して、こつちの人気者は相変わらずのポーカーフェイスである。もうちよつと愛想良くできないものか。

『ベムラーさん!』

「おつ……ちゃんと応援してくれているな、感心感心。」

この大喝采の中から1人だけを聞き分けて、手を振り返すと、彼の顔も明るくなった。まるでサツカーの応援にでもきた子供のようで可愛いものだ。見れば、ゼットンの方も誰かへと手を振っていた。その視線の先には寝ぼけ眼の少女がいるだけだったが、今まで組んで戦ってきた中で一度も見たことが無いような微笑みを見せているぞこのパートナーは。なんか悔しい。

『それでは、Aブロック2回戦第二試合、レディイイ……。』

『ゴオオオオオオオオオ!!』

その宣言を皮切りに、両者とも一斉に戦端を切る……とはいかず、まずは安牌の様子見。

(キングジョーの装甲に、真正面から挑むのは危険か。)

(ゼットンの実力とマトモにぶつかるのハ避けたいデスねー……。)

「……仕掛ける。」

「い、行きますー!」

そんな頭脳担当の思惑を知ってか知らずか、今一步頭脳が足りていないのか、ゼットンとIIは突撃を開始した。

「Oh……やる気満々デスねー。」

「まあ、攻撃は最大の防御とも言うけど……。」

大会も大詰めだというのに、なんとも締まらない展開だ。シンプルなのはキライではないが、もうちよつと探偵らしく頭脳プレーを魅せたいところ。

「IIのスピードなら、ゼットンにも対抗できマスねー。ここは堅実に各個撃破を目指しましょー!」

「おいおい舐められたものだな、私相手なら勝てるぞ踏んだのか?」

「イエイエ、そんなことはないデスよ?ただワタシ、結構頭もいい方ダって自覚ありマ

スよ?」

「なら勝てる確率でも計算しておくんだな。」

ベムラーは軽く手首を捻って準備運動ストレッチすると、猫足立ちの構えをとって迎え撃つ用意をする。この構え方なら、大抵の攻撃は捌けると踏んでだ。

対するキングジョーは、バーニアを噴かせて一気に距離を詰める。身軽なIIよりもやや劣るとはいえ、この程度の広さのアリーナはキングジョーにとっては手狭な世界だった。

「獲ッター!」

「つと思っただか?!」

トップスピードを乗せて振るわれた金色の剛腕を、ベムラーは絡めとると地面へと投げて反らす。土煙を巻き上げて、大地に傷跡を残してポイと捨てられる。

「つ・・・失敗しマシたね・・・。」

「いくらお頭おっむがよくつても、柔軟性に欠けるんじゃないやあ宝の持ち腐れだ。」

キヤー! おジョーさんのお美しい体が一!! という悲鳴がスタンドから響いてくるが無視。土がついてなおその装甲は輝きを失ってはいない。

「デハ一つ、手を撃ちまショウか。」

どこからか取り出したのはドラム状の腕輪。おもむろに右腕に通すと、銃身が伸びて

巨大な火砲<sup>ランチャー</sup>となる。

『ペダニウムランチャー』！デス！』

「そんなんアリか？」

『勝敗は始まる前に決している』と言いますからネー。ワタシ結構スマートなライフスタイル<sup>生方</sup>なんデスよ？』

キングジョーのその身と同じ金色の砲身がキラリと光る。身の危険を生物的本能で察知したベムラーが素早く飛び退くと、さつきまで自分がいた地点が消失した。高熱に溶けているのだ。

「Oh！予想以上のパワー<sup>威カ</sup>デース！さすがシンジと一緒に作った甲斐がありマシタ」  
♪

「なんてもの作ってくれたんだー！」

『ごめんなさーい！』

戦場で『ちよつと待って』などという弱音は通らない。圧倒的、ひたすら圧倒的パワーが蹂躪する。キングジョー改めキングジョーカスタムの通った後にはペンペン草も生えないことだろう。

「ゼットン！助けを!!」

「わかった。」

ベムラーの叫びを耳にして帰ってきたゼットンがレポートで奇襲し、水平チョップでランチャーの軌道をそらす。それがちょうどシンジの眼前に跳んできたのは偶然か。「ハイゼットーン！どうしてでシヨウか、アナタには負けたくないツテ気がしてマース!!」

「それは私も同じ……。勝つのは、私。」

キングジョーのバーニアが火を噴いて距離をとると、間髪入れずに弾幕が張られる。ゼットンはシャッターを張ってそれらを凌ぎつつ距離を詰めようとする。

「ここからはチームプレーってわけ!」

「そつちはまかせた。」

戦っていた対象を失って棒立ちしていたIIに、今度はベムラーが立ち向かう。

「背中を任せられたからには、仕事は必ずやり遂げる。それが私の流儀だ!」

「戦闘パターン……タイプG。」

力には責任が伴うように、マネーには仕事に伴う。それは労働と対価という二律背反でも矛盾でもない、ごくごく当たり前の事実であるが、ベムラーはそれを信条とする。それが大人として正しい在り方であると。

「ハッ!」

「ぬん!」

蹴りの連撃に極め技を織り交ぜたラツシユをベムラーは繰り出す、それをⅡは難なくいなす。

(どうやら、オーソドックスな技では効かないらしいな。)

それも慣れたような手つきだ。学習能力の強いファイティングコンピューターを内蔵しているということは、この程度は織り込み済みということか。

「なら、こういうのはどうだ？」

小さくジャンプして上方へフェイントをかけ、即座にかがんで足払い。そこからサマーソルトで空中へ打ち上げて、最後にパイルドライバーをかける。

「これで・・・どうだっ!？」

「・・・カウンター!」

「なにっ!？」

『キングジョーⅡ選手!地面に頭が着く寸前にブースターを噴かせて空に回避したあ!』

そのまま空中で上下逆さまになると、背中に張り付いているベムラーを逆に掴み返し、重力に身を任せて落とす。

『メイプリーフクラッチ!!』

「どっはあっ!!」



見事逆襲の技が決まった。ベムラーの肺から空気が漏れ出し、のたうつように転がって距離をとる。Ⅱはその動きを警戒してか様子を窺っている。

「くっ．．．パワーもスピードもテクニクも揃っているとはな．．．万能ねぎよりも万能だ。」

テクニクには自信があつたが、ここまであしらわれてしまうとショックだ。だがいかに万能といえども、完璧などというものはあるまい。必ずどこかに弱点があるはずだ。それを捜すのなら、得意だ。

「ハイゼットーン！」

「わかった。」

「オット！逃がしませんヨ!!」

「逃げることはないのさ！」

虚を突く形でゼットンと戦っているキングジョーに奇襲をかける。1対1で勝てないなら、乱戦に持つて行くというわけだ。

「はあっ！」

「クツ．．．お返しデス！」

「させない．．．。」

「うっ．．．うう．．．。」

「やはり、攻撃してこないな。ゼットン、ちよくちよく注意をひきながら叩くんだ！」  
「わかった。」

(クツ、マサカIIの弱点を見破ったとデモ言うんデスか?)

キングジョーも内心冷や汗を垂らした。IIは敵味方入り乱れるところへ入ってこれずに狼狽えている。

『ゼットン光弾』・・・！』

「クツ・・・！」

『『青色熱光線』！』

「うう・・・っ！」

2人は手を変え品を変え、様々な方法で攻撃を試みる。いかにキングジョーの乙女のガードが硬かろうと、ジワジワと精神力を削られていく。

「よっし、もう一息！」

「！、そこデス！」

渇きに渴いて飢えに飢えた状態でご馳走が目の前に現れば、どんなにタフネスな人間でも飛びついてしまうのは必至。ベムラーが一瞬見せた隙は、まさにそんな釣り餌だったわけで。

「！、反撃行動、『デスト・レイ』！」

「チョット、Ⅱ!」

『おつとどうしたことだー?! キングジョーⅡ選手、キングジョー選手に対して攻撃を始めたー!』

『流れ弾が当たったことで、攻撃プログラムが誤作動しているのかもしれないね。』

「やはり、頭が硬すぎたようだな。柔軟性ならこっちの方が一步上。」

「でも、ちよつと卑怯。」

「頭脳プレーと褒めてくれよ……。」

一息つきながらキングジョーがⅡを宥めている様を見つめる。キングジョーが慣れているように見えるところからすると、こうなるのは一度や二度のことではないらしい。

「Ⅱ! ストロープ!」

「きゆううう……。」

ぺしつと叩かれてⅡは一瞬フリーズするが、すぐさま再起動する。それによつて正気にも戻つたらしい。

「大丈夫ですかⅡ? ドコかショートしてませんか?」

「だ、大丈夫です……ごめんなさい、私また……。」

「Ⅱはちよつと硬すぎるんです! 初めて会う人ばかりで緊張したんでショウ?」

「うん……。」

「デモ、これもいいキカイですから、今回で慣れちゃいまシヨウ！だからもうちよつとだけガンバつてくだサイ！」

ゆつくりとⅡは頷くが、表情は少し暗い。キングジョーも少し引つかかるものがあつたが、すぐに思考を切り替える。

「今度は、ちゃんと戦つて。」

「わかつた、別の攻め方に変える。」

「……あの子、助けてあげて。」

「仕事は全うしよう。」

何かを感じてゼットンがベムラーに仕事の依頼をしてきた。その間キングジョーをひきつけるのが報酬だという。割に合わないけど、たまにはこういうのも悪くない。

「さて、も一回遊んでくれる？お嬢ちゃん。」

「……。」

「だんまりか。まあ無理もないわな。」

ブウン！と鉄腕を振って威嚇してくるのを軽くないしながらも、その視線はⅡの瞳から離さない。

「なぜ、攻撃してこない？」

「……Ⅱ、君は暴走したことがあるんだろう？」

「！」

「君はあまり攻撃することに積極的ではない。追撃することも出来る機会を何度も逃している。」

あまり表情を動かさなかったⅡの眉がピクリと動く。

「その暴走の経験から、君は人との関わりに消極的になった。そうだろうか？」

「……。」

自分にもその経験はあった。そのころはまだ怪獣娘なんていう概念自体無く、暴走ともまた違ったケースだが、同じようなものだ。力に振り回されるといふことにおいては。

「力を恐れるな、過去を悲しむな、振り回されるんじゃないでコントロールするんだ。」

「あなたは、お医者さん？」

「いいや、探偵さ。迷い犬の捜索から世界の危機を救うまで、幅広くやってる。」

「難しいことはいらぬ。ちよつとした気の持ちようで世界は変わる。」

逆にそれ以外特に必要ない。

「さあ踏み込んで来い、一歩を！」

「はあっ！」

受け身の姿勢だった今までと違って、今度はⅡの方から仕掛けてきた。ベムラーはそれらをしつかりと受け止め、組み伏せてみせる。

「ふんっ！せいっ！」

「確かに強力だが、単調だぞ！」

「・・・これが狙いだっただの？」

「ナンノコトカナ。」

こっちが防御側ということとは、それだけ対策を考えるのも楽だということ。押してダメなら引いてみるってな。

「『デスト・レイ』！」

「甘い！『青色熱光線』！」

それに熱線の威力なら負けていない。一皮むければ、姉とよく似て押せ押せの一辺倒に偏りやすい。流れは掴めてきている。

「それともう一つ、君には決定的な弱点がある。」

「なに、それは？」

「姉に頼りすぎだ。と言うか、無意識的に依存している。姉の妹離れも、妹の姉離れも

同時にしなきゃいけないな。」

「そんなことを言って、また惑わさせるの?!」

「それでもあるがあっ!」

キングジョーⅡが宙を舞っている。自らの飛行ではなく、相手に投げられて浮かんでいる。幼い見かけとは裏腹な重量級ボディに地面も砕ける。

「これでっ! トドメだあ!」

「アブナイ!Ⅱ——!」

プロレスから学んだエルボードロップで最後の一撃を加えんとするその時、キングジョーのタックルがベムラーを吹き飛ばしてその窮地を救った。

「大丈夫デスかⅡ?」

「はい……でもまだ行けます! やりたいです!」

「!Ⅱがやりタイなら、ソレでいいんデスよ!」

Ⅱが強く主張してきた。キングジョーにとつてそれは本当に久しぶりの感覚だった。この短い間で一回り大きくなったように見える。

(ヤツパリ参加してよかったデスね!)

「勝ちマスよⅡ!」

「はいっ!」

「『ツイン・デスト・レイ』!!」

もうこの時点で十分な収穫はあった。あとは勝利という果実をもぎ取るのみ!

「カウンセリングまでやったんだから、もうちよつと手心とか加えてくれてもいいじゃないか?」

「それとこれとは話が別。」

「お前は一体どっちの味方だ。」

2人なら威力は2倍! いやさ2乗で4倍! ゼットンもシャッターで防ぐのを早々に諦め回避に移る。

「そりゃあっ!」

「ぐううう……っ! お前らには血も涙もないのか。」

「私たちは涙を流しません、ロボットですから。」

「うまいことを言うなっ。」

IIのロケット頭突きをくらつてもんどりうつて倒れ込むベムラー。またゼットンと分断されてしまい、不利な戦いを強いられる。

(今まで戦ってきた中で、有利だった戦いも無いが、これは辛い……やはりゼットンに頼るしかない……。)

決してベムラーが弱いんじゃない。キングジョーが強すぎるのだ。



そしてそのキングジョーはというと……。

「ヤハリ強いデスねゼットン……。」

「まだ奥の手があるんじゃないの、あなたは？」

「フフツ、やはり気づいていまシタか……。」

「では、ソロソロ決めさせてもらいまショウか？」

不敵に笑ったキングジョーは、ランチャーのカバーを外して中のスイッチを押す。

「乙女の魅力、もっと磨いちゃいマスよ？ 『テンペリング』!!」

爆発、そうとしか言いようのない熱波がその瞬間破裂する。胸の発光機関が限界まで出力を高め、玉虫色の心臓が脈動する。

獣殻シエルは高熱の炉に晒されたように真っ赤に染まり、見る者との間に陽炎のヴェールを作る。その向こうで目に見えないような化学反応が起こり、最強のスーパーロボットは進化する。

やがて反応が終わり、急速冷却によって獣殻は『黒』に染まる。

「……。」

「これは……さすがにマズいか……。」

「お姉さま……。」

ゆつくり……と、その瞼は開かれ、生まれ変わって初めての光が瞳に差し込む。

「……どうデスカ？ケッコー似合ってマセン？黒ですよ黒！これからは『キングジョーブラック』と呼んでくだサイね！」

「見た目は変わってもキャラは変わらないんだな。」

「強さはマシマシデスよ!!」

焼き入れによつて高耐久のボディを手に入れたキングジョーブラックなら、ペダニウムランチャーのさらなる高出力での照射が可能になった！

「サラにこんなことダツて……『ペダニウム……ハリケエエエエエ』!!」

「ぐおおつ……なんてメチャクチャな！」

ランチャーを真横に向けて発射しながら、グルグルと独楽のようにまわり、ビームを拡散する。まさに地獄のメリーゴーラウンド。

「これでトドメですー！」

「くっ……まだ、もう一発『青色熱光線』！」

ベムラーの直上から、IIが錐揉み回転しつつ高速で突撃してくる。その回転圧力に、熱光線も弾かれてあらぬ方向へと飛んでいく。

「おおおおおおお……りやあああああああああ!!!」

「ぐううう……もう……負けないっ!! 『コークスクリュー・クラッシュ』！」

「ぐわあああああああつ!!」

『ベムラーさん!!』

大きな土煙の中、金色のボディが飛び去って行く。徐々に晴れていく帳の向こうには、ベムラーが倒れ伏しているだけだった。

## 金と黒の戦い④

『ベムラー選手撃沈！残る壁はあと一人、されどその一人が物凄く高い！』

「どうしマス、ゼットン？降参スルなら今の内デスよ？」

「降りる気なんて、さらさらない。」

「デハ、フルボッコデース！」

キングジョーは死刑宣告と共にランチャーを振りかぶって銃身で叩きつける。が、それはゼットンのガードに防がれ、逆に手刀の反撃を受ける。

「お姉さま！」

「II！ナイスアシストデース！」

2対1の挟まれた形でゼットンは攻防を繰り返すが、背中に目があるかのようにそれら全てをさばき、逆に防御をかわして攻撃を的確に打ちこんでいる。

『やっぱ全部ゼットン一人でいいんじゃないかな？』

『そんなことはないよ、きつと・・・たぶん・・・おそらく。』

「聞こえてるぞ少年よ。」

やられて一旦アリーナの端に移動させられたベムラーさんが呟く。悔しいが、これ以

上自分に出来ることはない。だがやることはやった、あとは果報を寝て待つだけだ。あの子にあんな風に言われてしまっているのは少々癪だが。

「ムウ……さすがゼットン、全くへこたれてないデスね。」

「まだ勝機はあるから。」

「やる気満々デスね！こつちだつてノリノリデスからね！」

キングジョー2人は同時にバックステップすると、その中間へ目がけてデスト・レイを同時に放つ。が、それもゼットンにはシャッターで防がれる。

「II！ココはお願いしマス！」

「はいっ！」

土煙の向こうからの接近を警戒して身構えるゼットンの眼前に、IIの鉄拳が迫る。キングジョーは少し距離を置いて、IIはその間ゼットンの気を引き続ける。

『『こつち』の試射はマダでしたが、今テストを始めまシヨウか。マズは10%、イヤ20%……30%、いや40%……やっぱり50%……。やっぱ……70、いや80%にしまシヨウ。』

そう言うって目を輝かせながら、ランチャーからコードを伸ばすと、腰のジョイントに接続する。

「エネルギー、チャンバー内で正常に加圧中。ライフリング回転開始……。」

これまでとは違った音を立てながら、ランチャーが拍動を始める。キングジョーも新しい家電を試すようなワクワクとした心持だ。

『あつ、キングジョーさん『アレ』試すのかな?』

『アレって?』

『・・・バリアが保つといいんだけど。』

歓声の片隅でシンジはそそくさと地下へと避難、もといラボへと報告に向かった。多分、大丈夫だと思うが、念のため、バリアの補佐へ向かったのだ。

(これ私も逃げた方がいいんじゃないか。)

「ちらっ。」

(わかってる、パートナーを置いて逃げるわけにはいかないもんな。)

たとえどんな攻撃が来ようとも負けるはずがない。なにせ私が選んだパートナーなのだから。

「アタック。」

「くっ・・・やっぱ強い!」

現に今、ゼットンIIを圧倒し続けている。むしろIIの方がゼットンに喰らいついていつているという方が正しいか。キングジョーの『とっておき』のために精一杯時間を稼げているのだから、この場合IIの方こそ優勢というべきか。

「ヨシー！エネルギー充填完了！Ⅱ！」

「はいっ！」

「……」

キングジョーの声を合図に、Ⅱがタツクルでゼットンの脚を止める。そこへ目がけて奇怪な音を立てるランチャーの照準があわせられる。

「シアー解放、『ハイパーペダニウムバスター』！いっけえええええ！！」

射撃、砲撃というにはあまりにも重すぎるエネルギーの津波。それがたつたひとりの怪獣娘に目がけて放たれる。

『すごい光?!』

『いくらなんでもこれはやりすぎじゃないですか?!』

「サングラス持ってきておいてよかった。」

観客席にいたアギラたちもその光景に目と視界を奪われる。眩しすぎて何も見えな  
い。辛うじてなにかがぶつかつたかのような音は聞こえたが。

「クウウ……反動がスゴいデスね……。ちゃんと狙えなかつたデス。」

徐々に視力が戻ってきたころ、ゼットンがシャッターを張って防御していたのが見え  
た。が、それ以上に目を引いたのは、その周囲の有様だった。

『な、なんとお！キングジョー選手の放った一撃で、アリーナの壁や地面が大きく破壊

されてしまったあ!」

『挟られたというよりも、融解してしまったというべきでしょうね。』

ゼットンがいた場所以外の岩や土は高熱で真つ赤なマグマになり、グツグツとシチューのように沸騰し、キングジョーの威力を物語っている。

「ヤハリ、銃身を切り詰めすぎマシたか……こうなったら、 $\Pi$ !手伝ってください!」

「はい!」

呼ばれた $\Pi$ も、追加のコードを腰のジョイントに挿し込む。

「エネルギーの逆流があるかもしれない、オーバーロードに注意してください。」

「わかりました、タイミングは私に、トリガーはそちらに。」

「OK!」

粛々と、第二波の用意が進められていく。その間ゼットンはなにをしているのかっという、何をするわけでもなく、ただじつとその様子を窺っていた。

「チャージ……完了。」

「あいつもやる気だな……。」

そうではない。ゼットンもまた大技の準備に入っていたのだ。ゼットンが個人で持つ中では、最大級の大技。

「撃ちあいデスか……もらいまシタね!」



対するキングジョーの方は2人。2人なら威力は二乗の4倍になる！

「シアアの解放、いつでも撃てます！」

「パワー120%で行きマスよ！」

充填されたエネルギーが解放の時を待ち望んでいる。その源であるⅡの心に、もはや迷いは一切ない。あるのは勝利への渴望のみ。それを盤石なものにせんと、キングジョーはしっかりと照準を支える。

「『ペダニウムハリケーン』！当たれええええええええええ！！」

放たれた光は尾を引いて、大気を焦がしながらゼットンへと肉薄する。

『トリリオン・バースト』．．．！』

小さく呪文を唱えるように名前を呼んで、小さく圧縮された太陽を放つ。

互いの必殺技がぶつかり合い、衝撃でまた地面が大きくひっくり返る。その驚天動地の光景は、恐ろしくも美しさを秘め、誰もが目を離さずにいた。

「クツ．．．まだマダ．．．！Ⅱ！気張れマスか?!」

「はい！回路直結させます！」

ランチャーへとエネルギーが矢継ぎ早に注ぎ込まれ、光線は威力を増していく。砲身が焼け付きそうになって悲鳴を上げているが、どうせ試作品だから思い切つて使いつぶす。後で一緒に作つてくれた友達が泣きを見そうだが。

『キングジョー選手とⅡ選手、なお勢いが止まらない！対するゼットン選手は不動で貫録を見せつけている！』

『火球は一度放つてしまうと、後から継ぎ足しが出来ないのでからねえ。』

まあゼットンほどの技量なら、火球で火球を後ろから押すことぐらい余裕だろうけど。それをしないのは、さらなる策を巡らせているからということ。

『あれは、『吸収』を考えているのか？』

『力で押し切るよりも、カウンターを選んだようね。』

『なんでそこでオレを見る？』

『さあ、誰かさんと違つて彼女は頭も廻るようだつてね。』

『オレだつてそれぐらい考えつくわい！実際今もそう思つてただろ！』

もはやお馴染みと化した漫才はさておき。レッドキングたちの推測も当たつていた。ゼットンが持つ最大の能力の一つ、『光線吸収能力』。ありとあらゆるエネルギーを吸収し、反射することができる。まさに攻防一体の最強の『矛と盾』である。

『でもあれを吸いきれるかどうかは別ね。』

『シャッターでも防ぎきれないだろうしな。』

一兆度の火球は寿命が尽きる寸前の恒星のように膨張を始めていた。燃え尽きるのも時間の問題だろう。

「火球を破ったら、パワー全開で行きマスよ！」

「はいっ！」

その兆候にキングジョーは勝利を確信した。こちらにはまだ余裕がある。とすると、ここは押し切るよりもタイミングを待つのが得策だ。

「焦らず、慎重に、獲物に悟られぬよう慎重に糸を手繰るヨーに……。」

ブレる照準をしっかりと正し、冷却機能やチャンバーの様子を確認する。戦い方は大雑把でも、こういう精密な作業はキングジョーも得意だ。怪獣娘として生まれ持ったコンピュータを動員し、着実に処理をこなしていく。おかげで非常に安定したまま、最終局面まで保っていている。

『おおっとお！ゼットン選手の一兆度の火球が崩壊を始めている！これは勝負あったかあ?!』

『まるで超新星爆発のようですねえ、学術的価値も高いかもしれません。』

ざわざわと観客席も賑やかになってきていた。無敵を誇っていたゼットンと、その必殺技が破られようとしている。これは本家大怪獣ファイトでもなかなかお目に掛かれ

ない珍事だ。

『おおおお!?これ行つちやうんじやない?!』

『いやまさか、アイツがこんな簡単に終わるはずがないぜ。』

「その通り。」

火球が限界を迎え、針を刺された風船のように脆くも崩れ始めた。

「今デス！」

「リミッター解放！」

この機に乗ぜよとキングジョーは発破をかけ、IIもそれに応える。裏抜く光は霧散する火の粉を吹き飛ばして、標的を射止めんとする。

「貰いました！」

「そうかな？」

「エツ?!」

「何っ!？」

キングジョーたちが勝利を確信したその時、視界の外、それも直上からの衝撃に驚きの声を挙げる。

「では、2個目はどうか？」

再びの落下物。ここにきてやっとその正体を掴めた。

「コノ青い光ハ・・・まさか?!」

「これだよこれ!これこそが探偵役のイメージ!」

数刻前のⅡとの戦いの時、弾かれていた青色熱光線は全て上方向へと反らされており、それらが今になって雨となつて落ちてきていたのであった!

「これぞ宇宙的悪魔の流星雨、『ベム・ザッパー』だ。」

勿論超合金の装甲に身を包んだ宇宙ロボット2人にはこの程度の威力は屁のつつぱりにもならない。ただほんの少し銃口の向きがブレただけだった。

「で、これでいい?」

「十分。」

沸点を外して波が和らいだペダニウムの光は黒い女神に容易く受け止められる。し

かしこのチャンスもビームも掴めたのは、このサポートあってこそだと表情には出さないが心から感謝した。

「……っ！第三射、行きます！」

「Ⅱ！無理をシテは！」

『ゼットンファイナルビーム』……！』

かつて光の巨人をも打倒した波状光線を前にして、なおもⅡの闘志は揺るがない。むしろ姉の方が気圧されるほどであった。

『ぶっかるぞー！』

「ぶっけるぞー！」

その瞬間、本日最大級の衝撃波がアリーナを襲った。バリアーは最大出力で稼働し、整備班が泣きを見る羽目になったのは言うまでもないが、誰もがその試合を目に焼きつけ、大いに満足できた。



「博士、さつきまでずっと寝てただけじゃないですか！」

「休憩をとるのも仕事の内だよ。全く日本人は働きづめでよくない。」

唯一例外な、やや肥満体な博士はヤレヤレとのん気にお菓子をお口に放り込みながらコーヒード喉の奥へ流し込んでいく。しかし明らかに摂取量過多に見えるのに、一向に太る様子もないということはそれだけ脳による代謝がいいということだろうか。

「ま、ちよつと休憩にしようか。シンジ君もどう？」

「んー・・・そうですね、せつかくですしちよつと頂いて行こうかな。」

「コーヒーなら、これ買ってきたよー。なんか上で流行ってるって！」

「またしゅわしゅわコーヒーか。」

いい加減飲み飽きていたところだけど、出されたからには飲むしかない。

「ところで、さつきの試合シンジ君はどっち応援してたの？」

「僕？僕はベムラーさんのことを。」

「あれ、シンちゃんキングジョーちゃんじゃなかったんだ。ランチャーのテスト手伝つてたんでしょ？」

「それはまあそうだけど、ベムラーさんにはいつもお世話なつてたから。」

「ふーん・・・。」



「シンちゃんって、ベムラーさんラブなんだ!」

その発言に、博士を除いた全員がコーヒーを吹いた。

「げっふえっふ……一応確認しておくけど、そのラブは、『Love』の『ラブ』なの?」

「それを言うなら、『Like』の『好き』じゃないっすか?」

「モチロン、L!O!V!E!だよだよ?」

憂鬱など吹き飛ばす若さを讃えるように体全体でLOVEのジェスチャーで示してくるが、シンジは返答に困った。

「いや、そりゃ好きは好きだけど……」

「やつぱりシンちゃんって、ああいう人がタイプだったんだね!」

「まあ、大人の方が好き、かな? いやそうじゃなくて……好きか嫌いかじゃなきゃダメなの?」

「YesかNoか、0か1しかない科学と違って、色々答えがあるのが人間の心というものだよ。」

「あーさすが博士いいこと言う。じゃ、そゆことで。」

「あー逃げた。」

「そりや逃げるよ。」

こりやたまらんとシンジは足早に研究室を後にする。

「とにかく、今回は滞りなく終えられそうだね。」

「そうっすね。さすがにこれ以上の衝撃なんて起こらないでしょうし。」

「でもさでもさ、ゼットンちゃん勝ち上っちゃったってことは、まだまだ戦うってことじゃない?」

「いやでもまさか……。」

そんな希望的観測を駄弁っていた、その時であった。

「?!何、この反応は!?!」

世界の終わりが口を開いた。

「強烈な……今まで見た事も無いようなマイナスエネルギーが発生してるっす!」

「その源は……太平洋!」

外の景色を映していたカメラを見るとにわかには暗くなってきていた。夜よりも深く、

黒い雲が空を覆い始めていた。

「ううむ・・・これはひよつとすると・・・。」

「博士、何か知ってるんすか？」

「一大事かもしれん。」

「どうやら、我々の出番のようだ。」

「・・・。」

いつからそこにいたのか、研究室の入口に二つの影が立っていた。

「き、君たちは?!」

「『ジェーン・ドウズ』？」

フードを目深に被ったキリエロイドと、赤いマントに身を包んだノーバである。

「・・・君たちが行つてくれるか？」

「ええ、さすがにこんな事態は想定外でしたが。」

「・・・『戦いごっこ』よりは楽しめそう。」

驚くラボメンバーをよそに、入ってきた2人は博士と会話を広げる。全てを承知したように。

「博士、この人たちと面識が？」

「まあ昔な。それより、勝算はあるのか？」

「ゼットンも連れていく。」

「なら安心だな。」

「えー！ゼットンちゃんまだ試合ある・・・ってか、ジェーンちゃんたちもこの次の試合じゃないの？」

「棄権する。元々乗り気ではなかったし、『目的』は十分に果たせた。」

「目的、とは？」

「秘密。」

詳細な位置情報を得ると、2人は振り返りもせず部屋を後にしようとする。

「・・・君たちが動いている、ということとは。」

「それ以上言っではいけない、博士。」

「知らない方が幸せなことが、この世にはたくさんあるから。」

言い聞かせるようにキリエロイド呟く。それをラボチームはただ見送った。

「知らない方が幸せ・・・か。俺たちは知るための努力をしているのだけれど。そう思っていた。だが大地には、その時即座に言い返すことが出来なかった。」

## 怪獣大進撃！①

「え、ゼットンさん棄権？」

「ええ、さつきジェーン・ドウズの2人も棄権したらいいですけど。」

「ゼットンさんに一体何が……。まさかアギの身に何か?!」

「ボクが、なに？」

「なんだ無事じゃん。」

「なにが？なんの？」

どうやらしゅわしゅわコーヒーは全部捌けたらしいアギラとウインダムと合流し、インターバルの時間を潰す。

対戦カード的には、次はガッツさんたちのジエミニイと件のジェーン・ドウズのはずだったが、そのジェーン・ドウズが棄権してしまつては自動的にジエミニイの不戦勝だ。で、さらにその次はAブロック準決勝のシンジとミクラスのミラクルナンバーズとベムラーとゼットンのブルースフィアのはずなのだが……。

「ベムラーさんも棄権するのかな？」

「そうじゃなくても、さつき戦ったばかりだもんねえ。まだ回復してないと思うけ

ど。」

「つてことは、アタシたちも不戦勝かな?じゃあ次は決勝じゃん!」

「決勝なあ・・・。」

「そうだよ!いよいよレッドキング先輩と戦えるんだー!」

まだ不戦勝と決まったわけでもないのに随分気が早い。それだけ興奮しているということだろう。

「シンジさん、どうかしたの?」

「ん、いやー大したことじゃないんだけど。」

「不安?」

「不安、つていうか・・・なんだろ。」

「釈然としない?」

「そう、多分それ。」

「どうしてー?ここまで来れたのはシンジさんのおかげじゃん!」

その言葉に余計に唸る。

「・・・なんとというか、場違いじゃない?」

「場違い?」

「だって、ルーキーファイターと『人間』だよ?」





のかもしれないけど、かえって傷つくよそういうの。なんか前にも言ったような気がするけど。」

「ぐぬぬ、そういうアギは菌に衣着せないよね。」

相変わらずこの寝ぼけ眼にはまるっとお見通しらしい。

「なんていうかもう、僕は目的達成しちゃった感があるんだよ・・・。」

「最初はゴモさんと戦うつもりだったのかな?」

「うん、ガッツさんたちとも戦えたらなーとか思ってたけど、決勝ではどうかな。」

「いやー、レッドキング先輩が勝つと思うけどなー?」

「それで燃えつきちゃったと。」

「うん、もうクタクタ。」

「そんなー、せっかくここまで来たのにー! 大会だって盛り上がってきたとこじゃない!」

「正直一番の盛り上がりを見せたところだと思う。」

「準々決勝まで来てチーム一つが抜けて、さらにゼットンさんまで抜けて、こっからどう盛り上がれど?」

「それにどうあったってどうせ最後は主人公のチームが勝つんだから!」

「何の話？」

「まあそれを含めて今精査してるんじゃないですか？」

「帰りたいなあ・・・。」

「もー！あとちよつとだからがんばってよ！」

「おうちかえる！」

結局、ゴネるシンジをさらにゴモラやベムラーまで動員して宥めるのに30分ほどかかったという。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「決勝はサバイバルマッチ？」

「そうでーす☆」

「バトルロイヤル形式か、考えたな。」

「えへへく照れちやいますよお♪」

「別にあなたが考えたわけじゃないでしょう？」

（盛り上がり欠けるからヤケクソになっただけじゃないの？）

不戦勝で勝ち上がったガッツたちを含めて、合計4チームの試合を同時に行おうというのだ。これなら一気に華やかさも出るし、一人だけになってしまったベムラーにもワ

ンチャンあるということだ。

「でもさー、合計7人って中途半端じゃない？」

「七人の侍とか、鋼鉄の七人とか7人はいいい数字だと思うけど？」

「けど、奇数だと誰か1人があぶれる形にもなるわね。」

「エレキングさん、そこはせめて1対2になるって言ってあげて。」

「相手が何人だろうと全部倒しやあいいのよ！」

「さすががっす先輩！力こそパワー！」

決勝進出者が一部屋に集まってピグモンからその説明を受けていた。今日はあまり顔をあわせなかった人もいるが、思えば残って然るべきというメンツが揃っていた。なぜかその場にミカもいるという点に目を瞑れば。

「はいはい！提案ていあーん！そこに敗者復活枠も入れない？」

「それせめて準々決勝敗退者に割くべきじゃない？」

「えー、だつてみんな『私はいいや』って言つてたよ？言質もとつたし。」

「手回すの早っ！さすがゴモたん！」

「はい許可しまーす☆」

「ピグモンさんも話はずや！」

「誰か異論ないの?？」

「誰が相手だろうと負けるつもりはないわ。」

(それ考え方レッドと同じなんじゃない?)

(マコさんも割と脳筋。)

なんやかんやで、決勝戦は8人になった。

「よかつたねシンジさん、これでやる気も出たでしょ? 戦いたいって思ってた相手と纏めて相手できるし!」

「こんなの纏めて相手にできるわけないでしょ! スイーツバイキングじゃないんだから。」

「えー、スイーツならいくらでもいけちゃうじゃん! シンジさん甘いのが好きでしょ?」

「好きは好きだけど、胃に穴が開くわ。ダイエツト中だし。」

「アンタ結構女々しいね。」

「女々しいってことはないでしょ? こないだの休みだってお店でレッドキングさんに……。」

「シンジイ!」

「はい? たわばっ!」

パコーンツとテニスボールが弾けるような軽快な音と共に、シンジの頭は壁に埋まった。

「これ場外乱闘じゃないの?」

「ジャツジ。」

「ああ!? すまんシンジ! やっちまった!」

「やれやれ・・・。」

この場面で一体誰が悪かったのかはさておき。

「それで、みなさんにはそれぞれ入場パフォーマンスをしてもらいまーす!」

「入場パフォーマンス?」

「プロレスのアレでしょ?」

「本当は決勝戦に進んだ2チームだけが用意するはずだったんですが、今回は全員にやってもらいまーす!」

「次の試合何分後だったっけ?」

「30分後でーす♪」

「無理じゃない?」

「それじゃ、がんばってくださいーい♪」

「いそげみんなあ!」

急に慌ただしくなってきた。上の急な方針転換に振り回されるのは現場の方だと実感させられた。

「これもうみんな一斉に手を繋いで入場した方が平和じゃないか？」

「そんな幼稚園のお遊戯会じゃないんですから。」

「アンタと手なんて絶対繋いでやらないんだからね！」

「地味にシヨックになるからやめて！」

シンジは、キャンプファイヤーのフォークダンスで、手を繋いだ女子に嫌そうな顔をされたのを思い出した。

☆☆

『さてご来場の皆さんに一つお知らせがあります。Bブロック2回戦第2試合に出場予定だったジェーン・ドウズが棄権し、また先ほどの試合で激闘を繰り広げたゼットン選手も棄権しました。それによって、この後予定されていたプログラムが変更となります。』

会場からはブーイングがあがる。

『というところで急遽予定を変更し、これより第一回大怪獣ファイト・タッグマッチトーナメント、決勝バトルロワイヤルを行います!!』

その落胆の声を押し返すように、強く大きなアナウンスが流れる。

グランドフィナーレを彩るアゲアゲなテンションのミュージックが弾かれる。まだ日暮れには早いというのに夜のような暗さの空の下、スポットライトを浴びて一番手の

入場局を任されたのはザンドリアスとノイズラーのバンド。

「いきなりこんな大舞台任せちゃっていいんですかー?!」

「いいともー!!」

『まずはこの方々! 予選9位通過! 大怪獣ファイト元祖チャンピオンと、GIRLS 調査部の麗しきお姉さま! レッドキング&エレキングの『R/L』!!』

「どつらあああああ!!」

『レッドキング』の文字がデカデカと描かれた壁を突き破つて、本人が登場する。

「・・・もつといいものが無かつたかしら?」

エレキングがその後ろを優々と歩きながら指を鳴らすと、パツとネオンが灯つて2人の入場を彩る。2人の性格やスタイルの違いが見て取れる。

『続いて、予選7位通過! 白と黒、表と裏のダブルフェイス! 常勝無敵の双子星! ガツツ星人姉妹の『ジエミニイ』!』

パパパツと会場の照明が落ち、代わりにスポットライトが6カ所を照らす。

「むんっ!」

「はっ!」

それぞれに白と黒のガツツ星人3人ずつがファッションモデルのようにポーズを決め、それらがまたパツと煙のように消えると、派手な花火の爆発と共にアリーナに

姿を見せる。

「なかなか決まったんじゃない？」

「こういう時能力があると便利ね。」

自分の能力をアピールしつつ、芸術的な演出も兼ね揃えた、まさに完璧なパフォーマンスである。

『次は期待の予選3位通過！今大会最大のワイルドカード！勝利の女神は微笑むのか・嵐渦巻くリングに、奇跡の勇者が生まれた！シンジとミク拉斯の『ミラクルナンバーズ』！』

他の選手よりも一言長い口上が綴られ、入場ゲートにライトが向けられる。

「ハイヨー！シルバー！」

「いつけえー!!」

そこから現れたのは、なんと馬。ライトの反射も眩しい白馬である。その鎧わぶみに足を乗せて、テンガロンハットとポンチョを纏ってウエスタン風の格好のシンジとミク拉斯が登場する。

「そーれ！サービスサービス！」

「ひゅーひゅー！なかなかキマってるじゃん！」

そのままアリーナを一周し、景気づけに空砲を放つとヒラリと馬から降り、バサツと



コスチュームを脱ぎ捨てる。お馬ちゃんはコスチュームを回収してゲートから帰っていく。おりこうさんめ。

『さて、次のチームの紹介の前に、もう一人！敗者復活枠！皆さんご存知、大怪獣ファイトの期待のルーキー！無限の可能性を秘めた人気者！その名は『古代怪獣ゴモラ』、『Gボーン』より逆転に賭けて！』

「体、ふわりと、夜空にく〜♪ってわわわわっつとぉ!」

「うわっしょおおおおおおい!!」

アリーナの中央で歌っていたザンドリアスの真下の地面が盛り上がり、そこからゴモラが叫びをあげながら登場する。哀れザンドリアスは夜空の星となった。曇ってるけど。

「あれ？マイク？あーあー!」

「歌ってただけなのにひどくないっすか?!」

『そしてトリを飾るのは、予選通過1位！まさかのハプニングにも、この人の闘志は揺るがない！果たして叶うか、単独優勝！『ブルースフィア』より『宇宙怪獣ベムラー』！』観客席のさらに上、天井か鉄の獣の唸り声こだまする。直射されればたちまち燃え上がりそうなほどの強烈な眼光が灯る。

「さあ、振り切るぜ!」

振り絞られたアクセルが一層強い雄叫びをあげ、黒一色に染められた空に跳び上がる。切り裂くような青い肢体を輝かせながら。

「ハッ！」

乱暴にランディングし、土煙をあげながらアリーナをひとしきり駆けまわると、スラリと伸びた脚を見せつけるように降車する。それに見とれたのは一人だけではあるまい。

「シンちゃん？」

「まだなんにもやってないでしょ！」

かくして、決勝戦進出者は出揃った。誰が勝つかは一転地六の賽の目次第、一回きりのこの瞬間への緊張感が高まる。

『それでは！大怪獣ファイトタッグマッチトーナメント決勝戦、レディイイイ……』

「うっしやあ！勝つのはオレたちだぜ！」

「ここにきて空回りしなければいいのだけれどね。」

「さて、さてさて、ここまで来ちゃったからには？」



## 怪獣大進撃！②

ゴングが鳴る10分ほど前に針を戻そう。

「エレ、お前の方はどうだ？」

「問題ないわ。チブルが用意してくれたわ。」

「だからそのポーズで腕はこう！」

「どっちでもいいじゃない。」

他のみんなはもう出し物が決まっているというのに、ウチの班はまだ形にもなっていない。

「シンちゃんミクちゃん、進捗どう？」

「全然、全く。」

「おうちかえりしたい。」

「んもー、またホームシック発動させちゃってー。」

「ゴモたんなんかいいアイデアなーいー？」

「んー、そうだなー、例えばシンちゃんを放り投げて入場するとか？」

「放り投げる意味は？」

「着地地点でキャッチしてワーみたいな。」

「おもしろそう!」

「却下でお願いします。」

入場パフオーマンズまでに命を賭けたくはない。

「やあ、どうした?」

「あつ、ベムラーさんおかえり。」

「どこ行つてたんです?」

「修理中だったマシンを受け取つてきた。」

「あれ、修理のために大会に参加してたんじゃ?」

「ローンだ。これで来年度の事務所の予算はゼロだ。来年度があればの話だが。」

「火の車かー。」

ヒーローがローンなんてなんとも世知辛い。

「まーたシンちゃんかホームシックなの!」

「やれやれ。シンジ君、お客さんが外で待ってるよ。ミクラスも。」

「お客さん?」

誰だろう?と見に行く2人を見送って。

「それで、あの子のホームシックについてひとつ、私にいい考えがあるんだが?」

「いい考え？」

「ああ、それにはここにいる全員の協力が必要になる。」

「アタシも？」

「なーに、悪い話じゃないさ。」

|||☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆|||

「おや、誰かと思つたら？」

「アギちゃんウインちゃん！」

「それにナツクルさんにチブルさんに、ゴルザさんにバリケーンさん？」

つまり、いると思つてた人全員。

「私たち、決勝に向けてお二人への最後の激励に来ましたのよ！」

「私たちから勝利を奪つたからには、しっかり戦つてくれないと困るしな。」

「せやでせや！こんなチャンス滅多に無いんやから、逃したらアカンで！」

「お前たちならきつとやれる。大怪獣ファイターの勘だ。」

「みんな……！ありがとね！」

「てつきりまたシンジさん怖気づいてるんじゃないかと思つてたけど？」

「いや……さすがにここまで言われちゃあ……やっぱりしつかり戦わないとダメだ

よねー！」

「お二人なら大丈夫ですよ！普段通りやれば！」

水道管も凍るようなガツチガチの氷点下の中で、暖かい毛布とコーヒーを与えられたような感覚だった。優しさが脊髄まで染み渡る。

「そういえば、パフオーマンズはもう決めたの？」

「そうだ、その問題があつたんだった！」

「何かアイディアとかは無いですか？」

「無いんだよー．．．どうしよつかない？」

うーん、と消沈する2人に対して、ゴルザが一步前へ出て提言する。

「じゃあ逆に聞こう、何ならやりたい？」

「逆に？」

「自分がやりたいことをやらなければ、結局納得のいく結果にも至らない。『納得』は全てにおいて優先する。」

「でもそう言われてもピンと来ないよ。」

「あんたら2人に共通することか、なんかあらへんの？」

「そういえば2人とも、マッスルマンが好きですよね？」

「マッスルマンの．．．何か！」

「あ、アタシあれやりたいな。ウエスタンのやつ！ちょうど前にカウボーイハット

貰つてたし！」

「じゃあ、私のポンチョ貸してやるよ。あとガンベルトも。」

お、いいぞ、話が進んできた。けど、恰好だけじゃ正直物足りない。

「バリケーンさん。」

「なんですか？」

「馬とか、持つてる？」

「いやそれはさすがに……。」

「いますわよ？」

「いるの?!」

「ちようど今朝江ノ島まで遠乗りに来ていましたの！すぐに呼んできますわ！」

お金持ちバンザイ。すぐさま10歳ほどの見事な白毛のサラブレッドがやってきた。

これに跨れたら、さぞかし痛快であろう。まるでローン・レンジャーになった気分だ。

「でもシンジさん、馬乗れるの？」

「アメリカ留学中に一通り覚えたから大丈夫。それにしても大人しい子だね。」

「この子は『流星号』ですわ！わたくしが子供の頃からの付き合いで、人にも慣れてますのよ。」

と、なんやかんやあつて準備は上手くいった。



「シンジさん、もう大丈夫なの?」

「うん。勇気凛々、パワーを貰っちゃったからね。それに、こんなに応援してくれってるんだもん、もう逃げるわけにはいかないよ。」

「おう!絶対勝つんだから!」

勝った者は、負けた者の想いを背負って戦う。それを今こうして、頭ではなく心で理解できた。

「・・・で、・・・というわけだ!」

「なるほど、そりゃいいかもな!そしたらよ・・・で、・・・だろ?」

「そういうことなら、やってあげてもいいわ?ただし、・・・の・・・は・・・アタシがやるから?」

「えー、それは私がやりたいなー!だってマコちゃん・・・でしょ?」

さて、控室に戻ったら、何やら全員が集まってひそひそ話をしていた。断片的に聞こえてくる内容から察するに悪巧みのようだ。

「あつ、シンちゃん帰ってきた。どう調子は?」

「えっ?別に悪くはないけど・・・。」

「よーし!じゃあハリキって行こうか!」

なにやら戦いの鐘ユンが鳴る前に、奇妙な同盟が結ばれたらしい。

う。このおかげで初っ端から地獄を見る羽目になるが、その顛末は4行ほど下から話そ

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「先手必勝！」

「うわっ！いきなり来た!!」

「貰った！」

「ちよっ、なんで全員こっち来るの?!」

正確には全員ではない。ゴモラ、ミコ・マコ、ベムラー、エレキングの5人が同時にシンジに向かってきた。

『おおっとシンジ選手、いきなり集中攻撃にあっているぞお!』

「喰らいなさい！」

「あでえ！助けてミクさん！」

「来いミクラス！お前の実力見せてみるお！」

「はい先輩イ！」

「うわあああああ!!」

パートナーはあっさりとレッドキングの挑発に乗って一人で行ってしまっし。せつかくやる気になっていたというのに、これじゃあ逃げ出したくもなる。

「教えてください、僕がなにをしたって言うんですか?！」

「集中攻撃を受けて必死になれば、ホームシックのことなど忘れるだろう。つてベムラーさんが。」

「これが大人のやることかよ！」

「名案だと思っただが。」

「たつた今帰りたくなつたわ！」

シンジは涙を流しながら背中に目が付いているんじゃないかと思いたくなるほどの機敏さで猛攻を逃げ回る。こんな塩展開には観客もブーイング。

『がんばってくださいシンジさん!』

『勝負はまだ一回の表でしてよー!』

「一回の時点で既に濃霧でコールド試合寸前だわ!!」

「ちよこまかと逃げ回ってんじやないわよっ!」

「うひー!!」

身を翻して横に転がると、さっきまで眼前にあつた岩が砕け散つた。

「そこお!」

「このつ．．．!やられてばつかだと思ふなよ!」

着地の隙をついてミコがパンチを繰り返して来る。が、シンジこれを掴んで背負い投

げで返す。

「それー!」

「なんのっ!」

続いてゴモラが突進してくるので、ローリングソバットで打ち返す。

「さすがだよシンジ君、獅子奮迅だね!」

「正直、ベムラーさんとはあんまり戦いたくない。」

「だろ。誰が君に技を教えたと思ってる?」

お互いに距離を測りつつ、出方を窺うように構える。

「もらった!」

「おっと!させない!」

今度はマコが殴りかかってきた。返す手で頭を掴むと、そのまま自分の額をぶつけて頭突き、さらに怯んだ隙にココナツクラッシュを喰らわせて切り抜ける。

「今ならどうかかな?」

「狙ってたと思えない!」

「まあな!」

そもそも、この状況自体がベムラーさんの仕組んだシナリオだと思えない。確実に一人を狙わせられる、有利な流れを築きたかったと考えれば筋が通る。さすが探偵口

が上手い。

「じゃあ予言しよう、ベムラーさんはまず……左腕で来る!」

「正解だ!」

左腕を折り曲げ、肘を突き出す形で向かってくる。ただの肘打ちか?と侮ってはいけない。相手は1000の技を持つと自負しているベムラーだ。

「下? いや正面か!」

「考えていたら当たるぞ!」

肘ではなく、バネの力ではじき出した裏拳が狙いか。両手で顎を守ると、すぐさま手を下へ降ろす。そこで膝蹴りが待っているからだ。

「ほう、やるな?」

「お生憎様、手の内読めてるのはお互い様なんで!」

「そうかい? では、これはどうかな?」

不敵な笑みを浮かべるベムラーの表情に、思わずジリツと身構える。どんな些細な動きも見逃さないよう、じっと目を凝らす。

「……ふっ。」

「なっ、につ?!」

それが命取りだった。瞬きしたほんの一瞬のうちにベムラーは視界から消え失せ、冷

や汗を流したその時にはわき腹にシヨックを受けていた。

「ぐっ……こんな単純な手に……。」

「だから上手くいくんだよ。」

とつさに横転することで距離をとりつつ衝撃を受け流して悶える。やっぱりこの人は一筋縄ではいかないと溜め息の一つもつきたくなくなるが、代わりに出るのは血の匂いの混じった咳がひとつ。

「そこで倒れていたら私なら見逃すけど?」

「冗談!」

「甘いッ。」

両腕で地面を叩いて、体を反転させながら言い返す。が、ベムラーはその単調な蹴りを掴んで身体を一回転させて叩きつけ返す。見事なドラゴンスクリューだ。

「まだいくぞお!」

「うおっ!」

その足を掴んだままグルグルとジャイアントスイングにつなげる。シンジは三半規管と脳みそをシェイクされて、判断力を喪う。

「あつ、いっけね。」

その時、シンジは無意識に手に掴んでいたものを握りしめていた。それは温かく、柔

らかった。

「ん……これはいったい?」

虚ろな意識が現実に戻ってくるまで、それが一体なんなのかを確かめるように探りをいれていた。

「なんだか……すごく心が落ち着くような……。」

そしてどこか懐かしくもある。世界のどこかに必ずあるが、誰もその場所を知らないという桃源郷。それが今まさにここにあると思えた。出来るならずっとここにいたい。

だがそれは叶わない願いだと今自覚した。

「はっ、まさか、これは?」

「そのまさか、よー!」

顔を上げれば調査部の先輩のクワイ顔。どこに自分の頭を埋めていたのかは言うまでもない。

「この……俗物がツ!!」

「ごおお……ツ!!」

エレキングさん、無慈悲な膝蹴り。得意のムチや電撃でもなく、膝蹴り。それも急所への全身全霊の怒りの籠った、常人とは比べ物にならないパワーを持つ怪獣娘の。

いやー考えたくもない。

「この・・・痴れ者！俗物！阿呆陀羅！」あほうだら

「んもー！こんな時にまで何考えてんのさこのスケベー！」

「サイテー！女の敵！恥知らず！」

エレキングの強烈なストンピングに、ゴモラとマコも続く。この3人は他のメンツに比べてシンジへの好感度が実は高かったりする。

「僕がなにしたって言うんだ・・・。」

「あなたは生きていることが罪なのよ。」

「死んで詫びな！」

「そこまでは言わないけど反省しろー！スケベー！」

「不可抗力なのに！」

這う這うの体で逃れようとするシンジに追い打ちがかけられる。もはや乱闘ではなくリンチの様相。

「これも作戦のうちなわけなんですか？」

「違う、とだけ言っておこう。」

まさかここまでの包囲攻撃になるとはベムラーすらも予測していなかった。彼の普段の行いと、混戦による不確定要素、そして大舞台特有のバッドラックが化学反応を起こしたのだった。



これだから勝負というのは面白い!

「お前のパートナーメチャクチャやられてるけどいいのか?」

「大丈夫ですよ! なんとたつてアタシのパートナーですから!」

「パートナーを信頼するその意気やよし!」

「お願いだから助けて!」

## 怪獣大進撃！③

「い・い・か・げ・ん・に、しろーっ！」

どわーっ！と包围を跳ねのけ、目をかっぴらいて威嚇する。

「もういいかげんに怒ったぞ！こっから本当の地獄を見せておうっ。」

「スキあり。」

「わー。」

これで何回目のダウンだったか、観客はもはや数えることすら放棄している。原作のストックの問題でアニメの方が1話1話が引き伸ばされた結果、ヒロインが筋肉モリモリのゴリマッチョにボコボコにされ続けるだけで1話が終わった事態もあるが、今回のこれはそんな需要もないだろう。ないだろう？

「うそつけー、エレちゃんに踏まれて実は喜んでるくせにこのー。」

「してねーよ！」

「そうでなくとも私は楽しいからいいの。」

「よくねーよ！」

「ほ？先輩にそんな口叩いていいのかしら？」

「うぎゃー!」

「もう、いい加減止めてあげた方がいいんじゃない?」

「あー・・・そうだな。」

静観、というか手出し不能で傍観していたベムラーとミカも、さすがにいいかげん可哀そうだと気づいて止めに入る。

「はいはい女王様、お楽しみはプライベートでやろうね?」

「ほらマコも、あんまし怖い顔しているとシワが増えるよ?」

なんとか引きはがされ、宥められると蹴っていた人物たちは大人しくなり、いぢめているのはゴモラだけになった。

「いやゴモたんもだよ。」

「ちえー。」

あとには干物のようにのされたシンジがだけが残った。

「うつがー!!今度こそ本当の本当に、怒ったぞー!!お前ら全員纏めて相手してやらー!」

「えっ、いいの?」

「眼を輝かすな。」

「けどまあ、大きくでたもんだね?」

「5人に勝てるわけがないでしょうに。」

「また人さまの力をお借りするの？」

「うるさーい！そっちだって5人だろうが！別に1の力を5分割しているわけでもないだろうに！」

やいのやいの言いながら、こちらは手札を一枚切る。さつき出来たばかりで、誰も知らない力だ。

『『モンスライド・ナツクル星人』！』

右手には白の、左手には黒の拳銃が握られ、交差させて×字を作る。

『『ナツクルサイト』！ガツチャ！』

最後に両目に赤いレンズのついたバイザーが装着され、キラリと光る。

「なるほど、さつき戦ったばかりのナツクル星人の力というわけね。」

「銃使ってたもんね。どんな力かは想像つくよ。」

「そう、なら戦う勇氣ある？」

「なら私はあっちに行こう。」

「あれ？ベムラーさん行っちゃうの？」

「じゃあアタシもあっち行くわ。いい加減あっちを2人つきりにしておくのもバトルロイヤルとしてどうかと思しね。」

「ガツちゃんも?」

散々場を荒らしてからのならりくらりと逃れていったようにも見えるがさておき。

(さて、上手く扱えるかな? 相性はいいはずなんだけど。)

「考え事ができるなんて余裕みたいだねー?!」

「どうやってやってやってやろうか考えてただけー!」

「獲物を前に舌なめずりなんて、三流のやることよ!」

「熱い三流なら上等よ!」

「アンタ、凍らすよ?」

一番情け容赦のない攻撃が死角から飛んでくる。まだ怒ってんのかな。

「ばーん。」

「くっ?!」

けど、頭が知覚するよりも先に手は動いている。昆虫の複眼の様な丸いバイザーが、周囲360度ぐるっと見張ってくれている。

「おー、エレちゃんの奇襲をしのいだ?」

「反撃開始さ! ハイキャモン!」

「ただでウエスタンかぶれしてんのよ。」

指先でクルクルと巧みに操るガンプレイを魅せながら、軽く挑発を決める。コワイ先

輩に一泡吹かせられたらなんだか調子が付いてきたらしい。今なら負ける気がしない。もう何も怖くない。

「川の様子でも見てくりやいいじゃん！」

「なんか雨降りそうだよね！」

「ご飯食べに行こうよー！」

「もう夜だしね！」

「この戦いが終わったらあなたに言いたいことがあるの。」

「今すぐ言つて。」

「あなたが好きよ。」

「えっ、マジ？」

「冗談よ。」

「ギヤース！」

ダメだった。ハニートラップにすぐひつかかるのも、ガンマンキャラっぽいのか？  
一体どういうアメリカ観をしているのか。

『すぐ調子乗るんはナツコナツックルと同じやな。』

『私がいつ調子に乗った？』

『だってナツコよく食事連れてってくれるやん？』



「全く、賞金に目がくらんだ自分を殴ってやりたいよ。」

「そんなこと言つて、ベムラーさんも結構ノリノリじゃん？」

「ふっ。」

可能な限り荒事は避け、必要最低限の出費に抑えるのがベムラーの定石だったが、今のこの状況はまるで逆を行っている。しかし不快感などは一切ない。むしろすすきりとした、開放感すらある。

(どうやら、自分が怪獣娘だということを今まで忘れていたようだな。)

心は大人になったつもりでも、本能は闘争を求めていた。これが街中の、人を巻き込むような危うい状況だったならばいざ知らず、元々怪獣娘たちのフラストレーションを発散するための舞台である『試合』の中なのであれば一切関係はない。思いつきり暴れてやればいいのさ。

「そう考えたら、ローン生活を強いられている事にだんだん腹が立つてきたな。」

「だから？」

「お前ら全員ぶつ倒して賞金をイタダキだー！」

「ゼットン無しで？つていうかそもそも、ゼットンはどこいったんだよ？」

「あいつも今戦つてる。自分の戦場で。」

太平洋上に出現した、謎の暗黒エネルギーと、その発生源を調査・排除するためにゼツ



トンはわずかな仲間を連れて飛んだ。

「そのゼットン無しで、どこまで戦えるのかなー?」

「見くびつてくれちゃ困る、たとえこの場にはいなくとも、あいつは私の相棒パティだ。その相棒が帰ってくる場所を、私は全力で守るぞ。」

「てことは、ゼットンも用事が済んだら帰ってくるてこと?」

「ゼットンはそう言った。だから私も信じる。仲間だから。」

正直なところ、ゼットンを送った現場は壮絶な状況に置かれていると思われる。根拠は怪獣娘の勘と、探偵の勘だ。本当に相棒を名乗るのだったら、ゼットンについていくべきだった。

『あなたは、試合に出て。』

『私も、すぐ戻るから。』

ゼットンは任せ、そして信じた。自分の相棒が勝って、一緒に優勝杯を掲げられることを。

「随分買いかぶられたものだな!」

「なにが?」

「負けられないってことだ！」

もしゼットンがここまで読んでいたとするならば、彼女をパートナーに選んださすが私と褒めてやりたいところだ。そんな完璧な私なら、この状況もどうということはないと鼓舞する。

「それに、向こうはもつとひどいみたいだし。」

「あらホント。また囲まれてる・・・けど、意外と善戦してない？」

「逆境に強いからなあの子。」

パンパンと軽快な花火のようにマズルフラツシユが煌めいているのが見える。一見すると踊っているようにも見えるが、周囲を囲む三人は距離を測りかねているようだった。

「追い込まれた狐はジャツカルよりも凶暴と聞くわね。」

「どつちかって言うのとハンターはこつちの領分なんだけど？」

「狩る側に回らなきゃ始まらないわよ？」

「うっしっしー、シンちゃんをどう料理してあげようか？」

「獲物を前にしての舌なめずりは三流の・・・いや、さつき言ったわね。」

幼馴染同士考え方も似るのかしら？とエレキングは軽く思考しつつ、シンジの出方を窺う。

(彼にとつての一番の『敵』は、この『状況』そのものね。)

誰と相性が悪いとか、どういう攻撃に對して弱いとかではなく、今自然と出来上がっているこの3vs1の構図にこそ対処しなければならぬ、とまずは思い当たる。

(ゴモラはそんなに深くは考えていないだろうし、ガッツ星人もこの状況を利用しようとは思っているはず・・・なにか思うところはあるみたいだけれど。)

さらに言うと、ゴモラがまず突進して、その後にガッツ星人とエレキングがカバーに入る形になり、自然とコンビネーションも出来ている。なお、その状態でシンジがひたすら守りに徹していられるのは、普段の付き合いである程度手の内を把握できているおかげだ。

「手がもう一本欲しい。」

「ネコの手も借りたい?」

「え、アギちゃんが欲しい?あげないよ?」

「アギはネコ、わかる。」

『なんでさ。』

「縁側でお茶を啜る生態なんてまんまネコだし。」

「一家に一台欲しい。」

「わかりみ。」

『んもー!』

ただ、普通の3 vs 1の構図なら、一人が囿役として動きを封じて、残りの2人がトドメをさせば済む話なのだけれど、今回はあくまでバトルロイヤル。出来れば自分も隙を晒すような真似をしたくないし、次に自分が狙われることになるのでそんな虚をつく姿を他の人物にもあまり見せたくない。シンジにとつての抜け目はそこにある。

「何か考えがあるようね?」

「そう思います?」

「あなたがあまりにも楽しそうな顔をしてたから。」

さて、賢いエレキングさんはこう考えた。何か仕掛けてくるのはわかるけど、なにをしてくるかまではわからない。彼の考えることだから、きつとろくでもない事おどろくようなに違いない。ならば最適解ベストよりも最善解ベターを選ぶのがいい。

そういう時はどうするか?

「シツ! 捕った!」

「おつとお?!」

「エレちゃんナイス!」

「これで・・・おしまいッ!」

エレキングがムチで片手を封じ、そこでガッツが腕を十字に組み、そこから生み出し

た十字架のような透明な檻がシンジを捕えに大口を開ける。

「その技、いただいた!」

「んっ?!」

腕に絡まるムチを巻き取り、バツとエレキングを十字架の檻へと放り投げる。突然の坑道に呆気にとられるガッツ星人の視界の、その死角を縫って手に持った銃を組み替えながら距離を詰める。

「目には目を、歯には歯を、十字架には十字架を!」

ガッツ星人のそれとは少し異なる、X字型の十字架。これもナツクル星人特有のものだ。

「これを・・・キャプチャーシュート!!」

「しまっ?!」

ブーメランのように投げられた十字架からチェーン光線が発せられ、たちまちガッツ星人の手足を拘束する。

「ぐへへ、捕まえたぜ!」

「うわっ。」

「うわっ。」

「うわっ。」

「特に他意はない！そしてすかさず畳みかける！」

恥も外聞もかなくなり捨てて、クラウチングスタートの要領でガッツ星人の足を掴む。『シンジ選手、磔刑状態のガッツ選手をリフトアップして跳び上がったあ！』そこからの組み立ては極々シンプル。

『『クルシフィクション・ドライバー』!!』

パイルドライバーの要領でガッツ星人を脳天から叩き落す。

「ガッチャーん、大丈夫？」

「……今……」

「……」

「今アンタ、わざと投げられた、よね？」

呻きのひとつも上げないガッツだったが、その怒りの矛先はエレキングへと向く。

「別にわざと受けたわけじゃないわ。」

「じゃあ本気で一杯食わされたのかしら？あんなに調子こいておいて。」

「まーまーまー、ガッチャーんもエレちゃんもスマイルスマイル？」

「スマイルもなにも、バトルロイヤルでなんで和やかムードになってんのさ！ずっと言いたかったけど！」

険悪ムード、一触即発な空気が流れ始めた時、視界の外から横槍が飛んでくる。

「そいやっ!」

「あら?」

「白い方のガツちゃん!」

「なんなのその呼び方・・・?って、そうよそうよ、もっとバトルしなさいよ!」

「シンジもそうだそうだと書いています。」

やんわりと諫めるように、それでいて何か狙いがあるようにミコは促す。少し間があつて、マコも追従するように向き直る。

「さーて、ここはうちの相棒に土つけてくれたシンジ君に痛い目見てもらいたいところだけど。」

「フアツ!」

「けど、どうやらマコはエレキングこつちのほうにお熱のようね。」

「あら、それは困ったわね。」

表情こそ眉ひとつ動かさないが、内心では小さく舌打ちして達観する。ハズレくじをガツツ星人に引かせようとしたが、ババは自分が引いてしまったらしい。

「へっへー! まだまだ甘えぞミクラス! あでっ。」

「あなたも、少しは試合に参加しなさいよ。」

「だからって味方を殴ることあねえだろ?」

「一番の敵はおバカな味方なのよ。」

「誰がおバカだつて？」

「自覚あるのなら自制なさい。ほら、くるわよ。」

「おつとお！今度はお前らが相手だな！」

心の底から戦いを楽しんでいるレッドキングとは対照的に、自分の役割に注力する。

「やっぱり、私は戦闘タイプじゃないわね。」

「またそれかよ、お前も十分強いくせに。ドラアッ！」

だからその分頭に正しい使い方をさせているの。あなたのようなただの鈍器とは違つてね。



## 怪獣娘はじめます①

さて、片やGIRLS屈指の実力派なレッドキングとエレキング。片やGIRLSが誇るワーカーホリックエリート、ガッツ星人の姉妹。どっちが勝つだろうか？観客席の意見を聞いてみた。

「やっぱりガッツかなー、レッドキング先輩も勿論すごいんだけど、ガッツはすごいんだよ？」

「やはりガッツさん、でしょうか・・・なぜかあの人と向き合うと寒気がするんです・・・。」

「そりゃーガッツさんも強いと思うけどさー、ししよーはもつと強いと思うから。」

「レッドキング先輩とガッツさんかあ・・・ここはレッドキング先輩で！」

「エレキング先輩、がんばってー!!」

「が、がんばってくださーい！」

SNSなどによるアンケートの結果は、レッドキング・ガッツの比率が6：4ぐらい。一般人にはガッツ星人の活躍はあまり知られていないので、ややレッドキングの方が票を集めたというところだろうか。

『ガッツ星人さんペアは、圧勝だったり不戦勝だったりで実力の全容が明らかになつていない点も見逃せませんね。』

『つまりどっちが勝つてもおかしくないぞお！』

「へっ、勝つのは断然オレだつての！」

「あんまり熱くなりすぎないで頂戴？」

「ちようどいいわ、まずはアンタらから始末してあげるわ！」

（やっぱこの子も脳筋よね。）

相性がよかったのだろう、レッドキングとマコが率先して戦い始めた。結局準決勝のカードになってしまっているが、それもきつと運命なんだろう。

「全く助かったぜ？お前らにオレの実力をじっくりと味あわせてやるからな！」

「あじあわ？あじわわじゃなくて？」

「えっ？ど、どっちだ？」

「スキあり！」

「ぐはっ！卑怯だぞ！」

「バカじゃないの。」

だがしかしおつむが残念というか、決してバカではないんだろうけど単純なレッドキングであった。けどそこがかわいい。

「教えてあげるわ、『味わう』が原型だから『あじわわ』が正しいのよ。」

「知るか！国語の教師かオメーは！」

「おっとお！ホラホラ鬼さんこちら！」

ガッツ星人はスピードを生かした動きで攪乱する。頭に血の昇りやすいレッドキングには効果てきめんである。

「けど、私のことも忘れないでほしいわね？」

「忘れてないって！一番怖いのエレエレだもんね！」

「あら、私のどことが怖いのかしら？」

「おーこわww」

一筋縄ではいかないエレキングこそが目下の難敵である。

「そこっ！」

「分身だ！」

エレキングが射抜いた人影は煙のように消え、視界の端にまた別の影が映る。見る間に分身は2人から4人、8人と数を増し、円陣を組むように相手2人を囲む。

「『ビームバインド!!』」

『ガッツ星人選手、レッドキング選手とエレキング選手を捕えたー！』

拘束光線で相手を無力化する、ガッツ星人の得意戦法である。

『ガッツのいつもの手だ!』

「もう、痕になつたらどうしてくれるの?」

「へっ、いくら分身したところで、結局元の2人分の力しかかかってないなら楽勝だぜ!」

レッドキングが腕に力を込めると、たちまちビームはちぎれとんだ。ちつとガッツが同時に舌打ちすると、これまた同時に距離をとつてまた分身を生み出し始める。

「『どれが本物だ?』なんて野暮なことは言わないぜ?」

「そうね、彼女の場合『全部本物』だから。」

黒い方のガッツ、マコももとは白いガッツ、ミコの分身であつた。それがどういふことか今は『もう一人のガッツ』として生きている。なぜそうなつたのかはさておき、分身宇宙人という名が指す通り分身能力が得意だが、その質は数いる怪獣・宇宙人の持つ分身能力とは一味違う。

大抵分身の中に本物が一体だけ紛れ込んでいるというパターンが多いが、ガッツ星人の場合はその内のでどれが本物なのかが全くと言っていいほどわからない。すなわち『全て本物』と言ってさしつかえが無いほどに高度なのである。

「全部本物ならよー．．．全部叩きやあいってことだろ?」

「この上無いほど単純ね?」

「シンプリイズベストって言うだろ！」

レッドキングが片腕を掲げると、そこへエレキングがムチを巻き付ける。そしてハンマー投げのようにグルグルと回転すると、エレキングの鋭利なヒールで周りを囲う分身たちを一気に薙ぎ払う。

結局その分身たちの中に『本物』の姿は無かった。一体どこへ消えたのか？

「残るは……。」

「上つきやねえよな！」

嵐に巻き上げられるかのようにエレキングは空へと舞い、ツノのレーダーを働かせる。

「そこねっ！」

レーダーが空中の一点を捉え、そこへ第三の手とも呼べるムチを伸ばすと、青空色に擬態していたミコを捕えた。

「一人……もう一人は？」

「上じやなかったら、下だよな！」

「くっ！バレた！」

地を這うようなスライディングで足払いを狙っていたマコの足を、逆にレッドキングが掴むと、自身の頭上に掲げて背を反らせる。アルゼンチンバックブリーカーである。

「よっしやいくぞエレ！」

「ええ、よくつてよ。」

「ちよっ、何する気?！」

合図を受けたエレキングは、風車のように回転してミコを振り回す。遠心力+重力加速によって、内臓が飛び出しそうなGがミコにはかかる。

その向かう先、落下地点にはレッドキングにホールドされたマコがいる。

「これがッ、『ダブル・キング・サンド』だあ！」

「ネーミングがダサイわね。」

「言ってるー！」

『2人のキングによるドツキング技が決まったー!!』

それぞれの長所で短所を補い合う、即興で作ったにしては完成されたコンビネーション技が炸裂する。

「このぐらい・・・どうつてこと・・・ないんだから！」

「はいはい、抑えて抑えて、イタタ・・・。」

一方ガッツの方はと言うと、負けん気の強いマコが引つ張り、それをミコが抑える形になっている。元々ミコは頑張りすぎてしまうタイプであったが、精神的に色々と成長を果たしたことで、自分以上に張り切りすぎる相方の存在のおかげで、一歩引いた立場

でいられている。

「どんなに相手がすごいコンビネーションでも、それを上回れる戦術がアタシらにはあるって！」

「アンタは気楽でいいね。」

「どんな時も余裕と笑顔を忘れないこと！」

ミコは前屈みの姿勢ではに・か・んだ笑顔で手を差し出すと、跪いていたマコはその手を取って立ち上がる。

『戦術・W』で行くよ！』

アイコンタクトを合図に、ガッツたちは同時に走り出す。

「また分身かよ！芸が無えな！」

「それはどうかな？」

「さてさて、みなさんお立合い！」

勿論これはパワー任せのただの物量攻撃ではない。数があればこそ、頭で足を動かす必要がある。

「ガッツ戦法『円は直線を包む』！」

『おおーつと分身したガッツ星人選手たち、レッドキング選手たちを囲むように円陣を敷いた！』

ただ囲むだけでなく、その円が車輪Wheelsのようにガッツたちも同じ方向へと走る。

『戦術・W』の本領はこつからこつから、マコ！』

「うん！」

合計8人に増えたガッツたちのうち、4人が中心にいるレッドキングたちの真上で空中交差、まるで中国雑技団のパフォーマンスのように、一糸の乱れも無い。その動きにおもわずレッドキングは目を奪われるが、エレキングはより一層警戒を強めて身を固めた。

その一瞬の隙の差が、それぞれの命運を分ける。行きつく先は同じではあるが。

「それっ！」

円周上にいる残りの4人のガッツたちは、中空にいる4人が着地するよりも先にレッドキングとエレキングの間を交差する。

「続いて『戦術・OO』！」  
タクティクス ダブルオー

「こつから……こつまでツ……アタシの陣地！」

4人のガッツの着地点と、もう半分の交差したガッツたちの線。これが意味することとは、

『なんとお！今の一瞬でレッドキング選手たちを分断し、さらにそ4人ずつのがマークが付いたあ！』



相手を囲う円陣を敷き、分身戦術で盤面をとり、そしてここから真打の『戦法』が抜刀される。

「まずこつち！」

「へっ、確かに囲まれちまったけどよ、この程度の攻撃がなんだってんだよ！」

「その『この程度』にもう当たってるじゃん？」

「うそっ、いつの間に?!」

正面から一人が攻めかかり、その内に背後から攻撃を加える。それを円陣を組んで囲いながら、攻撃役を交互に入れ替えながらじわじわと締め上げる。

「いえ、なんてことはないわ。攻撃そのものはそう複雑なものじゃない、それに法則性も見えてきているわ。」

「へー、さすがエレエレじゃん。けど、こうなったらどうする？」

それぞれ4人ずつ2組に分かれているわけだが、このうちレッドの方からは白ガッツが2人、一方エレの方からは白ガッツと黒ガッツが1人ずつが素早く入れ替わる。

「色の『組み合わせ』を変えた!?!おいエレ！」

「……。」

「なんか言えよ！」

「……なんか。」



『カッコいいでしょう?』

『わかるー! 超ロックじゃん!』

『けど、あんなに混みあつてるのに、一切の乱れがありませんね。』

『そこは、ガッツだから。』

『そうですね、どっちもガッツさんなら以心伝心ですよね!』

『ううん、それだけじゃないよ。ガッツ・・・ミコとマコ、すっごい特訓してたから。』

『特訓、ですか?』

＝☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆＝

大会開始よりも前のこと。

「マコまた前出過ぎ!」

「アンタが遅いのよ!」

次々現れる『敵』を破壊しながらガッツたちが道を進んでいくが、2人の足並みはお世辞にも揃っているとは言えない。

「ッ!」

「マコ危ない!」

そうミコが制止するが時すでに遅し、思わぬ伏兵の奇襲はマコの目の前にまで迫っていた。

『終了！2人ともお疲れ様。』

「・・・まだやられてない！」

『一発当たったら終わり、そういうルールなの。』

そう、これは『訓練』だし『リハーサル』だ。ただしオブションやバリアなんて便利なアイテムもない、ちよつとハードな横スクロールシューティングゲームのような訓練だ。

「もう、あとちよつとでクリアできてたのに。なんであんなに飛び出ちゃうのよ？」

「アンタが遅いだけでしょ？アタシに合わせなさいよ。」

「こういうのはもつと慎重にね・・・！」

「ちよつとストップストロップ！ふたりとも喧嘩しないで！」

審判役として参加していたアギラが2人を制止させる。

「もー、2人で訓練するっていうから応援に来たのに。シンジさんも時間とつてくれたのに。」

「どうせソイツはいつでもヒマでしょ？」

「マコ！またアンタは！」

「否定はしない。」

怪獣娘と親睦を深めるのは仕事の内だし、今は仕事とも言えなくはない。だとすれ

「今は『仕事』をするべきなんだろうけど。」

「えと、ガッツさんたち、次は模擬戦でもやってみない?」

「は?なんでよ。」

「これである。」

「あー・・・アタシはやりたい、かな?どうアギは?」

「え、ボクは・・・あつ、うんボクも体動かしたいかな?」

(気遣いありがとう2人とも。)

「じゃあアンタらだけでやってれば?」

「いやいやいや!ここは『しようがないなあ』ってノるところじゃないの?」

「別にお笑い芸人じゃないし、コイツみたいに。」

「え、いつから僕お笑い芸人になったの?」

「で、どう組むの?」

「普通にガッツ対ボクらでいいんじゃないの?」

「ガッツさんたちはさつき組んだばかりだし、たまには分かれてみるのもいいんじゃないの?」

「誰と組んでも同じよ。」

「それもいいかもね!」

「誰と組んでも同じよ。」

「マコ弱気なってる?」

「ちがう! アタシが勝つてことよ!」

「じゃあ・・・アタシはアギと組むのがいいな?」

「アタシもアギがいい。」

「ちよつと?」

「と、公平なくじ引きの結果。」

「アタシとアギね!」

「しくじったら殺すから。」

「さつきからひどくない?」

マコからの風当たりが冷たいを通り越して霰が吹いてきている。血を流しそうなく

らい痛い。」

「じゃあ、ボクは前衛で行くから。」

「アタシがその補助ね、心得た!」

「えーつと、作戦・・・。」

「アタシが全部やるから、引っ込んでな。」

「それチームプレイじゃないって。」

「・・・アタシにチームはいらない。」

成程、わだかまり患部はこの辺にあるようね。

「そいじゃー、バトルう！」

「開始い！」

ふっ！と一呼吸する内にマコの姿が見えなくなる。

「はやっ。」

「だったらアンタはそこで見てな。」

「そういうわけにもいかないんだってば！」

その一直線に向かう先にはアギラがいる。だがそれを見越してミコが狙い撃とうと  
しているのです、シンジは素早く銃を抜いて迎え撃つ。

「いててっ、相変わらずいい腕してるね？」

「走り続けてないと、それ以上のスピードで置いてかれるからね！」

誰しもが日々成長を遂げているなら、怪獣娘であろうとそれは当てはまる。地力から  
してただの人間とは差が大いにあるそんな彼女らについていくにはどうすればいいか  
？

『2倍、3倍の努力を積みばいい！』

なんとも頭の悪いというか、シンプルな考え方である。それを完璧とは言えなくとも  
実践しているシンジも頭シンプルということになるが。

「でもシンジのそういうところ好きだよ、ひたむきに頑張ってる人って応援したくなるし。」

「さすがエリート、言うことが違うね。」

「ん？イヤミかな？」

けどエリートにはエリートなりに悩みつてもものもある。例えば、『無敵』の肩書を背負うために、自らを追い込んでしまつたりとか。

そういう時に頼りになるのは、背中を任せられる仲間の存在。

「あの子の悩み、一緒に背負ってあげられる？」

「やってみる。それが僕がいる理由だと思うから。」

「頼もしいじゃん♪」

それにはまず、この戦いで信頼を勝ち取ることが必要だ。友情とチャンスは待つてても降つては来ない。自分で掴みに行かねばならない。

「ま、こつちも手加減するつもりは一切ないけどね？」

「そこはもうちつとさあ……。」

「さて、さてさて、私の半身を任せられるか試させてもらおうよ！」

スツと構えるミコに応えるように、シンジも銃を構え直す。

いつだって負けは許されないけど、プライドや生き様をベツト賭けしているのだから、こ



の勝負に逃げるのも許されない。

「必ず『勝つ』！」

## 怪獣娘はじめます②

「そろそろ反撃といこうかねえ？お遊びはここまでだ！」

ずわっ！と身に滾らせた気力を発散させながら拳を打ち鳴らし、岩のような表皮のどくろ怪獣が眼を光らせる。

「何人だろうがどんな作戦だろうが、やることは変わらねえ！全部叩く！」

弦が弾けるように素早く突き出た膝が分身の一体を蹴り飛ばし、肘打ちからの流れるような背負い投げで後方のもう一体を投げ飛ばす。

「この『手』の届く距離だ！『ローリング・ラリアート』オ！」

両腕を広げ、足を主軸にバレエのように回ると、側面から近づいてきていた残る2人を絡めとる。

「っしやあ！片付いたぜ！」

よーし、今度はオレが助けてやるぜ！と息巻いて相棒の方を見やる。

『『エレキングコレダー』！』

そうするともう済んでいた。

「私の相棒なら、あと30秒早く行動してほしいわね。」

「やっぱりお前戦闘向きだろ。」

やる気満々のキメ顔が、たちまち苦笑に変わる。まるつきり涼しい顔で、難しい問題を事もなく完璧にこなしてしまうのだから、つくづく質が悪い。模範的というか優等生というか。レッドキングとはまるで逆。

「まあいいや、これでやつらの作戦もご破算だな。」

「これで終わりだと思う?」

「いいや全然? 相手が完全に『まいった』と言うまで油断はしないぜ。」

その言葉通り、ガッツたちは立ち上がる。ここまで仕掛けに行っていたのはガッツたちだったけど、競り負けているのもガッツたちである。精神的なダメージによるアドバンテージは大きいはずだ。

「どう? まだ行ける?」

「誰に言ってるのそれ?」

「平気そうね。」

どうやらその算段はこの2人には当てはまらない模様。

「負けてらんないのよ・・・アイツともう一回戦うまでは!」

「おーおー、お熱だねえ? 彼が気に入ったの?」

「バカにしてんの?」



「ガッツー！」

「なに？」

「いや、マコの方じゃなくて……。」

「アタシの方でしょっ！『ビームバインド』！」

一瞬気をとられたマコにミコの拘束光線が当たり、自由を奪われる。

「くっ！し、しまった！」

「じゃ、あとよろしくー？」

「まかせて！『ダイノダツシユ』！」

カプセル怪獣が弱いと誰が決めた？必殺技が決まればキチンと強いのである。

「どおっせえええええい！」

「ぎゃんっ！」

「アギっ！」

そうは問屋が卸さないのが世の常。両手で地面を叩いて腕のバネを使ったシンジのニードロップがアギラのツノを打つ。

「やっぱりそう上手くいかないかあ……。」

「ドンマイアギ！今度は2人纏めて喰らわせてやろうよ！」

「むしろこっちのダメージが大きいんですけど！いで……。」

プロテクターをしていた膝が痺れる。ゆっくりと曲がった膝を戻しながら呻いているが、その顔はむしろ笑っていた。

「・・・なにがおかしいわけ?」

「え? そりやおかしいでしょ、攻撃したほうがダメージ受けてるなんて。」

「そうじゃなくて、なんで笑ってられるわけ?」

しかめっ面でマコが問いかけてくる。

「んー? 怒っててもしょうがないし? よく言うじゃん『泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生』って。」

「よく言わないわよ。」

「ミカならよく言うんだけどなあ。まあとにかく、怒ってエネルギー消費するよりも、笑ってストレスも発散したほうが賢いでしょう? ってこと。」

「・・・意味もなく笑ってなんていられなわよ。アンタの彼女みたいに。」

「別に彼女ってわけでも・・・幼馴染ですし。」

ちよつと言葉が濁ったが、今はそれはいい、重要じゃない。

「その、上手く言えないけど、誰かと一緒にされるのも、比べられるのも嫌でしょ?」

「はあ? いきなり何言ってるのさ?」

「そういうことで悩んでるんじゃないかって、思ったから。」

「！ アンタには関係ないでしょ！」

その言葉が神経を逆なでたのか、ムツとしたマコがそっぽを向く。

「待つて！行かないで！お願いだから話ぐらいさせて！」

「アンタの声なんか聞いてたら耳が腐るわ！」

「ひでえ！」

「なにやっつてんだろあの2人。」

「ちよつと、まかせてみようか。」

「アタシは『影』なの。アイツミコから切り離された、アイツの一部分でしかないの。」

「マコさんの事、誰かと同列におもってたりはしないよ？そりやミコさんとは双子か

もしれないけど、双子だからってなんでもかんでも一緒にするのはなんか違うし。」

「違うのは双子って認識だよ。」

「おあいこでしょ？」

「ふざけてんの？」

「ふざけてはない。待つて行かないで。」

無視して戦いに戻ろうとするマコの手を掴んで制止する。少し顔をしかめたよう

だったが、突然のことに動きが止まる。

「影だとか一部分だとか、それってミコさんにも言えることでしょ？本当はミコさん

の方が弾き出されたのかもしれないし。」

「それが何？離してほしいんだけど？」

「話したいよ、マコさんともっと。」

「月並みなセリフだけど、マコさんと会えてよかったって思ってるし、マコさんともっと仲良くなりたいてって思ってるよ！」

「なんか論点がズレてるんですけど？」

「違う！そうじゃない！そうなんだけど言いたいのはそういうことじゃなくってだ  
！」

「めんどくさいのよアンタは！」

痺れを切らしたマコのパンチが飛ぶ。が、シンジそれを掴んで逆に組み伏せる。

「なにやってんのあの2人は？」

「ボクにもわかんない・・・。」

「アンタ、なにがしたいのよホントに・・・。」

「マコさんと、もっと一緒に居たい、です。」

「そうじゃなくてさ・・・はあ、もういいわ。」

脱力したマコを見て、手の力を緩めたシンジの下腹部に鈍い衝撃が走る。

「ぐっはあ?!」



「アンタから先に片付けてやるわよ！」

「どうして……こうなった……?!」

「ホントどうしてこうなのよ。」

「うーん……でも、ひよつとしたら。」

この拳に思怒いを乗せて。溜め込んできた鬱憤を晴らすように一発一発打ち据える。勿論シンジもやられてばかりではなく、適度に捌きつつ様子を窺う。

「このっ！おとなしくつぶれた風船のようになりなさいよ！」

「どんなパワーで殴るつもりだよ！」

「無論、死ぬまで！」

お断りだあ！とするりと避け、さつきまでいた場所にあつた岩が粉々に砕け散る。あきらかに人間に対して使つていい力じゃないのだ。

「まあ痛みは一瞬だろうし、人道的ではあるかも？」

「その行為そのものが人道から逸れると思うんだけど……。」

さて、ひよんなことから命の危機に見舞われたが、実戦ではそういうこともあるだろう。リハーサルの内に起こつてくれるならそれはそれでいい。

「黒いガッツはダーティファイトだよね。」

「荒いよねー、一体誰の影響なんだか。」

アギラの観察眼の通り、マコは荒々しく強気に踏み込んでいる。守るよりも攻めることに重きを置く性格のようだ。だが攻める手を増やすということは、カウンターを受けえることも多くなるということである。

「なら得意分野じゃないか!」

「ふつ、アタシにはコレがあるのお忘れ?」

ガッツ星人の分身以外の能力、瞬間移動。ゼットンほどではないけど、攻撃をかわしたりするには十分に使える。投げられても、地面に着く前に体勢を立て直せる器用さもある。

「ノーマルなテクニクしか持ってないアンタには、勝てっこない相手ってわけよ!」  
「ならばアメイジングなアビリティをお見せしよう!」

右脚と左脚を代わる代わるのステップで回転。アイススケートのキャメルスピンのように距離を詰めながら攻勢にかかる。

「そんな見た目だけの攻撃!」

「見た目以上だよ!」

「なにつ?!銃をいつの間!」

運命のトリガーをルーレットの回転に乗せて。水平方向に伸ばした手に握られたら

イザーションショットが時計の針のように回りながら、じわりじわりと追い詰める。

「さらにつ、こんな手もある!」

「踵からも銃撃が?!」

「これで『蹴り撃つ』!」

カカトを3回鳴らせば家へ帰れるように、つま先を2回ノックすれば『ヒールショット』が起動する。手数を増やすための方法をいくつも考えた内のアイデアのひとつだ。

「アンブラの魔女かな?」

「言わないであげて。」

「これぞ格闘攻撃と、射撃攻撃の、融合!」

「ふたつでひとつつてわけ?」

「いやさ、2人が2倍で、合計4倍つてこと!」

タイミングをずらしながら、相手に隙を見せない波状攻撃で矢玉を浴びせる。

「そして、すかさず!」

「踵落とし?!」

『スタンピング・バレット』と呼んでもらいたい!」

踵落としのパワー、プラス銃撃のパワー!ガッツ星人のガードも貫く威力だ。

「つてえ……。」

「よつとと、どうよ?」

「ぜんっ・・・ぜん響いてこないし!」

手をブラブラとさせて余裕ぶつてみせているが、結構堪えているようだ。

「てか、武器使うとか姑息じゃない?」

「今更だね。生憎だけど、これが僕の唯一な戦い方だから。」

「卑怯な技で勝ちまくるのが?」

「違う、心技体揃った戦い方!」

「邪心、裏技、死に体?」

「断じて違う!」

「自分一人じゃなにも出来ないどころか、足手まといにしかならないって自覚がある。だからこそ、僕にしか出来ることをやる!これが『自分の色』だ!」

「自分の色?」

「だからマコさんも自分の色、見つければいいじゃん。白でも黒でもない、自分の好きな色を。」

そう、こういうことが言いたかった。なんか適当にいいことを言つて丸め込もうとしたら戦いになってしまった。

「じゃあまず、マコさんの好きな色は?」



『おっとガッツ星人選手、まだ攻撃を仕掛けるようだー!』

「へっ、なにが来ても打ち返してやるぜ!」

今度こそはと猛るレッドキングに、横目で見ながら溜め息を吐くエレキング。総じて余裕そうだが、ガッツはまだまだ諦めてはいない。

「作戦、まだある?」

「・・・『アレ』で行く!」

「まだロクにテストもしてないのに?」

「今からテストすんの! いいから打ち合わせ通りやりなさい!」

「オツケー、マコがやれって言うなら、マコが本当にやりたいってことなんだよね!」  
1人で8人分身。ずっとこればかりやってるような気がして芸が無いけど、今は敵を遮る壁になれ。

「数を増やしてきたな、けどそれはもう通じねえぜ!」

「全く、よく見なさいよ。」

その後ろでマコが一人、目を閉じて意識を集中させている。

「おっと、そうはさせるかあ!」

「させるっ! 絶対!!」

1人がやられたら、その後ろからさらに2人が、闘志を持って立ちふさがる。  
(集中しろアタシ・・・心で感じるんだ、アタシの『色』を・・・。)

脳裏に浮かぶ風景。

それは春先の事、

アタシは別にいいと言った、

けどミコとアギに手を引かれたり、ゴモラに背中を押されたりして結局行った、

桜木立ち並ぶ川の土手。

みんなが待っていた薄桃色の空。

「アタシ色に染め上げろ！ガッツ！」

その手に掴むは、かけがえのない思い出。桜色の記憶。ヒカリ

「纏うは花、けんらん絢爛の麗うつく！」

自分は確かに、後から生まれた存在、空っぽかもしれない。

けど思い出なら、記憶なら、いくらでも作っていける。

だってアタシは、『一人じゃない』から！

「じゃっ・・・あとヨロシク！」

「ええ・・・まかせといて！」

タッチして入れ替わるミコと、新しいマコ。

『桜色の・・・ガッツ?!』



「アタシの名はガッツ、『ガ<sup>サ</sup>ツ<sup>ク</sup>・ブ<sup>ラ</sup>ロ<sup>ガ</sup>ツ<sup>サ</sup>ム』！」

「すっごーい！ガツちゃんいつの間に変身できるように?!」  
「生まれ変わったんだな、マコさん！」

混迷極める戦場に、春の息吹が舞い込む。

「ところでアンタ。」

「なんすか？ いっちちち……。」

「んもー、いくらなんでもやりすぎじゃないのマコ？」

「あとでピグモンさんに治してもらおっか？」

「ゴモラとはその、幼馴染なわけよね？」

「そうだけど？」

「それだけ？ そのー……。」

「なになに？ マコったらシンジにホの字なの？」

「はあ?! 何言ってるの！」

「ダメだよー？アギがすっかりマークしてんだから？」

「だから違うってーの！」

「アハハ・・・これから大変だねシンジさん。」

「あーうん、まあ何とかなるよ・・・ところで、やっぱ『ちゃん』付けだとなんかこそばゆいから、呼び捨てでいい？」

「う、うん・・・ボクもなんか恥ずかしいし・・・。」

「おっ？さっそく目の前でイチヤついてくれるなんてこりや負けてらんないねー？」

「もー！ガッツー！」

「狙える・・・よね？」

ひとしきりボコボコにしたたりされた後の閑話。

## 怪獣娘はじめます③

新たな姿に、新たな力と技を魅せんとする、ガッツ・プロッサム。その方法やり方は、考えなくとも頭に浮かんだ。

『カード・シックス、バタフライダンス』  
『手札・六式、牡丹に蝶』！』

文字通り手札を一枚切る。そう宣言すると、力が湧いてくる。

「うおおおおおおおつアアツ!!」

するとどうだろう、目はどこか虚ろに、踊るように足を踏み出す。そこへレッドキングが殴りにかかってくる。

「なんっ・・・?!」

気が付けば、レッドキングは倒れていた。

「心ここにあらず、って感じね。」

「どうなってるんだ・・・いったい?」

もつとも、いつ反撃を受けたのか、いつ反撃したのか、それはガッツ自身にもわかっていなかった。

「・・・あれ?」

「ぐぬぬ……ナメた真似を……!」

「今のあなた、嘸ませ犬な悪役っぽいわよ。」

「うっせ!」

今度はエレキングが、尻尾ムチを地面に叩きつけ、電流を地面に広がらせる。が、滑るような足取りのガッツには全く効果が無い。ならばと直接ムチで薙ぎ払うが、ふわりと風船のように浮かんたガッツには当たらない。

「お前こそやりこめられてんじゃねーよ!」

「黙りなさい。」

風にそよぐ柳のように、花に踊る蝶々のように、ひらりひらりと身をかわす。忘我の境、無我の境地、明鏡止水、そういう言葉がよく似合う。

「変身して特性も能力もまるで変わりやがった……。」

「見た目以上の変化のようね。」

『すごい……ガッツ……。』

「だが、どうやら変化について行けていないのは、周囲の人間だけではないようだな?」

「えっ?」

そう指摘するのは、もうひとつの戦いを繰り広げている真つ最中のベムラー。実質3

対1の状況でもこの余裕を見せている。

「ふう・・・ちよつと、疲れるね。」

ガッツ自身も自分にとつても初の体感に、余計にスタミナを喰われていた。

「ちよつと攻めにかかろうか？」

「よし来ーい！受け止めるのなら得意だぜ！」

「私は別に。」

やる気満々のレッドキングとは対照的に、エレキングは一步引いて様子を窺う。こういう時にお互いがお互いに成すべきとを成しているのは、以心伝心というか。

「手札・七式、ホアタツクル萩に猪！」

レッドキングの両腕に、トップスピードで突っ込んできた重戦車のような衝撃が走る。

「なんっ・・・?!」

予想だにない威力に思わず声が漏れる。

「ぐううう・・・パワーなら負けねえぞ！」

「さすがに相手が悪いかつ。」

だが瞬間的なものならさっておき、パワーファイトにおいてはレッドキングのほうがまだまだ上。

「むしろ負けたら恥だぜ！」

「それはそれでおもしろそうね。」

「オイ！」

「冗談よ、それっ！」

荒れ狂う猛牛に首輪を嵌めるようにエレキングのムチが巻き付くが、それでもマコは意に介さない。

「あら？」

「オイ！こつちにまで電流来てるじゃねえか！」

「効いていないハズがないのだけれど……。」

マコの足は止まらない。ズルズルとエレキングも引きずられ、額に汗がにじみだす。

「電気の使えないエレキングなんて、クリープのないコーヒーみたいなもんよ！」

「私はどちらかと言うと紅茶派よ。」

「いいから電流止めろつての！」

そうこうしている間に腕のロックアップは外され、マコの一撃がレッドキングを吹き飛ばし、間髪入れずにエレキングのムチも解いて投げ飛ばす。

「まだ畳みかける、手札カード・十式テンズ、紅葉ディアセプトに鹿！」

紅に彩られた空をバツクに、歓迎の雅樂が奏でられる。

「今更プレリユードかよ。」

「そこはホラ、『終わりの始まり』ってね。」

さらに戦闘スタイルが打って変わり、文字通り駆け回るような軽快なフットワークと、スラリと伸びた脚から放たれる蹴撃の雨あられが、レッドキングを手玉に取る。

「ハイ！ハイ！ハイイイイ！！」

「ハハハハハハハハハハ！！」

確かにスピードファイトは苦手かもしれないが、そういう相手にふさわしい戦い方だって出来る。

「『拳』ってのは後出しが勝つんだよ！」

相手を仕留めるのには何発もいらぬ、この地獄突き一発で十分よ。レッドキングは勝利を確信して強かにほくそ笑む。

「・・・そんなもん？」

「なん・・・だと・・・?!」

しかし笑ったのはマコも同じだった。

『ああーつとお?!ガッツ星人選手、レッドキング選手の貫手が直撃したにも関わらず、平然としているー!』

「やせ我慢にしちやあ、随分耐えるじゃねえか？」



「別にやせ我慢とかじゃないし?」

「ぐっ……どうなってやがんだ、マジで?」

マコは腹部を貫かれた宙吊りの状態にもかかわらず、両腕から放つ光線でレッドキングを追いやると、何事もなかったかのようにふわりと着地する。

その様にレッドキングは戦々恐々とする。攻撃が当たらないことはあっても、攻撃が効かないことは今までになかった。厚い防御をブチ抜く威力こそが、レッドキングの持ち味であり誇りであったのだから。

(ふ、不思議だぜ……こんなにビビっちゃうなんてよ……。)

(けど、もつと不思議なのは、こんなにもワクワクしてるってことだぜ!)

何故なら、怪獣の中でも特段戦いを好むレッドキングであるから。その性が一層奮い立たせるのだ。

血の混じった唾液を口に入った砂と一緒に吐き捨てると、じつくりと相手を見据えて考える。

(気に入らねえこと、違和感ならまだある……けど、それがなんなのかは……。)

現状レッドキングたちは押し込まれているわけだが、逆に言えばガッツたちにも後がないということ。実際さつきまではガッツたちの攻撃に対して確実に切り返せていた。

「ティンとききた!」

「どうせ『押しダメならもつと押す』とかでしょ。」

「そうだ！」

「そういうのを策とは言わない。」

「おう！なんせ頭脳労働はアイツの担当だからな！」

「ギャラはおんなじ。」

そんな頭脳担当のエレキングがじーつと見つめるのは、休憩中なミコ。

「あなたは、そこでなにをしているの？」

「見てわかんない？休んでるの。」

「随分気楽なのね。寝転がって頬杖までついて。」

「これが自然体？なアタシなの。」

「ウソおつしやい。ワーカーホリックなあなたが『休む』なんてするわけないじゃないの。」

何かを見抜いたエレキングズバツとムチを抜いて地面を払うと、ミコは跳んで回避する。しかしその動きには、いつもの華麗さが欠けていた。

「くっ……。」

「やはり、あなたがダメージを肩代わりしていたのね？」

「あーあー、エレってマジックショーのタネとかにもツッコミ入れるタイプでしょ？」

人生楽しめないよそんなんじゃない？」

「お生憎様、私は野暮なツツコミを入れるのが好きなの。」

見ればミコの首には痣が付いており、腹部を少し抱えているようだった。

「ダメージの肩代わりだつて？そんなんアリかよ？」

「アリでしょ、元は一人だつたんだから。たまーにお互いの考えが入ってきて鬱陶しいけど。」

「そーそー、マコの考えなんてまるつとお見通しなんだから。」

「ほー？」

「うっさい。」

ひよつとするとそれは、元の『ひとり』に戻ろうとしている予兆なのかもしれない。少し不安がよぎるが、自分が自分であると自覚している『今』ならその心配もしなくていい。

花の命は短い。だからこそ、精一杯綺麗に咲かそうとする。逆境が返つて彼女を燃え上がらせる。

「昔っからよく言うじゃん。命短し恋せよ乙女、つてね。」

誰に恋してるのかはあえて言つてあげないけど、自分の半身の応援をするなんて、なんだか不思議な感覚だ。多少の痛い目にだつて目を瞑つてあげられる。

「さつ、ちやつちやと決めちやいな！」

「言われなくたって！」

さて、タネが割れちやつた以上長々と戦いを長引かせるわけにはいかない。必殺技への布石はもう敷いてある。あとは撃つて当てるのみ。

「さてレッド？まだ誰にも試したことないけど、これはメツチャクチャ痛いはず。受ける自信ある？」

「へっ、オレを誰だと思ってるんだ？」

「答えは聞いてない。」

「オイ。」

たとえ相手が全力で拒否するようでも盛大にブチかますつもりだったのでこの質問自体にはなんの意味も無い。むしろレッドキング相手には体のいい挑発にしかならない。

蝶、猪、鹿。バラバラなカードだけでは意味がないが、揃えることで役を持つ。マコの身体から三つの光球が飛び出し、牙城を穿つ三角形をつくる。

「心と技と、体のトライアングル！ダスケ奥義、トライアングルフォー猪、鹿、蝶！！」

3つの力を一つに合わせる、ちよつと参考にさせてもらった。

「ぐおおおおおっ……っコレは……?!」

「二丁上がり!」

パンパンと手を叩くと、レッドキングが受け止めていた三角が紅炎を挙げて爆発する。

『なるほど、ガッツ星人選手もといサクラガッツ選手の必殺技は『花札』がモチーフのようですね。』

『花札つて、こいこいの?』

『ええ、そうです。猪鹿蝶は「萩に猪」、「紅葉に鹿」、「牡丹に蝶」の三枚を揃えた時の役です。』

なお、『無視する』という意味の『シカト』という言葉は、この花札の十月札「紅葉に鹿」の鹿がそっぽを向いている、すなわち「鹿十」ということから由来するらしい。

さて、5点の出来役を受けたレッドキングの行方やいかに。もくもくと立ち込める煙だけが沈痛な面持ちで待ちかまえているようだった。

「これは……やってないってパターン。」

「どつちにしろフラグね。」

沈黙の帳の向こうから、熱を帯びた赤い光が灯るのが見えた。爆発による炎熱か? いや、それは『二つ』あった。

「言ったろ、『拳』<sup>手の内</sup>つてのは後出しが勝つんだよ！」

煙が逆巻く気流に乗って舞い上がっていくと、そこには地獄の窯がぼつかりと口を開けていた。

「本当ならもうちつと出し渋りたかつたところだがよ……。」

白かったはずのレッドキングの体表は黒曜石の様に黒光りし、その目も燃えるような赤に染まっている。

「手エ抜いてるような場合じゃ……いやどうやら、それ以上にオレの闘争本能が許さねえらしい。」

だが一番の変わりようは身に纏う空気だ。その拍動に合わせるかの様にユラユラと震え、目があえばむせかえるほどの威圧を放っている。

「命を燃やす時が来た！『EXレッドキング』、推して参るぜ!!」

一歩を踏み出し、吠えるように宣誓する。

『なんとお！レッドキング選手も決勝戦でパワーアップの隠し玉だあ！』

「まるでEXのバーゲンセールだな。」

「あなたも大概の事言えませんかよこの悪魔。」

「誉め言葉として受け取っておこう。」

一方こちらではベムラーの無比の一撃が猛威を振るっているがそれはさておき。

「さて、次のラウンドに行くとするか。」

「ええ、こつちもたった5点じゃ満足してなかったところよ！」

「まあ、もう結果は見えてるけど。」

「言ってくれるじゃないの！どんだけパワーアップしようと、アンタはアタシを捉えられない！」

オーラを漂わせて意気込むマコに対して、レッドキングは至って冷静だった。それは熱を帯びる体を鎮めるように、逸<sup>はや</sup>る心を抑えるようであった。

「狙う必要はない。」

「ぐわっ?!」

それどころか、マコの存在は眼中にすらなかった。

『なんとー?!EXレッドキング選手が拳を克ち合わせた、その衝撃だけでサクラガッ

ツ選手が吹っ飛ばされたー?!』

熱波襲来、ゴングを打ち鳴らすようにぶつけられた拳から爆風が放たれる。その前に、マコは風にあおられる花弁の様に吹き飛ばされる。いかにダメージを肩代わりされようと、衝撃までは殺しきれないのだ。

「ふん……。」

「地面が……溶けている?!」

レッドキングは進化している自分の力の感触を確かめるように、足元の土を撫でる。ただ掬って放り投げる、それだけの行為にも関わらず、溶解した砂や石がマグマとなってマコに降り注ぐ。

「やることなすことすべてが、必殺技並の威力を持つているというの?」

「これにはさすがのエレも想定外?」

「巻き込まれる可能性が高くなるわ。」

ただそこにいるだけで汗が噴き出す。溶岩による熱さのためか、あまりのヤバさにブルつてるのか、とにかくここにいる全員がかいてる。

「くっ! 『手札・三式、桜に幕!』」

サクラガッツの代名詞とも言える桜の技を放つと、花吹雪がバリアとなってマコを守る壁となる。



「守れると思ったか？」

「なにつ?!うわああああ!!」

だがEXレッドキングのたった一発によって壁は崩れる。それもその場を一步も動かない、『ねこだまし』による爆風で。

「ふ、ふざけてる・・・。」

「オレはいつでも大真面目だぜ?そんなに殴られるのがお望みなら、リクエストにもノってやるぞ?」

「勘弁願うわ。」

タネが割れてしまっていた以上、ダメージの転嫁も切っていたが、今更戻したところでどうにもならない。小細工やテクニクでどうにかなる次元を超えてしまっていた。

「知ってんぜ。次なる『手』を打つ暇もねえんだろ?」

「くつ、そこまでわかっちゃうのか。」

「カードを切る暇すらないんだろ。」

いかに強力なカードを積み込んだデッキであろうと、ターンが回ってこない限りドローも出来ずに廻り殺しにされる。

「・・・負けたわ、ホントに。じゃありクエストに応えてもらえる?」

「おう、なんでもやってみようぞ?」

「アンタの一番の技『アースクラッシュャー』を希望するわ！」  
ニツと笑って言い放つとマコは不敵に笑う。それにレッドキングもニツと笑うと、待ってましたと言わんばかりに拳を握る。

「驚いたな、まさか本当にリクエストが来るなんてよ。」

「そんなこと言って、実は『待ってました』って思ってたんでしょ？」

「おう。」

「けどよ．．．オレもこの姿になって初めてだからよ．．．ちつとばかり力加減間違うかもしれないぞ？それでもいいか？」

「答えは聞いてないんですよ。」

「ああ、オレもお前もな。」

右手に拳を、左手に平手を、それらを重ねてぶつけあう。

「この『アースクラッシュャー』．．．今ならそれも進化している．．．名づけるならそう．．．。」

左手のエネルギーが右手に伝導し、右手が風船のように肥大化する。その大槌を振りかぶり、無心で地面に叩きつける！

「『フレイムロード』と呼ばうか!!!」

突如嵐が巻き起こり、突然炎が噴き上がる。炎は道となり、真つ赤なマグマが生まれながら熱風を纏って広がっていく。抗えぬ『死』が迫る。

「ははっ……ホントすごい威力だね……。」

「だろお？」

「ええ、ホント……。」

「やっぱ、アンタバカだわ。」

「なにっ?」

呆れたような、またはしたり顔のように笑うとマコは両腕を伸ばして叫ぶ。

『『ビームバインド』!』

「今更そんなものが効くかよ!」

「効くんだよ!」

バインドが向く先に視線をやると、その方向から人影が飛んでくる。それが何なのか

の判断に少し遅れたが、どの道時すでに遅し。

「全く……バカだバカだとは思ってたけどここまでなんて……」

「エレ……?なんで……?」

「ずっとアタシに捕まっていたのよ!」

「アンタは熱くなりすぎて、視界に全然入ってなかったみたいだね。」

ミコに簀巻きにされたエレキングが、マコの張ったビームのレールに乗って運ばれてくる。当然、終着駅はフレイムロードの上。

「こんなわっかりやすい挑発に乗るなんて、平時のレッドなら絶対になかったと思うけど?」

「馬鹿力に目覚めた結果、バカの壁を乗り越えて今までのバカを上回るバカの世界チャンピオンになったね。」

「バカバカ言いすぎだろお前ら!バカって言う方がバカなんだぞ!このバカ!」

「一番のバカはアナタよ!!」

バカがゲシユタルト崩壊を始めたところでエレキングにフレイムロードが着弾。

『エレキング選手!まさかのフレンドリーファイヤで脱落う!』

「最後っ屁にしては、上手く行ったんじゃない？」

「ええ、ちよつと名残惜しいけど、先にオサラバとしよつか。」

「けど、最後にもう一個・・・。」

「わかってる。いや考えを読まなくてもわかるよ。マコがなにしたいかは。」

「・・・ありがと。」

「『爆熱アッパーカット』オ!!!」

怒り狂うEXレッドキングの必殺パンチが、マコを吹き飛ばす。

「知ってる? 『友情つてのはいいものだ、嬉しいことは2倍嬉しいし、辛いことは半分で済む。』つて。」

「だからダメージも半分こつて?」

「今日のところは6:4にしといてあげる。」

虚空からの衝撃を浴びたミコが、意識を失いながらサムズアップを掲げる。

「くっそー・・・勝ったハズなのになんだこの敗北感は・・・。」

レッドキングはギリリと奥歯を噛み締めながら拳を振り上げる。

「あー……いったいわー……。」

「マコさん……大丈夫？」

「あつ……アンタの方は？」

「こつちもまあ……なんとか……かな。」

ポロポロになったシンジがマコの前までやってくる。左腕がダラリと垂れ下がり、虎の子のバディライザー、モンスアームズの手甲も大破している。

「何？そつちも奥の手が破れちゃったわけ？」

「うん、一緒だね。」

「アンタなんかと一緒にしないでくれる？」

「あー、うん、ごめん。」

シンジ、ハチマキを外して傷ついた腕にあてがうが、片手でやるのに少々もたついていると、見かねたマコが手を伸ばしてくる。

「貸しなさいよ、巻いてあげるから。」

「え、いいの？」

「いいからさつさとよこしなさいよー！」

「はいっ。」

マコはハチマキを強引に奪い取ると、シンジの腕を手繰り寄せて巻き付ける。

「あでで、もつとやさしく……。」

「アンタに優しくする理由がないんですけど?」

「でも……ありがとう。」

「なにが?」

「レッドキングさんの攻撃、わざと受けたんでしょ?後で戦う僕らのために。」

「はあ?!なにそれ、意味わかんないし!」

「いったーい!」

ギユツときつく締め上げると、悲鳴があがるが構わずに端を結ぶ。

「うん……ありがとう、もうちよつとがんばってくるよ。」

「そう……がんばって……。」

ちよつと名残惜しそうにマコが手を離すと、シンジはすつと立ち上がって前にいる『敵』を見据える。

「……他に。」

「他?」

「他になんか、ないの?」

「なにが?なにを?」

「・・・わかんでしょう？」

「うーん・・・。」

「あの2人何イチャついてんだらうね？」

「あなたならわかるんじゃないの？」

「ここで聞くのは無粋ってもんでしょ？」

「そうね。」

ここがアリーナを中心だということを忘れてイチャつく2人を、かるく微笑みを浮かべながら一足先に退場したエレキングとミコが見守る。

「帰ってきたわね。」

「ねーねー、どんなこと言われたの？」

「うるさい！」

「あら、ご機嫌ナナメ？」

ちよつと不満そうなマコがドスドスと足を鳴らしながらアリーナ隅のゲートにやつてくる。

その態度こそ不服そうだが、口元はちよつと上を向いているのをミコは見逃さない。



「ねー、なんて口説かれたのー？」

「聞かないで！」

「なんか言われたんだねー。」

「詮索するな！」

「話したい事があるなら、あとでじっくりしなさい。この試合を見届けてから。」

戦いはまだ続く。勝ち残ったレッドキングと、もう一方の生き残りが鎬を削る。星に占いをかけてもらいたいところだが、生憎空の暗雲はまだ晴れない。

## ヘヴンズキヤツスル①

怪獣娘ベムラーこと、天城ミオの朝は早い。私立探偵としての一日は、一杯のコーヒーから始まる。

「今日は飲んでないけど。」

さてさて、ガッツ星人コンビとレッドキングたちが戦っているその裏では、また別の戦いが繰り広げられていた。勿論対戦相手のリサーチは十分だ。

「ちよいやー！」

「てりやー！」

まずカプセル怪獣ミクラスと、古代怪獣ゴモラ。2人ともパワーファイターであるという点では同じだが、ゴモラは超振動波やEX化といった強力な技をもっているほか、歯に衣着せぬ物言いもとい物怖じせぬ度胸で恋もバトルも一気呵成に攻めてくる。攻めていると思っていたら足元掬われていたということがしばしばあるのが玉に瑕だが。

一方ミクラスは、ゴモラを上回る膂力に加えてバツアフレイムという遠距離武器を持ち、さらに熱にも寒さにも強いという隙の無さがウリである。多少臆病という弱点こそあれど、それを乗り越える勇気もある。またこの大会で初めてエレキミクラスという

姿も見せたが、大よそ予想の範囲内に収まる。

「そこおー!」

そしてもう一人、距離を取りながら銃を構えて絶えず隙を伺ってくる濱堀シンジ君。戦いのスキルは私が教えた、いわば私の教え子でもある。どちらかというど頭で戦うタイプであるが、たまにとんでもない行動を起こしてくるので油断ならない。

「というか、君らはナチュラルに連携してきているな。」

「シンちゃんが発案です。」

「知ってる。後で痛い目に遭わせるからそこは安心してくれ。」

「安心できません先生。」

「シンちゃんはこの先生きのこれるか。」

ミクラスとゴモラが代わる代わる攻撃をしかけ、その間を縫ってシンジが銃撃をかます。一人にターゲットを絞らせない、車掛かりの陣再び。前誰が使ったのか忘れたけど。

そういった戦術の有用性は歴史が証明しているが、穴が開いていないというわけでもない。そういう落ち<sup>証拠物件</sup>度を探るのが普段の仕事でもある。

「そりゃーっ!」

「甘いわっ!」

突っ込んできたミクラスのツノを引っ搦んで、ホイップしてゴモラにぶつける。そうして倒れて重なった2人を踏み台にして、銃を構えるシンジに上からの逆襲をかける。

「わーこっち来た!」

「悪い子にはおしおきだぞ!」

「僕いい子ですし!」

「黙っておしおきされるのがいい子だ!」

「うへー!」

空中に舞い上がってはいいのだが、照明の位置を計算して逆行を背負う。即座にシンジ君も迎撃は難しいと判断して、腕を組んで防御態勢をとる。いい子だ、私の思い通りに動いてくれる。

わざわざガードの上から蹴りつけるまでもなく、シンジ君の両肩に手をつけて背後に着地し、流れるような動作で締め落としにかかる。

「ぐっ……ががっ……」

「どうした?もう降参かい?」

「の、のおおお……」

手足をバタバタとさせてもがくシンジ君の動きを制御し、体力を地道に奪っていく。この子の知識や判断力は確かに難敵になるが、ならばこうして懐にまで潜り込んでしま

えばかえって安心できる。勝手知ったる他人の家とは。

「あーっ、シンちゃんなんか喜んでない？実は喜んでない？」

「えー、さすがにそれはヒクはシンジさん……。」

「ちやうわい！」

「おー、まだがんばれるじゃないか。」

ギギギツとホールドを力尽くで振りほどいて、両脚を反らせる形で蹴ってくる。反射的にガードすると、彼は私の腕からするりと抜け出す。ちよつと寂しい気分だ。

「シンちゃんもう満足？」

「だから喜んでないっての。」

「物足りなかったら後でアタシもやったげよつか？」

「だから違うっての！なんでみんな僕をMにしたがるの。」

ミクラスとゴモラが復帰してくる。この程度では大したダメージにもなっていないのだろう、当たり前だが。小手調べもそこそこに、ここらで本気を出すでしょうか。

「シンちゃん作戦は？」

「囲んで棒で叩く。」

「シヨツギヨムツジョー！」

相手さんたちも攻め方を少し変えてきた。波状攻撃ではなく同時攻撃、見ればアリー

ナの反対側で、レッドキングたちも同じように数の暴力を受けているが、レッドキングの実力ならそう難しいこともないだろう。ならばこちらはパワー押しではなく、もつとスマートにこなして見せよう。

「まず後ろっ！」

「ぎゃいんっ！」

姿勢を落として足払いを狙ってきたゴモラをソバットで打ち返し、流れ作業的にミクラスに頭突きを与える。また何か仕掛けてくるであろうシンジ君の姿を、常に視界の端に捉えておく。

「なんのつメガトンテール！」

「尻尾の扱いなら一過言ある！」

「バツファフレイム！」

「熱線もね！」

ゴモラとミクラスの、それぞれの得意武器と同時に克ちあいながら、それぞれを押し返して見せる。

「押し返せないのが辛いな……。。」

「『悪魔のような怪獣』の呼び名は伊達ではないということさ。」

3人をダウンさせてフンと鼻で笑うと、トドメの一撃を用意する。空へ向けて熱線

を放つと、それが光と爆炎の雨となって降り注ぐ、悪魔の流星・ベムザッパ―。(ペイルザッパ―の方がよかったかも。)逃げ場を封じつつ、相手の数を選ばない、無難な選択と言える。

「これで・・・終わりっ!」

バツと手をかざすと、青い炎の幕が降りてくる。

「これにて終演・・・とはいかないか。」

その幕引きに『待った』をかけるようにババンツ!と弾かれて、甲高い音が木霊してくる。

「ひいーっ危ない危ない!」

「シンちゃんナイスフオロー!」

「これはツケにしておくね。」

しかし3人は無傷だった。青空色の生地に、目玉のような赤い斑点、つい最近見た覚えのあるデザインをした傘の下に守られていた。

「問われて名乗るも烏漕おこがましいが、青雲高く曇りなき、海月の伽話メルヘン『バリブレラ』!とでも名付けておこう。」

『キャッ!キャッ!ステキですわー!!』

成程、バリケーンの力か。名乗りをあげるにしては少々歯切れが悪いのを誤魔化すよ

うに肩にかけながら見得を切ると、観客席からも黄色い声上がる。中々様になるとい  
ると褒めてやりたいところだ。

「じゃ、ここはシンちゃんのお手並み拝見ということですか？」

「頼んだー！」

「OK、ちよつと休んでなー。」

バツチリ請け負った傾奇者がクルクルと指先で軸を廻しながら、一步一步踏み占める  
ように歩み寄ってくる。その表情は逆風なぞどこ吹く風の、自由人のように晴れ渡つて  
いる。

「余裕そうだね？」

「生憎空は曇りだけど、心は夏の空より晴れ渡ってますよ。」

「今はそうでも、一雨来そうだな。」

真夏の空は夕立に注意。雷を伴う積乱雲の発達が予想される。生憎天気予報師では  
ないので、どんな暴れ方をされるのかは見当が付かない。単独で出てきたということ  
は、それだけ周りに危害を及ぼすほどに苛烈ということだろうか。

じりっ……つと互いに隙を窺い、睨み合いが続く。



(どうした、何を狙っている?)

今の彼の表情からは、考えが読み取れない。本当に何も考えていない、ということはずまない。新しく力を手に入れて、その全様が自分にも咀嚼できていないとすると、『待ち』も一手かもしれないが、そんなリサーチ不足のぶっつけ本番は彼の性格からいって無い。

では制御が難しいというほどまでに力が強すぎるのか? そうでもない。彼はそういう身に余る力は嫌う傾向にあるから。持て余すぐらいなら最初から使わないのを選ぶだろう。

じゃあやつぱり、彼は今待つべくして待つてるのか。こういう時、彼なら舌の根も乾かぬ程に口八丁で挑発してくる。ならば先手必勝、つと踏み込みたいがそれもしたくない。

(このタイミングで、何をするつもりかは100%読み切れる自信があるが、101%信じるにはあと1つ足りない。)

どれだけ理論詰めしても、運命の悪戯というのは性根が悪く。何かしら想定外の事態が起こると、勘が告げている。怪獣娘としても、探偵としても。なにせ今、風は彼の方から吹いてきている。

「おっ?」

「ん?」

風向きの話をしたところで、彼は何かに気づいたようだった。どうやらそれは予想外のことのように、気が一瞬それたことが見て取れた。

『青色熱線』!」

「あつ、ヤバっ! パラソルガード!」

傘を前面に突き出して盾にするが、構えるのがコンマ一秒遅かった。直撃こそ免れたが、バランスを崩して無防備を晒す。

「考えるだけ無駄だったかな?」

「ぶふうっ!」

一足飛びで詰め寄り、顎を蹴り上げる。浮き上がった体の中央を打ち据え、最後に尻尾で絡めとって投げ捨てる。

「あぎゃあ……」

「だらしのない顔をするんじゃないっ。」

これで終わるか? 傘を杖にして立ち上がるその表情はまた読めないが、少なからずダメージを受けたことで揺らいでいる。

「臆さず攻めるっ!」

機は逃さない、自分がそうであるように相手にとつても頭を巡らすより早く体を動かす。自分でもよく動かさせたものだと感じするところだが、すこしばかり甘かったとこの直後思い知らされる。

「風が……吹いてくる……。」

それも命の色と力の乗った、春の風が。

(「これは……桜の花びら?!」)

既に都内のソメイヨシノは見ごろを終えた時分だと記憶していたはずだったが、どこからともなく桜の花びらが舞ってくる。美しさと儚さを備えた存在に、思わず心奪われた。

「ぐっ……『バリブレラ』……!」

その命の力の行く先は、シンジの手元、風を纏う傘へ。

「行けるっ！『サクラボルテクス』!!」

ドリル状に突貫する風の力に、サクラが乗ってパワーアップ！虚を突かれたのは今度はベムラーの方だった。

「おっ！やったやったー！ベムラーさんに一泡吹かせてやったぜー！」

「ラツキーがついてたおかげでしょ！」

「運も実力の内って言うじゃん！」

（ふっ……まるで空模様のように表情が変わるじゃないか。）

全く、見ていて飽きない子だ。こうして拳を交わしてみるのも、案外悪くない。

「もう勝ったつもりかい？甘く見られたものだな。」

「おっと、そんなこと、全然、ないですよ？」

「さて、ラツキーは二度も続かないぞ？」

「なら今度はラツキー以外で勝ってみせますよ！」

再び構えなおすシンジ君に、私も今度こそ真剣に向き合おう。サクラ舞い散るリングに、今は二人だけで相對する。

## ヘヴンズキャッスル②

『カップめんばかりじゃなく、3食しっかり食べる。』

『いい仕事と美容に悪いから、夜更かしはするな。』

『髭は毎日剃って、寝癖も整えろ。』

まるでお母さんのようなことをよく言われていた。実家の母に対しては手間のかからない子として振舞っていたつもりだったけど、一人暮らしをするようになってボロが出たらしい。指摘されるまで爪を噛む癖の事なんて考えたことなかった。

「ほう、八相の構えか。」

八相の構え、それは日本剣道の伝統的な構えのひとつである。得物を肩に担ぐ形で、重量による負担を軽減する。さらに左手を前に構えることで、籠手で首元の防衛も出来る。まあ今持つてるのは刀じゃなくて傘なんだが。

「朝雨が降った日の下校中の悪ガキみたいだな。」

良い子は傘を振り回して遊んではいけません。刀と違って傘には刃が付いていないため、柄以外も持ち手として機能するという利点がある。

「タイマンでの防衛には十分すぎるということ―」

「私の教えた技術でか！」

「それだけじゃないさっ！」

加えて護身術の一通りも教え込まされた今なら、どんなものでも武器に転用できる。例えば柄を相手の腕や脚に引つ掛けたりとか。見せびらかすようなものでもないけど。

「ちっ、探偵にステッキ術で挑むなんて、いい度胸してるじゃないか。」

「鍛えてますんで！」

『紳士のたしなみバリツ・ジツですのねー！』

「なるほど、借りているのは力だけではないようだな。」

「借金はこさえてませんよ？」

それがどうやらNGワードだったらしく、ベムラーさん眉間が狭まったのがちよつと見えた。後が怖い。

「ほーう、なら打ってこいよ。それほど自信があるというのなら。」

うわーコワイ。どうやら一番怖いパターンを引いてしまったようだ。自信の鼻を真正面から押し折りにくる、実力の差を嫌でも感じさせられるから。

「ならばこちららも、一点集中の奥義でシメる！」

腰を落とし、右手で構えた傘に左手を添え、真っ直ぐとベムラーの正中線を狙う。

「チエストオオオオオオオオオ!!」

半歩踏み出した右脚で加速をつけると、右手を思いつき突き出してブレイク・エースを獲りに行く。

「・・・見えたッ!!」

すうっと一呼吸ついたのが見えたかのその一瞬、捕えようと想定したものは異なる手応えが右手に走る。

「なんッ・・・?!」

目線を得物に移し替えた時には、それがもう丈の半分ほどがアケビのように割れている最中であつた。無論反応など出来る余地もないほどの一瞬の出来事に過ぎない。

「うっそだろ・・・。」

「聞きかじつただけの技術を実戦で試すものじゃないな。」

あとには時間が経って真っ黒になったバナナの皮のような無残な姿になった傘と、ビスと火花の散る柄だけが残っていた。それもベムラーさんの蹴りの一発で宙に放り出されて爆発四散する。

改めてベムラーさんの神業的技巧を、骨の髄まで教え込まれた。自分の持てる技術と心意気を込めた『一本』が、たった指二つ分の『一撃』で破壊されてしまったのだから。とまあ放心している暇もない、破られたならの次の策を用意するだけだ。

「ならば、サチコでどうだ!」

『サチコって呼ぶなー!』

次なる札は牙の生え揃った口に赤い目、そして大きな翼を携えたコウモリのような姿の怪獣。

「羽ばたけ! 『ザンドクロス』!」

ベムラーさんの攻撃をガードし、衝撃を後ろへ吹き飛ばすことで打ち消すと、その勢いで腰から黒い翼を開く。それと同時に先端が結晶で出来た槍があらわれる。

「飛行能力か、シンブルに強いな。」

相対者が決して自分に声をかけてきたわけではないということはわかる。あれはどいうやって狩ろうか、という算段を付けている眼差しだった。敵の上方をとれるアドバンテージは十二分に知っているが、それだけで勝てる相手でもないとも理解している。空飛べるだけで勝てるならキングジョーさんが勝ってる。

「つてことで、そろそろ助けて2人とも!」

「えー、まだイケるんじゃないのシンちゃん?」

「いいから手伝って! そんな甘い相手じゃないんだよ!」

「いいよーそろそろアタシも、体動かしたかったし!」

ここで息を整えさせた2人を投入する。タイミングとしてはここら潮時だろう。2人ともパワーファイターだが、じっくりベムラーさんの戦い方を学ぶことが出来た。敵



を知れば百戦危うからずと兵法書にもある。

「押し切るぞー!」

「ガンバルゾー!」

バツサバツサと大きな音を立てて、上空から威圧をかけながら隙を窺い、一撃加えたらすぐさま飛び立つイヤな戦法を用いる。魔界村に出てくるレッドアリーマーみたいなきだから実際ツヨイ。

「くそつ……ペイル……!」

「させなあい!」

口を開いたベムラーさんの顎をミクさんが無理矢理閉じさせると、ミカは自慢の尻尾をボディに叩きつけ、そこへさらにシンジは槍で叩く。囲んで棒で叩く、マツポーめいた所業であるが、数で押す戦法は人類史が始まる遥か以前より用いられてきていたため、これも実際ツヨイ。

「ツヨイにツヨイを加えて2ツヨイ!さらに下準備を重ねて2倍の4ツヨイ!さらに3倍の底力を加えれば、ベムラーさんを上回る12ツヨイだ!」

「どんな計算だ、どんな単位だ。」

そして再び、大技を決めるチャンス!さらに高く飛翔し、槍を宙空へと放り投げるとムーサントしながら脚でキャッチ。

『バッドスクリュージャベリン』!!」

翼が螺旋状に絡まり、ドリルのように標的を穿ちに行く。

「これは……ならば、『ブルーコメット』!」

「おわあっ!」

直撃は免れないと悟ったバムラーは、青い彗星となつて迎え撃つてくる。変身の余波に吹き飛ばされたミクラスとゴモラには、空中で火花を散らす円錐と球を見守るしか出来ないでいた。

「おっ、でもイケるんじゃない? シンジさんが押ししてるよ!」

「いけいけ! そんなボールなんか割っちゃえ!」

その声通じたか、青い球体には徐々に罅が入り始める。

「うっおおおお!! 貫けえええええ!!」

この機は逃さない、気合を込めなおすのに呼応してドリルの回転も上がる。漏れ出す高揚感を抑えもせずに、ただ一心にこの一撃に賭ける。

「おぉー!!」

「や、やった!」

ついに、ついに必殺の一撃が彗星を砕いた!!

「勝ったッ! トーナメント編、完!」

『ほーお、では一体誰がブルー<sup>事</sup>コメツト<sup>務</sup>を引き継ぐのか?』

意識の逸れた一瞬、その声が脳に直接響いてくるようだった。

『ピタツとな。』

「ピタ?」

否、脳ではなく頭蓋骨に触れられている。

「うわあつ！シンちゃん上、上！」

「上？」

「乗られてる！」

「ふあ？」

空中で静止し、言われるがままに視線を上へと向ける。

「黒い羽根に無骨な槍、ずる賢さもあるとは、まるで悪魔のような子だな君は。」

いた、ベムラーさん。大したダメージを受けているように見えなければ、逆にエネルギーに滾っているようにも見えた。

「ならばこちらも、本物の悪魔デビルの力を見せることにやぶさかではない！」

冷たい炎のようなオーラが怒髪天を衝く。その全貌を人々が目の当りにする暇もなく2人は墜落する。

「まさかこれは？」

「ひよつとしてひよつとするの？」

「そのまさかさ、これからは『デビルベムラー』とでも呼んでもらおうか？」

もうもうと立ち込める煙の中に立つ影には、悪魔めいた一對のツノが生え、全身の棘が青い光を放っていた。

かつて、宇宙の平和を乱す悪魔と呼ばれた宇宙怪獣ベムラーの、その強化態である。

「んもー！みんなみんなパワーアップしすぎだよー！せっかくEXは私の専売特許だったのにー！」

「やっぱスターたるもの変身のひとつ持つてないとねー。」

「呑気しないで助けて欲しいんですけどー！」

「とりあえずココナツクラツシュ。」

「ぐへーー！」

墜落してから足蹴にされていたシンジは、堅実かつ凶悪な技の一撃を貰った。とりあえずビールの感覚で脳を揺らさないでいただきたい。

「すまないが、もう手加減はしてあげないぞ？サービス期間終了のお知らせだ。」

「へーんだ、一回目無料で釣ろうなんてそうはいかないよ！タダより高いものなんて無いんだから！」

と言いつつもミカの反応はいたってクレバーだった。オーラが変わったことを人一倍感じ取っているのもまたミカだったから。かくいう自分自身も、喰らってみて一切手加減されていなかったと痛感した。すごい痛くて動けない。

「来ないのなら・・・こちらから攻めるぞ！」

「ぶへえ！」

シンジが腹に鈍重な衝撃を喰らってサッカーボールのように蹴り飛ばされるのをミカとミクラスは予定調和のようにキャッチしに行く。

「うわっ！思ったより重いつ！」

「どわつととお！」

2人の手に返ってきたのは想像を超える威力だった。この判断に、ミカは冷や汗を垂らした。

「君ら全員、ちょっとばかり戦いを舐めちゃいない？」

剛腕を振り下ろすと、大地を切り裂く衝撃が、態勢の崩れた3人へ向かっていく。

「これって・・・?!」

「レットキング先輩の『アースクラッシュャー』!?」

その技の本質を理解したときには、打ちあげられて空の上だった。1人空中で一回転して、反撃に移ろうとするミカにベムラーさんの黒い尻尾が巻き付く。

「あぎやー! エレちゃんの『エレクトリックテール』?!」

「まさか、デビルベムラーさんは全ての怪獣の技が使えるのか?!」

「なんで?」

「原初にして頂点だから、じゃないかな?」

「なにそれかつこいいじゃん!」

なんともアバウト設定だが、それでもなければ説明がつきそうにない。アースクラッシュャーはともかく、エレクトリックテールに使う電気はどこから生み出しているというのか?

「ぐぬぬ・・・たとえ真似されようと、本物のパワーには勝てないハズ! 『超振動波』

!!」

「おつしやー! 『エレクトロホーン』!!」

「ライザーショット・・・あつ、弾ないや。」

いつの間にか愛銃の残弾を使い切ってしまったために、一斉砲火に参加できなかった。一応もう一丁ぶら下げているわけだけど、こっちはまだ使い時ではないと考えて温存している。まあ抱え落ちなんかしたら洒落にもならんのだが。

ともあれミカとミクラスの攻撃は次々と命中していく。だがそれらすべてがツノに吸収されていく。

「燃え尽きろ、『ハイパーペイル熱線』!!」

お返しとばかりに青色熱線のリボンで巻かれてプレゼント。

「つつよー!!ベムラーさんつつよい!!」

「しかし、この熱線のパワー・・・まるで!」

まるで黒<sup>ゴジラ</sup>き王となった従<sup>アイラ</sup>姉妹を思い出す。

(ひよつとしたら、技に必要な器官もその場その場で『作っている』のか?ゴジラの進化のように・・・。)

脳裏にひとつビジョンが浮かんだが、すぐにそれを棄てて現実に向き直る。もうデビルベムラーの姿は目の前にまで迫っている。

「シンちゃん、なんか作戦ある?」

「・・・ない!」



「じゃあ、力尽くだあ！」

力尽くで上手くいくなから最初からそうしている。力や技でどうにかなる問題を明らかに超えてしまっている。

「ええい、こうなったら破れかぶれだ！ミカ、奇襲かけて！」

「おけーい！」

一応攻撃のセオリーには則っておく。死角、弱点を突くのである。

「ミクさん！押さえて！」

「まかしてー、そーいっ!!」

「ほんで私が後ろからドーン！」

「ミエミエだ、『鉄山てつざんこうねっせん靠熱線』!!」

「ぶべー!!」

「う、後ろからも熱線を．．?!」

剣山のような背中の棘からも弾幕の如き熱線が噴出し、ミカを吹き飛ばした。いよいよもって手立てがなくなってきた。前も後ろもにつきもさつきも行かなくなった。

「そろそろギブアップの時間だ。Are you ready?」

「ノウ！絶対にノウ！」

「なら．．．。」

片手で掴んでいたシンジが投げ飛ばされ、ミクラスは片方のツノを掴まれる。その光景を見て、ミカは鳥肌が立った。

「やばっ、ゴルザちゃんの技じゃん!」

「なにつ、『角折り刑』か?!」

「ぎえっ!? ヤダヤダー! 折られたくない!」

意図を理解した者たちが止めに入るが、無慈悲にも処刑人の斧が振り下ろされる。そこには目を覆わんばかりの惨状が……、

「ちっ……完全には決まらなかったか……」

「いっだーい!!」

広がってはいなかった。半泣きになったミクラスが転がり込んでくるのをシンジが受け止めると、すぐにそのわけが理解できた。

「ギャツ!! シビれ、シビれるうう!!」

「あつ、ゴメン……折られると思っいたらつい放電しちゃってた。」

「さっすがミクちゃん、持つてるじゃん!……半分ぐらい折れてるけど。」

「ガーン! ホントだ!」

見ればベムラーさんも恨めしそうに手をひらひらとさせている。熱々のストープに手を置き続けるよりもキツイダメージを喰らっただろう。

「・・・ミクさん、ちょっと休んでて。」

「え、アタシまだイけるよ?」

「ミクちゃんの本命はレッドちゃんでしょ? ベムラーさんは私たちでなんとかするから、ミクちゃんは温存しといて!」

小さな蠟燭のような希望かもしれないが、暗闇の中でなら何よりも有り難い光明が見えた。

「これは、『流れ』来てるかもよ? シンちゃん。」

「そう? 余計に火に油注いだだけかも。」

「なら燃やし尽くすだけだよ。」

「どっちが燃え尽きるのが先になるかな?」

「おつ、シンちゃん燃えてるじゃん!」

「焚きつけられちゃったからね。」

この大会の中では、いつも逆転の一手を打ってくれて来たのはミクさんだ。今度は僕の方がしつかりしないとカツコがつかない。

「あつ、そうだ。ミクさん、ツノ見せて。」

「ほえ? どう? どんな感じなってる?」

と、先立つ前にひとつだけやっておくことがある。リストバンドをほどいて、中から

合成繊維のカートリッジを取り出すと、指でこねて折れたツノをさする。

「はい、これでギプス完成。これで少しは安心でしょ?」

「えっ、でもいいの? リストビュートが……」

「いいの、もう在庫少なかったから。あとはなんとかするから、それじゃあミクさん。」

「うーん……あのさあ。」

「なに?」

「それやめない? 『ミクさん』っての。今はパートナーなんだし。」

そう言われてみればそうだ。ついさん付けにして呼んでいたが、特に憚<sup>はばか</sup>る理由もない。あえて言えば癖だ。

「オツケー、ミクラス! 行ってくる!」

「うん、がんばってシンちゃん!!」

「シンちゃんゆるな。」

でも僕をちゃん付けするのは許さない。ハズカシイから。

「用意はいい? シンちゃん?」

「ねちっこく言うなねちっこく。」

「またまたー、ハズカしがってシンちゃんかわいいなあ?」

「集中!」

「ハイハイ。」

「ところでミカ。」

「なに？」

「ここまで勝ちフラグ立てておいていざ負けたら、」

「負けたら？」

「思いつきり泣くからその時は慰めてくれる？」

「いいよ！いい子いい子してあげる！」

「じゃあ安心した、行くぞおおおおい！」

「おーっ！怪獣特攻作戦だー！」

## へヴンズキヤツスル③

「シンちゃん、作戦ある？」

「ある！」

「さっきは無いつて言ってたのに？」

「後を全部ミクラスに任せていいのなら、ある！」

もーシンちゃんったら、出し惜しみなんかしてたらこの先生きのこれないつてのに。まっ、そういう慎重な性格だつて知つてたけどね。

「それ私はなにすればいいのかな？ いや、やっぱり言わなくていいや。」

「ああ、そういうことだ！」

軽く視線を交わすと、すぐに真意がわかった。ちよつと難易度が高いけど、これぐらのリクエストに答えられてこそその人気者だよな！

「もうキミにはEXになる活力も残っていないだろう、これ以上どう戦う？」

「ふっふーん！ こっちにだつて『可能性』があるっ！」

「その通り！」

ちよつと変わったのが、今度はシンちゃんも積極的に前に出てきてるってトコ。

「へーっ、間近で見るとそれなんかキラキラしててキレイだね?」

「うん、パワーの増減で月みたいに形も変えられるんだ。」

「それって私のこと意識しちゃってくれているとか? んもーシンちゃんってばー!」

「別にそんなわけじゃ・・・。」

「このこのー!」

「イチャついてるんじゃないぞ若者!!」

痺れを切らしたというかキレたベムラーさんが襲い掛かってきた! ワーコワイ W

「ベムラーさんってシンちゃんのことスキなの?」

「ドワアー?!」

「隙だあ!」

「あぶねえ! ミカタにも当たる口撃はやめるんだミカ!」

「爆弾発言だけにね!」

「なにを言うかと思えば、私は別に年下趣味でもないぞ!」

「ウツツだー! シンちゃんを見る目がハートになってるくせにー! アギちゃんと同じく!」

『んもー! 言わないでってばー!』

「ええい、なんとという範囲攻撃だ!」

「無差別にもほどがあるぞミカ！」

「そういうキミこそ、そんなにライバルを増やしまくって何が楽しいんだ？」

「楽しいよーみんなを巻き込むのは！一緒になってシンちゃんをイジるのも！」

「フアツ?!」

「そんなキミのところではシンジ君もかわいそうだろう？私がもらってやろう！」

「フアツ?!」

「独り占めは禁止ー！」

この一連の発言に、一切の遠慮も嘘もない。闘志をむき出しにした戦いに、自分とベムラーさんのお互いの、その心の中身まで表面に出てきていると感ぜられる。

「ほらシンちゃんもなんか言っておいて！」

「急に振るな！」

「これ以上何も言わせんぞ！死ぬええ！」

「死ぬか——まだ何も言っておせんぞの！」

ベムラーから繰り出される鋭利な手刀と、シンジの持つ三日月の刃が鎬を削るが、ベムラーの力によってえそれが押し切られ、返す刃で逆に切られる前にゴモラが割つて入る形。ここにきて、2人の連携はさらに高まっている。

「人間、死ぬ気でやればなんとかなるもんだ！」



「その意気だよシンちゃん！私のパートナーの強さをみせてやってよ！」

「ああ！ミカこそ置いてかれるんじゃないぞ！」

「へっへーん！もうシンちゃんを追っかけるちっちゃなミカちゃんじゃないんだよ！」

「だからイチヤつくくな！」

ゴモラがシンジの肩の上に飛び乗ると、シンジはそれを両腕のカタパルトで打ち出す。

「ひっさーつ『メガトンテール!!』」

「ぬんっ!!効かぬわっ！」

「シンちゃん！私を受け止めてー！」

「おっしやー！」

跳ね返ってきたゴモラと腕を組んで、その反動を利用して独楽の様に廻す。

「名付けて『メガトンテール・ツヴァイ』!!」

不意の反撃に判断が遅れ、ベムラーは咄嗟の防御を強いられる。

「ぐっ！なんとという重さ！」

「これが友情パワーだ！」

「愛情じゃないの？」

「まだ違う！」

「だからイチチャつくな！」

ベムラーも負けじと尻尾を振り回してくるが、これをシンジとゴモラは上半身を反らせて回避し、バネのような跳ね返りパンチを放つ。これも寸分違わぬタイミングでベムラーにヒット！面白いようにポコチャカ当たる。

「ええい鬱陶しい！そうやって私の注意力を散漫させるつもりかもしれないが、私は注意力を散漫させたりしないぞ！」

「既に語彙力が落ちてきているのを見るに、ちよつと効いてるっぽい。」

「これが漫才の力だ——！」

「夫婦漫才てやつ？」

「イヤン、夫婦だなんてシンちゃん気が早い……。」

「イチチャつくくな——！」

怒号と共に青色熱線がベムラーの口から飛び出す。すつと前に立ったシンジが、スティングガーを振るうと、炎が一瞬止まる。そこへまたすかさずゴモラが助太刀に入り、超振動を浴びせて熱線を打ち消す。攻撃によし、防御によし、回避によしと超振動波は超便利波。

「そして今回は、この便利さに賭ける——！」

「どうやるのさ?」

「僕の超振動とミカの超振動、二つで一つ!」

「あいわかった!」

2人のコンビネーションに、余計な言葉すら必要ない。それは今までの動きで証明されている。あらかじめセットアップしていあわけじやない、少なくとも『今日』は。

「ではなぜ、ここまで動きを合わせられる?!」

「パートナーだからさ!」

『パートナーに合わせる』のではなく、『パートナーの考えを先読み』するのが真のパートナーシップだ!

「やっぱ2人でいると心地いいんだ!しつくりくる!」

「私も!シンちゃんといるとすっごい楽しいよ!」

趣味はあんまり合わないし、性格も方向が違う、時に不協和音な2人。けどいつも一緒にいることが当たり前。理解とは、違いを受け入れること。

そんな2人がステップを踏んで、時に背中合わせで、時に横に並んで、剣戟がハーモニーを奏でる。

「これが・・・人間と怪獣娘のパートナーシップの力・・・!」

追い込まれているにもかかわらず、ベムラーは心なしか嬉しそうな声を漏らす。かつ

てのベムラーには、到底思い至らなかつた光景であるから。

最後のステップが踏まれる。横方向に体を傾けて『英雄のポーズ』のようにステインガーを突き出すと、その肩に手を着いて空中側転でゴモラがベムラーの背後に回り込む。

「この状況から挟み撃ちを?！」

「これが僕たち(ボク)の、『マスターピース』!!」

背中からのゴモラの突進でベムラーが前へ押され、差し出されたステインガーに押し込まれる。シンジは前から、ゴモラは後ろから、

「『超振動波デュオシユート』だあああああ!!」

ちようどベムラーの心臓が中心となる点に、二つの超振動の波動が共鳴(シンフォニー)する。

「ぐうおおおおおお!!」

超振動がベムラーの体内で暴れまわり、そこら中を破壊しつくす。さしもの強化態であろうと、内臓まではカバーしきれない。

「こうなれば・・・奥の手!!」

ベムラーの背中が発光し、再び熱線を吐く前兆が見える。しかしその対象は密着しつているため、このままでは当たらない。

「苦し紛れえー!」

「いや、これはまさか!」

「その通り、私は苦し紛れなんてしない!」

その宣言通り、喉まで出かかった青色熱線をベムラーは『飲み込んだ』。

『体内放射』ア!」

シンジの腕と、ゴモラのツノに衝撃が襲い掛かってくる。

『超振動波』を・・・跳ね返された?」

体内で青色熱線のエネルギーを心臓で爆発させ、超振動波もまとめて送り返してこの窮地を脱する。

「くっ・・・この手ごたえ、ゴルザちゃんの時と同じっぽい?」

『リアクティブアーマー』か・・・」

「リアクシオン芸?」

「違う、例えば爆風をわざと起こして、攻撃を逆に吹き飛ばして防御する装甲のことだよ。ゴルザさんも、ミカの超振動波をマグマエネルギーで打ち消していたんだ。」

「私のはその発展型さ、打ち消すだけでなく、利子まで乗せて返させてもらった。」

無論ダメージはゼロというわけにはいかない。波動と熱線を心臓の鼓動で増幅させたために、心臓に大きな負荷がかかっている。

「べ、ベムラーさんがこんな捨て身の作戦に出るなんて思わなかった・・・。」

「私のキャラじゃなかったか？私も驚いているよ、ここまでハングリーになれるなんてな。」

「そんなに・・・シンちゃんが欲しいの？」

「うん、欲しい。」

「即答！」

「助手にな、あくまで助手。」

うえっ！といううめき声が聞こえた。モテる男の悩みってやつ？イヤよイヤよと言いながら、内心まんざらでもないんでしょ？って言いたくもなるのを今は飲み込む。

「でも、ベムラーさんも相当キツいはずだよね？」

「そうとも言えない。こうして強化変身を解いてしまえば、その分を体力の回復に回せる！」

「な、なんだってー！それじゃあ・・・。」

「私の方があと一歩、長く歩けたようだな。」

ツノを消し、青い発光も止めながら、ベムラーは歩を進めてきた。要塞の防御は攻略できた。決して小さな犠牲ではなかったが、それを補ってあるほどの成果を得られたので重畳といったところだ。驚いたゴモラの顔を見るに、それで『詰み』だと確信できたので、いよいよもって制圧を開始する。

「まさか……こんな……。」

「なんだ？今更その程度のロックでは揺るがないぞ！」

至近距離まで近づいたところで、ゴモラが足を掴んでくる。最後のあがきか。軽く蹴散らすことも出来たが、ベムラーはそうしなかった。

「ここまで上手くいくなんて思いもしなかった！いやー、まさかシンちゃんがここまで考えてたなんてなー！おどろいたなー！」

「えっ、あつ、うん。全て計算どーり！」

否、そうできなかつた。

「何を……した……?!」

ベムラーは、自身の体の異変、突然身動きとれなくなつたことに驚愕した。すぐさまその元凶と思われる方に目を向けると、案の定だつた。

「本当は、ゼットンさんへの切り札として用意してたものだったんだけど、温存すら出来なかつたわかつたからには切らざるを得ないよね……。」

「だから出し惜しみはなしだつて言つたじゃん！んもー、シンちゃんこれで抱え落ち

してたら一発芸じゃ済まさなかつたからね！」

「それはもつと怖いな。『無重力弾』、作っておいてよかった。」

無重力弾、という大層な名前であるが、その実はそんな大したものではない。もう一発の弾とワンセットで初めて効果が出るという中途半端な代物である。

「もう一発、『ペンシルロケット』！行けー！」

「来なよー！」

そのもう半分がこの鉛筆のようなロケット弾。この二つは本来観測用、兼、電波受信用の小型衛星を改造したもので、空中で固定させる重力安定装置と、打ち上げるための推進ロケットがそれである。

ロケットはスピードと馬力こそあるものの、炸薬も何も積んでいないため、ぶつかってもちよつとよろめく程度。無重力弾は本来小さな衛星を固定させるもののため、ほんのわずかな間相手の動きを不自由にさせる程度の力しかない。

しかし、その組み合わせでもって、この試合のルールがあれば十分な脅威になりえた。「バカな！こんなところで捨て身の道連れだど？」

「いいし、私元々敗者復活枠だったし！」

「キミはそれでも私はファイナリストだよ！」

「ゼットンちゃんいないから元々無効だったでしょムラーさんも！」



「うがー！こんなところで負けたくないー！」

ゴモラがベムラーを捕まえ、ペンシルロケットが場外へともろとも押し出す。あまりにもあんまりな、あつけない最後だ。

最後のベムラーのものがきも空しく、湿気た花火のように場外通告がなされる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「終わった・・・すべてが・・・。」

「つて、シンちゃんのチームはまだ生きてるでしょ？私は今度こそすつてんでんだけど。」

「それはそうなんだけど、なんかもう僕は満足しちゃったかな。全部出し切ったし。決勝戦はまだ続いているが、残ったもの同士でミクラスとレッドキングお互いにクールタイムをとっている。

「はいはい、勝って兜の緒を締めよつてね。今のミクちゃんによろしく伝えておいてね。」

「うん、ありがとうミカ。」

「勝つたならあとでご飯奢つてよね？」

「はいはい、粉もんでしょ？」

「もつちろん！」

じゃねつ、とミカはサムズアップしながら舞台袖へと転進していく。これ以上の言葉はいらない、あとは背中同士で語るのみ。

「さて……とは言ったものの、本当にこれ以上なにも出来ないとは思うんだけど……。」  
超振動波を押し返された時、モンスアームズも破壊されてしまった。それに銃の残弾ももうない、体もボロボロ、これ以上なにかをしようにも、無い袖は振れない。

「ギュツ、と。」

「あでえつ！もつと優しく……。」

「キツくされるのが好きなくせに？」

「それは誤解だつて！」

そんな袖口に包帯代わりのハチマキがまかれる。同時刻、エレキングさんを倒したマコさんだ。

「うん……ありがとう、もうちよつとがんばつてくるよ。」

「そう……がんばつて……。」

先ほどまでの考えを振り捨てて、ここまで来たならもうひと頑張りしよう。色んなものを背負ってしまったらしい。

「……他に。」

「他？」

「他になんか、ないの？」

「なにが？なにを？」

「・・・わかんでしょう？」

「うーん・・・。」

はて、困ったなど。酸素と栄養が脳まで回らないから、旨く言葉を紡げない。ここはありのまま思ったことを、

「ちらつとしか見れなかったけど、さっきのマコさん、すっごいカッコよかったよ！」

「カッコいい・・・？」

「うん、カッコよかった。」

「・・・ていつ。」

「いつてー！ナンデ？！」

「胸に手当てて考えてみるっての！って、どこ見てんのよ！」

「アイエエエ！まだ何もしてないのに！」

「鼻の下伸ばしてたでしょ！」

グリグリと傷口を弄られ、さらなる悲鳴を上げるがこれも喝だと受け取った。最後の最後まで気合を抜かずにがんばろう！

「じゃっ、アタシはもう行くから。グッドラック！」

「ラージャ！」

さあ気持ち切り替え、立ちはだかる壁に向き直れ。これが最後の正念場になる。

「シンジさん！」

「ミクラス！調子はどう？」

「勇気凛々！いつでも行けるよ！」

「今のレッドキングさんのパワーは相当上がってるし、熱もすごい。これに対抗できるのは既にミクラスだけだったと思う。」

「うん、ようやくアタシの活躍するだね！」

「負けてもご飯奢ってあげるから、思いつきりやつちやつていいから！」

「ご飯だけじゃイヤだな！デートもして！」

「オツケー！」

「それに、いくらレッドキング先輩が相手でも、負ける気なんてさらさら無いからね！」

「オツケーオツケー！」

「あとそれから、今回付き合ってくれてありがとう！最高の決勝戦にしてみるよ！」

「オールライト！レッツゴーだ！」

「おおー！！」

今、  
本当の最終決戦が始まる！

## 語るは『拳』

『さあみなさんお待ちかね！これが正真正銘最後の戦いです！勝つのはどっちか！』

「待ちかねたぜ！あんまりにも長いんで昼寝でもしようかと思つてたところだ！」

「こつちも準備は万端ですよ！」

思えば長い一日だった。朝早くから準備をして、現在日もくれたゴールデンタイムに突入している。雲行きも怪しくなってきたので一雨来る前に退散したいところだが、まだまだヒートアップしそうだ。

「つていうかメツチャ暑くない？」

「レッドキング、いやさEXレッドキングの高熱の体温のせいだろう。まるでサウナにいるようだ。」

梅雨にはまだ早いけど、蒸発した水やらなんやらで不快指数も上がっている。フィールドに立っていないたちの額にも汗が滲み始める。

「オルアツ！」

「てりゃー！」

その熱風の渦中にぶつかり合う二つの影あり。片や、バッファローの臂力を持つカプ

セル怪獣ミクラス、片やマグマの力を宿したどくろ怪獣EXレッドキング。拳と拳が克ち合うたびに衝撃が熱波となってバラまかれる。それをもろに喰らっても2人とも平気でいられるのは、2人とも熱に強い体質のおかげである。

「うわー！髪がコゲるコゲる！」

無事でない者が約一名。若干伸び始めていた髪の毛がチリチリに焼かれ、アフロ一手前の状態になっている。そんなシンジは慌てて遮蔽物に身を隠し、直接熱波を喰らわないように心がける。

「塹壕でも掘っておくか……。。」

スコップもツルハシも無いよ？一応、先ほどまでの戦闘の余波でフィールドにはあちこち穴が開いているので、それらを繋ぐだけで一応は塹壕の体を保てる。熱風の直撃は防げるし、敵の視界から消えられるのは実際オトクだ。割れた岩の破片やらを拾ってエシヤコラと腕を振るう。

「オラオラア！威力が落ちてきてるぞミクラスウ!!」

「くうっ……。まだまだあ!!」

純粹なパワーでならミクラスも決して負けてはいなかっただろうが、レッドキングの剣幕に気圧されてか、徐々に押し負け始めていた。

「タツクルで足元掬えミクラス！」

「そうかつ！」

『ミクラス選手、レッドキング選手のマウントを取ったあ！』

レッドキングの不意を突いての、下半身へのスピアータックルが功を制す。

「スピニングトウーホールドだ！脚にダメージを集中だ！」

「いつもかけられてるやーっ！」

「ちいつ、小癩な！」

EXとなったことで腕が発達しているが、反面下半身とのバランスが悪くなっている。まずは脚を攻撃することでそのバランスを崩す作戦だ。

「このっ！いつまでもやられてばっかじゃねえぞ！オラオラオラー！」

「ぐはっ！ぐうっ！ぎゃんっ！」

しっかりと脚を固めるミクラスに、レッドキングの撞木のような拳が突き刺さる。1発、2発と耐えるが、3発目でミクラスは音を上げる。

「爆熱、ラリアアアアアット!!!」

『レッドキング選手、強烈なカウンターだあ！』

剛腕がミクラスを搔つ攫い、勢いよく吹き飛ばす。一瞬気を手放したミクラスの手が地面を掴むと、少し引きずって立ち直る。

「まだまだあ！『フレイムロード』！」



レッドキングが勢いをそのままに大地へと拳を振り下ろすと、地割れが走ってマグマが噴出する。

「やばっ！」

「！ ミクラス、その場で待機!!」

「え？ら、ラジャー！」

バリバリと広がる炎の道筋がミクラスに向かってくるが、それらは全て標的から逸れていく。

「おー、シンジったら、ナイスセコンドじゃん。」

「やっぱり頭脳労働の方があつてるようね。」

「わたしがそだてた。」

「はいはい。」

ふふん、と誇らしげにベムラーが胸を張る。

「頭に血が上つてるようで、案外クレバーな戦い方するねレッドちゃん。」

「クレバーな人はフレンドリーファイアしないとと思うわ。」

「エレちゃんまだ根に持つてる？」

「べつに、怒ってなんていないわ。呆れてるだけよ。」

むすつとエレキングが不満そうにしているのを、珍しくゴモラは宥めに回る。気分が

高揚しているせい、普段のクールな態度とは打って変わってちよつと子供っぽい仕草をしている。そんな珍しいエレキングにゴモラはニヤニヤ。

「これは、明確な勝ち筋は見えなくても、対処法はいくつかあるかも？」

「そんなもん、すぐに見えなくさせてやるぜ！」

「あいにくメガネはいらぬぐらい目はいいほうなんで！」

「すかさずブローック！」

引き続きミクラスが戦うことに変わりはないが、ちよくちよくシンジが茶々もとい指示を出すようになった。これによって40%の効率アップを見込めるだろう。

「その数字の出どころはなに？」

「あの子の前髪が跳ねてる確率。」

「へー。」

「興味深いわね。もつとないのそういうの？」

「おつとお、エレちゃんが乗ってきたぞお？」

「この後謎の協定が布かれたことはさておき。」

「うおおおお！爆裂パンチー！」

「なんの、ドロップキイック！」

激しくぶつかり合う力！シンジはただ震える、到底及びもしない領域に。

「めちやくちやだ、どっちも！」

やはり人間にはついていけない。マグマ煮えたぎる火口のようなリングで生きられうような怪獣も決して多くはないだろうが、それにしたって熱すぎる。即席の塹壕から上半身だけを乗り出して様子をうかがっているが、汗をかく暇もないぐらいに辟易とし始めている。

「うだらあ！くたらばれあ!!」

「ぐわー！」

『ミクラス選手吹っ飛ばされたー!』

「うおおおおキャッチ！」

「ナイスシンジさん！」

「まとめて吹き飛ばよやあ! 『フレイムロード』!!」

「うわあああああ！」

今度は完全に焼き尽くすために放たれた炎の道が、折り重なったシンジとミクラスを襲う。

「なんか、違うなあ。」

「なにが？」

「いつもレッドキング先輩と違う。」

「そりや違うでしょEXなんだから。」

地を駆ける炎の道は、塹壕の方向へと誘導され、わずかに2人をかすめただけで済んだ。

「チイツ、どこ行きやがったあ？引き吊りおろして細切れにしてやらあ！」

「ね？違うでしょ？」

「うん、ちよつとヒールをエンジョイしすぎだわ。」

2人は物陰から怨嗟の叫びを耳にして震え上がる。厳しさの中にも相手を見極める優しさがあつた先輩の姿は見る影もない。そこにいるのは冷酷に血を求めぬ獣である。

「そこかーっ！」

「違うんだなあ。」

「とうとう判断力すら失つたのかしら？」

「あれはおそらくプレッシャーをかけているんだろう。性格の豹変ぶりはさておき。」

「あわわ、どうする？」

「ちよつと休もうよ、こつちのことまだ見つけてないみたいだし。」

「アタシはまだまだ平気だよ？」

「気づかないところで結構消耗してると思うよ、あの熱量に至近距離でいると。」

機関車と相撲を取るよりもさぞかし苦労しただろう。パワーだけでなく、触れること

すらままならぬ炎の塊に触れるなど愚の骨頂。まったくクールじゃない。

「ほい、タオルいる?」

「うん、けどシンジさんのほうがヤバそうだよ? 顔真つ赤だし。」

「マジ?・・・そうか、こういう手もあるか。」

「おっおっ、どんな手?」

「マジでどこ行きやがったー・・・! ぜえ・・・ぜえ・・・うおらっおらっ!」

「ここだー! 『バツファフレイム』!」

『ミクラス選手、レッドキング選手に炎を浴びせかけるー!』

『炎に炎をぶつけるとは一見無意味な攻撃に見えますがこれは・・・?』

「火は火をもって制す! シンジさんのよく言ってるやーっ!」

「火が効くかあ! オレは火を飲み込むマグマじゃけえ!」

ブンブンと腕を振り回してレッドキングは熱戦を払うが、おかまいなしにミクラスは砲撃を続ける。

「どれだけ熱せられようが無駄だぜ! 俺は熱さを感じねえ!」

「そこが落とし穴だ! ミクラスは休んで!」

「タツチこうたーい!」

ひとしきり吹きかけ終わるとミクラスは身をひるがえし、陰で待機していたシンジと

入れ替わる。

『おっと今度はシンジ選手が前に出るようですよ?』

「へッ、シンジなんかに負けるレッドキングじゃないぜ! 喰らいやがれ!」

「それはどうかっ!」

「なん・・・だどっ?」

『レッドキング選手投げ飛ばされたー!』

「たしかにあなたは強い、しかしそのパワーアップに完全についていけない!」

「なんだとお?」

「その証拠にあなたは今『汗をかけていない』!」

「それが・・・どうした・・・?」

「汗をかけなきや、体内に熱がこもって不調をきたす。日本じゃそういうのを『熱中

症』っていうんだよ!」

「ねーエレちゃん、『熱中症』ってゆっくり」

「言わないわよ?」

ビシッと指摘してみせると、レッドキングの体は膝から崩れ落ちる。指摘されて初めて、自身の体の変調に気づいたのだった。

「オ、オレとしたことが・・・そんな初歩的なスポーツの基本を見落としていたなん

て……！」

「それでも変身は解除しないのを見るに、リスクを押ししても力押しに来ると見た！」

「ここまで来て、止まれねえんだよ！」

「ミクラス、チェンジ！」

「おーけえい！」

そこからはシンジとミクラスが代わる代わるレッドキングに波状攻撃を浴びせる。

(これは勝ったな、完全に流れ来てる。)

勝利を悟ったシンジは、中途まで辿り着いて歩調を緩めたメロスのように力を抜いた。決して油断はしていない……とは言い切れないが、それでも重圧から解放されようとしている最中なので、知らず知らずのうちに腕の力を抜いてしまっていたのだ。た。

「スキだらけだオラア！」

「ぐわっ、しまった……。」

「舐めてんじゃねえぞ、『タワープリッジ』イ!!」

そうして見事に捕まるであつた。頭上に掲げられて、背骨がミシミシと悲鳴を上げる。

「ぎえええええ！ミクラス助けをおおお！」

「おっけい！」

やる気満々にミクラスが援護に回る。殺る気にまかせてまとめて吹き飛ばされないことを祈る。

その警戒の薄い姿を見て、レッドキングがニヤリと笑う。

「消えかけの炎には火の用心だぜ、『バックドラフト』オ!!」

シンジを放り投げると、両腕を胸にたたきつける。そこを中心として、突如強烈な爆風が広がり、2人をの悲鳴と意識をその渦で飲み込む。

『な、なにが起こったんだ・・・?』

『バックドラフト現象が起こったようですね・・・密室で酸素不足により消えかかってきた炎が、新鮮な空気を浴びたことで急激に勢いを取り戻す現象です。』

「こ、こんな方法で切り抜けてくるなんて・・・。」

「それだけじゃないんだぜ?」

前後不覚のままよろよろと立ち上がったシンジの両肩に、重い衝撃が喰ってかかる。

『なんと、レッドキング選手健在! 逆に足枷となっていたEX化も解けている!』

「今のでエネルギーを全部解き放ちましたんでな、おかげで今は体が軽いぜ!」

「ば、爆風消火の要領で・・・?!」

「なんだそれ? あー・・・うん、そうだ。それな爆風消火。」



レッドキングは無意識のうちにやっていたようだが、体に停滞していた余剰エネルギーをバツクドラフトですべて吹き飛ばしたことにより、強制的にEXも解除したのだった。

「さて、もういいか？今までさんざん好き放題やつてくれたからな、今度はオレがかわいがつてやるぜ！」

「やだもー！なんかこんな役回りばかり！」

女の子に抱き着かれるなんて役得じゃないか！と文句があるやつがいるなら、今すぐ代わつてやりたい。ベアハッグでまたも背骨がミシミシと悲鳴を上げ、肺から空気が圧迫されて息もできない。

「ごああああ……がつはあ……」

「まだまだ気をやるんじゃないやねぞ？でなきやオレの気が収まらねえからなー！」

「シンジさん……、くっ……」

頼みの綱のミクラスは、まだ立ち上がれていない。となれば自分でなんとかするしかないが、締め上げられている状態ではペチペチとしたチョップしか出ない。同時に意識も遠のいていく。

（あ、これマジで死ぬんじゃないの？）

これはあくまで試合であるが、そう思えてならない。明らかに手加減とかを忘れ去つ

た目をしている。軽く判断能力が飛んでいるのかもしれない。

「(ぎ)っ……。」

「まだか？まだくたばらねえかオイ?!」

脳に血が廻らずに、上半身がへにやりと後ろに折れ曲がる。その虚ろな目には跪くパートナーの姿が見えた。なんかしてる。

「ぬっ……おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおああああああ!!」

「ぐわっ?!いつてえ……これは!」

「ミク……ラス……のツノ?」

白く、やや曲がった槍のようなツノが、レッドキングの腕を崩している。が、その端には本来あるべきミクラスの頭が見えない。

「お前……まさか自分でツノを?!」

「折ったの?ツノを?」

一目瞭然、ミクラスの片方のツノ、折れかかっていたのを応急処置したツノが無くなって、代わりにレッドキングの腕に刺さっている。

その瞬間レッドキングの腕から力が抜け、その隙にシンジは抜け出す。攻撃を受けた痛みではなく、ミクラスの思いがけない行動にあっけにとられたことが大きい。

「ミクラス……お前……。」

「ミクラス！なんてことを！」

「へへ・・・シンジさんやられてるの見てたら居てもたつてもいられなくて・・・。」  
「友達を助けるための傷なら勲章ものだよ！よく言うじゃん、『救うために傷つくのが友情だから』って！それに、レッドキング先輩の相手をするのはアタシだったはずだよ！」

「・・・半分呆れてるんだよなあ。」

「なんでー?!」

ミクラスのもとへ駆け寄ったシンジの耳元に、ブンツという風を切る音が響く。その音源をミクラスが手を伸ばして掴む。

「お前の覚悟とガッツ・・・確かに見たぜ。」

「そうっすか？いやあ照れるなあ！」

「けど、だからこそ俺は手を抜かねえぜ！」

「オウ！アタシだつてまだ燃え尽きてませんよ！」

勝手に盛り上がって燃え上がってくれている。熱すぎについていけないシンジは、駆け出すミクラスに渡されたツノを握りしめて問いかける。

「僕に、何ができる・・・?」

違う、それじゃあ自分の限界を超えられない。自分を傷つけても構わないほどの信

頼、それに応えられるものは自分の中には無い。

「どうりやあああ!!」

「どうした! さつきまでの勢いがねえぜ!」

「そんなはずなあい! アタシには仲間がいてくれてる!」

ミクラスはそんなシンジの考えの上を行っていた。ただいてくれるだけでいい、それだけで力が湧いてくるのだと。

「自分に何ができるかではなく、友達のために何ができるかを考えるのが友情である。」

「By, 私。」

「おーべムラーちゃんが言うのと深みがあるねえ。」

自分のツノを折って投げるといふ行為は、最適解ではなかったかもしれない。けど、苦しむ友を助けるためには、最善の行動だったと思うし、そこに一切の後悔は無い。

ならば自分も、持てる力のすべてを振り絞れる。友達のためにやれる行動なら、最大限のことが思いつけるから。

「ぬんっ!!! 『ウルトラ念力』・『モーフィングパワー』全開!!」

受け取ったツノを握り、指を畳んで印を組み、力を集中させる。にわかにも額が熱くなると、包帯代わりに巻いていたリストビュートにもそれが伝わり、ツノにも光が集まり

始める。それを粘土をこねくり回すように形をイメージし、固定化させる。

「できたー！」

それは古来より狩猟武器として使われてきた。木でできていることもあれば、獣の骨が使われていることもあった。左右非対称が生み出す揚力と回転のエネルギー。

「ミクラスのツノでできた『ブーメラン』だ！受け取れえー！」

「いつてえー！」

放り投げたブーメランは、大きく弧を描いてレッドキングの後頭部にぶつかる。思わぬ奇襲攻撃に成功するが、かえってレッドキングの怒りを買ってしまった。

「これでも喰らって寝てろー！」

「グワーー！」

「あちやー、シンちゃん途中までかっこよかったのに。」

「それがあの子のいいところでもある。」

飛んできた岩になすすべなく押しつぶされたシンジをよそに、ミクラスはブーメランを受け取って闘志を燃やす。

「アタシのツノ?!がびーん！」

闘志を燃やしている。

ともかく、自分の体の一部から作られた得物は、よく手に馴染んだ。拳と拳をぶつけ

あう、というわけにはいかなかったが、優位性を十二分に発揮できているのは間違いない。

「うおおおおりやあああああ!! エレキの力だあ!!」

「こつちだつて、バーニングだぜ!!」

レッドキングもさることながら、腕に炎をまとわせて応戦する。未だに優勢を保ち続けるその猛威に心底震える。

「もう一押し、あともう一押しほしい……。」

「シンジー!!!」

「マコさん?」

「んっ!んっ!!」

「左手?」

まだあるか、もうないかと自問自答するシンジは、左手を示すマコを見て、自分の左手を見やる。そこには先ほどマコに巻かれた包帯代わりのハチマキ。それをほどこいてみると……。

「なるほどそうか、力を貸してくれるんだね。」

「貸しだからね!」

「お返しは10倍? いいよ、なんでもしてあげるよ!」

さつきはしつかりと見る事ができなかつたけど、百聞は一見に如かず、実際に体験してみればもつとわかる。ハチマキに巻かれた力を抜き放つ。

『カード・イレブ手札・十一式 レインブリッガ柳に小野道風』!!」

掲げられたのは、ガッツ・ブロッサムの力。図らずもがなベムラーとの戦いでは傘を使っていたシンジと同じく、傘を差した詩人を表している。これはシンジとも相性がいい、なぜならすつかり忘れていた設定だけど、シンジもまた『雨男』だったから。

「雨のパワーでエレキは強化、炎はパワーダウンだ!」

「なんとおー! さすがシンジさん! 考えてるー!」

「そしてもう一つ。」

「へきしつ!」

「湯冷めで風邪をひかせる効果!」

「バカは風邪をひかないはずでは?」

「まあレッドちゃんパワーバカだけどバカではないからね。」

「そこー! バカにしてんじゃねーぞ!」

実際レッドキングさんはバカではないと思う。

「でも個性豊かすぎるメンツの中では、むしろ無個性とまで言えるレベル! その埋没さ加減がレッドキングさんの弱点だー!」

「殺されてえかお前はあ!!」

レッドキングさんフアンの皆さんごめんなさい。

さて、シリアスをポイしたことで勝負の流れはわからなくなってきた。初代チャンプ、先輩としてレッドキング勝つか、それともチャレンジャー、この流れの上での主人公のミクラス勝つか。

「これで・・・今度こそ・・・最後つす先輩!」

「来やがれ!オレの最大の一撃喰らわせてやるぜ!」

ミクラスはブーメランを真上に放り投げる。

レッドキングは拳を打ち鳴らす。

「エレキ・・・最大!!」

「燃やすぜ・・・闘志!」

ブーメランはあるべき場所に戻り、そこへ雷が落ちる。  
心に燃える火が、拳に乗って炎になる。

「うっおおおおおおおおおお!!!!!!」



叫ぶ、無心の叫び。オーラとなつてあふれ出した怪獣ソウルが共鳴しあい、ぶつかり合い、スパークする。乱反射する気迫は、まるで暴風のようにフィールドを駆け巡る。

「純粋な闘争の中にこそ、怪獣ソウルは強く輝く！」

「見ててなんかウズウズしてきちゃったー！」

「参加してよかつたわね。」

「ええ、けど次はアタシたちが勝つからね？」

「もう次の話？」

ソウルの高鳴りが頂点に達したとき、2人はまさしく燃えていた。炎を纏いながら何も言わず、何もせずに佇んでいる。

「……。」

誰もがその行く先を固唾を飲んで見守っていた。世界全てが止まったかのような錯覚を受ける程に空気が張り詰めていた。

「……っ！」

お互いに何も言葉は交わさずとも、まったく同じタイミングで走り出した。心と心、ソウルとソウルで繋がりがあつているかのようになり、わかりあつていた。

「『ヴォルカニック……インパクト』オオオオオオオオオオ!!!」

『ミクラス・・・ダイナマイト』オオオオオオオオ!!』

閃光が、視界を支配していた。どれほどの時間そうしていたのか、測っている人間もない。永遠にも感じられる刹那を、誰も皆が共感していた。

「どつち?どつちが勝った?」

「うう・・・目が・・・。」

岩石が蒸発するような熱と光の中に、どちらか勝者がいる。

『ううっ・・・果たして勝ったのは・・・?』

『あつ、あれは!』

片方は膝をつき、もう片方は仁王立ちするシルエットがうつすらと見えてくる。跪く影は粉々に砕け散った得物を前にして涙を流しており、一方対面の影はクルクルの髪と尻尾の先のリボンが焦げているのが見えた。

『立っているのはレッドキング選手!』

「レッドちゃんの勝ちだ!」

「ふっ、矢張りやれると思っていたわ。」

『ここに!今決まりました!第一回タッグトーナメントの優勝チームは・・・!』

「おいミクラス、いつまでそうしてんだ？」

「うっ・・・ぐずっ・・・だっつて・・・だっつて・・・」

「お前は本当によくやったよ。もうなんも言うことねえつてぐらいによ・・・」

「でもアタシ・・・」

「おめでとう、ミクラス・・・」

視界が暗転する。気づけば空には星が広がっていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「レッドキングさんは、立ったままK.O.されていたんだ……！初代王者としての、先輩としての気力と意地が、体を奮い立たせていたんだ！」

勝負は内容も結果も二転三転するどんでん返し連続だった。そこへ今度こそ、ピリオドを打つアナウンスが響く。

『激闘の覇者は、初代タッグトーナメント優勝者の名は、ミクラス&シンジのミラクルナンバーズだあ!!』

拍手喝采、万来のカーテンコールを浴びたのは、大怪獣ファイトのルーキーファイターと、パンピー以上怪獣娘未満の人間。新聞なら一面を飾り、ショービズなら大入り間違いなしだった。

だがそんなことは当人たちは気にしていなかった。心底どうでもよかった。

「先輩……。」

「ミクラス……ありがとうな。全力で戦ってくれて。」

「ううん、シンジさんがサポートしてくれたおかげだし、他にもいっぱい。」

「運も実力のうちだったの。オレだってパートナーには恵まれていたはずだったけ

ど、お前には負けたつてはつきりわかるぜ。やれやれ、これじゃあ先輩形無しだぜ。」

「でも、アタシやっぱリレッドキング先輩を尊敬してます。いつまでもレッドキング先輩はアタシの憧れです！」

「ミクラス……お前みたいな後輩がいてよかつたぜ。力で応えることしかできない不器用なオレを赦してくれよな……。」

そこには勝者と敗者、先輩と後輩という格差もない、力をぶつけ、競い合ったライバル、互いに研鑽し、高めあう仲間という言葉が似合った。

「よし、次は絶対負けねえからな！帰ったらさっそく特訓だあ！」

「おぉー！」

「けど覚えておけよ、チャンピオンは腰の温かみをベルトに伝える暇もないんだつてことを……。」

「元氣すぎだろあの二人。」

「めでたしめでたしかな？シンちゃん大丈夫？真つ黒なつてるけど。」

「まだ日焼けにする季節には早いかな？」

「日焼けというより焦げてるというのが正しい。」

「こんがりどころかパサパサね。」

「おいしくなさそう。」

「食べる気？」

表彰式に一足早く、参加者そろつての懇親会と相成つた。主にイジリの方面においての話だが。

「よーし！ いっちよここで胴上げしちやおつかー！ ほらレッドちゃん！」

「よーし！ 思いつきり打ち上げてやるからなー！」

「ちよつとレッドキングさんにやられたらシャレにならんですけどー?!」

いやあと一人ほど、その場にはいない者もいた。今頃どこで何をしているのかという  
と……

「ただいま。」

「おかえり。すまない、負けてしまった。」

「いい。あなたも満足できた？」

「全然していない！ ローン返済の計画がパーだ！」

「そう、がんばって。」

ゼットンも今ここに帰ってきた。相変わらずのポーカーフェイスっぷりにベムラーも肩の荷が下りた心地だった。これで今度こそ全員……

「……行かないの？」

「次の現場が待っている。」

人知れず、また最後の一組は夜の闇へと消えていった……。彼女たちが何者で、何の目的があったのかは、また別のお話である。

閉幕の授与式。壇上でピグモンが祝辞を行い、長いようで短かった一日が終わりを告げる。

「それでは、優勝したミクミクとシンシンにはトロフィーを授与しま〜す☆」

「わーい！つて重いわこれ。」

「シンジさんちゃんと掲げて掲げて！よいしょー！」

「うわー！そんなことされたバランスがー！」

「シンちゃんあぶないー！」

と、あれよあれよと支える人間が増えた結果、広報には一体誰が優勝者なのか判らない写真が載ったそうなの。

## 怪獣はくれむ永遠の誓い

「最近、やっと落ち着いてきたねー。」

「うん、終わってから最初の数日はインタビューだなんだで忙しかったし。」

タッグトーナメント終了から半月ほどのこと、ようやく落ち着きを取り戻したGIRLSでは、その中心人物であるシンジとミクラスがくつろいでいた。

談話室の端には、新しく大きな優勝杯が飾られており、その内側には優勝者たる二人の名前が刻まれている。結局大きすぎたトロフィーは二人の家には置き場所がなかった。誰でも見れるここに置かれたのだった。

「二人とも、すごいだらけっぷりだね。」

「いやいやー、縁側のアギちゃんよりはマシだと思うよー。」

「むう、ボクだつてそこまでじゃないよ?」

「アギネコに癒されたいであります。」

「ボクはネコじゃないっての!むぐう。」

反論してくるアギラの口に饅頭を突っ込んで黙らせる。本人が否定しようがネコはネコ。見るだけで癒されるし、なでるともつともつと癒される。



「あー、やつぱ一家に一匹アギネコだわー。」

「んんっ、にゃー!」

「ほれほれ、お茶を飲め、そういえば今日ウインちゃんは?」

「んにゃ、ウインちゃんは今日エレキングさんと外回り。」

「あーエレキングさんとか、外回りといいつつシヨップめぐりしてるんじゃないかなあ?」

「いやいや、エレキングさんそれぐらいの分別はあるよ?仕事終わりに巡ってそうだけど。」

「そろそろなでるのやめてほしいんだけど?」

ゴメンゴメンと身を正して向き直ると、そこには大層ご立腹なむくれっ面。けど寝ぼけ眼で全然怖くない。

「エレキングさんといえば、シンジさんこないだ災難だったね。」

「災難?あああああああ!、あったなーそんなの。」

「あったねー、なんて他人事みたいなの・・・。」

実際半分他人事みたいなもんだし、とその顛末を思い出す。それは3週間前のこと。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「あきません。」

「ええ、いけないわね。この状況。」

その時、シンジとエレキングは危機的状況にあった。その場所はGIRLS本部。身内なら安全じゃない？と思えるだろうがそうではない。危険というのは常に身近にあるものだから。

「あきません。」

「ええ、開かないようね。」

そして事件現場は密室、玄関正面エレベーター。日中利用者が最も多いと思われるそのひとつを、2人は現在独占している。

「くっそー、ツイてない。」

「ええ、真っ暗ね。」

ただし『停電中』という注釈が末尾に付く。

「空調も止まったみたいですね。」

「なんだか暑くなってきたわね・・・。」

それもショッピングモールなんかにあるような外側がガラス張りの明るいやつではない、屋内の完全に密封された個室である。しかもどういうわけか非常灯すらついておらず、緊急時外部に通報できる非常ボタンも反応しないという有様である。

「それで、どうして携帯まで動かないのかしら？」

「本当になんでなんでしよう？ ついさつきまで通話してたのに。」

「電話しながら歩くのはあまりマナーがなってないと思うわ。」

「ご、ごめんなさい。」

「つていうかさつきぶつかってきたわね？ アレは故意だったのかしら？」

「違います、ちよつと肩が触れ合って言葉なくして刻が遺した熱い命をこの手のひらで明日に残そうとただけです。本当です、信じてください。」

「触ったのね？」

「アツハイ。」

真つ暗でエレキングさんの表情は見えなかったが、呆れているのはわかった。いつものことである。本当に申し訳ないと思う。

「どうします？ 天井を外してシャフトに出てみましょうか？」

「そんな危険なことしないでいいわ。どうせしばらく待てば復旧するでしょう。・・・実は一回出てみたかったとか、思っていないでしょうね？」

「はい。」

「その『はい』はどっちの・・・まあ、いいわ。」

だんだん暗闇に目が慣れてきて、お互いに『そこにいる』ということが掴めてきたころ。外界の音が一切ないことに気が付く。まるでここだけが世界から切り離されたか

のように。

「エレキングさん、これに座ってどうぞ。」

手探りで渡された物の感触を確かめる。ポリエステルとナイロンのよく知った手触り。

「これ、あなたの上着じゃないの？シワになるわよ。」

「女性を地べたに座らせられませんから。」

隅っこで三角座りする・・・その姿は見えていないが、ともかく控えめに座るシンジに逡巡するエレキングだったが、シンジがそういう人間だともう理解しているので断るだけ無駄だと悟る。

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

「どうぞどうぞ。」

心なしか声が笑顔なのは気のせいかしら。深くは追及しないけれど。

そうしてしばらくじっとしているが、相変わらず音沙汰ない。不気味すぎるほど静かだった。

「・・・ねえ、そこにいる、わよね？」

「いますよ？何かありました？」

「なんで・・・黙ってるのよ？」

「なにを？」

「なにを？じやなくて、なんでも何も喋らなくなったのよ？」

「喋ることがなにもないので。」

「なにか喋っていなさい。不安になるから。」

「アツハイ。」

「怖いんですか？」

「は？」

「その・・・お化けとか？」

「どうしてそうなるのよ！」

「だって、さつき不安になるとか言っていましたし。」

「違うわよ！単に暗いのが苦手なだけよ。」

「・・・怖がり？」

「違うわ！」

「ホラー映画だところいう時、天井からモンスターが降ってきたり、ドアが開いたらゾンビがなだれこんできたり・・・。」

「や・め・な・さ・い！」

「あだあ！暴力反対！」

エレキングの平手打ちが数回空ぶった後、立ち上がって改めて放たれた下段キックが  
べしべしとシンジの脛を打つ。

「だいたい、怪獣娘である私に怖いものなんてあるわけないじゃないの！」

「推しの中の人が結婚しましたの報告をしたりとか。」

「それは怖さのベクトルが違うわ。」

「なんで素直に祝福できずに荒れるんでしょうかね。」

「誰が相手であろうと自分よりも幸せになるのが許せないでしょう。」

「幸せなあ……。」

何も喋らないでいるとそれはそれで間が持たない。それは焦りでもある。外界から  
音が聞こえない以上、自分たちで音を出していないと気が逸る。

「エレキングさんの幸せって？」

「どういう意味よ？」

「そのままの意味です。」

「趣味に情熱を注いでいるとき。」

「ほ、他には何か？」

「甘いものを食べるとき。」

「エレキングさんも、割と普通な女の子なところあるんですね。」

「それはどういう意味かしら？ ああん？」

「アバーツ！」

ちよつと元気になってきたエレキングさん。暗闇の中でシンジの目に星が飛ぶが。

「じゃああなたの幸せって何かしら？ 女の子を侍らせてハーレムを作ることかしら？」

「そんなことは！ ない……です……。」

「どうして元気がなくなっていくのかしら？」

「その、否定はできないので。」

「正直者ね。そういうところはゴモラそつくりね。」

「じゃあやつぱり一番はゴモラなのかしら？」

「そう……ですね。ミカは一番好きだと思います。けど、みんな違うから順序つけたりとかなんてそんな。」

「いかにも軟派なセリフね。『みんな特別』なんて。そんな甘い言葉で何人かどわかすしてきたのかしら？」

「僕、そんな風に思われてたのか……。」

「冗談よ。あなたがいい人間だということは、誰もが知ってるもの。」

「じゃあエレキングさんは僕のことどう思ってるんですか？」

「前にも言ったけど、私は好きでもない人とお茶したりしないわよ？」

「エレキングさんこそ、軟派な物言いじゃないです？」

「あら、言うじゃない。でも、私はいつでも本気よ？あなたさえその気になればそう……。」

お互いに顔が見えないこともあつて、普段言わないようなことを言い合う。お互いを阻む『壁』もまた見えなくなっているようだった。

「ふふつ、なんだか……楽しいわ。」

「僕をからかつて楽しいですか？」

「あなたが面白い反応をするからいけないのよ。今ならゴモラの気持ちかわかるわ。」

「ミカ相手なら負けるつもりもないけど、エレキングさんが相手じゃなあ。」

「そうね、じゃあ例えば……。」

すつと相手が立ち上がるような音がシンジには聞こえた。次に感じたのは肩への重み。

「へっ?!」

「例えば……んなことをしたら、あなたは耐えられる？」

「エレキングさん、ひよつとして酔ってます？」

「そんなことはないわ、私未成年よ？」



「毎度毎度思うけどエレキングさんは未成年には見えない!」

「大人っぽい、つてことかしら?」

違う、あまりに違いすぎた。シンジの頭の中にいるエレキングさんの像と、目の前にいるであろう人物とではかけ離れすぎている。

「ふふふつ、楽しいわ♪」

「ちよつ、エレキングさん、それ以上は・・・」

「なあに? それ以上はどうなつちやうのかしら?」

互いの息がかかる距離まで密着している。エレキングが上、シンジが下。

「た、食べないでください。」

「食べないわよ。けど、マーキングぐらいはしちやおうかしら?」

その時、ガコンツという重い音と共に重力が降ってくる。突然のことで上になっていたエレキングの体がシンジに覆いかぶさる。

「ひゃっ?!」

「お、重つ・・・」

「ととつ、ごめんさい、今どくわ・・・」

エレキングが立ち上がろうとしたその時、目の前に光が広がってくる。徐々に明るさに目が慣れてくると、そこにいたのは見慣れた赤い髪。

「あれえ？エレエレにシンシン、なにやってるんですかあ？」

そしてどこか気の抜けるような甘ったるい声。ピグモンである。慌ててエレキングは身を正す。

「ななな、なにつて、エレベーターが止まってずっと中に閉じ込められていたのよ。きつと停電したせいね。」

「停電？停電なんかしてませんでしたよ？ただこのエレベーターがずっと止まってたから、様子を見に来たんですよお。」

「えっ、じゃあなんで止まってたの？」

「さあ？けど何か強い電流のせいでショートしたのかもしれないってペガペガは言っていましたよ？」

「電流？」

ペガペガというのは、GIRLS技術主任のペガツサ星人さんのこと。それはともかく、強い電流のせい、ということとは……。

「エレキングさん？」

「な、なにかしら？」

「ひよつとしてエレキングさんが原因？」

「そ、そういえばあなたにぶつかられた時に何か弾けたような感触が……つて、そ

れならやつぱりあなたのせいじゃない！私は悪くない！」

「でもなんで携帯まで通じなくなってたんでしよう？」

「多分、エレエレが無意識のうちに妨害電波を出してたんだと思いますよ。外から声だけは聞こえてました？」

「声って？」

「えーつとお、エレエレが実は怖がりなこととか、話し声ですう！」

「全部じゃないの！」

「それよりい、声だけじゃわからなかったですけど、他に二人でなにやってたんですかあ？ピグモン気になりますう！」

「な、なにもしてないわ！そうでしょう??」

「えっ、えーつと、どうしよう。」

「あつ、ピグモンも食べないでほしいですう☆」

「ああああああああああ!!!」

エレキングはにげだした！

「ありやりや、エレエレの珍しい一面ですねえ。」

「ピグモンさんってたまにエゲつない。」

それからしばらくのうちは、エレキングさんと廊下ですれ違う度に鋭い目で睨みつけ





いと思っていましたの！さあさあ！さあさあ！

「うん、ちよつと待とうか。」

いくらなんでも喰いかかりすぎなバリケーンさんの勢いに押される。このまま押し倒されては大事なものを喪いそうなのでなんとか気を確かに保つ。

「いきなり押しかけちゃ迷惑になるし、お家にはまた今度招待に預かりますよ、ね？」

「そう・・・残念ですの。」

「でも今日のランチは一緒にしません？いきつけのイタリアンがあるんですけど。」

「イタリアンですよ！私チーズたっぷりのピッツア大好きですよ！」

途中珍しいものを見つけてはフラフラと逸れるバリケーンさんを先導しながら、すっかり怪獣娘たちが集うお店となったJJ氏の営業するイタリア料理屋に行く。

「いらつしやいましー、おやシンジさんご無沙汰ですねえ？そちらはたしか・・・バリケーンさん！」

「ええ、今日は2人です。」

「では窓際のお席へどうぞ。」

一番いい席に通されると、メニューを眺めて今日の気分と腹の調子を窺い、適当に注文する。

「ここのお店には、他の怪獣娘さんたちの写真もたくさんありますのね。」

「隠れ家的な雰囲気がいいって評判ですよ。」

「隠れ家、ですの?」

「普段の生活とはちよつと離れた、避難所みたいな場所さ。そういうのが一つはあると安心できるでしょう?」

ここには煮え滾るフライパンのような暑さも無ければ、指が千切れる寒さもない。

あるのは厨房から漂う食欲をかき立てる匂いと、精神が程よく安らぐクラシック。

「おつ、シンジ君もいたのか。それにバリケーンさんも。」

「ベムラーさんこんにちは。」

「ど、どうも、ですの・・・。」

料理が運ばれてきてからしばらくすると、2人に近い席へベムラーさんがやってきた。た。

「なにやら珍しい組み合わせだね? キャンパスで偶然会って、シンジ君がここに連れてきたってところかな?」

「そうですね。さすがベムラーさん名推理。ベムラーさんはどうして?」

「このエスプレッソがおいしいから。」

「なる。」

その後も、続々と見知った顔が入店してくる。

「あつ、レッドキングさんだ。」

「べ、別にこのプディングを食べに来たわけじゃないんだから!!」

「まだ何も言っていないですよ?」

「おつ、キングジョーさんだ。」

「ハローシンジ、奇遇デスネー。」

「キングジョーさんもすつかりこの常連ですね。」

「シンちゃん! 奢れー!」

「言うに事欠いてそれかい!」

「なーんてうそうそ、今日はバリケーンちゃんと一緒になんだ?」

「本当に、色んな怪獣娘さんたちとお友達なのでね。シンジ様は。」

「友達というか、仕事仲間って面も大きいですけど。まあ、それが信条なんで。」

「・・・なんだか、羨ましいですの。」

「バリケーンさんにも、友達いるでしょ? ゴルザさんもそうだし、ミカたちだって。」

「ええ、私もそう思っていますわ。けど、シンジ様がそうであるように、私はお友達に  
対してなにをしてあげればいいのか、わからないんですの。」

「距離感がわからないんだね。」

バリケーンはコクリと無言で頷く。元々バリケーンは何でもできる人間だったので、



頼るといふことに慣れていないんだろう。

「僕も昔は、一人で何でもできるように、他人に迷惑かけないように振舞ってたかな……。」

「シンジ様もですか?」

「うん、けど僕一人じゃどうしようもない事態もあつて、その時に助けてくれたのが怪獣娘だった。」

「それがきつかけでしたのね。」

「うん、けど逆に言うと、『頼られる』ってことも関係のひとつなんじゃないかな。あの時のアギやミカの側からすれば、僕に頼られたってことになるし。」

「だから、焦らなくても直に時間が解決してくれると思うよ。」

「最後の最後ですごい投げやりなアドバイスだね。」

「うるさい、ミカこそなんかないの?」

「そーだなー……じゃあバリケンちゃんにひとつお願い!」

「な、なんですか?」

「一発ギャグ! やってほしいな!」

「い、一発ギャグ?」

それ誰も得しないだろ、とツツコミたいのは山々なのだが、なんだかバリケーンさんもやる気になってしまっているので止めるに止められない。

「や、やりますわ!」

「マジかー!ガンバってバリケーンちゃん!」

なんて他人事なのだ。

「まずは、ソウルライド『バリケーン』!ですの!」

期待を受けたバリケーンは、怪獣娘へと変身した。エレキングさんとも並んで目のやり場に困る。

「やーいシンちゃんスケベー。」

「黙ってろい。」

変身完了すると、中身が空になったコップを手を取って放り投げる。

「いつもより・・・多めに回しておりますの!」

染之助・染太郎の傘芸のように、頭の笠でコップを落とさないように回してみせる!

「あれ、ミカの太陽の塔より面白いぞ!」

「ほほーう?シンちゃんもあとで一発芸ね。それより、バリケーンちゃんすつごい

じゃん!!」

「ふ、ふふん!私ならばこれぐらいのこと、出来て当然ですの!オーツホツホツホツ





できないほど大きな限ができています。

「お茶も出せなくてすまないな。」

「いえ。今日はちよつと相談が。」

「ふつ、私への依頼料は高いぞ?」

「前金100万円です。」

「ちよつと待ちたまえ。」

クールに気取ろうと座りなおした腰がすべって頭からずっこけた。

「ああ、このお金はいたってクリーンな現ナマですよ。この前の大会の賞金の半分です。」

「いや、それはわかるが、私に一体何をさせる気なのかね? いや。何をさせられるのかな?」

「受けてくれるんですね。正直、ただ受け取ってくれるだけでいいんですけど・・・。」

「あつ、お茶淹れようか、それともコーヒーがいいかい?」

「ああお構いなく。」

急にへこへこ、というかよそよそしくなった大人の姿に情けなさを感じたが細かいことは置いておこう。

「ベムラーさんの愛車、あれの修理代を立て替えたいと思って。」

「なんだ、そういうことか。あれを壊したのは結局私の責任なのだから、君が気にすることは何もないのだけれど。」

「そうじゃなくても、ベムラーさんがローン持ちなんてなんか嫌ですし。」

「それはエゴだよ。君の好意は嬉しいが、悪いけど受け取れないな。」

「その割には貧乏ゆすりが。」

「ああ、今日はなんだか寒いね。」

「寒い、ですか。」

「抱きしめて。」

無言で肩を抱き寄せてしばらくそうしている。

「もう大丈夫だ。」

「えっと、話し戻しますね。それで、今度一緒にお出かけしませんか？つて誘いに来ませんが。」

お茶請けに出されたすもも漬けを食べながら、すつと取り出した一枚のチラシを見せる。

「おお、モーターショーか。気になっていたんだよ。」

「やつぱり。ベムラーさんならノツてくれると思つてました。」

そこでは日本のみならず、世界各国から様々なマシンが展示される。機械いじりが好

きなベムラーさんなら必ず行きたがると思っていた。

「最新鋭機の試乗まで出来るのか！いいなー！行きたいなー！」

「でしょ？よかつたら一緒に行きませんか？」

「うん！行く！」

無垢な子供ののように目を輝かせ、元気に頷くベムラーさんを見て、快く受け入れてくれたことに胸をなでおろす反面、もう一つの重大な発表に緊張感が増す。

「それで、そこへの行き方なんですが……。」

「うん、電車になるかな？」

「その、実は僕運転免許を取得したので……。」

「ほう？」

「僕が運転していく……ってのは、どうですか？」

「いいね！」

今回の話のミソはそこ。いつも頼りにさせてもらっているベムラーさんに、頼つてもらう形になりたかったのだった。

「自動車の路上教習だな！まかせたまえ！」

「えっ。」

違う、そうじゃない。と言いたいところだったが、すでにベムラーさんはウツキウキ

な気分で準備を始めていた。どうやら道中のコーチですら楽しもうとしているらしい。

「まあ、楽しんでくれるならいいかな。」

ホテルの予約もして、ガッツリイベントに張り付く予定も付けた。

そして当日、現地。

「さすが優等生、エンストを起こさず、マナーも完璧に守っていた。どこかのハンドル握ると豹変する人にも見習ってほしいぐらいだ。」

「誰のこと？」

「君も知ってる人だよ。」

誰のことなのかはさておき。

「見なよシンジ君！あれがパリの日だ！」

「そんなに急がなくてもどこにも行きませんよ。」

無邪気にはしゃぐベムラーさんを見ただけでもう労力に対するおつりが返ってきた。そうだが、まだまだ旅行は始まったばかり。

「あつ、これなんか見たことありますよ。」

「サイドマシーンだな、いい趣味をしているよシンジ君。」

「この車、コスモスポーツ！」

「よく知ってるじゃないか！」



「ウチのガレージで埃被ってますよコレ。」

「何?! 初耳だぞ!」

「なんだこれ、すつごいかつこい!!」

「ファルコだな! 試乗できるらしいぞ! 乗ってみるかい?」

「これ操縦するのは無理ですよ!」

「ありがとう、今回は誘ってくれて。」

「いいえ、僕も楽しいですし。」

ひとしきり展示物を眺めて回って、今度は外へ。サーキットでは様々なマシンの試乗体験が行われている。最新鋭機だけでなく、今ではお目にかかることもできないような幻の機体も揃っているとあって大賑わいだ。

「ファルコの整理券ゲットできてよかったですね。」

「キミのおかげだよ。私のほうは外れていたし。」

「僕は・・・乗りたいくなかったので、それ。」

「そうかい? 面白いじゃないか。」

「正気の沙汰と思えませんよそのサス。」

ファルコ・ラスティコ、1985年のモーターショーでお披露目された白隼は近未来的なデザインだけでなく、様々な技術が試験的に導入された実験機<sup>コンセプトモデル</sup>である。

詳しい説明は省く、というか作者が知ったかぶりなので説明できないが、そのあまりに先進的すぎる設計に、ライダーたちがこぞって乗りたがらなかったという。これを乗りこなせるのは、よほどの大莫迦者、あるいは勇者フレイバーであるとも言われた。

「だがこのスリル、慣れる楽しいぞ！」

「そりゃあベムラーさんほどの反射神経と度胸があれば。」

「だがキミだつて私を半分乗りこなしているじゃあないか？」

「うっ……あ、青信号ですよ！」

「はいはい。」

非常に慣れた手つきでアクセルを回し、何の苦も無く白隼を乗りこなす。さすがとベムラーさんに賛辞の言葉を贈る。

「でも、こうしてキミと並んで走れるなんて、以前は思いもしなかったな。」

「僕ずっと運転してもらったからね。」

「君を後ろに乗せたこともあったな。」

「ありましたねー、もう懐かしいってぐらいですけど。」

本島にベムラーさんとは長い付き合いだと思ふ。その大人としての在り方は、シンジにとつて間違いなく憧れの姿だった。

「でも今日は、君が私を乗せてくれたね。」

「ちよつと緊張してました。」

「助手席に座るなんて、すごく久しぶりだったよ。」

「ベムラーさんなら普段自分で運転しますもんね、当たり前だけど。」

「ああ、私が運転を辞めるのは死ぬときか・・・、恋をしたとき、かな？」

カウントダウン式の停止帯で並ぶシンジのハートに、ベムラーのシールドごしの悪戯っぽいウインクが突き刺さる。

「そ、そんな・・・ほらあと5秒で変わりますよ!」

「ふふつ、キミは本当にカワイイな。」

5秒後、鉄の獣、吠える。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「いやあのね、ニュートラル入れてたのね。そしてそれ知らないでセカンド発進だと思つてそれなりにスロットル回したら動かないから、あれつと思つてギアいじつたつけ、ロー入つちやつて、もうウイリーさ」

「いいなー、おいしいなーシンちゃん。」

「バカ野郎死ぬかと思つたわ。」

「ごめん、聞いても何の話かわかんないんだけど。」

辛いところでガードレールにぶつかつて止まったからよかつたものを、これがサー

キツトではなく公道だったら間違いないで死んでいた。

「本当シヤレならんかったらから、ベムラーさんには滅茶苦茶怒られたし。」

「だろーな、やつぱシンちゃん持つてるわー。」

「むしろツイてないからああなつたんだと思うんだけど。」

「まあ、ケガしてなくてよかつたじやん。そのあとももお楽しみしたんでしょ？」

「ベムラーさんにめっちゃ心配されたけどね。」

「ならやつぱよかつたじやん。」

「よくないよ、せっかくとつたばっかりの免許証もこうだし。」

提示されたカードには大きく『免停』のシールが貼られている。貼ったのはベムラー

教官なので法的な拘束力はないが。

「ところでシンちゃん、『あの話』はどうなったの？」

「どうなったもこうなったも、ミカに出鼻をくじかれて終わったよ。」

「何の話？」

つい先日の話。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

シンジは普段雑用もとい何でも屋として様々な部署に配属される。そのうちの一つ、技術部でこそ銀色の脳髓が輝ける。

「シンジさん、何の設計をしているんですか？」

「あつ、主任お疲れ様です。」

白と黒のツートンカラーに、黄色のアクセントの入った怪獣娘。ペガツサ星人さん、本名沢中イズミさんである。技術部に顔を出すシンジもよく気をかけてもらったりしている間柄だ。

「ちよつとやれることが増えてきた分、仕事が増え複雑化してきたから、補助してくれるAIを組んでみようかなつて。」

「サポートロイド、ですか？」

「そうです。でもプログラミングは門外漢なもので、キングジョーさんに聞いてみようかと思つたんですが、キングジョーさんも忙しいみたいで。」

「あはは、最近妹さんに構いつきりみたいですからね。」

妹、キングジョーIIさんは、あの大会以来ずいぶんとアクティブになつたらしい。妹のためにいろいろしたいというのは姉として当然のことだろう。

ともあれ、助力を請えないとあれば自分で何とかするしかないのが道理。だからこうしてマニュアルとにらめっこしている。

「そういえば以前にキングジョーさんが試験的に組んでいたプログラムがあつたので、それを使わせてもらつてはどうでしょうか？キングジョーさんには私から報告して

おきますから。」

「本当ですか！さすがキングジョーさんだ。」

見せてもらえば、まさに欲しかったものがそこにはあった。一言聞いてみるものである。

「ふんふん、あとはこれをバディライザーに合うように調整して……。」

「大丈夫ですか？何か手伝えることは。」

「いや……これなら一人でもなんとかなりそうです！ありがとうございます！主任主任と呼んでい入るが、本当にこの人が主任なのかは知らない。どっちかというところの人は、育成部の博士の助手的なポジションだったと思うのだが、細けえことはいんだよ。」

「じゃあ何か困ったことがあったらいつでも呼んでくださいね！」

「はい、ありがとうございます！」

「つて、言っても。シンジさん、何でも一人でやろうとしちやいますよね？」

「あはは、バレてたか。本当に困ったときは助けを求めますから、安心してください。」

「本当にいい？と言うかどっちが安心する側なのか……。」

そうは言うものの、本当に困るようなことが起きないのだから仕方がない。今回に限っては、キングジョーさんのプログラムがあまりにも完璧すぎて、素人シンジが手

出すと逆に改悪させかねないほどだった。

「よっしゃ、出来た出来た出来た。あとはインターフェイスだけかな。」

ただあとで聞いたところによると、更新の余地をあえて残してあり、伸展性を柔軟性を付け加えてあったということなので、そこに気づけないシンジは結局はまだまだというところか。

「音声案内とかしてもらいたいから……どうせなら萌え萌えなアンドロイドとかを？」  
ごくごく身近に、超有能な執事ロボットならいるということをし、決して忘れてはいないのだが。ただあの人は何というか、シンジ個人ではなくその父と、バディライザーの繰り返しに仕えているという面があるのでちよつと常日頃一緒には居づらいのだ。

（さてどんな子がいいかな……包容力のあるお姉さん系、ちよつとドジっ子なメイドさん系……）

アシスタントがドジっ子だとそれはそれで困るが。そういえば、大会MCでもお世話になったSSPもサポートAIを作ったことがあったとか。あの人たちは相変わらず仕事が無くて困ってるらしいけど。

「よし、やっぱリツンデレなお姉様キャラがいいな！」

「シ、シンジさん、どうしました？」

「あ、なんでもネツす。」





「戦場に妹は連れてきたくないから！」

「うそつけー！どうせおっぱいがいいんでしょこのスケベー！」

「ソナコトナイワー！」

「目を見て話せー！」

と、今に至る。たシンジとミカが不毛な言い争いをしているが、アギラとミクラスの冷やかな視線にペンペン草も生えない。

「そういえばミクちゃん、デートするって話どうなったの？」

「えっ、今聞くのそれ？まあ、まだだけど。」

「えー、シンちゃん約束守らないのはいけないと思うなー？」

「たった今ゴモたんがのしちゃったからどっちみち無理だと思うよ。」

まったくすぐ暴力に頼るなんて大人げない。物言わぬ干物になり果てたシンジに鉄槌が降りかかるが、それはそれとして。意味もなくいじめるのってなかなか楽しいな。

「けどそれってボクの愛なの♡」

「ぐひゃあ！」

「やめたげてよお！」

面白いのもう一発。

「ミクちゃんどこか行きたいところあるの？」

「ん？んー……特にない、かな？シンジさんが連れてつてくれるなら。」

「いやいや、シンちゃんをあんまり信用しちゃダメだよ？お昼何も言わなかったら牛井屋連れてつちやうようなシンちゃんだよ？」

「アタシ牛井好きだし問題ない！」

「そういう意味じゃなくって。」

ああ、優勝杯が泣いている。

「僕はミクさんとやりたいことあるんだけど？」

「お？シンちゃん何かアイデアがあるの？」

「なんとというか、ちよつと消化不良気味なところがあつたから。」

「消化不良？バトルロワイヤル形式になったこと？」

「それもあるけど、もうひとつ。」

指差したのは件の優勝杯。カップは何も語らずキラキラと電灯の光を反射させている。

「あれはタッグ戦の景品だったでしょ？でも景品はひとつだけなわけで。」

「それにあんなにおつきいし。家に置けないし。」

「まあ確かに、あとは記念品といえど写真ぐらいだね。」

「あつ、わかっちゃったわかつちやつたかも。」

ミカにはわかったようだが、アギラにはピンとこないらしい。ミクラスも何かを察してやんわりと口角が上がる。

「つまり、僕とミクさんどっちがつかえーのか、そこを決めたくつて。」

「エクストララウンドだー!」

タツグに文句があつたわけではない。むしろいつもと違う戦い方があつて、楽しかったとも言えよう。だがその分、個々の活躍は少なくならざるを得なかつたと感じていた。

「一度でいい、心行くまで戦つてみたい!」

「すっかりシンジもバトルマニアになっちゃつた?」

「おつとお? シンちゃんミクちゃんに勝つつもりなのかな?」

「勝てるど踏んだから今回申し込むのだ! 受けるミクさん?」

「もつちろん! アタシも今のシンジさんと全力で戦いたかつたんだー!」

こうして、タツグトーナメントの後夜祭が始まつた。観客はごく少なく、景品も出ない。それでも戦うだけの理由と価値があつた。

「『本当の闘いは、ここからだ!!』」

## 喪失 — フオビドウン —

朝焼けの光の中に、椅子に腰かけた彼が佇む。膝の上には一冊の手帳が乗せられているが、持ち主の視線はそこへ寄せられず、どこか遠くへ向いている。

その手帳には、彼の今までの記憶が記されていた。その時に感じたもの、思ったことをメモ書きにするよう、師から渡されたものだ。それが唯一自分を自分足らしめる証拠である。

一ページめくることに、その当時の記憶が廻る。海外への留学で訪れた一時の別れ、海に向こうで学んだこと、出会った人のこと。そうして戻ってきてからのこと、ここまでの記憶はたしかにあった。

その先、彼、シンジにはその先が読めなかった。霧がかかったかのようにページはモヤに塗りつぶされ、脳が文字を判別することを拒んでいる。まるで夢の中で書物を読んでいる時のような違和感がそこに聳え立っている。ツンと鼻を突くような潮の香りと、優しいくらいに頬を撫でる風が、今日覚めて現実にいるということを嫌でも誇示してくるが。

彼は虚ろな表情で何も言わず、手帳のページをめくった。その行為は幾度目かになる



「ぐつ、まさかの役なしとは……。」

「来た来た！流れがキタ！」

「ぐぬぬ……ところで、今日僕はなんで呼ばれたんですっけ？」

「ん？そうだったね。」

別段チンチロリンするために来たわけではなかったと思ひ当たり、話を戻す。そもそもなんでチンチロリンなんか始めたのか。

「実は、キミに仕事を頼みたいんだ。外での仕事になるし、ボーナスも出そう。」

「おお、やりますよ。」

「内容も聞かずに快諾してくれたね……まあ聞いてくれ。今回はGIRLS調査部の仕事ではないんだ。ボク個人からの依頼ということになる。」

「個人的なお仕事ですか？まあ博士、昔ほど自由に動けるわけではないみたいです。」

「いや、そうじゃないんだ。半分はそうなんだけど……。」

多岐沢は少し言葉を選んでいた。

「実は、古い友人から手紙が来た。正確には、友人の名義でだが。」

「友人？」

「そいつ、いや彼は、大学時代のルームメイトだった。けれどGIRLS発足間もない

ころに再会したとき、GIRLSの実働部隊としてシャドウと戦っていた。まだシャドウの存在が明らかになる前のことだった。」

「実働部隊？調査課とも違う？」

「そう、ボクの知らない間、ボクの知らない部隊に、彼はいたんだ。彼とはそれ以来会っていないかった。」

シンジはサイコロを手のひらに転がしながら聞いていた。自分の知らないところで、自分のかつての友が戦っていたという点には、すごく心当たりがあった。

「そんな彼から手紙が来た。内容は簡潔に、人員が欲しいということだった。」

「影の実働部隊の人員？」

「そしてキミのことを名指しで要求していた。」

「僕を？」

「それでようやくわかった。以前の大会に、実働部隊のメンバーだった怪獣娘たちが、『ジェーン・ドウズ』として参加していた理由も。」

「ジェーン・ドウズ？あの2人が・・・。」

大方、戦力となる人材を見定めていたのだろう。

「あれ、でもじゃあそうなると、あの大会自体が・・・。」

「そうだ、話はひよつとすると、ボクたちの予想を上回るほどに複雑で大きいかもしれ

ない。」

「にわかきな臭くなってきましたね……。」

舌打ちするように放ったサイコロが、すべて異なる数字を出したのもう一回舌打ちした。

「博士も知らない部隊に、そこからのスカウト。穏やかじゃないですね。」

「すまない、本来ならこんな話即座に蹴るべきだったのに、どうしても破り捨てること  
ができなかった……。」

「秘密か……。」

「彼が今何をしているのか、それがどうしても知りたかった。」

「いいですよ、この話受けます。」

「シンジ君?! 今の話聞いても断らないというのかい?」

「危険かもしれない、いや確実に危険だぞ?」

「ならなおさら、僕が断ったところで、別の誰かに話が行くだけでしょうし。なら、僕  
がやってしまったほうがいい。そういうことです。」

たとえば友達が、自分の知らないところで危険に巻き込まれでもしたら、自分で自分  
が許せなくなる。自分に非がなかったとしてもだ。

「それに、危険手当降りるんでしよう? ちよつと今お金貯めてるんでそれが魅力的か



な。」

「何か買うのかい？」

「お金貯まつたら、ベムラーさんに僕専用のマシンを組んでくれるつて約束したんです。それ以外にもベムラーさんにはいろいろお返ししたいと思つてたから、何かと必要になるかなつて。」

「ミオ君にか、彼女と仲良くしてくれて、ボクも嬉しいよ。なんだか、娘をとられそうになつている父親のような気分でもあるけど……。」

「あはは、そういう博士こそ浮いた話とかないんですか？」

「ない……と、思う。キミこそ大変だろう？」

「いやあ。それほどでも。」

話題を変え、勇んで投げたサイコロはまたも役なし。3回まで振れることになつていたが、

「あと一回だよ？」

「もう一回あるんです。それじゃあ、さつそく用意してきますね。」

「うん、くれぐれも気を付けて。それと、もしも……。」

「もしも会えたら、よろしく伝えておきますよ！」

ニツと笑つてこの話を終える。

「あっ!!」

「・・・5倍付で、いただきます。」

「くそう・・・せつかく爪に火をともして貯めていた貯金が・・・。」

6・6・6、オーメン。獣の数字と呼ばれているのは。この後の不安を予測していたのだろうか定かではないが、ともかくシンジが帰りに新しい靴を買っていたのは確かな話だった。

　　☆☆

「そういうえば、まだ履いてないんだった・・・。」

玄関の隅に真新しい箱を一つ積んでいたことを思い出した。買ったばかりで箱を袋からも出していかなかった気がする。その靴を履いてどこに行こうとしていたのかは覚えていない。

では、履き古した靴でどこへ行ったのか、その次のページに書いてある。

「シンジ・・・君・・・。ここだったか。」

自分を呼ぶ声が聞こえてきたが、その方へ振り向く心の余裕はなかった。

　　☆☆

「噂にたがわぬスケベ。」

「なっ、違いまーす!」

目に入ったのはなんとも立派な……いや皆まで言うまい。都内のとあるビルの一室。指定された場所に向かったシンジが出会ったのは三人の怪獣娘たち。

「で、あなたたちが仕掛け人？」

「は、自分はコードネーム『サーベル暴君 マグマ星人』。こちらはメンバーの『円盤生物 ノーバ』と『炎魔戦士 キリエロイド』。」

「よろしく濱堀シンジ。」

「うん。」

あとの二人のことは確かに知っている。常に変身したままにいるということは、それほどまでに警戒心が強いということだろう。

「今回はよろしくお願ひします。」

「この度のご協力には感謝いたします。それではさっそく任務のブリーフィングを。」  
「ああ……よろしくお願ひします。」

マグマ星人さんは礼儀正しい、というかかなり堅苦しい性格をしているらしい。見た目はこんなに柔らかそう……。

（いやいやいや！失礼だから！初対面の人に！）

「やはり、スケベ。」

「心を読まないで！」

言ってしまうばマグマ星人さんはエレキングさんに負けず劣らずのダイナマイトボディの持ち主だ。肌の露出度こそエレキングさんのそれよりは少ないが、ピッチリスーツによって露わになったその輪郭はもはや凶器の領域にある。

(こんな人と四六時中一緒に正気を保てる自信がない。)

それもこれも常に一緒にいる幼馴染がひんそーでちんちくりんなせいだ。

「ひつくし！さてはシンちゃんめこんにやろー・・・。」

「奇遇ね、私も鞭で打ちたくなってきたわ。」

「シンちゃんどこ行っちゃったんだろうねー？『なーに、クリスマスまでには帰ってくるさ』って言ってたけどさ。」

「フラグね。」

殺風景な部屋の中央に置かれた机に着き、『調査』の説明を受ける。

「・・・場所の説明は以上。何か質問はありますか？」

「・・・今時携帯が圏外になるような山奥の、人口100にも満たない集落なんて、まるでホラー映画の舞台のような寒村だな。」

シンジが口にした情報が全てである。そこへの実地調査が今回のお仕事。一見すると、ただの山奥へのハイキングのようでもあるが。

「実際山一つ向こうに行けば、都内へ水を供給するダムや、キャンプ地をはじめとしたレジャー施設はある。」

「むしろそっちの調査を進めたほうがよくない？先日の大雨から音信不通なんて考えられないよ？」

その大雨のニュースならばシンジも知っていたが、キャンプ場に来ていたレジャー客全員の行方が知れないというのは初耳だった。どこもニュースやネットにも載っていないのだ。

「そこには情報差し止めがかかっていた。」

「差し止め？誰が、何のために？」

『誰が何のために』かは重要ではない。この事件の裏には、何か得体のしれないものの存在し、それを我々で食い止めることこそが重要なのです。」

情報の差し止め、すなわち緘口令を敷けるような大きな組織には心当たりがある。まあ、清廉潔白な組織などあるわけもなし、今更驚くようなことでもないが、そこに所属している身としてはシンジはいい気分ではなかった。

「表沙汰にならない事件に、秘密の舞台と秘密の調査、シャドウの事件かな？」

「そうとは限らない。」

「じゃあ、人間の事件？テロリストとか？」

「そうとも限らない。」

「シャドウでもない、人間でもない、かといってただの自然災害でもない。とすれば、まさか、怪獣娘が事件を？」

なるほど、それならばGIRLSが表沙汰にしたがらないという説明がつく。なお一層、近しい人たちにやらせたくはないという理由にもなった。

「悪人の怪獣娘だとすると、一体どんな能力が・・・？」

「そのために濱堀アドバイザー選ばれました。」

「どれぐらい役に立つかはわからないけど、改めてよろしく。」

しかし、悪人の怪獣娘とは。そりゃあ人間にだって悪人がいるのだから、怪獣娘にそんな人がいたっておかしくない。だがその目的は？それら含めてすべてをこれから調べる。

そしてこれが全ての始まりだった。想像をはるかに上回る、深淵に滑落していくのだった。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「シンジ君!?!大丈夫か?!」

ボタツボタツ、と気が付けば白い患者服に赤い染みが出来ていた。その元を指で探ると、鼻血を流しているのがわかった。

「またどこか怪我をした？気分は悪くない？」

「いえ・・・これを読んで、思い出そうとするとこうなつたみたいで。」

心配して駆け寄ってきたのはベムラーさんだった。シンジにとつて今唯一の話し相手でもある。見知らぬベッドの上で意識を取り戻してから、ずっと傍にいた。

「こんなもの、無理に思い出すことはないだろう？忘れたくて忘れたことだってある。」

「それでも・・・それでも知りたくないんです。自分の身に何があつたのか、あの時何が起こっていたのか、空白なままじゃ嫌なんです。」

手帳を取り上げたベムラーさんに縋りつき、懇願するように訴える。

「私が君の傍にいてあげたなら、こんなことには・・・。」

「ベムラーさんを巻き込まなくてよかつたとおもつてますから。」

「そんなに私のこと、頼りなかつた？」

「そういうわけでは・・・。」

ベムラーさんの目は厳しくも、哀しみに溢れていた。シンジも何も言うことができなかつた。





「これぐらい慣れていきますので。」

村まで歩いて2時間はかかるらしい。蒸し暑くて不快指数も高いというのに、マグマ星人さんはスイスイと平地を行くように進んでいく。

「体力に自信はあったつもりだけど、この暑さはナンセンスだ。」

「そうですね。」

マグマ星人さんは反対にクールすぎる。口数の少なさならゼットンさんともタメを張れるだろう。

(ゼットンさんは会話が苦手ってだけだろうけど、この人の場合はただ単に無駄を省略してただけかな?)

間が持たないままシンジはマグマ星人さんの背中を追う。徐々に視線が下がっていつているのは気のせいではない。すると突然、マグマ星人さんの足がピタリと止まり、鋭い視線と声をシンジに投げかける。

「見えますか?」

「え!?! 見てませんよ。」

「何がでしょう?」

「えっ、何の話?」

視線が下がっていったというのは地面を見ていたという意味であって、決して前の人

のヒップをじろじろと見ていたわけではない。

「あれです。あの停留所に誰かいるようです。」

「えっ、あ、本当だ。子供かな？」

マグマ星人さんは警戒していたが、シンジは構わずんずんと歩を進める。

「濱堀氏？」

「ちよつと行ってみてくる。何かあつたら援護して。」

マグマ星人さんは呆気に取られていた様子だったが、それよりもシンジにはその子供のことが心配だった。

「キミ、大丈夫？どうしてこんなところに？名前は？」

「なまえ……『リコ』……。」

「熱中症かな？しっかりして。」

それは10歳にも満たないだろう幼い女の子だった。持っていた水と塩分タブレットを与え、日陰に移して容態を見る。

「濱堀氏。」

「マグマさん、この子熱中症みたいです。いったん戻るか、村へ行ったほうが近いでしょうか？」

「……このままもう数十分で村へ着くようです。」

「じゃあ、そこまで連れて行こう。村の子供かもしれないし。」

マグマ星人さんの言葉も聞かず、女の子を背負って歩きます。

「リコちゃん、どこに住んでるの？」

「・・・おうち。」

「そっか、おうちはどこかな？この先の村かな？」

「・・・わかんない。」

「濱堀氏。どうしますか？」

「とりあえず、村で人を探そう。そのために来たんだから。」

「その子供は？」

「保護者を探しましょう。」

と、またしばらく歩くと、人家らしきものが見えてくる。が、人の気配はない。

「ごめんくださいーい！ごめんくださいーい？」

「周囲に人影なし。」

しばらく村を歩き回ってみたものの、誰一人いない。

「しょうがない、適当な家を借りてこの子を休ませるか。マグマ星人さんは、引き続き

調査を。」

「・・・了解。」

「なにか問題でも?」

「いえ、濱堀氏は少し迂闊ではないですか?」

「迂闊?」

「相手は何者かもわからぬ内に接触したり、こちらの存在を誇示したり、危険な橋を渡つていましたか?」

「接触してみないと相手は何者かわからないでしょ? 調査するには踏み込んでみたほうがいいんじゃない?」

「・・・承服しかねます。では、行つてきます。」

速足でマグマ星人さんは居なくなつた。その後姿を見送つて、手近な家にお邪魔させてもらおう。

「飲み水はあるか。井戸があるのかな? 念のため一回沸かしてから飲ませてあげよう。」

「ん・・・?」

「あつ、気が付いた?」

しばらくして、リコと名乗つた女の子が目を覚ました。特に異常は内容にみられる。

「( )は・・・?」

「さっきの場所に近い村だよ。自己紹介してなかつたね、僕はシンジだよ。よろしく

ねリコちゃん。」

「よろしくね、シンジお兄ちゃん。」

「リコちゃんは、この村の子なのかな？お父さんやお母さんは？」

「リコ、この子じゃないよ。」

「そっか、じゃあキャンプに来たのかな？ここから山一つ向こうみたいだけど。あそこでバス待つてたのかな？」

「うん、けどバスこなかった。」

「だろうね、バスはめつたに來ないみたいだし、山のふもとで道が塞がってたからバスは來ないんだ。」

「どうやら、迷子の様子。この村に置き去りにするわけにもいし、両親を探す必要もありそうだ。」

「じゃあ、お兄ちゃんたちと一緒に山降りようか？麓でお父さんとお母さんがそう？ね？」

「うん、リコ、お兄ちゃんと一緒に行く。」

「よしよし、じゃあ・・・あつ、飴があつた。これあげるよ。」

大阪人気質なミカから何個か飴ちゃんを貰っていた。リコはそれを食べる。

「さてと・・・とは言ったものの、調査をおろそかにするわけにはいかないし・・・、

リコちゃん、ここで待っててくれる？夕方前には戻って来るから、そしたら一緒に帰ろう。」

「うん、リコ待つてる。」

「いい子だ。お菓子置いていくから、おなかすいたら食べてね。」

疲れているのか、リコはとても大人しかった。そんな子が山一つ越えられるのか？服や体は結構汚れているようだったが、にわかには信じられない。が、子供というのは時にとんでもない体力を見せる。あながち侮れない。

さて、調査をするとは言ったものの。ここは何もなさ過ぎて退屈しそうなくらい何も無い村だ。やれテレビも無い、ラジオも無い、車もそれほど走ってない、電話もガスも無い。

「こんな村、人がいなくなつて当たり前だなあ……。」

だからつて村全体で東京へ行くこたあないわな。畑や田んぼを見るに、普通に栽培されてるように見える。

「この田んぼ、水が張ってない？」

よく見れば、田んぼに水を貯めておく水門が開きっぱなしになっているのだ。開けたとすれば、数日前の大雨の日だろうか？それから誰も触っていないのだとしたら、村人

が消えたのはその時か。

よいしょつと、田んぼに水を張りなすと、乾いてひび割れた土に生気が戻っていく。  
「迂闊か……。」

先ほどマグマ星人さんに言われたことを思い出す。たしかに、自分は後先考えずに飛び出すことも多い気がする。逼迫している状況であればあるほど。

とはいうものの、そうせずにはいられない性分であり、そうそうに変えられない性格であるという自覚もある。否、悪癖である。これはいつか運命になる。もうすでにその地雷を何回か踏んでいる気がするけど。

「おつきい家だな。村長の家かな？」

と、思案を巡らせている間に塀のついた大きな家についた。何か情報が落ちていないか探らせてもらおう。

「玄関に足跡……。」

玄関には長靴の泥の足跡が沢山出入りしていた。

「やつぱり雨の日に何かあったのかな？日記かなにかあるかな？」

履きならした靴を脱いで、人の痕跡や手掛かりを探す。そのうち書斎を見つけ、目ぼしいものを探す。

「あ、ミツケ！どうやら日記らしい。」

パラパラと中を見てみると、ずいぶん昔から定期的に記録がつけられているらしい。直近、ここ数日のことを見てみる。どうやら降り続く大雨に懸念を感じていたらしい。ほかに目ぼしい情報が無いか、しばらく巻き戻って見てみると、ふと気になる記述が目に残る。

『忌み子』・・・?』

何やら穏やかじゃない単語の登場だ。どうやら、十数年前、村にやってきた女が一人の子供を産み落として死んで、村長はその子供を引き取つたらしい。ところが、その子供が成長するにしたがって奇妙なことが起こり始め、村長はその子を離れの座敷牢に監禁しているらしい。

「じゃあ離れを調べてみようか。」

一旦日記を読むのをやめ懐に仕舞い、離れを探す。木や物に隠されるように、ひっそりとそれはあった。窓をのぞき込んだり耳を澄ましてみても中から人の気配はない。入り口は開いていたので中に入る。

中は埃っぽくて、人がいたような形跡がない。

「ふむっ……じゃないのかな?」

さらによく調べれば何か見つかるかもしれないが、村の調査も中途だし、日記も半分ぐらい残っている。いったん後回しにすることにした。





「濱堀氏。」

「ん？えつと・・・マグマ星人さん、だよね？」

「今はアンジェリカ・サーヴェリスタです。」

シンジとベムラーのいる海辺のペンションに、金髪の美女がやってくる。その訪問者にベムラーさんは見るからに機嫌を悪くする。

「何の用？」

「濱堀氏への謝罪と、我々の処遇についての報告を。」

「謝罪？今更そんなことでも、許されるとも？」

「ベムラーさん、アンジェリカさんもせっかくなら来てくれたんだから、お話ぐらいしてもいいでしょ。」

「むう・・・。」

「この度の失態は、私の不注意と不始末が原因です。そのためにアドバイザである濱堀氏を危険に晒したことを、深くお詫びいたします。」

その言葉にベムラーさんはまた怒る。

「それだけ？まるで事務的に喋っているだけじゃないの？マニュアル通りに。」

「ベムラーさん、もういいから。」

「よくないだろう！もうちょっと彼女たちがしつかりとした人間だったら、キミがこ



オツパイのペラペラソース！>

<あーりえんなー！

ウ○コだ捨てろー！>

<魔太郎！

森ネズミ〜森ネズミ〜>

へ中野バーガー！

「何語だよー！こは日本か！」

村のあちこちから罵声、汚い声、声とも呼べない口から出る音が聞こえてくる。見れば、村人と思わしき人々が農具や松明を手にわらわらとあふれ出してきている。

誰も彼も明らかに正気を失っているようだった。それにいくら人間とは言え、負傷している状態でこの人数を相手にするのは難しかった。猟銃を持っている者もいるようだった。

「こりやあかなわん、いったん身を潜めて・・・。」

背の高い葉っぱの生えた畑の中に逃げ込むと、再び発砲音が響き、畑に立っていた人影を撃ち抜いた。

「おいおいマジかよ。」

ただのカカシが瞬きしている間にバラバラになってしまった。他のカカシにも村人

が群がり、手に持った武器でズタボロにしていく。わかっていたが正気ではない。

「はやく、リコちゃんを連れて逃げよう。マグマ星人さんにも連絡を……。」

逃げながら無線機をいじるが、ノイズばかりで通じない。妨害電波にも強いバースト通信のはずなのに、ジャミングを受けているようだった。村どころか、山全体に罠を張られていて、そこに踏み込んでしまったのか？ともかく今は自分の命を優先しよう。

「リコちゃん、いる？どっ？」

先ほど訪れた家に戻つてくると、リコちゃんは横になっていた。反応を確認する間もなく、戸や壁をドンドンと叩く音がする。

「逃げる……って、もう囲まれてる！」

いったい今までどこに隠れていたのか、人の壁が出来上がっている。村の入り口への道は塞がれてしまった。逆に行くしかない。隠れる場所の当てとしては、先ほどの村長の家ぐらいしかないが。

「うっ、こつちもか……。」

どんどん数を増やしながらか、距離を狭めてくる。片手を負傷し、もう片方ではリコを抱えながらでは銃を構えるのも難しい。

「離れの方ならまだ……？」

すぐにここにもやってくるだろうが、出入り口が一つしかないほうが迎え撃ちやすく

もある。中に入って戸を閉めると、箆筒や机を引きずってバリケードをつくる。

「おや？」

そして床を調べてみると、何やら通路を見つけた。ここがひよつとすると日記に合った座敷牢かもしれない。

「二か八かか、ここに隠れるか。」

入り口を隠してしまえば、安全に隠れていられるかもしれない。

中は肌寒いほどに冷たかった。どうやら水が傍らに流れているようで、空気の心配もなさそうだった。

しばらく隠れていると、ドンドンと壁を叩く音が聞こえ、破砕音がして人が入ってくるようだった。息を殺して潜んでいると、やがてここに派「誰もいないと判断したのか村人は出て行った。」

「やれやれ……。」

一安心すると、腕の痛みが返ってくる。それよりも、リコの心配を優先するが、杞憂に終わった。どうやら眠っているだけらしい。

「無線は……まだダメか。日記の続きでも読んでいるか。」

座敷牢……というよりここは地下牢のような気がするが、そこに忌み子を閉じ込めてからのこと。しばらくはその子供の泣き声が響いていたが、やがて聞こえなくなっ

た。それからしばらくは平和だったが、やがて村のあちこちでまた異変が起こったという。やれ誰もいない廊下に子供が走る音がしたとか、備蓄していた食料が全部腐っていたとか。やがて飼っていた犬が夜中に喧しいほどに吠えていたかと思うと、ネズミの群れに襲われて骨だけにされていとか、曰くそのネズミはネコほどの大きさのあるネズミだったとか。

ここいらで忌み子についての説明があつた。村には新しく生まれた子供に対して、親が魔除けの儀式を行うのが通例で、それを行わないとその子供は呪われるというものだったらしい。忌み子の母親は子を産んですぐに死んでしまい、父親もわからないので、代理として村長が執り行つたが、それでは「不完全と思われて封印されたらしい。なお同様に、母親も身元が分からなかつたらしく、適当に無縁仏として葬られたらしい。

い。  
「悪い怪獣娘、ひよつとしてその忌み子が？」

そしてそれがリコなんではないか？と思ひ至る。しかし、力をコントロールできていないのだとしたら救わねばならない。それどころか、力の自覚すらないかもしれない。

「ともかく、今は休もう。」

音信不通のマグマ星人さんや、別行動中のキリエロイド・ノーバコンビもどうなつて  
いることやら。

「お兄ちゃん・・・?」

「リコちゃん、起きた?」

「おそとー。」

「今ダメだ。お外危険だから。」

「うん・・・。」

と、中心人物と思わしき少女が目を覚ました。一応尋問してみる。

「リコちゃんどこから来たのかな?この村じゃないの?」

「とおくからー。」

「リコちゃんのお母さんは?」

「おかあさん、いつもいっしょいる。けどいまいない。」

「お母さん、どこにいるの?」

「・・・わかんない。」

その質問に困惑しているようだった。どうやら、嘘をついているわけではなさそう  
だ。

「じゃあ、リコちゃんは普段なにをしてるのかな?」

「リコね、おかあさんといっつも遊んでるの。ともだちもいっぱいいるよ。」



「そっか、どこで遊んでるのかな？」

「キャンプじよう！お兄ちゃんはどこなとおともだちいるの？」

「僕？僕はいつもリコちゃんみたいなお友達と一緒にかな？」

「リコとおんなじ？」

「そう、リコちゃんみたいな特別な力のある子たちと。」

「いっちょカマをかけてみる。」

「リコ、とくべつなの？」

「そうだと思っけど、違う？」

「わかんない。」

わかんないか。自覚がない可能性もある。それがこの村人ゾンビ現象の原因だとすると、リコが眠っているにも関わらず発生していること、リコを巻き込みかねない状態なのを見るに、その可能性が高い。

「ま、もう少し休もうか。きつと助けがくるからね。大丈夫だから。」

「リコ、おなかすいた・・・。」

「んー、あ、飴玉がまだあったよ。食べる？」

そうしてしばらくしていると、リコがこくりこくりと船を漕ぎだす。

「眠い？」

「んー……。」

「おいで。」

膝に頭を置かせて眠らせる。シンジも疲れてきたのか、眠気がやってくる。

『……。濱堀氏？おい。』

「ふああ？あ、こちら濱堀シンジ、どうぞ。」

『こちらキリエ、目標を撃破した。どうぞ』

「撃破？倒したの？」

『ああ、抵抗激しく、確保は不可能と判断した。』

「……。了解、帰投しましょう。」

シンジの知らない間に、事件は終息を迎えた。曰く、キャンプ場の方でも同じような惨状で、人々を操っていた怪獣娘は『処分』されたとのこと。

「……。なんも出来なかつたな。」

リコを背負い、地下牢から這い出ると、月が昇っているのが見えた。

「うわぁ……。死屍累々……。」

月光に照らされて、死体のように動かなくなつた村人たちがあちこちに倒れているのが見えた。一応生きているらしい。が、起き上がってまた攻撃されてはかなわんでひとまず置いていくしかない。救急に任せよう。

「・・・お兄ちゃん？」

「リコちゃん、起きたの？まだ寝てていいよ。」

「お兄ちゃん、リコのこと好き？」

「ん？好きだよ。もうお友達だもんね。」

「そっか、じゃあ・・・。」

「リリともお友達になつてくれる？」

「え？リリ？」

腕に鋭い痛みが走る。痛みのあまりに、背負っていたリコを落としてしまったが、落下中に一回転してリコは地面に降り立つ。

「リコちゃん？一体何を?！」

「リコは今お眠なの。リリが代わりに遊んであげるわ。」

「リリ？誰なんだそれ？というか、何があつた？」

「リリはリコのお母さんだからあ、リコのためにお友達をたくさん作らないといけないの。」

「リコの、お母さん？」

考えが追い付かない。一体何を言っているのか、リリって誰なのか。とにかくわかる

のは、

「お前が、この事件の首謀者か？」

やはりこの子が怪獣娘だったのか？では、キリエさんたちが倒したというのは？

「さつきキャンプ場でも、おかしなのと会ったわ。そう、アナタあれのお友達なのね。」

「・・・何が言いたい？」

「みんなあなたの友達なのね。外にはほかにもいっぱいいるようね。」

怪獣娘のこと、やはり知らなかったのか。

「とにかく、君をそのまま放つては置けない。一緒に来てほしい。」

「嫌よ、ここでの暮らしが楽しいわ。友達もいるし。」

「その友達だって、人を操って作ったものでしょう？そんなの友達じゃないやい。」

「違うわ、自分に都合のいい人間を友達というのでしょうか？」

「違う！」

シンジが言われて嫌なことをピンポイントについてくる。苛立ちが混ざり始めた、その時、

「ぐっ・・・なにつ・・・？」

「ようやく効いてきたみたいね？」

「なんだ・・・体が・・・痺れて・・・。」

先ほど鋭い痛みを貰った傷口から血が漏れ出す。それは沼底の泥のように黒かった。

「なにを……した……?」

「これよ、これを一度触ってみたかったの。」

「バディ……ライザー……を、どうして?」

リコ、もといリリは動けなくなったシンジのベルトを探り、バディライザーをとる。

「あなたのことも知ってるわ。怪獣娘の友達になりたいんですって? 濱堀シンジさん?」

「知っていた……のか?」

「インターネットで見たわ。」

「この村にネットなんか……?」

「ないわ、けどキャンプ場に行けば、いつでも使えたわ。」

「お前は……何者なんだ? ただの怪獣娘じゃない。」

「生き物が他者を喰らうのに、理由がいるの?」

それはまるで野生の獣、『ビースト』のような存在だった。ただ悪戯に傷つけることを良しとした異生獣、人を喰らう吸血鬼、ノスフェラトゥ。

「戦うしかないのか……バディライザーを返せ!」

「意にそぐわないからって排除するなんて、ひどい!」

「誰がそうさせる!」

ライザーショットを抜いて2発撃ちこむ。少しまだ体がふらつくが、これぐらいの距離ならまだ狙える。そのはずだったが、横から伸びた黒い影に遮られる。

「マグマ星人さん?!なんで!」

「この子はもう私の友達。」

それは物言わぬ傀儡となったマグマ星人さんだった。何も喋らず、虚ろな目と剣をシンジに向ける。

「さあ、あなたも仲間になろう?」

「そんな・・・こと・・・。」

「じゃあ死んで。」

降り降ろされる剣、そこにまた、今度は赤と白黒が飛び込んでくる。

「間に合ったか。」

「まさかマグマがやられるなんて。」

別行動中だったキリエロイドさんとノーバさんが合流する。

「ここは・・・逃げたほうがいいか。」

「同感。」

「うわっ、でもマグマさんが!」

「今は逃げる！」

ノーバさんに引つ立てられて、シンジは走らされる。負傷状態のシンジを抱えて、手練れのマグマ星人さんと、謎の怪獣娘を同時に相手にするのは難しい。

「ん？なんだ？」

ドドドドドと、地鳴りが聞こえてくる。揺れがどんどん近づいてくるのは、地震ではない。

「うわっ?!?足元になんかいる?!」

地鳴りの波が、シンジたちの足元にまでやってくると、それは『何か』の大群だった。真つ暗でそれが何かも見えないのはこの時点では幸運だった。

群がってくるそれらを蹴散らしながら、どうにかジープを止めていた麓にまで辿り着く。そこまでは追ってこないらしい。

「はあ・・・はあ・・・撒いたか？」

「うわっ、気持ち悪っ。なんだこれは。」

足にまとわりついていたのは、不定形でグロテスクな肉塊。まるで毛の生えていないネズミのように醜悪で、大きな牙が生えている。

「あの怪獣娘の作ったものなのか？この生き物とも言えない、肉の塊も？」

「なんか・・・気分が・・・。」





「断る、と言ったら?」

『人質をこの子に殺させる。』

即席のラボで解析をしている最中、マグマ星人さんの無線機から通信が来る。声の主は、怪獣娘・・・ビースト・『ノスフェル』である。

「何の用?」

『取引しよう? お兄ちゃんがこつちに来るなら、人質は全員返すわ。』

「信じられるわけない。」

『お兄ちゃん信じて〜リコのお願いだから。』

事実、山に近づくことすら危険で、人質も村人や、キャンパーたちを含めれば優に200を超えている。それらを操ったマグマ星人さんに殺させるといふ、非道な脅しを仕掛けてきた。

『人質が多すぎるから、半分ぐらい間引いてもいいんだよ?』

「人数の問題じゃない。」

『じゃあ来て、無垢な怪獣娘と友達になろう?』

「・・・あいにく、誰かさんにやられた傷が回復しきっていない。」

『生死は問わないわ。死んでも動かせるから。』

「バディライザーは、僕の生体反応がなければ動かせない。」

『やっぱり？人間って卑怯よ。』

結局、12時間後の20時にシンジ一人で来ることを条件に、人質を解放する取引が決められた。山の周囲は常に見張られており、反故に値する行動をとれば人質を殺すということだった。

「日本語じゃそういうの脅迫っていうんだけど。」

「しようがない、相手はまともな教育すら受けていないんだから。」 「それでも知能だけは高いらしいけどね。」

急ピッチで、シンジが持ち帰った水のサンプルや、肉塊の解析が行われた。その結果が以下。

・肉塊の正体は、ノスフェルの細胞が、山の動物や鳥に取り付いて増殖し、ネズミのような姿になったもの。キリエたちが戦って倒したのも、この肉塊を操った分身のようなものだった。

・マグマ星人を含めて、人が傀儡状態にあるのは、水が原因。水にノスフェルの細胞が含まれており、一定量体内に入るとペストのような毒素が発生する。山の裏には都内へ水を提供するダムがあり、そこから毒を撒くつもりと考えられる。

「このペストには、血清が必要になる。」

「この肉塊から作れないの？」

「その肉からは毒素が発生していない人体に入って初めて、毒素が生成されるらしい。しかも毒は直接脳に作用していた、人体を巡らない。だからただ血液を集めるだけじゃダメらしい。毒を培養して、それをモルモットに打ち込んで、血清を取り出すしかない。」

「三行で。」

「時間がない、材料がない、量が足りない。」

「どうするの？」

「・・・ちよつと考えさせて。」

考えられる方法は一つしかない。しかしそれは一歩間違えれば自身の命すら危うくなる捨て身の作戦だ。

「あともう一つ。その血清を本体に打ち込めば、本体の無力化もできるかもしれない。」

「その必要がある？一番効率的な無力化なら、抹殺したほうがいい。保護しようにもあまりに危険すぎる。」

「そうだと思うけど、何を企んでいるのかわからない以上、安直な手は打てない。」

「自分の命を捨ててまで、マグマや人質を救う必要がある？」

「答えるまでもないでしょ？」

「英雄的行動は寿命を縮める。だから非効率的。」

「いいの、これが僕のやり方だから、自分を貫く。」

たとえ迂闊と言われようと、正しくなろうと、必ずやり切れればそれは立派な『正解』になる。

「それに、こつちもズルをしないとは一言も言っていないし。」

今回解析に協力してくれた、『裏』の人たちにも協力を仰ぎ、『秘策』が用意できた。

そして運命の時間。一人村へとやってきたシンジは、前哨戦としてマグマ星人さんに打ちのめされる。その背後には、ものすごい数の人質たちもいる。

「ぜあ・・・疲れた・・・2時間の道を30分で走らせて、体力を消耗させるとは・・・。」

「抵抗なんてしないで、楽になっちゃえばいいのに。」

拘束され、ノスフェルの前に連れてこられるシンジ。

「約束だ、人質とマグマ星人さんを解放しろ。」

「その代わりに、私の友達になってもらうよ?」

「・・・いいだろう。さあ早く。」

人質たちは糸が切れたようにその場に動かなくなつた。だがそこへ、肉塊ネズミの群れがやってきて、餌を食るように村が見始めた。

「なっ!?約束が違う!」

「解放するとは言ったけど、生きて返すとも言つてない。」

「ぐあっ!!」

「バカだなあ、わざわざ引つ掛かりに来てくれるなんてありがとう!」

気を取られたシンジの左腕にノスフェルは噛みつき、鋭い爪が腰を貫いた。

「生きてさえいければいいのなら、腕と脚はいらないね。このほうが持ち運びやすくて便利だ。」

「ぐっ……うううう……腕の肉が欲しけりや……くれてやる!!」

噛みつくノスフェルの鼻っぱしを殴りつけて吹き飛ばす。肩の肉が一部えぐれたが、爪も抜けてくれた。

「ぺっ、あと少しで苦しまずにいられたというのに……痛いでしょう? 苦しいでしょう?」

「……ははっ。」

「おやおや? 血を流し過ぎて判断力を失ったのかしら?」

「いや、思った以上に強烈で驚いてるんだよ。」

一足飛びで近づいてパンチを続ける、傷なんてまるでなかったかのようにふるまうその姿に、ヘラヘラとしていたノスフェルも驚きの色を隠せない。

「バカな、激痛で転げまわっても、下半身が動かなく無くなつていてもおかしくない傷

のはずなのに……。」

「ちよつと強力な『おクスリ』を処方されたんでね……まだ毒素も脳に回ってないよ。」  
シンジの腕から、小さな植物片が零れ落ちる。これが、強烈な麻薬作用があり、恐怖心すら消し去るといふ秘蔵の薬草だった。裏のルートを使って手に入れたこれをシンジは全身に浴びることで切り札としたのだった。

「ぬう……抵抗するならこつちも……。」

「させるか！行つてノーバさん！」

「わかつた。」

「なんだと、服の下から?!」

シンジの上着の中から、赤いてるてる坊主が飛び出すと、それは怪獣娘ノーバに変わった。赤い暗殺者としての面目躍如、ノスフェルが指示を出すよりも早く、マグマ星人さんを触手で拘束する。

「よし、これでタイマンだ。」

「あまり持たない、はやくやれ。」

「おのれえ……。」

シンジはバッグから閃光弾と照明弾をバラまく。

「くっ!？」

「ネズミなら光に弱いと思った。襲い掛かってきたのも日没になってからだっただけだ。逆襲だ！」

動きを制限されたノスフェルは、シンジに一方的に殴られる。ネズミのように素早さを生かした動きもできただろうが、ノスフェルにはそれができない。

「なんせ今まで怪獣娘と会ったこともなく、能力で人を操ることしかしなかったから、戦い方を知らない！」

そしてもう一つ、切り札が出来上がった。たった今、シンジの血液に流された毒素から、血清が作られた。ブレスレッドのような機械から、六角形のカートリッジが取り出され、それをライザーショットに込める。

「終わりだ。」

その銃口をノスフェルへ向ける。

「おにい．．．ちゃん．．．。」

その時。ノスフェルの胸元から、小さなものが零れ落ちた。それを見たシンジは一瞬戸惑い、判断が鈍った。

「甘いよねえ？」

その一瞬のうちに、ノスフェルの舌が伸びてライザーショットを弾き飛ばし、さらに首に巻き付く。

「がっ?!?!」

「シンジ!!」

そうしてノスフェルは、シンジを足元へと引きずると、わざと落とした飴玉を踏み砕いた。

「惜しかったねえ？もう許さないから覚悟しておいてよ？」

「がっはっ・・・負けた・・・。」

「そう、負け。あなたの。」

「けど、一個だけ負けてないことがあるかな・・・。」

「なんだそれは？」

「仲間の存在だ。」

それがどういう意味なのかノスフェルが理解する前に、横から飛んできた熱波に吹き飛ばされる。

「なんだ?!」

「終わりだ。」



山の麓から獄炎放射で飛んできたキリエが、最後のトリガーを引いた。

「シンジ、無事か？」

「もう……ダメ……かも……」。

直後、シンジは黒い血を吐いた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「本当に……本当に、生きていてくれて、ありがとう……」。

これにて、事件は解決した。シンジの血液から血清が作られ、人質たちは全員解放された。それでめでたしめでたし、とは当人たちはいかなかった。

「ああ……思い出した。それで僕は、どれぐらい眠っていたんでしょう？」

「……半年だ。」

「半年。」

「そう、6か月もの間、昏睡状態でした。……あなたのおかげで、私も助けられました。」

目が覚めると季節はいつの間にか雪の降る冬になっていた。その間ずっとみんな何していただろうか。クリスマスまでに帰るという約束も守れなかった。それ以上に、自分の体の劇的な変化に驚いている。

「痩せたな、キミは。」

「それに、血もだいぶ抜かれたみたいですし。」

「毒に侵されていた血液はほとんど抜かれたそうです。」

「お前、ちよつとは彼の気持ちを考えてらどうだ？」

「申し訳ありません。」

そうして今は養生のために、本島から離れた孤島、シンジのもう一つの故郷である、大戸島にいる。

「あの子は・・・今どうしてる？」

「リコという少女か、あの子は・・・。」

「シンジー。」

そこへ、こちらに向けて二つの人影がやってくるのがテラスから見えた。

「・・・アイラ。」

「シンジ、元気？」

「そう見える？」

「外にいるなら元気でしょ。」

「それもそうか。それで、そっちは・・・。」

一人は、シンジの従妹で義理妹のアイラ。久しぶりの再会だったが、注目は別にあつた。

「・・・？」

「リコ、ちゃん？」

アイラが連れてきている少女は、まさしくリコだった。が、その様子はどこか上の空。

「きつぱり忘れてしまったようだった。まるで最初から存在し中田かのように。」

「リコもリリも、消えてしまったのか・・・僕の記憶と同じように。」

これではあまりに救われない・・・忘却は罪であるというが、なにもかも忘れてしまっても、これでいいと思う。あの事件も何もかも、忘れてしまったほうが世間にとって都合がいい。

「シンジも遊ぼう、ほら、立って。」

「アイラ・・・加減してよ？」

「！」

「そうだね、遊ぼうか。」

こうして、決して明るみにさらされることのない、闇の事件は、また闇へと葬られた。ただこの手帳のように、消えない傷と記憶があったことを、ベムラーは決して忘れないと誓った。

## フアニー・ゾーン

「よく来たな！ようこそ我らが基地へ！」

どうしてこうなった。現在シンジはポロアパートの一室に招かれている。正確には連れ込まれたというのが正しいが。

目の前にいるのは珍妙な集団。全員怪獣娘のようだ。が、GIRLSの所属ではないらしい。

「さっすがブラックちゃん！見事な誘拐っぷりだったね！」

「誘拐はマズいですよ！ノーバさんも何か言ってください！」

「何か。」

順を追って説明しよう。町をぶらついていたら、以前仕事を共にしたノーバさんを見かけたのでついていくことにした。

「ここがノーバさんのハウスね？」

そうしてこのポロアパートにやってきたわけだが、ここにきて果たして声をかけていいのかと迷った。仕事中だったら邪魔しては悪いし。

「あのお、なにか御用の方ですか？」

「えっ、あれ？主任？なぜここに？」

「はい？主任？」

振り返れば、GIRLS技術部主任、に雰囲気そっくりな人がいたので焦った。

「なんかわからんがかくほ☆」

「グワーツ！」

と、さらに後ろから来た誰かに目隠しをされて、一室に連れ込まれたのが顛末だ。以上

「さてどうしてくれようか！さては君は我ら『ブラックスターズ』への入団希望者か！」

「いや、興味ねっす。」

「だはー！即答！」

お笑い芸人のグループなのかな？団長と思わしきブラックさんこと『ブラック指令』さんと、その横に女子高生の『ペガッサ星人』さん、お菓子食べてる『シルバーブルー』さんに、ゲームやってる『ノーバ』さん。そして隣の部屋で布団を敷いて寝ている『ガタアノゾーア』さん。

「では、スパイか！我らブラックスターズを敵視する組織の差し金！」

「特に敵対するような相手もないような・・・。」

「今更誰も相手にしてないってブラックちゃん！」

「そもそも何者なんですかあなたたちは？」

「ふっ、よくぞ聞いてくれたな！」

ゲームをしていたノーバさんも含めて全員が立ち上がると

「銀色のレイダー！シルバーブルーム！」

「赤きスナイパー！ノーバ！」

「漆黒のリーダー！ブラック指令！」

「4人目のニューカマー！ペガッサ！」

「『4人、そろって、地球の支配者（仮）！』」

「『『ブラックスターズ』!!!』」

どどーん、と名乗りを上げた。

「ほえー、とうかノーバさんそういうキャラだったの？」

「む？ノーバの知り合いだったのか？」

「前の仕事で一緒になった。」

「そうか！では君も特殊部隊から我らへ派遣されてきたということなのだな！」

「違います。」

ノーバさんたちのいた部隊が解散になったということは聞いていた。キリエさんは

大怪獣ファイターに鞍替えし、マグマ星人さんはベムラーさんの事務所に居候していると聞いていたけど、まさかノーバさんはこんなところにいたなんて。

「さつきからゲームばかりしてませんか？」

「ノーバはいつもこうだ。」

こんなキャラだったのか。キリエさんもそうだったけどキャラが謎だった。

「で、地球の支配者？ 暗黒の支配者ならそこにいるけど。」

「そうだ！ 我々の最終目標は、世界征服なのだからな！ ナーツハツハツハツ！」

「世界征服？」

「そうだよー、主にブラックちゃんの面白動画をインスタにあげたりしてるんだー！」

「SNSの帝王？」

今時世界征服なんて・・・しかし、ここ最近は『悪』というものに過敏になっていたシンジには聞き捨てならなかった。

「一体どんな活動を？」

「ふふ、よくぞ聞いてくれたな！ ノーバ、今日の予言は？」

「これだ。」

ゲームをしていたノーバさんがメモ帳を寄越す。

『ミデコ ツカウ ケンエ ロオン』

「なんですかこれ？」

「ブラックさんは、夢の中でお告げを貰うんです。それをもとに毎回作戦を行つていくのですが……。」

「毎回謎解きから始まるんだよねー。」

「ミデコ？ツカウ？デコを使う？それにローンつて、そういえばベムラーさんのローンはどうなったんだろうか。」

「これは……縦に並べて、右から縦読みすればいいんだと思います。」

「ほう、となると？コ、ウ、エ、ン、デ、カ、ン、オ、ミ、ツ、ケ、ロ、『公園で缶を見つけれ』ということだな！さすがペガツサ参謀長！」

「ペガちゃんさつすがー！」

「グツジョブだ。」

なるほど、クイズじゃないか。胡散臭さが倍増しである。

「で、缶つてなんの缶？空き缶？」

「ああ、そういえば今日は町内清掃活動があつたけど。」

「それだ！空き缶を回収して、金属資源を独占することで世界を牛耳れということなのだな！」

「マジ？」





「まあまあミクちゃん、みんなでやればすぐ終わるから。」

「げえっ！あれはGIRLSの！」

「なぜ隠れる？僕もだけど。」

「GIRLSは我々ブラックスターズの仇敵、敵対関係にあるのだ！」

「なんで？」

「そんなもの、我らは闇、奴らは光だからだ！」

「いや、そこじゃなくて、僕も」

「あー！早くしないと空き缶全部持ってかれちゃうんじゃない？」

「むっ、そうだった！よし、我々も手分けして集めるぞ！」

「了解！」

「・・・ラジャー。」

名誉隊員かどうかは別として、手伝いはしよう。ピグモンさんのことを見ると、手伝わずにはいられなくなる。とりあえず、ピグモンさんたちに見つからないようにあつちで拾うか。

「って、ノーバさん？」

「久しぶりだな、シンジ。」

「僕は半年ほど眠ってたので、それほど・・・ってわけでもないか。」

前回の事件で負傷したシンジは、半年間の昏睡状態と、さらに3か月の療養を経た。現在6月の蒸し暑さに汗ばんでいる。

「ノーバさんは、なぜここに？」

「私は好きでここにいます。」

「一見戦いとも無縁っぽいけど、それでノーバさん満足？」

「マグマやキリエとは違って、私はゲームがあればいいし、それに」

「のわーっ!とブラックさんが転倒しているところを、シルバーさんが撮影しているのを横目に見ながら、ノーバさんは言葉をつづける。

「ブラックたちと一緒にいるのは、悪くない。」

「そうなのか・・・いや、ノーバさんだけがどこに行ったのかわからなくて、ちよつと心配してたんですよ。」

「心配されるほどやわじやないよ、キリエもマグマも含めて。むしろお前のほうこそ、しょぼくれているんじゃないかと心配していたぞ。」

「・・・まあ、そこそこですね。」

「ならたまにはバカに付き合ってみるのもいいぞ。」

「やっぱそれってブラックさんのこと内心バカにしてるってこと? そう聞く前にノーバさんは別の場所へ拾いに行ってしまった。一方ブラックさんは中身が入ったままの

缶を拾い上げて濡れていた。そこをまたシルバーさんに撮影されている。

「たしかに見てて楽しい？」

「あのー、シンジ、さん？」

「ん？あれ、ペガッサさん？どうかしました？」

「その、なんていうか、その、ごめんなさい、こんなことに付き合わせてしまつて。」

「いいですよ、どうせ暇してたところですし。」

実際GIRLSでの活動を休止している今は時間が余っている。有意義な使い方なのかと問われると疑問符がつくが、ノーバさんの言う通りたまには真面目にバカをやるのも悪くないと思っている。

「ところで、シンジさんつて、普段一体何を？」

「普段、というか、本来は・・・ん？」

ふと、何気なく手に取ったゴミは、妙に重くつて。

「なんだあ・・・コレは？」

「こ、これつて・・・？」

カチカチと何やらよからぬ音が中から聞こえてくる、ラグビーボールほどの大きさの金属の筒。そして側面にはデジタル時計のカウントダウン。

「ほ、ほあああああ！ホ、ホンモノの爆弾?！」

「ふ、ふええええええ!!」

どうしよう。

「とりあえず、解体を……!」

「で、出来るんですか?!」

「機械には強い方……なので。うん、避難勧告をお願いします。」

「ブラックスターズに『逃げ』はない!」

「さすがブラックちゃん! 無謀さは祖師谷イチだね!」

「さあシンジ名誉隊員よ! 見事爆弾を解除して我らを救って見せたまえ!」

「結局他人まかせ。」

「いいからあんたらもさっさと逃げんかい! もうさつき通報したから!」

「なっ! 私仲間を置いて逃げたりはしないぞ!」

だからどうした。役に立たないのなら、ここにいる必要なくない?

「……。」

「ど、どうしました? シンジさん?」

「いや、見ず知らずどころか、あつて間もない僕のことを仲間なんて呼んでくれるなん

て、と思つて。」

「それがブラックさんのいいところですから。」

「・・・なるほどな。」

人を引き付ける魅力があるんだな。

「さて、爆弾解除も残すところあと少し、最後は・・・。」

「白と黒、二本のコード！」

「・・・どつちがいいと思います、ブラック指令？」

「うえっ!?わ、私か！」

「ここまではなんとかできた、あとはリーダーに仰ごう。」

「よし、よし！私に任せろ！・・・どつちだ、どつちのコードなんだ？」

白か黒か、どちらかを切ればタイマーは止まる。だがそれがどちらかがわからない。

「やはり、我々の色である黒・・・いや、むしろ黒を残すべきなのか？うぬぬ・・・。」

「あつ。」

「どつたのペガちゃん？」

「いえその、私のダークゾーンの中に捨ててしまえば、爆発しても大丈夫なんじゃ？と思つて。」

「そうか！その手があつた！さすがペガッサ参謀長だな！」

「というか、最初にそれに気づくべきうだろう？」

「僕のごこまでの頑張りはいったいなんだつたというのか。」

「はうう・・・ごめんなさい。」

ペガツサさんがネガティブになると、空間に黒い穴が開いた。これがペガツサ星人の能力であるダークゾーンだと、シンジにもわかった。

（やっぱり能力は主任と同じなのか。）

「おっしやー、ノーバちゃん放り込んでー。」

「そーい。」

「うむ、これで解決だ！我らのチームワークの勝利だな！ナーツハツハツハ！」

「ブラックちゃんまた何にもしてないー？」

「調子いいんだからもう・・・。」

そうではない、こういう人だから自然と人が集まり、力になるんだ。

「これでわかったな、シンジ名誉隊員！君もブラックスターズの一員だ！」

「確定事項？」

「もしもーし？」

「むっ？誰だ、せつかくいい気持ちだったのに。」

「またあなたたちですねブラックスターズ！」

「今度は何を企んでやがんだ？」

「げえっ！GIRLS！」

つと、そういえばすっかり忘れていたというか、最初からここにも何人かいたGIRLSの面々に詰め寄らせてしまった。さっき通報した関係でレッドキングさんも来ている。

「さては爆弾仕掛けたのもお前らだな！爆弾はどこにある！」

「つてか、シンジさんなんでそっちにいるの？」

「シンジ隊員を知っているのか？彼は我らの仲間だ！」

「なんだと?!まさかシンジが！そんなはずあるか！」

「え、シンジさんGIRLSの人だったんですか？」

「あれ、ペガちゃん知らなかった？結構有名人だよシンジは。」

「なんだと?!初耳だぞ！」

「ブラックはやつぱり知らなかったか。」

「オンドウルルギツタンディスカシンジサーン！」

「シンシンを返してください！」

「うるさああああああああい!!!」

宇宙にまで届きそうな叫びをあげると、急に場はシンと静まり返った。

「これは誤解だ！爆弾はもうないし、別に僕はブラックスターズに入ったわけではな

い！」



「なに?! どういうことだ? 一つ屋根の下でお互いを知り合った仲ではないか!」

「だから誤解を招くような言い方をするんじゃない!」

「ちよつとどういうことシンちゃん・・・?」

なんか目から光が消えたミカが乱入。

「ずつと音信不通だったから、何があつたのかなつて心配してたのに・・・何があつたのか全然教えてくれなかつたし・・・。」

「その超振動をしまえよミカ?」

「なのに、なにしてるの?」

「なにもしてない。」

「何してるのって聞いているの!」

ミカが一言発するごとに、地面には罅が入り、空気がブルブルと震える。

「お、おいゴモラ、ちよつと落ち着けよ。」

「レッドちゃんは黙ってて。」

「ミカ、マジで落ち着いて、なんか猛烈に誤解してるから。」

「他所の女に浮気しといて何が誤解なのさ!!!」

「だからそれが誤解なんだって! 別に浮気とかしてないし!」

「えっ、浮気？」

「シンジさんサイテー。」

「違うから！いろいろな言えない事があるってのど今の状況は関係ないから！」

「そうだ！シンジ名誉隊員はただ我々のことをストーキングしていただけだぞ！悪く言われる謂れはない！」

「ストーキング??シンちゃんまさか、私たちだけに飽き足らず、他所でナンパを？」

「いやいやそんなことはない！シンジ名誉隊員は最初っから我々だけが目的のはずだった！」

「グワオオオオオオオオオ!!!」

「ブラツクさん！もうドツボにはまるから何も言わないでください！」

時間が経てば経つほど、状況は悪化していく。このままでは、怒れるのミカの暴風によつて、街一つ壊滅させかねない。

「シンちゃんンンンンンンンンン??」

「ヒエツ！」

「オイ！お前らシンジ連れて逃げろ！ここはオレらでなんとかするから！」

「レッドちゃんどいて、そいつら殺せない！」

「はわわ、コワイ！」

ペガッサさんが慄いたとき、またもや空間に黒い孔が開いた。

「うおおおお、諸君撤退だあ！」

「にーげろー！」

「シンジい！後で顔出せよ！」

「わかつてます！」

こうして、怒りのあまりEX化までしているゴモラを全員で押さえつけているところを、なんとか無事に撤退することができた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「まえがみえねえ。」

「半分は自業自得だろ。」

「まあ、どうしても言いたくないことがあったっていうのはわかったよ。私たちが力になれるなれないの問題でもないってことも。」

「わかつてくれたのか、ありがとう。」

「でも、それで寂しいからって他所の女の子に手を出しに行くのはダメだよ！」

「わかつてないじゃないか。」

そうじゃない、そうだろう、あーだこーだ、やいのやいの、口論は夕方過ぎまで続い

た。

「それで、今のところはGIRLSに戻ってくるつもりもないのか？」

「はい、まだいろいろと心の整理が追い付いてないので。」

「オレもそれでいいと思うぞ。たまには自分探してもしてくれればいいさ。」

「はい……。」

「ただこれだけは忘れんな。お前はオレたちの立派な仲間だ。困った時は助けになれる。だから、いつでも呼んでくれよな。」

「ありがとうございます。」

「ここにいる皆がうんうんと頷いて肯定する。」

「シンちゃん……。」

「ミカ、ごめんな、心配ばかりかけさせて。」

「ううん、シンちゃんのこと信じてたはずなのに、こんなになっちゃって、ごめんね。」  
「すっかり頭の冷えたミカがしゅんとしている。」

「でもでも！悪い連中とつるむのはダメダメだからね！」

「わかってるよ、僕も好き好んでそんなことしないから、安心して。」

「本当だからね！シンちゃんと戦うことになるなんてなったら、イヤだからね！」

「ああ、僕も嫌だ。」

キユツと指を重ね、しばし2人だけの世界に浸ること数分。

「ええいつ、イチャついてんじやねーぞ!」

「おっと、じやあ僕は今日はこの辺で。またね、みんな。」

「おつすまたねー!」

シンジは笑顔でそそくさと退場する。

「しかし、ブラックスターズの連中と一緒にいるとは思わなかったな。」

「シンちゃんまさか反抗期?」

「いや、それはないだろ。あの人よしのことだから、どうせ頼み込まれて断るに断れずつてとこだろ。」

申こと5月に、GIRLSはブラックスターズの起こした事件の対応に追われていた。というよりも、ガタノゾアの暴走事件の、というのが正しいが。それ以来ブラックスターズは要注意人物として扱われている。

「まあ逆に、アイツが入ってたら更生するんじやねえの?」

「ありえるかもねーナツハハハ。」

なお、そこまで危機感は覚えられて無い模様。

「ミカやみんなに、こんな心配されてたなんてな・・・。」

ふと、昔を思い出した。バディライザーヲ手にしたばかりだったころの自分を。皆に頼

らなければ何も出来なかつたけど、ミカをはじめとしたみんなに支えられたおかげで、今の自分がある。

それと同時に思ったのは、自分自身は役に立てなかつたとしても、一緒にいる仲間の力になれる、という点ではブラックさんと同じじゃないのか。そういう意味で、シンジとブラックさんは同類なのかもしれない。

「疲れたらお腹すいたな……。」

そんなことよりも晩御飯のことを考えながら歩いていると、なんだかいいにおいがしてきた。

「あれは……ラーメン屋台?」

今時珍しい、暖簾とぼんぼりのかかつた屋台。ちようどいいやと覗いてみる。

「らっしやい!……つてシンジ隊員?」

「ブラックさん?!なんで?」

「これはその……資金稼ぎだ。」

これまた古風なハチマキを巻き、袖をまくって厨房に立つブラックさんがいた。

「それで、注文は?」

「……とりあえず一杯。」

「まいど!」



確認を取る。

「・・・ええっ!？」

同じ屋根の下、同じ部屋、同じ布団。そこでブラック指令さんと一緒。しかもブラックさん服着てないし。

「おっ、シンちゃんおはー♪」

「シ、シルバーさん??つかシンちゃんゆるーな。」

「昨日はお楽しみだったねえ・・・♪」

「なあっ?!」

「はわわ・・・。」

「ペ、ペガツサさん・・・?」

「え、えつちなのはいけないと思います!」

「違う!これはちがう!」

「うるさい。」

一人、ノーバさんだけは平常運転。

こうして、脅迫写真をスツパ抜かれたシンジは、ブラックスターズに協力を惜しまなくなつたのであつた。



## マナツノセカイ

「諸君！次なる作戦を発表するぞ！」

そんなとき、我らのリーダーブラック指令がこの次の指令を伝える。

「我らのチームを守るための重要な指令だぞ！資金稼ぎだ！」

「おお！とうとうブラックちゃんがグラビアドビューしてガツポガツポしちゃうの？」

「しない！」

「じゃあペガちゃんやる？」

「え、ええ?!私、ブラックさんみたいにスタイルよくないですし……。」

「大丈夫だ、そういう需要も世の中にはある。」

「やめなさいよあんたたちは。」

7月に入って暑苦しい日々が続くが、このボロアパートの一室はエアコンすらつけていない。そんな苛立ちの中、ノーバさんのゲームに横から茶々を入れていたシンジが愚痴を漏らす。

「未成年になんてことをさせようとするあなたは、本物の悪人になろうとしてるん

じゃないでしょうね？」

「なに！私は元から悪人だ！」

「その悪人はどんなあくどい方法で儲けるつもりで？場合によっては止めますよ？」

「ふっふっふっ、よくぞ聞いてくれた！その方法とは！」

「方法とは？」

「らっしやいませー！こちらのお席へどうぞー！後で注文窺いまーす。」

一週間後、とあるビーチの海の家、その看板には『海の家ブラックスター』の文字。

「ただのアルバイトじゃん！」

「文句を言うではなーい！これが結構稼げるのだ！」

「せっかく海に来たんだから、海に行きたいなー。」

「あんなしよっぱくてザラザラするものどどこがいいのか。」

「ノーバさんゲームしてないで手伝って！シルバーさんも作った端から食べないで！」

最小限の単価で、最大限の収入を見込めるのだから確かに実入りは大きいだろう。だがその分大変だ、暑いし疲れるし、変な客は多いわで。

『お姉さんカワイイねー、後で一緒に遊ばない？』

「ふえっ!? こ、困ります?!」

「ペガツサさん、ここやっておくから食材の在庫チェックお願い。」

「あつ、はい!」

うら若き少女がチャライ男の毒牙にかかろうとしているのは目に毒だ。

「そういうシンちゃんこそナチュラルスケコマシじゃない?」

「シンちゃんゆーな! 焼きそばとカレーだよ!」

「あいよー。」

「あらノーバさん触手が器用。」

「この程度の注文、復活の呪文を覚えるのよりも簡単だ。」

ただ単に女の子と一緒に仕事をするのが多くて、距離感がつい近くなってしまうっただけだ。 タブン。

そんなこんなで数時間後、休憩中。

「ペガツサさん、アルバイトとか経験ないの?」

「うち、結構そういうの厳しいので、やったことないんです。」

「そういえば結構いいところのお嬢さんだったねペガちゃん。」

「そんないい子をこんなところに連れ出していいんかい。」

「あつ、許可は貰ってきましたから、大丈夫です!」

「そうじゃなくつてさあ……。」

「ペガツサも大分馴染んできたな。」

「こない子道を道から外そうなんて、やっぱりあんたら悪だわ。」

「ふふふつ、ようやく我らの恐ろしさを理解できたようだな！」

「褒められてないよブラックちゃん。」

以前のシンジなら、このペガツサ星人のような怪獣娘こそ、GIRLSにいるべきなのにと思っていたらう。

「まあ、逆にペガツサさんがいないとブラックスターズはダメダメになるかもしれないし。」

「ええっ?! そんなこと……ある……かもしれないせん?」

「そーそー、ペガちゃんみたいにマジメな悪の組織をやってくれる人がいないとダメだよーブラックちゃん?」

「うむ、ペガツサ参謀長は大事な仲間なのだからな!」

つまり、ブラックスターズの理念がどうか関係なく、ただブラックさんのことが好きだから集まってる、ということか。

「あれ、ノーバちゃんどこ行くの?」

「かき氷が切れた。」

「じゃあ、ブルーハワイとってきて！」

「私は宇治金時を頼む。」

「お前らは自分で取りに來い。」

「わ、私が皆さんの分までとってきます！」

「あーわかった、僕が行く。」

「はいはーい、じゃあ私も行こうかな〜♪」

「なっ・・・ならリーダーの私が行こう！」

「『どーぞどーぞ。』」

お約束な流れから、パシられるリーダーというものを初めて見た気がする。多分ナチュラルでやっているのだろうけど、ブラックさんはこんなにも単純なのか。見れば見る程悪人とは思えなくなってくる。

「ところで、シンジさんさんこそ何のために私たちに付き合ってくれているんですか？」

「悪の組織を放っておくわけにはいかないけど、それ以上になんか気になるからかな。」

「どの辺が気になるの？」

「ペガツサさんみたいないい子が下手を掴まされてたらと思うと。」

「えー！ペガちゃんのごことは大切にしているよアタシたち？」

「ペガツサさんに無茶ぶりしたりしてない？」

「むしろペガツサの存在が私たちを律している。」

「あれ、意外とやり手だったのペガツサさん？」

「そんなことないですよお!？」

いや、キワモノぞろいだからこそ、マジメなペガツサさんは輝くのか？

「要するに、ヒマなのだなお前も。」

「えっ、シンちゃんってニート？」

「違う！・・・と言いたい。」

仕事はしてないけど、一応大学にはまだ在籍している・・・ハズ。

「いつかGIRLSに戻っちゃうんですか？」

「最近はフリーでもいいかなと思ってる。」

「じゃあこのまま仲間になっちゃおうよ！」

「それは考えさせて。」

先行き不安な組織に身を置くというのはちよつと・・・いや、逆に立派な組織になるよう尽力するというのもいいかも。目指すところが悪の組織だということに目をつづれば。

「そういう点では、ペガちゃんに似てるかもね。」

「思った。ペガツサさんも周りに流されやすそうだし。」

「否定しない。」

「うう・・・やっぱり私ってそういう風に思われてますか？」

「ペガちゃんはいいい子だよ〜よしよし。」

ああ、同族の匂いを感じたからかな。妙に居心地がいいのは。

「諸君！ビーチボールをするぞー！」

「唐突だなあ。」

我らがリーダーがどこからかビーチボール大会のチラシを持って帰ってきた。

「これは天啓だ！我らの力をこのビーチのリア充どもに見せつけよというお告げに違いないー！」

「でもこれ、2人組で参加だよこれ？」

「はい2人組作ってー。」

「ぐはっ?!」

「な、なんだこのダメージは!?!」

何気ない2人組作ってが、シンジとペガツサを傷つけた。

「そ、それよりも、観客にジュースを売った方が利益になりませんか？」

「おおー、ペガちゃんナイスアイデア！」

「店放置するわけにもいきませんしね。」

と、言うことで。

「そらあ！」

「ブラックちゃんナイスサーブ！」

ブラックさんとシルバーさんが大会へ、残ったメンバーで売り子を担当することになった。

「というか、シルバーさん撮影してばかり……。」

「ブラックさん、無駄に運動神経いいんだな。」

「あれでも怪獣娘だからな。」

怪獣娘のためのスポーツのレギュレーションもあるが、こういったところまでその手が届いているとは限らない。凶らずも、ブラックさんの唱えたりア子どもを潰すという作戦が成功しようとしている？

「ナーツハツハツハツ！恐れよ、崇めよ！」

「むしろ盛り上がってるように見えるが。」

「あはは、ブラックさんらしいですね……。」



さて、あつという間に決勝戦に進んだ。もう一方のチームの試合は見ていなかったが、はてさて。

「ぬっ……!」

「どうしました、ノーバさん？」

「……ちよつと席を外すぞ。」

（飲み過ぎかな？）

間違つてもそんなこと口に出せないが、すぐにそういう理由ではないとわかった。

「ククク……もはやここまで来れば勝つたも同然！作戦は成功だ！」

「露骨なフラグだねブラックちゃん！」

「残念ながらそれはビッグミステイクだ。」

「得物を目前にして舌なめずりをするのは三下のすることです。」

現れたのは、同じ黒でも青と金髪の美女2人。シンジには物凄く見覚えがあった。

「げえっ!? ベムラーさんとマグマさん?!」

「知り合いなんですか？」

「あの2人も怪獣娘だ……。」

それもかなり武闘派の。

「ふっ、誰が相手であろうと負ける気がしない！ ナーツハツハツハツ！」

「貴様か、『私』のシンジ君を悪の道に引きずり込もうとするのは？」

「ハ？」

「おー、シンちゃんの関係者？」

「濱堀氏には多大な借りがある。それを返すまで、彼には正しい道を歩んで欲しい。」

そして。

「散れっ!!」

「ウギャー!!」

「死ねよやー!!」

「アバーツ!!」

強烈無比なスパイクがブラックさんを襲う!

「ピンチヒッター、シンジ隊員！」

「僕に振らないで！」

「シンジ君!そんなところにいないで戻ってきなさい!私の元へ！」

なんだなんだ修羅場か?と観客はまた大盛り上がり。

「あ、あのっ!」

「むっ?」

「ぶ、ブラックさんたちのこと、悪く言わないでください！」

勇気を出してペガツサさんは二人に反論する。

「ブラックさんは私の大事なお友達なんです！それ以上ブラックさんを攻撃するなら、わ、私が戦います！」

「おー、ペガちゃん勇気あるー！」

すでにコートから出て観客モードなシルバーさんも囃し立てる。

「こうなったらしようがない、シンジ君来るんだ、直接叩きのめして目を覚まさせてあげー！」

「手合わせ願います。」

「どうしてこうなった。」

こうして、シンジ&ペガツサVSベムラー&マグマの闘いが始まった。幸いなことに、ブラックさんを叩きのめすことに集中していて点差はついていない。

「ペガツサさんはうまい具合に拾って。僕がなんとかして打ちに行くので。」

「あわわ、私運動音痴なのに巻き込んでしまって・・・。」

「気にしない気にしない！ちよつと遊びたくなつたところだったから！」

こういう時、ミカのポシティブシンキングが羨ましくなる。なんだかんだミカには引つ張られっぱなしだったとつくづく思う。

(やめやめ、誰かと比べるのも、ここにいない人間の話をするなんてのも。)

「容赦はしないぞ!」

「手加減とお慈悲を!」

「手を抜くのは無礼だと心得ております!」

「うひゃー!」

啖呵を切ったものの、強烈な無慈悲なスパイクが飛んでくる。ボールが割れないことが不思議なほどの威力だが、シンジはそれをなんとか上へと打ち上げる。

「ペガツサさーん拾ってー!」

「あわわっ!?!」

綺麗な山なり軌道で、ペガツサの頭上をスルーしていく。

「あうう・・・ごめんなさい・・・。」

『ペガちゃんドンマイ!』

『がんばってくれペガツサ参謀長!』

「ううっ・・・プレッシャーが・・・。」

背後からは声援が聞こえてくるが、前方からは強烈な視線を感じる。どうやらベムラーさんたちはペガツサさんにも注目しているらしい。

「どうやら君も怪獣娘のようね?」

「えっ、そ、そうですが？」

「まさか君も脅迫されて道を踏み外そうと？」

「そんなことないです！」

「ならもつと堂々とするることね。自分に正直にならなければ、能力は身につかないわ。」

「能力？そつか！」

「あのシンジさん、私が前に出ます！」

「何か作戦があるんだね。OK、今度は僕が拾いに行く。」

「えっ、いいんですか？何も相談しなくて。」

「ペガツサさんのやりたいことなら、それが答えなんですよ。さすが参謀長。」

「！はいっ！ありがとうございます！」

やりたいようにやらせてみる、GIRLSで学んだことだ。能力を把握するのも、指示をするのも、まずやらせてみる。

「そらくぞお！」

「あだあ！ペガツサさん！」

「よおし・・・ダークゾーン！」

弾道の着地点で待ち構えるペガツサが手を伸ばすと、黒い空間が現れてボールを吸



「もうにどとさんかしない。」

夜、場所は一行の宿泊する民宿の一室。

結局シンジがやられた後、ブラックさんも復帰させられたのだが、それでも結局同じ轍を踏むこととなった。それでも一切泣き言を言わないブラックさんはすごい。

なお、隣の部屋にはガタノゾーアちゃんが寝ている。こんな大騒ぎをしているのにスヤスヤとしているのはさすがというか。

「それより、ノーバはどこへ行つたんだ？」

「お昼、大会の途中でいなくなつてからまだ帰つてきてないんです。」

「晩御飯には戻つてくると思つたのになー。」

「まあ、子供じやあるまいしそのうち戻つてくるだろう。」

多分マグマさんがいたから顔を出しにくかつたんじゃないかなとシンジは思つていますが、それでも今いないのはこつそり会いに行つていいのかな？

「それよりも、さつそくだが今日の売り上げで飲むぞー！」

「早速散財していいの？」

「かまうものか！明日からもがっぽり稼ぐのだからなー！ナーツハツハツハツ！」

「よーっ大将太っ腹！」

ブラックさんは大量のビールを空け、シルバーさんもつまみを食べまくっている。

「シンジさん、ケガ大丈夫ですか？」

「もう治ってるよ。結構体は丈夫な方だから。」

「そう、なんですか？」

「怪獣娘と一緒にいる間に、そういうのが移ったみたい。」

「えっ、そういうものなんですか？」

「普通はそういうものではないかな。」

それは僕がちよつと特別だっただけ。

「シンジさんって、すごい人だったんですね。」

「そんなことはない、僕もあの子たちに会う前は普通の人間のはずだた。」

「どんなきっかけで出会ったんですか？」

「会ったのは偶然だったけど、出会うことは運命だった。」

「はあ……？」

その出会いで一瞬に世界が変わった。説明するのも難しいがその最たるものが手元にある。

「これ、この『バディライザー』待っていた。」

「『ソウルライザー』と似ていますね？」

「ペガッサさんたちのソウルライザーは、GIRLSのとはちよつと仕様が違うみた



いだけど。まあさておき、バディライザーは怪獣娘と共に生きることが願ったマシンで、怪獣娘と繋がるツールなんだ。」

「怪獣娘と繋がる?」

取り出して見せてみる。壊して直してを繰り返した結果、原型から比べて大分スマートになってきているし、中身も色々追加されている。

『ああ、おはよ。音声認識しろこんにやろー。』

「あれっ?!喋った!」

「ああ、サポートロイドが入ってるんだ。あさつき、ロック解除して。」

「あさつき?」

「AIの名前。」

『他所の子に私を渡すなんて、後でゴモラに言いつけんぞバーロー。』

「僕のほうがブラックスターズに入っているから、ペガッサさんは他所の子じゃないよ。」

『ふーん、じゃあいつか・・・ってなるかこんにやろー。』

ブツン、とへそを曲げたのか画面が消える。

「ちよつと?あさつきさん?おーい。ごめん、いつもの人見知りだ。」

「あはは・・・恥ずかしがり屋さんなんですか?」

「そうなの、他の人にはなかなか心を開いてくれなくて。」

果たしてA-Iにそんな機能が必要なのか？と疑問になるだろうが、この子、いやこの子たちは怪獣娘たちの性格データを元に生まれた。つまりはこの子たちとの付き合いも遠からず怪獣娘たちとのコミュニケーションに繋がるのだ。多分。

「あさつきさんあさつきさん、そろそろ帰ってきてください。」

「おっ??なんだなんだ、楽しそうなことをやっているじゃあないか!!」

「ブ、ブラックさん、酒臭っ!」

「おうペガツサ参謀長も飲みたまえ!今日は私のおごりだぞー!」

「私未成年ですー!」

「よいではないかーよいではないかー!私の酒が飲めんのかー?!」

そこへすつかり出来上がったブラックさんが乱入してきた。

「おうシンジ君!腹を割って話そう!」

「腹を割って話すようなことなんて何もありませんが。」

「そういうな!誰にだって人に言えないような悩みがあるだろうチミイ!」

「酒臭っ!あつたとしてもそんなに気軽に話したくない!」

「じゃあいつ話すんだ?今だろ!さあ吐けエ!オエッ!」

「吐くなー!」

酔っぱらいを振りほどくよ、それは狂ったように笑い転げる。それを見ていた者は、大人になつても酒は飲まないと心に誓つた。

「ぬっふっふっふ、ならば私の催眠術で……。」

「てい。」

「うばあ!」

「うひひ、今のうちにブラックちゃんのアラれもない写真を……。」

「……僕はちよつと外の空気吸つてきますね。」

「いつてらっしやーい♪」

酔っぱらいに絡まれる二人を救つたシルバーさんもどつちもどつちだった。

「外は涼しいですね。」

「風が結構あつて肌寒いくらいかも。」

潮の香をのせた風が、海から力強く寄せてくる。ペガッサの長い髪がなびく。

「へくちっ!」

「んっ……はい、これ着て。」

「えっ、でも……。」

「外に誘つたのは僕だし。意外と寒いのは誤算だった。」

夜とはいえ、真夏の空の下とは思えないほどに空気はひんやりとしていた。

「風邪ひかないように。」

「ありがとうございます……。」

向かい合つて上着を羽織らせると、自然と視線も重なる。あまりにごく自然なそぶり  
でそうされてしまった、異性に対して免疫のない箱入り娘ナペガツサは思わず赤面して  
しまうが、シンジのほうはにべもなく視線をそらした。

「綺麗だね。」

「ふえっ!? そ、そうですか……?」

「都会から結構離れてるから、空気も澄んでるし、星もよく見える。」

「あつ……いい、景色ですね。」

お約束的な思わせ振りのセリフだつて吐いちゃう。

（はわわ……私、どうなっちゃうんでしょう……?）

（食べたかつたなあ、冷やし中華。）

別にどうもしない。シンジにとってはいつものことなので、別段ペガツサを気に掛ける  
こと自体は特別でも何でもないのだったから。

「おや、そこにいるのはシンジ君かい?」

「あつ、ベムラーさんとマグマさん、お昼ぶり。」

「どうも。」

「私は帰ってきた。」

「ノーバさんも一緒ですか？えつと・・・、初めまして。ペガツサ星人です。」

「どうも初めまして、ベムラーだ。私立探偵をしている。こっちは助手のマグマ星人。」

「初めまして。」

「ベムラーさんたち、なぜここに？」

「君に会いに来た。というのは冗談で、休暇だ。マグマに一般人らしい感性をつけるためでもあるが。」

「そうだってんですか・・・。」

「というのも建前で、本当はブラックスターズを調べるために来た。」

「ええっ?!」

「はつきり言っちゃうんですね？」

「隠しても君たちは賢いから気づきそうだったし。」

「それで、ベムラーさんにはどういう風に見えましたか？」

「ふむ、君たちを外道に墮とそうとする悪であれば、昼のうちに壊滅させていただろう。」

「そうではないと？」

「まだ断定はしていないがね。だが昼間の感想からすると、君たちのリーダーは行動力のあるバカだと思える。」

「まあ否定はせん。」

「だが、不思議と人の心を引き寄せる力があるようだな。・・・それが悪い方向に転がらなければいいだけだ。」

「悪い方向、ですか？」

「けど、その心配もないと思う。君がいるから。」

「えっ、私ですか？」

「私もそう思います。」

「私もだ。」

「僕も。」

「ええっ!? みんなして一体?!」

急な展開にペガッサは気圧される。

「ペガッサはブラックスターズの良心だからな。」

「いざつていう時の発想力と行動力は素晴らしいと思うよ。」

「そんな・・・私なんて・・・。」

「まあそういうことで、注意はすれど問題はないだろうというのが私からの見解だ。」

「では、私たちは失礼するよ。夜更かしするんじゃないぞ？」

「それでは、また明日。」

「おう、またな。」

「また。」

「えつと、ありがとうございます！」

コンビニのビニール袋を片手にぶら下げたベムラーさんたちは去っていった。

「あつ、おかえりー。あれ、ノーバちゃんも一緒だったんだ？」

「おう、旧友と会っていた。・・・それにしても酒臭いな。」

「うわつ、ブラックさんなんて格好で寝てるんですか！」

「ぐっへへへ・・・これで世界征服でや・・・。」

「僕外で寝るわ。」

その方がマシなくらいひどい有様だった。ブラックさんは一升瓶抱えて寝てるし、また何も着てないし。多分ベムラーさんたちのところへお邪魔させてもらった方が気持ちよく眠れると思ったが、さすがに自重した。

「みなさん！片づけて寝ましょう！明日も早いですから！」

「はーい班長ー。」

「かしこまー。」





「昼間っからビールですか？」

「いいや、カレーライスとコーヒーを。」

「私もそれを。」

「はいよー、オーダーですー！」

ベムラーさんの言う通り、今日はなんだか肌寒い風が吹いている。おかげでお店も繁盛している。

「うわっ、厨房あっつー！」

「ふふふ、昨日はいつの間にか眠ってしまったが、おかげでおかげもいただいた！『ラッキーマイテムは鉄板焼き』と来た！」

「ただの占いじゃん。」

「ともかく、ガンガン熱くしてジャンジャン焼くのだ！」

確かに今日は熱いものに需要があるため、占いは当たっているのかもしれない。

「ああっ！ノーバさんが茹でタコに！」

「ころすぞ？うう・・・まるで電子レンジに入れられたダイナマイトのようだ・・・。」

「わははー！もつともえろー！もつとあつくなれよー！」

「あかん、ブラックさんも脳がオーバーヒートしてる！」

まだアルコールが抜けてないのかと疑いたくなるが、たぶん脳が溶け始めている。元

から半分溶けているような人だったが、このままでは焼きそば製造マシーンになりかねないので休ませることにした。屋内でも熱中症にはなるので注意だ。

「おつ、シンちゃん厨房立つの?」

「鉄板とコテの扱いなら、ミカとよく行くお好み焼きで鍛えてる!」

「おー、素早い手さばきさつすがー!」

こうしてなんやかんやでピークを乗り越えた。

「う、腕が・・・。」

「シンちゃんおつかれー、ほれモミモミ。」

「ペガツサもグツジョブだ。」

「えへへ・・・。」

お客も捌けた昼過ぎ。ベムラーさんたちも交えて休憩タイム。

「あの、ベムラーさん、あんま近づかれると食べにくいんですけど?」

「それなら私が食べさせてあげようか?」

「おー、アツアツだねシンちゃん?」

「そういうのいいですから!」

「ほれほれ、もつと食べ給え、今日は私が奢っちゃおう!」

「やけに太っ腹だな。」

「なに、昨日の敵は今日の友だ！」

昨日の試合のこともあって、相席するのは憚れるかと思つたが、ブラックさんは寛容な人物だった。

「それにしても、シンジ隊員の知り合いで、しかも探偵とはな！あれかい、殺人事件とか扱つたりしているのかい？迷宮入り事件を解決したり！」

「そういつた事件にはあつたことがないかな。」

「そうか……。」

「なんだか、期待に沿えなくてすまない……。」

あつたとしても機密事項で言えないのだろうけど、こういうテンションが高すぎる人の相手をするのほあ、ベムラーさんには胃に穴が開きそう。

「こうして会つたのも何かの縁だ！乾杯といこうじゃないか！」

「すごい、まるで酔っぱらいのようなセリフ。」

「ブラックは常に酔つている。」

「たしかに夢に酔つてる。」

「それにしても、今日は本当に涼しいね。27℃くらい？」

「日も照つてるのに。これはちよつと異常だね。」

天気予報ではこんな異常気象は報道されていない。

「ということとは、ここいら周辺だけの局地的なもの？」

「何かが起こっているんでしょうか？」

「何かあって？」

「それは・・・超常的な力を持った、怪獣娘とか？」

ペガッサのその言葉に、ピクツとシンジが反応する。それを見たベムラーが口をはさむ。

「この世界で起こる不思議なことは、なにも怪獣娘だけじゃないさ。」

「と言うと？」

「そう、例えば・・・。」

ちようどその時、海のほうから大きな叫び声が聞こえてくる。外からは一層冷たい海風が吹き込んでくる。

「な、なんだあ!!」

「海が凍ってる?!」

「あ、あれ見てください!」

凍える海の向こう、大きな三角形の帆のようなものが見える。こんな近場にヨットが寄せてきた、というわけでもない。

「でっかいイカ?!」

「違う、シャドウビーストだ！」

怪物娘と双璧をなす、この世界の超常、シャドウの出現だ。それが姿を現しただけで、冷気は一層強くなる。

「この寒さはあのイカが原因だったのか！」

「あんまりおいしくなさそう。」

「残念ながら食用ではないし、バカンスを楽しみに来たわけでもなさそうだ。」

「濱堀氏、交戦許可を。」

「戦う前に、逃げ遅れた人を救助しないと。ノーバさんとシルバーさん、頼めます？」

「わかった。」

「おっけー！」

「ブラックさん、催眠術で人を誘導したりとかできますか？」

「私の催眠術は一人ぐらいが対象だから無理だ！」

「誇らしげに言うなよ・・・。」

「そもそも自分にもかかっちゃうからダメだね。」

「じゃあその無駄に通る声で避難誘導を！」

「あいわかった！ブラックスターズ出動だ！」

「了解！」

「まあ今回は従っておくことにしよう。」

「マグマさんは？」

「もう行った。口より体を動かそうか。」

一足飛びで、凍った海面を足場にシャドウビーストに挑みかかるマグマさんの姿と、それを援護しに行くベムラーさんを背景に、ブラックスターズによる救助活動が始まった。

「しかし、悪の組織が人助けするなんてなあ。」

「ブラックさんたちは、悪い人たちじゃありませんから。」

「そうだね。そのうちG I R L Sも来てくれるし、それまでは僕たちが正義の味方をやっつていようか。」

「え、いつの間に通報を？」

「さつきあさつきさんに通信してもらっておいた。」

こういう時を見越して、自律行動してくれるサポートロイドを用意していたのだ。シンジとペガッサは後方から指示を飛ばす役を担っている。

「避難かんりよー！で、次どうする？」

「もちろん、あれを倒す！ブラックスターズは敵をよけない！」

「どうやって？」

「どうするペガツサ参謀長？」

「ええっ!？」

「よし、ブラツクさんを餌にしてイカ釣りをするというのはどうだろう?」

「いいなそれ。」

「ちよつと待てーい!」

水中は敵のホームグラウンドなら、そこから誘い出すのが得策だろう。

「ノーバさんがブラツクさんをそこまで誘導するので、ブラツクさんは催眠術で操って丘に揚げてください。」

「無茶を言ってくれる、が、頼られたからには応えるしかあるまい!なにせ私はブラツクスターズのリーダーだあああああああ!!!」

「行つていーよ。」

ブラツクさんが言い切るより前に、ノーバによって祭りのぼんぼりのように吊り下げられる。

「寒っ!」

「何しに来た?」

「まあ見てろ、あなたはだんだん浜に揚がりたくなる・・・。」

触手の攻撃が飛んでくるが、それをマグマとベムラーはブロックする。そうしている

間に、シャドウビーストはのっそりと移動を始めた。

「動き出したぞ！」

「溺れる！溺れるー！」

「彼女は何をやっていているんでしょう？」

「・・・わからん。」

自分にも陸へ上がりたい暗示がかかって溺れているがさておき。

「で、ここからどうするの？」

「デカイやつなら、切り取って小さくする。」

「ノーバちゃん詳しいね？」

「まあな。」

「それにしても、遠近感沸かないからわかりにくいけど、とんでもない大きさじゃない？」

シンジは今まで見たことなかったかもしれない。以前東京タワーで戦った繭型ビーストと同じくらいかもしれないが、目の前にいるイカはさらに自由に動くことができる分驚異的だろう。しかしどうやってあんな大きさまで成長できたのか？

「ほらほら来たよきたよー！」

「近づいてきたら余計に寒くなってきたな・・・。」



ザバザバと砂浜にまで上がってきたシャドウビーストと対峙する。よく見ると体は半透明で、軟体というよりはゼリーのようにプルプルしていた。

「水の塊なのか？」

「うえっ！よく見たら中身ゴミでいっぱい！」

イカというよりはクラゲ、そして波間を漂うゴミ袋のようである。半透明な体表の向こうに見えるのはゴミ、ゴミ、ゴミの山、プラスチックや空き缶のような、自然の力では処理できないようなものがいっぱい。

「なるほど、ゴミを溜めて質量を確保していたのか。」

「じゃあ、ゴミを分別しちやえばどんどんちちやくなるんじゃないでしょうか？」

「海まで来てゴミ拾いかあ。」

「シンジさん、こういうの好きだったんじゃないですか？」

「ペガツサさんもなかなか言ってくれる。」

どちらにしろ、ゴミをそのままにして帰るわけにはいかない。お掃除の始まりだ。

「ぬんっ！」

「ちえりーすぷらーっしゅー！」

攻撃で、シャドウビーストの体から袋に穴を開けたように水が漏れ出し、少しずつ小

さくなくなっていく。

「シンジ君！ペガツサ君を守れよ！」

「了解！」

「二軍人として、民間人や悪の組織に負けるわけにはいきません。」

攻撃は断続的に行われているが、しかしいくら切つても叩いてもシャドウビーストは平気そうにしている。

「こいつ、ダメージ受けていないのか？」

「核となる存在がどこかにいるはずだけど、こうも大きくちや・・・。」

「えーいまどろっこしい！もつとまとめて、一網打尽にできる方法はないのか！」

「一網打尽・・・。」

その言葉を反芻して、ペガツサとシンジは頭を巡らす。

「電気を流すのはどうでしょうか！」

「そうだ、海水ならよく電気を通す！」

電線は、防波堤を乗り越えた先の道路にあった。

「！　そうだ、ラッキーアイテムは鉄板焼き！」

「そっか！日光で熱くなったアスファルトで焼けばさらにダメージが！」

「！　というこで。」

「またかあー!」

当然囿はブラックさんが行く。心なしかノーバも楽しそうにしている。

「ええい、ままよ。お前はだんだん道路に上がりたくなれ!」

ズシンズシンとシャドウビーストは天然の鉄板の上に誘導され、ジユウジユウと音を立てて蒸発を始める。

「ワオ、ナイススメル。」

「また濃い海のニオイが……。」

「これで終いだ!」

電線を切り落とし、海水でできた水溜まりに電気が流される。たちまち、爆竹に火が付いたかのようにシャドウビーストの体が弾ける。

「あびやびやびやびやびや!!」

「あつ、ブラックちゃん逃がすの忘れてた。」

そうしてシャドウビーストは動かなくなると、中心部から黒い塊が飛び出してくる。

「あれが核だな。」

「はい、おしまい。」

ベムラーのペイル熱線に焼かれ、塊が消え去ると、水とゴミで出来た体も動かなくなつた。

「勝っちゃった?」

「ああ、我々の勝利だ。」

「ふ、ふはははは!! ブラックスターズにかかれば、朝飯前だ! ナーッハッハッハッ!」  
その様子を見ていた、観客からは歓喜と感謝の声援が届く。

『ありがとー! GIRLSー!』

『サイコーだったー!』

「あれ? 私たち、GIRLSと間違えられてる?」

「な、なんだとー?!」

「まあ、こうなるわな。」

世間的には怪獣娘〓GIRLSと認識されている以上、こうなるとも予想出来ていた。

「お待たせー! って、もう終わっちゃってる?」

「遅いよ。そうだよ。」

「ゲエツ! GIRLS!」

「あーっ! ブラックスターズ!」

遅れてミカたちも到着する。

「お前らー! こんなに道路をゴミで散らかしやがって! さては全部お前らの仕業だな

!

「ノウ！ どうしてこうなる！」

「ゴミ拾い、全部やつてもらおうからねー！」

「そんなー！」

「では、私たちはこのあたりで失礼させてもらおうよ。」

「休暇に戻ります。」

「待てー！ ここまで手伝ったからには最後まで付き合ってもらおうー！」

この後、やいのやいの言いながらタタ働きさせられるブラックスターズであった。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || ||

「うーん、せっかく海に来たんだから、ひと遊びぐらいしたかったかなー。」

「そうですね、私も海なんて何年ぶりになるかな・・・。」

夕方、片づけも終わって防波堤で佇むシンジとペガッサ。シャドウが現れたとあって、ここの浜辺も一時的に封鎖されることとなり、海の家ブラックスターも撤収となつてしまった。

「結局人助けをして海を綺麗にしたただけだったねー。」

「ええい、これも全部GIRLSの作業なのだ！」

「なにはともあれ、ペガッサもシンジも、グツジョブだ。」

「あの2人、なんかいい感じじゃない？」

「何がいい感じなのだ？」

「ブラックちゃん鈍感ー！」

「出来るなら、今度来るときはもつとゆつくりしたいね。」

「えつ、今度、つて？」

「学生なら夏休み中でしょ？ならまだ遊ぶ機会はあると思うし。」

「でも、私夏期講習とがありますし・・・。」

「一日ぐらい、のーんびりしてもいいんじゃない？それか、一緒に遊ばない？」

「ふええっ!?わ、私とですかあ?!」

「うん、ペガッサさんのこと、もつと知りたいし。」

「ええええええ?!そんな急に言われましても！」

「ああ、スケジュールは君に合わせるから、そんなに焦らなくていいよ。」

（どどどどどどどど、どうしましょう!?私、男の子と遊んだことなんて・・・これつて、

デデデデ、デートのおさそい!?)

どうやらペガッサの夏はまだ終わらない模様・・・今年の夏は、お楽しみがいっぱい。

『チャットだぞー、確認しろバーロー。』

「ん？あ、ペガツサさん、ちよつとごめん。」

「え？あつはいい。メールですか？」

「ちよつとね。友達から。」

駆け足でその場を去るシンジの後姿を、ちよつとした好奇心からペガツサは追いかけた。その友達は、すぐ傍まで来ていた。

「あー、シンちゃんおーい！」

「おー、ミカカー。そつちはどう？」

「こつちもあと引き上げ！あーあー、せつかく海に来たんだからひと遊びしたかったなー！」

「仕事で来たんでしょ？さっさと帰れ。」

「んもー！シンちゃんつれないこというなよー！」

「はいはい、また今度遊んでやつから、ヘソ曲げるんじやありません。」

「ホントだかんねー！レッドちゃんやエレちゃんとも、たまには遊んであげなよー！」  
「わかつてるよ。」

「んー♪シンちゃん大好きー！」

「・・・あはは、考えすぎ、だつたかな？」

ゆらり、と純粋なベガツサのハートに一筋の影が落ちるが、そのことに気づくものは本人すら含めて、誰もいない。



## 私は怪獣娘

服装よし、髪型よし、持ち物も抜かりない。携帯のバッテリーも満タン、電車に遅れもない、カギの閉め忘れもない、ちよつと気分を変えてヒールの靴も履いてきた。それなのに、妙に気分が落ち込むのはなぜでしょうか？ペガツサ星人こと平賀サツキの心には楽しみに半分、不安が半分積もっている。

「こころ押すな！」

「よく見えないよブラックちゃん。」

「お前ら静かにしろ。」

それはすぐ後ろの物陰に皆さんがいるせいでしょうか？皆サングラスや帽子で変装しているけど、バレバレです。

「あの、皆さん一体何を？」

「や、やーナンノコトカナー？」

「心配だから見に来たのだ。」

「やだノーバちゃん隠そうともしない。」

「心配？」

「ブラックちゃんたら、ペガちゃんがシンちゃんに籠絡されてGIRLS堕ちしないか心配してるんだよー?」

「なんですかGIRLS堕ちって?! そんなことなりませんよ!」  
まるで見守る親かのように、ブラックスターズの皆さんがいる。

「まあシンジ君も既に我々の仲間だから、その点については心配ないが、リーダーとしては隊員の動向を知っておくのは当たり前であつてだな!」

「素直に気になったからついてきたって言えばいいのに!」

「そんなデリカシーのないことが言えるか!」

「デリカシーのないことはするんだな。」

「ぐぬっ・・・だからこうしてバレないようにコッソリとだな!」

「もうバレてるんだってブラックちゃん。」

どこかズレたテンションなのも相変わらずで、安心できるのやら、恥ずかしいような。

「もう! でも、で、デート・・・中は何もしないでくださいね!」

「おうペがちゃんデートだつてさー?」

「買い物に付き合ってもらうだけとか言つてたのに。」

話の発端は少しさかのぼる。海の家的一件があつた後、いつもの秘密基地で。

「諸君、我が神ブラックスターの恵みを受け取れい!」

とブラックさんが、シンジ含めたその場にいる全員に茶封筒を渡してきた。

「なんですかこれ？」

「この間の海の家のバイト代だ！」

「とうとうバイトと言っちゃったよ。」

「資金稼ぎじゃなかったのー？」

「いらぬのなら返してもらおうぞー！」

「さすがブラックちゃん太っ腹ー！」

「えっ、これ結構な額じゃないですか？」

「こんなに貰っちゃっていいんですか？」

「もちろんだ！私は一度行ったことは訂正しないぞー！」

それは、学生の短期アルバイトと見比べれば多い方な金額だった。もともと、ペガッサにはそのへんの勘定がよくわからないが。

「私、お給料もらったの初めてなので、ちよつと感激です。」

「おー、ペガちゃんの初任給だね！」

「ブラックスターズは給料を出さないからな。」

「大学のサークル活動の延長みたいな・・・。」

「ええいうるさいぞ！徴収するぞー！」

「わー。」

どたどたと幼稚園児のようにさわぐ4人を尻目に、ペガツサは一人手に持った封筒を見つめていた。

そうして夕方、ペガツサとシンジは共に帰路についていた。

「家が案外近かったのも驚きだね。」

「はい、まさかでしたね……。」

こうして並んで歩くことも珍しくないのが最近の習慣だった。一緒に帰っていると噂されたら恥ずかしいなんてこともない。

「そういえば、ペガツサさん。」

「なんですか?」

「自分が怪獣娘だつてこと、ご両親には言つてあるの?」

「え、そ、それは……。」

「もし、言いくいんだつたら、僕も一緒に報告についてくよ?」

「いえ!そんなお手数おかけすることは!」

「そういうのが仕事だから、遠慮しなくていいよ?僕これでも一応GIRLSだし。」

「確かにそうなんですけど……。」

ちよつと立ち止まって、ペガツサはしり込みする。

「……悪の組織に入ってるってことが、言いづらい？」

「……はい、うち、親が公務員と教師で厳しいので。」

「公務員かー、うちの親父にもその爪の垢を煎じて飲ませたい。」

「え？ シンジさんのお父さんって？」

「怪獣娘の研究者だけど、一回も顔合わせたことない。今まで生きてきて。」

「ええっ!？」

「いやホントの話。常に海外を飛び回ってて、声を聴いたことすらないんだよ。……一応顔は見に来てるらしいんだけど。」

それもつい最近……とボソツとシンジはこぼすが、ペガッサはそこに気づかないほど気が気でなかった。

「ホント無茶苦茶だよ、いきなりバディライザーを受け取りにこいとか、いきなり妹を送り付けてきたりとか。」

「妹?!」

「うん、アイラっていうんだけどね。ちよつと前に大騒動起こして大変だったりした。」

「あ、それちよつと調べました。うちインターネットも禁止なので、学校のパソコンを使ったんですが。シンジさんも、すごい有名人だったんですね。」

「まあね。それはそれとして、親に言い辛いってのはわかるよ。敵に立ち向かうのには勇気がいるけど、身内に立ち向かうのにはもつと勇気がいるし。」

「立ち向かう、って……。」

「けど、子供っていつか親の元を巣立つし、その先はなんでも自分で決められるし、決めなきゃいけないなくなる。ペガツサさんの場合は、それが今ってだけじゃないかな？そしてそう出来る力ペガツサさんは持つてる。」

「もう持つてる?」

「今日貰ったバイト代が、その一つだと思う。参加は強制じゃなかったし、ペガツサさんが自分の意志で稼いだお金だよ。接客の経験も積んだ。学校の勉強じゃなくて、自分の行動から生まれた結果だよ。」

「そっか、私、お金を稼いだんですね! 私にも出来たんですね!」

「そうそう、その意気! 自信持つて!」

ペガツサの目の前がぱあっと明るくなる。自分の気づかないところで、自分は大きく成長していたのだと気づかされた。

「あ、でも……。」

「ん?なに?」

「私、友達と遊びに行くって言って海の家に行ってたので、嘘ついてアルバイトをして

たつてことに……。」

「あー……たしかにそれはちよつとマズいかも?」

「ど、どうしましょう?」

「いや! 娘の成長に喜ばない親はいないよ! たぶん。箱入り娘がこんなに成長するなんて、つて思ったら僕だったら泣くね! たぶん。」

「多分!」

「いや、泣く。ホント泣く。なんなら今泣く、ほら泣くぞ。」

「はわわ、泣かないでください!」

「そうだ、あの! シンジさんいいですか?」

「なに?」

「このお金で、私両親にプレゼントを買いたいと思ってるんです。」

「お、いいじゃん。親孝行。」

「その買物に、一緒に行ってくれませんか?」

「ああ、OKだよ。」

「即答?!」

「前、いつでもOKって言ってたし。」

「それじゃあ、お願いします!」

そして現在に至る。

「諸君！次なる使命はペガッサのデートをサポートだ！」

「やめて！」

どこで聞きつけたのか、特に言っていないなかったはずなのにこうして着いてきている。

「そもそも、サポートできるほどブラックちゃんに経験あるのー？」

「なっ!?あ、当たり前あろう！私を誰だと思っっている！」

「喪女？」

「行き遅れじゃないわい！」

「誰が行き遅れだ失礼な。」

「あれ、ベムラーさん？なんでここに？」

「なぜか着いてこられたのだ。」

「あつ、シンちゃんだおーい。」

そこへベムラーさんを連れだったシンジがやってくる。

「いや、『たまたま』朝バツタリ会って、『偶然』行先も同じというから、一緒に歩こうってなっただけだよ？」

「うわーすごい偶然だねー。」

「うむ。」



ひよっとしてこの人たち示し合わせてた?!

「まあそれはそれとして、行こうかペガツサさん。」

「まさかのスルー?!」

「怪獣娘さんと付き合ってたら、もういちいち驚いてらんないから。」

「慣れてらっしやる?!」

「ペガツサさんもそのうちそうなる。」

なりたいたいような、なりたくないような。シンジさん、最早ブラックさんたちはいないものとして扱うように歩きだしてしまった。

「ちよっ、マジでスルーするのca?!」

「じゃあこれで気兼ねなくストーキングできるね!」

「それはストーキングと呼んでいいのか?」

「ならもう一緒に買い物しに行つていいんじゃない?」

「あんなこと言ってますけど?」

「邪魔にならないならいいんじゃない?」

「ええ・・・。」

「スルースキルとは無視することじゃなく、気にしないことを言うんだよ。」

並んで歩くペガツサとシンジの後ろを、ぞろぞろと4人も歩いている姿は異様に映つ

ただろう。これはこれで恥ずかしい。

「それで、ペガツサさんは何かプレゼントのアイデアとかある？」

「そうですね・・・やっぱり日用的に使えるものがないでしょうか？」

「紳士用のプレゼントならハンカチとかかな。あと、暑いから扇子とか。」

「なるほど。」

「けど、ハンカチはまだいいけど、外で使うものなら柄とかに気を使った方がいいかも。」

「センスだけに？」

「なんか言った？」

「いえ・・・。」

「結構貰ったとはいえ、学生のアルバイト代で買えるものは限られてくるね。というか、自分のは何か買わないの？」

「私ですか？私は・・・とくに欲しいものとか無いですし。」

「そう、ペガツサさんって欲薄い？」

「欲がないというか何も知らないだけだと思います・・・流行りとかも全然わからないですし。」

「ふーん。」

とりあえずプレゼントは決まって、ショッピングモールのフードコートでドリンクを啜り、他愛のない話で盛り上がる。

「じゃあ、こういうところもあんまり来ない？」

「はい、セルフサービスなんて、なんだか学食みたいですね。」

「学食なんて、カレーかラーメンしか食べなかつたなあ。」

「席とるのも大変ですよね。」

「さて、目的も果たしたし、ちよつと遊んでいこうか。」

「あ、はい。でも遊ぶつて、どんなことするんですか？」

「そりやあもう、シヨップめぐりしてウインドウシヨッピングよ。」

「えつ、買わないんですか？」

「欲しいと思ったものを、次来た時に買おうつて遊びに来る理由にするためだよ。」

「なるほど、次のために・・・。」

それから、適当に雑貨屋やアクセサリー店を巡つて回る。

「さすがにランジェリーシヨップに入つたりはしないよね？」

「そ、そんなことできませんよ・・・／／／」

「だよね？それが普通の反応だよね？」

少し含みのある言い方に、ペガッサは内心で小首をかしげる。

「ほらほらくブラックちゃんこういうの似合うんじゃない？」

「な！私はそんな派手なの着けないぞ！」

「たしかに普段穿いてるのはババ臭い……。」

「なんか言ったか！」

後ろでなんか楽しそうにしてるけど気にしない。

「そういえば、シンジさんって、GIRLSの人たちとは普段どんなことを？」

「別段特別なことはしない、かな？一緒に特訓したり、遊んだりもするけど、それ以外は普通。」

「普通に、デートとか、ですか？あのゴモラさんとか。」

「ん、そうだね。ミカとはよく一緒に遊ぶというか、遊ばれるというか。」

「そうなんですか……。」

当たり前だけれど、やっぱりシンジさんってGIRLSの人たちと一緒にいることのほうが多いんだ。仲のいい人たちもいっぱいいるんだろうな。

(私とのお出かけも、その延長線上なのかな？)

こんな風と一緒ににお出かけなんて経験ないからわからないけれど、『遊ぶ』ってそういうものなんだろうか？ちよつとガツカリ。

「……って、わあペガツサさん！」

「えっ?・・・あっ!今の無しナシ!」

気が付くと目の前に小さな黒い孔が開いていた。慌てて心に沸いた感情を否定して消す。

「ふう・・・びっくりした。」

「す、すみません!私、ネガティブになると勝手にこうなっちゃうみたいで・・・。」

「ネガティブか・・・、ぶしつけで申し訳ないけど、どんな風に思ったの?能力の発現にはちよつと興味がある。」

「ふええ?!そんななんだか、申し訳ないです・・・。」

「あー、ごめん。失礼だったか、忘れて。」

言い方によっては、『あなたと居ても楽しくないです』という風になりかねないので、口が裂けても言えない。

「・・・ちよつと休憩しよつか、甘いもの食べたくない?」

「甘いもの・・・ですか?」

「そうそう、ここのクレープ結構おいしいんだよ。」

「クレープ?」

甘いものは嫌いじゃない、けどちよつと意外な提案だった。

「はい、イチゴスペシャル。僕はバナナカスタード♪」

「あ、ありがとうございます。あの、お金……。」

「いいのいいの、奢りオゴリ。」

「シンちゃん、私たちにも奢ってー?」

「バイト代出たでしょあんたたちは。」

「ちえー、ペガちゃんだけには甘いんだー?」

「そりやペガツサはいい子だからな。」

いつの間にか背中合わせのベンチにシルバーさんとノーバさんが居座っている。

「あれ、ブラックさんは?」

「ベムラーと飲みに行った。」

「昼間っから?」

「うん。」

やけに意気投合していたようだったけど。

「じゃあじゃあ、次はカラオケでも行っちゃうー?」

「もう普通に混ざるつもりなんですネ。」

「一緒に遊んだほうが楽しいってー!」

「一理ある。」

と、言うことで、ここからは一緒に遊ぶことになりました。



「じゃあねまた明日ー♪」

「アディオス。」

一日中遊んで夕暮れ。シルバーさんたちはブラックさんを迎えに行くという。

『結局二人で、とはならなかったね。』

「そうですね・・・楽しかったですけど。」

「楽しかったならいいけど。」

シンジはペガツサさんとまた一緒に歩いている。今日一日一緒にいて、その性格や人物像を分析していた。

（欲が薄いというより、世間知らずって感じかな。悪いやつらに騙されなきゃいいけど。）

もう騙されている、ということを忘れつつある。

「今日はお付き合いしていただいて、ありがとうございます。」

「ううん、気にしないで。僕も結構楽しかったよ。・・・そうそう、これを。」

「なんですか?」

これを、と渡したのは小さな細長い箱。

「これって・・・?」

「さつきペガツサさんが見えたネックレス。」



「いいん・・・ですか？」

「今日付き合ってくれたお礼、かな？何かあげたかったし。」

ウインドウショッピングしていた時、ペガッサさんが注目していたのをこっそり買っ  
ておいたのだった。

「キザったらしい行いだって自覚はあるけど、まあよかったら受け取って。」

「・・・嬉しいです！ありがとうございます！」

「どうやら喜んでくれたようだ。」

「大切に・・・しますね・・・。」

「泣くほど?!」

「ちよつと、驚いちゃって・・・。」

「そんなに喜んでくれたなら、成功かな？」

「じゃあ、また明日。プレゼント渡すの頑張ってね！」

「はい！また明日・・・！」

「お、シンちゃんおかえりー！」

「ただいまーって、なんでシルバーさんたちが？」

「ブラックがここで飲んだくれてるからだ。」

「ああ、お邪魔しているよ？」

「人の家で宅飲みしてんじゃねーよ！」

家に帰ってビックリ。家に乗っ取られていた。リビングに入ると、ブラックさんがソファアで一升瓶を抱えて泥酔していた。

「うーわ酒臭っ！人の家だなにやっつてんですかあなたたちは！」

「いやー、ブラックが途中から君の家を見たがついていな。」

「だからって案内までした挙句、酒盛りまでやるかフツッ?!」

「ブラックが真っ先に君のベッドの下を調べようとしていたからな。」「・・・なら仕方ない?」

「大丈夫、ブラックちゃんに変わって私たちがしっかり調べといたよ！」

「全然大丈夫じゃねえわ！」

「なかなかグツジョブな趣味してる。」

「よくねえよ！」

ノーバさんはゲームしてるし、シルバーさんは勝手に飯食ってるし。

「ほれほれー、シンちゃんも飲み明かしちゃえー！」

「認めてしまった方が楽になる。」

「お前らもう帰れー！」

こうして結局深夜までどんちゃん騒ぎが続いた。

そして翌日。

「頭痛がする・・・吐き気もだ・・・。」

「シンちゃんおっはー☆」

「おっはー・・・ってまだいたんかい。」

「今日もペガちゃんと遊ぶからねー♪」

「だからねー、じゃねえよ。なんでウチに来るんだよ。」

「お前の家が存外近かったからだ。」

「何する気？」

「ふっふっふっ、よくぞ聞いてくれたな。今日はペガツサの家にお宅訪問をしようというわけだあー！」

「やめてさしあげろ。」

すっかり回復したブラックさんが上座に座っている。

「ただでさえペガツサさん悩んでるのに、これ以上悩みの種を増やす必要ってある？」

「だから、我々の手で不安の芽を摘み取ろうというのだよー！」

「そういうの、おせっかいつて言うんじゃない？」

「えー、シンちゃんペガちゃんのこと心配じゃないのー？」

「そりゃあ気になるけど、ペガツサさん自身で解決しないと意味ないんじゃない？」

「確かに。」

「それに、どうせならペガツサさんに頼られるまで待つ方がいいと思う。ペガツサさんに他人に頼ることを覚えてもらいたい。」

「それはいいねー！じゃあ朝ごはんにしようー！」

「帰れ！」

「やおおはよう。どうしたんだい、そんなに大きな声出して？」

「ベムラーさん、あなたまで……。」

「すごい薄着のベムラーさんがリビングにやってきた。この人まで泊まっていたのか。」

「しかしリーダーとして、何もしないというのはなあ……。」

「まあまあブラック、まずは自分でやらせてみて、それからフォローしてあげるといいうのも上司の務めだろう？」

「うぬう、それも……そうか。」

それからややあつて、ひとまず解散とあいなつた。

「ではまたなシンジ君にベムラー君！」

「じゃねー。」

「アディオス。」

「さて、今日は誰とデートするのかな？」

「別に毎日デートしてるわけじゃないですよ？」

「そうかい？今も外で幼馴染を待たせているんじゃないのかい？」

「え？マジ？」

見れば窓の外にすごい形相のミカがいた。

「シンちゃん〜？」

「ちよつとまつて。」

破壊される前に窓を開けると、のっそりのっそりとミカは歩を進めてくる。

「一体どういうことかな？」

「どうって？」

「ベムラーちゃんにそんな恰好させて、昨日はお楽しみでしたね？」

「ぶほっ。」

「ああ、シンジ君は随分うまくなったよ？」

「ほう？」

「麻雀の話だからな?!」

「お姉さん、スツパ抜かれてしまったよ。」

「脱衣麻雀？」

「違う！」

「で、昨日は結局なにやっていたのかな？」

「別に、両親へのプレゼント選びを手伝ってあげただけ。」

「ふーん、それってあのペガッサ星人の子？」

「そう、主任と同じペガッサ星人だけど、別のペガさん。」

「それはわかるよー。けどなにシンちゃん、実はああいう後輩系タイプが好みなの？」

「違う。」

「そうだろう、キミのタイプは年上お姉さん系だろう？」

「それもなんか違う。まあとにかく、何もやましいことはしてないよ今回。」

「ふーん。ときにシンちゃん。」

「なに？」

「このババ臭い下着、誰のかな？」

「ぶっ!？」

「?・・・なんかスースーするな。」

「ブラックちゃん酔って脱ぎまくってたからねー。」

「さて、今日は私と遊んでくれるんでしょ？というかあそぼー！」

「まあ、怪我が治るまでは待ってあげな。」

「ベムラーさんも止めなかったですね・・・。」

「人の恋路に手を出すと、嘔みつかれそうだったんでな。」

笑顔だけど目が笑ってないぞミカ。

と、そんなことをしていると、インターホンが鳴った。

「はい、どちらさまー？」

「家主に代わって出るのか・・・。」

『えっ?!あの、濱堀シンジさんのお宅ですよね?』

「おっとー、シンちゃん年端も行かない女の子を家に呼ぶなんて、やるやん?」

「だから誤解だつての!」

「少なくともこの惨状は見せるわけにはいかんだろうな・・・。」

そうして

「は、はじめまして?」

「初めましてではないかな?私はゴモラ!GIRLSの人気者で、シンちゃんの幼馴染だよ!」

染だよ!」

「ペガッサ星人です、ブラックスターズで参謀やっています。」

「おー、参謀なのかー頭いいんだね！よろしくねー！」  
かなりミカが食い気味に見える。

「圧迫面接じゃないんだから、なにも全員この場にいる必要ないんじゃない？」

「えー、私ヘンなことしないよー？ヘンなことするのはシンちゃんでしょー！」

「圧がすごいんだよ、なんか今日のミカは！」

「あわわ・・・なんだかタイミングが悪かったでしょうか？」

「気にするな、この二人に関してはいつものことだ。」

半分は惚気で出来ているのだから、見せられているほうからすればたまったものではない、と。

「それで、ペガッサさんはどうしてここに？秘密基地の方じゃなくて。」

「それは・・・その・・・。」

「私たちはいないほうがいい？」

「いえ！ゴモラさんあべムラーさんに聞いてもらえたらいいとも思ってます。その、迷惑でなければ・・・。」

「他人のほうが気兼ねなく話せるものだ、聞くよ。」

「実は、昨日両親から怪獣娘としての活動について聞かれてしまいました・・・。」

ゆくゆくはGIRLSの一員として活動していくだろう？と言われて、何も答えるこ



とができなかった。

「予想はしていたことだったんですが、いざ言われてしまうとどうしても……。」

「そうだろうねえ。」

「そもそもGIRLSですらないのに。」

「GIRLSは公的機関なのでまだいいんですけど、ブラックスターズは絶対ダメだつて言われそうで……。」

「そうだろうねえ。」

さてどうしたものか、考えていた通り書類やなんやらを偽装して所属しているフリにはできるけど、それもいつかボロが出るだろうしなあと？、シンジが思案していると、それより先にミカが口を開いた。

「ふーん、ペガちゃんもシンちゃんも、肝心なこと忘れてない？」

「肝心なこと？」

「そ。そもそも、GIRLSに所属することは怪獣娘の義務じゃないってこと。GIRLSの外で活動してる子もいっぱいいるよ？」

「それはそうだけど……。」

「それに、もう一つ忘れてることがある。特にシンちゃん。」

「え、僕？」

「そうだよ。そもそもペガちゃんは怪獣娘である前に、一人の女の子だったこと。」  
ズバリ、とミカは言い切った。

「女の子なんだから、やりたいこといっぱいあるよ。それを怪獣娘だからってだけで我慢することはないと思うな。ペガちゃんのやりたいことが、一番大切なことだよ。そこにGIRLSもブラックスターズも関係ないよ。」

「じゃあ、どうしてゴモラさんはGIRLSに？」

「私は、アイドルやるのも好きだし、なによりみんなと一緒にいるのが楽しいから、かな？他にもあるけど。」

「ミカはそれだけでいいんだな。」

「それだけってなにさ、私にとつては一番大切なことだよ！」

「わかるよ、別にGIRLSが絶対ってわけじゃない。所属するかしないかは個人の考えだ。・・・フリーランスのほうが色々楽しだ。」

「だから、まずGIRLSに所属するかどうかは一旦置いていいよペガちゃん。」

「はい！」

これで一つ問題が解決した。

「で、問題はもう一つの方。」

「悪の組織に入りたいですってもしも子供が言って来たら泣くね。もう入ってるんだ

けど。」

「こればかりはもうどうしようも……。」

「なにも正直に言うことないんじゃない？ 青少年健全育成のボランティアしてますっでも言っておけば。」

「どうだかな、ブログにペガツサの顔と名前載ってるから、そのうちバレるだろうし。」

「えっ、ブラックスターズブログあるの？」

「シルバーが勝手にやってる感はあるがな。」

主にブラック指令のオモシロ写真が載っている。本人が知っているのかは定かではない。

「娘の名前でエゴサしてこれが出てきたら嫌だなあ。」

「あわわ……いつの間にこんなものが？」

「まずは彼女たちとの相談が必要かもしれないな。」

「てかペガちゃんさー、なんでシンちゃんのとこにまず来たの？」

「えっ、それはその……。」

「おやおや。」

「ほうほう？」

心なしか赤面するペガツサを見て、ミカとベムラーはニヤニヤする。

「まあその辺のことは一旦置いて・・・どうする？ やっぱり直談判するしかないかな？」

「なんにせよ説明が必要だな。取り付く島があればいいが。」

「ウチ、厳しいですから・・・。」

「でも、一番大事なのはペガッサさんの意思だよ？」

「話は聞かせてもらった!!」

「なに？」

「銀色のレイダー！ シルバーブルーメ！」

「赤きスナイパー！ ノーバ！」

「漆黒のリーダー！ ブラック指令！」

と、いつもの調子で冷蔵庫や床下収納など部屋のあちこちから登場してきた。

「いつから隠れてた!？」

「気にするな。」

「ペガちゃんーん！ どうして相談してくれなかったのー?!」

「み、皆さんに迷惑かけたくなかったので……。」

「それぐらいの悩みがなんだ！我々はチームじゃないか！一人の悩みは皆で共有すれば……。」

「そういうことを惜しげもなく言えるのは、本当にいいところだと思うよブラック。」

「で、具体的にはどうするつもりなのブラックさん？」

「当初の予定通り、ペガツサ君の家に凸撃だあ！」

「そういうところがキミのダメなところだぞブラック。」

「じゃあまずは、ブラックスターズのいいところのプレゼンやってみようか。」

「私たちのいいところってどこかな？」

「休みはたくさん出るな。」

「それはそれで不安。」

「笑顔溢れるアットホームな職場だぞ！」

「不穏だなあ。」

ああでもないこうでもない、と話は難航した。

「とうか、むしろペガツサに職場改善していつてもらいたいぐらいだ。」

「あはは……そのつもりではあつたんですけど……。」

「そんなところに娘をやれるかー！って言われるかもね。」

「ところで、お母さんは教師なんだったっけ？」

「はい、そうですけど？」

「妻が母親であることを辞めて、女でいることを選んで、旦那もそれを認めた家庭でなければいいのだけれど。」

「な、なんですかそれ?!」

「それペガちゃんか宇宙人扱いされるパターンでしょ。」

「ペガツサ星人は宇宙人だろう？」

そうしているうちにだんだんとゴールを見失い、膠着状態に陥った。

「あーあ、どうしたもんかねー。」

「ふはーっ、シンちゃん、コーヒーおかわりー。」

「あー、それ私のマグじゃんー！かえしてよシルバーちゃんー！」

「真面目に考えろよ！ブラツクさんもビール開けないで、つていうかなぜビールがある。」

「ああ、それ私が冷やしておいたやつだ。」

「ベムラーさんまでなにやってんですか・・・。」

「騒がしいな。」

「あーっ！ノーバちゃんなにやってんのさー！」

「ゲームをしている。」

「なんで僕の膝の上に座ってゲームしてるのかって聞いてるんだと思いますよ。」

「お前の懐は妙に心地いい。」

「ぐぎぎ．．．私だって週に3回しかやってもらえないのに！」

「．．．。」

その時、不思議なことが起こった。

「あれっ．．．これは．．．？」

「わああああダークゾーンだあ！」

だらけ切った空気にペガッサの怒りは頂点に達し、部屋にいた全員がダークゾーンに飲み込まれた！

「まだだ、まだ終わらんよ。」

約一名、赤いてる坊主だけは脱出に成功していた。

|| || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ☆ || || || ||

「．．．はっ!?!ここは?うつ、体が重い．．．。」

「ひゃあつ?!そこはわたしの．．．。」

「イヤン、シンちゃんったらデリカシーない♡」





「ペガツサだからだ！」

「でも大人しい子ほどキレるとヤバいって言うよ？」

「そもそも、私たちがここに居ること自体がもう力の暴走なんじゃないか？」

「ペガツサさんの能力の発動条件は？」

「ペガちゃんもネガティブなこと考えると、ダークゾーンが出てくるんだけど？」

「あの場の空気が、ペガちゃんを追い込み込んだんじゃない？」

「くっ、我々ではペガツサの力にはなれなかったのか？」

「家庭問題は、難しい問題だしなあ。」

「それよりも、今はこっから出る方法を探そう。」

「最悪ここで暮らすことにもなっちゃうかもね？」

「えー、食料とかどうするの？」

「・・・シンちゃんを食べちゃおうか。」

「食べないでください。」

『・・・ジメに・・・』

「ん？ブラツクちゃん今なにか言った？」

「私？私は何も。」

「腹の虫じゃない？」

「たしかにブラックちゃんの最近のお腹周り事情を鑑みると？」

「うひゃあ！そんなことないわ！」

『・・・マジ・・・』

「マジでなんか聞こえてこない？」

「私にも聞こえたな。」

「聞こえてないのはブラックちゃんだけだよ。」

「ヴェツ?!」

『マジメにやってくださ〜〜い!!!』

地面などない異次元空間のはずなのに、空間が揺れているのを全員が感じ取った。

「な、なんだあ?!」

「あーっ!なんだあれ?!」

「デカーツ！」

上空と呼んでいいのか、全員の上方に、幾何学模様のように折り重なったか円錐状のドローン軍団が現れる。

「その声、ペガツサか?!」

「ペガちゃん!どうしてそんなに大きくなっちゃったのー?」

『みなさんが悪いんです・・・皆さんがマジメにやってくれないからあ!』

ペガツサの叫びと共に、ずおおおつと軍団が津波のように押し寄せてきた。

「わーこつち来たー!」

「ブラックちゃん説得お願い!」

「ま、まかせ・・・無理だわこれ!」

この軍団を操っているのはペガツサと見て間違いないが、ブラック指令の催眠術は、相手の顔が視認できないことには使えない。今見えているのは、軍団であつて、ペガツサ自身ではないから。

「ウツ?!近づいただけでこの違和感・・・まさか超重力の力?」

「見た目と質量が比例していない?」

「とりあえず逃げろー!」

加えて、軍団は直接ビームなどは放つてこそしないものの、まっすぐとこちらに向かつてくる質量攻撃をしかけてきている。近づくことすら危険なのは、手の出しようもない。

「ええい、なぜだペガツサ!なぜ我々を攻撃してくるのだ!」

『攻撃・・・なんかじゃありません!「折檻」わしむきです!』

「オシオキだ?!」

『そうです!悪い子には指導が必要なんです!』

すると突然、軍団のスピードが増してシルバーブルーメを取り囲んだ。

『まずシルバーさん!! ひとつも見てばっかりで、自分は食べてばっかり! 少しは節制してください! 30点減点!』

「グワー! お、重い……。」

軍団が30個、シルバーブルーメにのしかかる。

『次はゴモラさん!』

「えっ、私今日あつたばっかじゃん! ……そうでもないか。そうでもなかったね、うん。」

『ゴモラさんは人前でベタベタしすぎです! 50点減点!』

「ええーっ! そんなこと私してないよー! ぐへー!」

「いや、してるしてる。」

今度は50個、ゴモラにのしかかる。

『次はベムラーさん! ……っていない!』

「逃げたのか?!」

「まさか自力でダークゾーンから脱出を!?!」

いつのまにか、ベムラーは忽然と姿を消していた。

『じゃあ、連帯責任でブラックさん!』

「わ、私はなにもやましいことはしていないぞ！」

『してるじゃないですか！最近昼間からお酒飲んだり、人を付け回したり！ペムラーさんと合算で120点減点！』

「まさか、120個お?!」

のしかかるといふ生易しい表現ではなく、滝のようにブラック指令に雪崩れ込む。

「あれ、これ僕もヤバイパターン?」

『そうです！シンジさん！』

「なんで！僕こそ悪いことしてないでしょ！」

『シンジさんは・・・いつも一歩引いたような立ち位置で、人目もはばからずイチャイチャするし、挙句デートなんか誘って、プレゼントまでしてくる、風紀紊乱で1億点減点！』

「ケタがおかしくないか！」

数の問題でなく、空間そのものが迫ってくると、シンジをあつという間に藻屑に変えた。

『ふん！ふん!!』

「ペガちゃん一体どうしちゃったのー！」

「ひどいよー！」

「ペガツサ！我々をどうするつもりなん・・・ぐっへえ・・・。」  
『皆さん反省するまで、そうしててください！』

「でもさー、ペガちゃん！ペガちゃんのやりたいことつて、きつとこういうのじゃないでしょー！」

「そうだ！きみはこんなことをして喜ぶ人間じゃないはずだ！」

「目を覚ましてー！」

ぐっ、とペガツサは狼狽える。大体、こうやってオシオキをした後、どう収集をつけるのかもきつと考えちゃいけないのだから。

『どうにもできません！だって私にも、どうしたいのかわかんないんですから！』

「とにかく今は落ち着いてー！」

「私たちを解放しろー！」

「いや、むしろ思いつきり吐き出したほうがいいかも？ペガちゃん、今は思いつきりやっちゃってイーヨー！」

「なーっ?!なんてこと言うんだゴモラー！そりゃあお前はパワータイプだからいいかもしれないが、我々はもつとか弱いんだぞー！」

「うるさーい！ブラックたちだつて怪獣娘なんだからこれぐらい平気でしょー！」

無事でないものが約一名

『そんなこと、わかんないですうううう!』

まるで叱られた子供が痙攣を起こしたかのように、ペガツサはパニックになってダークゾーンを揺らす。

「あわわ?!」

「ちよつと、これマズいんとかやう?」

「お前が全部吐き出せとかいうからだぞゴモラ!」

「なにをー!ブラックたちが情けないからいけないんじゃないんじやんか!」

ドローン同士がくつつき合い、一つに戻ろうと胎動し始める。

「つ、つぶれ……。」

「むぎゆう……あつ、ブラックちゃんのいいところはっけーん……♪」

「お前、こんなときまで……って、こっちにはシンジ君。」

「んもー!シンちゃんまでこんな時に……ぐううう……。」

誰の声も届かないダークゾーンで、一塊の墓標が出来上がりかけていた。

『あれ……わたし……一体何をして……。』

「うおおおおおペガツサあ!能力を止めろお!変身解除だあ!」

『えと、ソウルライザーは．．．どこ？というか私、今どうなってるんです？』

ようやく正気に戻りかけてきたペガッサだったが、その様を見ていることしかできなかった。すでに力を、心の底の感情を抑えきれなくなっていた。

変身解除しようにも、自分が今どうなっているのもわからないということに気が付いた。ただ出来るのは狼狽えることだけ。

「あつ．．．これマジでヤバいね。」

「今頃お？」

「どうしようシンジ君息をしていないぞ！」

『えつと．．．あれ．．．私．．．どうしたら．．．。』

その時、心の奥の底の底、自律心に押し込められていた心の叫びが、ようやく口を開いた。

『誰か、助けてええええええええ!!』



「助けますー！」

『えっ?』

ここに居る誰でもない、誰かの声がダークゾーンに響くと、軍団の拘束が解けて、ブラック指令達は放り出される。

「ぐう……今の誰だ?!」

「あれって、ペガちゃん? でもなんか雰囲気違うような……?」

「あれは……ウチのペガツサちゃんだ!」

ダークゾーンに穴を開けられるのはペガツサ星人だけ、しかしペガツサ星人はもう一人いる。それが今ここに、助けに来た。

「どうやら間に合ったか。」

「ノーバ!」

「ウチのペガツサちゃんを呼びに行ってたんだね!」

「それと、ベムラーのマシンも持ってきた。」

「ああ、助かる。やはり愛車があると気分が違う。」

「って、ベムラー今までどこに居た?!」

「潜航モードで隠れていた。全滅するわけにはいかなかったからな。」

「ホントはただ逃げてただけと違う?」

「ナンノコトカナ？」

『ペガツサ星人さん・・・？』

「ええ、あなたと同じ。だから、私ならあなたの気持ちになれる。」

「シンジさん！バディライザーを貸してください！」

「シンちゃん息してないの！」

「ほいつ！」

「キャッチ！つと。」

ペガツサ主任の呼びかけに、ベムラーがシンジの腰からバディライザーを取って放り投げることで応える。

『よつ、主任。なんか用？』

「あさつきさん、緊急コード、プロテペロペロリング！」

『あー、うん、オツケー。限定解除。』

「ちよつとガマンしてねペガちゃん！みなさん、そのドローンをバラバラにしてください！」

「バラバラ？攻撃すればいいの？」

「そうです！今はそうしてください！」

「うぬぬ、なにか作戦があるのなら仕方がない、総員攻撃開始だあ！」

「うっ、吐きそう。ダメダメ、ダメよ。」

「それで、これからどうするの？」

「ペガツサさんの姿が見えたら、バディライザーを使って変身解除させます。」

「ソウルライザーじゃダメなの？」

「おそらくキャパシティオーバーになるかと。それに、力を制御するならこっちのほうに向いています。」

「抑え方を覚えさせるのね。」

「そうです！」

主任はカードを一枚取り出す。それはペガツサ星人の、自分のカードである。

「同じ宇宙人同士なら、これで繋がれる！」

「なるほどな。」

「超振動波ー！」

「チェリースプラッシュー！」

『いったー！』

「おい、思いつきり痛がつてるじゃないか!?大丈夫なんだろうな！」

「ちよつとガマンしててね。あとは、ベムラーさん！」

「私の愛馬は狂暴だぞ？」

「かまいません、追いつかれないうちに飛ばしてください！」

攻撃を受けた軍団は塊から分離していく。それらをベムラーの後ろに乗ったペガッサ主任が誘導する。精神的にリンクすることで、一時的にペガッサさんの力もコントロールできるようだ。

「聞こえてますか、ペガッサさん？」

『は、はい！聞こえてます！すみません、私のせいでこんなことに……。』

「怪獣娘にはよくあることよ！それよりもどこか辛い？」

『平気です！みんなが私を助けようとしてくれること、感じてますから！』

「ならもう少し辛抱していて！あなたの王子様はまだ目覚めないみたいだけど。」

『お、王子様?!』

「彼、すぐ人をその気にさちやうから、きつと余計に気を使わせちやつたんでしよう？そのせいもあると思う。」

『うう……。それは……。』

「恥ずかしいことじゃないわ、人を好きになるって素敵なことだから。その好きを、もつと広く持つべきなのかもしれないわ！」

『広く、ですか?』



「みなさんに、とんだご迷惑を、ごめんなさい！」

「いいよいいよ、なにはともあれ、最小限の被害で済んでよかったよ。」

「そうだそうだ、失敗なんて誰にでもあることなのだから。」

「ブラックちゃんは失敗してばかりだけどねー♪」

「プツ、たしかに。」

「お前らー！」

場を和ませるつもりなのか、それとも素なのか、ブラックスターズはいつもの調子に戻った。しかしペガツサの顔はまだ暗い。

「まあ、なんだ。ペガツサなら大丈夫だろう。もうこんなアクシデントには見舞われない、ハズ。」

「そうも言ってもらえないだろう？ 暴走する不安というのをいつまでも抱えているわけにはいかないだろうし。」

「ではどうすればいい？」

「ブラックにもわかつているだろう、あとは本人の意思次第だ。」

「グウ……。」

本当はとづくにわかっていた。ただ一步を踏み出す勇気がなかった。本当にそれでいいのか、決めあぐねていた。

「ペガツサさん？」

「なんでしようか、えっと、ペガツサさん？」

「そうん、どっちもペガツサじゃあ紛らわしいし。私は『沢中イズミ』、イズミでいいですよ。」

「あ、私は『平賀サツキ』です。イズミさん、ありがとうございました。」

「よろしくね、サツキさん。」

「サツキさんは、自分がGIRLSに入るべきだ、と思っっているのよね？」

「はい・・・それが賢明で、最善の手だとは思っているんです。けど、それはブラックスターズの皆さんを裏切ることになるんじゃないかって・・・。」

「うーん、それは半分間違ってると思うな。」

「半分？」

「そう、今GIRLSに入ったからと言って、これからずっとGIRLSに所属し続ける必要があるわけじゃないよ？GIRLSはゴールじゃない、あくまで通過点ですから。」

「通過点・・・。」

「ああもちろん、そのままGIRLSに在籍していただけるなら歓迎しますよ？」

「いえ！そんなことは！」

「なら、それでいいと思う。」

「・・・わかりました！私、GIRLSに入ります！」

「つてことだけど、いいのブラックちゃん？」

「・・・いいさ、ペガッサが自分で決めたことなら。」

「ブラックさん、すいません。」

「いいんだ！いろいろな勉強して、ブラックスターズの力になってくれ！・・・ついでに、いろいろ持つて帰ってきてくれると・・・。」

「それ、横領ですよ？」

「冗談だ、冗談！ナーツハツハツハツ！・・・はあ。」

これでいいのだ、かわいい子には旅をさせよとも言う。立派になって帰ってきたペガッサを、温かく迎えてやればそれでいい。と、ブラックは納得する。

「う、うーん・・・あれ？」

「おつ、シンちゃんも起きた？」

「・・・一体なにがあつた？」

「もう解決したつてことかな。」

「ひよつとして僕、あんまり役に立ってなかつた？」

『その通りだよこんにやろーめー。』



バディライザーは手元に戻ってきていたが、事態はすべて終結していた。

「シンジさん、あの、お話が。」

「ペガツサさん・・・あれ？主任もいる？」

「はい、イズミさんにも勧められて、私GIRLSに入ることにしました。」

「そっか・・・それで？」

「それでその、えっと・・・私、シンジさんのこと好き！でした・・・。」

「過去形？」

「いや、今も好きです！けど、今は私もどうすればいいかわからないので・・・お友達から、初めてくれませんか？」

「僕ら友達じゃなかったの？」

「シンちゃん？」

「あう、そうじゃなくなつて、改めて！改めてお友達になつてください！」

「うん、わかつた。よろしく。」

「私もよろしくだね！ペガちゃん！先輩としてビバシ指導していくよー！」

こうして、ブラックスターズを中心に据えた、ペガツサ関連の事件は終わりを迎えた・・・。

「GIRLSは通過点か・・・。」

「どうした、シンジ。」

けど、シンジはまだ問題を抱えていた。

「いや、僕も身の振り方を改めるべきなんじゃないかと思って、ペガツサさんを見習つて。」

「つていうと？」

「まさか?! 私と正式に付き合っちゃうって公言しちゃうの？」

「えっ、付き合ってたの2人とも？」

「そんなことじゃなくて。僕もこのままここにいていいのかって話。」

「今までは、怪獣娘と仲良くなるためにGIRLSにいたけど、GIRLSにいることだけが全てじゃないって、最近思ってたんだ。」

「我々のようにGIRLSとは敵対関係にある怪獣娘もいることだしな！」

「そもそもブラックスターズってGIRLSの敵なの？」

「敵だろう？ 光と闇は決して相容れぬ！」

「まあそんなことはいいとして。」

「そんなこと?!」

「ブラックスさん、マジメに聞いてください。」

「ペガツサまで・・・もうすでに親離れが始まっているのか!」

「はいはい。えーつと、どこまで話したかな、そうそう。GIRLSに縛られるということは、それだけ機会を見逃すということかもしれない。ずいぶん前に言ったけど、もしもGIRLSが怪獣娘を守らず、管理するために動くようになったなら、もう僕はGIRLSにはいられないし。」

思い出させるは、一年前の出来事。あれからしばらく昏睡状態となっていたが、そうせざるを得なかったのは自分の力不足が原因だと思うし、考えが甘かったのかもしれないとも思う。もはや自分自身すら信じられなくなった。

それでも、正しいことをしようと思えていられたのは、かけがえのない仲間たちがいたからだと思う。仲間たちの元へ帰るため、その居場所を守るためにこそ、戦えた。そのことに後悔はしていない。

なお、その当人たるリコは現在アイラと共にアメリカに渡っている。いかに凶悪なビーストであろうと、さらに凶悪な怪獣王がそばにいては縮こまるしかないという考えからだ。

閑話休題。要するにGIRLSに頼らず生きていきたい。今度こそ、自分の力だけで大切なものを守れるようにするために。

「だから、これからはフリーで活動していこうと思う。依頼があればGIRLSの元

でも働くけど、自分で考えるっていう力を磨きたい。」

「そっか……。シンちゃんも自分で選んだんだね。」

「それでもいいと思いますよ。シンジさん、まだまだ若いんですから！博士には私からも説得しますよ。」

「では、これからシンジ君もフリーランスになるということだな？」

「はい、そうですね。ベムラーさんと同じく。」

「ふむ……。」

ニヤリ、とベムラーは瞳の奥で笑った。

「では私の事務所に来ないか？報酬は応相談だぞ？」

「あつ、ズルい！それならば我々ブラックスターズに来ないか！」

「それじゃあ何のためにフリーになったのかわからないと思うんですけど！」

「わ、私も、先輩が一人いなくなっちゃうのは寂しい……。かな？」

「そうねえ、コーチの役が必要になるっていうのにねえ？」

「ペガツサさんたちまで……。」

「んもー！なに言ってるんのさー！シンちゃんは生まれてからずっと私専用のマネージャーなんだからー！」

「ミカ、お前まで乗ることあないだろう？」

「楽しそうだったからついで。」

「さあどうする?..」

「どうする?..」

「キミならどうする!」

「..どうしよう?..」

シンジの受難は始まったばかり。

## キミの声が聞きたい

「まあ落ち着け。ツノを突きつけられててちやびびって話も出来やしねえ。」

「そんな権利がシンちゃんにあるとでも？」

「ないです。」

「ナ？」

この状況にベリーナイスな答えは浮かばない。

「またなにやっつてんだアイツらは。」

「んもー！こんなに散らかしたらピグモン怒っちゃいますよー！」

「怒ってもかわいだけだよピグモンさん。」

そう、僕は、と言うよりもゴモラは談話室をこんなに荒らしまわっている。その僕、シンジにあるという事なんだけど。

「大体、別に忘れてたわけじゃないでしょうが！」

「でも何も用意してないんでしょ？」

「うん、それはまあ。」

「喰らえい！」

「喰らわん！」

また何の罪もないテーブルが犠牲となった。

「ええつと・・・こういうときはどうしたら？」

「ほつとけよペガツサ。」

「どうせしばらくしたら大人しくなるよ。」

「ええ・・・そんな他人ごとでいいんですか？」

「逆に聞くが、自分が割って入ってどうにかなる問題だと思うか？」

「・・・思わないです。」

「だろ？ほとぼりが冷めるまで、クレー・・・牛丼屋にでも行こうぜ。」

「クレープでいいんだよレッドキングさん。」

「ちよつ、置いてかないで！」

「エレキングさんが来るまでに片づけとかなないとマズいよ？」

「それはたしかにそうだけど？」

「骨は拾ってやるからなー。」

「この薄情者〜！」

と、そんなわけで僕とミカを残してみんなどこかへ行ってしまった。

「がるるるる・・・。」

「うん、『また』なんだ。済まない。仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。」

「ぐるるっ。」

「大切な人の誕生日を忘れるわけないし、なにかプレゼントだって用意したかった。これは本当だよ。」

「がるるるるるる・・・。」

「でもね、ときどき思うんだよ。こんな程度のプレゼントでいいのかって。」

「がるっ?」

「僕には、そんな魅力的な才能なんて無いし、何よりそんな中途半端な物じゃ、自分が自分に満足できない。だから、ゴモラに何も用意できなくなっちゃうんだ。ホントにゴメン。」

正直な気持ちである。スポットライトを浴びるゴモラに、自分なんか近づいていいのか疑問に思う。

「わかってないなあチミは。」

「?」

「どんなものを貰ったかなんて関係ないよ。ボクは、『キミの言葉』が聞きたいんだから。他にもないキミの気持ちがあね。」



「僕の気持ち？」

「そう！表現してくれないことには、上達だつてしないよ！評価は人がつけるものだけど、本当の気持ちはキミからボクにつたわるんだから！」

「だから聞かせて！キミの気持ち！」

「・・・恥ずかしいんですけど？」

「聞きたいな？」

「んっ・・・じゃあ。」

「ゴモラ、誕生日おめでとう！」

「うんうん、で？」

「えーつと、ずつと応援してるから！」

「ほうほう？で？」

「えつと・・・好き。」

「もつと。」

「大好き！」

「もーつと！」

「大好き!!」

「もつとー!!!」

「ゴモたん超大好きー!!!」

「えへへ・・・ありがとう。」

言えた。言葉にしてみたら、こんなにも嬉しい。

「じゃ、ボクたちもクレープ屋さんいこつか!」

「うん!」

「その前に、やることあるんじゃないかしら?あなたたち。そこには青筋立ってたエレキングさんが!」

「・・・ごめんなさい。」

「言葉よりも態度で示してちょうだい、あなたたち?」

「はい。」

「・・・わたしのことは?」

「みんな好きです。」  
「そう・・・ならいいわ。」